

書 上 本 山 遺 跡  
波 志 江 六 反 田 遺 跡  
波 志 江 天 神 山 遺 跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

建 設 省  
群 馬 県 教 育 委 員 会  
(財)群 馬 県 埋 蔵 文 化 財 調 査 事 業 団



『書上本山遺跡 波志江六反田遺跡 波志江天神山遺跡』正誤表

頁	行	誤	正
28	左 24	著名	顯著
137	左 18・22	ℓ	L
	左 18・22・26・34	絡状体	絡条体
	左 27	r	R
	右 2	ℓ	L
138	左 2・4・10・13・16・18	r	R
	右 1・6	r	R
	右 3・9	ℓ	L

資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-330
	調査事業団保管	
No. 98-4455	平成10年5月13日	(7)



跡 遺 山 本 上 書  
跡 遺 田 反 六 江 志 波  
跡 遺 山 神 天 江 志 波

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

建設省  
群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、既に、前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・共用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年より群馬県教育委員会及び当事業団により行われています。

本書は、昭和59年度から昭和60年度にかけて発掘調査をしました伊勢崎市三和町の書上本山遺跡・伊勢崎市波志江町の波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡の合わせて3遺跡の発掘調査の成果が報告されています。3遺跡は、いずれも小規模な調査ですが、旧石器時代の良好な遺物などが出土しています。この時代を研究する上で貴重な資料となりましょう。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、地元関係者等から種々、ご指導、ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成4年10月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

## 報告書抄録

フリガナ	カキアゲホンザンイセキ、ハシエロクタンダイセキ、ハシエテンジンヤマイセキ
書名	書上本山遺跡、波志江六反田遺跡、波志江天神山遺跡
副書名	一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第140集
編著者名	山口逸弘
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
発行年	西暦1992年10月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カキアゲホンザン 書上本山	イセサキシサンワチヨウ 伊勢崎市三和町	102041		36° 20' 40"	139° 13' 30"	19840401- 19840930	12,268	道路建設
ハシエロクタンダ 波志江六反田	イセサキシハシエマチ 伊勢崎市波志江町 字六反田	102041		36° 21' 23"	139° 12' 00"	19850701- 19850930	2,800	道路建設
ハシエテンジンヤマ 波志江天神山	イセサキシハシエマチ 伊勢崎市波志江町 字天神山・祝堂 <small>イワイドウ</small>	102041		36° 21' 25"	139° 11' 55"	19851001- 19851130	4,800	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
書上本山	住居	古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居 井戸 掘立建物 溝 集石遺構 土坑	3軒 5基 1軒 2棟 7条 2基 38基	旧石器時代遺物 約350点 縄文時代早期～中期 土器・石器類 古墳時代 土器類 瓦塔片 石製骨蔵器	古墳時代後期 長胴甕・甑の 胎土分析 (4個体)
波志江六反田	住居 生産	平安時代 近世 平安時代	竪穴住居 掘立建物 土坑 井戸 溝 As-B埋没水田	3軒 1棟 32基 3基 6条	旧石器時代遺物 7点 縄文時代 撚糸文系土器 39点 土師器杯・甕類	
波志江天神山	住居 生産	縄文時代 近世以降 近代	陥穴 土坑 掘立建物 土坑 井戸 サク状遺構	5基 1基 1棟 32基 1基	縄文時代前期 土器・石器類	



## 例 言

1. 本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴い事前調査した、事業名称「JK17書上<sup>かきあげほんざん</sup>本山遺跡(試掘調査でのJK17書上遺跡Ⅲ～Ⅵ区に相当)」「JK26波志江六反田<sup>はしえろくたんだ</sup>遺跡」「JK27波志江天神山<sup>はしえてんじんやま</sup>遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 遺跡名称は遺跡所在地の大字名・小字名を併記する方法を採用している。
3. 遺跡所在地 書上本山遺跡：群馬県伊勢崎市三和町  
波志江六反田遺跡：群馬県伊勢崎市波志江町字六反田  
波志江天神山遺跡：群馬県伊勢崎市波志江町字天神山・祝堂
4. 事業主体 建設省関東地方建設局高崎工事事務所
5. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 調査期間 書上本山遺跡：昭和59年4月1日～昭和59年9月30日  
波志江六反田遺跡：昭和60年7月1日～昭和60年9月30日  
波志江天神山遺跡：昭和60年10月1日～昭和60年11月30日
7. 調査組織 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
「書上本山遺跡」  
事務担当 白石保三郎・梅沢重昭・大沢秋良・松本浩一・秋池 武・定方隆史・国定 均・  
笠原秀樹・山本朋子・吉田有光・柳岡良宏  
調査担当 坂井 隆・小島敦子・新倉明彦・山口逸弘  
「波志江六反田遺跡」・「波志江天神山遺跡」  
事務担当 白石保三郎・井上唯雄・大沢秋良・上原啓巳・桜場一寿・定方隆史・国定 均・  
笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏  
調査担当 桜場一寿・坂井 隆・山口逸弘
8. 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
9. 整理期間 平成3年4月1日～平成4年3月31日
10. 整理組織 事務担当 邊見長雄・松本浩一・佐藤 勉・神保侑史・能登 健・岩丸大作・国定 均・  
須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・船津 茂・松下 登・並木綾子・野島のぶ江・  
今井もと子・角田みづほ・松井美智代・塩浦ひろみ  
整理担当 山口逸弘・青木静江・神谷みや子・鈴木紀子・関 正江・南雲富子・松岡陽子  
遺物写真 佐藤元彦  
保存処理 関 邦一・渡邊静治・小材浩一
11. Ⅲ章第3節の一部及びⅥ章1は岩崎泰一が執筆し、その他の編集執筆は山口逸弘が行っている。
12. 石材の鑑定は飯島静男氏(群馬地質研究会所属)に依頼した。
13. 「書上本山遺跡」出土の土器の胎土分析は株式会社第四紀地質研究所に依頼した。
14. 本書使用の遺構図面の一部のトレースは株式会社測研に委託した。
15. 本書の作成にあたっては関係各方面の協力を得た。また、発掘調査に際して伊勢崎市教育委員会、及び地元関係者の多大なる御支援を戴いた。ここに感謝の意を表す次第である。
16. 調査資料は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保存してある。

## 凡 例

1. 挿図中に使用した方位は、真北である。
2. 遺構実測図は下記の縮尺で掲載した。それぞれ図中のスケールを参照されたい。

住居……………1/60	掘立柱建物跡……………1/60
住居のカマド……………1/30	溝跡……………1/60
土坑……………1/40	井戸跡……………1/40
陥穴……………1/60	水田跡……………1/200
3. 遺物実測図は下記の縮尺率を基本に図示した。それぞれ図中に付記したスケールを参照されたい。

旧石器 書上本山遺跡	4/5・1/2・1/4
波志江六反田遺跡	4/5
縄文時代の石器	1/1・1/2・1/3・1/6
縄文時代の土器	1/2・1/3・1/4
住居出土の遺物	1/1・1/2・1/3・1/4
4. 本書で使用した地図は以下の通りである。

国土地理院発行	25,000分の1地形図	「大胡」・「伊勢崎」(平成元年8月・11月)
伊勢崎市役所発行	2,500分の1「現況図②・⑧」	(昭和60年8月)を1/2にして使用
赤堀町役場発行	2,500分の1「No.33」	(昭和60年)を1/2にして使用
5. 遺物写真図版は実測図を掲載した順に時代毎に整理し、実測図と対照できるように図版の右下に挿図番号を示した。
6. 石器実測図中の矢印は使用痕及び加工痕が確認できる範囲をあらわしている。
7. 土器の色調の断定は、農林省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修「新版 標準土色帖」昭和45年 を使用した。
8. 石器の計測に際し、長さ・幅は小数点第2位を四捨五入しcm単位で、重量は電磁式はかり(EY-2200A)を使用し、小数点第2位までg単位で表示した。
9. 石器一覧表の「器種」の欄の略号は次のことを示す。

ナイフ：ナイフ形石器	加剝：加工痕を持つ剝片	三角錐：三角錐形石器
台形：台形石器	使剝：使用痕を持つ剝片	スタンプ：スタンプ形石器
縦長剝：縦長剝片	打斧：打製石斧	
スクレ：スクレイパー	磨斧：磨製石斧	
10. 石器一覧表の「石材」の欄の略号は次のことを示す。

黒安：黒色安山岩	変安：変質安山岩	溶凝：溶結凝灰岩
黒頁：黒色頁岩	ホルン：ホルンフェルス	凝頁：凝灰岩質頁岩
珪頁：珪質頁岩	石閃：石英閃緑岩	安凝：安山岩質凝灰岩
灰安：灰色安山岩	粗安：粗粒安山岩	
細安：細粒安山岩	輝凝：輝緑凝灰岩	

# 目 次

序

例言 凡例

I 章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 発掘調査の経過と方法	1
II 章 遺跡を取り巻く環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境(周辺遺跡)	3
III 章 書上本山遺跡	15
第1節 遺跡の概要	16
第2節 土 層	19
第3節 旧石器時代	20
第4節 縄文時代	46
第5節 古墳時代～中・近世	62
第6節 胎土分析	119
IV 章 波志江六反田遺跡	129
第1節 遺跡の概要	130
第2節 基本土層	132
第3節 旧石器時代	133
第4節 縄文時代	136
第5節 住居跡	139
第6節 掘立柱建物跡遺構	145
第7節 土 坑	146
第8節 井 戸	149
第9節 水田跡(A <sub>s</sub> -B <sub>下</sub> )	155
第10節 溝	155
第11節 グリッド出土遺物	158
V 章 波志江天神山遺跡	161
第1節 遺跡の概要	162
第2節 調査方法	164
第3節 基本土層	164
第4節 検出された遺構と遺物	165
VI 章 考 察	193

## II・III章 書上本山遺跡 挿図目次

第1図	周辺の遺跡	4	第44図	遺構配置図	67
第2図	遺跡の位置	15	第45図	1号住居跡	69
第3図	周辺の地形	17	第46図	1号住居跡遺物分布	70
第4図	調査区全体図	18	第47図	1号住居跡カマド	71
第5図	基本土層	19	第48図	1号住居跡出土遺物	72
第6図	旧石器時代の調査区全体図	20	第49図	1号住居跡出土遺物	73
第7図	石器の分布(1号ブロック)	21	第50図	1号住居跡出土遺物	74
第8図	石材別石器の分布(1号ブロック)	22	第51図	2号住居跡	75
第9図	石材別石器の分布(1号ブロック)	23	第52図	2号住居跡カマド	76
第10図	器種別分布図(2号ブロック)	24	第53図	2号住居跡出土遺物	77
第11図	石材別分布図(2号ブロック)	25	第54図	2号住居跡出土遺物	78
第12図	接合資料(1・2)の分布	26	第55図	3号住居跡	79
第13図	接合資料(2・4・5他)の分布	27	第56図	3号住居跡	80
第14図	出土石器(1)	29	第57図	3号住居跡出土遺物	81
第15図	出土石器(2)	30	第58図	4号住居跡	82
第16図	出土石器(3)	31	第59図	1号掘立柱建物跡	83
第17図	出土石器(4)	32	第60図	2号掘立柱建物跡	84
第18図	接合資料-1(1)	34	第61図	土坑	86
第19図	接合資料-1(2)	35	第62図	土坑	87
第20図	接合資料-1(3)	36	第63図	土坑	89
第21図	接合資料-1(4)	37	第64図	土坑	90
第22図	接合資料-1(5)	38	第65図	土坑	91
第23図	接合資料-3(1)	40	第66図	井戸	93
第24図	接合資料-3(2)	41	第67図	井戸	94
第25図	接合資料-2	42	第68図	井戸出土遺物	95
第26図	接合資料-10・12他	44	第69図	溝	96
第27図	接合資料-5・17他	45	第70図	溝及び出土遺物	97
第28図	グリッド出土土器	48	第71図	9号溝	98
第29図	グリッド出土土器	49	第72図	9号溝と出土遺物	99
第30図	グリッド出土土器	50	第73図	集石	101
第31図	グリッド出土土器	51	第74図	集石遺構出土遺物	102
第32図	グリッド出土石器	53	第75図	集石遺構出土遺物-1展開図	103
第33図	グリッド出土石器	54	第76図	集石遺構出土遺物	104
第34図	グリッド出土石器	55	第77図	グリッド出土遺物	105
第35図	グリッド出土石器	57	第78図	石器の器種と石材構成	115
第36図	グリッド出土石器	58	第79図	石器の器種と石材構成	116
第37図	グリッド出土石器	59	第80図	石器の器種と石材構成	117
第38図	グリッド出土石器	60	第81図	石器の器種構成	118
第39図	グリッド出土石器	61	第82図	胎土分析資料	119
第40図	遺構配置図	63	第83図	石英(Qt)-斜長石(Pl)相関図	122
第41図	遺構配置図	64	第84図	Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム 位置分類図	122
第42図	遺構配置図	65	第85図	Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイアグラム	
第43図	遺構配置図	66			

位置分類図	122
第86図 X線回折チャート	126

第87図 電子顕微鏡写真	127
--------------	-----

## II・III章 書上本山遺跡 表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	7	第5表 縄文土器観察一覧表	107
第2表 2号住居跡出土白玉・小玉観察表	78	第6表 縄文時代の単独石器一覧表	108
第3表 旧石器時代の単独石器一覧表	106	第7表 古墳時代以降の遺物観察表	109
第4表 旧石器時代の接合資料一覧表	106	第8表 胎土性状表	123

## IV・V章 六反田・天神山遺跡 挿図目次

第1図 遺跡の位置(波志江六反田遺跡)	129	第26図 遺跡の位置(波志江天神山遺跡)	161
第2図 周辺の地形(波志江六反田遺跡)	131	第27図 周辺の地形(波志江天神山遺跡)	163
第3図 旧石器出土位置と基本土層図	132	第28図 旧石器調査範囲と基本土層	164
第4図 旧石器時代の出土石器	133	第29図 遺跡全体図	166
第5図 旧石器遺物分布	134	第30図 縄文時代の土坑(1)	167
第6図 遺構全体図	135	第31図 縄文時代の土坑(2)	168
第7図 撚糸土器集中分布	136	第32図 縄文時代の土坑(3)	169
第8図 縄文時代の石器分布	137	第33図 縄文時代の土坑(4)	171
第9図 グリッド出土土器	138	第34図 近世～近代の土坑(1)	173
第10図 1号住居跡及び出土遺物	139	第35図 近世～近代の土坑(2)	174
第11図 2号住居跡	141	第36図 近現代の土坑及び井戸	175
第12図 2号住居跡及び出土遺物	142	第37図 溝	177
第13図 3号住居跡	143	第38図 溝及びサク状遺構、出土遺物	178
第14図 3号住居跡及び出土遺物	144	第39図 縄文土器分布図	179
第15図 1号掘立柱建物跡	145	第40図 縄文時代の石器分布図	180
第16図 土坑(1)	147	第41図 グリッド出土土器	181
第17図 土坑(2)	148	第42図 グリッド出土土器	182
第18図 土坑(3)	150	第43図 グリッド出土土器	183
第19図 土坑(4)	151	第44図 グリッド出土土器	184
第20図 土坑(5)	152	第45図 グリッド出土石器	185
第21図 井戸及び出土遺物	153	第46図 グリッド出土石器	186
第22図 As-B下水田	154	第47図 グリッド出土石器、接合資料-3・6	188
第23図 溝	156	第48図 接合資料-1・2他	189
第24図 溝出土遺物	157	第49図 器種と石材構成	190
第25図 グリッド出土遺物	158	第50図 石器と石材構成	191

## IV・V章 六反田・天神山遺跡 表目次

第1表 旧石器時代の単独石器一覧表(六反田)	158	第4表 縄文時代の単独石器一覧表 (六反田・天神山)	192
第2表 古墳時代以降遺物観察表(六反田)	159	第5表 縄文時代の接合資料一覧表(天神山)	192
第3表 縄文土器観察一覧表(天神山)	192		

## 図 版 目 次

### 書上本山遺跡

- 基本土層
- 遺跡の遠景
- PL1-1. 1号ブロック石器出土状態(1)
- 2. 1号ブロック石器出土状態(2)
- 3. 1号ブロック石器出土状態(3)
- 4. 1号ブロック石器出土状態(4)
- 5. 1号ブロック石器出土状態(5)
- PL2-1. 2号ブロック石器出土状態(1)
- 2. 2号ブロック石器出土状態(2)
- PL3-1. 2号ブロック石器出土状態(3)
- 2. 2号ブロック石器出土状態(4)
- 3. 2号ブロック石器出土状態(5)
- 4. 2号ブロック石器出土状態(6)
- 5. 2号ブロック石器出土状態(7)
- PL4-1. V区遠景
- 2. 旧石器調査風景
- PL5-1. 1号住居跡全景
- 2. 1号住居跡遺物出土状態
- 3. 1号住居跡カマド
- 4. 1号住居跡カマド・貯蔵穴
- 5. 1号住居跡柱穴
- PL6-1. 2号住居跡全景
- 2. 2号住居跡掘り方
- 3. 2号住居跡カマド
- 4. 2号住居跡カマドセクション
- 5. 2号住居跡カマド掘り方
- PL7-1. 3号住居跡全景
- 2. 3号住居跡遺物出土状態
- 3. 3号住居跡遺物出土状態
- 4. 3号住居跡カマド
- 5. 3号住居跡カマドセクション
- PL8-1. 4号住居跡全景
- 2. 4号住居跡
- 3. 4号住居跡掘り方
- 4. 4号住居跡カマドセクション
- PL9-1. 1号土坑
- 2. 2号土坑
- 3. 3号土坑
- 4. 4号土坑
- 5. 5号土坑
- 6. 6号土坑
- 7. 7号土坑
- 8. 8号土坑
- PL10-1. 9号土坑
- 2. 10号土坑
- 3. 11号土坑
- 4. 15号土坑
- 5. 16号土坑
- 6. 17号土坑
- 7. 18号土坑
- 8. 19号土坑
- PL11-1. 20号土坑
- 2. 21号土坑
- 3. 22号土坑
- 4. 23号土坑
- 5. 12号土坑
- 6. 2号井戸
- 7. 2・3号井戸
- 8. 4号井戸
- PL12-1. 6号井戸
- 2. 6号井戸遺物出土状態
- PL13-1. 4号溝全景
- 2. 4号溝
- 3. 5号溝全景
- 4. 8号溝
- 5. 9号溝
- PL14-1. 9号溝全景
- 2. 9号溝
- 3. 9号溝
- 4. 9号溝
- 5. 9号溝礫流入状態
- PL15-1. 1号集石
- 2. 1号集石
- PL16-1. 1号集石
- 2. 1号集石
- 3. 2号集石
- 4. 2号集石
- 5. 調査風景
- PL17-1. 1・2号掘立柱建物跡
- 2. グリッド出土土器
- PL18-1. グリッド出土土器
- 2. グリッド出土土器
- PL19-1. グリッド出土土器
- 2. グリッド出土土器
- PL20-1. グリッド出土土器

- |                     |                  |
|---------------------|------------------|
| 2. グリッド出土土器         | 4. 13号土坑         |
| P L 21- 1. グリッド出土土器 | 5. 14号土坑         |
| 2. グリッド出土土器         | 6. 15号土坑         |
| 3. グリッド出土土器         | 7. 17号土坑         |
| P L 22. 出土石器(旧石器時代) | P L 42- 1. 19号土坑 |
| P L 23. 出土石器(旧石器時代) | 2. 20号土坑         |
| P L 24. 出土石器(旧石器時代) | 3. 16号土坑         |
| P L 25. 出土石器(旧石器時代) | 4. 18号土坑         |
| P L 26. 出土石器(縄文時代)  | 5. 26号土坑         |
| P L 27. 出土石器(縄文時代)  | 6. 21号土坑         |
| P L 28. 出土石器(縄文時代)  | 7. 22号土坑         |
| P L 29. 出土石器(縄文時代)  | P L 43- 1. 23号土坑 |
| P L 30. 出土石器(縄文時代)  | 2. 24号土坑         |
| P L 31. 1号住居跡出土遺物   | 3. 5・6・7・29号土坑   |
| P L 32. 1号住居跡出土遺物   | 4. 30号土坑         |
| P L 33. 2号住居跡出土遺物   | 5. 31号土坑         |
| P L 34. 2号住居跡出土遺物   | 6. 28号土坑         |
| 3号住居跡出土遺物           | 7. 27号土坑         |
| 出土土器                | P L 44- 1. 25号土坑 |
| P L 35. 集石遺構出土遺物    | 2. 32号土坑         |
| P L 36. 出土遺物        | 3. 1号井戸          |
|                     | 4. 2号井戸          |
|                     | 5. 3号井戸          |
|                     | 6. 4号井戸          |

## 波志江六反田遺跡

ローム層の堆積状態

波志江六反田・波志江天神山遺跡遠景

- |                       |                                   |
|-----------------------|-----------------------------------|
| P L 37- 1. 旧石器試掘調査    | P L 45- 1. 水田跡及び旧河川跡              |
| 2. 石器出土状態             | 2. A <sub>s</sub> -B 下水田跡土層       |
| 3. 石器出土状態             | 3. A <sub>s</sub> -B 下水田跡土層       |
| 4. 石器出土状態             | P L 46- 1. A <sub>s</sub> -B 下水田跡 |
| 5. 石器出土状態             | 2. A <sub>s</sub> -B 下水田跡         |
| P L 38- 1. 波志江六反田遺跡遠景 | 3. A <sub>s</sub> -B 下水田跡         |
| 2. 波志江六反田遺跡遠景         | 4. A <sub>s</sub> -B 下水田跡         |
| P L 39- 1. 遺跡全景       | 5. A <sub>s</sub> -B 下水田跡         |
| 2. 遺跡全景               | P L 47- 1. 1号溝                    |
| P L 40- 1. 1号住居跡全景    | 2. 2号溝                            |
| 2. 1号住居跡掘り方カマド        | 3. 3号溝                            |
| 3. 2号住居跡              | 4. 4・5号溝                          |
| 4. 2号住居跡掘り方全景         | 5. 掘立柱建物跡                         |
| 5. 2号住居跡遺物出土状態        | P L 48- 1. 旧石器試掘調査                |
| 6. 2号住居跡掘り方カマド        | 2. A <sub>s</sub> -B 下水田調査風景      |
| 7. 3号住居跡全景            |                                   |
| 8. 3号住居跡カマド           |                                   |
| P L 41- 1. 1・2・3号土坑   |                                   |
| 2. 8号土坑               |                                   |
| 3. 12号土坑              |                                   |

## 波志江天神山遺跡

ローム層の堆積状態

波志江天神山遺跡遠景

- |                 |
|-----------------|
| P L 49- 1. 8号土坑 |
| 2. 10号土坑        |

- PL50-1. 21号土坑
  - 2. 9号土坑
  - 3. 20号土坑
  - 4. 6号土坑
  - 5. 発掘風景
- PL51-1. 1号土坑
  - 2. 5号土坑
  - 3. 2号土坑
  - 4. 3号土坑
  - 5. 4号土坑
  - 6. 17号土坑
  - 7. 13号土坑
- PL52-1. 12号土坑
  - 2. 13号土坑
  - 3. 14号土坑
  - 4. 15号土坑
  - 5. 16号土坑
  - 6. 18号土坑
  - 7. 19号土坑
  - 8. 22号土坑
- PL53-1. 9号溝
  - 2. 9号溝
- 3. 1号井戸
- 4. サク状遺構
- 5. 天神山遺跡全景
- PL54-1. 1号溝屈曲部
  - 2. 2・6・9号溝
  - 3. 1・2号溝
  - 4. 3・4号溝
  - 5. 6号溝
  - 6. 7号溝
  - 7. 8号溝
- PL55-1. 出土土器 六反田遺跡
  - 2. 出土土器
- PL56-1. 出土土器
  - 2. 出土土器
- PL57. 出土土器
- PL58-1. 出土土器
  - 2. 出土土器
- PL59. 出土石器
- PL60. 出土石器(石核・接合資料)
- PL61. 出土石器
- PL62. 出土遺物 六反田遺跡



## I 章 発掘調査の経過

### 第1節 調査に至る経過

国道17号の交通渋滞を解消し、かつ群馬県と埼玉県を結ぶ重要幹線道路である上武道路は、深谷市東方を基点として、尾島町で群馬県に入り、国道17号の渋滞の一因である高崎・前橋市街地を大きく迂回して、前橋市田口町で再び国道17号に取り付けられる。この間全長41.4kmの大規模バイパスとして、関係市町村など各方面からの期待を担っている。

群馬県教育委員会は、昭和46年の都市計画決定に前後して、路線内の埋蔵文化財調査が必要な箇所を入念な分布調査とその確認により、472箇所を数えていた。この分布調査による遺跡周知を基礎として、前述の都市計画による路線内の調査を着手したのは昭和49年である。当初は1班体制で進められていた調査だが、工事進捗に伴い、特に国道50号までの早期共用開始のため、昭和59年度から3班、60年度からは4班体制でその進捗に対応した。

群馬県教育委員会は昭和52年に埋蔵文化財の調査部門として(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団を設立し、上武道路の発掘調査、整理事業も同年以降、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が行っている。

本書で報告する書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡は、昭和58～60年に(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査された遺跡であり3遺跡とも伊勢崎市に所在するものである。

#### (1) 書上本山遺跡

本遺跡は伊勢崎市三和町に所在し、調査着手当時は書上遺跡(J K 17)と呼称されていた。書上遺跡は昭和58年に1～3月に試掘調査が行われ、4～9月にⅠ～Ⅱ区が本調査された。次年度にいたり4～9月に再度本調査が着手され、Ⅲ～Ⅵ区がその対象となった。この段階で昭和58年度調査分(Ⅰ・Ⅱ区)と昭和59年度調査分(Ⅲ～Ⅵ区)の遺跡名称が分離される結果となり、前者を書上上原之城、後者を本報告で扱う書上本山と呼称した。すなわち、上武道路設計中心杭No.725～741間が本遺跡の範囲である。

#### (2) 波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡

両遺跡とも伊勢崎市波志江町に所在し、県道深津伊勢崎線を挟んで隣接する遺跡である。

波志江六反田遺跡(J K 26)は、昭和59年に試掘調査が実施され、この時に奈良時代の住居跡(2住)が検出されている。調査範囲を改良後の西桂川から県道深津伊勢崎線の間(No.870～No.875)とし昭和60年7月～9月の間本調査が実施された。

波志江天神山遺跡(J K 27)は、波志江六反田遺跡と同様に試掘が昭和59年、本調査が60年10月～11月に実施された。県道深津伊勢崎線から波志江沼までの間(No.876～No.884)を調査範囲としたが、波志江沼寄りに構造物があり、構造物部分は除外せざるを得なかった。

### 第2節 発掘調査の経過と方法

#### (1) 書上本山遺跡

書上遺跡として調査が着手された本遺跡だが、遺跡を横断する道路をもって6区分して、東からⅠ区を初めとしてⅥ区までを設定した。前述のように、本遺跡の調査範囲はⅢ～Ⅵ区である。ただし、グリッドは前年度調査の書上上原之城遺跡のグリッド設定方法に準拠したため、上武道路設計中心杭2本を結んだ線を基本線として、10×7mという変則的な規格となっている。このグリッドは国家座標軸を意識しておらず、また長方形という形状のため、合理的ではなく、調査によって得られたデータを均一に集約できない問題点を持っていた。このような反省点を踏まえ、本遺跡の調査後に着手された上武道路関連の遺跡はすべて国家座標に則した正方形のグリッドに統一された経緯がある。

本遺跡の調査は、試掘により数軒の住居跡が確認されているため、調査区全面発掘を基本とし、遺構確認面をソフトローム上面に置き、東から順次調査の手を広げた。遺構密度はさほど高くなく、当初予想された縄文時代の遺構が無かったため、順調な調

## I章 発掘調査の経過

査経過を見せた。5月下旬には古墳時代～中世の遺構の殆どが終了していた。

その後、縄文時代の遺物包含層であるソフトローム層上層の掘り下げを行い、特にV区において縄文前期土器片・石器の出土を見た。しかし、縄文時代の遺構がなかったためソフトローム層上層の遺物の記録化終了後、旧石器時代の遺物検出作業が着手されたのである。

旧石器時代の調査は、4×4 mの試掘坑を基本として、下層に至る場合には2×4 mの規模で行った。試掘坑は調査区域内のロームの遺存が良好な箇所を選ぶことになり、IV～VI区がその対象になった。

この結果、V区東側で暗色帯中より剥片の出土があった。この出土状況を重視し、V区を中心に重機による掘削を硬質ローム下面まで行い、再度2×2 mの試掘坑を「飛市松状」に設定し、石器出土範囲の限定を図った。この調査でV区中央から西側にかけて、VI区の一部で石器の集中が認められた。

これらの、旧石器時代の石器集中箇所の調査は非常に綿密かつ慎重に行なわれ、出土位置の記録化・写真などは、層下数センチ単位で施した。

この旧石器時代の調査は9月中旬で終了し、下半期に予定されていた五目牛南組遺跡への移動準備、本遺跡の出土遺物・図面・写真の基礎整理を9月末日まで行った。

### (2) 波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡

両遺跡とも県道を挟み隣接し、同一の台地上に占地するため、調査工程上は同一線上にのる評価を与えて発掘にあたった。グリッドは既に上武道路関連で統一されたものを使用し、番号も波志江六反田・波志江天神山遺跡を通して命名した。

発掘調査は、波志江六反田遺跡の東端である西桂川寄りから着手した。この部分は、東に隣接する波志江中峰岸遺跡と同等の低地であり、表土を削除した後、浅間B軽石(A<sub>s</sub>-B)を確認することができた。このB軽石を人力で除去したところ水田跡が検出できたが、おそらく中峰岸遺跡で確認できた水田跡と同様のものと考えられる。その後の発掘調査は、

ソフトローム上面を遺構確認面とし、調査区西半分の住居跡や近世～近代の溝・土坑群・井戸などを主体として進めた。これらの遺構は重複状況が顕著なものが多いため、その記録化に努めた。調査区の西端の県道沿いに至ると、現代のゴミ穴としての土坑群が密集していたが、これらは調査しなかった。

旧石器の試掘は2×4 mの規模で設定し、ローム残存部分である台地部全体の約10%程度の割合で行った。その結果、調査区中央の台地傾斜端部の板鼻褐色軽石混土層より数点の黒曜石製の石器が出土し、この部分の拡張調査を実施した。この他には石器の出土を見ず、調査は9月に終了した。

波志江天神山遺跡の調査は、波志江六反田遺跡の調査と併行する部分がある。波志江天神山遺跡表土剥ぎ作業と波志江六反田遺跡埋め戻し作業を併行させることによって効率化を図った。

波志江天神山遺跡の県道沿いも波志江六反田遺跡と同様に、現代のゴミ穴が密集しており、積極的な調査は行わず、範囲を確認するにとどめた。調査は県道沿いから波志江沼に向かって、近世～近代の溝・土坑群を検出する作業が先行した。

調査区中央部から波志江沼縁辺に至ると、近世遺構は少なくなり、縄文時代の遺物が散布するようになった。遺物は、縄文時代前期の土器を中心にして集中する箇所もあり、遺構の検出に努めたが、住居跡などの遺構は見られず、確認した土坑もその覆土からは遺物を主体的には出土せず、土坑の帰属時期を縄文時代前期に確定するには至らなかった。ただし、この土坑群には陥穴が数基存在し、これらの遺存状態が極めて良好なため調査の主力をこの陥穴の検出に注ぐことになった。

縄文時代の陥穴の調査が終了した後、旧石器時代の試掘調査を波志江六反田遺跡と同様な方法で行ったが、今回は遺物の出土を見なかった。

旧石器時代の試掘調査終了後、波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡の両遺跡の基本整理と次遺跡の二之宮宮東遺跡への移動準備を併行し、11月末日で調査を終了した。

## Ⅱ章 遺跡を取り巻く環境

書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡は伊勢崎市に所在する。伊勢崎市は、群馬県のほぼ中央から東よりに位置する人口約10万人ほどの中規模の都市で、かつては桐生市と並び織物産業の栄えた町として群馬県の産業革命の先陣を常に保っていた。現在は繭生産の基盤の桑園に工業団地や住宅が立ち並び、従来の織物産業を中心とした生産形態から脱皮しつつある状態である。その生産形態の変容に画期を与える事象として、上武道路全面開通が期待を集めているといえよう。

### 第1節 地理的環境

#### (1) 書上本山遺跡

書上本山遺跡は伊勢崎市の北東部に位置し、大間々扇状地古期面である桐原面を基盤層とする。周辺には溜池や湧水地が点在し、その中のひとつである佐波郡東村西国定六道の天ヶ池湧水地を谷頭とする小開析谷右岸、及び大井戸湧水地に端を発する開析谷左岸の洪積台地上に本遺跡は占地する。これらの開析谷は樹枝状に平野を侵食し、洪水などの度に肥沃な土壌を生成することになり、その結果現在は水田や畑に利用されている。おそらく、弥生時代以降その時代の人々の植物性食物の生産域として位置付けられてきたと考えられる。

一方、それらの開析谷に挟まれる格好となる洪積台地には数多くの集落跡や墳墓が濃密に分布する。この洪積台地は、赤城山麓地域に見られる低地との比高差が著しい急斜面を持つ独立した山麓台地ではなく、緩やかな斜面で台地形状を縁取っている。このような比高差が少ない台地に営まれる集落はその集落間の情報伝達速度やコミュニケーションの動態が赤城山麓の台地上に営まれる集落のそれとは違い、各集落間の密接な斉一化が図られるものである。当地域の各時期の集落様相が、一連の調査で明らかになるにつれ、各台地の集落の性格と共通性が認識されるものと期待されている。

#### (2) 波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡

両遺跡とも、伊勢崎市北端部に位置し、赤堀町と前橋市に市境を接する箇所である。2遺跡は県道深津伊勢崎線を挟んで隣接し、同一台地上に占地する。この台地は、東側を西桂川、西側を波志江沼に挟まれた南側に舌状にのびる洪積台地である。西桂川の東は沖積低地が、波志江沼の西は洪積台地と神沢川による沖積低地が展開する比較的地形区分としては多様性に富む地域である。土地利用状況は書上本山遺跡周辺と同様で、低地は水田や畑、台地は集落などに使用されているが、この地域には第四期泥流による独立丘状の高まりが散見され、更に神沢川流域などでも砂壤土性微高地が確認されており、考古学上も注目されている地域でもある。

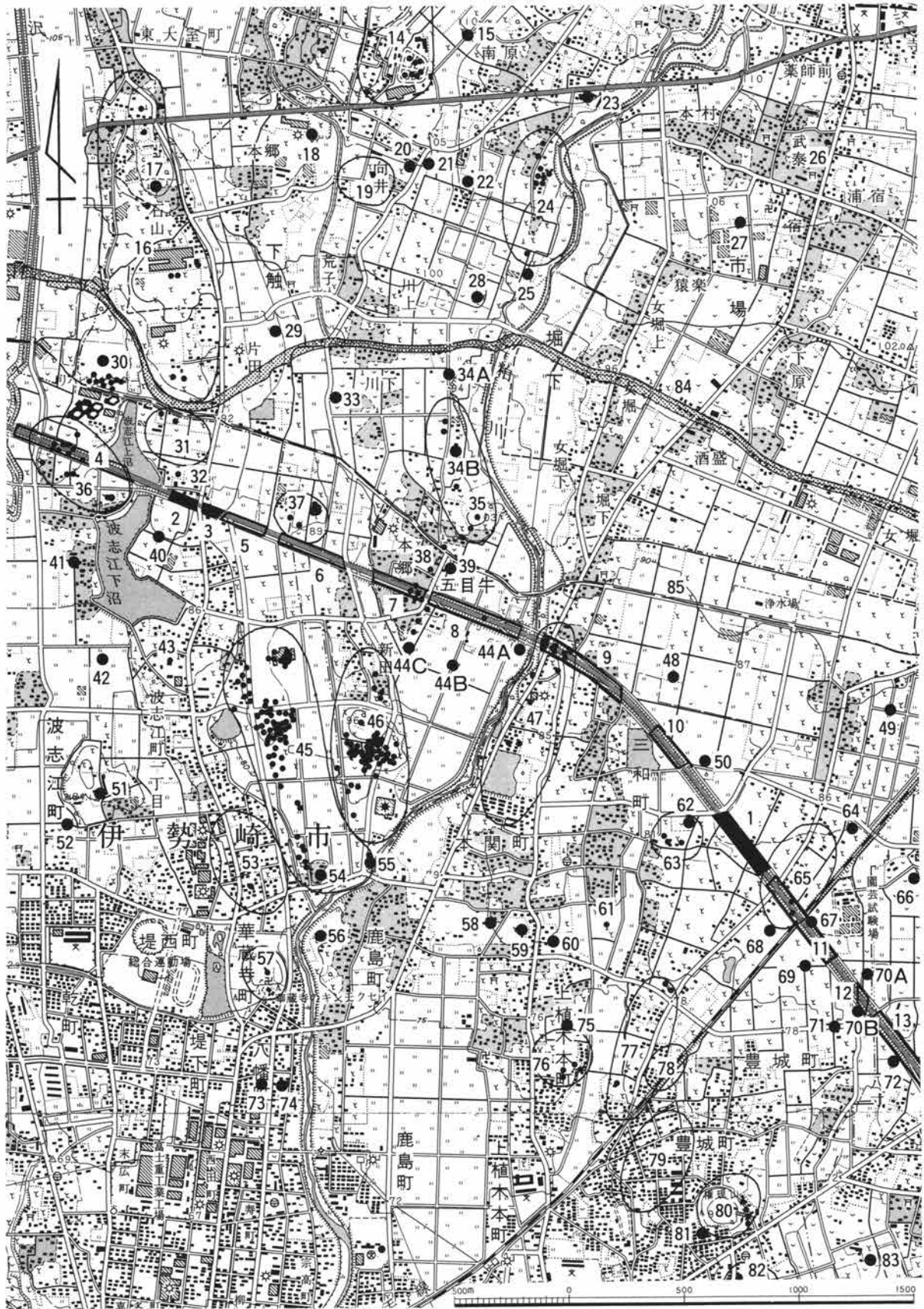
両遺跡には、これら特殊地形は確認されなかったが、波志江六反田遺跡東端部で旧西桂川流路が検出され、石山遺跡・石山片田古墳群・下触牛伏遺跡が属する洪積台地の一端を明らかにした評価が充てられるものである。

### 第2節 歴史的環境 (周辺遺跡)

前述のように、赤城山南域に展開する平野を形成した、小中河川の氾濫源である沖積低地や各種形態の台地には数多くの遺跡が包蔵されている。本節では、それらの遺跡を概観する意味で各時代毎の当地域の遺跡の紹介をし、周辺地域の歴史的様相としたい。

#### (1) 旧石器時代

著名な遺跡としては権現山遺跡(81)が挙げられる。書上本山遺跡の西南約1.5kmに位置する独立丘に立地し、八崎火山灰層上より「洋梨形握り槌」などが出土している。また、波志江六反田・波志江天神山遺跡の北方1.4kmの泥流丘上に尖頭器を多出した石山遺跡(17)が知られる。また、分布図では及ばなかったが、周辺には赤堀町磯遺跡や笠懸町岩宿遺跡など日本旧石器時代研究史の初頭期を彩った学史



第1図 周辺の遺跡

に忘れることのできない遺跡が多い。

学史的には権現山遺跡を初めとする、石山遺跡・岩宿遺跡など一連の旧石器遺跡は重要な資料を提供し、群馬県における該期研究の上昇が期待された地域ではあるが、しばらくの間、調査研究の空白期間ともいべき停滞期が続く。この因を敢えて言及する必要は無いが、ここ数年の行政発掘増加に伴う旧石器調査例の通常化を照らし合わせると、その極端な対称性に隔世の感を覚える。赤城山南麓を横断する形をとる上武道路建設に伴う調査例を概観しても、今井道上・道下遺跡・二之宮谷地遺跡・二之宮千足遺跡・飯土井二本松遺跡・飯土井中央遺跡・波志江六反田遺跡(2)・堀下八幡遺跡(6)・上植木光仙房遺跡(9)・書上本山遺跡(1)が挙げられ、また、これらの調査に先行する形で赤堀町下触牛伏遺跡(30)や北三木堂遺跡で充実した調査と成果を提起している。いずれも、調査当初時より旧石器調査を目的とした試掘を念頭におき、精力的・合理的に調査を進めた結果と評価できよう。

しかし、上記の遺跡は暗色帯前後の文化層を中核とする調査例であり、八崎火山灰層下や上層の硬質ローム層中の文化層検出には至っていない。今後、当地域の該期調査を行う際の課題としておかなければならないだろう。

## (2) 縄文時代

草創期：下触牛伏遺跡において40点弱の「ハ」字形の爪形文が出土している。伊勢崎市内では間之山遺跡(54)が知られる。

早期：明確な遺構が伴わないが、遺物は各遺跡から出土している。代表的なものとして、堀下八幡遺跡からは押型文・捺糸文・無文の三戸式が出土している。書上下吉祥寺遺跡(12)では捺糸文の出土を見る。八寸大道上遺跡(13)でも捺糸文・沈線文・条痕文系の土器片が報告されており、集石土坑からは鶴ヶ島台式の深鉢が注目される。また、下触向井遺跡(20)では条痕文系土器群の良好な出土が報告されている。五目牛東遺跡(44)では沈線文・山形押型文が出土している。波志江権現山遺跡(51)でも早期の

土器片とスタンプ形石器が出土している。

前期：非常に濃密な遺跡分布を見せる。そのなかで初頭期に比定される花積下層式土器の出土を見る五目牛清水田遺跡(8)や五目牛南組遺跡(7)が注目されよう。その他では、八幡林古墳群及び縄文住居跡(37)で当該期の住居跡が検出されているとされているが詳細は不明である。

後半期の諸磯式期の遺構は各遺跡で良好な検出状況を見せる。書上下吉祥寺遺跡で住居跡3軒が検出されている他に、堀下八幡遺跡・下触牛伏遺跡・今井柳田遺跡(15)・今井赤坂南遺跡(22)・今井南原遺跡(25)・寺回遺跡(27)・鷹巣遺跡(33)・北通遺跡(34)・五目牛東遺跡(44)・天ヶ堤遺跡(49)・高山遺跡(62)などで住居跡や土坑などが検出されている。

中期：比較的少ない。しかし、各遺跡とも破片資料としては報告されているので、遺跡は存在するのであろう。中西原遺跡(66)からは住居跡、五目牛南組遺跡では小竪穴状遺構から加曽利E3式の完形個体が出土している。当地域では検出されていないが、一般に中期集落は大型のものが知られており、今後該期遺跡の調査例がなされた際には、様々な様相が把握されると期待される。

後期：中期遺跡に比して以外に多い。図上には掲載していないが、赤堀町・東村曲沢遺跡は中期後半から称名寺・堀ノ内式の敷石住居跡などを検出した集落遺跡である。また、五目牛洞山遺跡(39)・今井柳田遺跡も住居跡が検出されており、前述の五目牛清水田遺跡も住居跡は確認されていないが、包含層より良好な遺物出土状況を見せる。その他では、上植木光仙房遺跡では堀ノ内1式の埋設土器が確認されている。

晩期：分布図には乗らないが伊勢崎市八坂遺跡では、初頭期の土器と共に配石遺構が検出されている。北米岡遺跡でも初頭期の土器が出土している。

(陥穴) 上記各遺跡のなかには、陥穴が報告されている遺跡も見られる。蟹沼東古墳群(45)・五目牛南組遺跡・下触牛伏遺跡・波志江天神山遺跡に顕著に認められる。このうち下触牛伏遺跡では25基の

陥穴を報告しており、近接する波志江天神山遺跡との関連が注目されよう。

### (3) 弥生時代

報告例は少ない。中期後半期よりの居住が伊勢崎市西太田遺跡などで認められているが、現段階では非常に希薄な存在である。後期にいたると間之山遺跡で住居跡が確認されているが、伊勢崎市内の該期遺跡は濃密な分布を示しているとは言えない。恵まれた地形条件を備えた周辺地形ながら、定着的な居住がなされなかったのは不明点でもある。

### (4) 古墳時代

弥生時代後半期の集落が定着しなかったためか、東海系の土器文化が比較的容易に当地域に浸透するようだ。これらの土器文化は、北関東地域の石田川式土器に変容するが、この発展過程において古墳築造を背景とした階層社会を蓄積したのであろう。

当地域の初期古墳としては、華蔵寺裏山古墳(57)が挙げられる。また5世紀の築造とされる御富士山古墳、帆立貝形古墳である丸塚山古墳(61)などは大型古墳として著名である。赤堀町内では、地藏山古墳群(46)内の初期古墳が挙げられる。その後、6世紀前半の構築が与えられる恵下古墳(76)などを経て、小規模墳丘の群集墳が当地域でも群在するようになる。恵下古墳と空時的にも近接する原之城遺跡(71)が注目される。豪族の居館跡といわれる当遺跡だが、長方形の環濠を持ち、土塁・内部を区画する溝や祭祀跡が検出されている。群集墳は当地域で非常に多い。例えば書上古墳群(65)内の書上上原之城遺跡(11)では2基の古墳が調査され、高山古墳群(63)が近接する。また、波志江今宮遺跡(4)では8基の古墳が調査されており、石山片田古墳群(16)・下触牛伏遺跡で検出された10基の古墳群などとの関連が興味深い。

古墳時代の集落跡も、群集墳と同様に後期に濃密な分布を示す。おそらく生産力の拡大からなされた現象と捉えられ、八寸大道上遺跡・川上遺跡(28)・中畑遺跡(29)・舞台遺跡(48)・天野沼遺跡(68)など数多く調査されている。

### (5) 奈良・平安時代

遺跡は主に集落跡として周知されている。その中で上植木廃寺(59)は白鳳時代の創建とされ、本格的な古代寺院跡として位置付けられている。周辺遺跡にも瓦塔片などを出土した遺跡も多く、上植木廃寺は当地域の該期様相の一端をなすものであろう。集落跡は、堀下八幡遺跡・上植木光仙房遺跡・上植木壺町田遺跡(10)などで顕著に検出されている。そのなかで、230点以上の墨書土器を多出した上植木光仙房遺跡は検出された該期住居数も多く、当該地域の中核的な集落と考えられよう。並びに、書上下吉祥寺遺跡も墨書土器を116点出土していることから、両遺跡とも上植木廃寺との関連を考えるうえで積極的な評価を与えるべき遺跡であろう。その他では、川上遺跡でも寺院跡と思われる建物跡が検出され、同様に墨書土器も出土している。

生産跡としては五日牛清水田遺跡では、古墳時代から中世にいたる幾層もの水田・畑跡が検出されている。また、波志江中峰岸遺跡(5)・波志江今宮遺跡・波志江六反田遺跡でも、B軽石下水田が確認されている。当地域沖積低地の今後の調査増加が望まれる。

さらに、推定東山道(85)も当地域を東西に走るとされていることから、該期における当地域の在り方は、赤城山南麓のみならず、群馬県内でも重要な地域である事が窺われよう。

### (6) 中～近世

平安時代から中世にいたる過程の遺跡としては、女堀(84)が挙げられる。12世紀中葉に当該地域の用水供給を主目的として開削されたとされる。

その他には上植木壺町田遺跡では、中世に比定される井戸が検出されており、木簡をはじめとする木製品・石臼・板碑が出土している。

近世遺構は、各遺跡から土坑・井戸・掘立柱建物遺構として報告されている。非常に濃密な分布であり当地域の開発のピークともいえよう。その中で、五日牛南組遺跡で近世農家の屋敷構えが掘立柱建物・礎石建物として検出されたことは注目されよう。

以上のように、当地域の歴史的環境として旧石器時代から通観して概略的な説明を加えた。弥生時代に若干の遺跡減少は認められるが、全体を通して、居住域・生産域として良好な地理的条件を持つ当地域の特徴が分布図にも現れており、人間の活動は地

域全般に及んでいたことが解る。

書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡はこれらの遺跡群の中で、各遺跡の性格と同じように多時期の遺構・遺物が認められる複合遺跡として位置付けられるものである。

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時 期					遺 跡 の 概 要	参 考 文 献	
		旧 石	縄 文	弥 生	古 墳	奈 平			中 近
1	書上本山遺跡 (伊勢崎市三和町)	○			○	○	○	本報告の遺跡	
2	波志江六反田遺跡 (伊勢崎市波志江町)	○			○	○	○	本報告の遺跡	
3	波志江天神山遺跡 (伊勢崎市波志江町)		○				○	本報告の遺跡	
4	波志江今宮遺跡 (伊勢崎市波志江町)		○		○	○	○	神沢川左岸に位置する。縄文土坑、東側の台地上にある6～7世紀にわたる8基の古墳、奈良時代住居跡1軒を検出。台地の西側には浅間B軽石下の水田跡と溝が検出されている。(古墳は宮貝戸古墳群に含まれる。)	1・2
5	波志江中峰岸遺跡 (伊勢崎市波志江町)						○	西桂川左岸の沖積台地上に位置する。浅間山給源のB軽石によって埋没した水田と溝が検出されている。	2
6	堀下八幡遺跡 (佐波郡赤堀町堀下)	○	○		○	○	○	旧桂川右岸の洪積低台地上に位置する集落遺跡。諸磯期の住居跡1軒・土坑4基、平安時代の住居跡9軒を検出。則天文字等の墨書土器が出土。調査区西縁部では暗色帯から約1,000点の旧石器時代の遺物が出土。	3・4
7	五目牛南組遺跡 (佐波郡赤堀町五目牛)		○	○	○		○	粕川右岸の洪積低台地上に位置する縄文～近代の複合遺跡。縄文時代は、前期花積下層期の住居跡4軒・陥穴。集石土坑。弥生時代の土坑からは後期樽式土器壺が出土。古墳5基は6世紀前半の構築。近世・近代の屋敷跡検出。	2・4
8	五目牛清水田遺跡 (佐波郡赤堀町五目牛)		○		○	○	○	粕川右岸に位置する。洪積微高地では縄文時代前期から奈良時代に及ぶ55軒の住居跡と前方後円墳1基・祭祀跡等を、沖積地では古墳～平安時代の畠・水田跡、中近世の掘立・井戸・墓塚を調査。	2・4
9	上植木光仙房遺跡 (伊勢崎市三和町)	○			○	○	○	大間々扇状地先端部粕川左岸。洪積微高地の中央からやや北側より。関山古墳群中の10基(6世紀後半～7世紀後半)を調査。平安時代住居跡123軒、掘立2棟等検出。墨書土器多数出土。	4・5 7・16 32
10	上植木老町田遺跡 (伊勢崎市三和町)				○	○	○	大井戸湧水地による開析谷右岸の洪積微高地に位置する。古墳時代前期から平安時代に及ぶ住居跡12軒・掘立2棟、地下式土坑1基・土壇墓14基・火葬跡1基、井戸跡13基、溝跡25条を調査。井戸跡からは呪符木簡が出土。	4・6 7
11	書上上原之城遺跡 (伊勢崎市豊城町・三和町)				○	○		天ヶ池湧水地による小開析谷の右岸台地上。書上古墳群中の2基を調査。奈良・平安時代の住居跡47軒・土坑11基・掘立41棟・井戸跡7基・溝跡21条を検出。墨書土器・線刻紡錘車・八稜鏡等出土。	6・7 8
12	書上下吉祥寺遺跡 (伊勢崎市豊城町)		○		○	○	○	天ヶ池湧水地による小開析谷の右岸台地上。縄文時代住居跡3軒・土坑1基、古墳時代住居跡9軒、平安時代住居跡1軒、中世墓塚1基、近世掘立6棟・溝跡13条、土坑7基検出。伊教委調査の「下吉祥寺遺跡」との関連大。	6・7 8

II章 遺跡を取り巻く環境

No.	遺跡名	時期					遺跡の概要	参考文献
		旧石	縄文	弥生	古墳	奈良・中近		
13	八寸大道上遺跡 (佐波郡東村東小保方・西小保方)		○		○	○	天ヶ池湧水地による開析谷左岸の洪積台地上に位置する。縄文時代集石遺構10基、古墳時代後期の住居跡48軒、奈良・平安時代の住居跡11軒・掘立9棟等を検出。子持器台や古墳時代の工房跡から多量の滑石製品が出土。	8・9
14	多田山田向井古墳群 (佐波郡赤堀町今井)				○		多田山丘陵の東南斜面。古墳時代後期の円墳が集中し、上毛古墳総覧記載の赤堀町分で20基を数える。多田山2基(7世紀初頭)・田向井7基(7世紀前～後・円墳・横穴式石室)調査。	10・12
15	今井柳田遺跡(A区) (佐波郡赤堀町今井)		○		○	○	毒島から続く沖積地の左岸台地上に位置する。縄文時代住居跡前期1軒・後期9軒・土坑3基。古墳時代後期住居跡12軒、奈良・平安時代住居跡7軒・土坑26基検出。	11
16	石山片田古墳群 (佐波郡赤堀町下触・前橋市東大室町)				○		石山丘陵の全域にわたる。上毛古墳総覧に71基記載。石山南古墳：円墳 横穴式石室 埴輪馬出土・庚塚古墳群：内、円墳 横穴式石室 7世紀末、極小の竪穴式石室 6世紀末・片田古墳群：内、前方後円墳 6世紀末～7世紀初頭等調査。	12・13 14・15 26
17	石山遺跡 (佐波郡赤堀町下触)	○					石山丘陵から南にのびる洪積台地の付け根付近に位置する。100余点の尖頭器をはじめとし、約2,500点の剝片等の遺物を出土。旧石器時代末期。	16・17
18	下触下寺遺跡 (佐波郡赤堀町下触)				○	○	桂川右岸の洪積低台地上に位置する古墳時代後期～平安時代の集落遺跡。住居跡47軒・掘立3棟と6世紀前半に構築の5基の方形(円形)周溝墓を検出。	18
19	向井古墳群 (佐波郡赤堀町下触)				○		桂川の左岸に位置する。下触向井遺跡に接する。内1基(円墳・横穴式石室)が調査されている。	12
20	下触向井遺跡 (佐波郡赤堀町下触)		○		○	○	毒島湧水地による開析谷右岸の微高地上に位置する。古墳時代住居跡26軒、奈良・平安時代の住居跡14軒検出。縄文土坑からは早期末の条痕文土器が、平安時代の住居跡・土坑からは「中臣」等の墨書が出土。	19
21	下触向井Ⅱ遺跡 (佐波郡赤堀町下触)				○		毒島湧水地による開析谷右岸の微高地上に位置する。古墳時代の住居跡17軒を検出。向井遺跡に於ける集落西側の限界を確認。	20
22	今井赤坂南遺跡 (佐波郡赤堀町今井)		○		○		毒島から湧く湧水による小沢の左岸の低台地に占地。縄文時代前期の住居跡1軒、古墳時代の住居跡13軒・土坑10基検出。	21
23	今井学校遺跡 (佐波郡赤堀町今井)				○		粕川と鍋木川が合流し段丘を形成した段丘上の北端部。古墳時代の集落遺跡。住居跡11軒・古墳の周溝1基検出。	20・22
24	南原古墳群 (佐波郡赤堀町今井)				○		粕川右岸の洪積低台地上。上毛古墳総覧に愛宕山古墳を中心に28基記載。昭和25年に4基、昭和41年に3基、昭和42年に1基を調査。	10・12 23
25	今井南原遺跡 (佐波郡赤堀町今井)		○	○	○	○	粕川右岸の洪積低台地上に位置する集落遺跡。縄文時代前期住居跡1軒・土坑1基、弥生時代住居跡36軒、古墳～奈良・平安時代の住居跡112軒、掘立3棟、土坑7基、「南原古墳群」に属する4世紀後半の古墳1基調査。小形の乳文鏡が出土。墨書・線刻紡錘車等出土。	24
26	武泰古墳 (佐波郡赤堀町市場)				○		遺跡台帳に周囲が切り崩された円墳との記載がある。	25
27	寺回遺跡 (佐波郡赤堀町市場)		○				粕川と鍋木川の合流点の東、大林寺の西300mに位置する。縄文時代前期の土坑22基他、土器・石器を多量に出土。	26
28	川上遺跡 (佐波郡赤堀町下触)				○	○	粕川と桂川に挟まれた洪積台地上に位置する。古墳時代前～後期の住居跡30軒、平安時代の住居跡18軒及び8～11世紀の瓦葺き建物跡(寺院跡)、石製蔵骨器を伴う墓を調査。「寺」「信」等の墨書を出土。	27・32 44



No.	遺跡名	時期	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	遺跡の概要	参考文献
29	中畑遺跡 (佐波郡赤堀町下触)					○			西桂川右岸の洪積低台地の東縁部に位置する。古墳時代中・後期の住居跡35軒・掘立1棟を検出。	28
30	下触牛伏遺跡 (佐波郡赤堀町下触)		○	○		○	○		神沢川左岸のローム台地上に位置する旧石器～平安時代の複合遺跡。旧石器時代文化層を2層検出し、約3,000点の遺物を出土。縄文時代住居跡3軒・陥穴25基・土坑18基・集石3基、古墳時代住居跡13軒・古墳10基(円墳・方墳・横穴式石室 7世紀中葉以降)を検出。	16・29
31	牛伏古墳群 (伊勢崎市波志江町)					○			波志江沼東側の舌状台地のほぼ中央部に位置する。1号墳調査。直径30m、横穴式石室を有する。西60mに2号墳確認。	30
32	祝堂古墳 (伊勢崎市波志江町)					○			波志江沼東側の舌状台地ほぼ中央部の独立墳。直径70mの円墳。2重の周堀・葺石をもつ。截石切組積 横穴式両袖型石室、石室下に約1mの版築検出。7世紀末～8世紀初頭構築。	30・32
33	鷹巣遺跡 (佐波郡赤堀町下触)		○			○	○		旧桂川左岸の洪積台地西縁部に位置する。縄文時代前期の住居跡2軒・土坑3基、平安時代の住居跡18軒・掘立4棟・土坑等を検出。「川郡」「中」等の墨書土器出土。	31
34	北通遺跡A・B (佐波郡赤堀町下触)		○			○			柏川右岸の台地縁辺。縄文時代前期住居跡7軒・土坑5基、遺構外に後期の土偶が出土。古墳時代住居跡1軒、平安時代住居跡2軒検出。「大門」の墨書土器出土。	31
35	洞山古墳群 (佐波郡赤堀町五目牛)					○			洞山の小丘及びその斜面に分布。上毛古墳総覧に21基記載。内8基以上が調査。	10・12 31
36	宮貝戸古墳群 (伊勢崎市波志江町)					○			神沢川左岸、波志江沼西の小丘陵上。「波志江今宮遺跡」の8基を含む13基が調査。総覧三郷村74号墳：小円墳 横穴式両袖型石室 太刀・耳環等出土 7世紀後半頃。(別称 波志江沼西古墳群・今宮古墳群)	1・10 32・33
37	八幡林古墳群 及び縄文住居跡 (佐波郡赤堀町堀下)		○			○			旧桂川右岸に位置する高さ7mの独立丘の南側斜面に位置する。6世紀初頭～7世紀前半構築の4基の横穴式石室の円墳を調査。墳丘上に縄文時代前期住居跡を4軒検出。	34
38	寺跡古墳 (佐波郡赤堀町五目牛)					○			柏川右岸。洞山の南側。横穴式袖無型石室の円墳。6世紀後半。	10・12
39	五目牛洞山遺跡 (佐波郡赤堀町五目牛)		○			○	○		柏川右岸の洪積台地の東縁部に位置する。縄文時代後期の住居跡5軒・土坑13基、古墳時代の古墳の周堀が調査され、土偶・石棒等が出土。	35・36
40	大沼上遺跡 (伊勢崎市波志江町)					○			波志江下沼の台地東縁部。古墳時代の住居跡1軒検出。	30
41	宮貝戸下遺跡 (伊勢崎市波志江町)					○	○		波志江下沼西の平坦地。舌状台地の先端部。8世紀初頭の住居跡2軒検出。	37
42	大沼下遺跡 (伊勢崎市波志江町)					○	○		波志江下沼の南200m。赤城山から延びる舌状台地の先端部。古墳～奈良・平安時代住居跡19軒・溝跡2条・井戸跡1基検出。	38
43	波志江伊勢山古墳 (伊勢崎市波志江町)					○			波志江下沼の南200m。旧三郷村71号墳。横穴式石室の円墳。	12
44	五目牛東遺跡A・B・C (佐波郡赤堀町五目牛)		○			○	○	○	A地点：柏川右岸の低台地上に位置する。古墳時代住居跡12軒を検出。 B地点：柏川及び旧桂川の氾濫による沖積微高地上に位置する。古墳時代後期～平安時代住居跡22軒を検出。墨書土器出土。中世以降の道跡検出。 C地点：旧桂川左岸の洪積台地上に位置する。縄文時代前期の住居跡2軒検出。	39

II章 遺跡を取り巻く環境

No.	遺跡名	時期					遺跡の概要	参考文献
		旧石	縄文	弥生	古墳	奈良・中近		
45	蟹沼東古墳群 (伊勢崎市波志江町)		○		○		西桂川左岸の低独立丘(大穴台地)上に築かれた古墳群。地藏山古墳群の西側500mに位置する。約80基が確認され、内69基の古墳を調査。6～7世紀前半の構築。他、縄文時代陥穴5基、方形周溝墓6基、溝1条検出。(間之山古墳群を含む)	32・33 37・40 41・42
46	地藏山古墳群 (佐波郡赤堀町五目牛)				○		赤堀町の最南端赤城山の残丘状の台地上に位置する。地藏山古墳を中心に昭和26・27年に調査された達磨山古墳・麻手塚古墳等、5～8世紀にいたる55基が群集する。	10・12 13・39 43
47	関山古墳群 (伊勢崎市本関町・三和町)				○		粕川右岸の台地上に位置する。上原古墳：円墳 横穴式石室7世紀末～8世紀初頭・重田古墳：円墳 箱式石棺 6世紀前半・殖蓮71号古墳：前方後円墳 横穴式石室 7世紀前半・関山古墳・本関町古墳・上武「上植木光仙房遺跡」内の10基(6世紀後半～7世紀後半)の古墳等を調査。	5・10 12・32
48	舞台遺跡F地点 (伊勢崎市三和町)				○	○	大間々扇状地西端の洪積微高地の南西部に位置する古墳時代前期～平安時代の集落遺跡。10軒の住居跡の内5軒が古墳時代後期に属する。井戸からは14世紀代の板碑出土。	44・45
49	天ヶ堤遺跡 (伊勢崎市三和町)		○		○		尼ヶ池湧水地の開析谷に面する台地上に位置する。縄文時代住居跡1軒、古墳時代住居跡7軒検出。	44・46
50	鯉沼東遺跡 (伊勢崎市三和町)		○		○	○	大井戸湧水地の開析谷に挟まれた洪積微高地に位置する縄文時代中期～平安時代の集落遺跡。33軒の住居跡・井戸跡9基検出。	44・45
51	波志江権現山遺跡 (伊勢崎市波志江町)		○				伊勢崎市北部、波志江権現山の山裾部に位置する。縄文時代早期の土器・石器が出土している。	32
52	西稲岡遺跡 (伊勢崎市波志江町)				○		伊勢崎市北部、微高台地の西側部分波志江権現山の南西に位置する。古墳時代の溝跡3条検出。	38
53	台所山古墳群 (伊勢崎市波志江町)				○		粕川の右岸、華蔵寺の北方の台地上に位置する。10余基(内上毛古墳総覧8基記載)の古墳の存在が伝えられたが現在はほぼ消滅している。内、主体部に箱式石棺を用いた1基が調査された。	32
54	間之山遺跡 (伊勢崎市波志江町)		○	○	○		西桂川が粕川に合流する手前右側の舌状台地上に位置する。付近一帯は間之山古墳群であり、古墳下から縄文・弥生・古墳時代の住居跡・方形周溝墓等検出。	32
55	間之山東遺跡 (伊勢崎市波志江町)				○		粕川の右岸、地藏山丘陵の南側に位置する。古墳時代の住居跡が検出。	32
56	上西根遺跡 (伊勢崎市鹿島町)				○	○	粕川左岸の洪積台地上に位置する。古墳時代前期～奈良時代にわたる住居跡26軒・方形周溝墓5基・石塚1基・井戸跡3基・溝跡15条等を検出。	47
57	華蔵寺古墳群 (伊勢崎市華蔵寺町)				○		粕川右岸の独立丘上に位置する。華蔵寺裏山古墳：主軸長約40mの前方後円墳。主体部は粘土礫と推定。5世紀初頭の構築・華蔵寺1号墳調査。	32
58	新屋敷遺跡 (伊勢崎市本関町)				○	○	舌状微高台地上に位置する。古墳時代住居跡、平安時代住居跡を検出。墨書土器出土。	32
59	上植木廃寺 (伊勢崎市上植木本町・本関町)				○		大間々扇状地の先端部、舌状微高台地上に位置する。白鳳期創建の地方寺院(金堂・講堂・塔・中門・回廊・基壇検出)、瓦・三彩陶片・墨書土器・瓦塔片などが出土している。	32・44 48
60	上植木廃寺周辺遺跡 (伊勢崎市上植木本町・本関町)				○	○	舌状微高台地上に位置する。古墳時代住居跡、奈良・平安時代住居跡、中・近世溝跡・土坑・井戸跡検出。墨書土器出土。	32

No.	遺跡名	時 期	旧 石	縄 文	弥 生	古 墳	奈 良	中 近	遺 跡 の 概 要	参 考 文 献
61	丸塚山古墳 (伊勢崎市三和町)					○			大井戸湧水地による開析谷に挟まれた洪積微高地の南端部に位置する。後円部墳頂に箱式棺状堅穴式石室3基をもつ、全長81mの帆立貝形前方後円墳。5世紀後半の構築。	10・12 32
62	高山遺跡 (伊勢崎市三和町)		○			○			舌状台地の先端部に位置する。縄文時代前期の住居跡1軒、高山古墳群中の3基・方形特殊遺構・時期不明の溝跡5条を検出。	32・46
63	高山古墳群 (伊勢崎市三和町)					○			舌状台地の先端部に位置する。6世紀後半構築の3基が「高山遺跡」として調査されている。	32・46
64	下書上遺跡 (伊勢崎市三和町)						○		大井戸湧水地による開析谷の左岸台地上に位置する。土師器片出土。	46
65	書上古墳群 (伊勢崎市三和町)					○			沖積地に挟まれた南へのびる台地の東辺に位置する。上毛古墳総覧に約30基が記載。上武「書上上原之城遺跡」で横穴式石室の円墳2基（7世紀初頭）が調査されている。	6・7 32
66	中西原遺跡 (佐波郡東村西小保方)		○			○	○		天ヶ池湧水地より南下する開析谷の東側台地上に位置する。縄文時代住居跡・集石・土坑、古墳時代住居跡、奈良・平安時代住居跡等出土。（県園芸試験場遺跡）	49・50
67	園芸試験場第Ⅱ遺跡 (伊勢崎市三和町)						○		天ヶ池湧水地の開析谷の右岸台地上に位置する。上武「書上上原之城遺跡」に含まれる。奈良・平安時代の住居跡7軒・掘立12棟・井戸跡1基・土坑4基検出。	6・51
68	天野沼遺跡 (伊勢崎市三和町)					○			天野沼を中心としている舌状にのびる台地の基部。古墳時代末期の住居跡5軒を検出。	46
69	原之城遺跡 (伊勢崎市豊城町)						○		天ヶ池湧水地による開析谷右岸の洪積台地上に位置する。奈良・平安時代の住居跡80軒検出。	52
70	下吉祥寺遺跡 A・B (伊勢崎市豊城町・三和町)		○			○	○	○	天ヶ池湧水地による開析谷右岸の洪積台地上に位置する。縄文時代住居跡3軒、古墳～奈良・平安時代住居跡64軒、溝跡2条。瓦塔・墨書土器出土。	32・52 53
71	原之城遺跡（環濠跡） (伊勢崎市豊城町)					○			天ヶ池湧水地による開析谷右岸の洪積台地上に位置する。東西方向約105m・南北方向約165mの長方形区画の巡りに幅約20mの濠をもつ古墳時代中期の環濠居館跡。堅穴住居跡・掘立柱建物跡・祭祀跡・内部区画の溝等が検出。	32・44 52・54 55
72	大道上遺跡 (佐波郡東村西小保方・東小保方)					○			天ヶ池湧水地より南下する開析谷の東側台地上。古墳時代住居跡検出。	50
73	八幡町B遺跡 (伊勢崎市八幡町)					○	○	○	華藏寺丘陵から南に延びる舌状微高地の先端部よりに位置する。古墳時代住居跡19軒、平安～近世の溝跡8条検出。石製模造品出土。	57
74	八幡町D遺跡 (伊勢崎市八幡町)					○			華藏寺丘陵から南に延びる舌状微高地の先端部よりに位置する。古墳時代後期住居跡15軒・井戸跡10基・溝跡2条・土坑検出。	58
75	恵下遺跡 (伊勢崎市上植木本町)					○	○	○	大間々扇状地西端の洪積微高地の東縁部に位置する。古墳時代前期～奈良・平安時代住居跡84軒、6世紀構築の円墳3基、窯跡1基・溝10条・井戸12基検出。墨書土器・線刻紡錘車出土。	44・56
76	恵下古墳群 (伊勢崎市上植木本町)					○			大間々扇状地西端の洪積微高地の東縁部に位置する。6世紀中頃の古墳群。恵下古墳：直径27mの円墳 石棺式堅穴式石室 埴輪・副葬品多数出土。「恵下遺跡」で3基の円墳を調査。	10・32 56

## II章 遺跡を取り巻く環境

No.	遺跡名	時 期	旧 石	縄 文	弥 生	古 墳	奈 平	中 近	遺 跡 の 概 要	参 考 文 献
77	大道西古墳群 (伊勢崎市上植木本町 ・豊城町・三和町)					○			豊城町北西部一帯に広がる。大道西1号墳・行者山1・2号墳の3基を調査。 (行者山古墳群を含む)	10・32
78	大道東古墳群 (伊勢崎市豊城町)					○			権現山の北方に広がる。平夷されてしまったため不明な点が多い。	32
79	権現山北古墳群 (伊勢崎市豊城町)					○			権現山の北方に広がる。平夷されてしまったため不明な点が多い。	32
80	権現山古墳群 (伊勢崎市豊城町)					○			権現山の中腹から麓にかけて約20基が群集。内、山裾の傾斜面に位置する4 基の横穴式石室を調査。6世紀代の群集墳。	10・32
81	権現山遺跡 (伊勢崎市豊城町)		○						大間々扇状地の平坦部に小島のように屹立する権現山の南緩斜面上に位置す る。前期旧石器文化の存在を最初に説いた遺跡。	16・17 32
82	権現山南古墳群 (伊勢崎市豊城町 ・上諏訪町)					○			権現山の南側に位置する。上毛古墳綜覧に30基記載。内1基のみ調査。 上諏訪古墳：円墳 横穴式石室 形象埴輪出土 6世紀後半。	10・32
83	西ノ畑遺跡 (佐波郡東村東小保方)					○	○		天ヶ池から南下する開析谷の北側台地上に位置する。古墳～平安時代の住居 跡を検出。	50
84	女堀							○	赤城山南麓から大間々扇状地の古期面に位置する。前橋市上泉町付近の旧利 根川を起点に、幅15～30m・深さ3～4mの規模で佐波郡東村西国定の終点 まで12.75kmにわたって開削された用水遺構。古代末の構築。	27・28 32・49 59
85	東山道(推定)						○		上野国南部を横断する古代の官道。「佐位駅」が上植木・下植木地域にある と推定される。	32・49

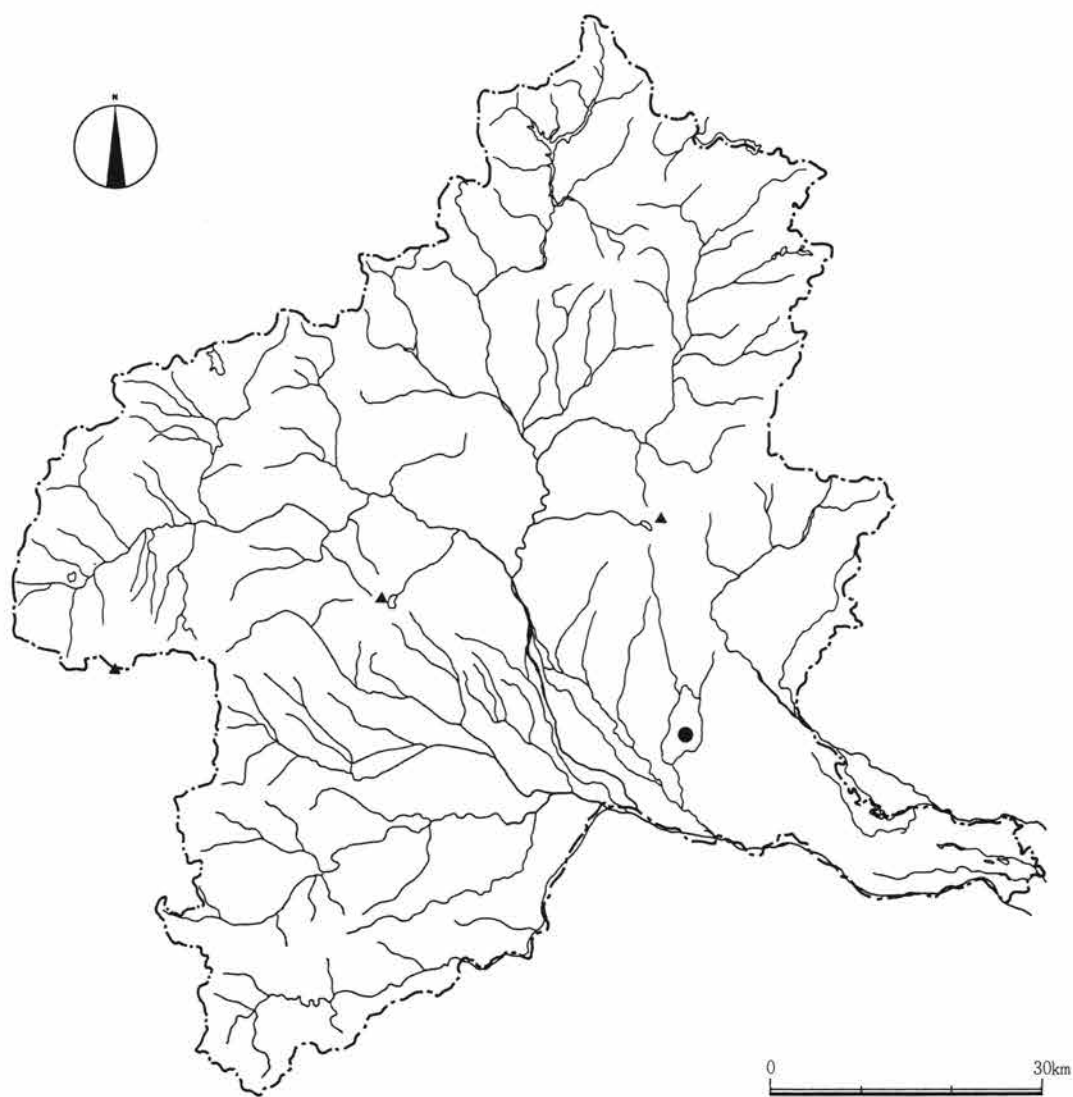
### 参考文献

- 1 石塚久則「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査略報」『今宮遺跡』1981 群馬県教育委員会
- 2 「昭和60年度一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要」1986 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 3 原 雅信 岩崎泰一他「堀下八幡遺跡」1990 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 4 「昭和59年度一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要」1985 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 飯塚 誠他「上植木光仙房遺跡」1989 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 6 原 雅信 飯塚 誠 坂井 隆他「上植木志町田遺跡 書上上原之城遺跡 書上下吉祥寺遺跡」1988 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 7 「昭和58年度一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要」1984 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 8 「昭和57年度・実績報告 上武国道地域埋蔵文化財発掘調査」1983 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 9 坂井 隆 原 雅信他「八寸大道上遺跡」1989 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 10 『群馬県史 資料編3 原始古代3』1981 群馬県史編さん委員会
- 11 松村一昭「群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告18」『今井柳田遺跡発掘調査概報』1982 赤堀村教育委員会
- 12 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』1966 吉川弘文館
- 13 尾崎喜左雄『日本考古学年報5』1952 日本考古学協会
- 14 松村一昭「群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告25」『萱野遺跡 庚塚古墳群発掘調査報告』1988 赤堀町教育委員会
- 15 松村一昭「群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告31」『下触片田古墳群発掘調査概報』1990 赤堀町教育委員会
- 16 『群馬県史 資料編1 原始古代1』1988 群馬県史編さん委員会
- 17 相沢忠洋 関谷 晃『赤城山麓の旧石器』1988
- 18 松村一昭「群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告23」『下触下寺遺跡及び磯十二所遺跡発掘調査概報』1987 赤堀町教育委員会
- 19 松村一昭「群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告13」『下触向井遺跡発掘調査概報』1980 赤堀村教育委員会
- 20 松村一昭「群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告26」『町内遺跡発掘調査報告』1989 赤堀町教育委員会
- 21 松村一昭「群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告30」『今井赤坂南遺跡発掘調査概報』1990 赤堀町教育委員会
- 22 松村一昭「群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告29」『町内遺跡発掘調査概報』1990 赤堀町教育委員会
- 23 松村一昭『赤堀村大字南原古墳発掘調査報告』『群馬文化86』1966 群馬文化の会
- 24 松村一昭「群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告15」『今井南原遺跡発掘調査概報』1981 赤堀村教育委員会
- 25 『群馬県遺跡台帳I(東毛編)』1971 群馬県教育委員会
- 26 松村一昭「群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告28」『昭和63年度埋蔵文化財発掘調査概報』1989 赤堀町教育委員会

- 27 松村一昭『群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告12』『川上遺跡、女堀遺構発掘調査概報』1980 赤堀村教育委員会
- 28 松村一昭『群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告22』『中畑遺跡、女堀用水遺構発掘調査概報』1986 赤堀村教育委員会
- 29 小島敦子 徳江秀夫 岩崎泰一他『下触牛伏遺跡』1986 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 30 中澤貞治『牛伏第1号墳 祝堂古墳 大沼上遺跡』1982 伊勢崎市教育委員会
- 31 松村一昭『群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告20』『洞山古墳群及び北通、鷹巣遺跡発掘調査概報』1983 赤堀村教育委員会
- 32 『伊勢崎市史 通史編1 原始古代中世』1987 伊勢崎市
- 33 中澤貞治『宮貝戸古墳群 蟹沼東古墳群』1983 伊勢崎市教育委員会
- 34 松村一昭『群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告19』『八幡林古墳群及び縄文住居跡調査概報』1982 赤堀村教育委員会
- 35 松村一昭『群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告14』『五目牛洞山遺跡発掘調査概報』1980 赤堀村教育委員会
- 36 松村永子『群馬県佐波郡赤堀町文化財調査報告32』『五目牛地区町道106号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』1990 赤堀町教育委員会
- 37 中澤貞治 村田喜久夫『蟹沼東古墳群 宮貝戸下遺跡』1978 伊勢崎市教育委員会
- 38 中澤貞治 村田喜久夫『大沼下遺跡 西稲岡遺跡』1977 伊勢崎市教育委員会
- 39 松村一昭『群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告11』『五目牛東遺跡及び赤堀村8号墳発掘調査概報』1980 赤堀村教育委員会
- 40 中澤貞治『蟹沼東古墳群』1979 伊勢崎市教育委員会
- 41 中澤貞治 村田喜久夫『蟹沼東古墳群』1981 伊勢崎市教育委員会
- 42 須長泰一『蟹沼東古墳群』1988 伊勢崎市教育委員会
- 43 松村一昭『群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告7・8』『赤堀村地蔵山の古墳1・2』1978・1979 赤堀村教育委員会
- 44 『群馬県史 資料編2 原始古代2』1986 群馬県史編さん委員会
- 45 中澤貞治 村田喜久夫『蟹沼東遺跡 舞台遺跡』1977 伊勢崎市教育委員会
- 46 中澤貞治『高山遺跡 天ヶ堤遺跡 天野沼遺跡 下書上遺跡』1978 伊勢崎市教育委員会
- 47 村田喜久夫 須長泰一『上西根遺跡』1985 伊勢崎市教育委員会
- 48 松村一美 須長泰一 早川隆弘『上植木廃寺』1988 伊勢崎市教育委員会
- 49 群馬県佐波郡『東村誌』1979 東村誌編纂委員会
- 50 横山 巧『佐波郡東村の遺跡—村内遺跡詳細分布調査報告書—』1988 佐波郡東村教育委員会
- 51 井上唯雄『上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報I』『県園芸試験場第二遺跡』1974 群馬県教育委員会
- 52 中澤貞治『原之城遺跡 下吉祥寺遺跡』1982 伊勢崎市教育委員会
- 53 村田喜久夫『下吉祥寺遺跡』1980 伊勢崎市教育委員会
- 54 中澤貞治『原之城遺跡』1986 伊勢崎市教育委員会
- 55 中澤貞治『原之城遺跡発掘調査報告書』1988 伊勢崎市教育委員会
- 56 村田喜久夫『恵下遺跡』1979 伊勢崎市教育委員会
- 57 早川隆弘『八幡町遺跡 (B地区)』1988 伊勢崎市教育委員会
- 58 松村一美 須長泰一 早川隆弘『八幡町遺跡 (D地区)』1990 伊勢崎市教育委員会
- 59 能登 健 鹿田雄三他『女堀』1985 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 60 『上毛古墳綜覧』1938 群馬縣
- 61 『群馬県遺跡地図』1973 群馬県教育委員会
- 62 『全国遺跡地図 群馬県』1977 文化庁文化財保護部



### Ⅲ章 書上本山遺跡



第2図 遺跡の位置

## 第1節 遺跡の概要

### (遺跡内の地形)

書上本山遺跡は伊勢崎市三和町に所在し、市の北東部の洪積台地上に占地する。前章でも述べたように、この台地は大間々扇状地桐原面（古期扇状地）に属し、扇状地礫層上に乗る関東ローム層によって構成される。本遺跡調査区南東と北西には湧水地に端を発する沖積低地が本遺跡の乗る低台地を挟んでいる。

周辺地形は概して、低台地とその間を樹枝状に延びる沖積低地の連続であり、本遺跡は北東から南西に緩やかに傾斜する低台地を南東から北西にかけて調査した結果となる。このような低台地はロームの残存状況が悪い傾向にあり、地表下1mほどで湧水を伴ったり、粘土化している箇所もしばしば見受けられる。さらに、ローム層自体が互層をなす場合もあり、分層調査の判断の障壁ともなる。例えば、本遺跡の南東部分であるⅢ区は、洪積台地といっても全体の様相は低地的な性格を持ち、黒色土の発達も著しかった。標高も調査区域内では最も低く、湧水も遺構内に認められた。おそらく浅い沖積低地が、南北に存在するのであろう。

反面、Ⅳ～Ⅵ区のローム層は良好な堆積を呈し、調査区の高標高部はⅤ区北隅である。調査区外の遺構も住居跡などの居住遺構などはこのⅣ・Ⅴ区に見られた緩やかな傾斜地が選ばれているものと想起されよう。ただ、Ⅵ区は台地北西部の傾斜地にあたり、ローム層も互層をなす箇所もあり、旧石器試掘時には、硬質ローム下面より湧水が認められた。

### (検出された遺構・遺物の概要)

書上本山遺跡で検出された遺構は比較的少なく、JR両毛線を隔てて調査された書上上原之城遺跡のような密集した遺構分布ではない。しかしながら、調査区Ⅲ・Ⅳ区を中心に、古墳時代から中～近世にかけての遺構が検出され、それらの遺構が希薄的な存在となるⅤ・Ⅵ区には旧石器時代と縄文時代の遺物を調査することができた。ここで、遺跡内の遺構・遺物を各時代毎に概略を説明する。

### 旧石器時代

試掘の概要はⅠ章に詳しいのでここでは省くが、Ⅴ区から2箇所の石器集中部を検出した。この他に、Ⅵ区においても石器の出土をみたがこちらは散漫な出土状況であった。いずれも石器は、Ⅵ層からⅨ層にかけての出土であり、暗色帯層中からの出土が充実していた。総計348点の出土であるが、製品類は少なくナイフ形石器が2点・台形石器が1点である。他は、大形の縦長剥片であったり剥片類が主だが、剥片接合例は19例を数えている。縦長剥片の作出を目的とする資料が多いが、大形の縦長剥片素材を石核とする手法も見受けられる。また接合資料は同一のブロック内でまとまり、このことは2箇所のブロックの時間的な差、あるいは剥片剥離作業空間の限定を示唆するものかも知れない。石材は、他遺跡の該期石材組成と同様で黒色安山岩・黒色頁岩製のものが多く、比較的入手しやすい石材に依存していた傾向が理解される。

### 縄文時代

遺跡全域から出土しているが、特にⅤ区からの縄文時代前期の遺物が集中的であった。しかし、その集中度も遺構を伴うものではなく、ソフトローム層上層の遺物包含層からの出土とされる。その中で、縄文時代前期後半に位置付けられる諸磯b式～c式に併行する東関東系の興津式が確認されたことは、当地域の地理的条件を考えるに、今後も問題点を提起することになろう。また、早期拵糸文や条痕文系土器群とともにスタンプ形石器も出土しているが、良好な分布状態ではなく、ブロックとしては把握できない。

### 弥生時代

遺構は無く遺物も皆無といってよい。しかしながら単独で磨製石鏃が出土しており、当地域の希薄な弥生時代資料のなかで注目される存在であろう。

### 古墳時代

遺跡は書上古墳群に隣接し、上武道路調査区域内でも本遺跡東に接する書上上原之城遺跡で2基の古墳が調査されている。ただし、本遺跡では古墳は存





第3図 周辺の地形

### Ⅲ章 書上本山遺跡

在せず該期の住居跡3軒が確認された。そのうちの1号住居跡は出土遺物も良好な器種組成を見せ、住居数は少ないながらも好資料を提示している。また、6号井戸もおそらく古墳時代の所産と考える。

#### 奈良・平安時代

住居跡は4号住が充てられるものと思われる。出土遺物はないが、住居平面形から判断したものである。また、9号溝からは瓦塔片が出土しており、周辺の寺院跡などの存在を示唆する。特筆すべきことは、集石遺構が検出され石製骨蔵器が出土している。集石遺構の残存は良好なものではないが、骨蔵器の存在から、墓跡として位置付けられよう。その他では21号土坑と1号住上層土坑がこの時期に比定されるものとする。

#### 中～近世

溝は7条検出されている。そのうち9号溝は屈曲する平面形を呈し、何らかの区画溝とも捉え得る。覆土の様相から中世段階と考えた。また、1・2号掘立柱建物跡も出土遺物がないが、柱穴の配置からは、おそらくこの段階ではないだろうか。

#### その他

無遺物の土坑群や小ピットは確定的な時期を充てることはできない。またその性格なども不明な要素が多すぎる。



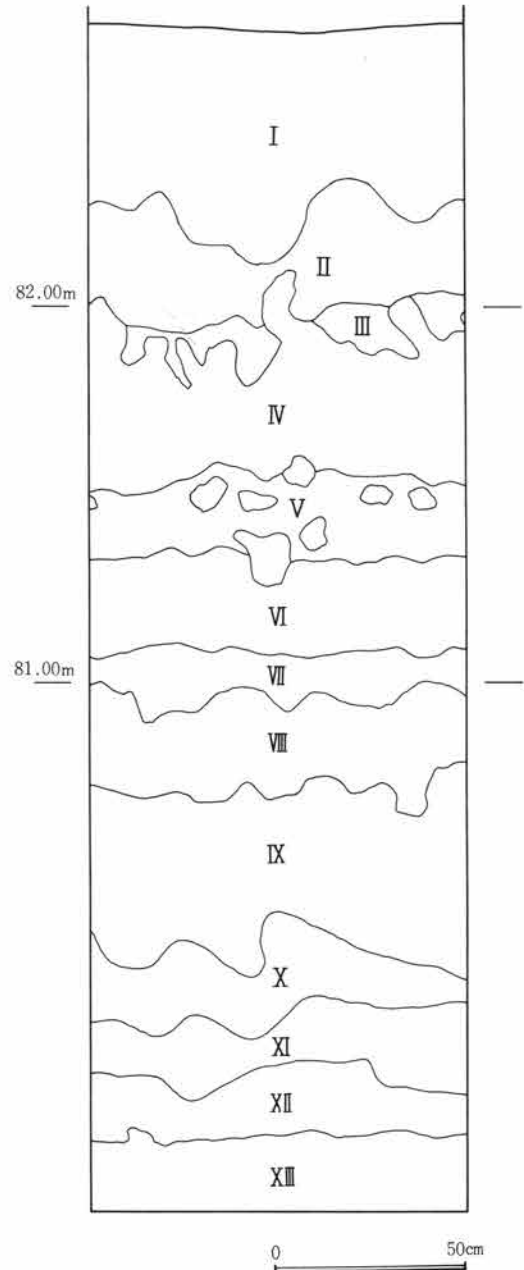
第4図 調査区全体図

第2節 土層

当地域の上武道路路線は、洪積台地と沖積低地を横断している。本遺跡はこの洪積台地に占地する遺跡であり、調査の必要性としてローム層の堆積状態を把握する作業が挙げられた。これは、旧石器時代の石器検出作業もさることながら、本遺跡に限らずあらゆる調査遺跡は調査区域内の層位を提示することによって、周辺遺跡との対比が初めて可能になるのである。つまり、旧石器時代の遺物・遺構が検出されなくとも、ローム層位を提示することは最低必要条件なのである。

上記の理由から、洪積台地に乗る本遺跡の調査も、Ⅲ～Ⅵ区の縄文時代～中世にいたる遺構調査が終了する都度、区毎に土層柱状図の記録化を加えた。その結果、Ⅲ区・Ⅳ区の東半及びⅥ区東端はロームの遺存状態が悪く、当地域の基準層位にはなり得ないものと判断した。ローム層の良好な層準を示したⅣ区西半～Ⅴ区において、本遺跡の基本土層とした。また、各地点のローム層の堆積状態を比較すると、少なくともⅤ層の板鼻褐色軽石層からは現地形とほぼ同様に平坦な堆積状態が認められた。

図示した基本土層は、Ⅴ区のものである。また、層位を示すローマ数字は、調査時の数字を充てたものであり、他の遺跡との数字の上での整合性は無い。将来的に当地域でのローマ数字上の統一が図られる可能性もあるが、本県の場合、浅間白糸台軽石や板鼻褐色軽石など、ローム層中にも各種の火山性軽石や火山灰が認められており、その鍵層を基準とした用語の使用も有効であろう。今後の課題としたい。以下、各層毎の説明をする。



第5図 基本土層

- I 表土層 地点によってはⅡ層との間に黒褐色のAs-Cを混入する層もある。
- II 褐色土層 主に縄文時代の遺物を包含する。地点・遺跡によってはⅢ層のソフトロームとの分層が困難な層であり、縄文時代の遺構確認に支障をきたす。
- III 黄褐色軟質ローム層 いわゆるソフトロームである。下面に不連続面を持つ。
- IV 黄褐色硬質ローム層 ハードロームである。As-Spを散状に含む。Ⅲ区などの低地部にいたると、層厚が薄くなり、Ⅲ層が顕著になる。
- V 板鼻褐色軽石層混土層 硬質で、As-Bpを塊状に含むため砂質の感がある。

- VI 暗褐色硬質ローム層 As-Bpを少量含む。
- VII 黄褐色軟質ローム層 粘性を帯び、橙色粒を少量含む。赤城南麓の遺跡では一般に本層の下部部分にATの極大値が認められる。
- VIII 暗色帯1 暗褐色を呈す。軟質。やや明るい。
- IX 暗色帯2 暗褐色を呈す。硬質。やや暗い。暗色帯は2層に分層されるが、色調差としまりによるものである。地点によっては、単層として確認した所もある。
- X 褐色ローム層 硬質。
- XI 褐色ローム層 硬質。八崎軽石粒を含む。
- XII 八崎軽石層 淡褐色を呈す。
- XIII 褐灰色粘土層

第3節 旧石器時代

旧石器時代の遺物は、V区・VI区より出土した。その石器の集中はV区西半に求められ、V区東半の石器は剥片2点と磨石類1点で他は自然礫であった。また、VI区は緩傾斜地のため主体的な出土が期待された箇所だったが、数点の剥片と台石1点が出土したのみであった。

V区西半の石器集中分布は2箇所を数える。出土層位はV層～IX層だが特に集中がみられたのはVI層下部からVIII層上面である。石器の集中分布を西から1号・2号ブロックと分けたが、2つの距離間は約25mを測る。調査区域内では他に石器を集中する箇所が見当たらず、本遺跡が乗る台地でどのような広がりを見せるのか判然としない部分が多いが、本遺跡の北西部のロームの状態は非常に良く、調査区域外においても同様な傾向を見せると思われる。なお、調査中は調査区域内の石器集中箇所はこの2箇所と断定し調査を進めたが、北西部への広がりなどを考慮せず試掘の割合も少く反省点を残している。

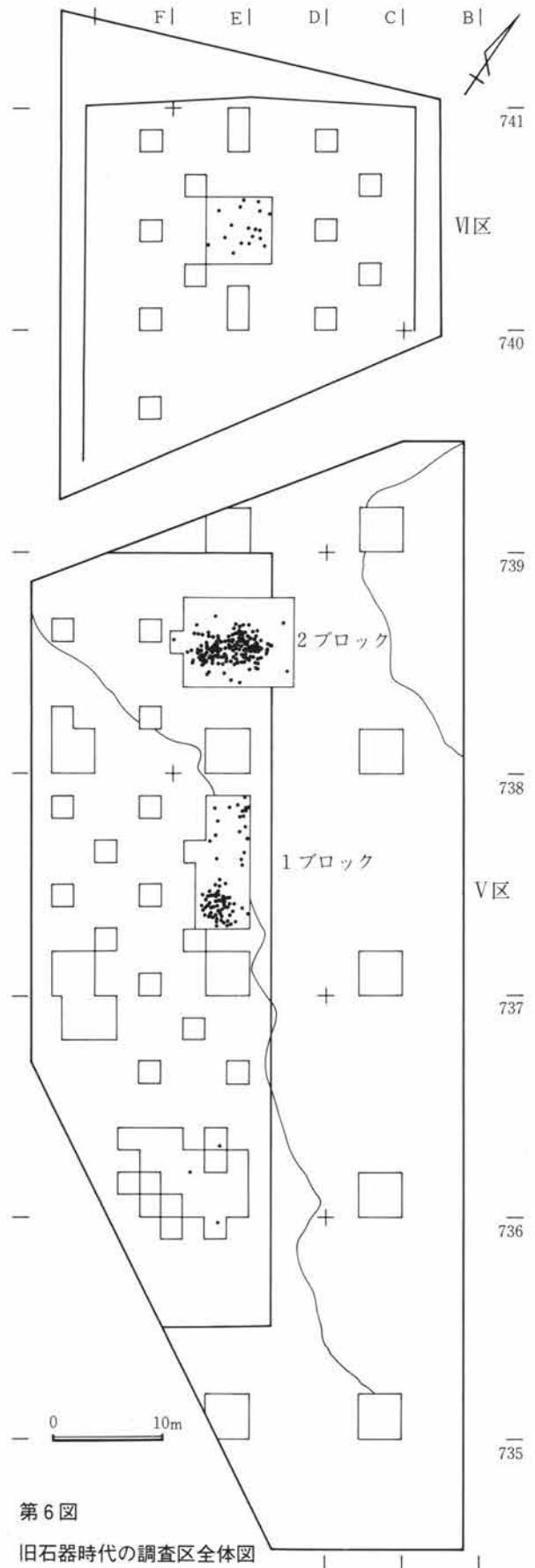
各ブロックの説明だが、V区東のブロックおよびVI区のブロックはグリッド名で代称し、中心位置を占める1・2号ブロックのみ番号を付した。

(736 EGrブロック)

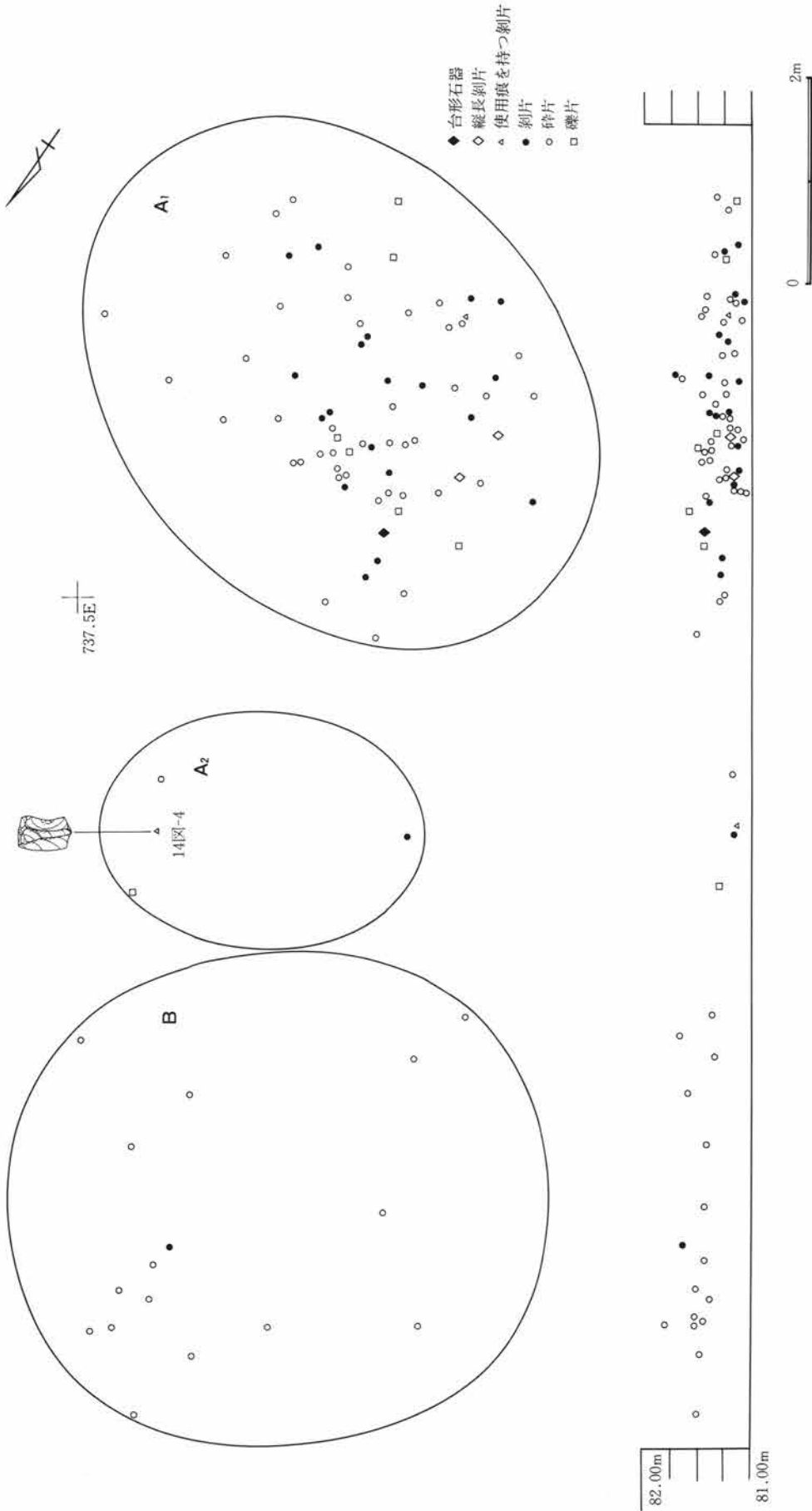
V区東のブロックである。本遺跡の調査で最初に石器が出土したグリッドである。碎片の一つがV層上層より出土が認められ、ただちに拡張調査を施した箇所であるが、出土は希薄で、碎片2・小形の磨石類1・その他礫片を確認したのみである。出土層は磨石類がIX層上層で出土し、他はV層からVIII層にかけて散発状態で検出された。

(740.5 EGrブロック)

VI区傾斜部分のブロックである。地形傾斜のためか、層序が区分しづらく、また、出土石器も想像以上に希薄だったブロックである。出土石器は粗粒安山岩製の台石1を中心に数点の剥片・碎片・他は自然礫片であった。出土層位も台石がIX層相当の粘質土から出土し、その他はVIII層相当のやや砂質の褐色ローム下面からであった。



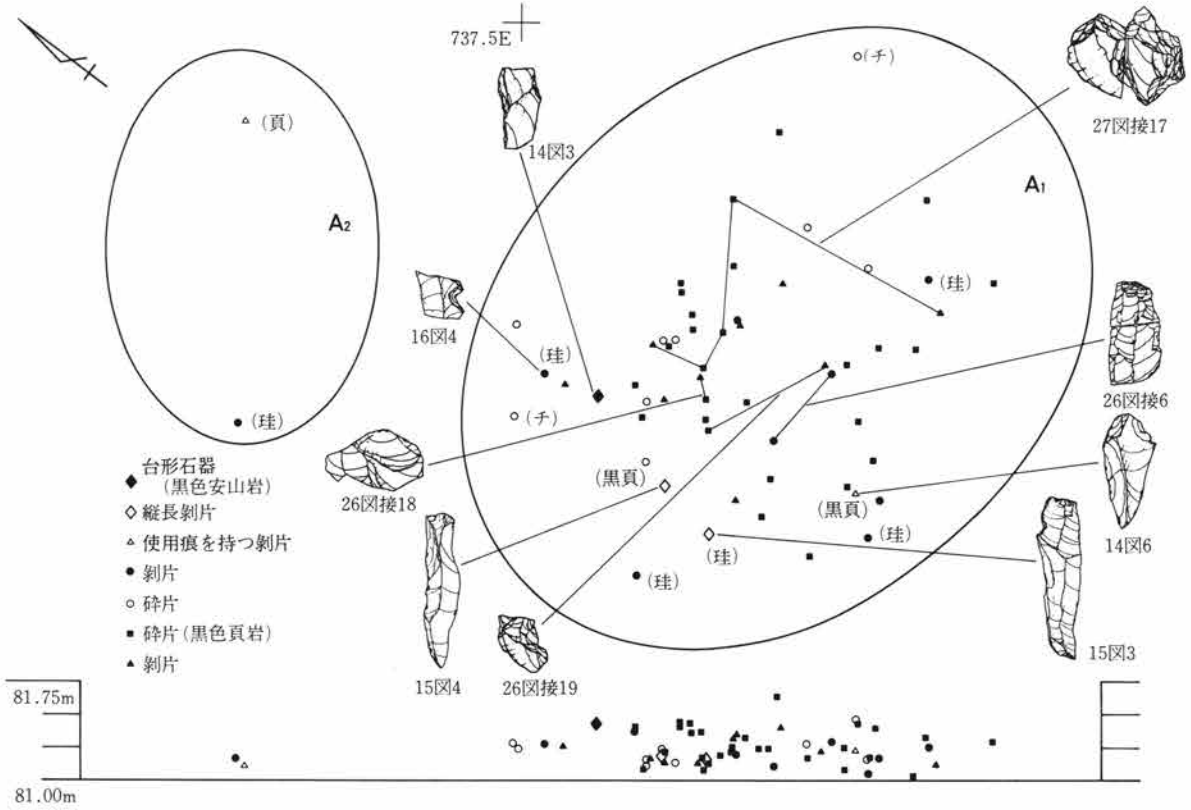
第6図  
旧石器時代の調査区全体図



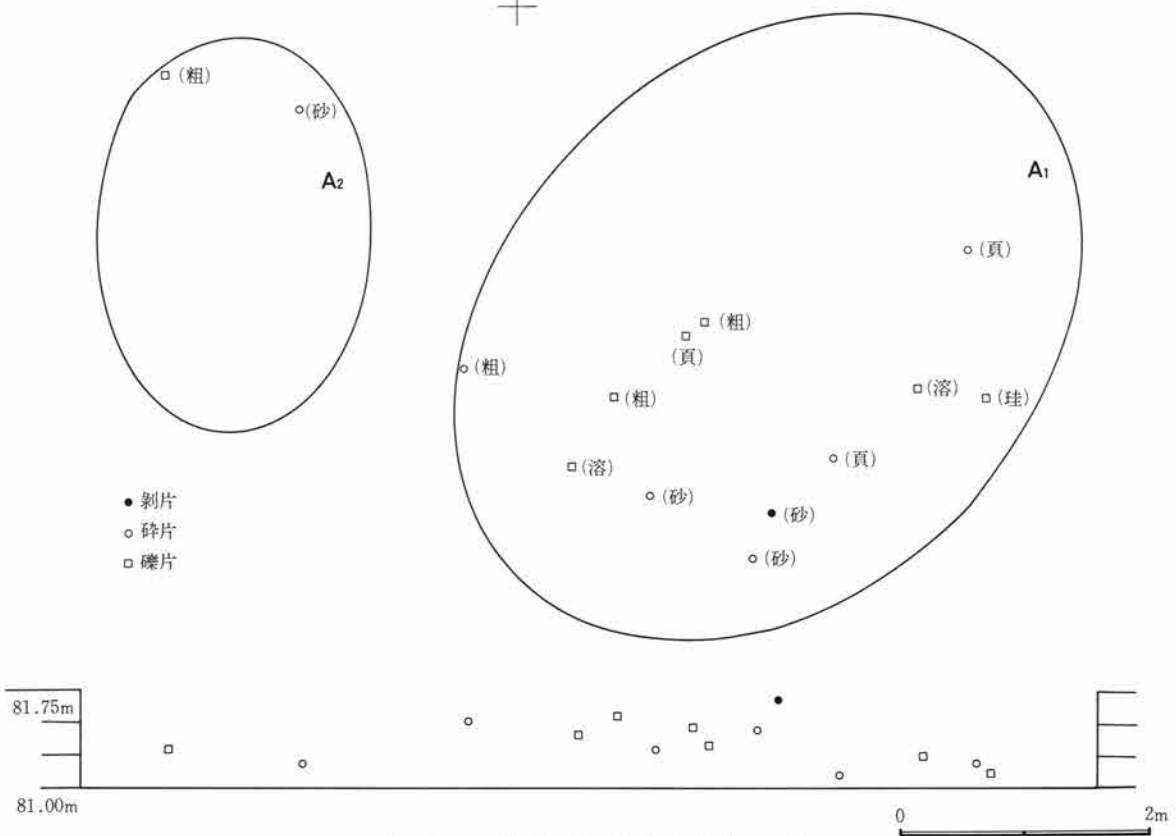
第7図 石器の分布(1号ブロック)

III章 書上本山遺跡

黒色頁岩・黒色安山岩・頁岩・チャート・珪質頁岩

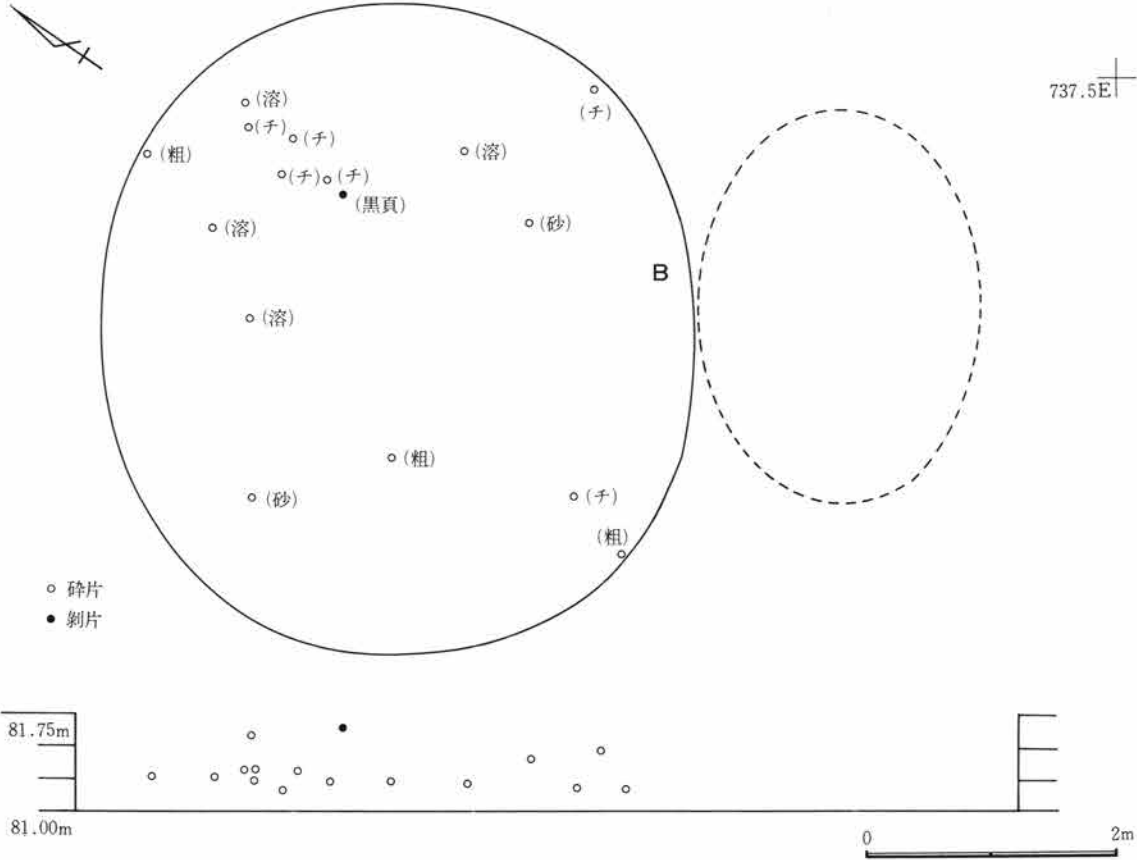


頁岩・粗粒安山岩・溶結凝灰岩・珪質変質岩・砂岩



第8図 石材別石器の分布(1号ブロック)

黒色頁岩・チャート・溶結凝灰岩・粗粒安山岩・砂岩



第9図 石材別石器の分布(1号ブロック)

(1号ブロック)

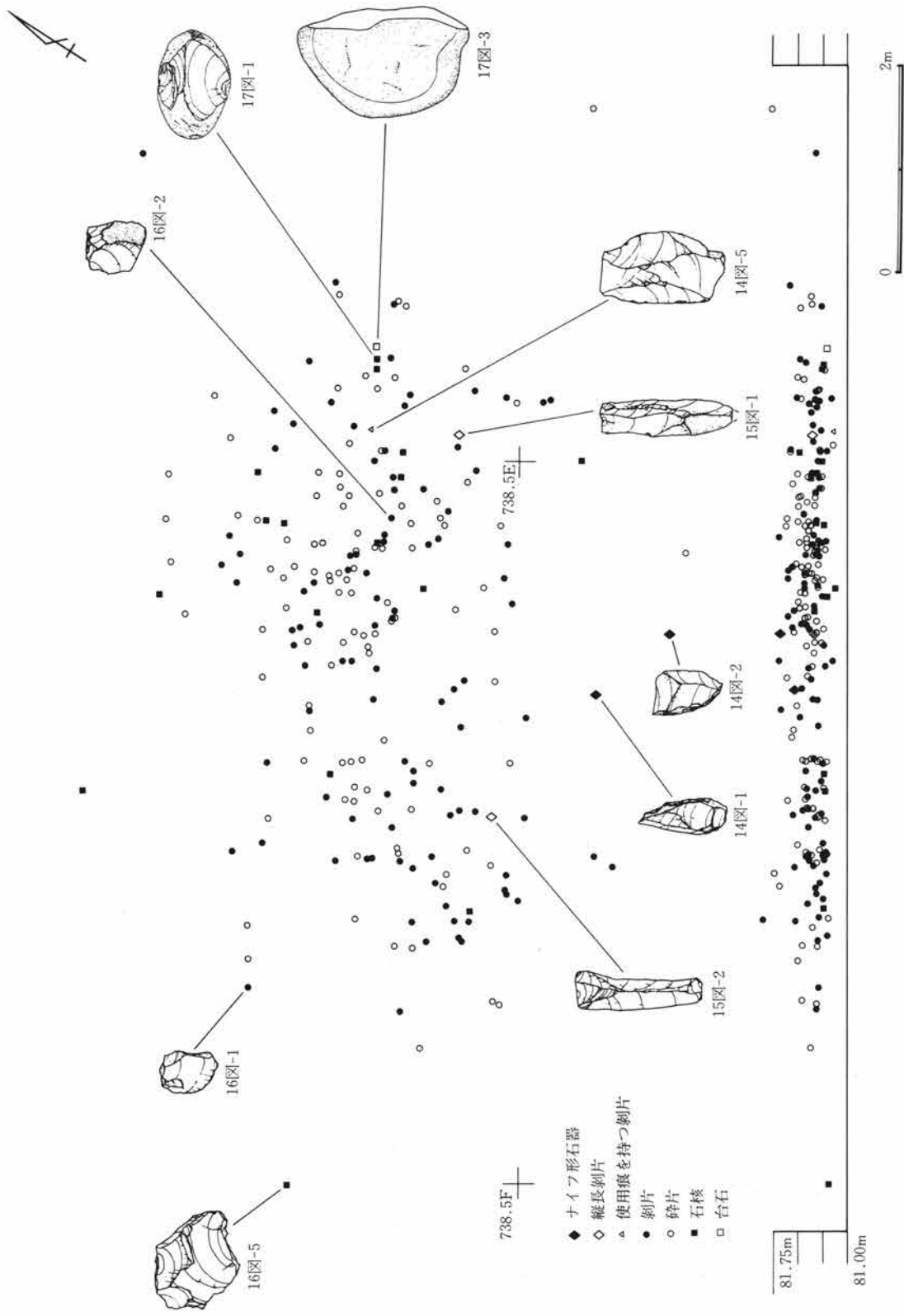
V区の中央やや西寄りで検出された。南側に緩やかに傾斜する台地の平坦部分にあたる。ブロックは2つのグループに分別される。東側の総数73点の剥片・碎片が集中した一群(A)と西側の碎片で構成されるもの(B)である。Bの東に接して小形のグループを把握したが、出土石器の内容からAに帰属させ、前述の剥片で構成される一群をA<sub>1</sub>、小形のまとまりの一群をA<sub>2</sub>とした。

A<sub>1</sub>は約5.5×4.3mの規模で楕円形を呈し、長軸を東西に持つ。良好な石器集中分布を見せる。出土石器は総計73点で、その内容は台形石器1・使用痕を持つ剥片石器1・大形縦長剥片2などである。また、接合資料4個(6・17・18・19)を確認している。出土層位は、V層下面から小形の剥片が認められ、台形石器はVI層から出土している。しかし、大

形縦長剥片や接合資料の剥片の多くはVII・VIII層中で安定的に集中している。

A<sub>2</sub>はA<sub>1</sub>の西約1mに位置し、4点の石器が出土している。内訳は、使用痕を持つ剥片1と剥片・碎片である。後述するBブロックと距離的には近いがBブロックは出土層位も高く、碎片で構成されていることから、A<sub>2</sub>は出土層位・石器の内容からA<sub>1</sub>に近縁性を持つものと判断した。接合資料は認められていない。

Bは、総計16点の碎片・剥片が主な組成である。図示できなかったが、礫片も多く出土している。出土層位はV層下面からVIII層上面で集中性に欠け、散發状態ともいえる出土であった。接合資料は無い。



第10図 器種別分布図(2号ブロック)

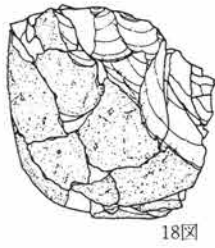




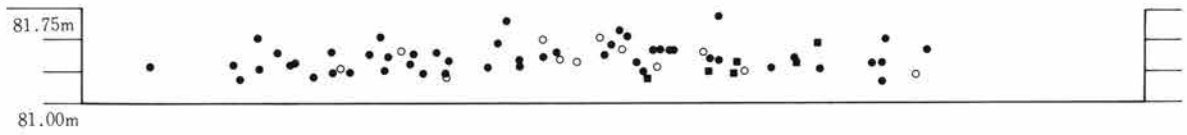
第111図 石材別分布図(2号ブロック)

Ⅲ章 書上本山遺跡

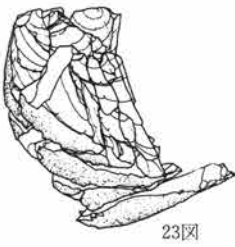
接合資料-1  
(黑色安山岩)



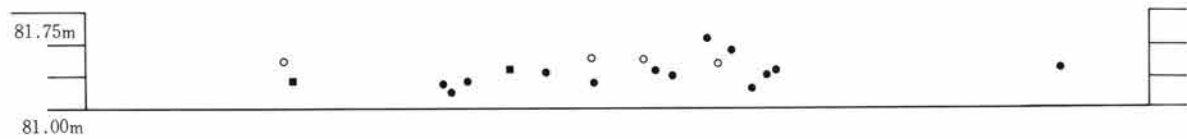
- 石核
- 剥片
- 碎片



接合資料-3  
(黑色安山岩)

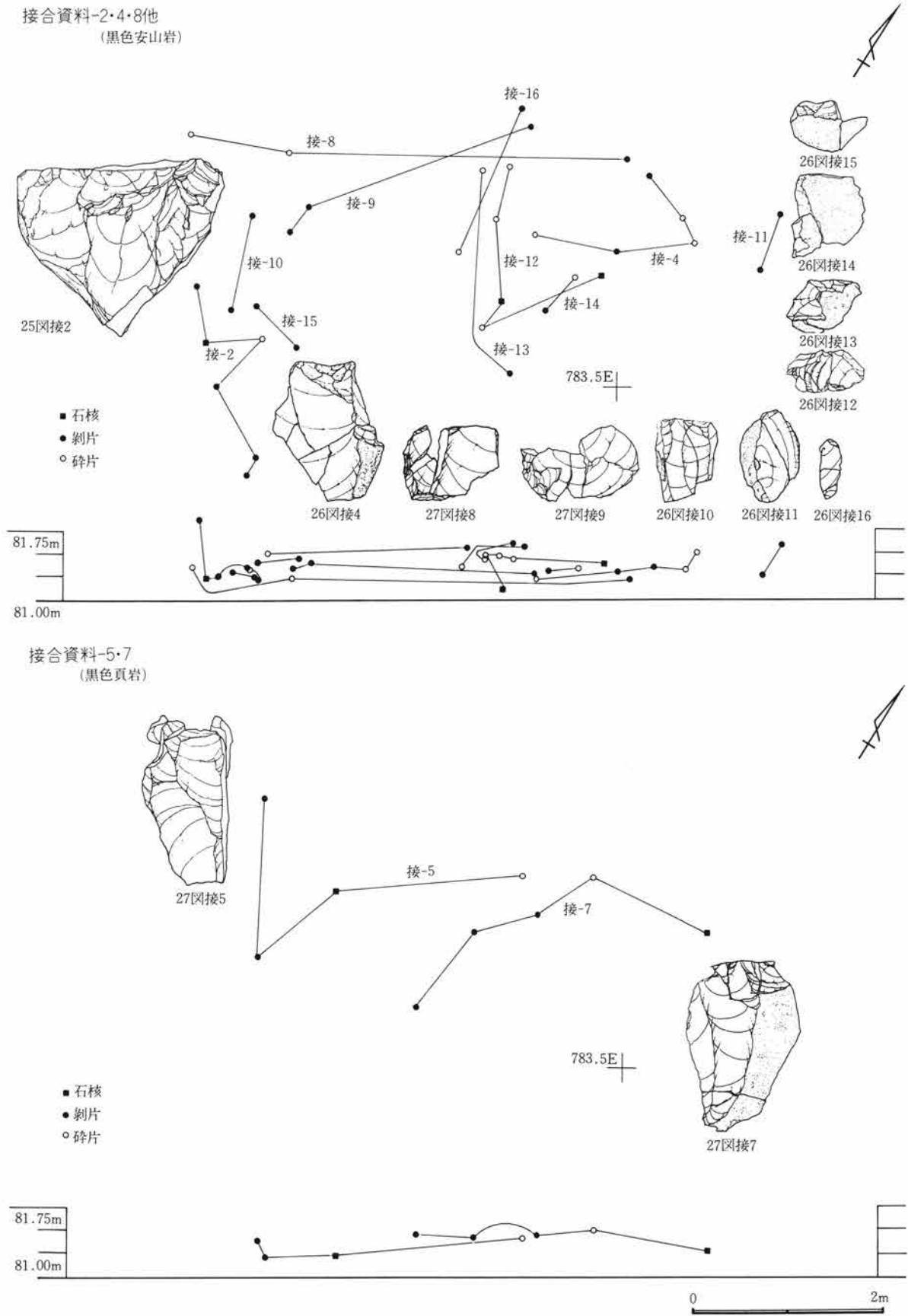


- 石核
- 剥片
- 碎片



0 2m

第12図 接合資料(1・2)の分布



第13図 接合資料(2・4・5他)の分布

(2号ブロック)

V区西側に位置し、南と西側へ傾斜する台地変換部分の平坦部で検出した。前述の1号ブロックA<sub>1</sub>との中心間距離は約25mを測り、ある程度の距離を保っている。このことは両ブロックの独立性をも意味するのかもしれない。規模は約8.0×6.0mの楕円形を呈し、長軸を北東に持つ。石器の集中も良好で、総計224点の出土量を誇る。出土層位はA<sub>1</sub>と同様でV層からIX層にかけて出土し、特にⅧ層には石核などが目立ち、本ブロックの安定的な層位はⅧ・Ⅷ層と考えられよう。石器集中分布状態を概観すると、本ブロック内の南西よりに僅かではあるが空白部が存在する。整理作業当初はこの空白部を分割軸として、本ブロックを2～3分割する案も考えたが、接合資料の在り方などからは、2分割する根拠は少ないため本報告ではまとめて一つのブロックと捉えた。

出土石器の内訳は、剥片・碎片を主な石器組成とし、ナイフ形石器2・使用痕を持つ剥片1・大形縦長剥片2・石核3および接合資料15個を数える。接合資料の中には石核を十数点含み、このことから本ブロックにおける積極的な石器製作意識が看取される。接合資料は2例を除き、すべて黒色安山岩製で本ブロックの主要石材構成といえよう。母岩別の個別資料化を図ったが、非常に風化の著名な石材のため断定はできなかった。他の2例の接合資料は黒色頁岩である。該期遺跡においても黒色安山岩の次に安定的に使用される石材であり、本遺跡でもその傾向が把握できる。

石核の出土はブロックの中心から、北東側に集中する。接合資料もこの石核を中心に見られ、おそらく本ブロック内の製作は中心より北東側にやや離れた位置にあるのではないだろうか。

さらに、ナイフ形石器はブロック南側で距離を置き、比較的上層のV層下位～Ⅶ層より出土している。大形縦長剥片もブロックの中心からやや外れた位置で出土している。製品類やそれに付随する剥片などは、位置を変えて製作されたかもしれない。

(出土石器)

ナイフ形石器 (第14図1・2)

1は、縦長剥片を素材に用いる。右側縁の下端部に未加工部分を残すほか、二側縁に加工を施す。表面には礫面を一部に残す。黒色頁岩製。剥片の打面部は加工により除去される。2は、やや幅広の剥片を素材に用いる。調整加工は左側縁に施され、右側縁には微細な歯こぼれが見られる。なお、右側縁下端部には調整加工部分を打面に槌状剥離を施している。黒色頁岩。

台形石器 (第14図3)

台形石器と捉えた。幅広の剥片を素材に、打面側および剥片端部の一部に調整加工を施し石器を作出している。石器基部には折れ面がみられる。黒色頁岩。

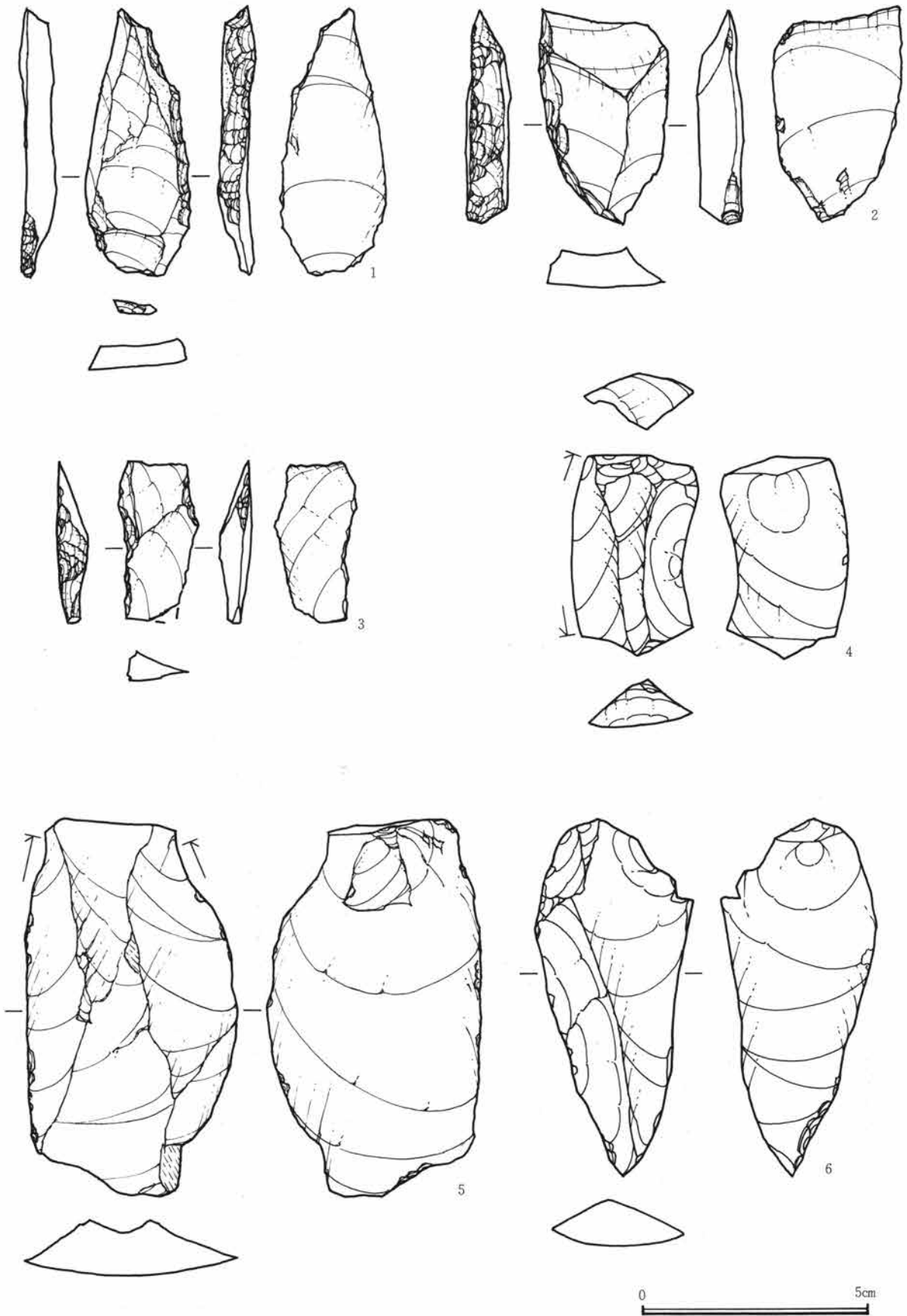
使用痕を持つ剥片石器 (第14図4～6)

4は黒色頁岩製の縦長剥片を素材とする。左側縁に微細な歯こぼれが認められる。先端部を欠損する。5は、幅広の縦長剥片を素材とし、両側縁および剥片端部に歯こぼれが認められる。黒色頁岩製。6は1号ブロック内で地点を同じにして2点に割れて出土している。薄手の縦長剥片を素材として、剥片形状は緩やかに湾曲し、端部が先鋭に尖る。使用痕は両側縁に歯こぼれが認められる。器表面は風化が著しい。

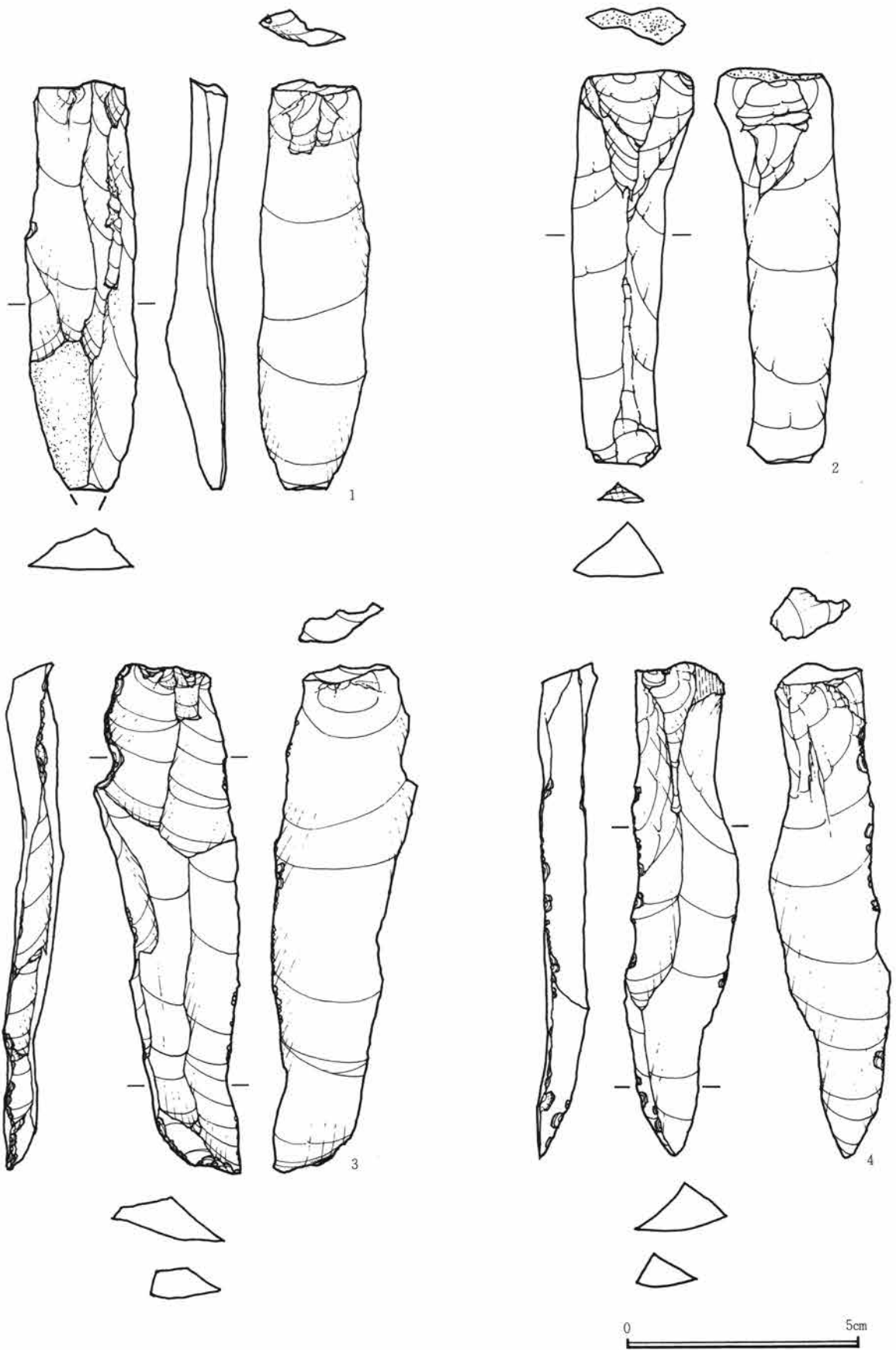
大形縦長剥片 (第15図)

本遺跡で特徴的に出土した石器に、大形縦長剥片の存在がある。いずれも全体的に細身で、石材も頁岩製が目立つ。

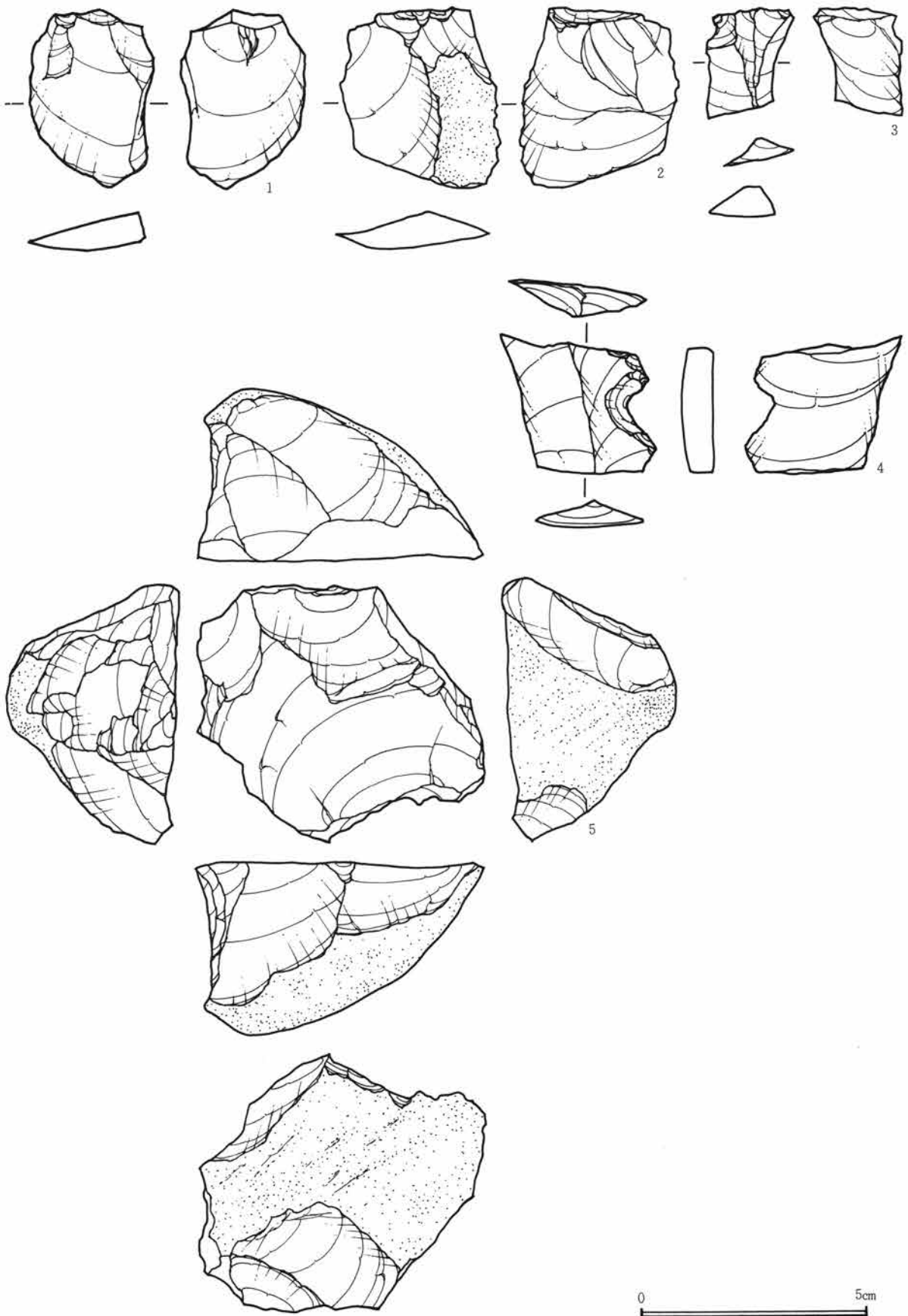
1は、黒色頁岩製の細身の剥片である。若干外湾する両側縁に僅かな歯こぼれは認められるが顕著ではない。表面の左側縁に礫面を残す。先端部欠損。2も黒色頁岩製で細身で直線的な側縁を呈する。裏面の打瘤も削除され平坦である。打面の平坦面は礫面である。黒色頁岩製だが素材自体が軟質で風化が著しいため使用痕などの特定はできない。3は、珪質頁岩製で湾曲する側縁を持ち、断面形も捩れる。両側縁と剥片端部に使用痕が認められ、右側縁の痕



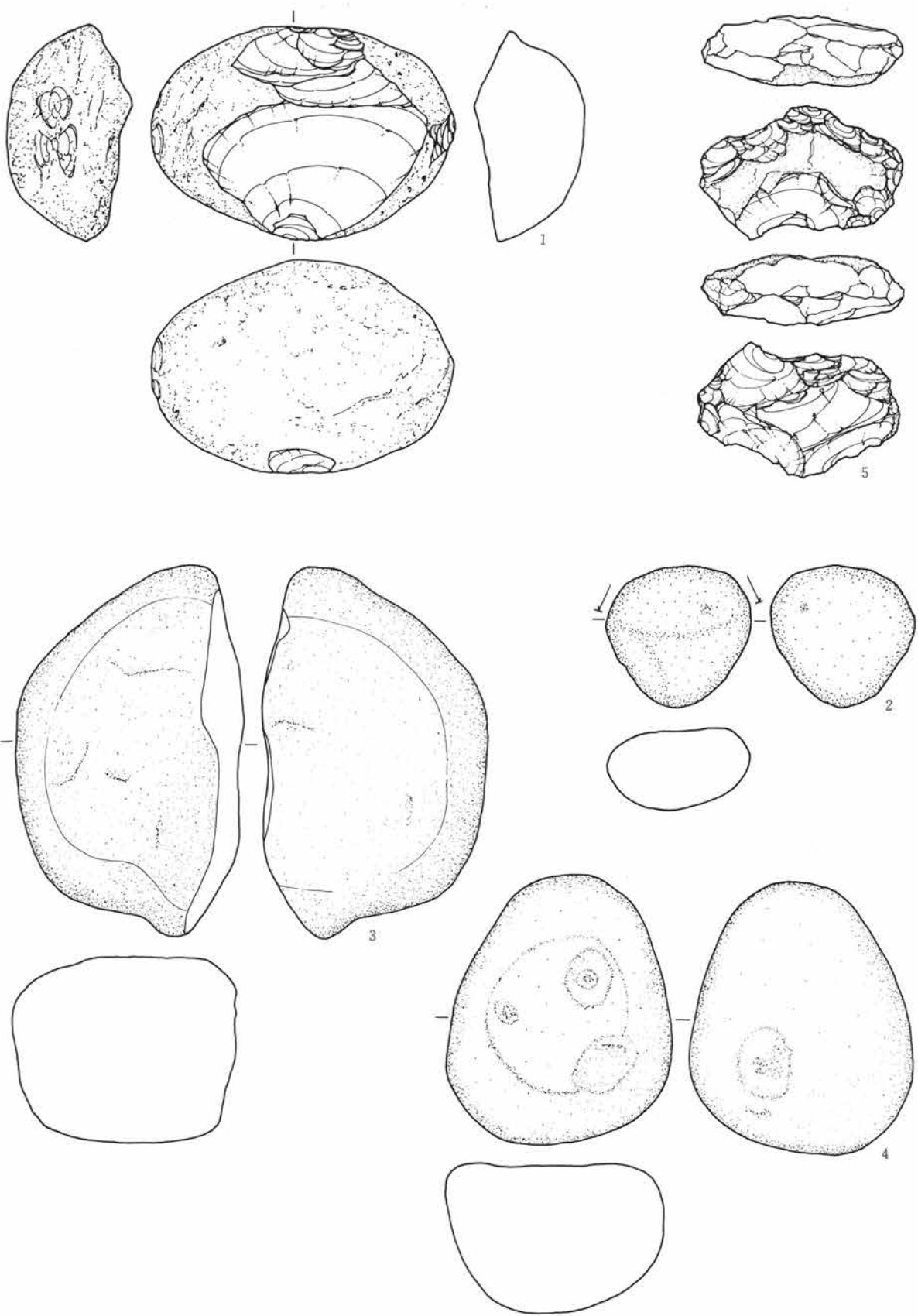
第14図 出土石器(1)



第15図 出土石器(2)



第16図 出土石器(3)



0 (1・2・5) 10cm  
 0 (3・4) 20cm

第17図 出土石器(4)



跡が顕著である。表面剥片基部を薄く削除し、僅かな調整を施すが意図は不明である。光沢をもった器面である。4は黒色頁岩製である。細身の素材で、湾曲する側縁に使用痕が認められるが、左側縁に顕著である。剥片端部は尖り先鋭である。

#### 剥片類 (第16図1～4)

1～4は接合され得なかった剥片のうち、剥片形状などが特定できるものを集めた。1・2は黒色安山岩製で小形の縦長剥片である。2は端部を欠損する。3は黒色頁岩製の小形縦長剥片。1号Bブロック737.5EGr出土。4は縦長剥片の基部、端部を大きく欠損するが側縁に加工が施される。ただ、目的性を持った加工とは捉え難く、剥片の部類とした。

#### 石核 (第16図5、第17図1・5)

ここでは、接合資料を除く石核を集めた。第16図5は拳大状の黒色安山岩製の円礫を素材に打面を他方向に転移して剥片剥離を行う。打面調整や頭部調整は及んではおらず、裏面から側面にかけて礫面を残す。第17図1は頁岩製の楕円状の円礫を、相対する2方向から剥片剥離を行う。礫面を大きく残す。横長剥片を作出したのであろう。ただし、この円礫の端部には敲打痕が認められ敲石としての用途も加味しなければならないだろう。第17図5は、他方向からの剥片剥離を頻繁に行ったものである。

#### 磨石類 (第17図2)

1点のみ出土。1・2号ブロック出土ではなく、736EGr出土。小型で礫面全面に光沢を持った磨滅痕が認められるが、図上半に顕著である。溶結凝灰岩製だが、県内産ではなく奥日光周辺所産であろう。

#### 台石 (第17図3・4)

3は2号ブロック出土。溶結凝灰岩製。半欠状態だが、欠損部分も磨滅している。表裏両面とも平坦で光沢状の磨滅痕が認められる。作業面として捉えられよう。4はVI区740.5EGr出土。2号ブロックからは36mの距離を保つ。大型の粗粒安山岩を素材とする。表面に作業面として平坦面を持つが、表裏に僅かな凹みを持つ。

#### (接合資料)

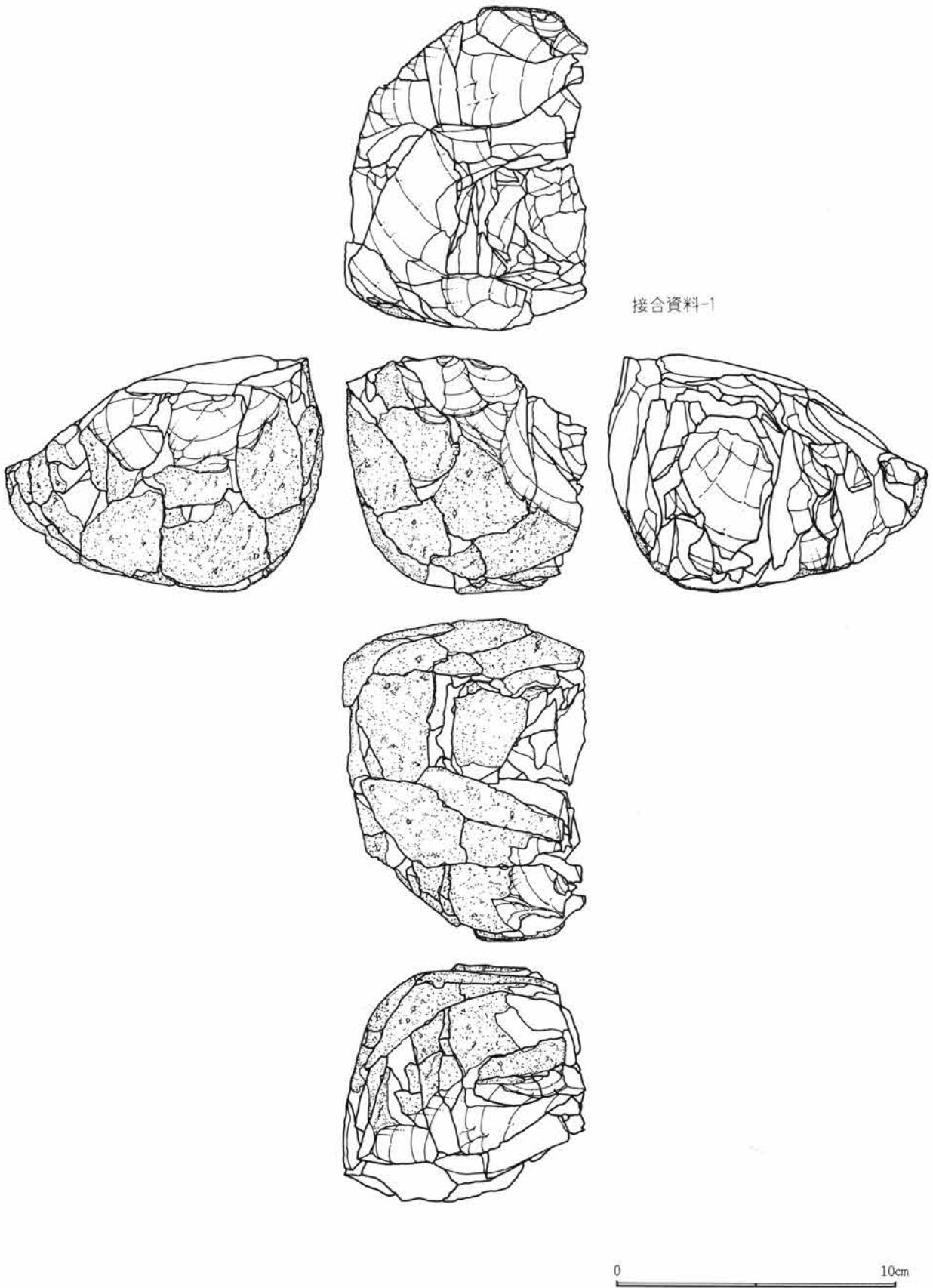
石器の接合作業により、19例の接合資料を得ることができた。ほとんどが黒色安山岩製で、良好な接合状況を見せる。

#### 接合資料-1 (第18～22図)

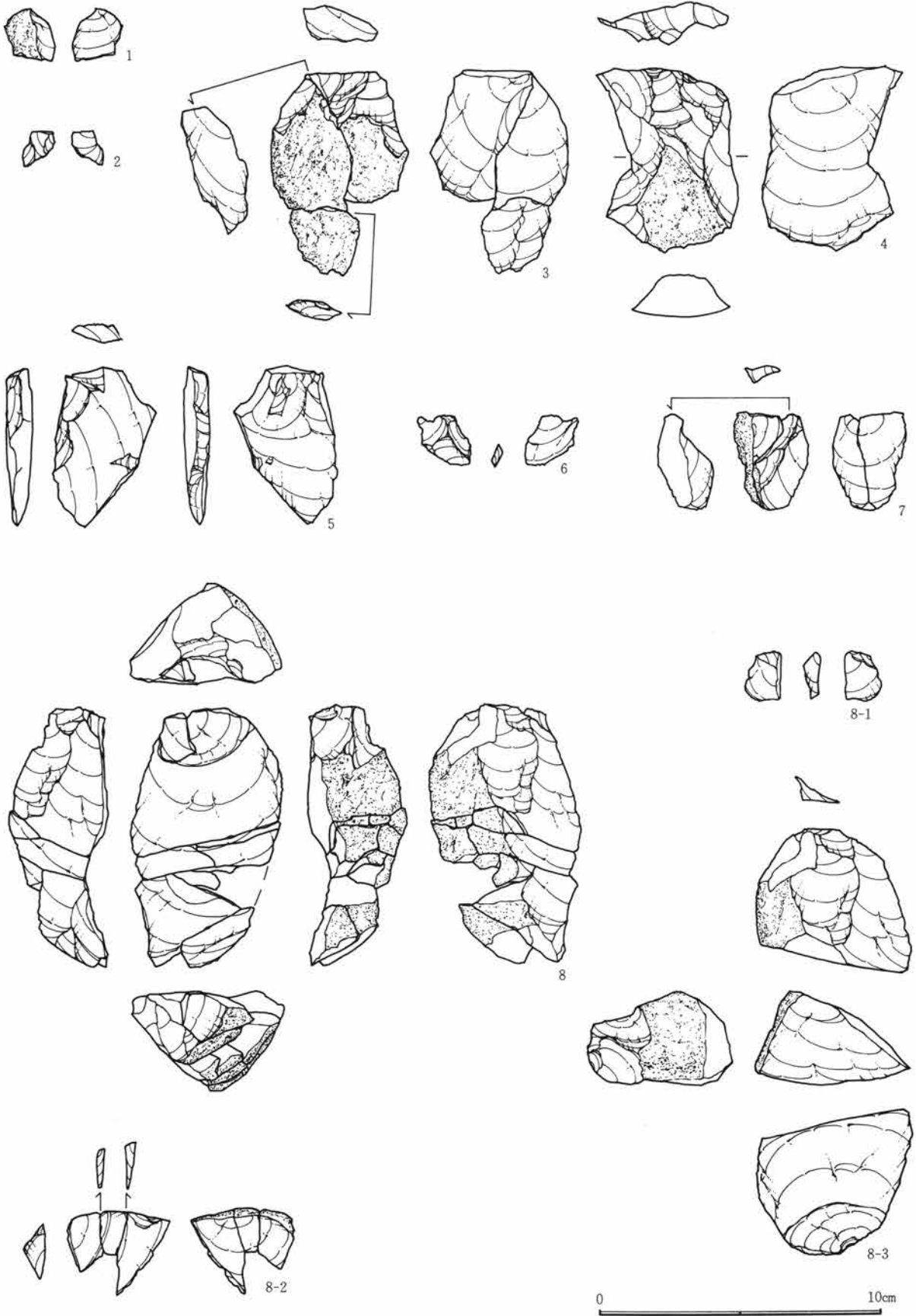
1→2→3→4→5 / 6→7→8→9→10→11  
→12→13→14→15→16 / 17→18 /  
19→20→21→22→23→24→25→26 / 27→28  
/ 29→30→31→32→33→34→35

出土位置を確認した68点の剥片・碎片、石核が接合している。接合状態で上面と側面の2ヶ所に分割面が見られ、原石の1/4程度の分割礫を石核素材に用いている。剥片剥離の在り方は前半と後半で異なる。剥離の前半では打面と作業面を交互に入れ換え剥離を行うタイプと、作業面を一に打面のみ移動して剥片剥離するタイプが、また、剥離の後半では頻繁な打面転移を行い剥離が進み、最終的には同一の打面から連続して小形の横長剥片を剥離して剥離作業を終えている。打点は稜上を選択する傾向が強く、縦長剥片を意識して剥離している。打面調整や頭部調整は殆ど見られない。

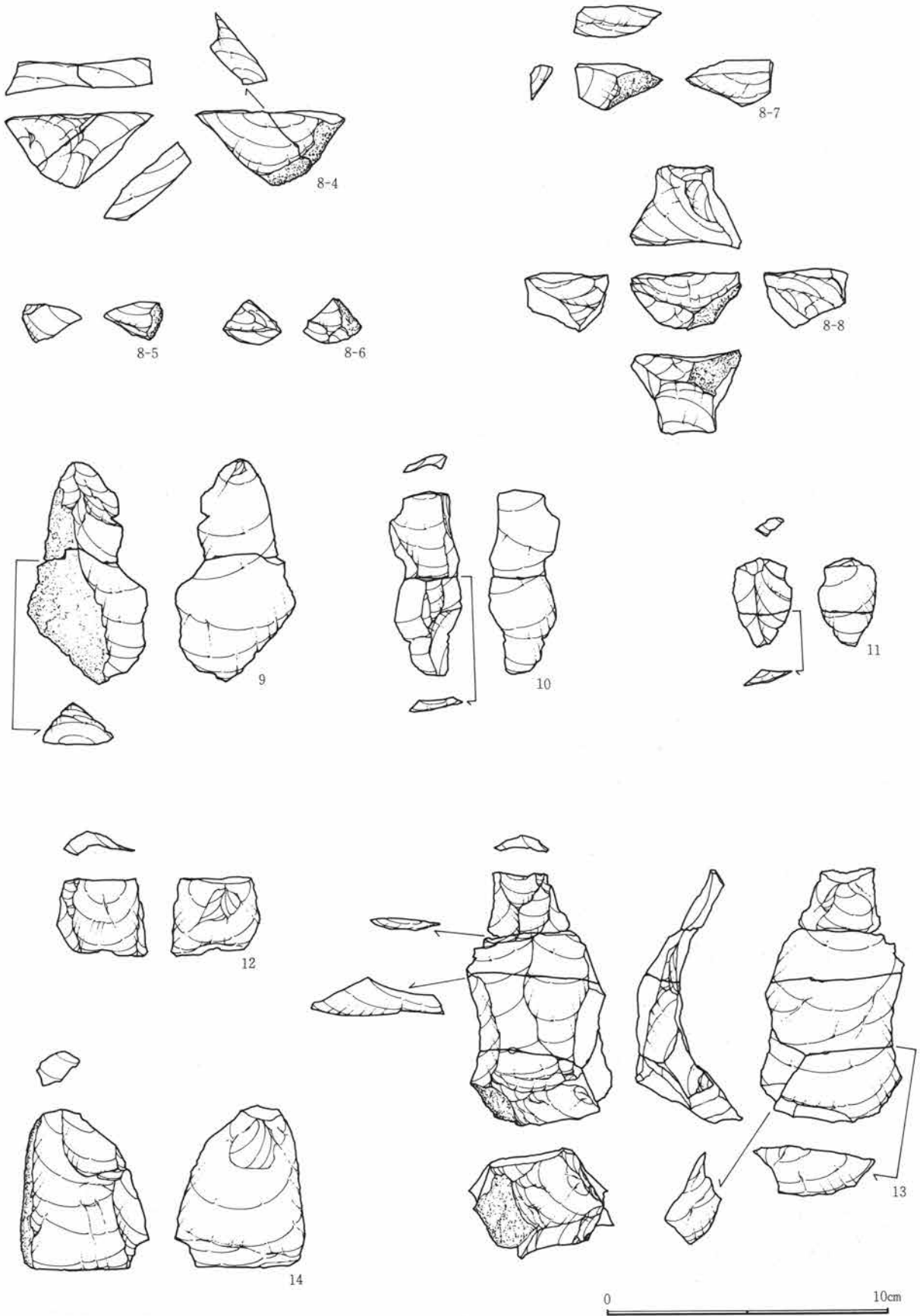
まず、剥離は上面の平坦打面から1～4の剥片や碎片を連続剥離することから始まる。剥片剥離は打点を左右に振り、表皮の除去が目的とも見える。3は剥離段階で三分している。5は打面転移の後に剥離され、1～4の剥片作業面を打面に入れ換えている。6～15の剥片剥離は連続するものだが、1～4や5の剥離とは全く反対の部分で展開している。概ね、剥離は打点を左右に振り後退していく。6～15の剥離の中で生じた厚手の剥片(8)は二分した後石核へ転用され、両端から小形の横長剥片を剥離している。また、14・15は剥片端部に剥離段階でヒンジが生じている。17・18の剥離は不明だが、17は16の剥離に伴い不規則に弾け飛んでいる可能性が強い。



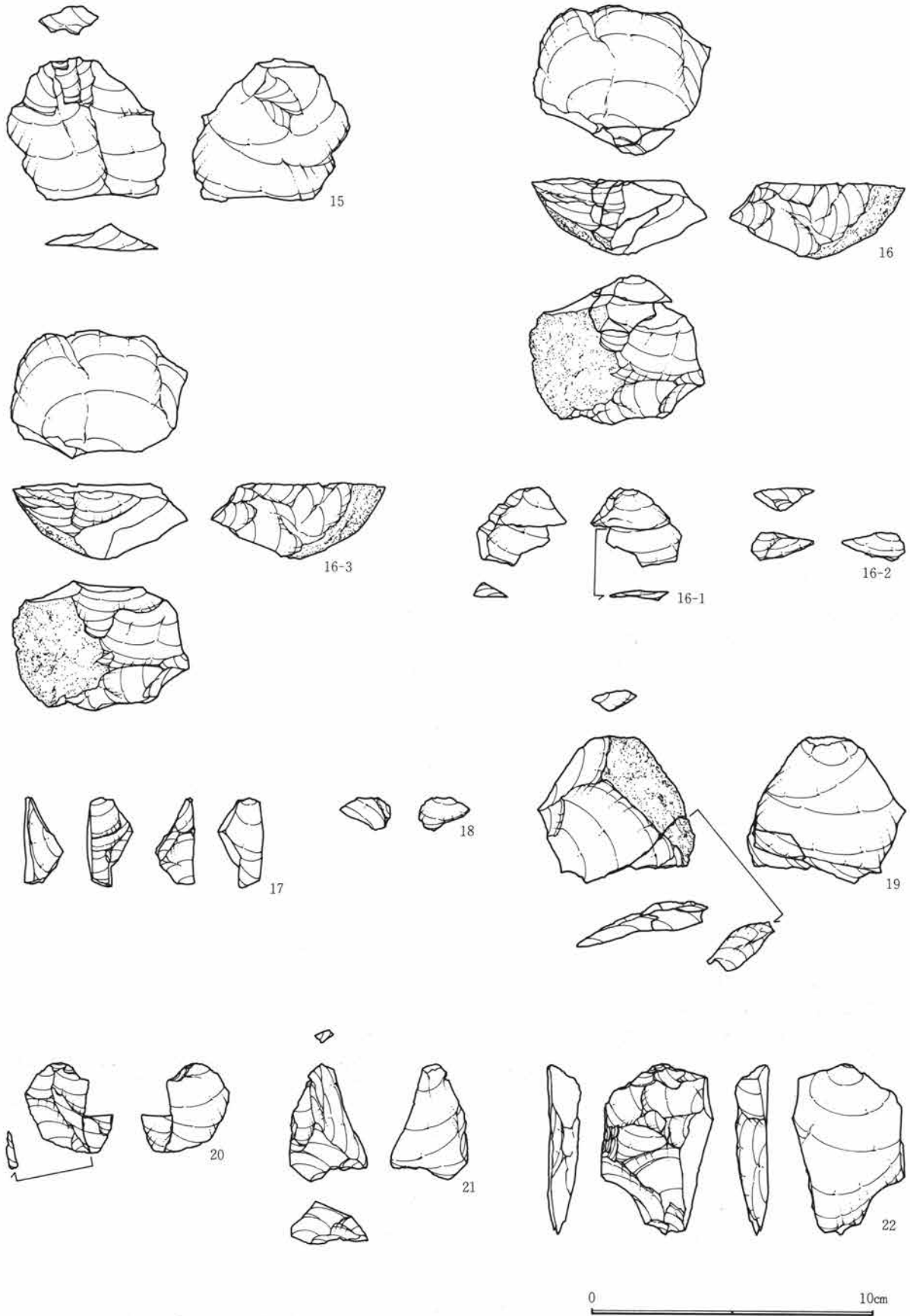
第18図 接合資料-1(1)



第19図 接合資料-1(2)

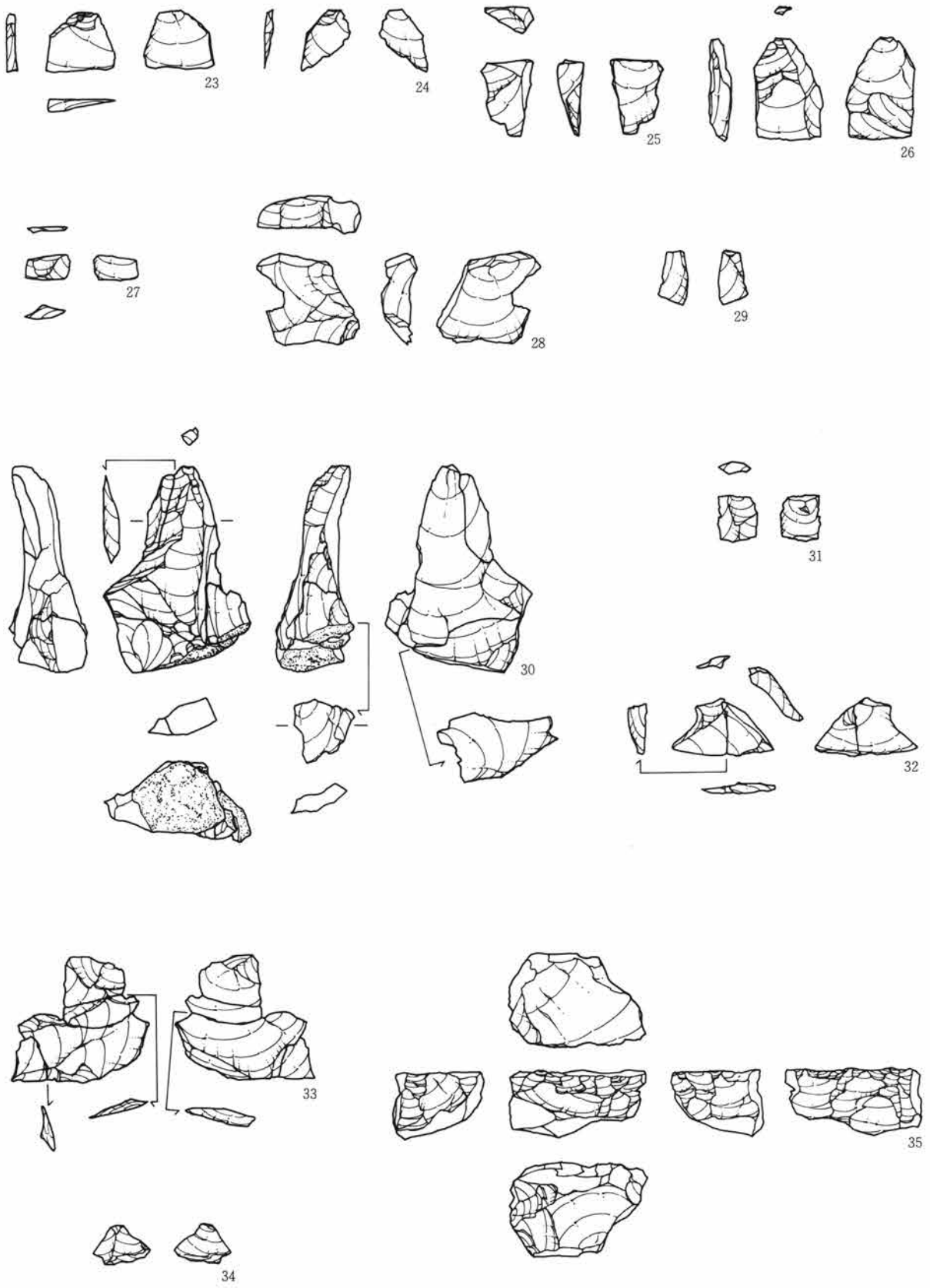


第20図 接合資料-1(3)



第21図 接合資料-1(4)

III章 書上本山遺跡



第22図 接合資料-1(5)

19の剥片は右側面の分割面から剥離され、再び剥離は初期（1～4の剥離）の剥離部分に戻る。以後の剥離は石核自体が小さくなるため、頻りに打面を転移して、剥離が進む。20は19と作業面を共有しており、打面のみ移動して剥片を剥離する例である。21は20の作業面を打面に入れ換え剥離するタイプで、22は作業面を共有するタイプであり、それぞれ90°の打面転移を伴う。22～26の剥離は、同一打面から連続剥離され、打点を左右に振り剥離が進む。以上の剥離で石核は柱状に近い形状を呈する。27・28は柱状を呈する石核の短軸で、29・30は石核の長軸で剥離され、31～34の剥離は再び石核の短軸で剥離が展開する。なお、30は石核に転用され、この部分で小形の横長剥片の剥離を試みている。

#### 接合資料—3（第23・24図）

1 → 2 → 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → 8 /  
9 → ○ → 10 → 11

出土位置を確認した19点の剥片・碎片が接合している。剥離は表皮に近い部分で展開しており、剥離初期の状態を良く示している。接合資料—1と同様に、上面と側面の2ヶ所には広い平坦面が見られ、原石の1/4程度の分割礫を石核素材に用い、剥離が展開している。剥片剥離は90°の打面転移を行い展開しており、剥離は同一打面から縦長剥片を連続剥離する傾向を示している。打面調整や頭部調整は見られず、全般に縦長の剥片を志向する傾向が指摘されよう。接合資料には大形剥片を石核に転じる例が存在している。

まず、剥離は上面の平坦打面より1～5の剥片を連続剥離することから始まる。剥離作業は打点を左右に振り後退する。打点は石核の中心に向かうよう後退しており、確実に目的剥片を意識している。やや大形の剥片（4）は、打面部分で小形の横長剥片が交互剥離され、石核に転用している。以上の剥離の後に、90°の打面転移を行い、1～4の作業面を

打面に転じ、5～8の剥片を剥離している。9より以後の剥離は、これより以前の剥離とは全く反対の部分で展開する。9と10・11の剥片形状から考えて、著しい石核高の差が想定され、9の剥離以後には90°の打面転移を伴う剥片剥離作業が想定されよう。この間の剥離が別の地点で展開したのか、遺跡の外に資料を持ち出しているのか不明だが、出土資料の中には接合資料と同一母岩は見られないこと、また、量的にもこの間を埋める資料は見られないことの2点は指摘できよう。

#### 接合資料—2（第25図）

石核の裏面に5点の資料が接合している。1～3の資料は打点が明瞭ではない。通常の剥離に比べ、打点も鋭角で、特に3の剥片には同心円状のリングが見られ、意識的な剥離とは思われない。自然現象に基づく剥落と考えている。1・2は打撃の痕跡が遺存するとも思える状態を呈する一方、剥離面が不明瞭であり、そのため現状では3と同様に剥落と考えている。剥片剥離作業は右側面の上端、石核正面、右側面の下端の順で進み、先端の尖る縦長剥片を剥離している。石核形状、及び、想定可能な作出剥片の形状からみて、「磯山技法」に類似する剥離手法を採る、と言える。

#### 接合資料—10（第26図）

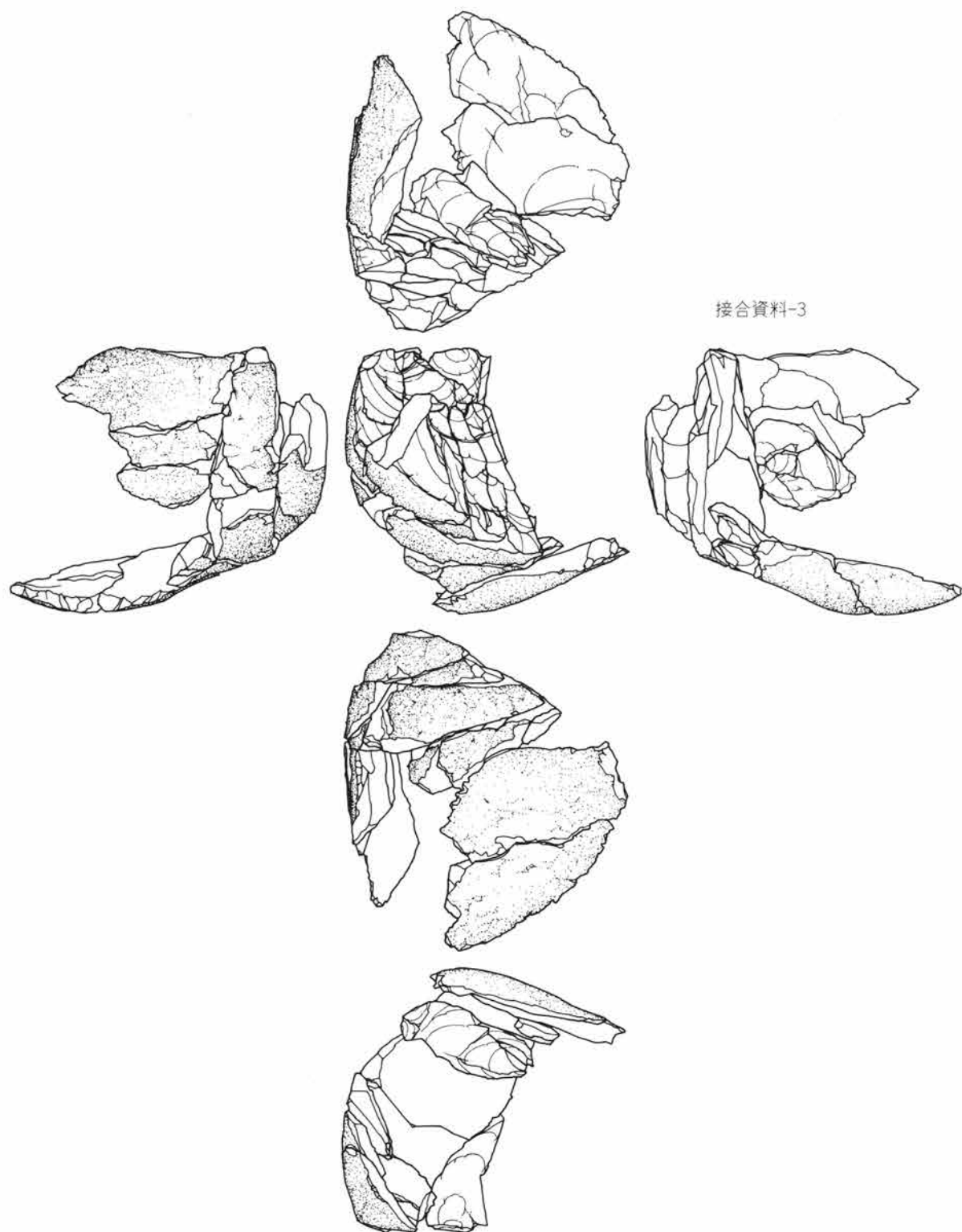
2点の資料が接合している。小形の縦長剥片と不定形剥片の接合例である。両者とも一定方向の打撃による作出ではあるが、目的性などは不明である。

#### 接合資料—12（第26図）

5点の碎片の接合例である。頭部に微細な剥離が認められる。

#### 接合資料—19（第26図）

2点の資料が接合する。薄手の小縦長剥片と碎片の接合例である。

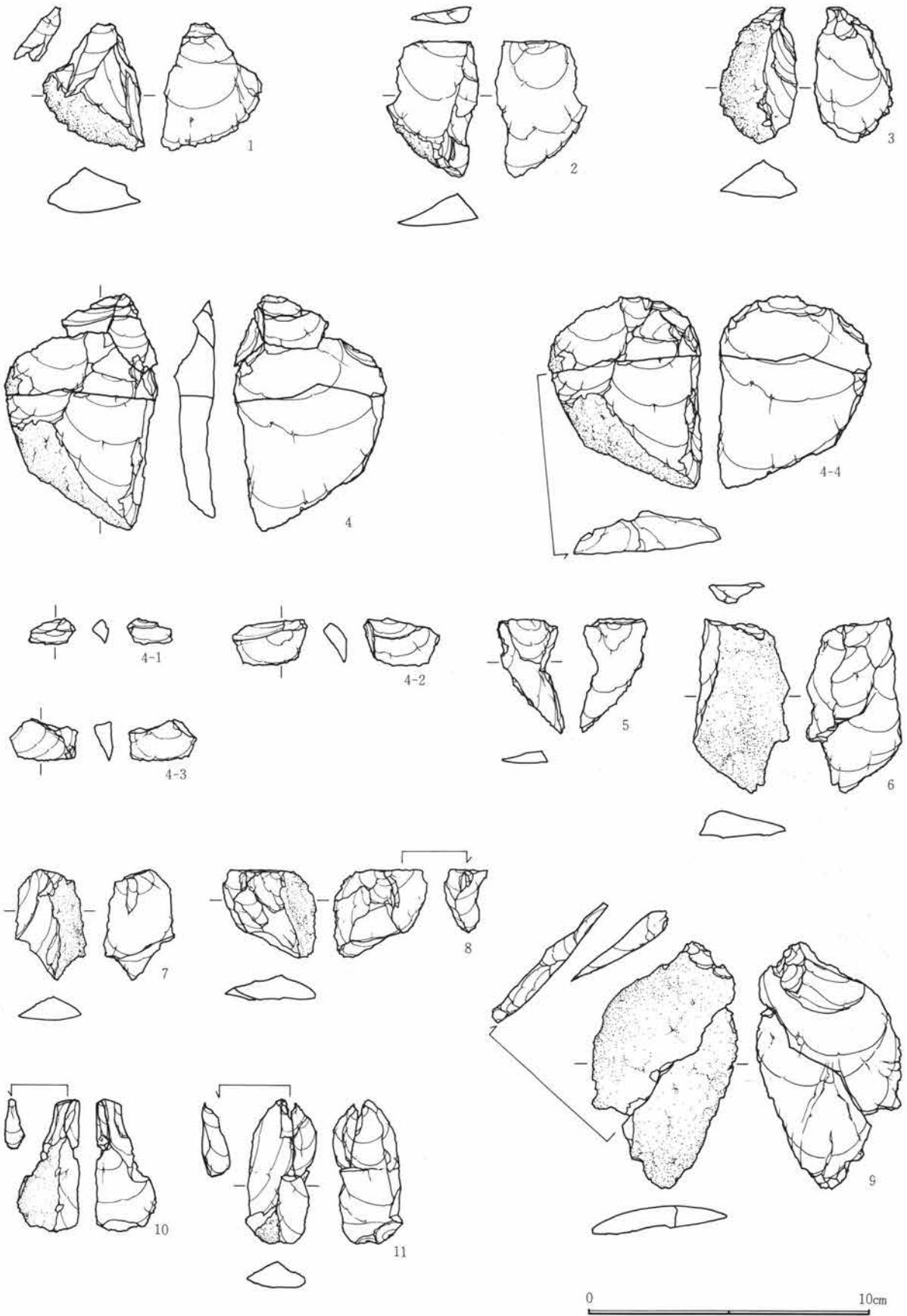


接合資料-3

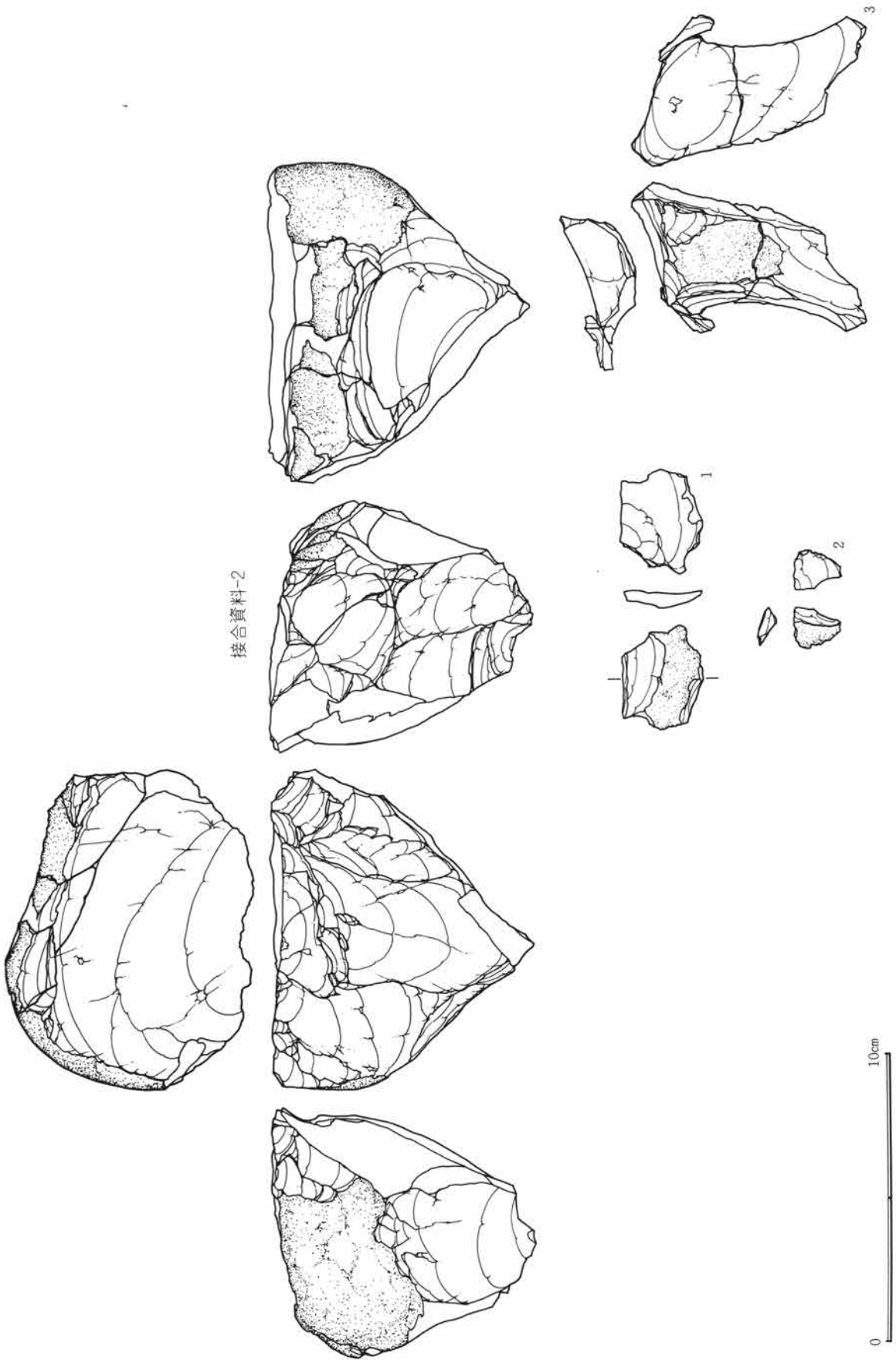
0 10cm

第23図 接合資料-3(1)





第24図 接合資料-3(2)



第25図 接合資料-2

接合資料—13 (第26図)

2点の資料が接合する。不定形剥片と碎片の接合例である。資料12と同一母岩の可能性もある。

接合資料—11 (第26図)

2点の資料が接合する。礫面を残す縦長剥片の打瘤を除去した後の剥離工程を示すものであろう。

接合資料—16 (第26図)

2点の碎片の接合例である。摩滅が著しい。

接合資料—15 (第26図)

2点の資料が接合する。小形の横長剥片の接合例である。表面に礫面を残し、裏面からの打撃による分割である。

接合資料—14 (第26図)

横長剥片と碎片が接合する。剥片端部には微細な剥離が及ぶが、顕著ではない。表面には大きく礫面を残す。

接合資料—4 (第26図)

5点の資料が接合する。大型の縦長剥片の中位で折れた後、碎片3ヶが折れている。

接合資料—18 (第26図)

2点の資料が接合している。大型で厚手の横長剥片の端部を連続的に切断している。

接合資料—6 (第26図)

2点の資料が接合する。縦長剥片の中位で折れる。また、剥片端部も切断されており、数回に渡る折れが存在したことが窺われよう。

接合資料—5 (第27図)

4点の資料が接合するほか、同一母岩に分類可能な剥片が2点出土している。大形剥片の裏面部分に作業面を持ち、打点を左右に振り剥離を行う。作出

剥片の形状は小形で縦長剥片を指向するようだが、接合状態よりみた想定剥片は横長剥片に近い形状を呈す。

接合資料—17 (第27図)

5点の資料が接合する。横長剥片を中位に分割し、加工を施した際の碎片が接合する。加工は特に4の剥片に著しく、台形状に成型している。

接合資料—7 (第27図)

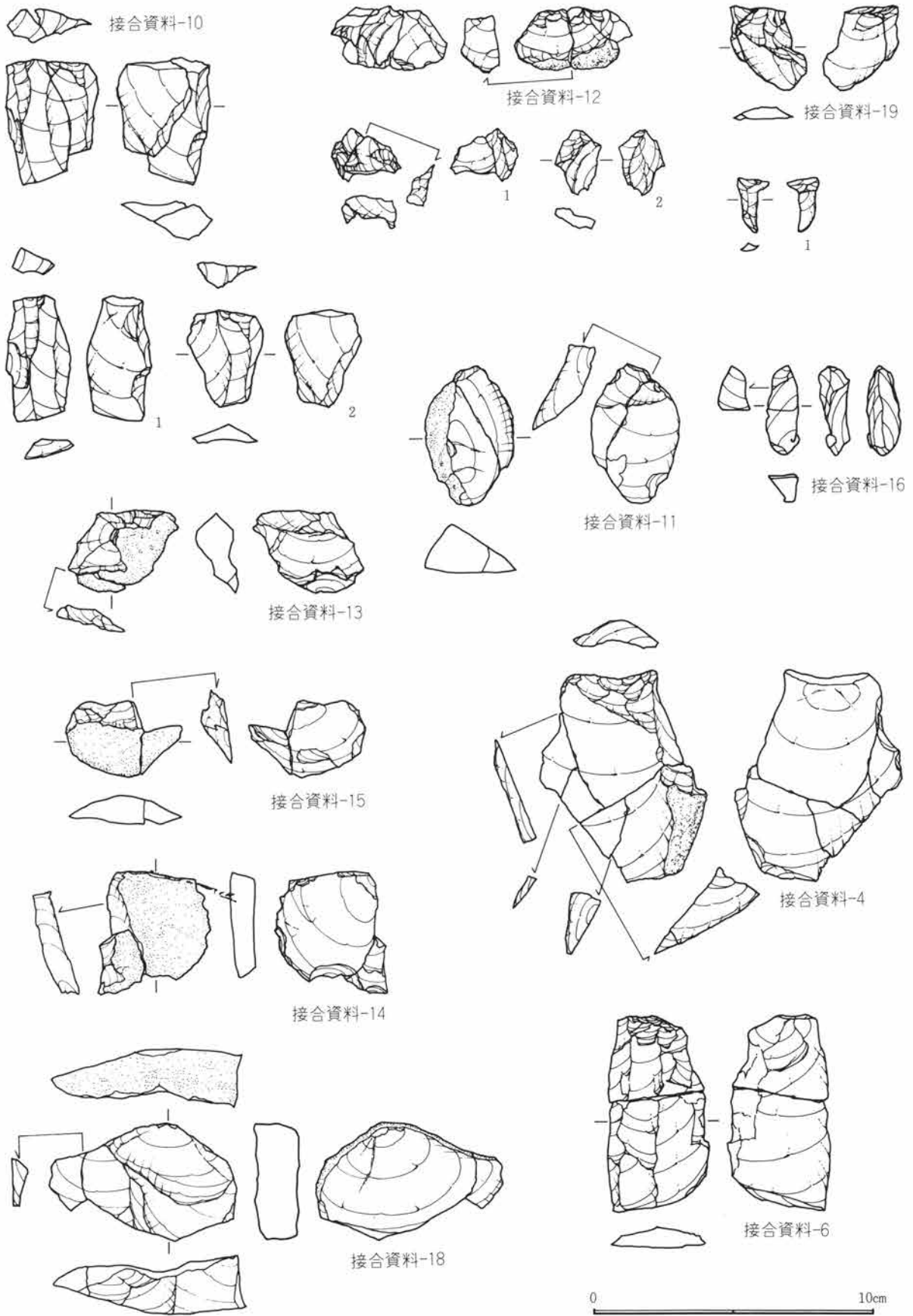
5点の資料が接合する。大型の縦長剥片頭部に小剥片と碎片が接合する。また、縦長剥片下位で先端部が折れる。剥片頭部の接合状況は、接合資料—5と類似し、大形剥片を石核素材として使用した可能性も考えられよう。黒色頁岩製。

接合資料—8 (第27図)

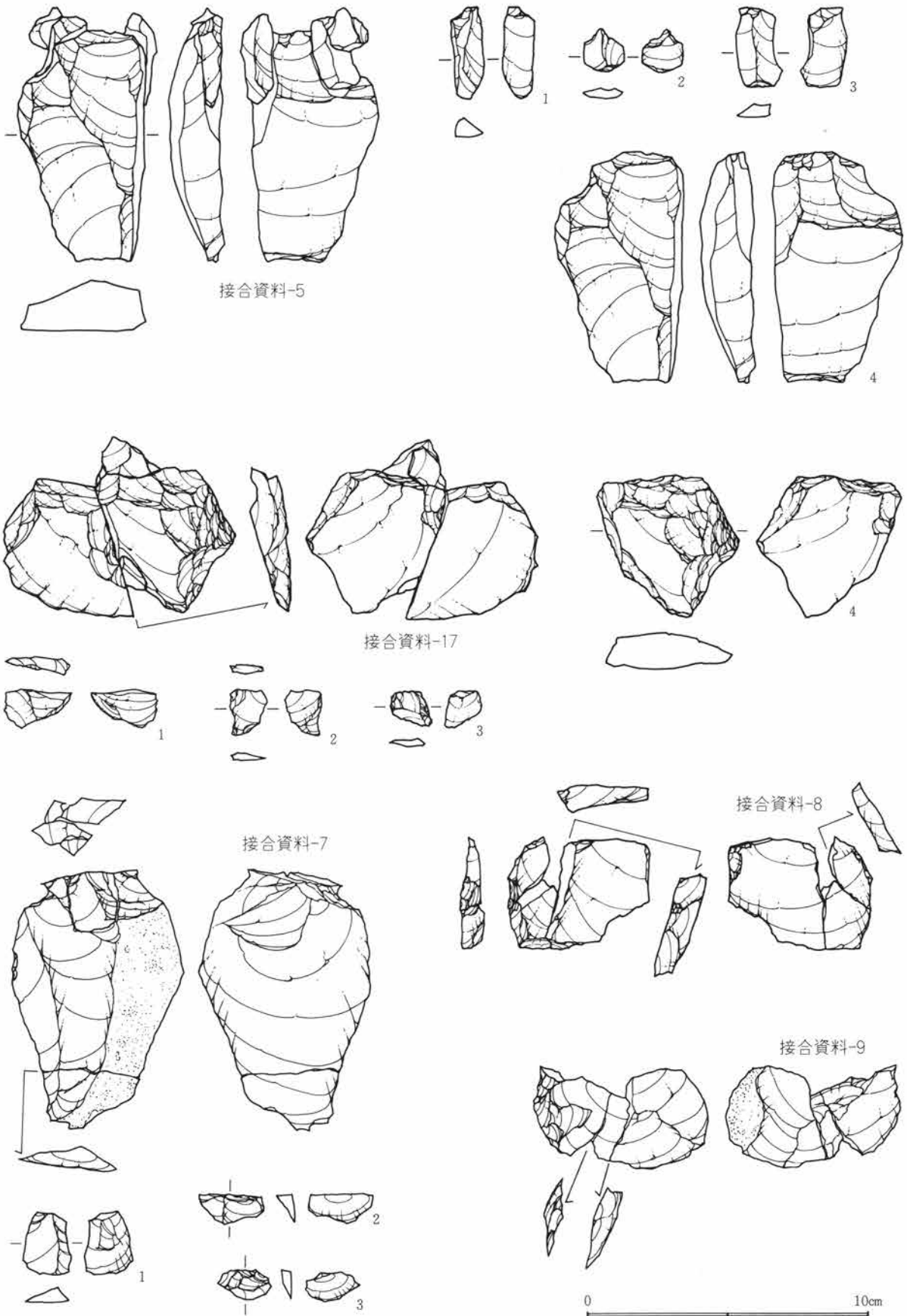
3点の資料が接合している。接合状態よりみて、本来は幅広の剥片であることがわかる。中央の折れ面、及び、右側縁には微細な加工が見られ、剥片の打点部が接合部に一致することからみて、剥離段階に二分した各々の資料で加工が加わるもの、と判断している。

接合資料—9 (第27図)

3点の資料が接合する。加工痕を持つ横長剥片を不規則に3分する。



第26図 接合資料-10・12他



第27圖 接合資料—5・17他

第4節 縄文時代

本遺跡における縄文時代に比定される遺構は検出されなかった。遺物が集中する地点も無く、良好な一括遺物を出土する包含層も認められなかった。遺物は、遺跡全体から希薄な散布とあってよい程の出土状況であった。出土層位は主にⅢ層であり、遺構確認の際に出土している。ただし、このⅢ層の遺存が良好なV区・VI区に限り、遺物包含層として、積極的に位置付け、出土遺物の記録化は施している。本来ならば、この記録化に基づく分布図を提示すべきなのだが、出土遺物の時期的な傾向も、また数量的な偏りなども認められなかった。よって、出土遺物の図示にとどまり本遺跡の縄文時代の様相としたい。

(土器)

1～4は燃糸文系の土器群である。VI区緩傾斜面より出土したが、細片であり全容は把握できない。胎土に細砂粒を含み、薄手の器肉で焼成は良好である。2～4は、内面の研磨から同一個体の可能性が高い。4は口唇部。この時期に伴う石器としては、スタンプ形石器や三角錐形石器が挙げられるが、本遺跡ではVI区を中心に6点の出土を見る。まとまった出土ではなくユニット・ブロックとしての把握はできなかったが、当該期の土器と石器組成の一側面として捉えておきたい。

5～14は条痕文系土器群。V区東半で出土した。表裏ともに条痕が施され表面は縦位のものが多い。全体に砂質である。以上は縄文時代早期後半に比定されよう。

15・16は半截竹管による平行沈線で、木葉状・幾何学状のモチーフを施す。諸磯a式と捉えた。胎土に細砂を含み、焼成も堅緻である。

17～23は地文に縄文を施し、横位平行沈線が施される。17は結節縄文。18・19は同一個体か。内面に煤が付着する。20は平行沈線内に刻みを連続し、横方向の強い撫でにより器面に凹部を持たせる。21・22は同一個体。平行沈線を基調として、渦巻状のモチーフなどに変化する。諸磯b式。

24～30は縄文施文のものを集めた。24は折り返し状の口縁部でLR同士の結束縄文である。24・25は同一個体。胎土に小礫を含む。26は横位RL、27はLR縄文を横位、斜位に施す。28は底部破片。RL縄文を疎らに施す。底面の器厚は薄く、僅かに上げ底気味である。29は表面が荒れ、判然としないが恐らく横位RLであろう。30も横位RL。緩やかに膨らむ胴部器形を呈する。諸磯b式と捉えた。

31～33は小型の半截竹管による平行沈線と刺突文の構成。刺突文は、押し引きによる結節沈線状の効果を見せるが、施文角度は著しく深い。諸磯b式の範疇で捉えた。

34は薄手の器厚で内湾する胴部上半破片。浅い沈線で渦巻文を描く。粗砂粒を含む。諸磯b式。

35～39は半截竹管による平行沈線の密接施文例。35・36・39は同一個体。条線化した集合沈線で三角形や円弧状の空白部を描出するものであろう。37・38はやや砂質の胎土で、38の平行沈線は、規則正しく直交する。諸磯b式後半段階か。

40～51は地文に集合沈線を施し、ボタン状貼付文を付す一群を集めた。諸磯c式であろう。この段階の土器は周辺地域で濃密ではないとしても、出土は各遺跡で認められている。高山遺跡の深鉢などその好例であろう。赤城山麓域の該期集落のようにまとまった出土は認められないものの、確実に居住がなされ、東関東地域や南東北地域との交流や交換に重要な役割を果たした地域と考えられよう。このことは後述する、東関東系の興津式の出土も関連性が認められている。

40～42は口縁部。各種の突起が付され、地文の平行沈線も矢羽状のものや横位平行するものなど多様性に富む。44は平縁で口唇部内面に、斜位の沈線が施され、外面は横位平行沈線である。

43・45～49は胴部破片。貼付文は円形のものと小楕円形の2種類が当てられるが、その配置などによる程度の傾向や規則性が認められるといわれる。しかし、本遺跡からは破片の出土であり全容は判然としない。

また、この時期の深鉢は50～52に見られるように底部は内傾し、胴部下端まで集合沈線を施す特徴を持つ。集合沈線は殆どが縦位あるいは斜位の平行施文が基本であり、いわば諸磯b式で見られた横位平行沈線から諸磯c式期の縦方向への変化であり、これは諸磯c式の主文様構成と位置付けて良いだろう。この縦位・斜位施文によって生じた空白部は無施文であったり、大きな縦位山形文が充填される。この山形文の変形として53のような縦位連続菱形文が施されるのであろう。

54～65は貝殻腹縁文を文様要素とする一群である。殆どが胎土の砂の混入が多くザラついた器面である。東関東系の興津式と捉えた。54・55は同一個体。平縁を呈し、口唇部に大きめの刻みを入れる。口唇部直下から貝殻腹縁による波状文が横位に施されるが、施文距離は短く、施文毎に強く止める手法を持つため、器面が若干盛り上がる箇所もある。57・59も同様な手法の胴部破片。56は外反する口縁部に爪形状の大きな刻みを施すが、深く雑な切り込みである。以下は貝殻腹縁を連続押圧する。58・60～62は貝殻腹縁を結節沈線状に押し引く。胎土も砂質である。63・64は同一個体。貝殻腹縁を交互回転施文する胴部下半。波状貝殻腹縁文である。空白部が縦位の菱形状に残される特徴である。65も同様な手法で、腹縁が平滑な貝殻を使用している。

東関東系の前期土器群である浮島式・興津式は異系統土器群として、群馬県で主体的に出土する諸磯式との共存状態が県内でも徐々にではあるが報告されている。本遺跡の場合、両者には明らかに胎土に差が認められ、施文具の採用も異なっている。おそらく描出される文様効果も諸磯式とは別方向を意識していると思われる。この方向が、どのような展開をみせるのかは今後の出土資料の再吟味によってなされると思われるが、前述している本遺跡の資料がその分布範囲において、重要な位置を占めることは確信している。

66～74は中期に比定される。出土量は前期に比して少ない。66・69は同一個体。平縁で折り返し状の

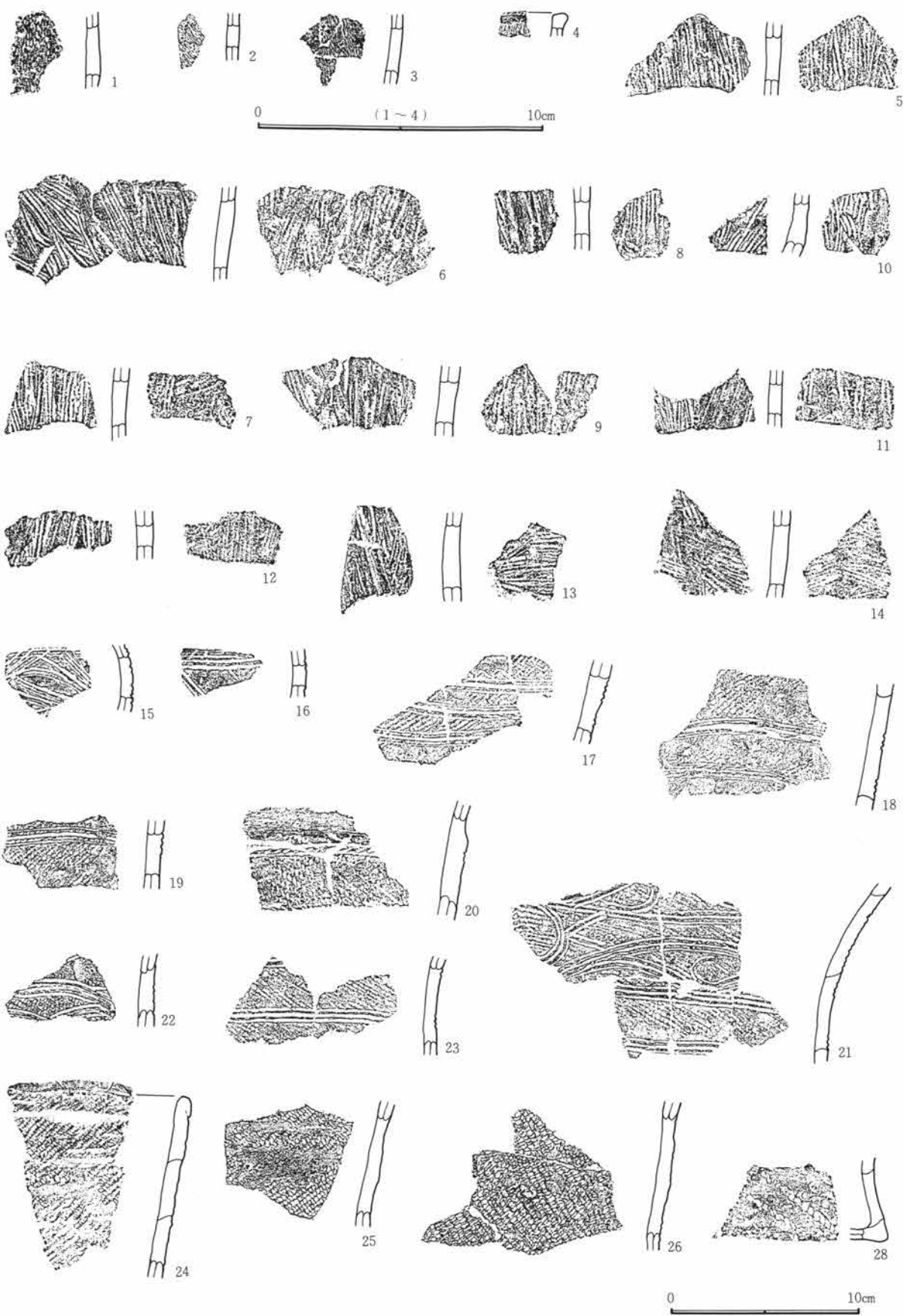
口縁部を特徴とし、肥厚部分が外湾する。横位RLを口唇部にまで施す。下小野式などの中期初頭に位置付けられるが類例は少ない。67は2条の凹線による隆線と渦巻状小突起の描出。加曽利E2式。68・70～73は加曽利E3式。70は頸部破片。71は波状口縁部で口縁下に微隆線が付される。72は橋状把手を持つ。把手両下端から伸びた隆線が体部で懸垂文に派生するのだろう。縦位LRを施すが、把手側面にまで施文が及ぶ。73は胴部下半。2条の沈線文による懸垂文構成である。

74は内稜を持ち、頸部に楕円状の区画が設けられる浅鉢。

後期の土器片も少ない。75～78は同一個体。横位沈線文下を羽状沈線が施される。内外面とも丁寧に研磨される。加曽利B2式。79の底部も胎土・整形技法から同一個体の可能性が高い。底面に網代痕が残る。80は口唇部に紐線文を施し、地文に撚り戻りの著しいLR縄文を施す。加曽利B1式段階の粗製土器か。81・82は同一個体。口唇部に8字状の小突起を付し、以下帯縄文構成で、細縄文LRが充填施文される。加曽利B2式である。

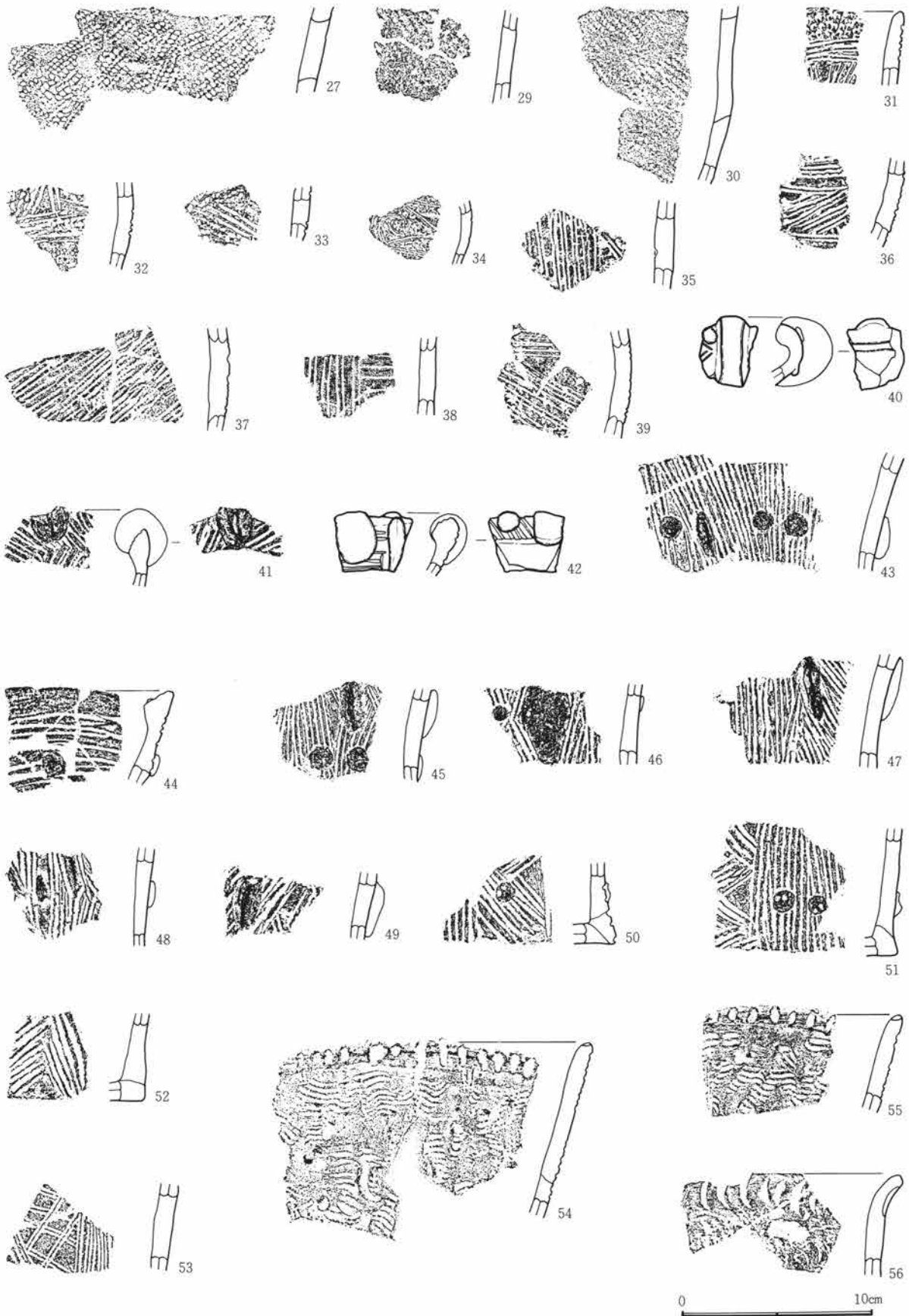
時期が前後するが、83～94はV区・VI区から出土したもので、1～2個体の破片である。平縁で器厚は厚く、その文様要素は口唇部に刻みを施し、直下にRL縄文の結束部を施す。83はその下位に横位沈線文が施されるが、胴部には深い沈線で各種の意匠文が描かれる。また86は口縁部が外反する83とは違う器形を呈し、口縁部下の横位沈線が施されない。このことから複数個体の存在を考えているが、胎土・色調、施文具・施文方法など非常に類似しており、あるいは同一個体の可能性もある。県内に類例が無く、時期的な位置付けが非常に難しい土器群だが、本報告では中期前半期の東北系統の土器群に類縁性を求めたい。また、第30図66との関連や同時期の土器文様のバリエーションなど未だ不明な部分が多く、詳細な記述はできないが、例えば東関東地域で出土する諏訪タイプとの比較も重要であろう。資料の蓄積を待ちたい。

III章 書上本山遺跡

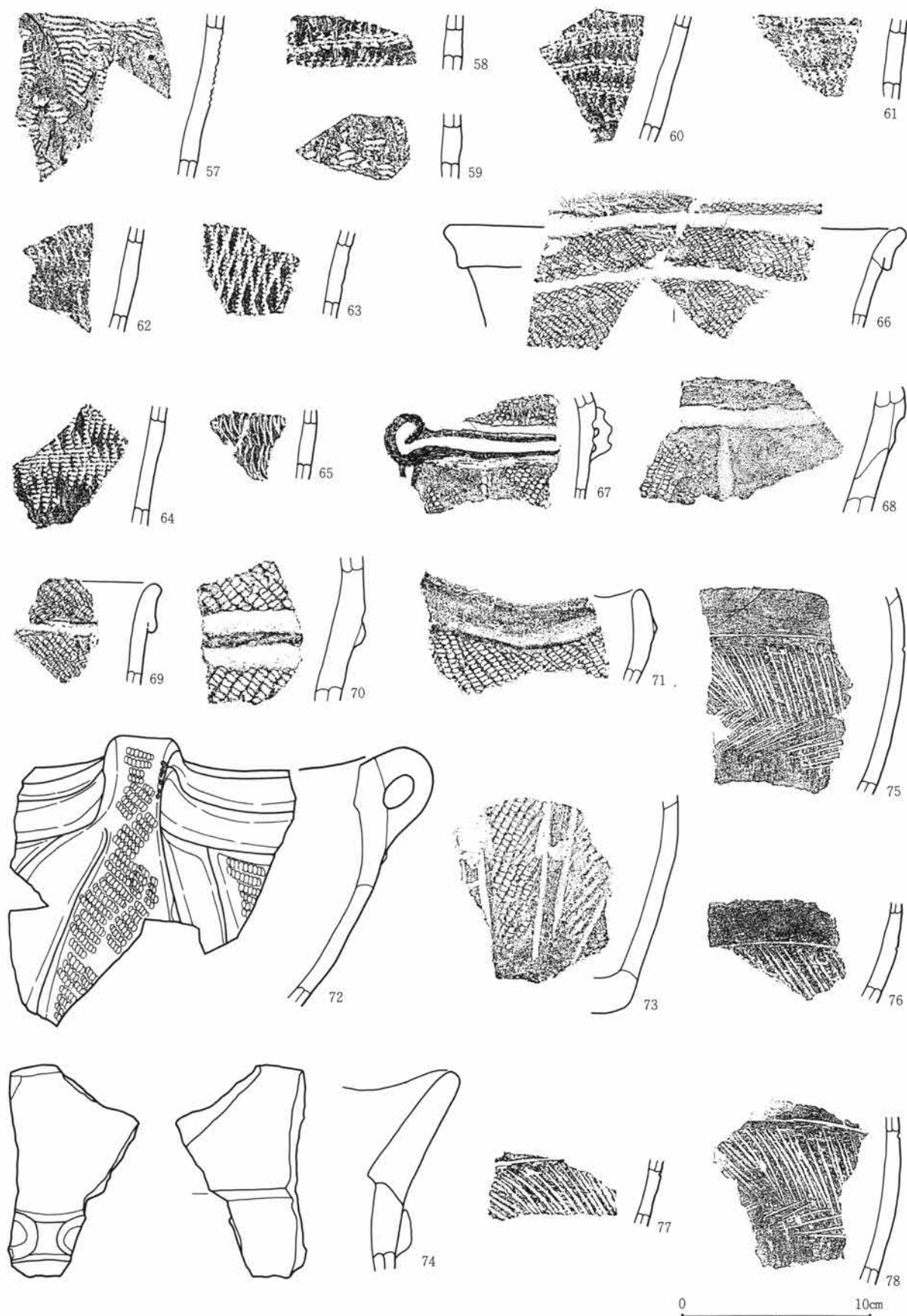


第28図 グリッド出土土器

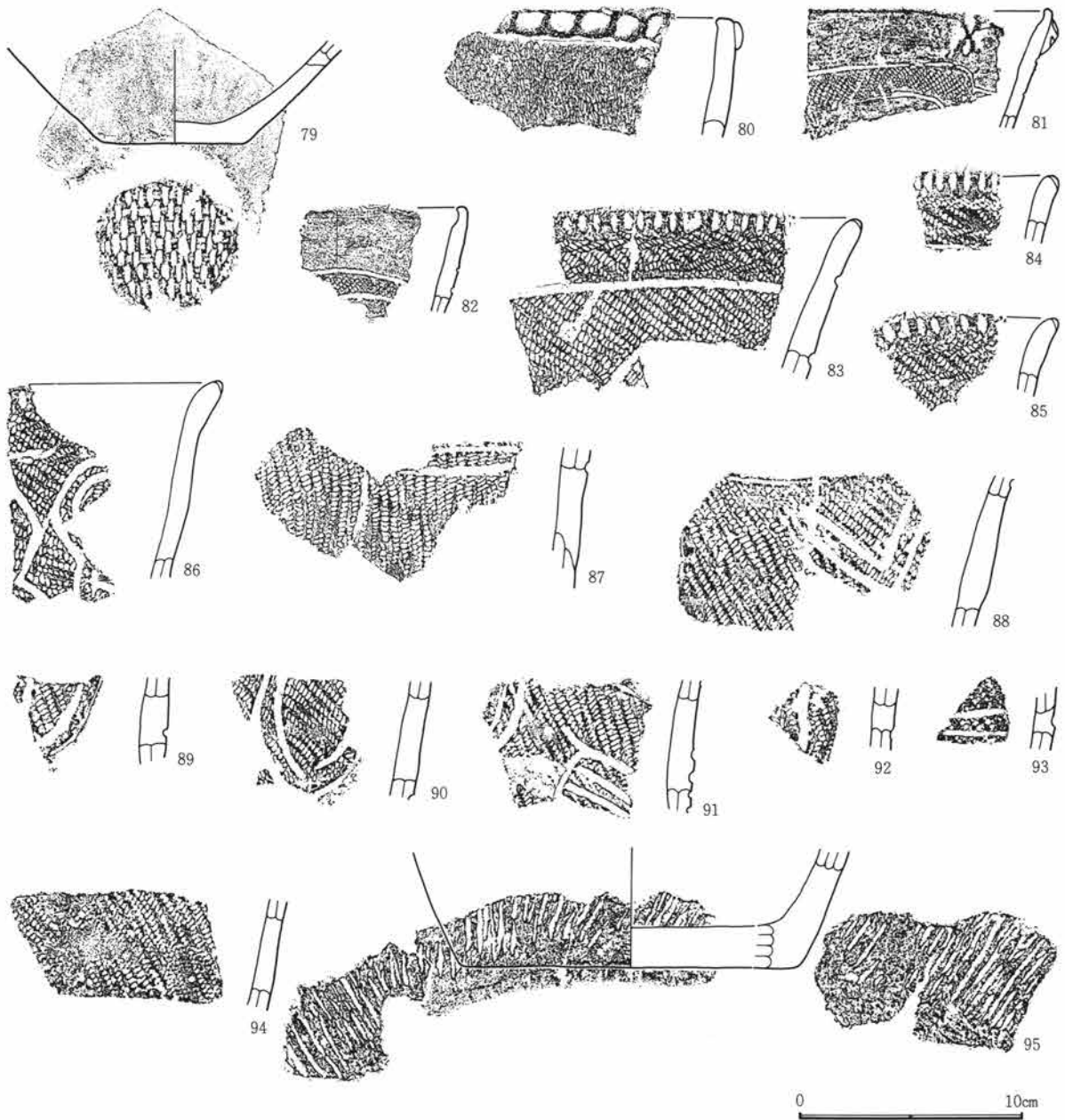




第29図 グリッド出土土器



第30図 グリッド出土土器



第31図 グリッド出土土器

95は、I区出土のもので、試掘時に検出したものである。太めの撚糸文を胴部下端にまで施す底部である。加曽利E1式。

以上のように、本遺跡の縄文時代の土器を説明したが、出土量は少ないながらも前期後半から中期前半期に特徴的な異系統土器が存在することが判明した。また、出土土器も早期から後期に至り、一時期に集中するような傾向ではない。このことは、本遺

跡のみならず当地域における、縄文時代の集落が決して希薄な存在ではなく、各台地に積極的に居住されていることを物語る。

本遺跡では、たまたま縄文時代の遺構が検出されなかったが、出土土器の様相から隣接地域に集落跡が存在することは確実である。将来的に調査の手が及ぶこともあろうが、その際に本遺跡の出土土器群が調査の参考になれば幸いである。

(石器)

縄文時代の石器も土器と同様に、包含層出土のものが多く、ただし、時期を限定する事はできず、器種分類による説明に依存せざるを得ない。

石鏃 (第32図1～14)

各種形態に富み、出土範囲も遺跡全体に及ぶ。1は先端部が尖らない凹基鏃。右側縁を裏面からの調整で湾曲する特徴を持つ。チャート製。2は左片脚端部を欠損する。薄手で周縁に入念な調整を施しているが、剝片中央部には達していない。黒曜石製。3は長身で、雑な調整加工を施す。薄手だが中央部にわずかな厚みを残す。黒色安山岩製。4は小型の石鏃で、おそらく素材の打瘤部分を利用したものと思われる。黒曜石製。5も小型の石鏃だが、薄手の作りである。調整は側縁に顕著であり、また、凹部も著しく内湾する。黒色頁岩製。6は舌部を僅かに欠損する凸基鏃。長身で直線的な側縁である。調整は中央部に及ばないものの丁寧である。7は小型で、短い舌部が特徴的である。舌部調整も細かく入念である。8は側縁の垂直的な加工で鋸歯状の刃部を作出する。黒色頁岩製。9も凸基鏃だが、木葉状の長身が特徴的であり、先端部も細く尖鋭的である。10は薄手の縦長剝片を素材とし、片面からの調整を施す、粗製の石鏃である。黒曜石製。11は脚部の調整が及ばない未製品か。先端部は丁寧な調整が施される。チャート製。12は裏面を欠損しているが、周縁を丁寧に調整する小型の凸基鏃と捉えた。13は未製品。基部及び側縁の調整が認められるものの、石鏃を果たして目的とした調整とは断定し難い。ただし、本遺跡の場合小型の石器が石鏃以外見当たらず、石鏃に器種属性を求めた。14も未製品であろう。先端部は丸みを帯び、脚部の調整も十分とは言えず、表面の背稜も削除していない。チャート製。

打製石斧 (第32図15～17、第33図1・2)

13点の出土を見るが、殆どが頭部・刃部のみの残存であり、全容を把握できるもの5点を図示した。

15は薄手の横長剝片を素材とした揆形で、縁辺を僅かに加工する。刃部にも加工が及ぶが片面からの

簡単なものである。ホルンフェルス製。16は、側縁が若干内湾する短冊形で横長剝片を素材とする。断面形状は長軸方向に湾曲し、刃部を薄く作出する。刃部には縦位方向に摩滅状の使用痕が認められる。頭部裏面欠損。17は、厚手の横長剝片を素材とする短冊形。頭部を欠損するが、刃部の縦位方向の使用痕が著しい。第33図1は大型の分銅型打製石斧。厚手の横長剝片を素材とし、側縁に礫面を残す。両側縁中位の扱いは大きくないが、集中しており、湾曲意識は強かったようだ。2も大型で厚手の横長剝片を素材とした揆形の打製石斧。側縁の加工が顕著であり、反面頭部は無調整である。刃部は両面からの大きな剝離により作られている。灰色安山岩製。

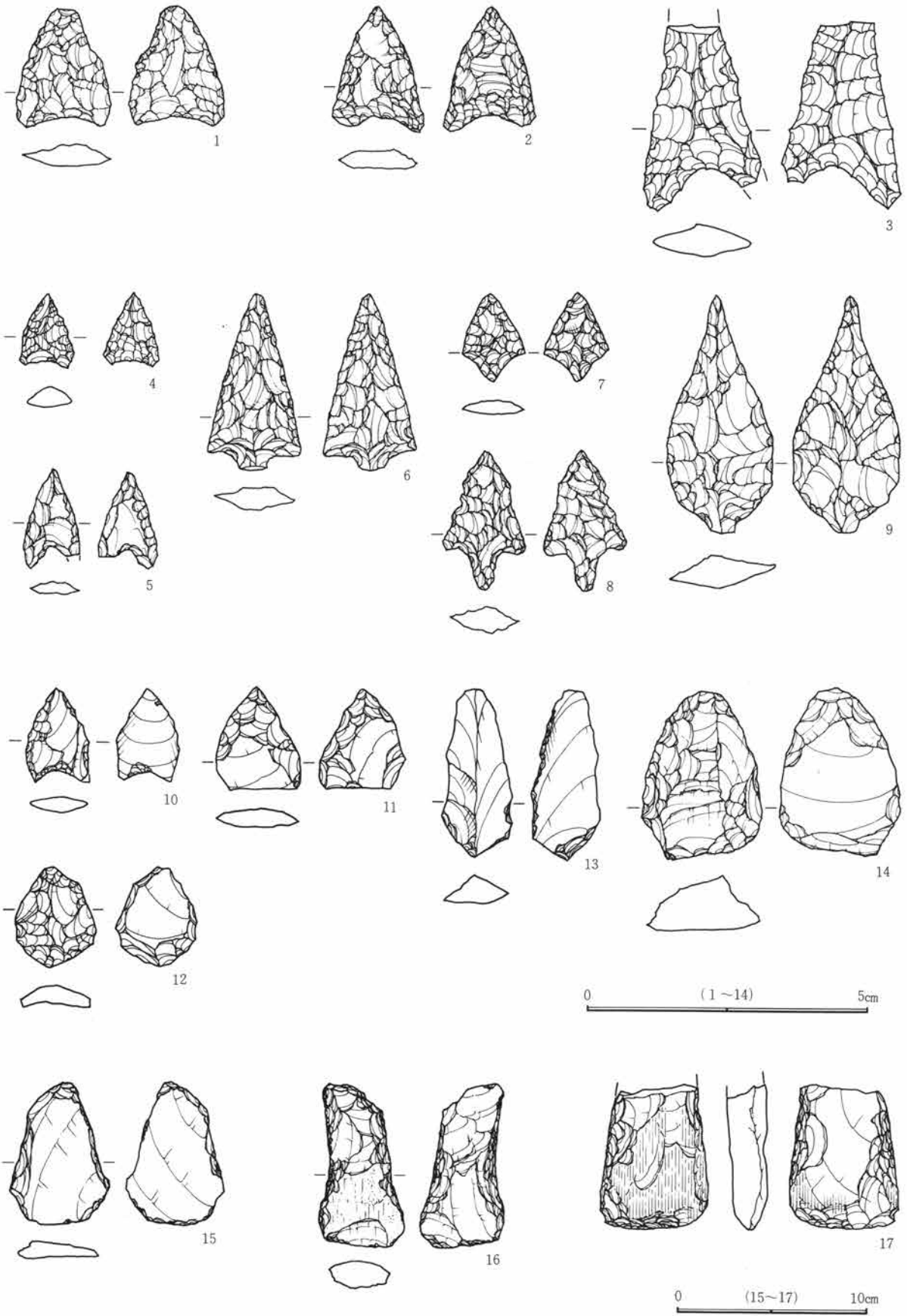
スクレイパー (第33図3～第34図3)

不定形石器ながらその調整に有る程度の規則性や目的性を持つものを一括してスクレイパーとした。15点の出土が見られ、10点を図示した。第33図3は側縁が欠損しているため判然としない部分が多く、打製石斧の欠損品の可能性もある。器厚も厚く、剝片端部も刃部を意識した調整ではない。4・5は黒色頁岩製の縦長剝片を素材とし、4は両側縁、5は右側縁に調整が及ぶ。6はスクレイパーとしては調整が少ないが、剝片端部を直刃状に持たせ、僅かながらの調整で鋸歯状の刃部形態を作る。7も剝片端部調整が集中し、鋸歯状の直刃を呈する。8は台形状の横長剝片を素材とし側縁と剝片端部に調整が施される。9は側縁に丁寧な調整を施し、剝片端部を尖り出す。第34図1は側縁の一部を除き、入念な調整を施す。調整は片面に集中し片刃状の刃部である。2は砂岩製の横長剝片を素材とし、鋸歯状の刃部を呈す。3は横長剝片を素材とし剝片端部と左側縁に調整が及ぶ。剝片端部の一部に摩滅状の使用痕が認められる。

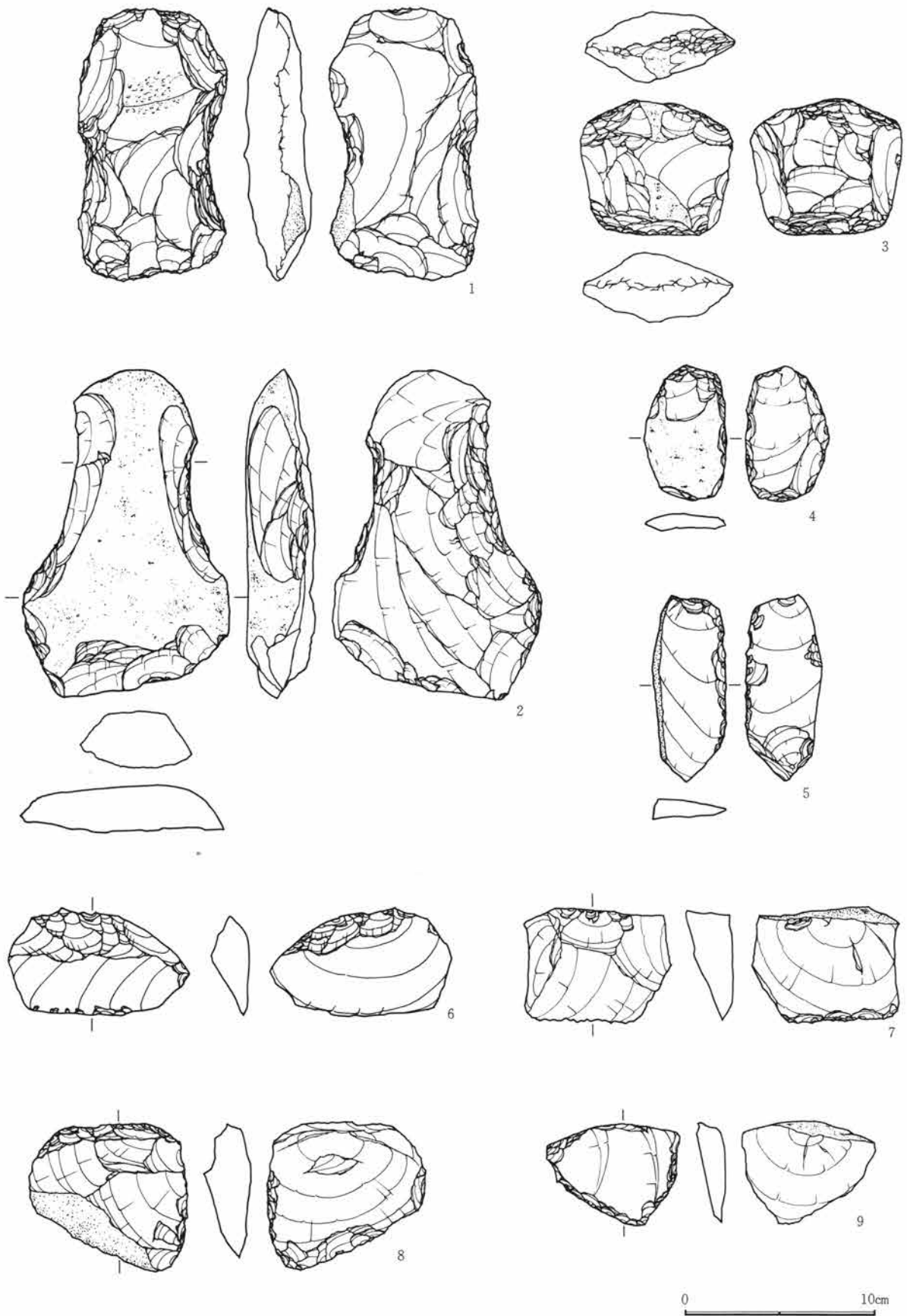
加工痕を持つ剝片石器 (第34図4～第35図2)

スクレイパーと同様に、不定形石器で調整がスクレイパーに比して、素材の一部のみに及ぶ石器を一括した。

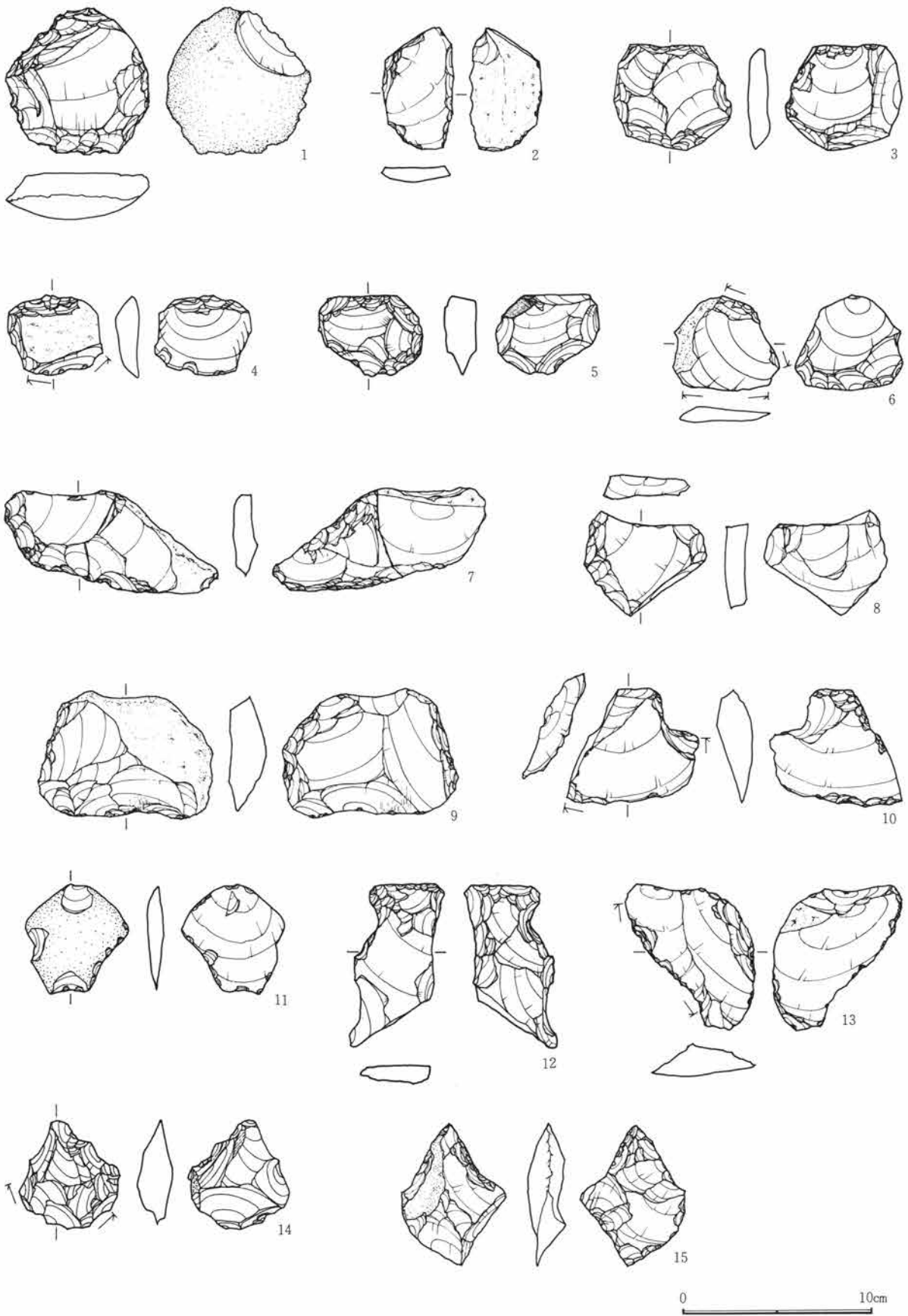
第34図4は小型の横長剝片を素材とし、剝片端



第32図 グリッド出土石器



第33図 グリッド出土石器



第34図 グリッド出土石器

部・側縁に僅かながらの加工が施され、端部には微細な歯こぼれが認められる。5の加工も剥片端部・側縁に及ぶが、刃部は端部の一部に限られる。6は薄手の縦長剥片を素材とし、剥片端部・右側縁に調整を集中し、使用痕も認められる。7、厚手の横長剥片を素材とし、左側縁から剥片端部にかけて加工を施す。8、剥片基部および端部を欠損するが、側縁に加工が認められる。9は剥片端部・側縁に加工が施されるが、雑な調整であり規則性はない。端部を凹刃状に処理し、摩滅状の使用痕も認められる。10は大型の横長剥片を素材とし、左側縁を欠損する。加工は剥片端部の一部に認められ、また、欠損部分にも調整が及ぶ。端部は刃部をなし歯こぼれが認められる。11は薄手の縦長剥片を素材とし、側縁に僅かな加工を施す。12、板状の横長剥片を素材とし、縁辺に加工を施す。特に基部、左側縁の調整は入念であり、側縁の調整はノッチ状の凹部を作出する。あるいは未製品か。13、横長剥片を素材とし、側縁に加工が施される。剥片端部はめくり上がり、厚めで刃部状をなしていない。14、厚めの横長剥片を素材とし、周辺を雑な加工で調整するが、明瞭な刃部を作出していない。剥片端部にわずかな歯こぼれが認められる。15は横長剥片を素材とし基部を丁寧な調整で尖らせる。剥片端部は刃部をなすが右側縁にかけて未調整であり、未製品の可能性が強い。35図1はチャート製で小型の縦長剥片を素材とし右側縁と剥片端部に加工を施す。端部を刃部とし、僅かな歯こぼれが認められる。2は小型の縦長剥片を素材とし、剥片端部に加工が施される。

#### 使用痕を持つ剥片石器（第35図3～16）

素材剥片の側縁や端部に歯こぼれや線状痕が認められる不定形石器を一括した。

3は縦長剥片が素材。薄手で表面の礫面を残す。基部を除く縁辺に歯こぼれが認められる。4も縦長剥片。左側縁の湾曲を刃部として使用し、歯こぼれが生じている。5、縦長剥片を素材とし、両側縁を刃部とし摩滅痕が認められる。6、小型の縦長剥片を素材とし、剥片端部を尖らせる。使用痕は両側縁

に歯こぼれがある。7も小型の剥片端部を素材とし、直線的な右側縁と剥片端部を刃部とし歯こぼれが認められる。8、黒色安山岩製の縦長剥片を素材とし、両側縁を刃部とする。歯こぼれは右側縁の方が顕著である。9、縦長剥片を素材とし、両側縁を刃部とする。10は大形の縦長剥片が素材で、剥片端部を欠損する。使用痕は両側縁に認められるが、左側縁の歯こぼれが顕著である。11は横長剥片を素材とし、剥片端部を刃部とする。刃部に剝離が認められるが歯こぼれであろう。12・13は三角形の横長剥片を素材としている。12の側縁と剥片端部には加工痕が認められるものの、積極的なものではない。13の側縁も加工を施して刃部状としている。14は厚手の素材で剥片端部を刃部としている。15、左側縁を除き歯こぼれが認められる。16、横長剥片端部欠損後、欠損部位を含めて歯こぼれが認められる。

#### 石核（第36図1～5）

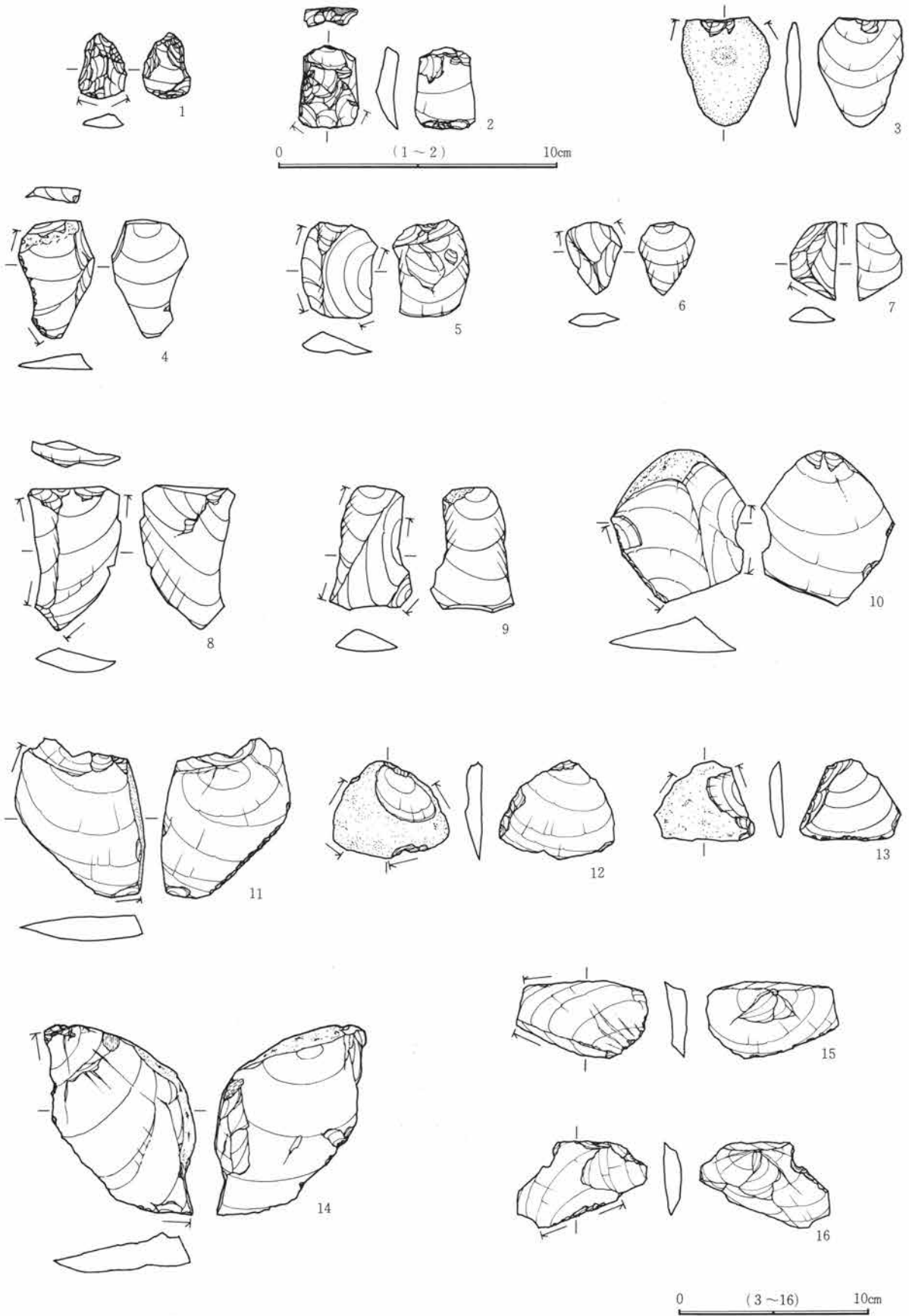
5点を図示した。規則的な剥片剝離工程を示す資料はなく、黒色頁岩製で多方向からの打撃が加わるものが殆どである。

1は拳大の円礫を素材にし、縦長剥片を作出し、打面調整のためか、多方向から小型の剥片を剥ぎ取っている。2は偏平な円礫に垂直方向に打撃を加え、小型の剥片を作出する。3は節理面を2面持つ。多方向からの剝離であり、大型の横長剥片を作出している。4は縦長剥片を作出しながらも別方向から横長剥片を得ている。5は黒曜石製。多方向からの剝離である。

#### 三角錐形石器（第36図6～第37図2）

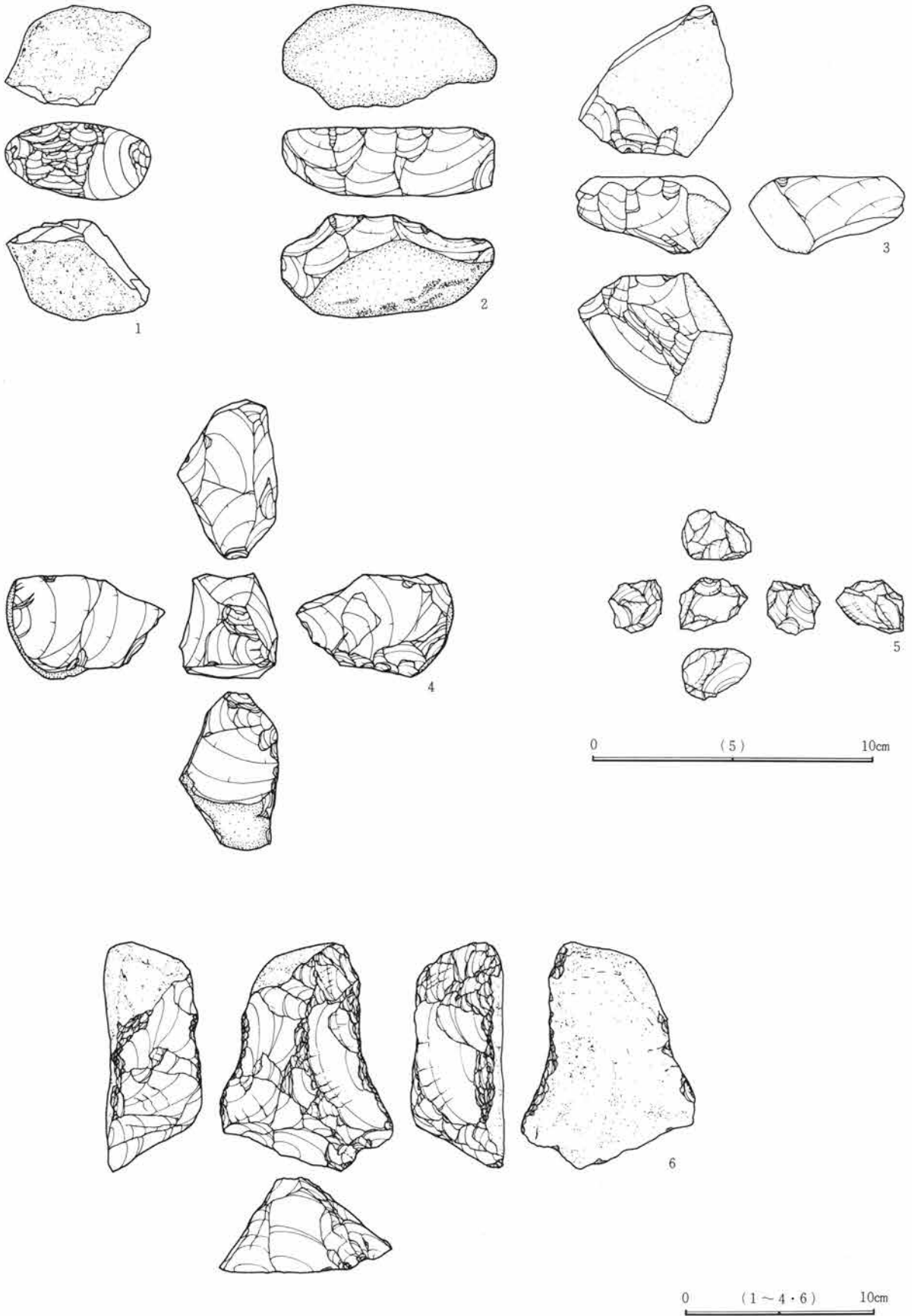
3点出土している。すべて黒色頁岩製である。第36図6は片面に大きく礫面を残し、側縁が広がる形態を呈す。側縁からの強い加工で形を整え、頭部の調整も意識している。素材端部も数回の強い加工で断ち割る。側縁調整は右側縁が顕著である。第37図1は乳棒状の素材で、礫面及び節理面を大きく残す。側縁からの加工が大きく、また左側縁の調整は入念である。素材端部及び頭部の加工は数回にとどまっている。2も乳棒状の素材である。頭部が欠損する。



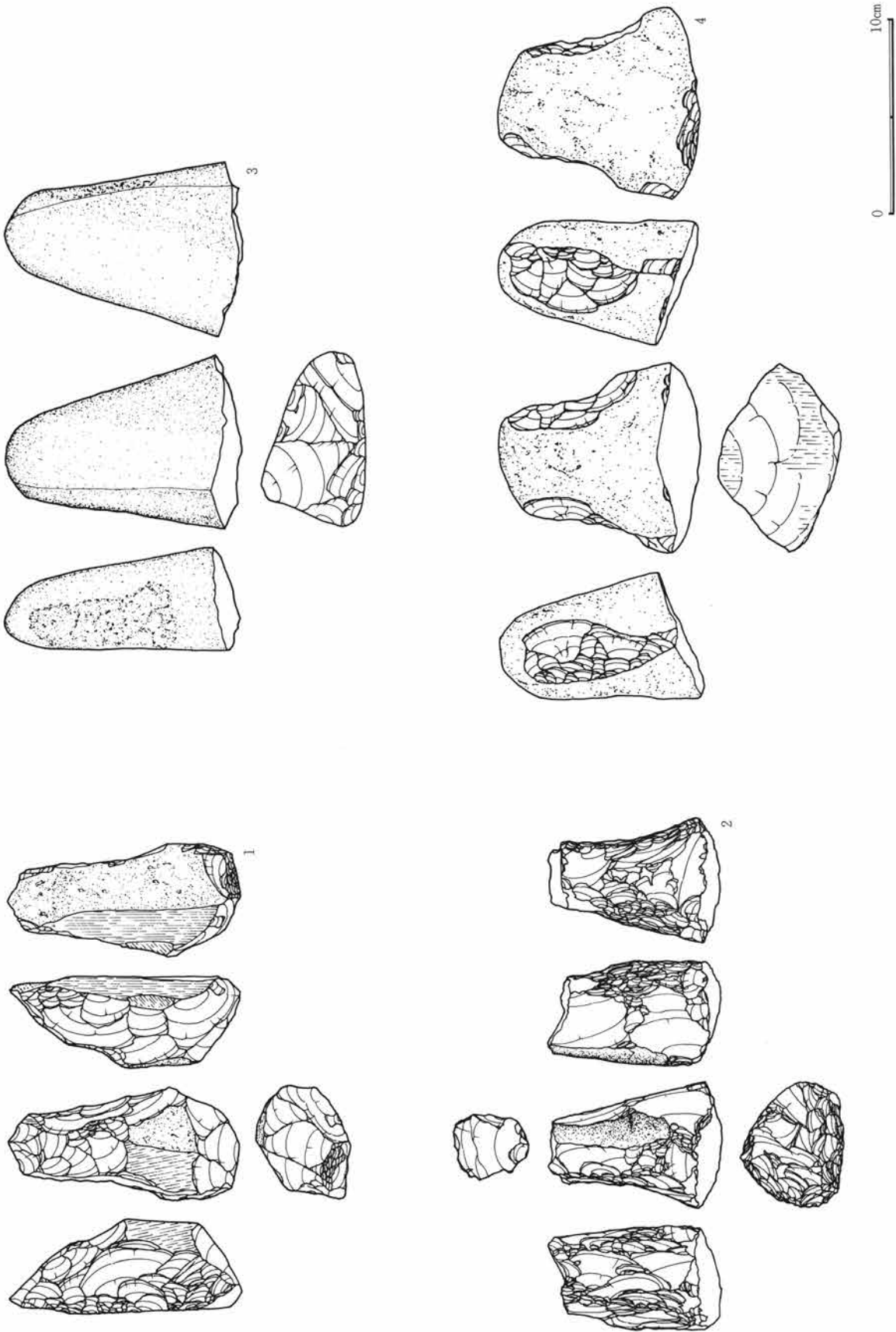


第35図 グリッド出土石器

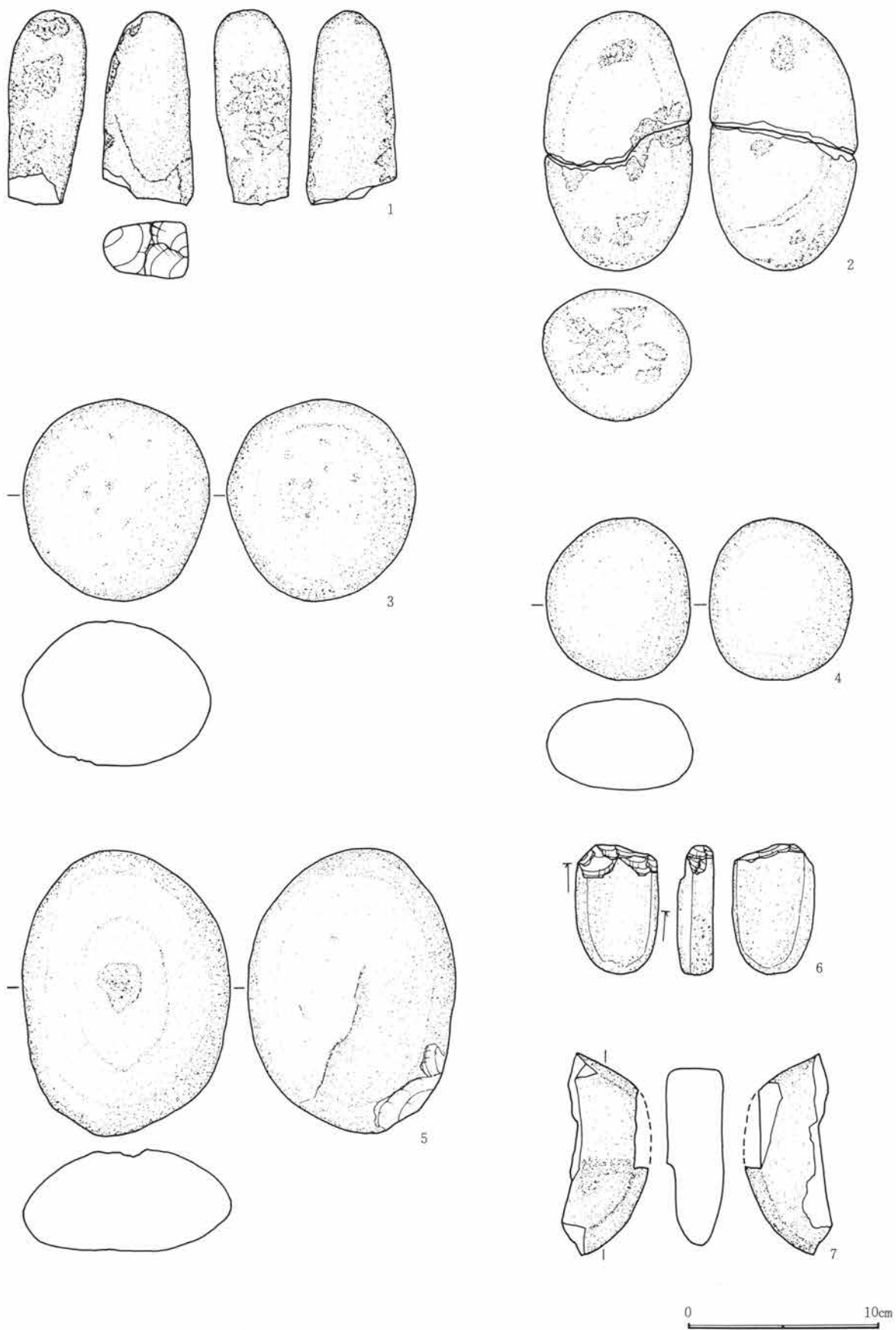
III章 書上本山遺跡



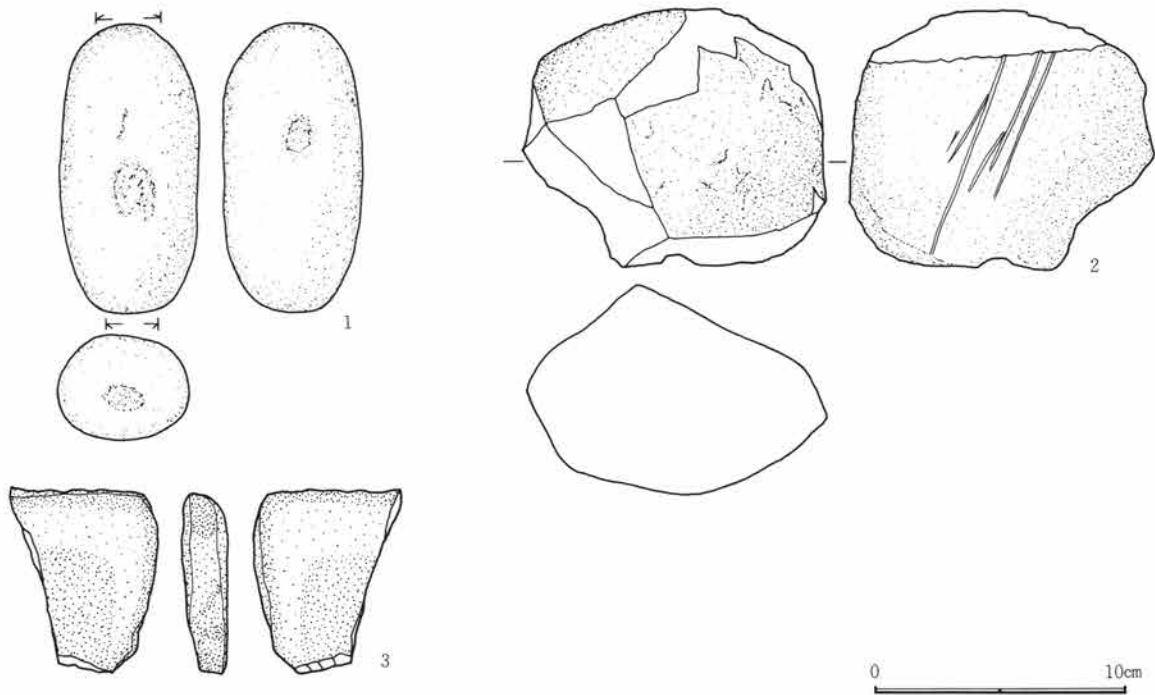
第36図 グリッド出土石器



第37図 グリッド出土石器



第38図 グリッド出土石器



第39図 グリッド出土石器

礫面は表面に残すものの、その割合は少ない。ただし、裏面の平坦面に対する意識は働いたようで、入念な調整で面を築く。また、素材端部も細かな調整により一面を作出している。

#### スタンプ形石器（第37図3～第38図1）

3点の出土を見る。石材は黒色頁岩に依存せず、多種にわたる。3は変質安山岩。楕円状の素材で、幅広になる中位を断ち割り、縁辺からの調整で平坦面を築く。また側縁には敲打痕が認められる。4は石英閃緑岩製。楕円状の大型の素材である。両側縁には入念な調整が及び握り部のように器形を整える。素材の幅広部分を断ち割り平坦面を築き、摩滅痕が認められる。第38図1は、比較的小型の乳棒状のホルンフェルス素材とし、幅狭部分を断ち割り対極方向からの調整を施すが、平坦ではなく凹凸が著しい。両側縁・頭部の一部に敲打痕が認められる。

#### 磨石類（第38図2～7）

磨石類は殆どが粗粒安山岩である。中世溝・集石などから相当量出土した自然礫に混入して検出されたものが多く、形態など特徴的なものを抽出した。2は半欠状態で出土した。楕円状の磨石。全面に長

軸に沿った擦痕状の使用痕、素材端部に敲打痕、表裏面に僅かであるが凹み穴が認められる。3は球形の磨石。ただし丸石のような球形ではなく、ややいびつな断面形状である。全面に使用痕。平坦面には浅く小さな凹み穴が認められる。4は円盤状の磨石。全面に使用痕が認められる。5は単孔の凹み石。ただし、表裏両面に使用痕は認められる。6は小型の楕円状の磨石。半分を欠損するが、意識的な打ち欠きである。縁辺にも使用痕が認められる。7も磨石。表面に段を持つ。使用痕は表面に認められる。

#### 敲石（第39図1）

1点を図示した。1は凹み穴を有し、素材両端に敲打痕を持つ。

#### 線状痕を持つ磨石（第39図2）

粗粒安山岩製で、表面に同方向の線状痕を持つ。反対面には摩滅痕が認められる。線状痕は砥石状の機能が考えられるが、類例も無く根拠に乏しい。

#### その他の石器（第39図3）

砂岩製でおそらく方形を呈するものと思われる。中央部分が僅かに凹み、表裏面、側面の一部に使用痕が認められる。砥石状の機能が考えられよう。

### 第5節 古墳時代～中・近世

第Ⅰ章でも述べたように、本遺跡の周辺地域は、古墳時代、奈良・平安時代の良好な集落跡・墳墓・寺院跡が濃密な分布を見せる。上武道路関連の調査でも本遺跡南東に隣接する書上上原之城遺跡では古墳が2基、奈良・平安時代の住居跡を47軒、北西の沖積低地を隔てた上植木壺町田遺跡では、中世に比定される土壙墓・井戸が検出されており、特に井戸からは呪符木簡や板碑が出土している。

本遺跡の調査当初も、試掘の結果から上記の遺構の存在を想定し、調査区域内のあらゆる落ち込みの記録化に務め、個々の遺構に対して相応の評価を持たせる努力をした。

記録方法も、通常の図面・写真以外に調査担当者の所見・メモを付加しており、その枚数は膨大な数を数える。本節では、古墳時代～中世の遺構・遺物を説明するが、この調査当時の担当者の所見を参考にして、用語・表現の統一を図り本文化したものである。また、遺物の説明・計測値は表組としているため、詳細な観察は章末の表を参考にさせていただきたい。

本遺跡調査区全体を概観するとⅢ・Ⅳ区に住居跡・溝・掘立柱建物跡などが集中する傾向が見られる。対比的にⅤ・Ⅵ区は、土坑などの遺構が見られるのみで、古墳時代～中世の生活に密着した遺構群はⅢ・Ⅳ区にまとまる景観が看取できる。これは、Ⅴ・Ⅵ区に集中した旧石器時代と縄文時代の遺物分布状況と反対であり、時期的な居住地の選定の差とも言うべき現象であろう。

例えば、当地域の農家などに見られる母屋北西に見られる防風林などの存在を古墳時代の集落景観に当て嵌める要素も加味することも可能であろう。ただし、本遺跡では遺構の配置のみがその構成を示唆するだけであり実証性に乏しい。周辺の該期集落跡とその台地内の住居跡配置や性格付けがなされて、初めて可能になる作業である。機会を改めたい。

さらに、本遺跡は書上古墳群に包括される地理的な位置にありながら、古墳・周堀などは検出されな

かった。古墳時代の遺構としては、Ⅳ区で検出された後期の住居跡と井戸が認められており、周辺の該期墓域として位置付けられる様相とは性格を異にするようだ。ただし、この住居跡は3軒のみの検出であり、また、隣接する調査区域外には濃密な遺物分布は認められず、おそらく大規模な集落には成り得ないと思われる。本遺跡北東に位置する天ヶ堤遺跡では古墳時代の住居跡7軒が報告されているが、本遺跡からは約0.8kmと距離を保つため、同一集落とは捉え難い。本遺跡の古墳時代住居跡は、地点的な小規模集落の一端と考えたい。

奈良・平安時代の集落は周辺の様相とは一線を画す。この時期の遺構としてはⅣ区4号住居跡を充てたが、出土遺物も希薄であり確定的ではない。また、9号溝より出土した瓦塔片の存在から周辺に寺院跡などを想起することも可能である。さらに、集石遺構の石製骨蔵器や、1号住上層の土坑・杯片を出土した21号土坑の在り方は、この時代には、本遺跡内には積極的な居住地域としてではなく、墓域などの特定地域としての用途が考えられる。

中世遺物の出土も希薄である。青磁片3点を見るが遺構などに密着した例ではない。遺構は出土遺物が希少なため、その覆土から判断を余儀なくされた。無遺物の土坑・溝の時期は、その判断基準に常に疑問符が付きまとうが、本遺跡の場合もその例にもれず、確証的な方法を見いだすことはできなかった。今後の問題点としたい。

その中で、9号溝は大規模なものであり、調査区域外で屈曲する平面形を呈する。瓦塔片を出土しているが、覆土の様相から中世段階に時期を求めた。調査着手時は、現代の地割りに沿うものとして、近世～現代の段階のものとも考えられた溝だが、屈曲し、西辺が必ずしも地割りに沿うものではなく、何等かの区画・用水を兼ねた性格を求めた経緯を持つ。また、9号溝の内縁に5号溝がほぼ直角に屈曲する形態を見せる。調査区域外に伸びるため、区画規模は不明だが検証の余地を多く残した溝である。この9号溝・5号溝はⅢ・Ⅳ区に認められている



第40図 遺構配置図

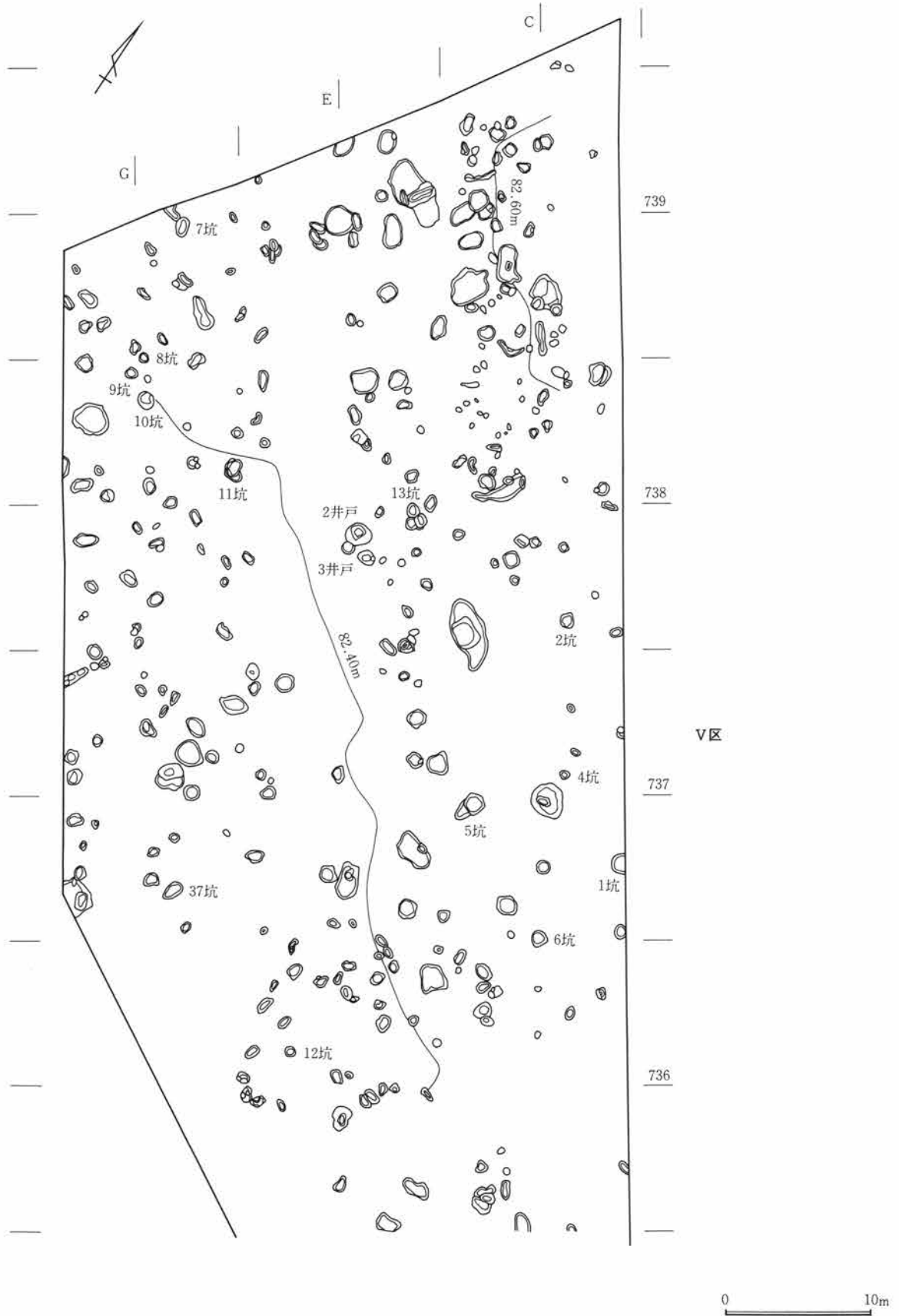


第41図 遺構配置図

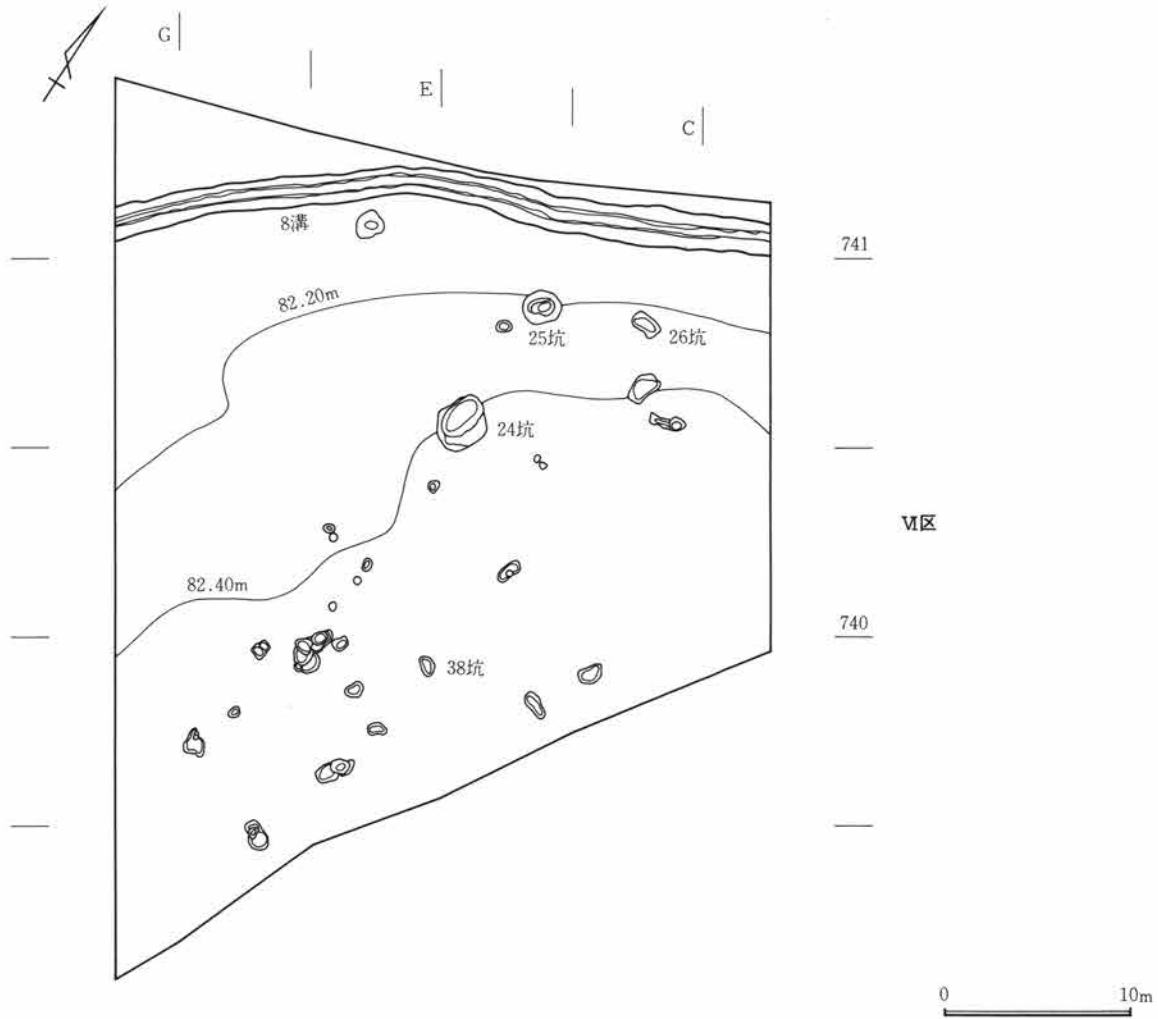




第42図 遺構配置図



第43図 遺構配置図



第44図 遺構配置図

が、VI区台地傾斜地区の下端で8号溝が検出されている。台地の縁辺に沿うものであり、覆土からおそらく近世段階の所産と捉えている。

掘立柱建物跡は2棟を考えた。柱穴の規模・配置から大規模な規則性を持つ建物ではなく、不規則な柱穴配置であることから、中世段階の所産と捉えた。

土坑群は、調査区各区で検出されている。その中では井戸が数基検出されており興味深い。中・近世に比定される井戸は3基であり、いずれも深さ1～2m程度の井戸の中では浅い深度を測る。それでも調査段階で湧水し、この地域の地下水位の高さを物語る。

以上のように、本遺跡の古墳時代以降の遺構密度は周辺遺跡に比して、決して濃いものではない。しかしながら、本遺跡が乗る台地の各時期毎の景観を考える際に、重要な要素を数多く提示するものといえよう。

本節では、各遺構の説明をし、遺構の帰属時期とその性格を明らかにすることを目的としたい。

(住居跡)

前述のように、住居跡は古墳時代3軒、平安時代1軒が検出されている。この4軒の住居跡は試掘段階でその存在は総て判明しており、調査手順・記録化などは比較的容易になされた。

住居跡は一般に居住を目的とした施設であり、そこから出土するものも、日常生活用品が主な出土遺物である。しかしながら、我々が調査によって目にする遺物は、言うなれば既に生活用品としての機能を果たさなくなった器具であり、当時の人々の廃棄行為によって我々に提供された廃棄物である。

故に、この廃棄行為による同時性や一括性を論証しなければ、それらの遺物に細かな時間的な検証・空間的な位置付けを与えることが不可能な作業である。しかし、現段階の発掘調査の各種の方法論は、常に限界性が見え、問題点も多い。

書上本山遺跡の住居跡調査も、上記各種調査方法を踏まえ、従来の調査方法に準拠した経緯を持つが、同様に1軒の住居跡から得られる情報の限界性を追認することになった。反省点として明記する。

1号住居跡 (第45～50図)

Ⅳ区中央の東端で確認された古墳時代後期の大型の住居跡である。Ⅲ区の低地部に向かう緩やかな傾斜地に占地し、南西約5mに3号住が近接する。

平面形はおおよそ5.0×5.0mの正方形を呈し、確認面からの壁高は約50cmを測り、比較的しっかりした掘り込みの住居である。

床面はほぼ平坦で中央部から南側にかけて硬化した床が確認された。ロームによる地床である。

柱穴は主柱穴4本を正位置で検出した。4本とも径50～75cm、深さ55～70cmの均一した掘り方である。

貯蔵穴は竈南側の壁際に設けられており、平面形は60×40cmの長方形で、深さは70cmを測る。壁周溝は竈部分を除き全周する。

竈は東壁中央南よりに位置し、130×110cmの中型の規模である。壁外への煙道の突出は短い。構築材は白色粘土とローム層土を主体にし、袖材に顕著に

現れていた。天井部などの焼土化した構築材は焚口部などに堆積していたが量的には少なかった。掘り方調査では煙道の掘り込みが方形に検出された。

本住居跡には明瞭な床下遺構は認められなかったが、掘り方調査において、間仕切り溝が確認された。溝は北側と西側に2条一組で検出され、幅約10cm・深さ約10cmの浅いものである。おそらく床面上の施設であろう。

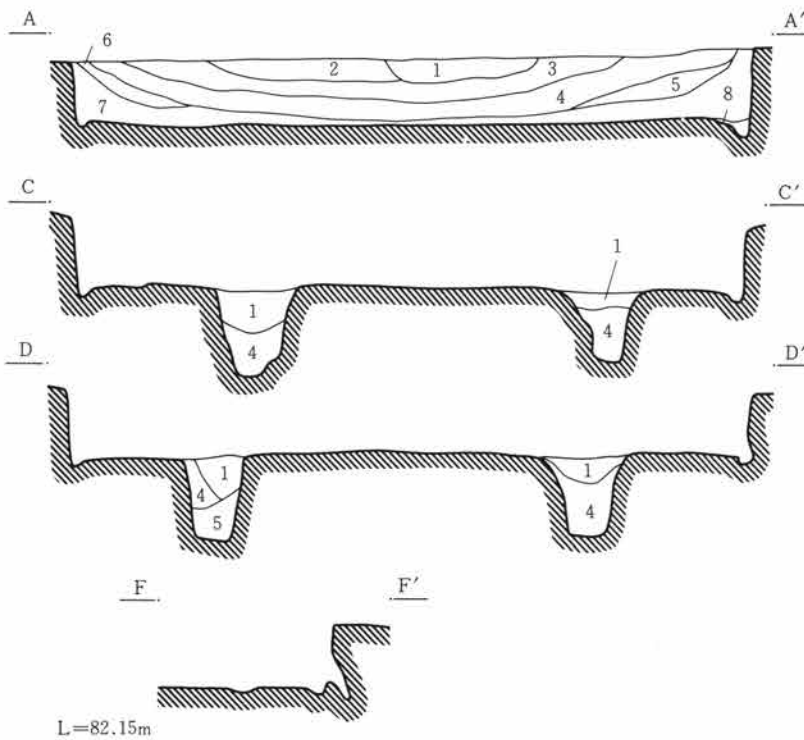
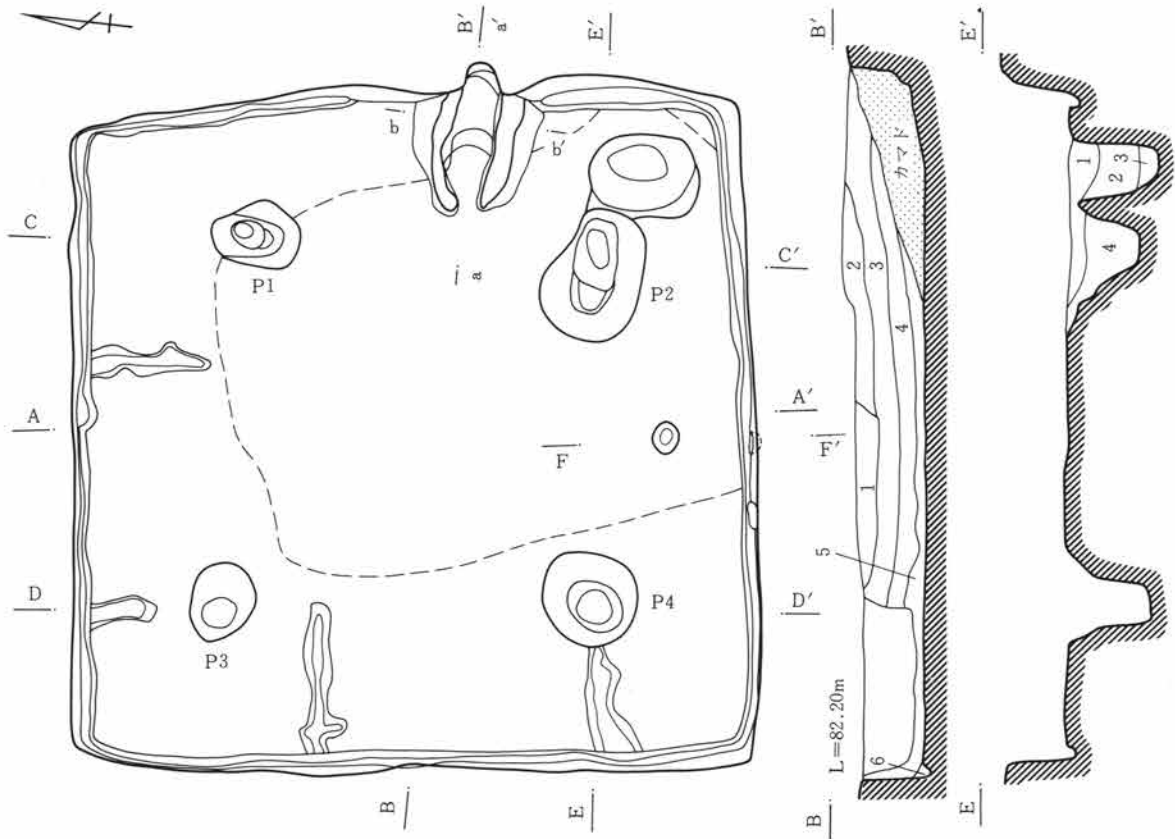
このほかの遺構としてはP2と4のほぼ中央やや南よりに浅い小穴が検出された。この小穴に対応するように南壁中央にわずかな凹みが認められ、調査時は昇降施設—例えば「はしご穴」としての機能も想起されたが2つの小穴間に横位に出土した長甕やはしごの構造など問題点が多く、積極的な確証はない。

遺物は、本遺跡の住居跡の中では充実した出土量である。その多くが覆土・床面などからの出土であり、竈からの遺物は意外に少なかった。

杯類は5点を図示したが、1・2は覆土上層からの出土で、本住居跡に帰属する遺物ではない。恐らく上層に掘り込まれた土坑の存在が予想される。

3・4は外稜を持つこの段階の普遍的な杯。3は竈南側の東壁下端で出土した。4の底部は覆土から、口縁部は竈周辺から出土している。5は内面黒色処理を施された杯で竈南の床上で出土した。6の須恵器横瓶(杯蓋?)は西壁側辺の覆土下層より出土している。

甕の出土量が多い。7は細片だが床面中央の床上より出土した。9の小型甕は完形である。東壁竈北側の壁下端で11の長甕などと集中して出土した。10の丸胴甕破片は覆土下層より出土した。集中する傾向は見いだせなかった。11の長甕底部と胴部下半は北東隅で、胴部上半や口縁部は底部の南方で集中して19などと出土した。12の甕口縁部も北東隅に床直で出土している。13は竈西で覆土下層より、14は貯蔵穴より出土している。15の甕底部は恐らく14と同一個体であろう。貯蔵穴より出土している。16・17の甕底部は覆土からの細片。18は南壁中央の下端で



1号住居跡

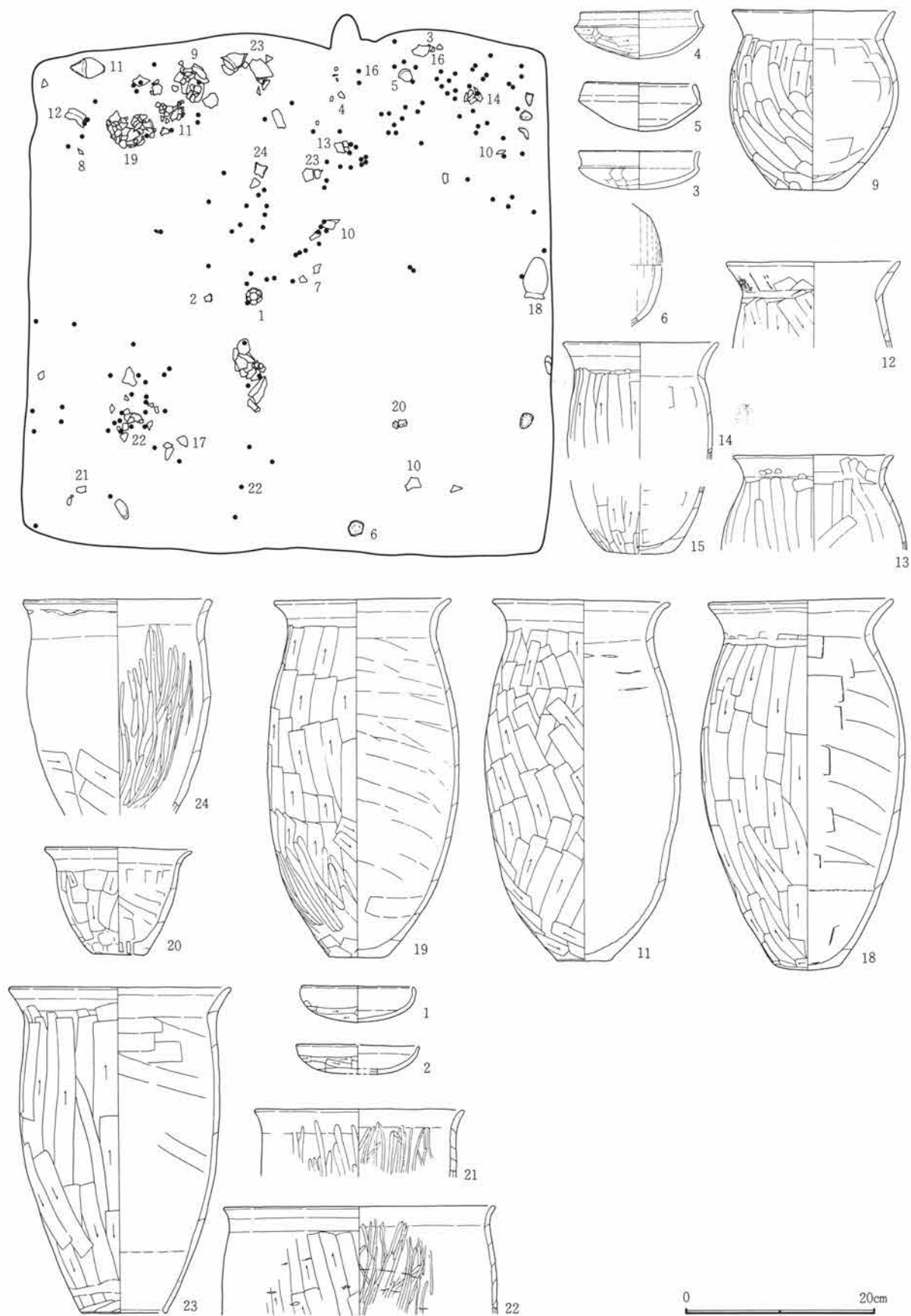
- 1 黒色土 As-C含 しまり弱い
- 2 黒褐色土 As-C含 しまり弱い
- 3 黒褐色土 As-C・ローム粒含 しまり弱く砂質
- 4 暗褐色土 ローム粒多く含 しまり弱く砂質
- 5 黒褐色土 As-C・ローム粒極少量含 しまり弱い
- 6 黄褐色土 鈍い色調 As-C・ローム粒を多く含
- 7 褐色土 ローム粒多く含 緻密
- 8 褐色土 ローム粒多く含 緻密

貯蔵穴・ピット

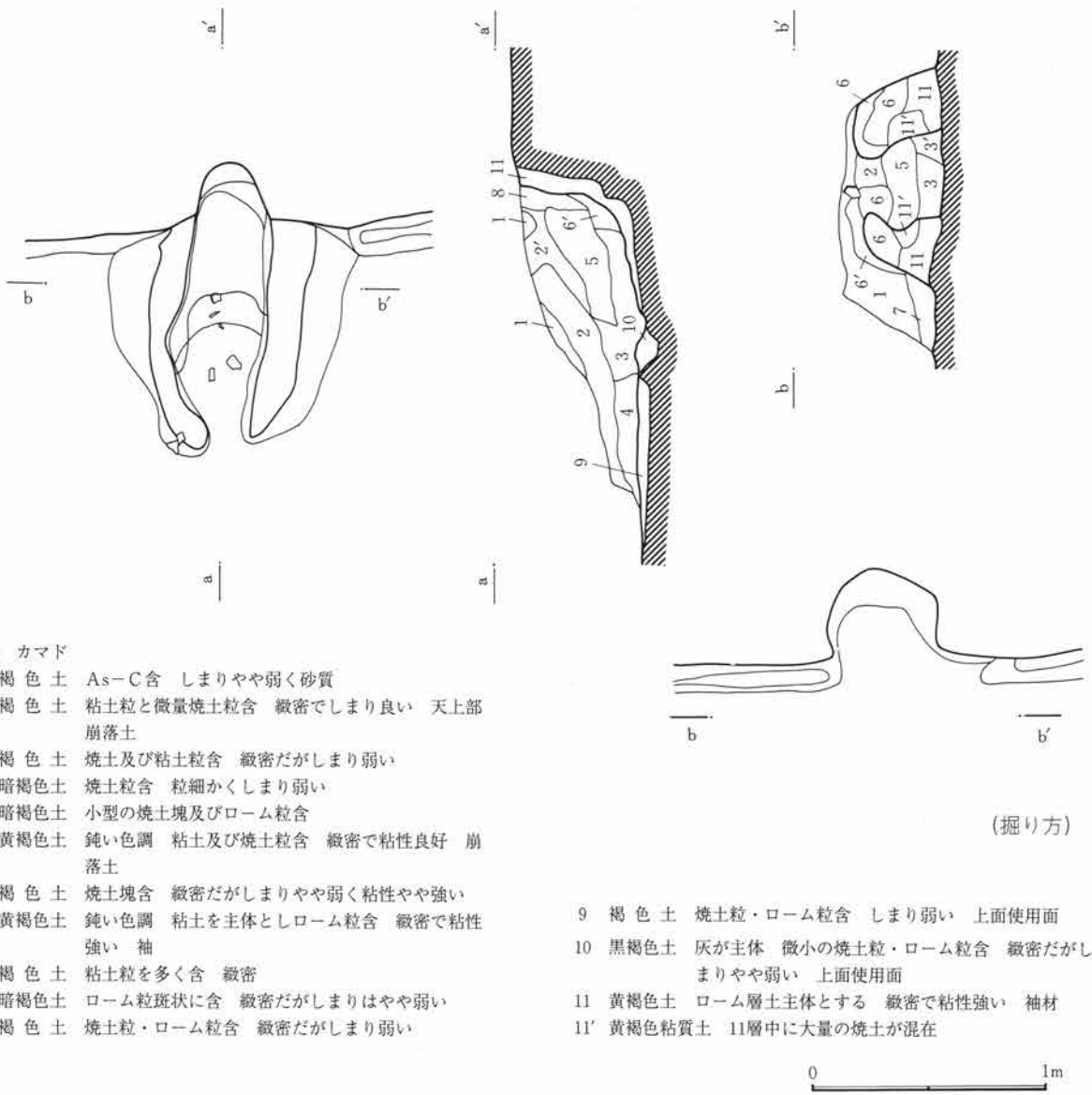
- 1 暗褐色土 ローム粒含 緻密
- 2 黒褐色土 ローム粒を多く含 緻密だがしまり弱い
- 3 灰黄褐色土 均質で含有物無 緻密で粘性強い
- 4 褐色土 ローム粒多含 緻密
- 5 暗褐色土 ローム粒含 しまり弱い



第45図 1号住居跡



第46図 1号住居跡遺物分布



- 1 住 カマド
- 1 褐色土 As-C含 しまりやや弱く砂質
  - 2 褐色土 粘土粒と微量焼土粒含 緻密でしまり良い 天上部崩落土
  - 2' 褐色土 焼土及び粘土粒含 緻密だがしまり弱い
  - 3 暗褐色土 焼土粒含 粒細かくしまり弱い
  - 3' 暗褐色土 小型の焼土塊及びローム粒含
  - 4 黄褐色土 鈍い色調 粘土及び焼土粒含 緻密で粘性良好 崩落土
  - 5 褐色土 焼土塊含 緻密だがしまりやや弱く粘性やや強い
  - 6 黄褐色土 鈍い色調 粘土を主体としローム粒含 緻密で粘性強い 袖
  - 6' 褐色土 粘土粒を多く含 緻密
  - 7 暗褐色土 ローム粒斑状に含 緻密だがしまりはやや弱い
  - 8 褐色土 焼土粒・ローム粒含 緻密だがしまり弱い

- 9 褐色土 焼土粒・ローム粒含 しまり弱い 上面使用面
- 10 黒褐色土 灰が主体 微小の焼土粒・ローム粒含 緻密だがしまりやや弱い 上面使用面
- 11 黄褐色土 ローム層土主体とする 緻密で粘性強い 袖材
- 11' 黄褐色粘質土 11層中に大量の焼土が混在

第47図 1号住居跡カマド

横位で出土した。19は9・11・12などと、北東隅の床直上で、押し潰された状態で出土している。20の小型甑は柱穴4の覆土中で出土した。

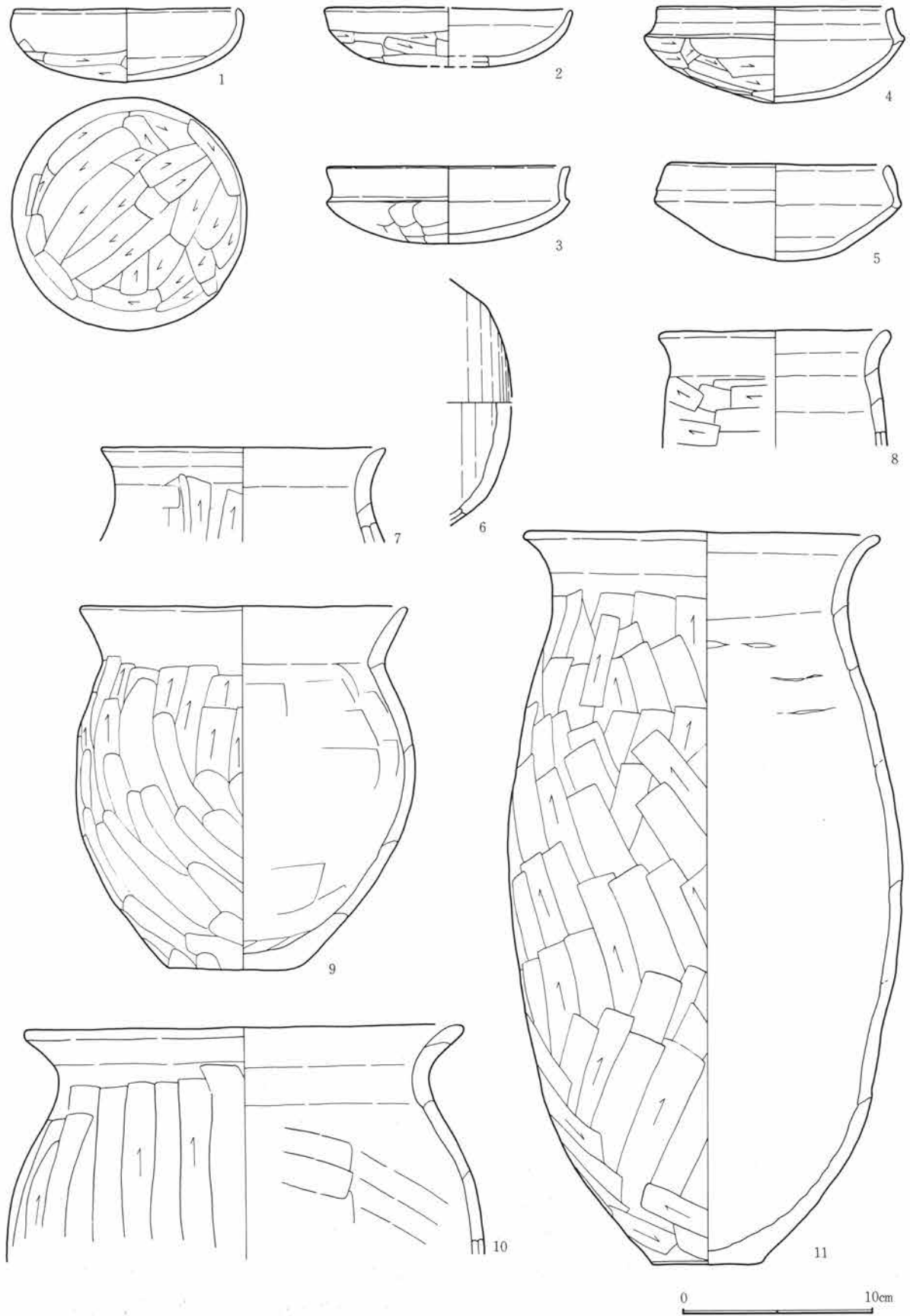
21・22の薄手の甕（甑？）口縁部破片は覆土上層より出土したが、1・2の杯と同様で別種の遺構の存在も考えられよう。検討を要する。23の甑は竈北側に接するように横位で出土した。24の小型甕は竈西で覆土下層より出土している。底部が丁寧に欠けており、あるいは甑としての二次利用も考えられよう。

以上のように、出土遺物の豊富な本住居跡だが、その殆どが古墳時代後期（鬼高期）に属し、6世紀後半の所産と考えた。器種組成も杯類・小型甕・長胴甕・甑と一応のセットは揃っているといえよう。

ただし、本住居跡の覆土上層には、奈良時代の土坑が重複しており、それらの遺物の分離が必要であろう。即ち、1・2・21・22は本住居跡に帰属し得ない遺物である。

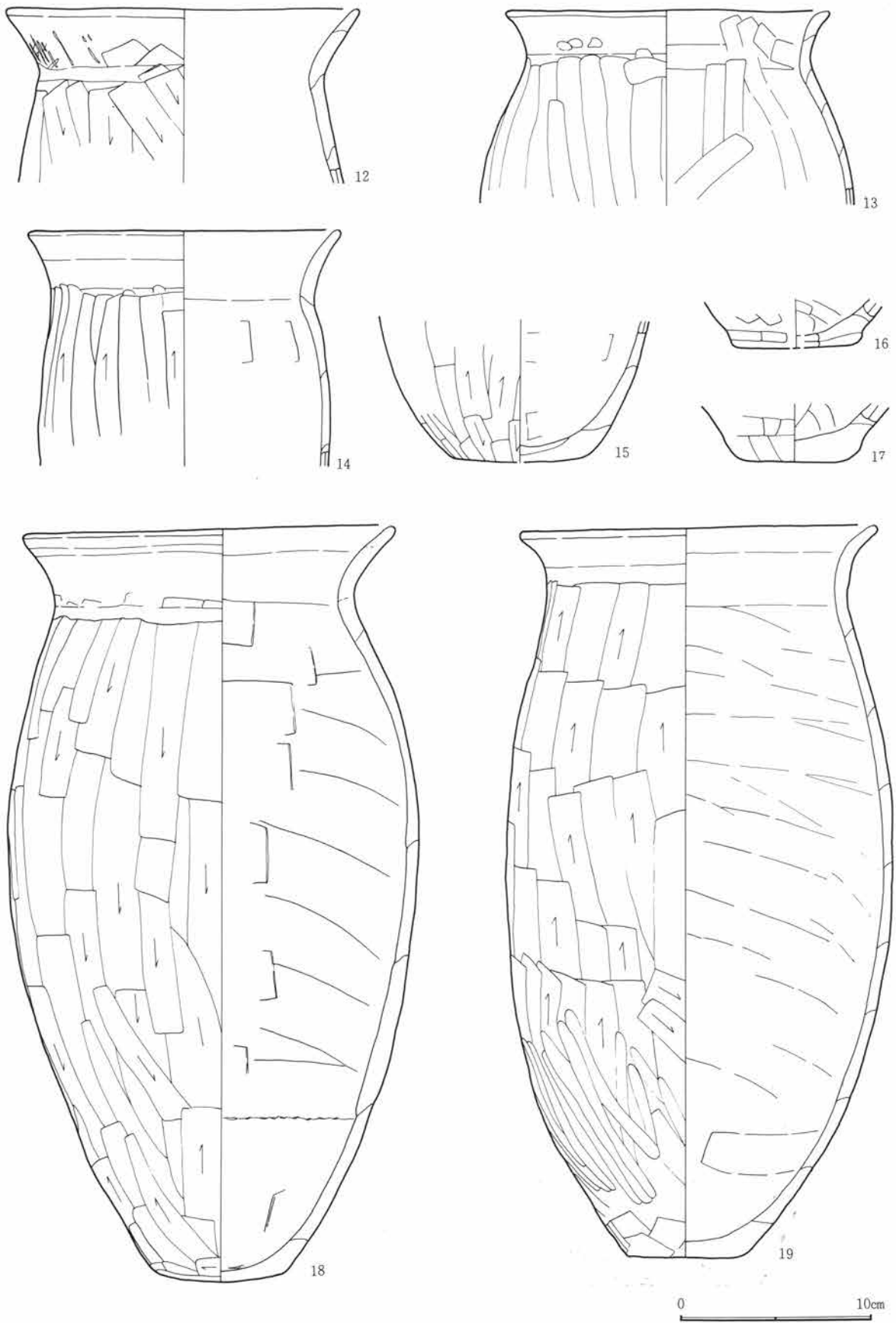
また、住居跡施設としても「はしご穴」様の存在が東壁に認められるが、他の住居跡に類例もなく本報告では問題提起にとどめたい。

Ⅲ章 書上本山遺跡

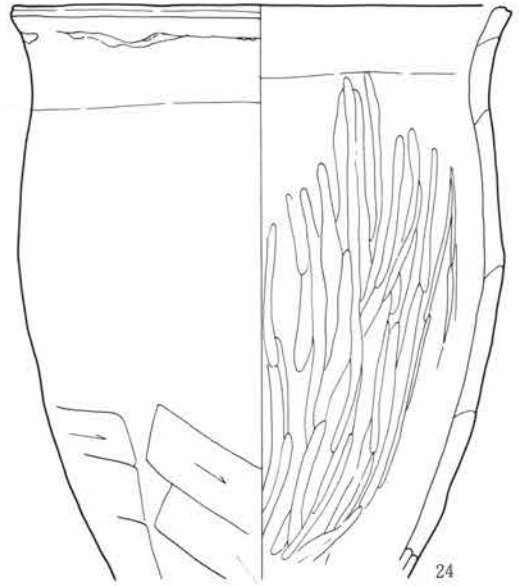
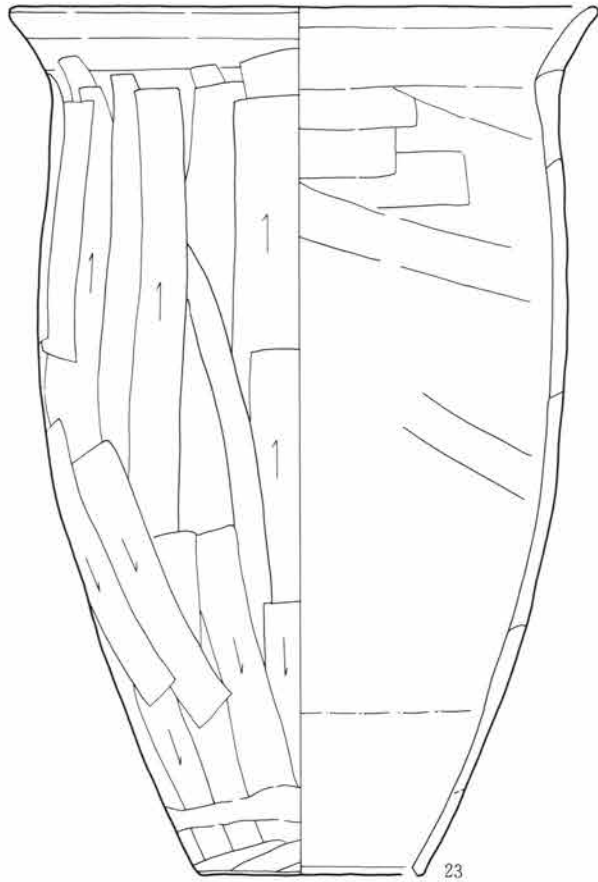
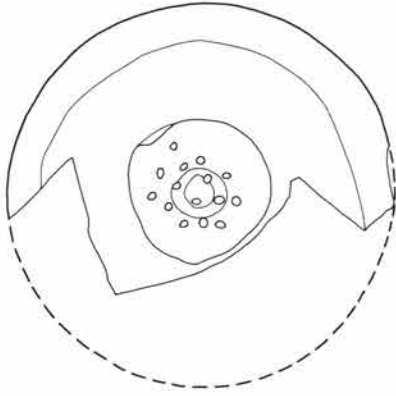
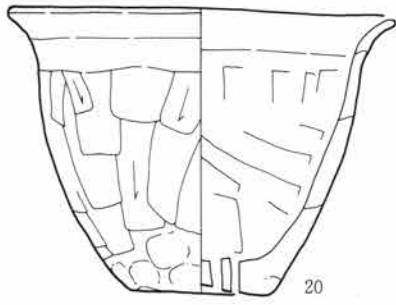


第48図 1号住居跡出土遺物



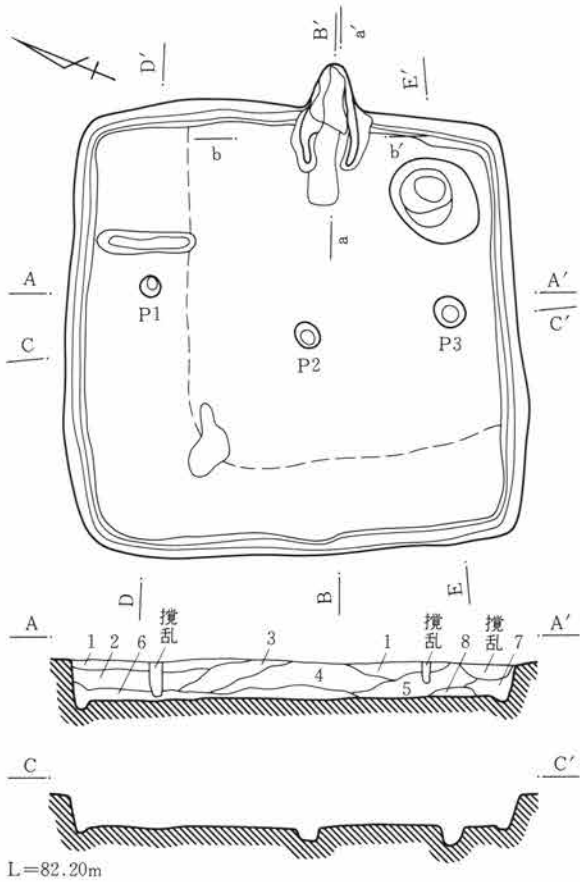


第49図 1号住居跡出土遺物



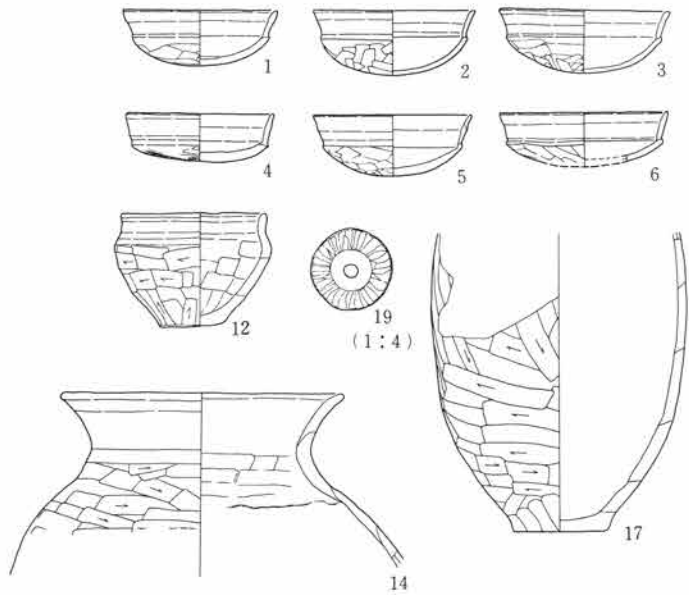
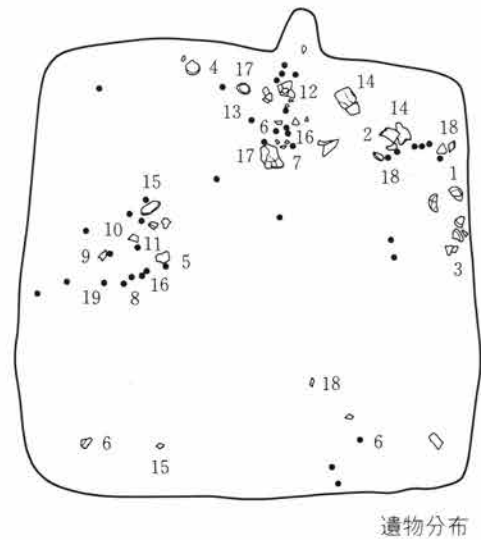
0 10cm

第50図 1号住居跡出土遺物



2号住居跡

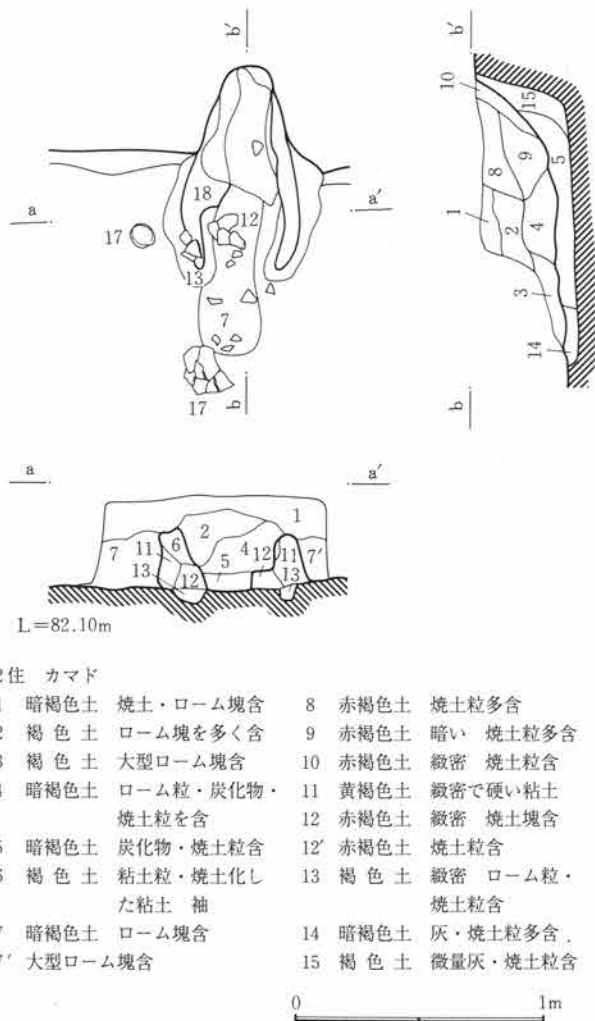
- 1 暗褐色土 多量のローム粒、少量のAs-Cを含む
- 2 黒褐色土 大型のローム塊・As-Cを多く含
- 3 黄褐色土 鈍い色調 ローム層土主体 As-C少量含
- 4 暗褐色土 大型のローム塊を多く含 As-Cは微量含
- 5 褐色土 ローム塊を多く含 2層ブロックも含
- 6 暗褐色土 小型のローム塊・炭化物を少量含
- 7 褐色土 ローム層土主体 均質でしまりも良好
- 8 褐色土 ローム層土主体 黒褐色土塊を少量含



0 2m

0 20cm

第51図 2号住居跡



- 2住 カマド
- |                           |                         |
|---------------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色土 焼土・ローム塊含           | 8 赤褐色土 焼土粒多含            |
| 2 褐色土 ローム塊を多く含            | 9 赤褐色土 暗い 焼土粒多含         |
| 3 褐色土 大型ローム塊含             | 10 赤褐色土 緻密 焼土粒含         |
| 4 暗褐色土 ローム粒・炭化物・<br>焼土粒を含 | 11 黄褐色土 緻密で硬い粘土         |
| 5 暗褐色土 炭化物・焼土粒含           | 12 赤褐色土 緻密 焼土塊含         |
| 6 褐色土 粘土粒・焼土化した粘土 袖       | 12' 赤褐色土 焼土粒含           |
| 7 暗褐色土 ローム塊含              | 13 褐色土 緻密 ローム粒・<br>焼土粒含 |
| 7' 大型ローム塊含                | 14 暗褐色土 灰・焼土粒多含         |
|                           | 15 褐色土 微量灰・焼土粒含         |

第52図 2号住居跡カマド

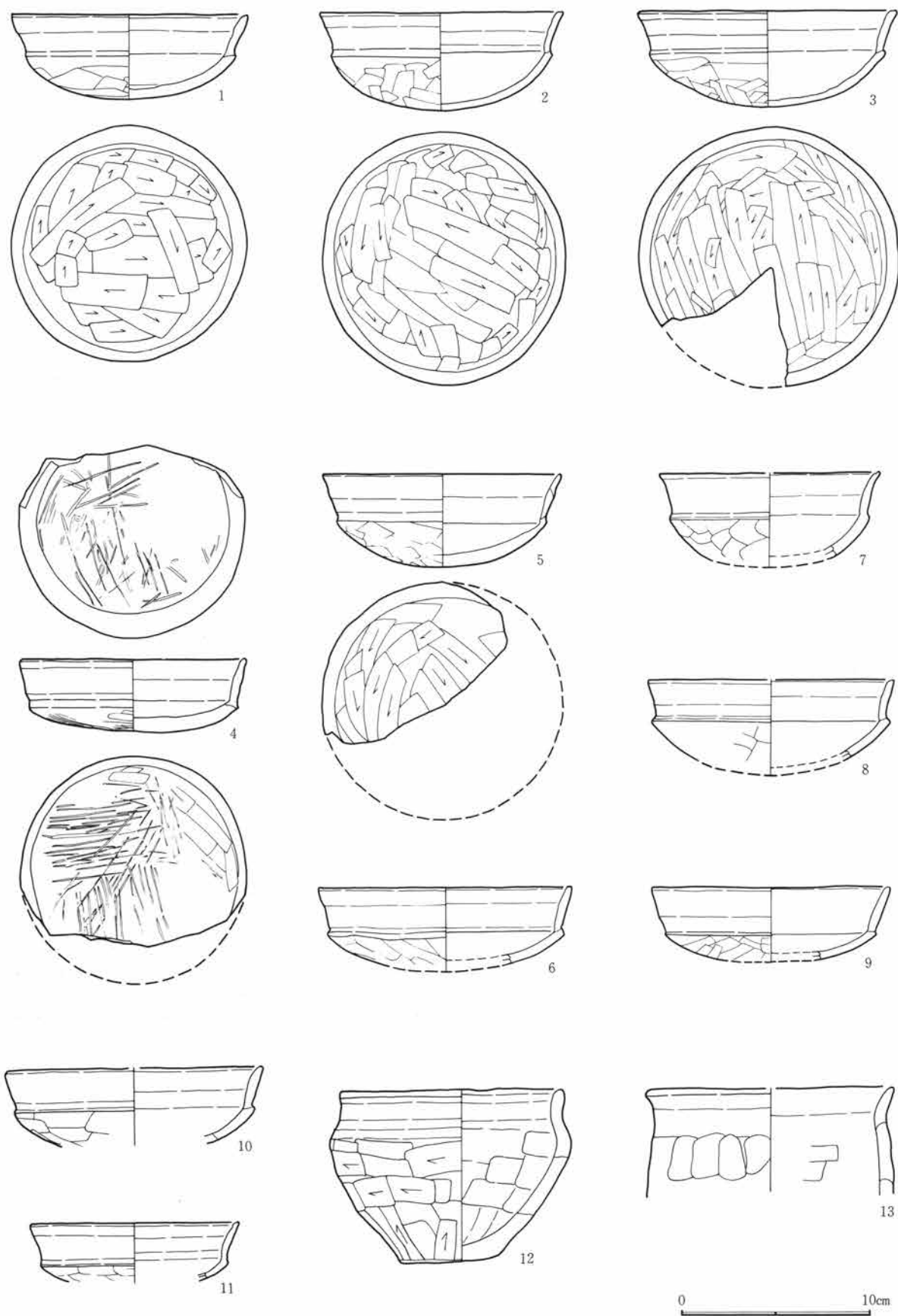
2号住居跡 (第51~54図)

IV区中央の東端で検出された。本遺跡の4軒の住居跡では北端にあたる。南東約11mに1号住を見る。この1号住に比べ本住居はやや小型の規模を測り、平面形は約3.5×3.5mの隅丸正方形を呈する。壁高は約30cmを測る。床面は北側に僅かな凹凸が認められるもののほぼ平坦であり、地山のロームを踏み叩いて硬くしめる。特に竈から床中央部南側にかけての広い範囲に硬化面が認められた。柱穴はしっかりした掘り込みを持つピットが検出されなかった。住居跡の南北を軸をずらして3ヶの小穴が検出されたが、浅く小規模なため、1号住のように積極的に断言はできない。位置的には中央の小穴にその可能性を見いだすことができよう。貯蔵穴は竈南側に径約60cm、深さ約80cmを測る円形の土坑が検出された。

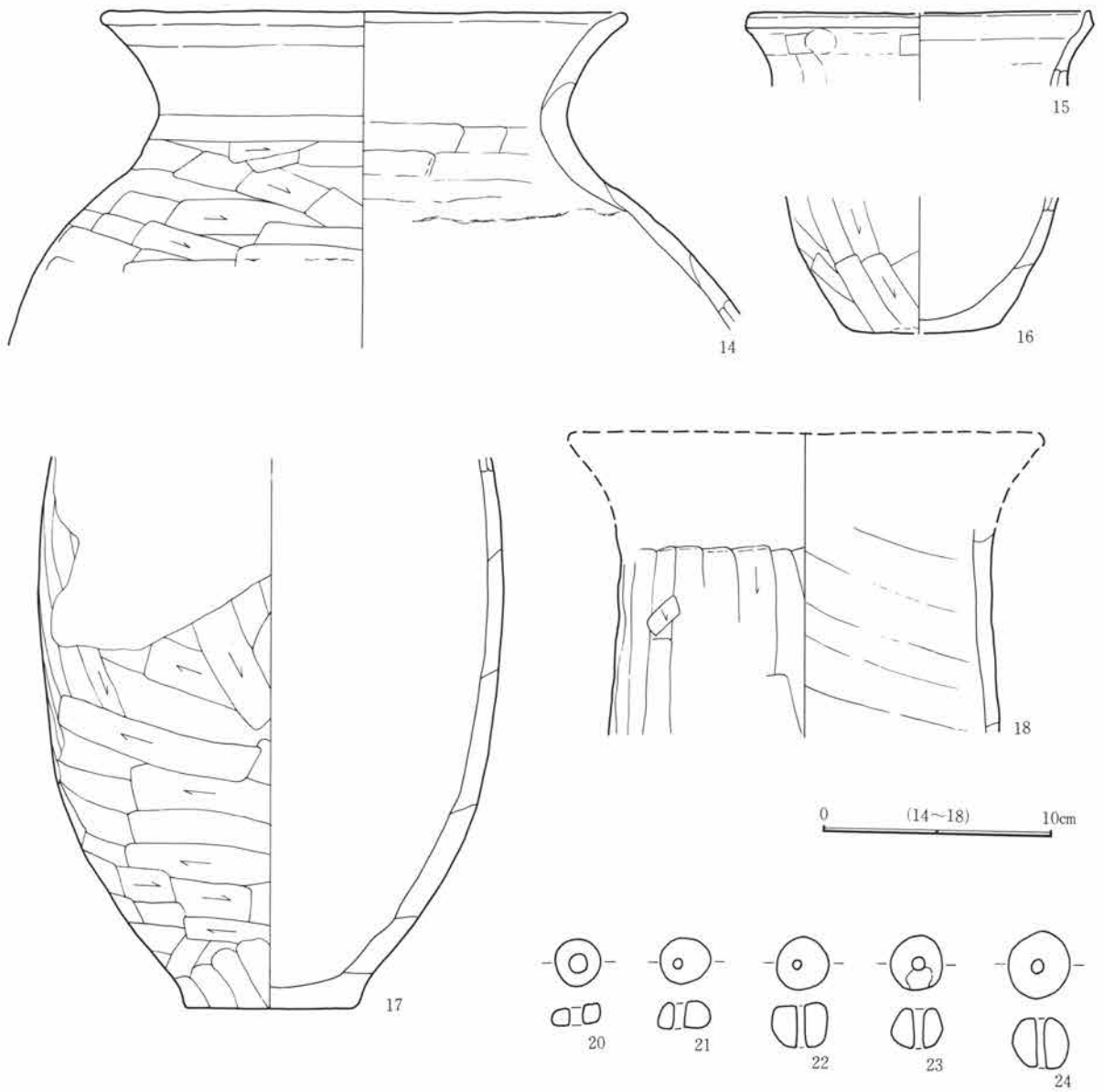
周溝は竈部分を除き全周する。竈は東壁の中央やや南よりに構築されている。煙道は30cmほど壁外に突出し、袖などの構築材はロームと粘土で構成されしっかりした作りである。使用面には焼土粒・炭化物が比較的多く残存し、床面にまで散布が認められた。なお、袖除去後、下面に小ピットが列状に検出された。おそらく袖の心材として黄褐色の粘土材を組み込んだ痕跡と思われる。掘り方調査では、1号住と同様に明瞭な床下遺構は検出されなかった。床面調査で検出されていた北壁からの間仕切り溝に加え西壁から2条新たに確認した。

遺物は杯類を中心に比較的豊富な出土量である。1は南壁下端より床面からやや浮いた状態で、2は貯蔵穴より、3は1や南側に接してまとまった状態で、4は竈の北側の床直から出土した。6は竈の前面と住居跡全体の主に床直、7も竈前面の床直から出土している。5・8~11は住居跡中央のやや北寄りの覆土から出土した。12の小型甕はおもに竈内の火床面からまとまって出土した。13は竈袖上より出土し、竈崩落に伴う散逸と捉えられよう。丸胴甕口縁部14は竈前から南側にかけて床直上及び貯蔵穴内で出土した。15は小片ながら床直、16の底部は竈前面の床面と5などと同レベルでの覆土の出土である。17の長胴甕の底部は竈北で逆位で、胴部破片は竈前面で出土した。18の長胴甕頸部破片は覆土下層より出土している。紡錘車19は北壁近くで、また西壁下端に小玉が1点出土している。小玉は住居跡の覆土すべてを水洗別したところ4点が検出された。ただし、覆土を一括して水洗別したため、出土位置や層位に不明点が残る。地点別の水洗別作業が望まれたのであろう。反省点である。

本住居跡はその出土遺物から、1号住とほぼ同時期の古墳時代後半に帰属するものと考えられる。出土土器の様相からは1号住よりも若干先行する。器種組成は杯類が充実し、小形甕・丸胴甕・長胴甕に伴う。また、紡錘車と土製小玉3点・土製白王1点・石製白王1点が出土した例は特筆されよう。



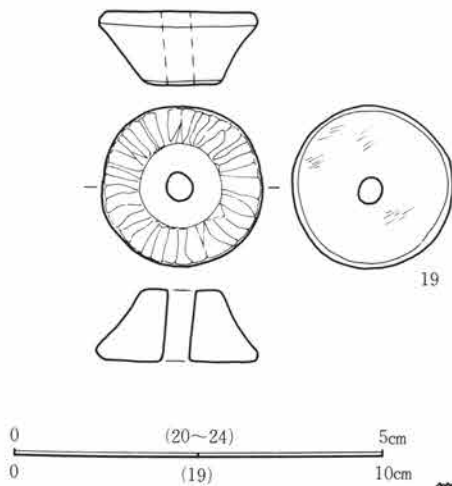
第53図 2号住居跡出土遺物



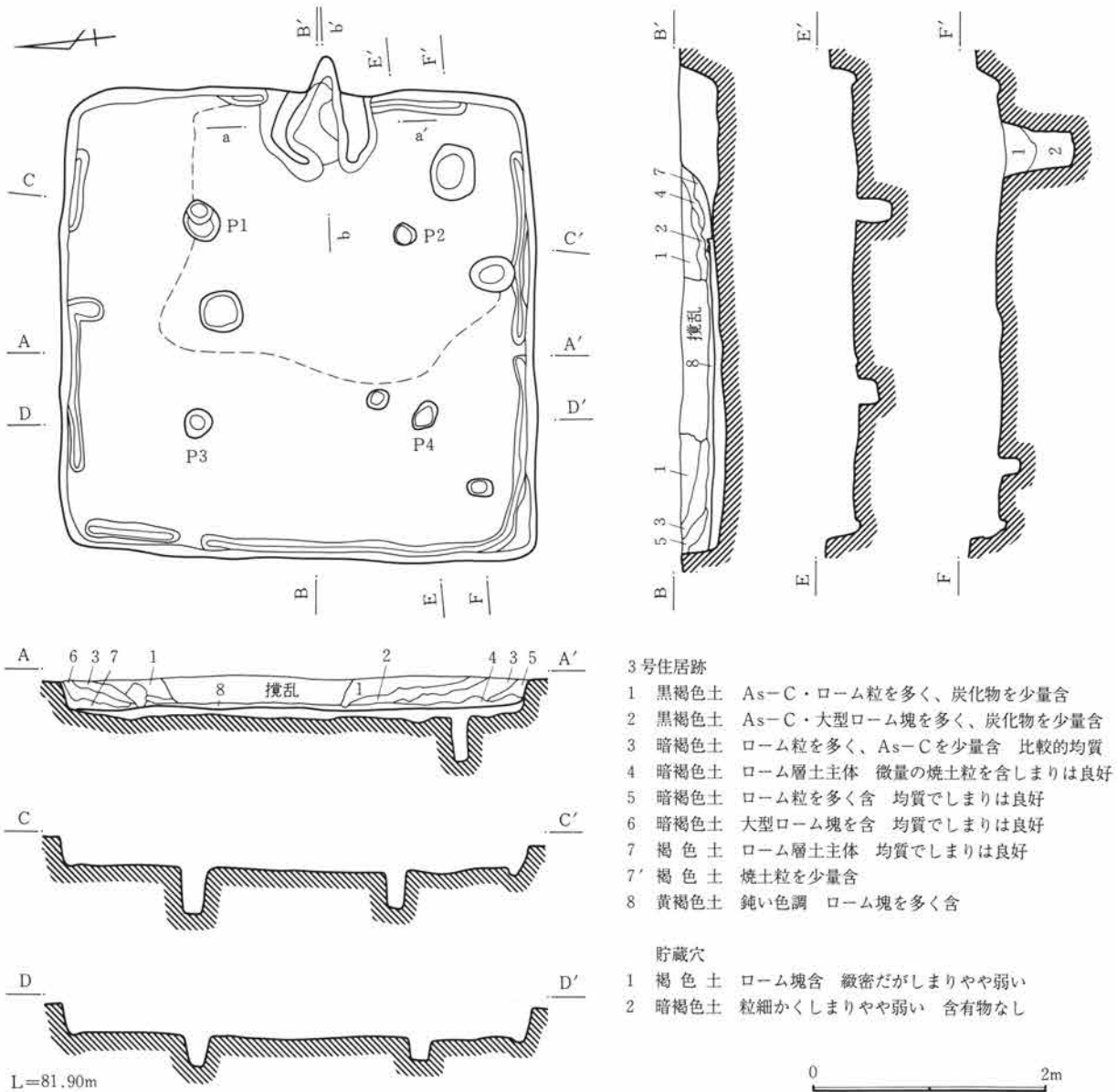
第2表 2号住居跡出土白玉・小玉観察表

No	名称	出土位置	残存状態	材質	径	高さ	重量	色調
20	白玉	覆土	完形	滑石	0.75	0.30	0.19	—
21	白玉	覆土	完形	土製	0.70	0.40	0.15	鈍黄褐
22	小玉	覆土	完形	土製	0.75	0.65	0.32	黒褐
23	小玉	覆土	ほぼ完形	土製	0.80	0.60	0.29	鈍褐
24	小玉	覆土	完形	土製	0.95	0.70	0.52	鈍褐

単位：cm・g



第54図 2号住居跡出土遺物



第55図 3号住居跡

3号住居跡 (第55～57図)

IV区中央で検出された。北東約5mに1号住、南西約3mに4号住が近接する。

平面形はおおよそ4.0×4.0mの正方形を呈し、1号住に次ぐ大きさを測る。確認面からの壁高は約25cmを測り、比較的しっかりした掘り込みを持つ。

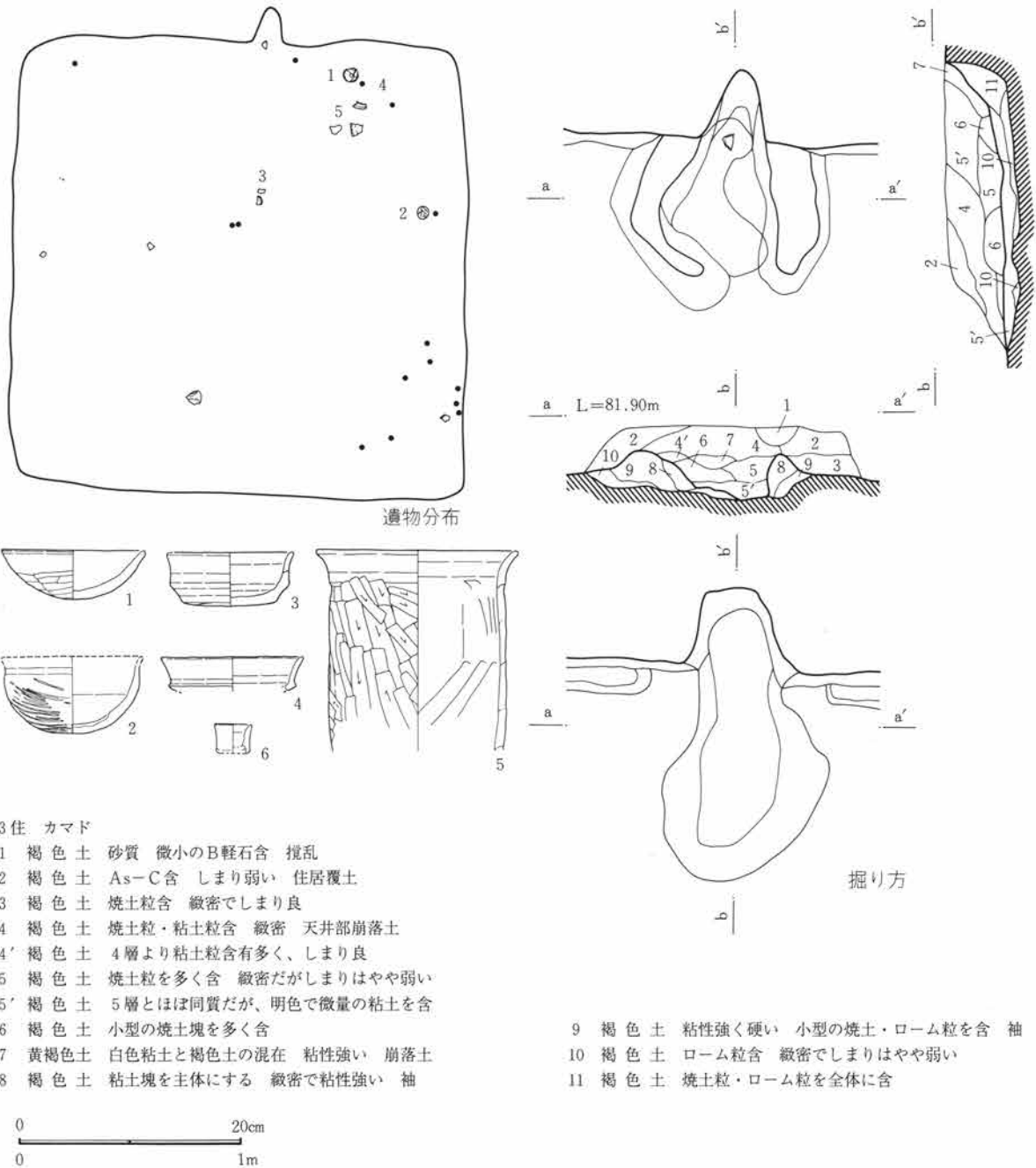
床面はほぼ平坦だが中央部と南東隅にかけて緩やかに凹む傾向が看取される。貼り床を持たない地床で、竈周辺から中央部にかけて硬化面が認められた。

床面上に8ヶのピットを確認したが、そのうち柱

穴に特定されるものは、その配置からP1～4であろう。4本ともしっかりした掘り込みである。

貯蔵穴は竈南側に検出された。規模は約50×40cmの不整長方形を呈し、深さ約60cmとしっかりした掘り込みを測る。壁周溝は南東・北東・北西隅と北壁の一部を除いて設けられる。また、北壁の周溝から短い太めの溝が伸びており、あるいは間仕切り溝の痕跡かも知れない。

竈は東壁中央やや南よりに設けられ、約110×100cmの中型の規模である。壁外への煙道の突出は



3住 カマド

- 1 褐色土 砂質 微小のB軽石含 攪乱
- 2 褐色土 As-C含 しまり弱い 住居覆土
- 3 褐色土 焼土粒含 緻密でしまり良
- 4 褐色土 焼土粒・粘土粒含 緻密 天井部崩落土
- 4' 褐色土 4層より粘土粒含有多く、しまり良
- 5 褐色土 焼土粒を多く含 緻密だがしまりはやや弱い
- 5' 褐色土 5層とはほぼ同質だが、明色で微量の粘土を含
- 6 褐色土 小型の焼土塊を多く含
- 7 黄褐色土 白色粘土と褐色土の混在 粘性強い 崩落土
- 8 褐色土 粘土塊を主体にする 緻密で粘性強い 袖
- 9 褐色土 粘性強く硬い 小型の焼土・ローム粒を含 袖
- 10 褐色土 ローム粒含 緻密でしまりはやや弱い
- 11 褐色土 焼土粒・ローム粒を全体に含

第56図 3号住居跡

短い。構築材は粘土とローム層土を主体とし袖材に顕著だった。天井部などの崩落土は焼土化し、かなりの量が焚き口部に堆積していた。袖は北側が湾曲するが、崩落土との区別の結果である。本住居跡の竈は、掘り方を持つ特徴が挙げられる。不整楕円状の形態で浅く掘りくぼめられ、ローム塊が少量認められた。

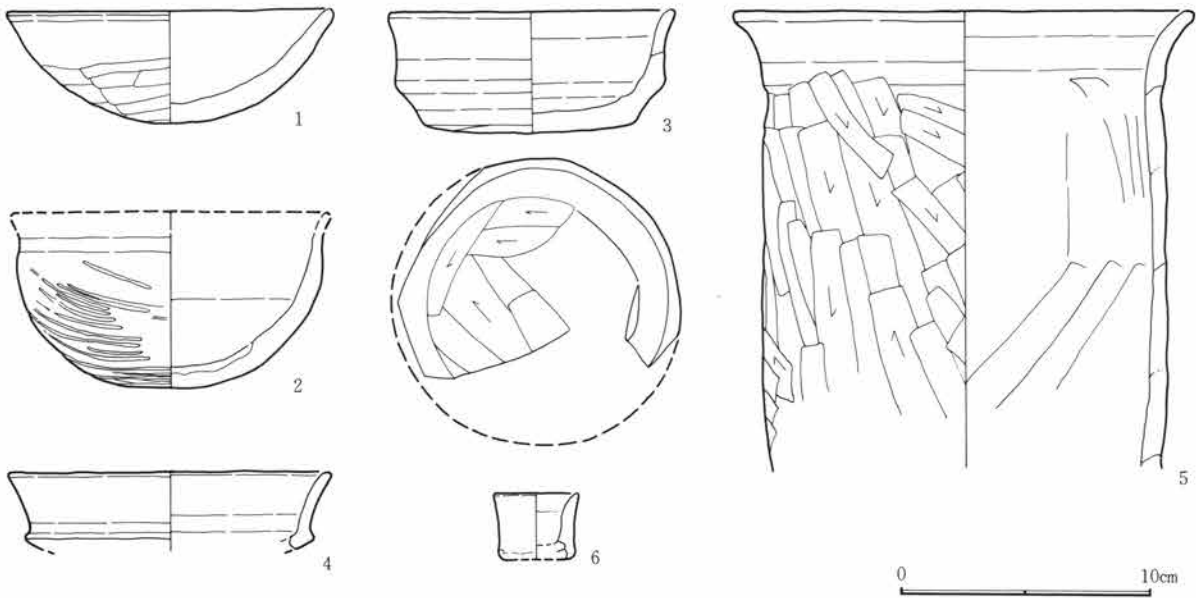
竈掘り方以外に本住居跡の床下遺構は認められな

かった。

遺物は少ない。竈南側の床上から1・5、南壁下の床上から2の杯が出土したが、5の甕も破片状態の出土であり集中する傾向は見られない。また、3の体部に屈曲を持つ杯は床直。4は覆土中から、6の手捏ね土器も覆土からの出土である。

以上のように、3号住居跡は1号住居跡と長軸を





第57図 3号住居跡出土遺物

同じにし、その平面規模などは相似的な様相を呈する。出土遺物は少なく、その器種組成は貧弱な組成といえよう。遺物の様相から1号住よりは若干先行する傾向が認められるが、杯類の内外面には敲打痕や線状痕が認められ、通常の使用ではなかったようだ。また、手捏ね土器の出土も他の住居跡とは様相を異にすることからも、本住居跡の出土遺物は時間軸を求める作業には援用できない。

#### 4号住居跡 (第58図)

IV区中央で3号住の南西約3mに近接して確認された。1辺約2.5mの隅丸正方形を呈す平面形で、壁高は約30cmと比較的しっかりした掘り込みである。

床面は平坦面を基調とするが、北西隅に凹凸が見られる。床構成土は、ローム塊を主に使用した貼床土である。上面を叩き締め、特に硬化面が竈から中央部分にかけて認められた。

柱穴は中央部分に大小2ケのピットが確認されているが、大型のP1を柱穴として捉えたい。

壁周溝は竈部分を除きほぼ全周する。

竈は南東隅で検出された。壁外に約20cmほど突出した煙道部で、壁内の規模も小型である。構築材は

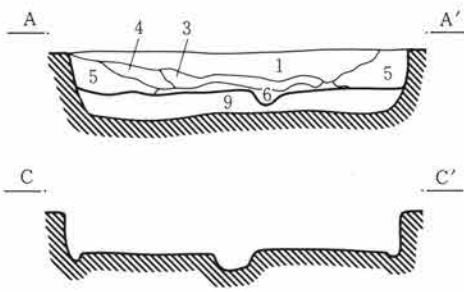
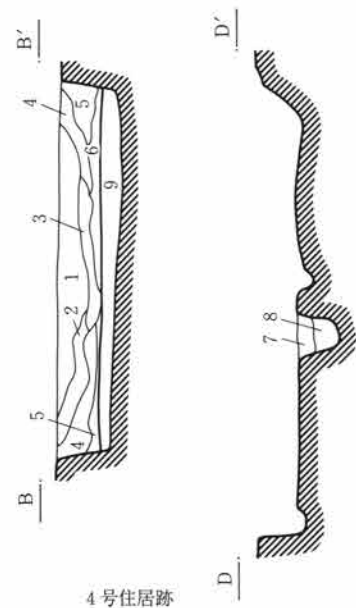
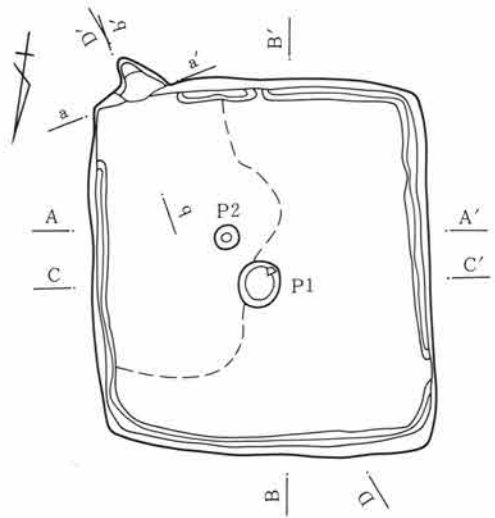
粘土を主としているが、袖・天井部などは特定できず、残存率は極めて悪い。焼土・灰も少量検出されただけである。ただし、竈構築の掘り込みは深く、約50cmを測る。

掘り方調査において、貼床の存在は認められたが、床面下には明瞭な床下遺構は検出されなかった。

住居跡覆土は、自然堆積状態を呈し、As-Cを少量含む褐色土を基本としている。この傾向は他の住居跡と同様だが、色調は1～3号住居跡が黒褐色～暗褐色を呈する覆土に対し、本住居跡は褐色土が主で、やや明るい色調といえよう。この色調差が時期差によるものであれば、本住居跡は、1～3号住居跡よりも後出する要素として考えられよう。

遺物も極めて少ない。土師器細片少量と砥石が出土しているが、図示し得たのは砥石のみである。

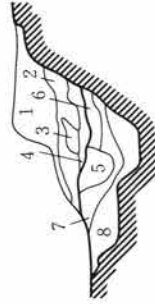
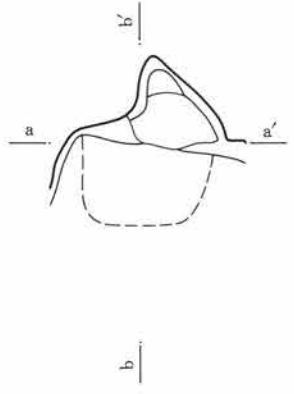
本住居跡の時期は出土遺物からは求めることはできない。竈が住居跡隅に設けられるという特徴から、平安時代の所産としたが問題は残る。



L=81.90m

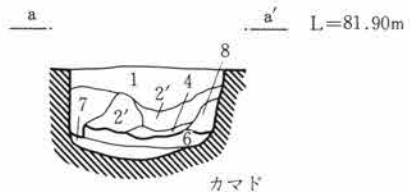
4号住居跡

- 1 褐色土 As-C・ローム塊を多く含 粘性は乏しい
- 2 褐色土 As-Cを少量含 粘性はやや富む しまりもある
- 3 黒褐色土 ローム塊を少量含 比較的均質な層である
- 4 黒褐色土 ローム塊・少量のAs-Cを含
- 5 黄褐色土 鈍い色調 ローム層土を主体とする均質な層
- 6 黄褐色土 鈍い色調 ローム層土を主体とする 3層塊も混入
- 7 褐色土 大型のローム塊を含 均質でしまりも良好
- 8 黄褐色土 大型のローム塊を含
- 9 黄褐色土 ロームを主体とし、褐色土を部分的に混入



カマド

- 1 褐色土 少量の焼土粒・粘土塊を含 しまりは良好
- 2 褐色土 焼土粒・粘土小塊を多く含 しまりは良好
- 2' 2に類似するが、粘土塊が大型化する
- 3 灰褐色土 粘土粒・塊層・焼土粒を含 やや粘質
- 4 暗褐色土 少量の炭化物・粘土粒・焼土粒を含
- 5 黒褐色土 少量の炭化物・ローム粒を含
- 6 暗褐色土 ローム粒を多く含 しまりは著しく乏しい
- 7 暗褐色土 ローム塊を多く含 しまりは乏しい
- 8 黄褐色土 ローム塊と褐色土塊の混在



L=81.90m

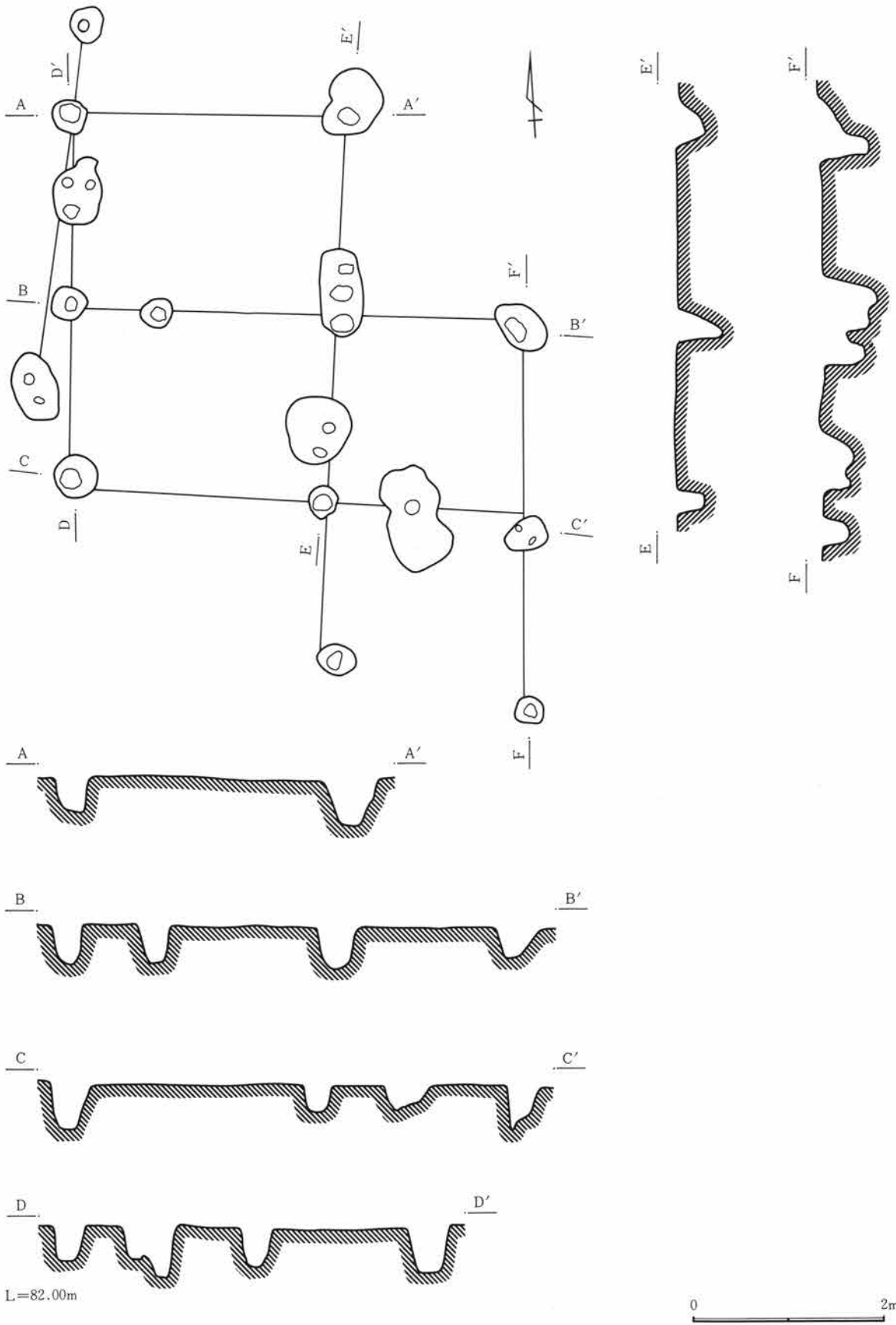
カマド



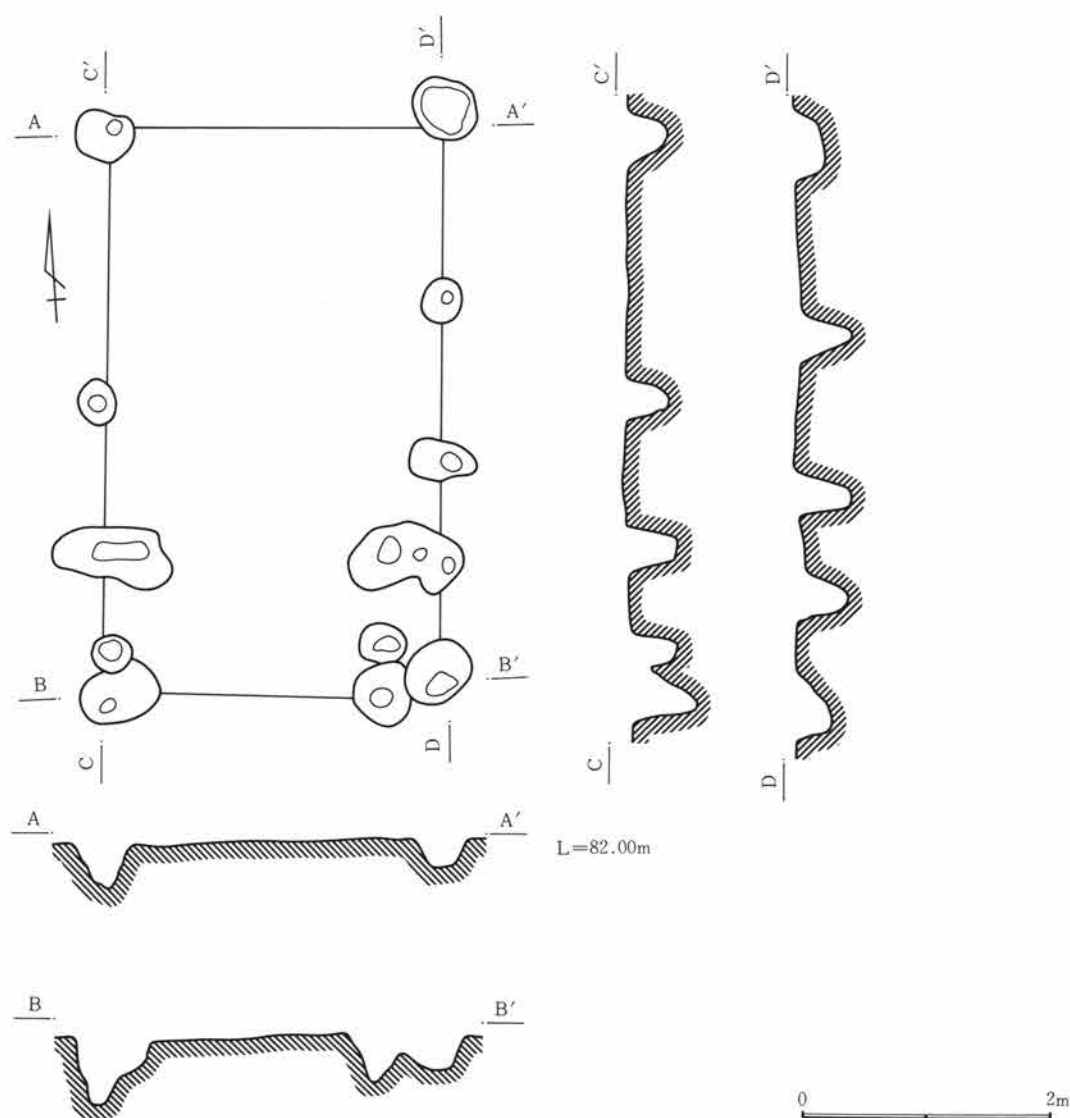
出土遺物(礫石)



第58図 4号住居跡



第59図 1号掘立柱建物跡



第60図 2号掘立柱建物跡

(掘立柱建物跡)

IV区中央西端で確認された。2棟の掘立柱建物跡である。集石遺構の調査中に確認された小ピット群によるものであり、その重複関係から集石遺構より新しい。周辺には同様に小ピットが群在しているが、殆どが浅く、柱穴としては認定できないものであり、本掘立柱建物跡はその中で良好なピットを選び、検出したものである。

1号掘立柱建物跡 (第59図)

1×2間の長方形の建物を基本として、その他の小ピットが直線的な配置を見せる。調査区域外に伸びる様相もあり、全容は把握できなかったが、長方

形の建物は、約4.0×2.8mの北側が僅かに広がるピット配列である。

2号掘立柱建物跡 (第60図)

1号掘立柱建物跡の北西に近接する。約4.5×2.7mの長方形を呈するピット配列である。長軸をほぼ南北に持ち、西辺と東辺のピット数とその配置が不規則である。短軸方向を結ぶ中間位置にピットは無いが全体形状は比較的整った長方形である。

両掘立柱建物跡とも出土遺物は無いため、時期的な特定はできないが、集石との重複関係や、ピット配列から中世段階の所産と考える。

**(土 坑)**

本遺跡の土坑は、遺物を伴うものが少なく、明確に時期を確定できる判断材料に乏しい。さらに、その性格も土坑群の規模・配置に規則性が認められず、用途不明と言わざるを得ない。故に、判断材料としては平面形・深さ・覆土の様相から、ある程度の傾向を把握しておきたい。また、本遺跡で検出されたすべてのピットや落ち込みをすべて報告するのではない。上記のピット・落ち込みには木根によるものや、自然的落ち込みが混じり、本報告では明らかに人為的な要素を持つものを主体にして説明する。

本遺跡の土坑平面形には、円形・楕円形・不整形と量的に少ない割には多様性を帯びる。深さ・断面形も、掘り込みのしっかりしたものや浅く皿状のものもある。このなかで、円形で掘り込みの比較的しっかりした土坑はその覆土に黒褐色砂質土が埋められる共通項を持つ。これらの円形土坑は他の遺跡でも確認されており、時期も中・近世に求められている。本遺跡の円形土坑も、1号土坑に代表されるように黒褐色砂質土にAs-Bを含むことから、中世以降の所産と考えられよう。

各土坑の概略的な説明をする。

**1号土坑**

V区北東の調査区壁に半分だけ検出した。調査区域外に伸びる土坑だが、恐らく円形を呈するものであろう。比較的しっかりした掘り込みを持つ。

**2号土坑**

V区中央の北よりで検出された。やや不整の円形を呈し、掘り込みもしっかりしている。黒曜石の小剥片が出土したが本土坑に伴うものではない。覆土は1号土坑と同様である。

**3号土坑**

V区南東の調査区壁で検出された。やや不整の円形で掘り込みはしっかりしている。覆土は1号土坑と同様である。

**4号土坑**

V区中央やや北東よりに位置する。不整円形を呈

し、浅い掘り込みである。覆土は1号土坑と類似。

**5号土坑**

V区中央やや北東よりで4号土坑の南西6mに位置する。現代の攪乱が重複する。重複部分を除けば円形でしっかりした掘り込みである。

**6号土坑**

V区中央やや東より検出され、1号土坑の南6mに位置する。円形の平面形を呈し、浅い皿状の断面形である。

**7号土坑**

V区西よりで検出された。長楕円の不整形を呈する。掘り込みはしっかりしているが、覆土は不均質土である。近代の所産か。

**8号土坑**

V区西よりに検出され、9号土坑の北に近接する。小型の円形土坑。掘り込みは浅いがしっかりしている。覆土は1号土坑に類似。

**9号土坑**

V区西よりで検出され、8・10号土坑と近接する。小型の円形土坑。掘り込みも深くしっかりしている。覆土は1号土坑に類似。

**10号土坑**

V区西よりに位置し、9号土坑の東に接する。不整楕円形を呈し、坑底面も不連続である。近代か。

**11号土坑**

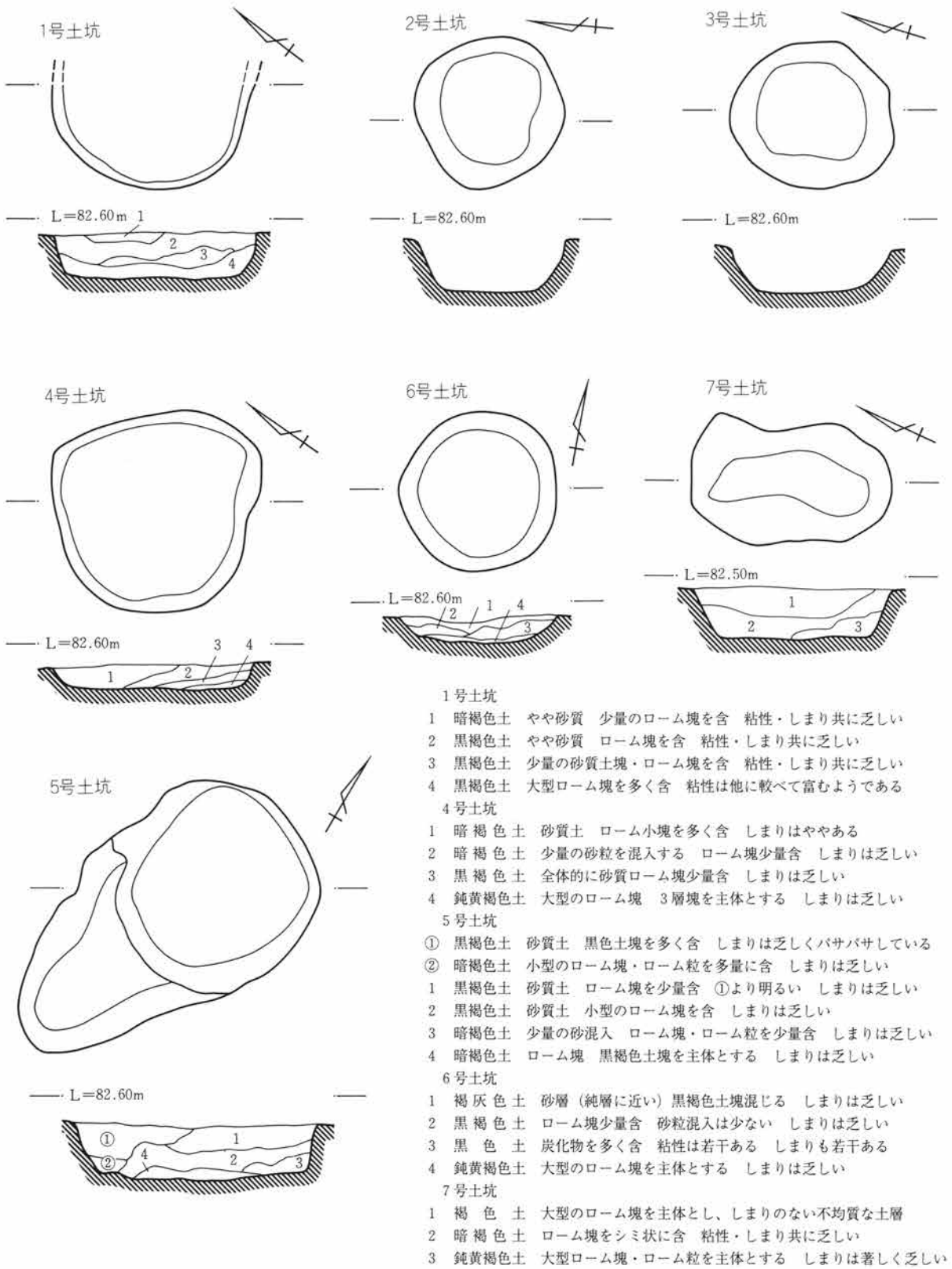
V区中央やや西よりで検出され、2号井戸の西約8mに位置する。不整形を呈するが、数個の土坑・ピットの重複の可能性もある。掘り込みはしっかりする。覆土は暗褐色土の不均質土で、おそらく近代の所産であろう。

**12号土坑**

V区南東に位置する。小型の円形土坑で、浅い皿状の断面形である。自然石の集石を出土するが、性格は不明である。褐色土を覆土とし、その様相から近代の所産と考えた。

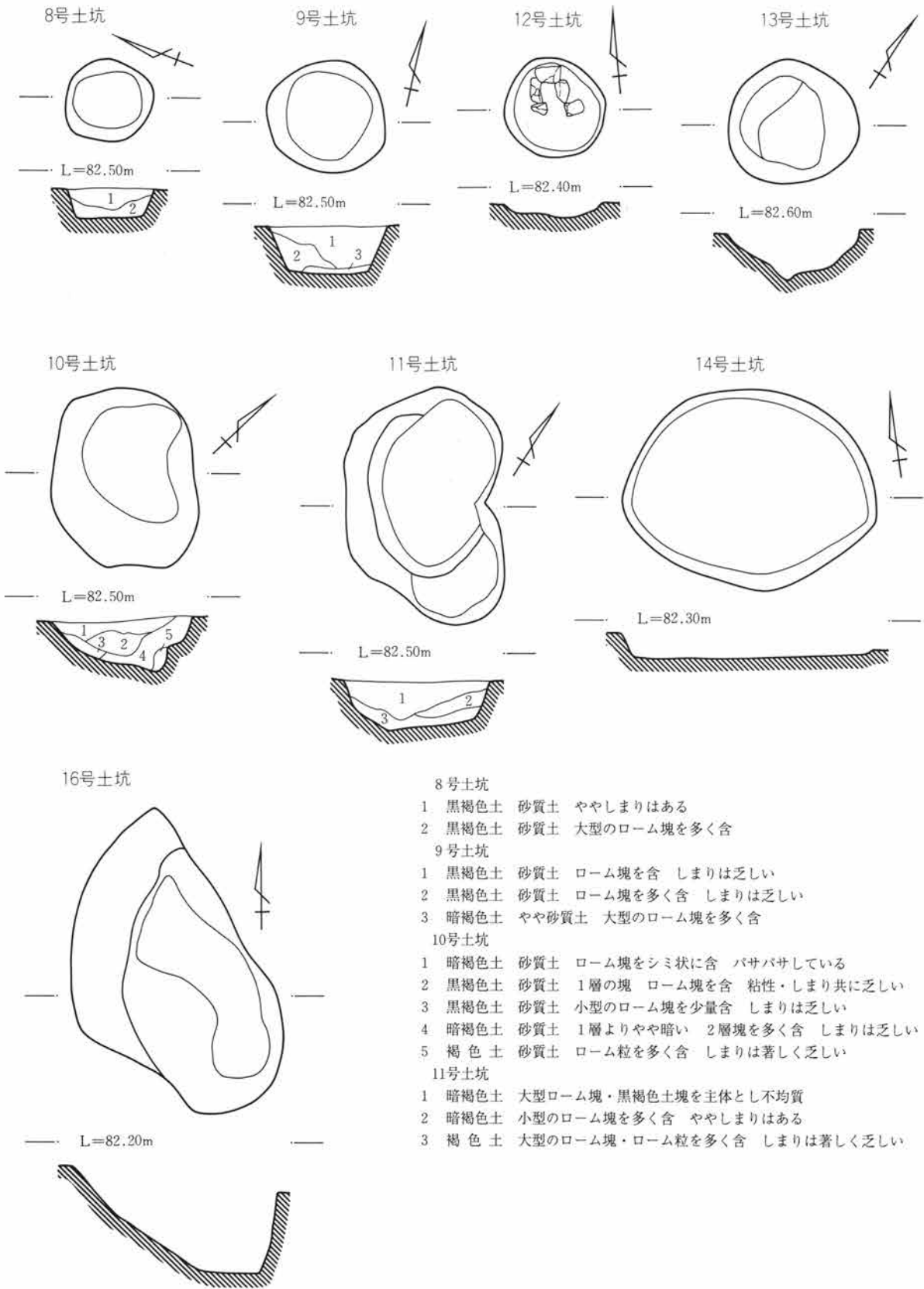
**13号土坑**

V区中央やや北西より検出され、2号井戸の北東に位置する。円形の平面形だが、坑底面は不連続で



0 2m

第61図 土坑



8号土坑

- 1. 黒褐色土 砂質土 ややしまりはある
- 2. 黒褐色土 砂質土 大型のローム塊を多く含

9号土坑

- 1. 黒褐色土 砂質土 ローム塊を含 しまりは乏しい
- 2. 黒褐色土 砂質土 ローム塊を多く含 しまりは乏しい
- 3. 暗褐色土 やや砂質土 大型のローム塊を多く含

10号土坑

- 1. 暗褐色土 砂質土 ローム塊をシミ状に含 パサパサしている
- 2. 黒褐色土 砂質土 1層の塊 ローム塊を含 粘性・しまり共に乏しい
- 3. 黒褐色土 砂質土 小型のローム塊を少量含 しまりは乏しい
- 4. 暗褐色土 砂質土 1層よりやや暗い 2層塊を多く含 しまりは乏しい
- 5. 褐色土 砂質土 ローム粒を多く含 しまりは著しく乏しい

11号土坑

- 1. 暗褐色土 大型ローム塊・黒褐色土塊を主体とし不均質
- 2. 暗褐色土 小型のローム塊を多く含 ややしまりはある
- 3. 褐色土 大型のローム塊・ローム粒を多く含 しまりは著しく乏しい

0 2m

第62図 土坑

遺構としての積極性をもたない。

14号土坑

Ⅳ区北西で検出された。大型の不整楕円形を呈し、浅い掘り込みである。

15号土坑

現代の攪乱坑であり、図化に及ばない。

16号土坑

Ⅳ区中央やや西よりで検出され、9号溝が東側を走る。不整形で、掘り込みは深いものの、壁・坑底面は不連続であり、遺構としての確証は少ない。

17号土坑

Ⅳ区中央やや西よりで16号土坑の西方6mで検出された。不整形を呈する平面形で小ピットが重複する。坑底面上より自然石が出土したが、周辺の集石遺構の影響であろう。

18号土坑

Ⅳ区北西で14号土坑に近接した位置で検出された。大型の不整円形を呈し、坑底面にピットを設ける。

19号土坑

Ⅳ区東よりで5号井戸の北東に近接する。やや不整の円形を呈する。掘り込みはしっかりしている。覆土は褐色土の埋土。近代か。

20号土坑

Ⅳ区西で3号溝と4号溝に挟まれた位置で検出された。大型で方形を基調とした不整形土坑。調査当初は住居跡として期待されたが、浅く、小ピットを設ける土坑になった。

21号土坑

Ⅳ区西端で検出された。長楕円形の平面形で、掘り込みは深いものの坑底面は不連続である。土師器杯片が出土している。

22号土坑

Ⅳ区中央南西よりの調査区域端で検出された。不整形の平面形で、断面形は東に向かって傾斜する。覆土は21号土坑に類似する。

23号土坑

Ⅳ区中央南西よりで22号土坑の東に近接する。円

形の平面形で、掘り込みは浅いものの比較的しっかりしている。覆土は21号土坑に類似。

24号土坑

Ⅵ区中央の傾斜地で旧石器試掘時に確認された土坑。大型の不整形を呈する。東側に段をもち、不整の断面形を見せるが、坑底面は平坦である。覆土はローム塊を主体とする褐色土であろう。近代か。

25号土坑

Ⅵ区北よりで旧石器試掘時に検出された。24号土坑の北に近接する。不整楕円形の平面形で、段をもつ断面形を見せる。覆土の様相は24号土坑と同様で、近代の所産と捉えた。

26号土坑

Ⅵ区北よりで25号土坑北東に近接して、旧石器試掘時に検出された。不整楕円形を呈し、比較的しっかりした掘り込みを見せる。覆土は1号土坑などと同様に暗褐色～黒褐色の砂質土を基調としており、中世段階の所産と捉え得る。

27号土坑

Ⅳ区西よりに位置する。北西側を3号溝が走る。平面形は不整円形で、掘り込みは深くしっかりしている。自然石が出土しているが、本土坑に伴うものではない。暗褐色土の不均質土を覆土とし、近代に時期を求めた。

28号土坑

Ⅲ区中央南西よりの調査区端、4号井戸の北西3mで検出された。不整形で坑底面も不連続である。覆土は褐色土で近代の所産であろう。

29号土坑

Ⅲ区北西に位置する。東側に5号溝が近接する。小型の円形を呈し、比較的深い掘り込みをもつ。坑底面は平坦で、覆土は褐色土である。

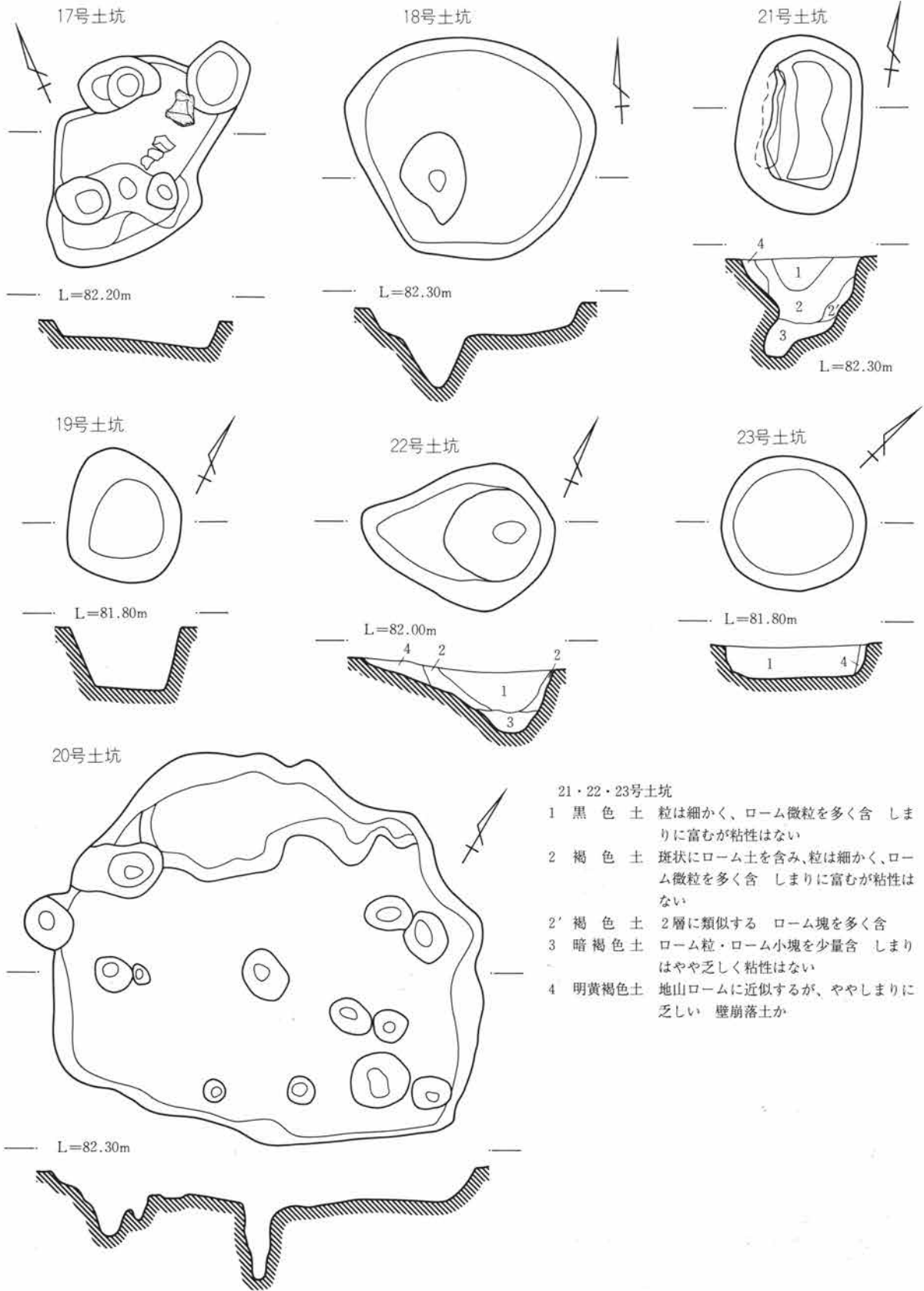
30号土坑

Ⅲ区北東の調査区域端で検出された。小型の円形を呈し、掘り込みも深くしっかりしている。自然石を伴うが、本土坑に帰属するものかは不明。

31号土坑

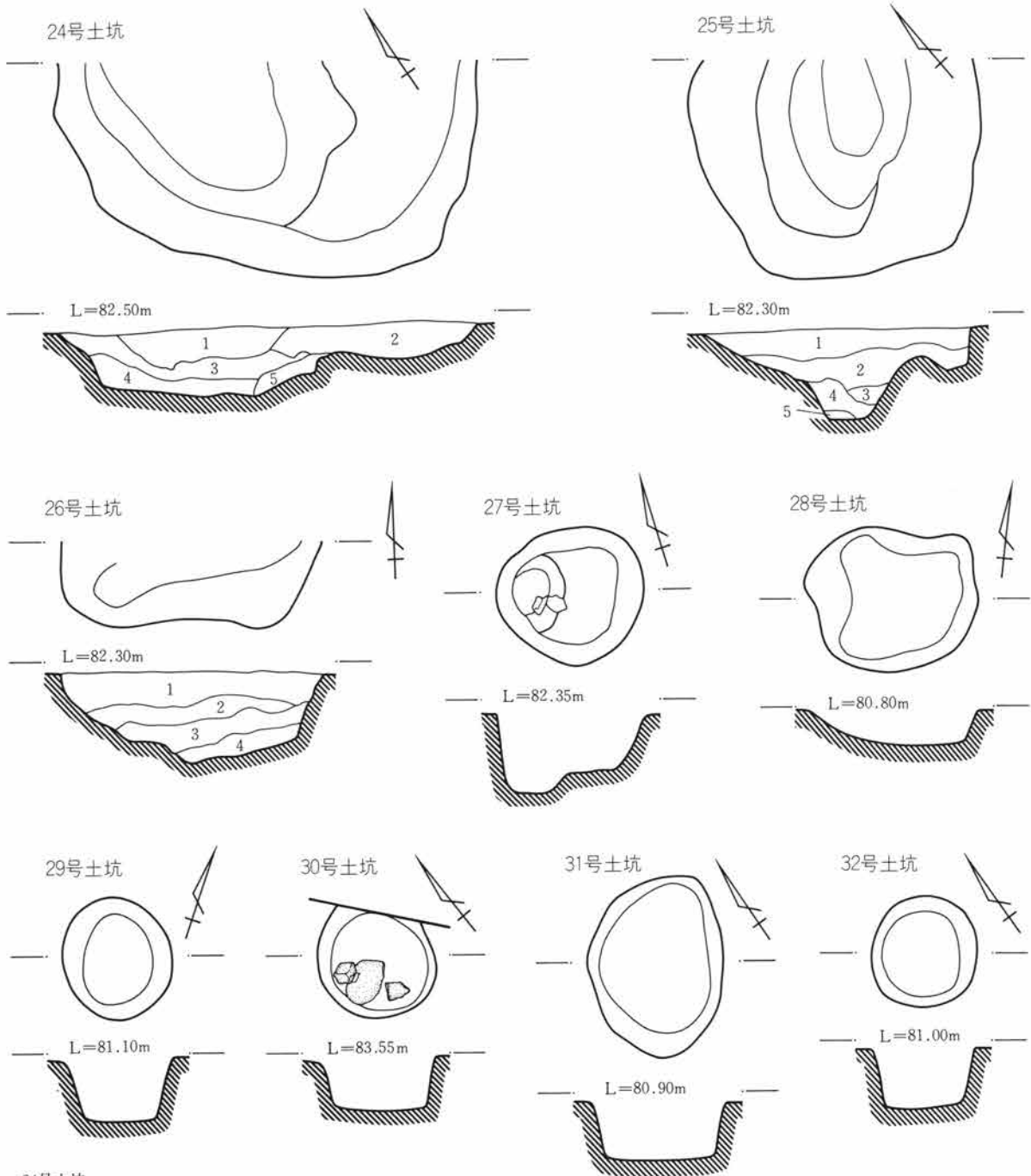
Ⅲ区中央やや北西よりで検出した。不整楕円形を





第63図 土 坑

Ⅲ章 書上本山遺跡



24号土坑

- 1 褐色土 黒色土塊・ローム粒少量含
- 2 褐色土 ローム塊を少量含 粘性・しまり乏しい
- 3 褐色土 ローム塊を多く含 不均質でしまりも乏しい
- 4 鈍黄褐色土 大型ローム塊を多く含 しまりも乏しい
- 5 黄褐色土 ローム塊主体の層 しまりは乏しい

25号土坑

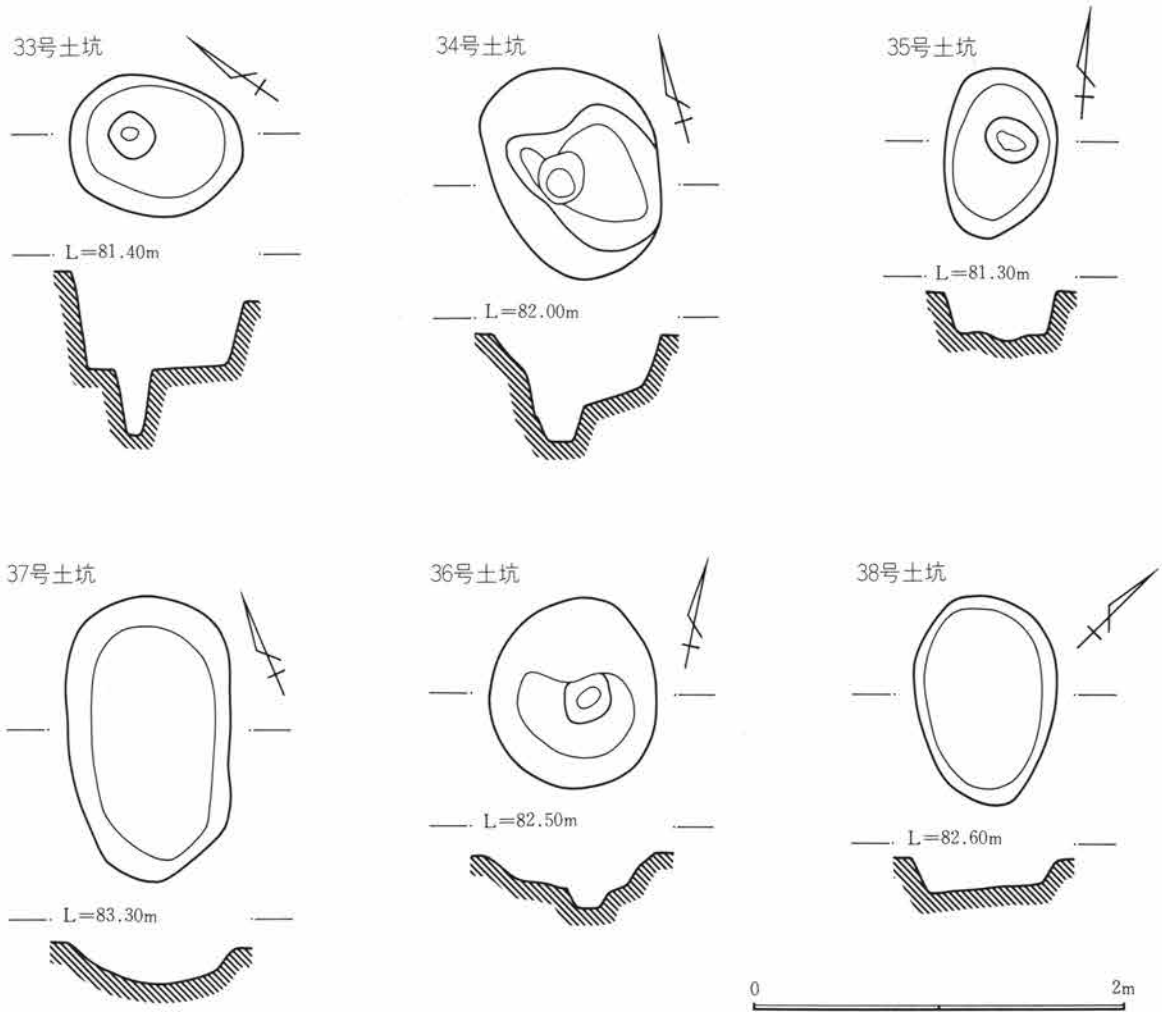
- 1 褐色土 ローム塊を含み砂質 粘性・しまりは乏しい
- 2 褐色土 大型ローム塊を含 粘性・しまりは乏しい
- 3 鈍黄褐色土 大型ローム塊を含 しまりは著しく乏しい
- 4 黒褐色土 小型ローム塊を少量含 粘性・しまり乏しい
- 5 黄褐色土 地山に近似

26号土坑

- 1 暗褐色土 砂質 少量のローム粒を含 しまりは乏しい
- 2 黒褐色土 砂質 少量のローム粒を含
- 3 褐色土 ローム塊を主体とする しまりは乏しい
- 4 暗褐色土 ローム塊を少量含 粘性はややある



第64図 土坑



第65図 土坑

呈する。比較的しっかりした掘り込みで、覆土は褐色土である。近代の所産。

**32号土坑**

Ⅲ区北西に位置し29号土坑が北東に近接する。小型円形で、掘り込みはしっかりしている。覆土は黒褐色粘質土が主体だが時期的な判断はできない。

**33号土坑**

Ⅳ区南の調査区端、6号井戸が南西6mに位置する。小型の楕円形を呈し、坑底面に小ピットを設ける。掘り込みは比較的深く、覆土も均質土の堆積だが、小規模なため縄文時代の陥穴ではないようだ。

**34号土坑**

Ⅳ区の東、1号住居跡の南に位置する。不整楕円形を呈し、ピットを坑底面に設ける。掘り込みはしっ

かりしているが、覆土は軟質褐色土で、近～現代の所産と捉え得る。

**35号土坑**

Ⅳ区西よりで検出された。不整楕円形の平面形で、坑底面は不連続だが掘り込みも深い。覆土は褐色土。

**36号土坑**

Ⅴ区東に位置する。不整円形を平面形とし、小ピットを坑底面に設け不連続で覆土も褐色土である。

**37号土坑**

Ⅴ区中央やや南よりで検出された。長楕円形の平面形で、断面形も浅く皿状を呈す。

**38号土坑**

Ⅵ区中央やや南東よりで検出された。楕円形を呈する。掘り込みはしっかりしているが浅い。

(井戸)

本遺跡では、5基の井戸を検出した。いずれも素掘りで石敷きなどの施設は持たない。その深さは確認面から1～2mと浅く、本遺跡の周辺の洪積台地における地下水位の高さを物語る。実際に調査中も、Ⅲ・Ⅳ区は深度1mを超えた場合は湧水した。井戸の時期も土坑と同様に確定的なものではない。しかし、その中で6号井戸は覆土中位より古墳時代後期の丸胴甕や杯などが出土し、この段階の時期を充てることができる。なお1号井戸は欠番である。

2・3号井戸

V区中央やや北西よりで検出された。周辺には13号土坑や東に距離を置いて1～6号土坑といった、中世段階に比定した土坑群が近接する。

重複した井戸であり、2号井戸は径約1.5mの円形の平面形を呈し、深さは約2mを測る。断面形は、上位から中位にかけて壁崩落により袋状になっており、不安定な形態を見せる。井戸坑底面は平坦で、崩落の痕跡は無い。

3号井戸は2号井戸南に重複して検出された。径約1.0mの円形で、深さは約1.5mを測る。2号井戸に比して、平面規模・深さとも小型の井戸である。崩落による壁の崩れは認められず、整った断面形状である。井戸坑底面は平坦で断面形と同様に安定している。

重複関係は土層観察からは2号井戸が3号井戸を切る。ただし上端のみの重複であり、対比土層も黒色土と黒褐色土との観察のため確定的な新旧ではない。さらに言及すれば占地状況や上面に堆積する土質から両者は時期的にも近い存在とも捉え得る。

両者ともその土層堆積状態は、塊状土が主体であり、人為的な埋土と思われる。その場合、2号井戸を新たに掘削する際にその排土を3号井戸の埋め立てに使用するのが通常である。しかし、3号井戸に確認された塊状土は概して小型であり、2号井戸掘削によって生じた排土とは捉え難い。このことは、3号井戸が廃棄されて、ある程度の時間が経過してからの2号井戸の掘削がなされたのであろう。

4号井戸

Ⅲ区中央南西よりの調査区端で検出された。規模は径約1.2mの円形で、深さは約1.1mを測る。周辺には浅い土坑が群在するが、本井戸とは関連性を持たない。また、帰属する時期については、覆土の様相から、褐色土を基調としている近代期に比定される土坑に近似しており、4号井戸も、近世～近代にその段階を追いよう。

5号井戸

Ⅳ区東側で検出された。北東に19号土坑が近接する。また、南東に位置する6号井戸とは約17mと距離を保つ。径約0.6mの小型の円形を平面形とし、深さは約1.1mを測る。壁の崩落は認められず、しっかりした立ち上がりを見せる。坑底面は平坦で中央に自然石を埋めるが人為的なものかは不明である。

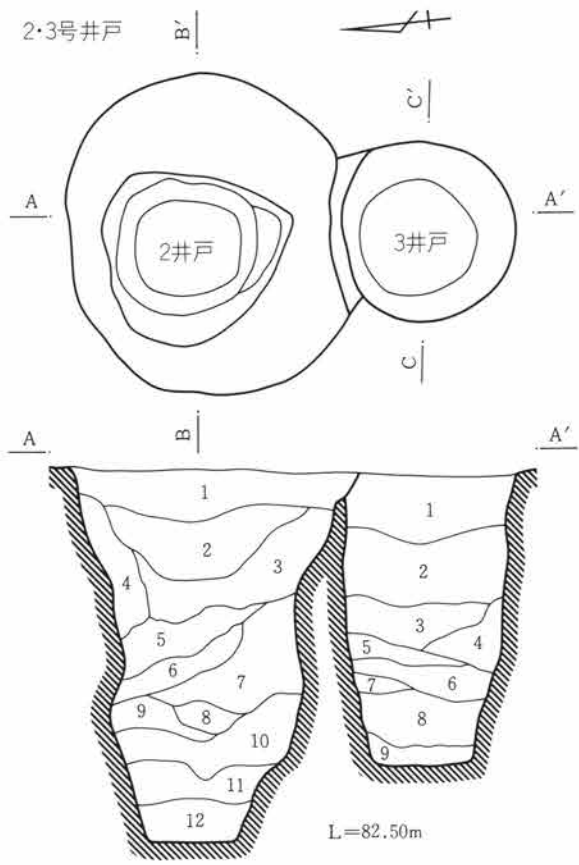
6号井戸

Ⅳ区南東で検出された。確認面で楕円形を呈した井戸である。平面形は長軸約3.0m、短軸約2.0mを測り、井戸主体部となる部分は径約1.7mの円形を呈する平面形である。

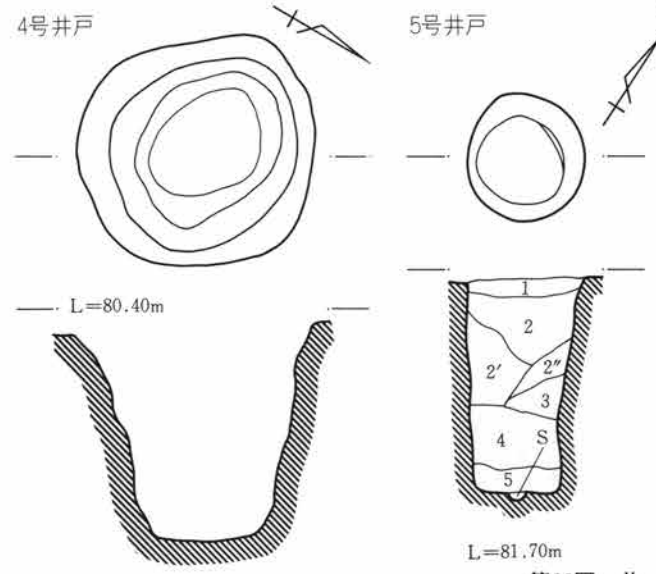
井戸主体部より南側に伸びる楕円状の落ち込みは新旧関係もなく、井戸に付随する施設と考えられる。用途としては、洗い場・水汲み場などが想定されるが、覆土中位より出土した自然石にも注意を要する。また、この楕円状の落ち込みと井戸主体部との接点壁は若干ながら凹みが認められ、水汲みなどに伴う使用の痕跡と捉え得る。

井戸主体部の深さは約2.0mで、比較的安定した壁と坑底面を持つ。断面形は上方に大きく広がり、他の井戸の形状とは一線を画す。時期的な井戸掘削技術の差とも考えられよう。

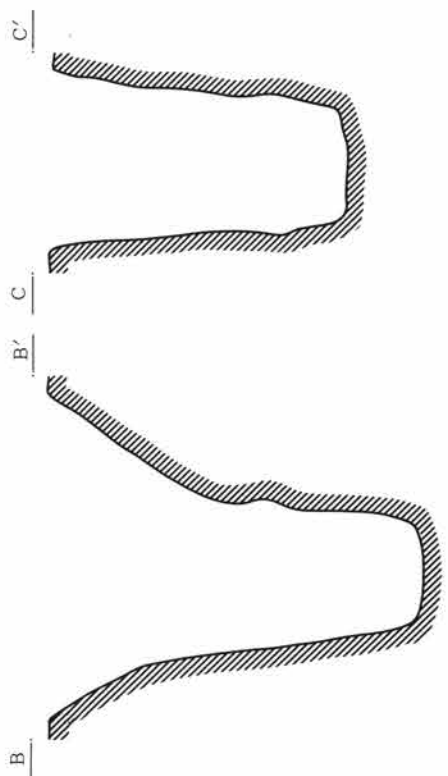
遺物は、覆土上層より杯2点、中層より丸胴甕1点、下層より小型甕1点が出土した。古墳時代後期に属する遺物であり、1～3号住居跡との関連が興味深い。この遺物群が、井戸使用に伴う容器として位置付けることはできないが、少なくとも、井戸廃棄時における一括性は保証できよう。



- 2号井戸
- 1 黒色土 砂質 白色粒・砂粒を多く含 しまりはある
  - 2 黒褐色土 砂質 暗褐色土塊を多く含 しまりは乏しい
  - 3 黒褐色土 砂粒を少量、ローム塊を多く含
  - 4 褐色土 砂質 ローム塊を多く含 しまりは乏しい
  - 5 黒褐色土 砂粒・暗褐色土塊を少量含 しまりは乏しい
  - 6 暗褐色土 ローム塊を多く含 砂粒は含まない
  - 7 鈍黄褐色土 大型ローム塊を多く含 しまりは乏しい
  - 8 鈍黄褐色土 ローム塊・黒褐色土塊を多く含 層自体が塊状堆積を示す



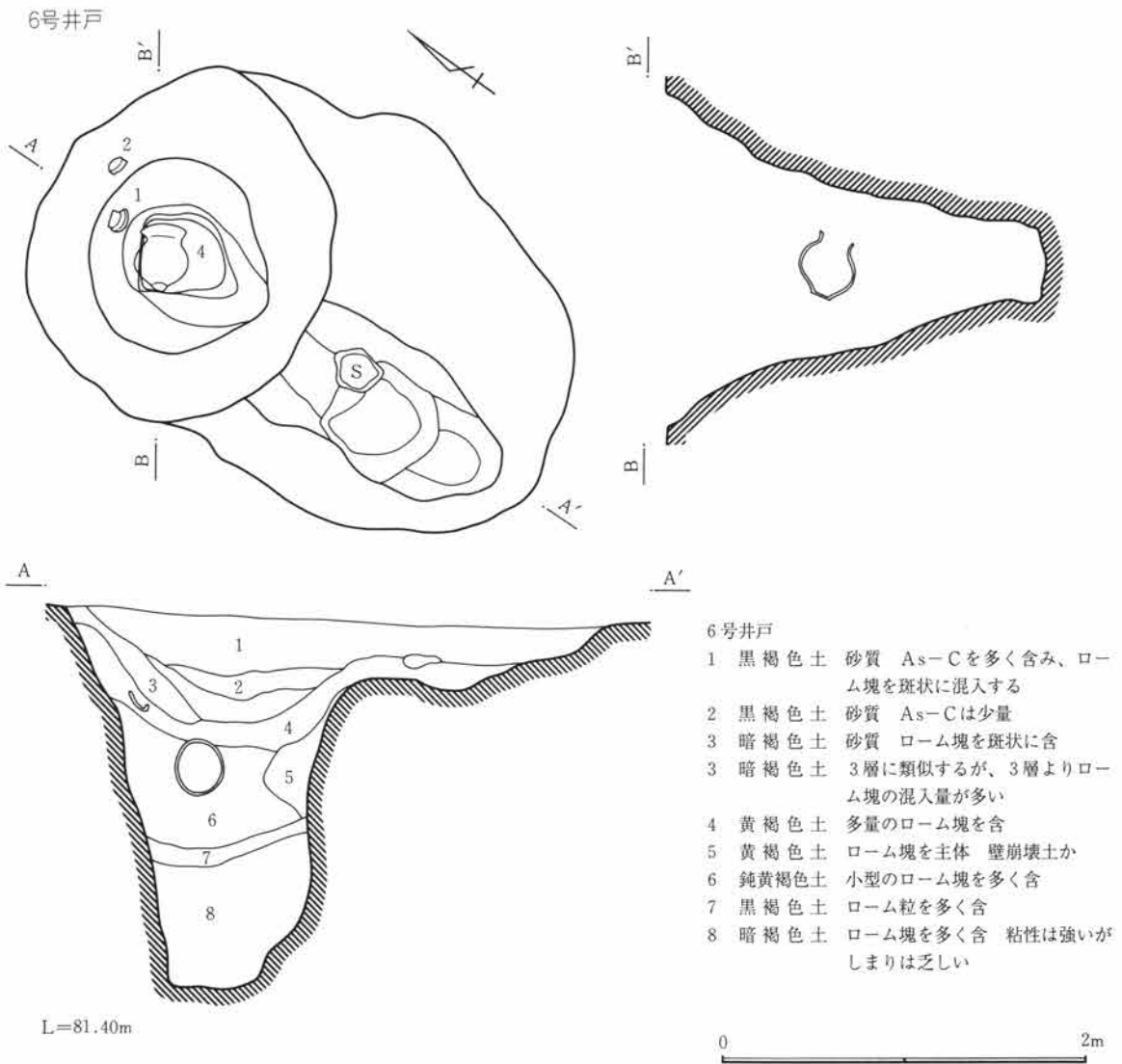
第66図 井戸



- 9 暗褐色土 ローム粒・黒褐色土粒を含
  - 10 暗褐色土 少量のローム粒を含 粘性はある
  - 11 黒褐色土 少量のローム塊を含 粘性はある
  - 12 黒褐色土 ローム塊等を含まない 若干砂粒混入
- 3号井戸
- 1 黒褐色土 砂質 ローム塊を少量含 しまりは乏しい
  - 2 暗褐色土 砂質 ローム塊を多く含 やや粘性はある
  - 3 黒褐色土 砂質 ローム塊を少量含 しまりは乏しい
  - 4 黒褐色土 砂質 ローム小塊を多く含 しまりは乏しい
  - 5 暗褐色土 砂質 少量のローム粒を含 しまりは乏しい
  - 6 黒褐色土 砂質 ローム塊・粒子含まない しまりは乏しい
  - 7 暗褐色土 若干砂粒の量少くなる ローム粒子を多く含
  - 8 暗褐色土 ローム塊を含 しまりは乏しい
  - 9 黒褐色土 大型のローム塊を含 しまりは乏しい

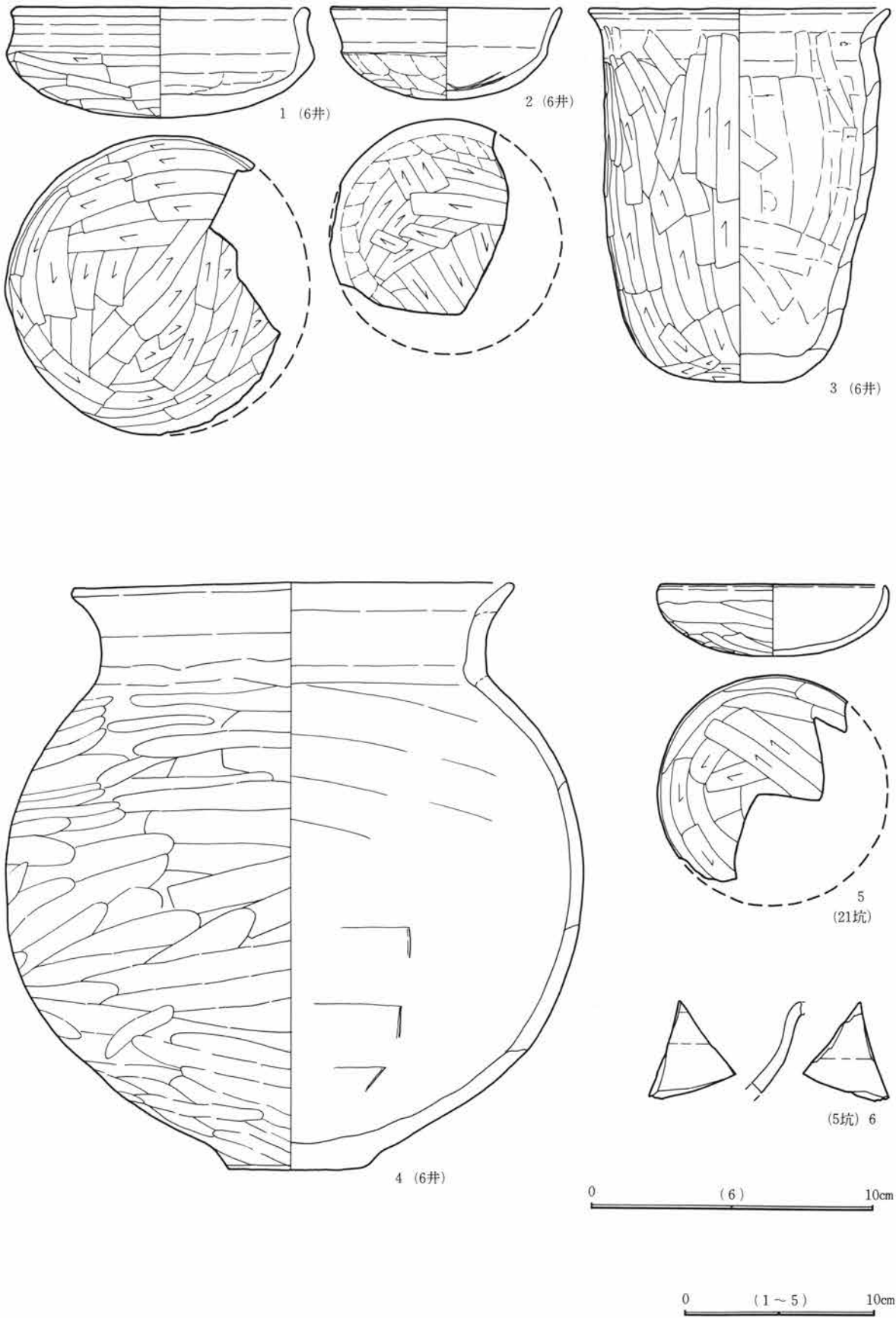
- 5号井戸
- 1 褐色土 砂質 ローム粒を多量に含
  - 2 暗褐色土 砂質 ローム粒を多量に含
  - 2' 暗褐色土 砂質 ローム粒の混入が2層より少ない
  - 2'' 暗褐色土 砂質 ローム粒を含まない
  - 3 黒褐色土 砂質土 ローム粒子を少量含
  - 4 黒褐色土 砂質土 ローム塊を多く含 しまりは乏しい
  - 5 暗褐色土 砂質土 ローム塊を多く含 しまりなし





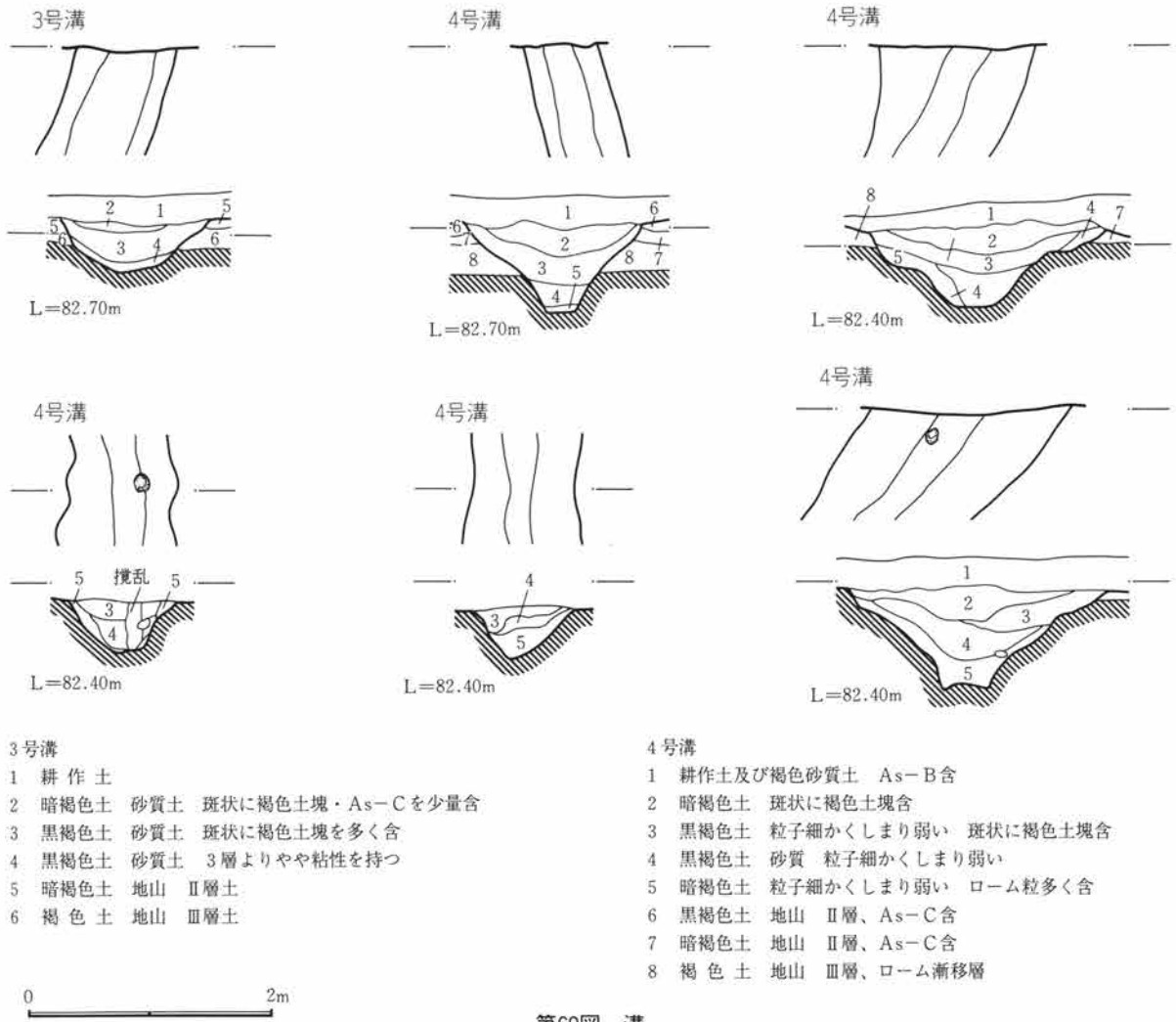
第67図 井戸





第68図 井戸出土遺物

Ⅲ章 書上本山遺跡



第69図 溝

(溝)

本遺跡の特徴として、幾条もの溝が検出されており、その様相は屈曲する溝・平行する溝など多様な形態を見せている。発掘調査による溝の性格付けは難しく、走行状態・断面形態で様々な用途を考えるが、確定的な性格の確定にはいたっていない。

そのような背景もあり、本遺跡の溝個々の用途を本報告で言及することはできないが、その特徴と想定される時期を提示する。なお、1・2号溝は書上上原之城遺跡との通番のため、本遺跡では欠番扱いである。

3号溝

Ⅳ区西の集石遺構下位からⅤ区東端にかけて直線的に伸びⅤ区で収束する。収束する終点には9号溝

が隣接し、両者の関連を想起させる地点である。

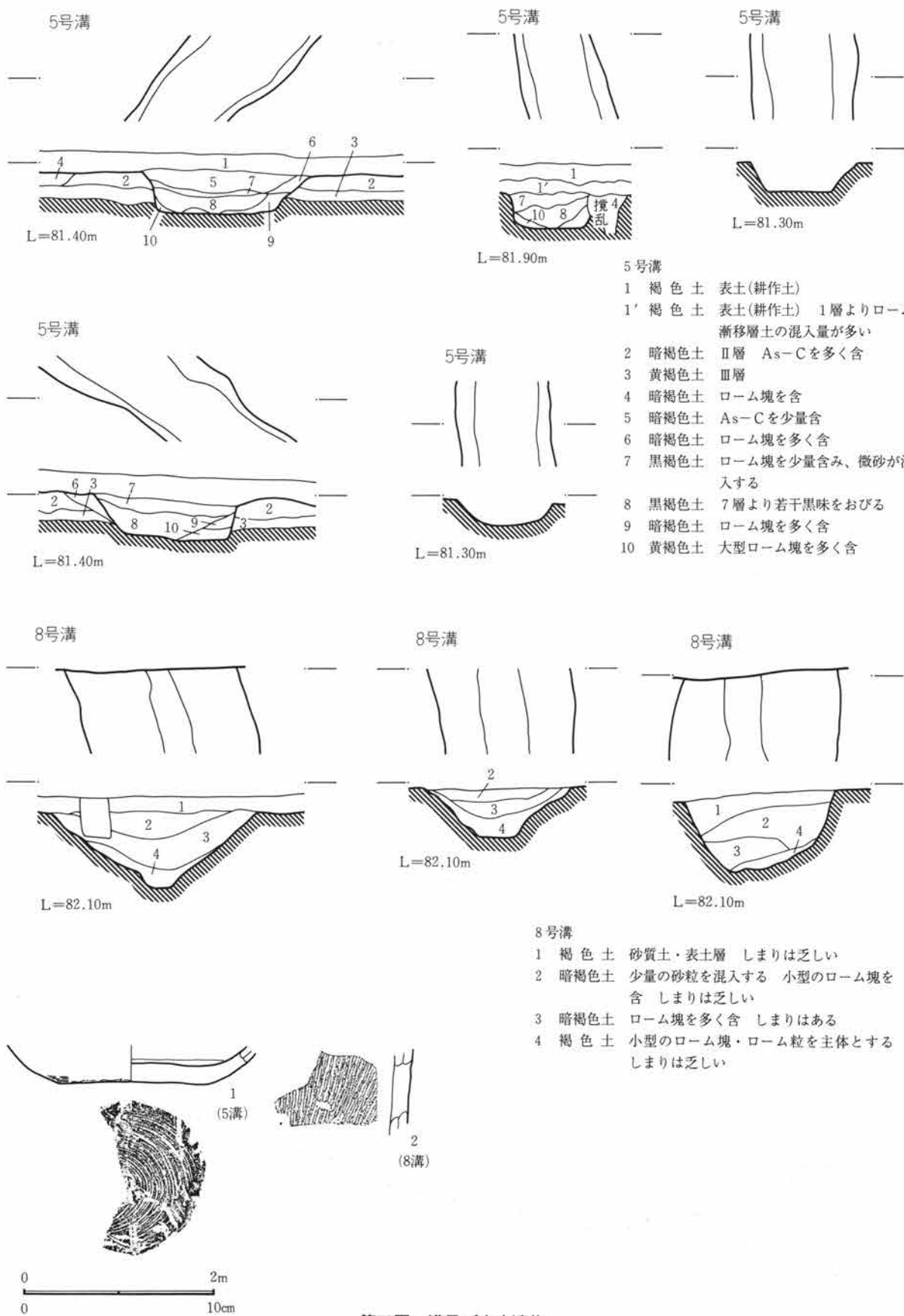
断面形は緩やかなU字形を呈し、溝底面のレベルは北東から南西に徐々に下る。

4号溝

Ⅳ区西からⅤ区東端にかけて緩やかな屈曲を見せながら、3号溝と平行するように調査区を横断する。断面形はV字状を呈する箇所が多く、坑底面の平坦部分も狭小である。坑底面のレベルも3号溝と同様で北東から南西に下る。

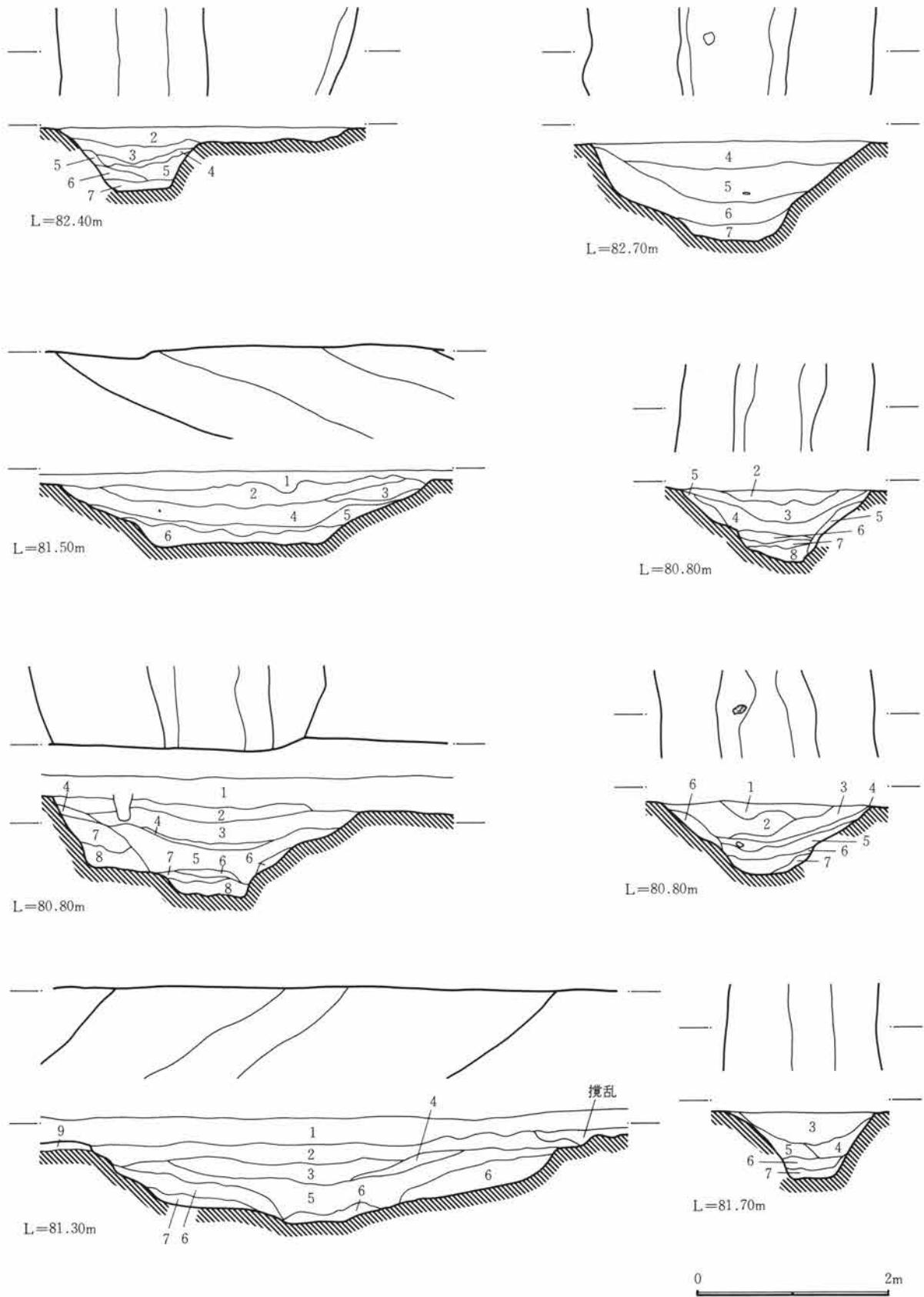
3号・4号溝は平行する溝として、その覆土に共通性があり、これは9号溝の上層の覆土に類似する。おそらく、中世段階以降の所産であろう。また、3号溝は集石遺構と重複しているが、その新旧関係は集石遺構が新しい様相を見せる。



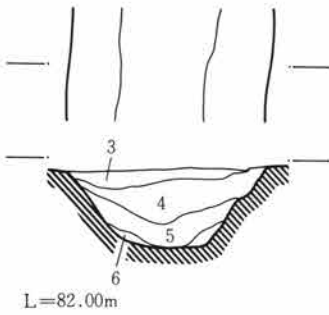
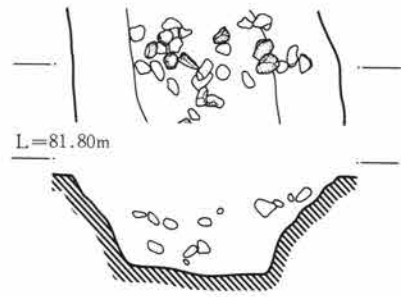
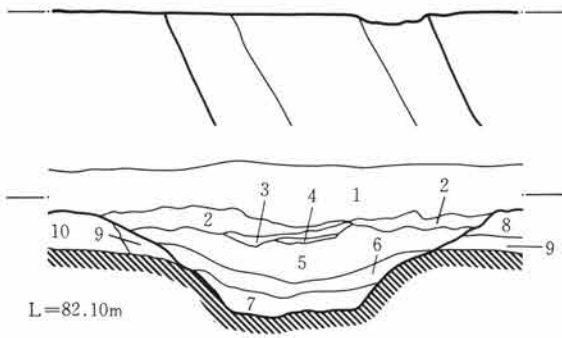


第70図 溝及び出土遺物

III章 書上本山遺跡

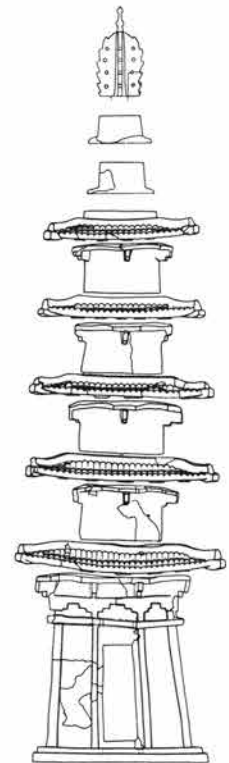
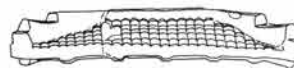
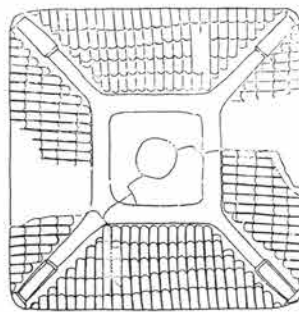
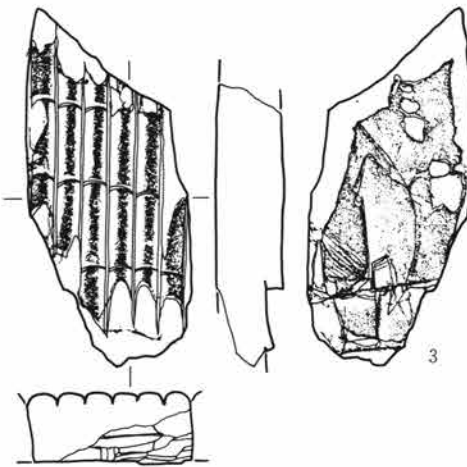
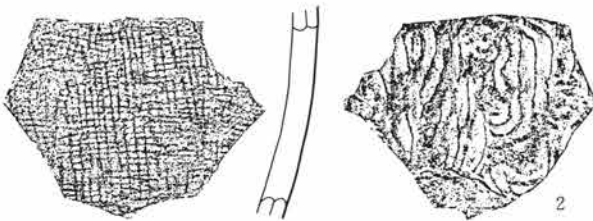


第71図 9号溝



9号溝

- 1 黒褐色土 表土層 しまりに乏しい
- 2 褐色土 少量のAs-Cを含 しまりは乏しい
- 3 黒褐色土 褐色土塊を不連続に含 As-Cを含
- 4 黒褐色土 3より若干暗い 褐色土塊は少量含
- 5 暗褐色土 褐色土塊を多く含 As-Cは少量含
- 6 鈍黄褐色土 黄褐色ローム塊を多く含
- 7 黒褐色土 比較的均質 ローム塊を含 少量だが酸化粒子も認められる 粘性は強い
- 8 暗褐色土 比較的均質 ローム粒を少量含
- 9 褐色土 比較的均質 ローム粒・酸化粒子を少量含
- 10 黒褐色土 比較的均質ローム粒を微量含



参考図

左・上植木庵寺出土瓦塔

右・埼玉県甘粕山遺跡出土瓦塔



第72図 9号溝と出土遺物

#### 5号溝

Ⅲ区北西部の調査区端で検出された。屈曲する溝であり、延長が調査区域外に伸びるため、その全容は把握できないが、おそらく区画溝のような性格を持つものであろう。掘り込みは浅く、坑底面は平坦で南東方向に徐々に下る。また、坑底面には小ピット1ヶが隅部分に検出されたが性格は不明である。覆土はAs-Cを含む暗褐色～黒褐色土を基調としており、本遺跡では古墳時代の住居跡覆土に類似する。遺物を出土していないが、同時期の所産と判断したい。

#### 6号溝

Ⅲ区北西隅に位置する。走行を北東から南西に持ち連続せず両端で収束する。坑底面のレベルも傾向を持たず、覆土も黒褐色均質土が堆積しており、自然的営力による溝の生成と考えられる。

#### 7号溝

Ⅲ区南西で9号溝と重複して検出された新旧関係を見いだすことはできなかった。走行は9号溝とはほぼ平行し、9号溝との重複後は不明である。深さも浅く、走行も短いことから特に有機的な用途を特定できない。

#### 8号溝

Ⅵ区北西端で検出された。走行を北東から南西に持ち、急傾斜する台地縁辺を台地形状に沿って調査区を横断する形となる。比較的深い掘り込みであり、断面形状もV字状を呈す。坑底面レベルは北東から南西にかけて緩やかに下がる。遺物は須恵器杯底部と縄文土器片が出土しているが、本溝に伴うものではない。覆土は不均質な暗褐色土を基調としており、24号土坑覆土などと近似する。時期はこの覆土の様相から、近世～近代に求めた。また台地縁辺を巡る形態から、地区割りの機能を持った溝であろう。

#### 9号溝

本遺跡で最大規模を誇る遺構である。Ⅲ区からⅤ区にわたる調査区域外で屈曲部を持ち、幅約1.5～3.0m、深さ約70cmを測り掘り込みもしっかりしている。走行は、Ⅲ区では直線的に現地形の地割り線

に沿い、屈曲した後のⅣ区では南北に地形傾斜に直行し、Ⅴ区に至ると若干ながら湾曲する兆しを見せる。また、このⅤ区の平面形は大きく広がり、僅かながら坑底面も下がる。坑底面のレベルは全体に北西から南東にかけて傾斜するが、各所に平坦面やⅤ区に見られたような下がる箇所もあり、必ずしも水利を主目的にした形態ではない。土層は暗褐色砂質土を上層に下層は黒褐色土が基調となる。含有物はAs-B・As-Cを含み、両テフラが地山層位として存在してからの埋没と考えられる。中世～近世段階と捉えたい。遺物は、おそらく流れ込みによるものであろう。特筆すべきは瓦塔片が出土している。周辺の寺院跡の存在を想起させる好資料である。また、Ⅳ区では自然石などがまとまって出土したが、これは南東に位置する集石遺構崩壊によるものと判断した。その他では、青磁碗底部・須恵器甕胴部破片が出土している。

本遺跡の溝は、上述のように特徴的な在り方を呈する。6・7号溝を除く、5条の溝はいずれも調査区域外に伸び、その走行などに不明点が多く、今回の調査範囲では詳細には言及できない。今後隣接地域の調査によって、その様相は把握できるものと期待する。

#### (集石遺構)

2カ所の集石遺構を検出した。各遺跡で各時期の集石遺構は存在しているが、本遺跡の集石遺構は、おそらく中世以前の所産と考えられる。

#### 1号集石遺構

Ⅳ区北西の調査区端で検出された。調査着手時は確認面において自然石が散乱し、凝灰岩製の骨蔵器破片も同様に散布していた。覆土も攪乱を受けたものであり、遺存状態は必ずしも良好とはいえない。これらの自然石・覆土を除去し、下面の検出を試みた結果、おおむね3カ所の集石のまとまりを確認できた。それぞれに骨蔵器が散乱した状態で出土し、明らかに集石墓が攪乱を受けた様相を呈していた。

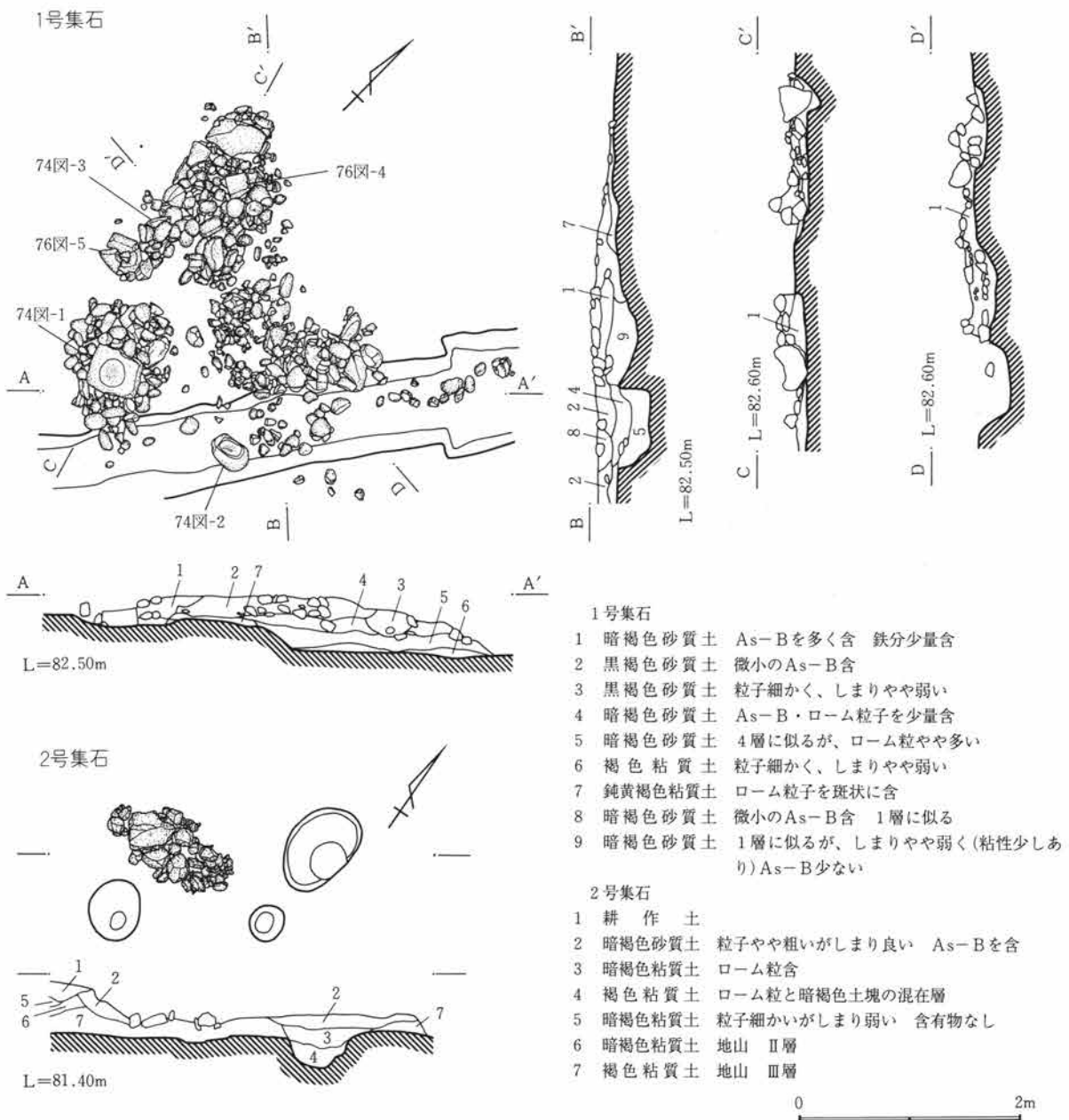
おそらく、この3カ所に連環して、複数の骨蔵器による主体が構築されていたものであり、残念ながら骨蔵器の散乱状態からは原位置を確実に動かされたものと判断できよう。

骨蔵器1は蓋部である。白色凝灰岩製で、6面を丁寧に打ち欠き成型する。特に凹部は集中した成型で平滑に仕上げている。2も蓋部であろう。石皿様の形態を呈し、凹部を切り込むように成型する。粗粒安山岩製。3は破片のため全体形状が不明だが、

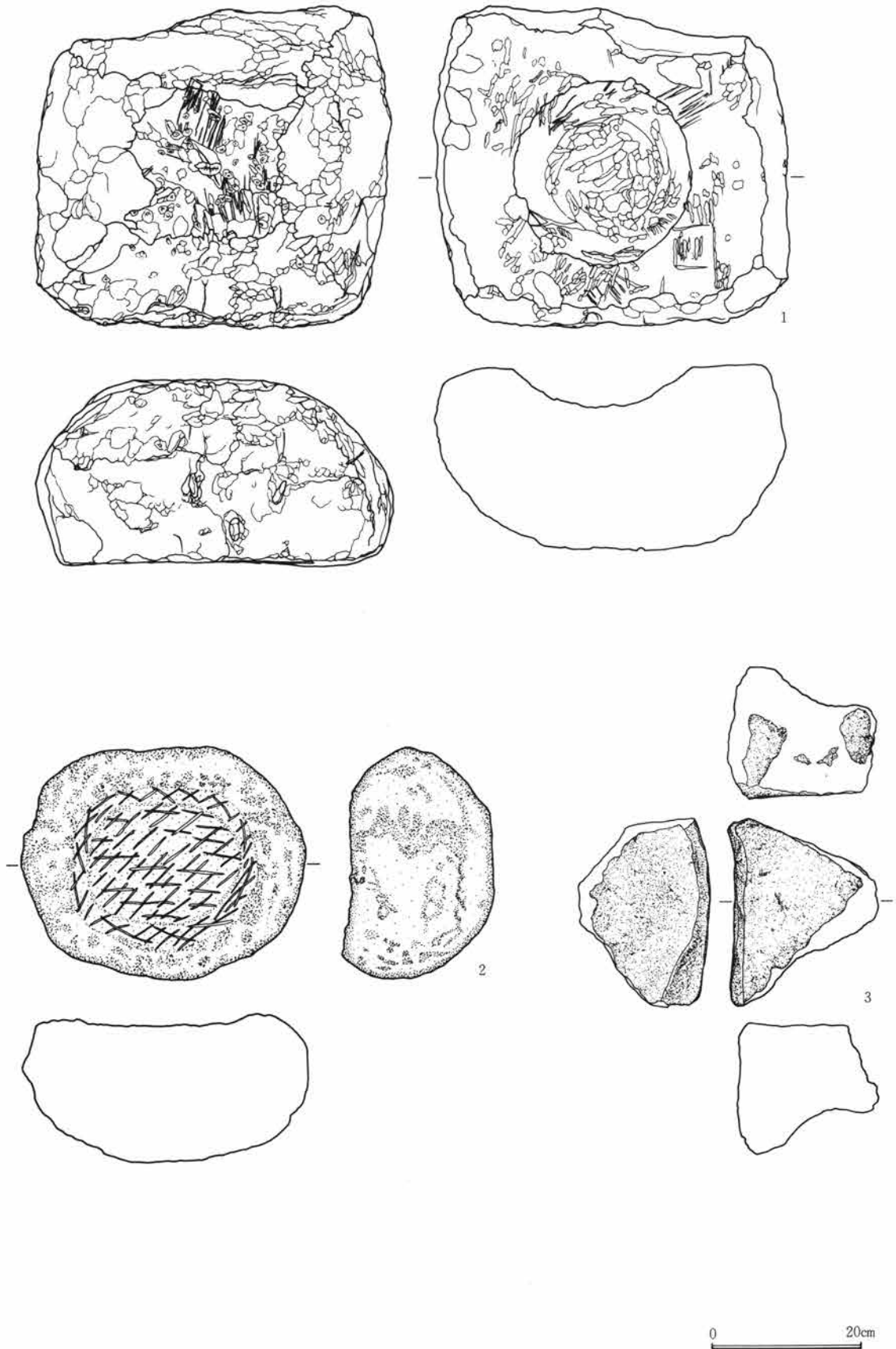
残存部分には磨面が残る。4は身部であろう。残存率は極めて悪い。表面の成型痕も一部のみしか看取できなかったが、骨蔵器1と同様に白色凝灰岩製であり、成型方法などは骨蔵器1との関連が強い。5も身部と捉えた。半欠状態で出土したが、表面凹部上端の蓋を受ける突出が良好に残存する。これも白色凝灰岩製で骨蔵器1や4と強い関連性を持つ。

2号集石遺構

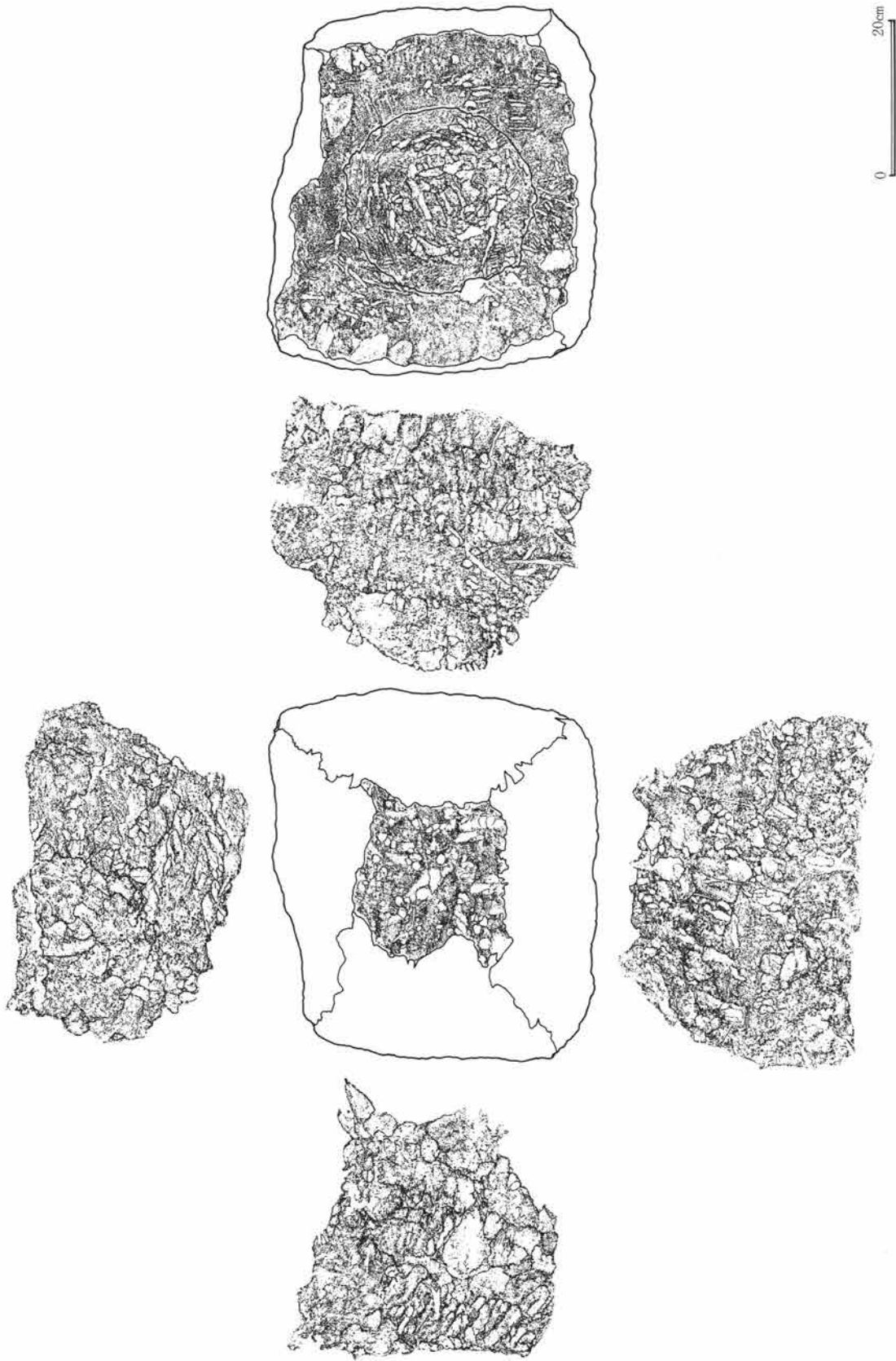
IV区1号掘立柱建物跡と重複し、土坑を伴う集石



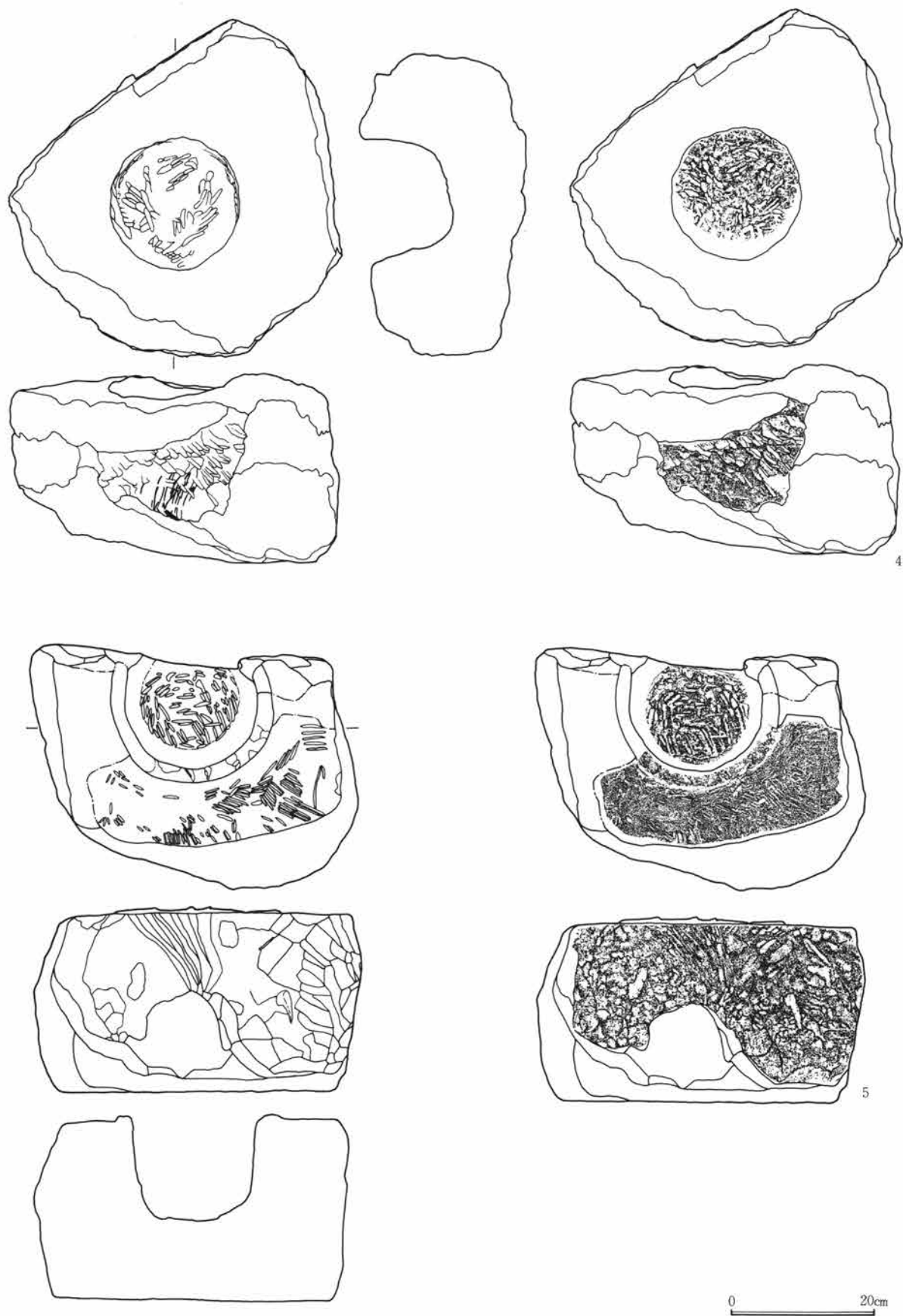
第73図 集石



第74図 集石遺構出土遺物



第75図 集石遺構出土遺物-1 展開図



第76図 集石遺構出土遺物



である。この土坑は不整楕円状で浅い断面形状を呈す。集石は自然石を集めたもので、集石下から近世段階の陶器細片が出土したことから、近世耕作時の1号集石遺構平夷に伴う廃棄によるものであろう。

グリッド出土遺物 (第77図)

1はIV区集石遺構覆土出土。ナイフ形石器である。黒曜石製の横長剝片を素材とし、全体形状は切出状を呈す。左側縁に細かな調整を施す。右側縁下端の剝離は新しい欠損である。

2は長身の磨製石鏃。薄手で脚部上位に両面から穿孔する。両側縁は直線的に平行し、先端部はわずかに湾曲する。しのぎは不明瞭である。

3は小玉。鉛ガラスか。

4・5は砥石。いずれも両端を欠損し、4の短軸断面は正方形。5は断面長方形で偏平である。

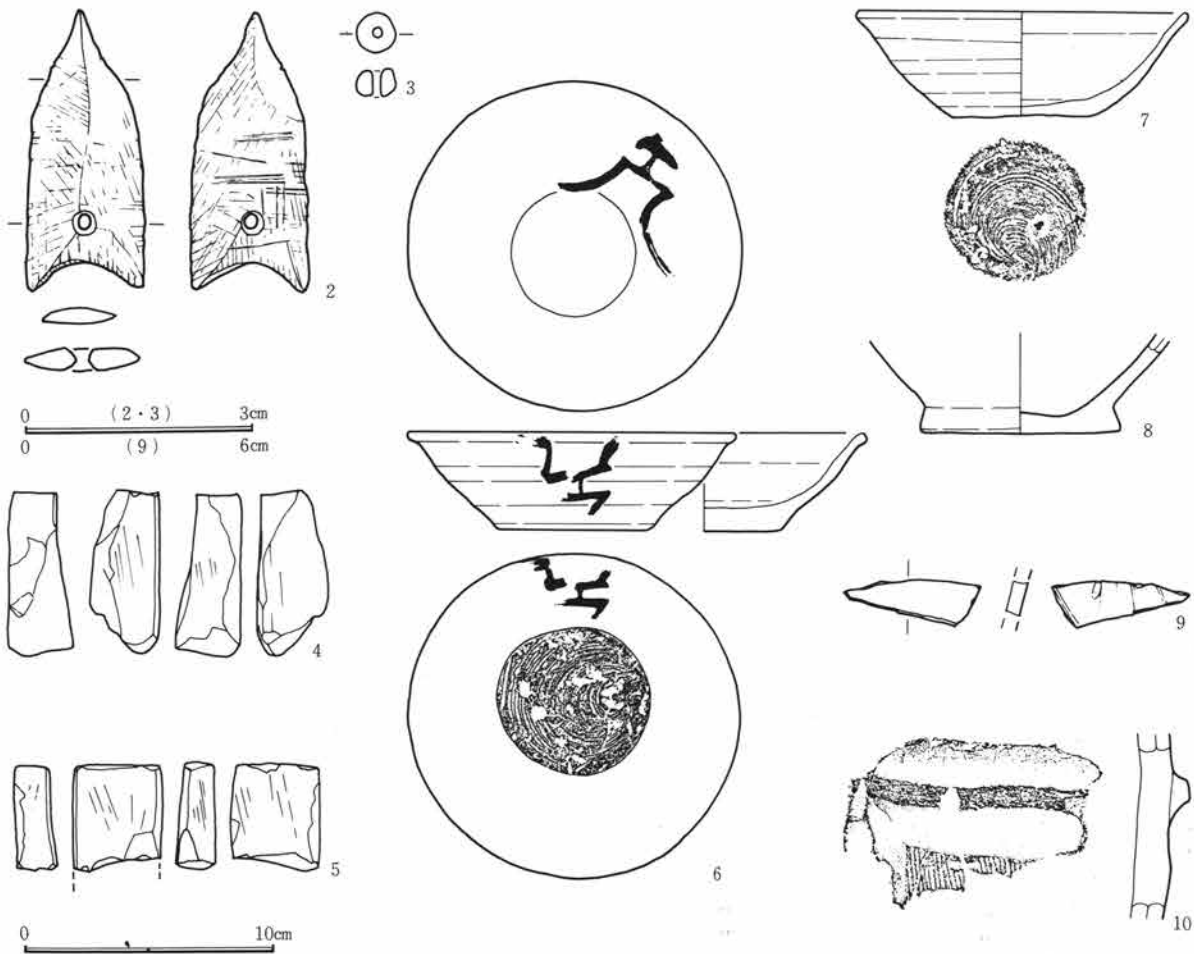
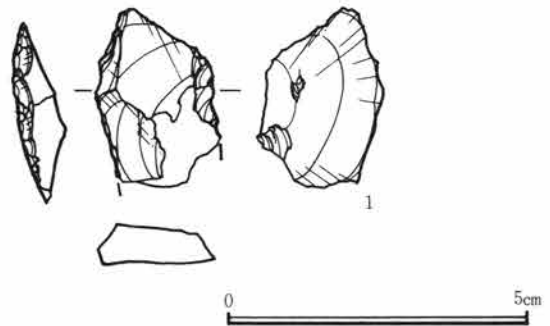
6は須恵器杯。内外面に墨書を施す。右回転。

7は須恵器杯。底部回転糸切り無調整右回転。

8は土師器壺底部か。甕の可能性もある。内外面とも撫で調整。古墳時代。

9は青磁片。龍泉窯系青磁蓮弁文碗であろう。13～14世紀の所産か。

10は埴輪片。家型埴輪か。



第77図 グリッド出土遺物

Ⅲ章 書上本山遺跡

第3表 旧石器時代の単独石器一覧表

挿図番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	
第14図-1	2ブ-10	ナイフ	8.9	2.3	10.85	黒頁	
	2	2ブ-2	ナイフ	4.7	2.8	14.62	黒頁
	3	1ブ-22	台形	3.5	1.8	3.42	黒頁
	4	1ブ-73	使剝	4.4	2.8	15.38	黒頁
	5	2ブ-303	使剝	8.2	4.6	51.50	黒頁
	6	1ブ-31	使剝	7.7	3.4	18.38	黒頁
第15図-1	2ブ-286	縦長剝	8.7	2.4	20.62	黒頁	
	2	2ブ-159	縦長剝	8.4	2.6	16.66	黒頁
	3	1ブ-28	縦長剝	10.8	3.2	27.46	珪頁
	4	1ブ-29	縦長剝	10.5	2.5	22.40	黒頁
第16図-1	2ブ-248	剝片	3.9	2.8	9.13	黒安	
	2	2ブ-216	剝片	3.9	3.5	12.30	黒安
	3	737.5E-6	剝片	2.4	1.8	3.01	黒頁
	4	1ブ-67	剝片	3.0	3.4	6.79	珪頁
	5	2ブ-244	石核	5.6	6.3	118.84	黒安
第17図-1	2ブ-299	石核	7.3	10.5	40.77	頁岩	
	2	736E周辺-4	磨石	4.9	5.0	89.87	溶凝
	3	740.5E-15	台石	18.6	15.7	4150.00	粗安
	4	2ブ-331	台石	25.4	15.6	4333.00	溶凝
	5	2ブ-137	石核	7.0	4.6		
第77図-1	723Gトレ魔土内	ナイフ	3.0	2.1	3.91	黒曜石	

第4表 旧石器時代の接合資料一覧表

資料番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	
接合資料-1 (第18~22図)							
1	2ブ-236	碎片	1.8	1.8	1.22	黒安	
2	2ブ-193	碎片	1.2	1.1	0.38	黒安	
3左	2ブ-171	剝片	4.6	2.9	23.96	黒安	
	右	2ブ-166	剝片	4.5	3.7	19.46	黒安
4	下	2ブ-168	剝片	2.6	2.5	4.50	黒安
	2ブ-155	剝片	6.4	5.0	49.14	黒安	
5	2ブ-8	剝片	5.5	3.7	18.34	黒安	
6	2ブ-161	碎片	1.8	1.9	1.78	黒安	
7左	2ブ-180	剝片	3.5	1.7	4.34	黒安	
	右	2ブ-33	剝片	3.3	2.0	3.63	黒安
8-1	2ブ-69	剝片	1.8	1.3	0.96	黒安	
	2左	2ブ-85	剝片	2.1	1.3	1.70	黒安
	中	2ブ-92	剝片	1.5	1.0	0.70	黒安
3	右	2ブ-70	剝片	2.9	1.9	1.35	黒安
	2ブ-290	石核	3.3	5.5	78.92	黒安	
4左	2ブ-62	剝片	1.8	3.3	5.16	黒安	
	右	2ブ-158	剝片	2.6	4.1	10.17	黒安
5	2ブ-64	碎片	1.3	2.0	1.06	黒安	
6	2ブ-59	剝片	1.6	2.0	1.90	黒安	
7	2ブ-95	剝片	1.6	3.1	4.20	黒安	
8	2ブ-239	石核	2.0	3.9	19.22	黒安	
9上	2ブ-54	剝片	3.5	2.8	12.50	黒安	
	下	2ブ-185	剝片	4.7	4.2	29.88	黒安
10上	2ブ-99	剝片	3.0	2.4	4.79	黒安	
	下	2ブ-253	剝片	3.5	2.4	6.59	黒安
11上	2ブ-53	剝片	2.0	2.1	3.21	黒安	
	下	2ブ-23	剝片	1.3	1.8	0.73	黒安
12	2ブ-42	剝片	2.7	3.2	5.68	黒安	

資料番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
13上	2ブ-52	剝片	2.3	2.9	4.20	黒安
中	2ブ-170	剝片	1.9	4.7	10.03	黒安
	2ブ-169	剝片	3.3	4.9	29.22	黒安
左下	2ブ-243	剝片	2.7	4.5	33.19	黒安
	2ブ-7	剝片	2.5	1.6	2.69	黒安
14	2ブ-58	剝片	5.6	4.6	39.52	黒安
15	2ブ-247	剝片	5.0	5.5	33.48	黒安
16-1上	2ブ-292	剝片	1.4	2.8	1.92	黒安
	下	2ブ-67	剝片	1.6	2.6	1.89
2	2ブ-284	碎片	1.0	2.2	1.15	黒安
	3	2ブ-305	石核	2.7	6.1	72.13
17	2ブ-118	剝片	3.1	1.6	5.12	黒安
18	2ブ-142	碎片	1.1	1.8	0.60	黒安
19上	2ブ-156	剝片	5.1	5.5	32.69	黒安
下	2ブ-24	剝片	1.8	2.3	2.05	黒安
	裏	2ブ-153	剝片	1.1	1.9	1.04
20左	2ブ-32	剝片	3.2	2.2	4.42	黒安
	右	2ブ-46	剝片	1.3	1.1	0.45
21	2ブ-282	剝片	4.0	2.7	9.75	黒安
22	2ブ-277	剝片	5.9	3.9	26.76	黒安
23	2ブ-315	剝片	2.0	2.4	1.96	黒安
24	2ブ-212	碎片	2.1	1.7	0.66	黒安
25	2ブ-157	碎片	2.6	1.8	3.45	黒安
26	2ブ-150	剝片	3.5	2.4	10.17	黒安
27	2ブ-19	碎片	0.9	1.6	0.53	黒安
28	2ブ-138	剝片	3.2	3.6	8.50	黒安
29	2ブ-148	碎片	1.9	1.1	0.49	黒安
30左上	2ブ-112	碎片	3.0	1.2	1.49	黒安
	右上	2ブ-233	石核	6.3	4.7	35.91
左下	2ブ-232	石核	2.0	3.9	17.31	黒安
	2ブ-198	剝片	2.2	2.1	3.05	黒安
31	2ブ-122	碎片	1.6	1.4	0.83	黒安
32左	2ブ-291	剝片	2.0	2.2	1.71	黒安
	右	2ブ-289	剝片	1.9	1.8	1.57
33上	2ブ-139	剝片	1.8	2.1	2.15	黒安
	中	2ブ-176	剝片	1.1	2.7	1.46
左下	2ブ-74	剝片	1.6	1.3	0.71	黒安
	右	2ブ-213	剝片	2.4	4.5	8.93
34	2ブ-190	碎片	1.4	1.9	1.04	黒安
35	2ブ-234	石核	2.3	4.8	37.80	黒安
接合資料-3 (第23・24図)						
1	2ブ-220	剝片	4.4	3.6	19.82	黒安
2	2ブ-302	剝片	4.7	3.3	14.42	黒安
3	2ブ-287	剝片	4.7	2.7	16.30	黒安
4-1	2ブ-231	碎片	0.9	1.5	0.61	黒安
	2	2ブ-240	剝片	1.6	2.7	2.38
3	2ブ-209	剝片	1.5	2.4	1.82	黒安
	4上	2ブ-204	石核	2.7	5.4	19.17
下	2ブ-268	石核	4.6	5.2	40.33	黒安
	5	2ブ-301	剝片	4.0	2.4	3.74
6	2ブ-311	剝片	6.1	3.4	19.05	黒安
7	2ブ-60	剝片	3.8	2.5	7.21	黒安
8左	2ブ-327	剝片	3.1	2.9	8.05	黒安
	右	2ブ-47	碎片	2.2	1.5	1.03
9上	2ブ-255	剝片	6.1	5.0	22.75	黒安
下	2ブ-254	剝片	6.3	4.1	14.40	黒安
	10上	2ブ-309	碎片	1.8	0.5	0.64
下	2ブ-283	剝片	4.6	2.2	4.29	黒安

遺物一覧表

資料番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
11左	2ブ-218	剥片	5.0	2.5	9.88	黒安
右	2ブ-141	碎片	2.6	0.9	1.33	黒安
接合資料-2 (第25図)						
1	2ブ-130	剥片	2.8	3.6	6.06	黒安
2	2ブ-160	碎片	1.6	1.4	1.10	黒安
3左上	2ブ-39	剥片	1.8	1.5	0.47	黒安
下	2ブ-131	剥片	4.7	4.4	14.07	黒安
右上	2ブ-129	剥片	4.5	4.5	30.22	黒安
	2ブ-167	石核	9.1	11.0	820.90	黒安
接合資料-10 (第26図)						
1	2ブ-181	剥片	4.4	2.3	11.22	黒安
2	2ブ-163	剥片	3.3	2.7	5.81	黒安
接合資料-12 (第26図)						
	2ブ-219	石核	2.1	2.1	6.88	黒安
	2ブ-147	石核	2.2	1.9	6.43	黒安
1	2ブ-72	碎片	1.3	2.0	1.68	黒安
2	2ブ-17	碎片	2.2	1.6	1.62	黒安
	2ブ-90	碎片	1.1	1.6	1.37	黒安
接合資料-19 (第26図)						
左	1ブ-61	碎片	2.0	1.1	0.36	黒安
右	1ブ-82	剥片	2.9	2.5	3.12	黒安
接合資料-13 (第26図)						
上	2ブ-16	剥片	2.6	3.9	10.33	黒安
下	2ブ-241	碎片	0.7	1.8	0.49	黒安
接合資料-11 (第26図)						
左	2ブ-319	剥片	4.3	2.6	14.44	黒安
右	2ブ-323	剥片	3.7	2.1	4.29	黒安
接合資料-16 (第26図)						
上	2ブ-196	碎片	1.6	1.0	0.71	黒安
下	2ブ-88	剥片	3.1	1.2	3.05	黒安
接合資料-15 (第26図)						
左	2ブ-25	剥片	2.7	2.8	6.33	黒安
右	2ブ-28	剥片	1.7	1.5	0.93	黒安
接合資料-14 (第26図)						
左下	2ブ-215	碎片	2.2	1.7	2.54	黒安
右	2ブ-145	剥片	3.8	3.6	14.15	黒安
接合資料-4 (第26図)						
左上	2ブ-300	碎片	2.9	1.3	1.08	黒安
右上	2ブ-310	剥片	4.8	4.4	32.82	黒安
中	2ブ-298	碎片	1.9	1.4	0.92	黒安
左下	2ブ-306	碎片	2.0	2.0	2.03	黒安
右下	2ブ-221	剥片	4.1	3.3	22.41	黒安
接合資料-18 (第26図)						
右	1ブ-60	碎片	2.0	1.3	1.67	黒安
左	1ブ-55	剥片	4.1	5.7	53.25	黒安
接合資料-6 (第26図)						
上	1ブ-47	剥片	3.0	3.4	9.24	黒頁
下	1ブ-78	剥片	4.3	3.6	15.60	黒頁
接合資料-5 (第27図)						
1	2ブ-249	剥片	3.2	1.2	3.20	黒頁
2	2ブ-41	剥片	2.8	1.6	3.24	黒頁
3	2ブ-75	碎片	1.5	1.5	1.42	黒頁
4	2ブ-188	石核	8.0	4.6	73.31	黒頁
接合資料-17 (第27図)						
	1ブ-41	加剝	4.8	4.6	23.84	黒安
1	1ブ-54	碎片	1.6	1.3	0.59	黒安
2	1ブ-53	碎片	2.4	1.3	1.26	黒安
3	1ブ-50	碎片	1.2	1.5	0.51	黒安

資料番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
4	1ブ-59	加剝	4.9	5.0	32.42	黒安
接合資料-7 (第27図)						
1	2ブ-66	剥片	2.2	1.6	2.19	黒頁
2	2ブ-230	剥片	1.0	2.3	1.11	黒頁
3	2ブ-80	碎片	1.1	1.9	0.76	黒頁
上	2ブ-297	石核	7.2	6.0	72.76	黒頁
下	2ブ-20	剥片	2.1	3.3	4.26	黒頁
接合資料-8 (第27図)						
左	2ブ-307	加剝	3.9	3.7	13.14	黒安
右上	2ブ-250	加剝	2.4	1.8	4.32	黒安
右下	2ブ-103	加剝	2.5	1.5	2.18	黒安
接合資料-9 (第27図)						
左	2ブ-48	剥片	3.1	2.8	6.97	黒安
中	2ブ-49	剥片	2.4	1.3	1.76	黒安
右	2ブ-237	剥片	3.5	3.5	11.42	黒安

第5表 縄文土器観察一覧表 (第28~31図)

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調	備考
1	Ⅵ区740.5E	①細砂 ②堅緻 ③鈍黄橙	早期
2	Ⅵ区740.5F	①細砂 ②堅緻 ③暗赤褐	〃
3	Ⅵ区740.5E	①細砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃
4	Ⅵ区740.5E	①細砂 ②堅緻 ③鈍黄褐	〃
5	V区738.5E	①細砂 ②良好 ③鈍橙	〃
6	V区736.5C・G	①細砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
7	V区736.5G	①細砂 ②良好 ③橙	〃
8	V区736.5G	①細砂 ②良好 ③橙	〃
9	V区736.5G	①細砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
10	V区736.5G	①細砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
11	V区736.5G	①細砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
12	V区736.5G	①細砂 ②良好 ③橙	〃
13	V区736.5G	①細砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
14	V区736.5G	①細砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
15	V区738D	①微砂 ②堅緻 ③鈍黄橙	前期
16	V区738.5D	①細砂②やや軟質③鈍黄橙	〃
17	Ⅳ区Eトレ・V区表採	①砂粒 ②良好 ③鈍黄橙	〃
18	Ⅳ区Eトレンチ	①細砂 ②良好 ③明赤褐	〃
19	Ⅳ区Eトレンチ	①細砂 ②良好 ③橙	〃
20	V区737.5G・738G	①粗砂 ②堅緻 ③暗赤褐	〃
21	V区737.5F・738F	①粗砂 ②堅緻 ③橙	〃
22	V区738F	①粗砂 ②堅緻 ③橙	〃
23	V区738G・V区表採	①砂粒 ②堅緻 ③橙	〃
24	V737.5E・VI739.5E	①粗砂 ②堅緻 ③淡黄	〃
25	Ⅵ区739.5E	①粗砂 ②堅緻 ③鈍黄橙	〃
26	V区738.5F	①砂粒 ②堅緻 ③鈍褐	〃
27	Ⅲ区727F	①粗砂 ②堅緻 ③橙	〃
28	V区737G	①粗砂 ②やや軟質 ③鈍橙	〃
29	Ⅵ区739.5D・740D	①砂粒②やや軟質③明赤褐	〃
30	Ⅵ区740F・740.5B	①砂粒 ②堅緻 ③暗赤褐	〃
31	V区739D	①粗砂 ②やや軟質 ③鈍褐	〃
32	V区737.5D	①砂粒 ②やや軟質 ③明褐	〃
33	V区738.5F	①砂粒 ②やや軟質 ③鈍橙	〃
34	V区Cトレンチ	①砂粒 ②良好 ③鈍黄橙	〃
35	Ⅲ区725B	①砂粒 ②堅緻 ③明赤褐	〃
36	Ⅲ区725B	①粗砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調	備考
37	V区736.5F・728.5F	①細砂 ②軟質 ③浅黄橙	前期
38	V区737.5G	①細砂 ②軟質 ③鈍黄橙	〃
39	III区725B	①粗砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃
40	V区738G	①細砂 ②堅緻 ③浅黄	〃
41	V区737.5F	①粗砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃
42	V区Aトレンチ	①砂粒 ②堅緻 ③鈍黄橙	〃
43	V区738F・Bトレンチ	①砂粒 ②やや軟質 ③淡黄	〃
44	V区737.5D	①粗砂 ②軟質 ③鈍黄橙	〃
45	V区738E	①砂粒 ②堅緻 ③鈍黄橙	〃
46	V区738.5D	①粗砂 ②堅緻 ③鈍黄橙	〃
47	V区738E	①粗砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃
48	VI区740D	①細砂 ②やや軟質 ③淡黄	〃
49	V区Bトレンチ	①細砂 ②堅緻 ③鈍褐	〃
50	V区737.5F	①粗砂 ②堅緻 ③橙	〃
51	V区738F	①粗砂粒 ②堅緻 ③橙	〃
52	V区738F	①粗砂 ②堅緻 ③橙	〃
53	V区737F	①砂粒②やや軟質③鈍黄橙	〃
54	V区738C	①微砂 ②良好 ③灰黄褐	〃
55	V区738C	①微砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
56	V区737.5G	①微砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
57	V区738C	①微砂 ②良好 ③灰黄褐	〃
58	V区738G	①微砂 ②良好 ③暗灰黄	〃
59	V区738C	①微砂 ②良好 ③灰黄褐	〃
60	V区738F	①微砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
61	V区738F	①微砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
62	V区737.5F	①微砂 ②堅緻 ③灰黄	〃
63	V区738F	①微砂 ②堅緻 ③鈍黄橙	〃
64	V区738.5G	①微砂 ②良好 ③橙	〃
65	V区737.5F	①微砂 ②良好 ③灰黄	〃
66	V区738.5F	①砂粒 ②良好 ③橙	中期
67	III区727.5F	①砂粒 ②堅緻 ③橙	〃
68	V区738C	①砂粒 ②軟質 ③淡黄	〃
69	V区738.5F	①砂粒 ②良好 ③橙	〃
70	V区Cトレンチ	①細砂②やや軟質③明赤褐	〃
71	VI区740D	①細砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
72	IV・V区Eトレンチ	①砂粒 ②堅緻 ③灰白	〃
73	V区737.5C	①細砂 ②堅緻 ③鈍橙	〃
74	V区739C	①砂粒 ②堅緻 ③橙	〃
75	III区727.5B	①細砂 ②堅緻 ③黄橙	後期
76	III区727.5C	①細砂 ②堅緻 ③鈍黄橙	〃
77	III区727.5C	①細砂 ②堅緻 ③鈍黄橙	〃
78	III区727.5C	①細砂 ②堅緻 ③鈍黄橙	〃
79	III区727.5C	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
80	V区739.5D	①細砂 ②堅緻 ③鈍黄橙	〃
81	III区726.5D・727G	①細砂 ②堅緻 ③赤褐	〃
82	III区726.5E	①細砂 ②堅緻 ③赤褐	〃
83	V737C・VI740E他	①粗砂 ②良好 ③鈍黄橙	中期
84	V区737C	①粗砂 ②良好 ③淡黄	〃
85	V区737C	①粗砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
86	V区737C	①粗砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
87	V区737C	①粗砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
88	V区737C	①粗砂 ②良好 ③鈍橙	〃
89	V区737C	①粗砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
90	V区737C	①粗砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
91	V区737C	①粗砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
92	V区737C	①粗砂 ②良好 ③鈍橙	〃
93	V区737C	①粗砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
94	V区737C	①粗砂 ②良好 ③橙	〃
95	I区714.5B・Eトレンチ	①粗砂 ②やや軟質 ③橙	〃

第6表 縄文時代の単独石器一覧表

挿図番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第32図-1	740.5D-19	石鏃	2.1	1.6	1.17	チャート
2	737D-3	石鏃	2.2	1.6	0.76	黒曜石
3	727.5D-2	石鏃	3.2	2.1	1.89	黒安
4	739C-5	石鏃	1.3	1.0	0.26	黒曜石
5	739.5D-37	石鏃	1.7	1.0	0.32	黒頁
6	739C-5	石鏃	3.1	1.7	1.86	黒頁
7	729.5G-3	石鏃	1.5	1.1	0.31	黒曜石
8	736C-1	石鏃	2.5	1.5	1.01	黒頁
9	739.5F-6	石鏃	4.2	1.9	3.77	黒頁
10	738G-29	石鏃	1.6	1.1	0.29	黒曜石
11	740.5E-3	石鏃	1.8	1.6	1.16	チャート
12	740D-46	石鏃	1.7	1.5	1.00	チャート
13	737.5F-8	石鏃	3.0	1.2	1.78	黒頁
14	738C-4	石鏃	3.0	2.1	5.29	チャート
15	737C-18	打斧	7.4	5.3	35.96	ホルン
16	740E-20	打斧	8.5	4.5	50.51	黒頁
17	737F-4	打斧	7.5	5.6	114.89	頁岩
第33図-1	738.5C-1	打斧	14.2	8.0	418.40	砂岩
2	740.5B-2	打斧	17.0	11.0	780.00	灰安
3	727.5F-1	スクレ	7.0	8.1	219.70	黒頁
4	736.5B-1	スクレ	7.0	4.4	37.08	黒頁
5	729C-1	スクレ	9.6	3.9	47.36	黒頁
6	739.5D-82	スクレ	5.6	9.5	85.18	黒頁
7	740D-107	スクレ	6.7	7.7	130.63	黒頁
8	739.5C-2	スクレ	7.6	8.1	151.22	黒頁
9	740D-13	スクレ	5.3	7.0	52.38	黒頁
第34図-1	740.5E-25	スクレ	7.7	7.6	155.93	黒頁
2	737C-3	スクレ	6.4	3.8	25.10	砂岩
3	738.5G-7	スクレ	5.5	6.2	48.25	黒頁
4	739G-2	加剝	4.1	5.0	25.04	細安
5	740.5D-6	加剝	4.2	5.5	54.55	黒頁
6	737F-5	加剝	5.0	5.2	25.13	黒頁
7	740D-14	加剝	5.5	11.3	99.94	黒頁
8	740.5D-1	加剝	5.5	6.5	51.09	黒頁
9	738E-1	加剝	6.7	9.3	112.67	頁岩
10	740.5E-21	加剝	6.1	7.0	66.45	黒頁
11	736E-1	加剝	5.7	5.5	28.19	黒頁
12	726E-2	加剝	8.5	5.1	40.71	黒頁
13	726.5F-2	加剝	6.7	7.2	68.09	黒頁
14	740.5D-15	加剝	5.3	5.7	47.16	黒頁
15	740D-31	加剝	5.2	5.6	51.36	黒頁
第35図-1	740.5B-1	加剝	3.4	2.5	5.05	チャート
2	740D-156	加剝	2.9	2.1	6.15	チャート
3	738F-53	使剝	5.4	4.7	22.31	黒頁
4	727F-1	使剝	6.1	4.0	22.65	黒頁
5	740G-2	使剝	5.0	4.1	22.39	黒頁
6	740.5F-2	使剝	3.8	3.0	5.35	黒頁
7	740F-3	使剝	4.1	2.4	6.28	黒頁
8	740D-12	使剝	7.5	5.0	42.07	黒安
9	740.5E-8	使剝	6.5	4.4	31.23	黒頁
10	740D-91	使剝	8.0	7.0	102.28	黒頁
11	739.5C-3	使剝	8.2	6.9	80.55	黒頁
12	739.5G-12	使剝	5.0	6.1	27.56	黒頁
13	740D-154	使剝	4.2	5.3	14.42	黒頁
14	740.5E-26	使剝	9.8	8.0	145.87	黒頁
15	740D-56	使剝	4.0	6.9	23.84	黒頁
16	738D-1	使剝	4.5	6.8	25.33	黒頁

遺物一覧表

挿図番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	挿図番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第36図-1	739.5E-3	石核	4.1	7.6	179.40	黒頁	第38図-1	740.5C-9	スタンプ	10.0	4.7	300.60	ホルン
2	740.5E-20	石核	5.5	11.3	287.10	黒頁	2	740E-30	磨石	13.3	7.9	952.30	粗安
3	738.5G-9	石核	4.0	8.1	236.00	黒頁	3	726B-2	磨石	10.6	9.9	530.00	粗安
4	1号集石-6	石核	5.3	8.2	282.70	黒頁	4	740F-8	磨石	8.4	7.5	448.70	粗安
5	740.5E-30	石核	2.4	1.9	6.71	黒曜石	5	736E-3	磨石	14.7	11.0	920.00	粗安
6	740F-9	三角錐	11.8	9.3	530.10	黒頁	6	740.5D-7	磨石	6.7	4.4	92.45	輝緑
第37図-1	740D-26	三角錐	11.3	5.8	344.20	黒頁	7	739.5C-4	磨石	10.4	4.6	177.42	粗安
2	731A-1	三角錐	8.9	6.4	359.10	黒頁	第39図-1	740.5D-13	敲石	11.4	5.7	410.00	粗安
3	740F-26	スタンプ	12.1	8.9	611.50	変安	2	728A-2	磨石	10.2	12.2	1650.00	粗安
4	740C-14	スタンプ	10.3	9.7	639.70	石閃	3	740E-1	その他	7.3	5.9	83.91	砂岩

第7表 古墳時代以降の遺物観察表

1号住居跡 (第48~50図)

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第48図1 土師器杯	口径：11.8 器高：3.8	覆土 ほぼ完形	口縁部内湾、体部偏平。口縁部内外横撫で。底部外面削り。内底面は凹凸を持つ。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焰 良好 ③橙
第48図2 土師器杯	口径：(13.0) 器高：(3.0)	覆土 1/4残存	口縁部僅か内湾、体部偏平。口縁部内外横撫で。底部外面削り。内底面は平滑だが凹凸を持つ。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焰 良好 ③橙
第48図3 土師器杯	口径：(12.8) 底径：(12.4) 器高：(3.2)	覆土 1/5残存	口縁部外反気味に直立。外縁は明瞭。口縁部内外横撫で、体部外面削り、内面撫で。	①白色・透明鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③橙
第48図4 土師器杯	口径：12.4 底径：13.6 器高：5.0	床直・覆土 3/4残存	口縁部内傾。体部身深。外縁は明瞭。口縁部内外横撫で、体部外面削り後雑に撫で。内面横撫で。内底面凹凸を持つ。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③にぶい橙
第48図5 土師器杯	口径：11.5 底径：13.0 器高：5.0	床直・貯蔵穴・ 覆土 ほぼ完形	口縁部内傾。体部身深。外縁は不明瞭。器壁外面荒れ、内面横撫で後黒色処理。内底面凹凸を持つ。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③橙
第48図6 須恵器横瓶	器高：(12.8)	覆土 胴部破片	杯蓋の可能性もある。内面の轆轤痕明瞭。外面自然釉。左回転。	①透明・白色鉱物粒子 ②還元焰 堅緻 ③灰
第48図7 土師器甕	口径：(15.0) 器高：(4.9)	床直 口縁部破片	口縁部外反。頸部～体部張る。口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り。	①白粒子、白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 良好 ③にぶい橙
第48図8 土師器甕	口径：(12.4) 器高：(6.1)	覆土 口縁部破片	小型甕。口縁部は僅か外反。体部直立気味。口縁部内外横撫で。体部横位削り。	①白色・黒色・透明鉱物粒子、白粒子 ②酸化焰 堅緻 ③明赤褐
第48図9 土師器甕	口径：17.0 底径：6.8 器高：19.0	床直 完形	小型甕。口縁部外傾。頸部屈曲。体部張る。口縁部内外横撫で。体部縦位削り後下半は雑な撫で。体部内面撫で。	①透明・白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 良好 ③浅黄橙 ④胴部最大径：17.7cm
第48図10 土師器甕	口径：(23.1) 器高：(12.0)	床直・覆土 口～胴部破片	丸胴甕。口縁部外傾。頸部緩屈曲。体部張る。口縁部内外横撫で。体部縦位削り。体部内面斜め撫で。内面剝落著しい。	①白粒子、白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③にぶい黄橙
第48図11 土師器甕	口径：18.6 底径：5.7 器高：38.2	床直・柱穴・ 覆土 ほぼ完形	長胴甕。口縁部外反。頸部緩屈曲。体部最大径中位。口縁部内外横撫で。体部縦位斜位削り。内面横撫で。	①胎土分析参照 ②酸化焰 ③橙 ④胴部最大径：20.5cm

III章 書上本山遺跡

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第49図12 土師器甕	口径：18.2 器高：(9.0)	床直・覆土 口縁部残存	口縁部外傾。頸部屈曲。 口縁部内外横撫で。体部外面斜位削り。 内面撫で。内面器壁荒れ。	①白粒子、黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③浅黄橙
第49図13 土師器甕	口径：(17.0) 器高：(11.1)	床直・覆土 口～胴部破片	口縁部外反。頸部緩屈曲。体部は張る。 口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り。 内面縦位撫で。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 良好 ③にぶい黄橙
第49図14 土師器甕	口径：16.4 器高：(12.2)	貯蔵穴 体部下欠損	小型甕。口縁部外傾。頸部緩屈曲。 口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り。 内面横撫で。	①白粒子、白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焰 良好 ③橙
第49図15 土師器甕	底径：7.0 器高：(7.4)	貯蔵穴・覆土 底部残存	14と同一個体。外面縦位削り、内面撫で 底部外面も不定方向に削る。	①白粒子、白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焰 良好 ③赤褐
第49図16 土師器甕	底径：(6.5) 器高：(2.5)	覆土 底部破片	内外面とも撫で調整か。底面の器厚薄い。	①白色鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③浅黄橙
第49図17 土師器甕	底径：(5.6) 器高：(2.9)	床直 底部破片	外面削り後撫で。内面撫で。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 良好 ③にぶい黄橙
第49図18 土師器甕	口径：19.5 底径：6.5 器高：39.2	床直 完形	口唇部丸みを帯びる。口縁部外傾。頸部 屈曲。体部最大径中位。口縁部内外横撫 で。体部外面縦位削り。内面横斜位撫で。	①胎土分析参照 ②酸化焰 ③灰黄褐 ④胴部最大径：21.5cm
第49図19 土師器甕	口径：18.7 底径：6.1 器高：38.0	柱穴・覆土 ほぼ完形	口唇部丸みを帯びる。口縁部外傾。頸部 屈曲。体部最大径中位。口縁部内外横撫 で。体部外面縦位削り、下半は幅狭の撫 で。内面横撫で。	①胎土分析参照 ②酸化焰 ③橙 ④胴部最大径：20.2cm
第50図20 土師器甕	口径：15.5 底径：5.6 器高：11.2	柱穴・覆土 3/5残存	口縁部外反。体部丸みを帯びる。底面中 心は僅かに凹み、小穴を穿つ。口縁部内 外横撫で。体部外面縦位削り後下半指撫 で。内面横撫で。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 良好 ③灰黄
第50図21 土師器甕	口径：(22.4) 器高：(7.0)	覆土 口縁部破片	口縁部緩外反。口縁部内外横撫で後、体 部縦位研磨。内面も縦位研磨。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③褐灰
第50図22 土師器甕	口径：(29.0) 器高：(11.5)	床直・柱穴・ 覆土 口～胴部破片	口縁部緩外反。口縁部内外横撫で、体部 縦位削り後縦位の雑な研磨。内面も縦位 研磨。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③明赤褐
第50図23 土師器甕	口径：23.5 底径：8.8 器高：34.4	床直・覆土 ほぼ完形	口縁部外傾。頸部緩屈曲。体部最大径中 位。口縁部内外横撫で。体部外面縦位削 り、下半に撫で。内面横撫で。	①胎土分析参照 ②酸化焰 ③にぶい黄褐 ④胴部最大径：21.2cm
第50図24 土師器甕	口径：(20.0) 器高：(23.1)	床直・柱穴・ 覆土 1/3残存	口唇部平坦面を持つ。口縁部外傾。頸部 緩屈曲。体部上位最大径。体部外面削り 後不明瞭な撫で。下半に横位・斜位の削 り。内面縦位研磨。	①白粒子、透明・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③淡黄

2号住居跡 (第53・54図)

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第53図1 土師器杯	口径：12.5 底径：11.0 器高：4.5	床直・覆土 ほぼ完形	口縁部外傾。体部身深。外縁は明瞭。口 縁部内外面中位に浅い稜。口縁部内外横 撫で。体部外面削り、内面撫で。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焰 良好 ③橙

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第53図2 土師器杯	口径：12.9 底径：11.6 器高：5.2	床直・貯蔵穴 ほぼ完形	口縁部外傾。体部身深で球形。外稜は明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面丁寧な撫でで平滑。	①白色・透明鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③にぶい褐
第53図3 土師器杯	口径：13.6 底径：12.3 器高：5.0	覆土 4/5残存	口縁部外傾。体部身深。外稜は明瞭で尖る。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面丁寧な撫でで平滑。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③橙
第53図4 土師器杯	口径：11.8 底径：10.9 器高：3.9	床直 4/5残存	口縁部直立気味に外傾。体部浅い、口縁部下位に撫でによる凹線。外稜はやや不明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面は撫で。体部内外面に線状の擦痕。使用痕か。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③にぶい黄橙
第53図5 土師器杯	口径：(12.6) 底径：(11.0) 器高：4.8	覆土 1/3残存	口縁部外傾。体部身深。外稜は明瞭。口縁部中位に撫でによる浅い稜。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面撫で。	①透明・白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③橙
第54図6 土師器杯	口径：(13.4) 底径：(12.5) 器高：(4.1)	床直・貯蔵穴・ 覆土 1/4残存	口縁部外傾。口辺部僅か湾曲。外稜は明瞭。体部はやや浅い。口縁部内外横撫で。体部外面削り。	①白色鉱物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③橙
第54図7 土師器杯	口径：(11.7) 底径：(10.6) 器高：(4.5)	床直 破片	口縁部緩外反。体部身深で球形。外稜は明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り後撫で。体部内面平滑。	①白色・透明鉱物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③明赤褐
第54図8 土師器杯	口径：(13.0) 底径：(12.6) 器高：(4.2)	床直・覆土 口縁部1/3残存	口縁部外傾。体部身深。外稜は尖鋭で明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り後撫で。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 良好 ③明赤褐
第54図9 土師器杯	口径：(12.6) 底径：(11.0) 器高：(3.8)	覆土 破片	口縁部外傾。体部浅く偏平。外稜は明瞭。口縁部中位に撫でによる稜。体部外面削り。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③橙
第54図10 土師器杯	口径：(13.6) 底径：(12.6) 器高：(3.8)	覆土 破片	口縁部外傾。体部浅く偏平。外稜は明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③橙
第54図11 土師器杯	口径：(11.1) 底径：(9.9) 器高：(3.0)	覆土 破片	口縁部緩外反。体部浅く偏平。外稜は明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面は削り。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③橙
第54図12 土師器 小型甕	口径：11.9 底径：5.2 器高：9.0	竈床直・覆土 3/5残存	口縁部直立気味に緩外反。肩部に最大径。口縁部内外横撫で。体部縦位削り後上半に横位削り。体部内面横撫で。	①白色・透明・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③にぶい橙
第54図13 土師器甕	口径：(13.0) 器高：(5.2)	床直 口縁部破片	口縁部外反。体部直線的落ちる。口縁部内外横撫で。体部上半撫で。内面横撫で。	①白色・黒色鉱物粒子。白粒子 ②酸化焰 軟質 ③にぶい橙
第55図14 土師器甕	口径：23.2 器高：(13.5)	床直・貯蔵穴 口～胴部破片	丸胴甕。口縁部強く外反。頸部屈曲。体部中位に最大径。口縁部内外横撫で。体部外面横位削り。内面横位撫で。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③浅黄橙
第55図15 土師器甕	口径：(15.0) 器高：(3.2)	床直 口縁部破片	口唇部内傾。口縁部は緩外反。口縁部内外横撫で。外面に指頭痕。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③にぶい黄橙
第55図16 土師器甕	底径：(6.8) 器高：(5.8)	床直・覆土 底部破片	長胴甕か。外面縦位削り。内面撫で。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③にぶい橙

Ⅲ章 書上本山遺跡

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第55図17 土師器甕	底径：( 7.3) 器高：(24.0)	床直・貯蔵穴 胴～底部1/3残存	長胴甕。底部突出。外面上半縦位・斜位 削り、下半横位削り。底部上は縦位撫で。 内面は撫で。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③にぶい黄橙
第55図18 土師器甕	器高：(9.1)	床直・貯蔵穴・ 覆土 頸部破片	長胴甕。外面縦位削り。内面斜位撫で。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 良好 ③にぶい黄橙
第55図19 紡錘車	径： 4.3 高： 1.9 重：43.89 g	床直 完形		①蛇紋岩

3号住居跡 (第57図)

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第57図1 土師器杯	口径：13.0 器高： 4.4	床直 ほぼ完形	蓋状杯。口縁部は丸みを帯びる。外稜・ 屈曲部を持たず、器厚は比較的厚い。口 縁部内外横撫で。体部外面削り。内面は 撫で。	①白粒子、白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 軟質 ③にぶい黄橙
第57図2 土師器碗	器高：(6.2)	床直 口縁部のみ欠損	口縁部短く外傾。屈曲を持つ。体部は身 深で張り、球形を呈す。口縁部内外横撫 で。体部外面削り後撫で。線状使用痕が 認められる。体部内面の剥落著しい。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焰 軟質 ③淡黄
第57図3 土師器杯	口径：(11.5) 底径：( 8.5) 器高： 4.8	床直・覆土 1/2残存	口縁部直立気味に外反。体部との境に屈 曲を持たせる。内外面とも丁寧な横撫で。 底面平底で削り調整。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③にぶい黄橙
第58図4 土師器杯	口径：(13.0) 器高：(11.6) 器高：( 3.0)	覆土 破片	口縁部外反。外稜は明瞭で尖る。口縁部 内外横撫で。体部は削りか。	①白色鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③橙
第58図5 土師器甕	口径： 18.2 器高：(18.0)	床直・貯蔵穴・ 覆土 口～胴部破片	長胴甕。口縁部緩外反。体部との境に凹 みを持つ。口縁部内外横撫で。体部外面 縦位削り。内面縦位・斜位撫で。	①白色・黒色・透明鉱物粒子、白粒子 ②酸化焰 良好 ③淡黄
第58図6 土師器 手捏ね	口径： 3.4 器高：(2.6)	覆土 1/4残存	口縁部僅外反。体部直立。雑な作り。内 外面とも指撫で調整。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 良好 ③橙

4号住居跡 (第58図)

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第58図1 砥石	長： 2.8 幅： 2.6	覆土 破片	上端のみ残存。断面形はほぼ正方形を呈 する。	①砥沢石 ④重：17.13 g

6号井戸 (第68図)

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第68図1 土師器杯	口径：15.6 底径：16.0 器高： 5.7	覆土 3/4残存	口縁部直立気味に外反。体部は身深なが ら、やや偏平で底面は安定。外稜は不明 瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り、 内面撫で。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③灰黄褐



番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第68図2 土師器杯	口径：(12.1) 底径：(10.8) 器高：4.8	覆土 1/2残存	口縁部外傾。体部は身深で球形。外稜は明瞭。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面撫で。極一部に研磨。	①白色鈳物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③橙
第68図3 土師器甕	口径：15.8 底径：9.6 器高：19.5	床直・覆土 ほぼ完形	小型甕。口縁部は短く外反。体部は直立し、底部は丸みを帯び不安定。口縁部内外横撫で。体部外面縦位削り。内面縦位・横位撫で。底部外面も削りを施す。	①白粒子・白色・黒色・透明鈳物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③淡黄
第68図4 土師器甕	口径：23.2 底径：7.1 器高：30.6	覆土 ほぼ完形	丸胴甕。口唇部丸みを帯び、口縁部外反。最大径は体部中位。底部は僅突出。口縁部内外横撫で。体部外面横位削り後横撫で。下半は丁寧。体部内面横撫で。	①黒色・白色鈳物粒子、白粒子 ②酸化焰 良好 ③淡黄 ④胴部最大径：30.3cm

## 土坑 出土遺物 (第68図)

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第68図5 土師器杯	口径：(11.8) 器高：3.7	21号土坑 1/2残存	口縁部内湾。体部は浅く偏平。口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面撫で。	①白色・黒色鈳物粒子、白粒子 ②酸化焰 堅緻 ③橙
第68図6 磁器皿		5号土坑床直 破片	青磁(白磁)片。皿片か？	

## グリッド出土遺物 (第77図)

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第77図2 磨製石鏃	長：3.7 幅：1.6 重：1.46 g	738 EGr 完形	薄手で脚部上位に両面から穿孔する。両側縁は直線的に平行し、先端部は僅かに湾曲する。しのぎは不明瞭である。	①変玄武岩
第77図3 小玉	径：0.54 高：0.40	734.5 DGr 完形		①翡翠 ④重：0.12 g
第77図4 砥石	長：6.5 幅：2.8	738.5 GGr 一部欠損	両端を欠損。短軸断面は正方形を呈する。	①砥沢石 ④重：54.05 g
第77図5 砥石	長：4.2 幅：3.6	739.5 GGr 破片	両端を欠損。断面は長方形で偏平である。	①砥沢石 ④重：38.38 g
第77図6 須恵器杯	口径：13.1 底径：6.0 器高：3.9	I区 完形	底部回転糸切り無調整右回転。内外面に墨書を施す。	①白色・黒色鈳物粒子 ②還元焰 やや軟質 ③淡黄 ④内外面共に墨書あり。
第77図7 須恵器杯	口径：13.2 底径：5.4 器高：4.2	I区 口縁部一部欠損	底部回転糸切り後撫で調整。右回転。	①白色鈳物粒子 ②還元焰 良好 ③にぶい黄橙
第77図8 土師器壺	底径：(8.0) 器高：(3.8)	Ⅲ区 底部	甕の可能性もある。内外面とも撫で調整。	①黒色・透明・白色鈳物粒子 ②酸化焰 良好 ③にぶい橙
第77図9 青磁碗		Ⅵ区740.5 CGr 破片	龍泉窯系青磁蓮弁文碗であろう。13~14世紀の所産か。	
第77図10 形象埴輪		I区 破片	外面に斜方向の刷毛目、内面撫で。突帯がT字を横にした形で取り付く。横先端部が直角に近い角度で折れ曲がることから、家形埴輪の一部と考えられる。	①中・細砂、黒色鈳物粒子 ②酸化焰 ③橙

Ⅲ章 書上本山遺跡

1号集石（第74・76図）

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第74図1 骨蔵器蓋部	縦：43.1 横：48.2 高：25.0	覆土 ほぼ完形	①白色凝灰岩 ④重：57.0kg
第74図2 骨蔵器蓋部	縦：39.2 横：31.4 高：21.0	覆土 完形	①粗粒安山岩 ④重：26.1kg
第74図3 骨蔵器	縦：25.7 横：20.2 高：17.9	覆土 破片	①粗粒安山岩 ④重：6.9kg
第76図4 骨蔵器身部	縦：47.6 横：47.7 高：26.4	覆土 欠損	①白色凝灰岩 ④重：46.8kg
第76図5 骨蔵器身部	縦：(35.2) 横：46.4 高：26.4	覆土 2/3残存	①白色凝灰岩 ④重：42.7kg

旧石器時代

器種 73点 (1号ブロック)

②	剥片 17点(23.29%)	碎片 42点(57.53%)	礫片 7点(9.59%)
---	----------------	----------------	--------------

① 台形石器 1点(1.37%)      ② 縦長剥片 2点(2.74%)  
 使用痕を持つ剥片 2点(2.74%) } (8.22%)  
 加工痕を持つ剥片 2点(2.74%)

石材 73点 (1号ブロック)

黒色安山岩 36点(49.32%)	黒色頁岩 14点(19.17%)	珪質頁岩 7点(9.59%)	①	②	③	④
-------------------	------------------	----------------	---	---	---	---

① 砂岩 5点(6.85%)      ④ チャート 2点(2.74%) } 5.48%  
 ② 頁岩 3点(4.11%)      溶結凝灰岩 2点(2.74%)  
 ③ 粗粒安山岩 3点(4.11%)      ⑤ 珪質変質岩 1点(1.37%)

台形石器 1点

黒色頁岩 1点(100%)
---------------

剥片 17点

黒色安山岩 7点(41.18%)	珪質頁岩 5点(29.41%)	黒色頁岩 4点(23.53%)	①
------------------	-----------------	-----------------	---

① 砂岩 1点(5.88%)

縦長剥片 2点

黒色頁岩 1点(50%)	珪質頁岩 1点(50%)
--------------	--------------

碎片 42点

黒色安山岩 27点(64.29%)	①	②	③	④
-------------------	---	---	---	---

① 黒色頁岩 6点(14.29%)  
 ② 砂岩 3点(7.14%)  
 ③ チャート 2点(4.76%) } 9.52%  
 頁岩 2点(4.76%)  
 ④ 溶結凝灰岩 1点(2.38%) } 4.76%  
 珪質変質岩 1点(2.38%)

加工痕を持つ剥片 2点

黒色安山岩 2点(100%)
----------------

使用痕を持つ剥片 2点

黒色頁岩 2点(100%)
---------------

礫片 7点

粗粒安山岩 2点(28.58%) } 57.16% 溶結凝灰岩 2点(28.58%)	①
-----------------------------------------------	---

① 砂岩 1点(14.28%) } 42.84%  
 頁岩 1点(14.28%)  
 珪質変質岩 1点(14.28%)

第78図 石器の器種と石材構成

Ⅲ章 書上本山遺跡

器種 231点 (2号ブロック)

	③	剥片 100点(43.29%)	破片 109点(47.19%)
② ①	①	ナイフ形石器 2点(0.86%) 縦長剥片 2点(0.86%)	② 使用痕を持つ剥片 1点(0.44%) 台石 1点(0.44%)
		} 1.72%	} 0.88%
			③ 石核 16点(6.92%)

石材 231点 (2号ブロック)

黒色安山岩 203点(87.88%)				①	③
①	②	③	④	②	④
黒色頁岩 17点(7.36%)	ホルンフェルス 3点(1.29%)	粗粒安山岩 2点(0.86%) 黒曜石 2点(0.86%)	チャート 1点(0.44%) 頁岩 1点(0.44%) 溶結凝灰岩 1点(0.44%) 赤色珪質岩 1点(0.44%)		
		} 1.72%	} 1.76%		

縦長剥片 2点

黒色頁岩 2点(100%)
---------------

台石 1点

溶結凝灰岩 1点(100%)
----------------

ナイフ形石器 2点

黒色頁岩 2点(100%)
---------------

剥片 100点

黒色安山岩 93点(93%)	①
----------------	---

① 黒色頁岩 7点(7%)

使用痕を持つ剥片 1点

黒色頁岩 1点(100%)
---------------

破片 109点

黒色安山岩 97点(89%)				①	②
----------------	--	--	--	---	---

①	黒色頁岩 3点(2.75%) ホルンフェルス 3点(2.75%)	} 5.5%
②	粗粒安山岩 2点(1.83%) 黒曜石 2点(1.83%)	} 3.66%
③	チャート 1点(0.72%) 赤色珪質岩 1点(0.72%)	} 1.84%

石核 16点

黒色安山岩 13点(81.25%)	①	②
-------------------	---	---

① 黒色頁岩 2点(12.50%)  
② 頁岩 1点(6.25%)

第79図 石器の器種と石材構成

石器組成図

器種 43点 (ブロック外)

①	②	碎片 5点 (11.63%)	礫片 33点(76.74%)
---	---	-------------------	----------------

① 台石 1点(2.33%)  
磨石 1点(2.33%) } 4.66%      ② 剥片 3点(6.97%)

石材 43点 (ブロック外)

粗粒安山岩 11点(25.58%)	チャート 10点(23.26%)	砂岩 9点(20.93%)	溶結凝灰岩 6点(13.95%)	①	②	③
-------------------	------------------	---------------	------------------	---	---	---

① 黑色頁岩 3点(6.97%)      ② 黑色安山岩 2点(4.65%)      ③ 珪質頁岩 1点(2.33%)  
ホルンフェルス 1点(2.33%) } 4.66%

磨石 1点

溶結凝灰岩 1点(100%)
----------------

碎片 5点

砂岩 2点(40%)	黑色頁岩 1点(20%)	黑色安山岩 1点(20%)	チャート 1点(20%)
------------	--------------	---------------	--------------

台石 1点

粗粒安山岩 1点(100%)
----------------

礫片 33点

粗粒安山岩 10点(30.30%)	チャート 9点(27.27%)	砂岩 7点(21.21%)	①	②
-------------------	-----------------	---------------	---	---

① 溶結凝灰岩 5点(15.15%)  
② 珪質変質岩 1点(3.04%)  
ホルンフェルス 1点(3.04%) } 6.08%

剥片 3点

黑色頁岩 2点(66.67%)	黑色安山岩 1点(33.33%)
-----------------	------------------

縄文時代

器種 572点

①	②	③	④	使用痕を持つ剥片 69点(12.06%)	⑧	剥片 363点(63.46%)	⑪
---	---	---	---	----------------------	---	-----------------	---

① 石 鏃 26点(4.55%)	⑤	⑩	⑥ スタンプ形石器 3点(0.52%)	⑪ 碎片 11点(1.92%)	⑫
② 打製石斧 15点(2.62%)	⑥	⑨	⑦ 三角錐形石器 3点(0.52%)	⑫ 焼 礫 8点(1.40%)	
③ スクレイパー 15点(2.62%)	⑦	⑧	⑧ 磨石類 12点(2.10%)		
④ 加工痕を持つ剥片 34点(5.94%)	⑧	⑨	⑨ 敲石 1点(0.17%)		
⑤ 石 核 6点(1.05%)	⑨	⑩	⑩ 小形の石器 4点(0.70%)		

石材 572点

黑色頁岩 248点(43.36%)	チャート 186点(32.52%)	①	②	③	④	⑤	⑥
-------------------	-------------------	---	---	---	---	---	---

① 黒曜石 34点(5.94%)	⑥ 頁岩 11点(1.92%)	⑩ 変質安山岩 2点	} 1.41%	⑪ 石英 1点	} 1.06%	⑦
② 粗粒安山岩 20点(3.50%)	⑦ 灰色安山岩 5点(0.87%)	変質珪質岩 2点		石英片岩 1点		⑧
③ 砂岩 18点(3.15%)	⑧ 細粒安山岩 5点(0.87%)	珪質頁岩 2点		石英閃緑岩 1点		⑨
④ 黑色安山岩 16点(2.80%)	⑨ 輝緑凝灰岩 3点(0.52%)	溶結凝灰岩 2点	輝緑岩 1点	⑩		
⑤ ホルンフェルス 12点(2.10%)			緑色片岩 1点	⑪		
			黒色片岩 1点			

第80図 石器の器種と石材構成

Ⅲ章 書上本山遺跡

石 鏃 26点

チャート 12点(46.15%)	黒曜石 8点(30.77%)	黒色頁岩 5点(19.23%)	①
------------------	----------------	-----------------	---

① 黒色安山岩 1点(3.85%)

打製石斧 15点

黒色頁岩 6点(40%)	①	②
--------------	---	---

① ホルンフェルス 2点 }  
頁岩 2点 } (40%)  
灰色安山岩 2点 }  
② 粗粒安山岩 1点 }  
細粒安山岩 1点 } (20%)  
砂岩 1点 }

スクレイパー 15点

黒色頁岩 14点(93.33%)	①
------------------	---

① 砂岩 1点(6.67%)

加工痕を持つ剝片 34点

黒色頁岩 22点(64.71%)	①	②	③
------------------	---	---	---

① チャート 3点(8.82%) }  
② 黒曜石 2点 } (11.78%)  
粗粒安山岩 2点 }  
③ 黒色安山岩 1点 }  
頁岩 1点 } (14.70%)  
砂岩 1点 }  
ホルンフェルス 1点 }  
緑色片岩 1点 }

使用痕を持つ剝片 69点

黒色頁岩 60点(86.96%)	①	③
------------------	---	---

① ホルンフェルス 3点(4.35%) }  
② 黒色安山岩 2点(2.90%) } (5.8%)  
③ 黒曜石 1点 }  
砂岩 1点 }  
灰色安山岩 1点 }  
変質安山岩 1点 }

石 核 6点

黒色頁岩 4点(66.67%)	黒曜石 2点(33.33%)
-----------------	----------------

小形の石器 4点

チャート 2点(50%)	黒色頁岩 1点(25%)	黒曜石 1点(25%)
--------------	--------------	-------------

スタンプ形石器 3点

ホルンフェルス 1点(33.33%)	変質安山岩 1点(33.33%)	石英閃緑岩 1点(33.33%)
--------------------	------------------	------------------

三角錐形石器 3点

黒色頁岩 3点(100%)
---------------

磨 石 12点

粗粒安山岩 9点(75%)	①
---------------	---

① 変質珪質岩 1点 }  
輝緑岩 1点 } (25%)  
黒色片岩 1点 }

敲 石 1点

粗粒安山岩 1点(100%)
----------------

焼 礫 8点

粗粒安山岩 5点(62.5%)	溶結凝灰岩 2点(25%)	①
-----------------	---------------	---

① 石英片岩 1点(12.5%)

剝 片 363点

チャート 160点(44.08%)	黒色頁岩 129点(35.54%)	①	②																
-------------------	-------------------	---	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

① 黒曜石 20点(5.51%) }  
② 砂岩 14点(3.86%) } (2.2%)  
③ 黒色安山岩 12点(3.31%) }  
④ 頁岩 8点(2.20%) }  
⑤ ホルンフェルス 5点(1.38%) }  
⑥ 粗粒安山岩 4点(1.10%) }  
⑦ 灰色安山岩 2点 }  
⑧ 変質珪質岩 1点 } (0.55%)  
⑨ 細粒安山岩 2点 }  
⑩ 珪質頁岩 2点 }  
⑪ 輝緑凝灰岩 2点 }  
⑫ 溶結凝灰岩 1点 }

碎 片 11点

チャート 6点(54.55%)	黒色頁岩 4点(36.36%)	①
-----------------	-----------------	---

① 石英 1点(9.09%)

礫 3点

チャート 3点(100%)
---------------

第81図 石器の器種構成

第6節 胎土分析

一遺跡から出土した土器はその器形・整形技法などで他の遺跡出土土器との共通性が指摘され、空時的な位置を充てられてきた。近年は、この器形などとの比較に加え、土器の胎土の特徴やその含有物の組成比率などから、各個体の産地を同定する作業を有効な手段としている。

恐らく土師器研究においても、産地の同定・供給範囲・生産量を加味した総合的な見地から、各遺跡出土土師器の属性分析の視野が広げられ、その研究も新たな段階を迎えようとしているのであろう。

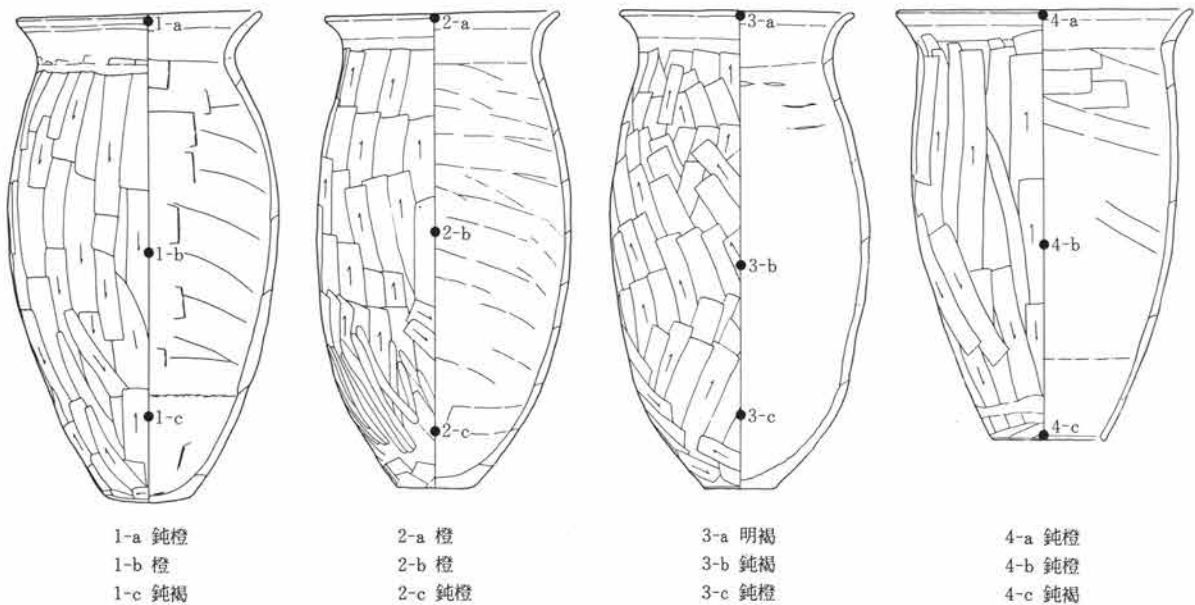
今回書上本山遺跡の古墳時代出土土器の胎土分析を行うにあたっては、その出土量が他遺跡に比して少ないことから、生産地同定を試みるには資料の量的な制約を受ける前提を持っていた。ここで、胎土分析の視点を従来の生産地同定や他遺跡との比較を主眼とせず、一軒の住居跡から出土した土器という限定した空間と時間を提供する資料をもって、かつ、一器種に限った分析を試みることによって、本遺跡の古墳時代後期の土師器胎土の一側面を明らかにすることを目的とした。

また、一個体の土器はその製作法から同一の粘土を使用しなければ焼成段階で破損することが知られている。故に、胎土分析の資料採集も一個体に一資料という前提がある。

しかし、我々が取り扱う土器の中には一個体の色調が土器の上下で著しく違うものも認められ、この現象を我々は二次焼成による色調変化と捉えていた。確かに、通常二次焼成による色調変化は土器の器表面を分けており、この色調変化を使用痕跡と看取り、その土器の使用状態が想起できるのであるが、果たして、その全てが使用痕によるものかも立証されてはいない。

ここで、書上本山遺跡1号住居跡の土師器長胴甕に注目すると、明らかに胴部下半から底部に至る色調が口縁部や胴部上半と差が生じていた。この長胴甕の各部位の胎土を分析することによって、一個体内の粘土使用状況が把握できるものとした。

分析にあたっては、1号住出土の長胴甕3個体を選び、また、若干ながら色調差が認められる甕を加えた。資料採集箇所は3箇所とし、口縁部・胴部中位・胴部下位を選んだ。(山口)



第82図 胎土分析資料

## 出土土器胎土分析 鑑定報告

(株)第四紀地質研究所 井上 巖

### X線回折試験及び電子顕微鏡観察

#### 1 実験条件

##### 1-1 試料

分析に供した試料は第8表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{m/m}$ の試料台にシルバークペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

##### 1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40 Kv, Current: 30mA, ステップ角度:  $0.02^\circ$ , 計数時間: 0.5SEC。

##### 1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は、35, 350, 750, 1500, 5000, の5段階で行い、写真撮影をした。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

#### 2 実験結果の取扱い

実験結果は第8表胎土性状表に示す通りである。

第8表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)をm/m単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバライト(Cristobalite)等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

##### 2-1 組成分類

###### 1) Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム(第84図)

参考図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo, Mi, Hb, の三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント(%)で表示する。

モンモリロナイトは $\text{Mo}/\text{Mo}+\text{Mi}+\text{Hb} \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMi, Hb, も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1~4はMo, Mi, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は参考図に示す通りである。

###### 2) Mo-Ch, Mi-Hb菱型ダイアグラム(第85図)

参考図に示すように菱型ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。



モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) のうち、a) 3成分以上含まれない、b) Mont、Chの2成分が含まれない、c) Mi、Hb、の2成分が含まれない、の3例がある。

菱型ダイアグラムはMont-Ch、Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch、Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $Mo/Mo + Ch \times 100$ と計算し、Mi、Hb、Ch、も各々同様に計算し、記載する。

菱型ダイアグラム内にある1～7はMo、Mi、Hb、Ch、の4成分を含み、各辺はMo、Mi、Hb、Ch、のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は参考図に示す通りである。

## 2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

- a) 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- b) 焼成ランクII：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c) 焼成ランクIII：ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

d) 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土(素地土)の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。

e) 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第8表の右端の備考に理由を記した。

## 2-3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱型ダイアグラムの位置分類による組合せによって行った。同じ組成を持った土器胎土は、位置分類の数字組合せも同じはずである。

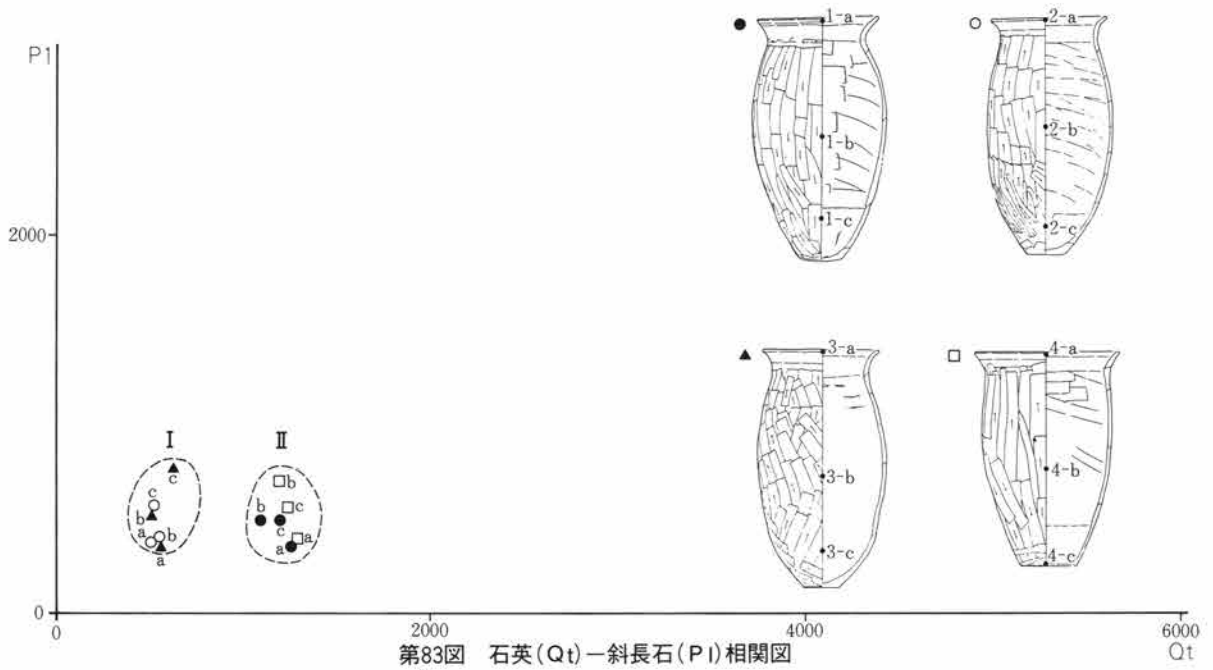
タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜上、アルファベットの太文字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用し、表現した。

例えば、三角ダイアグラムの1と菱型ダイアグラムの1の組合せはA、三角ダイアグラムの2と菱型ダイアグラムの15はBという具合にである。なお、タイプ分類のA、B、C、などは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加にともなって統一した分類名称を与える考えである。

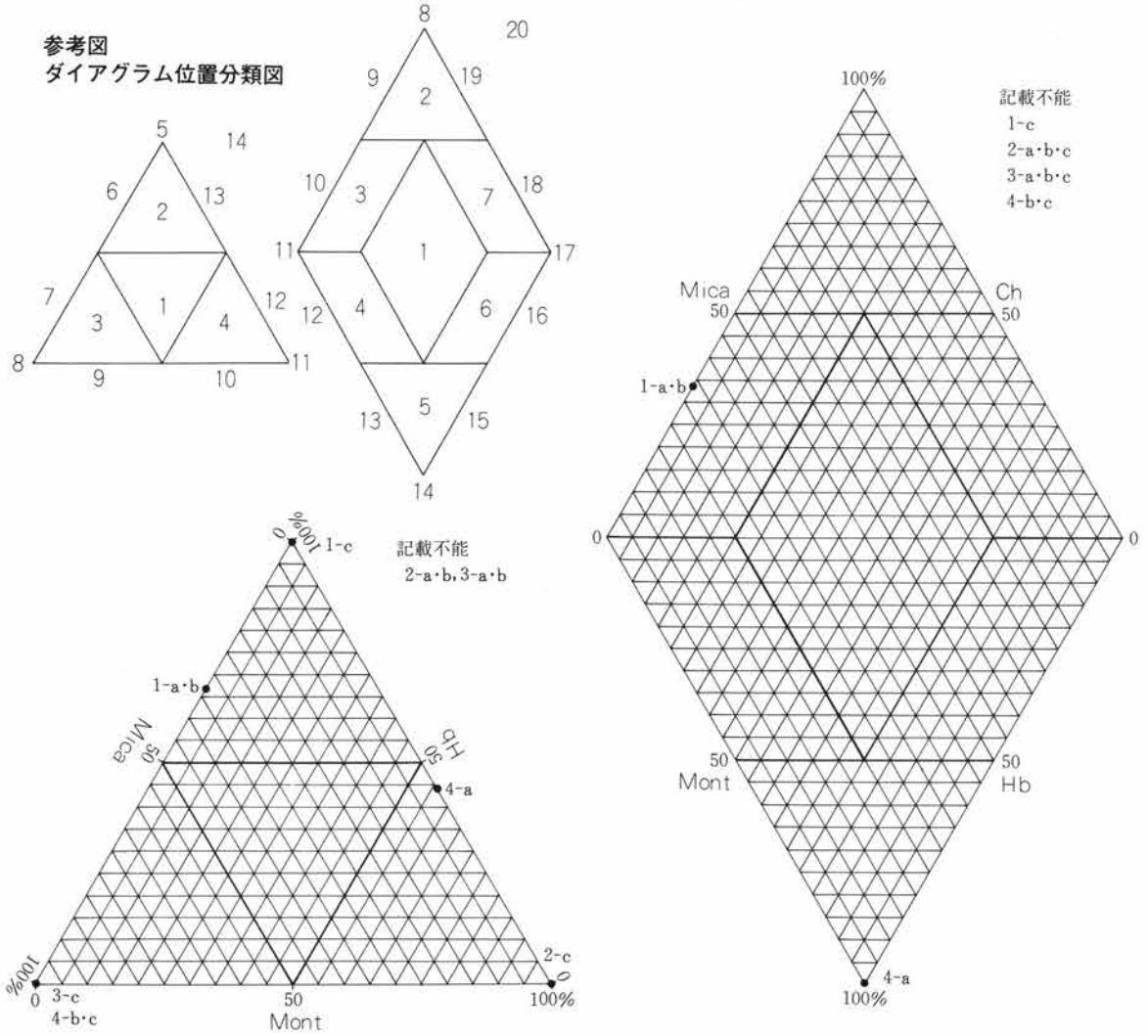
## 3 実験結果

### 3-1 タイプ分類

書上本山遺跡より出土した土器4点について次のような目的をもって分析を行った。



第83図 石英(Qt)－斜長石(Pl)相関図



第84図 Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム位置分類図

第85図 Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイアグラム位置分類図

第8表 胎土性状表

試料No	タイプ分類	焼成ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物						ガラス	備考
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Qt	Pl		
書上1-a	B	Ⅲ	6	10		81	163	124	1247	338	中粒	中粒砂, 碎屑性粘土
1-b	B	Ⅲ	6	10		76	157	114	1107	482	中粒	中粒砂, 碎屑性粘土
1-c	A	Ⅲ	5	20			103		1191	482	中粒	中粒砂, 碎屑性粘土
2-a	F	Ⅲ	14	20					523	366	中粒	細粒砂, 碎屑性粘土
2-b	F	Ⅲ	14	20					543	394	中粒	細粒砂, 碎屑性粘土
2-c	D	Ⅲ	11	20	111				526	544	中粒	中粒砂, 碎屑性粘土
3-a	F	Ⅲ	14	20					507	368	中粒	中粒砂, 碎屑性粘土
3-b	F	Ⅲ	14	20					520	501	中粒	中粒砂, 碎屑性粘土
3-c	C	Ⅲ	8	20		87			634	653	中粒	中粒砂, 碎屑性粘土
4-a	E	Ⅲ	12	14	114		89		1282	284	中粒	中粒砂, 碎屑性粘土
4-b	C	Ⅲ	8	20		103			1189	683	中粒	中粒砂, 碎屑性粘土
4-c	C	Ⅲ~Ⅳ	8	20		169			1237	347	細粒	中粒砂, 碎屑性粘土

焼成ランク Mu: I Mu-Cr: II Cr-glass: III glass: IV 原土: V  
 Mont: モンモリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 Qt: 石英 Pl: 斜長石

各々の土器は胴部より幾分下で胎土が異なっているように見受けられた。上部と下部で使用している胎土が異なるものであるかどうかを判別するために、土器の上部、中部、下部の3箇所について分析を行った。各土器については、例えば、1の土器については上部より1-a、1-b、1-cとした。胎土の境界はbとcの間にあり、cが異質と言うことになる。

土器胎土は第8表胎土性状表に示すように、三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類と、焼成ランクに基づいてA~Fの6タイプに分類された。

電子顕微鏡によるガラスの分析では、ガラスは中粒で、焼成ランクはⅢとあまり高くない。

Aタイプ…書上1-c

Hb 1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。

Bタイプ…書上1-a, 1-b

Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。

Cタイプ…書上3-c, 4-b, 4-c

Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。

Dタイプ…書上2-c

Mont 1成分を含み、Mica, Hb, Chの3成分に欠ける。

Eタイプ…書上4-a

Mont, Hbの2成分を含み、Mica, Chの2成分に欠ける。

Fタイプ…書上2-a, 2-b, 3-a, 3-b

Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。

おもに、 $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O$  (アルミナゲル) で構成される。

書上-1の土器は1-aと1-bの上部はBタイ

### Ⅲ章 書上本山遺跡

ブで構成され、下部の1-cはAタイプで構成され、境界より上部と下部では胎土の組成が異なっている。

書上-2も同様に、2-aと2-bの上部はFタイプ、下部の2-cはDタイプで構成され、胎土の組成は上部と下部とでは異なっている。

書上-3も同様に、3-aと3-bの上部はFタイプ、下部の3-cはCタイプで構成され、胎土の組成は上部と下部とでは異なっている。

書上-4は上部の4-aがEタイプであるが、中部と下部はCタイプで構成され、上記3点の土器とは異なった結果を示している。

以上の結果から明らかなように、土器の上部と下部とでは胎土の組成が異なり、2種類の胎土を使用して一個体の土器を製作していることがわかる。

#### 3-2 石英(Q t)-斜長石(P l)の相関について (第83図)

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の個有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々個有の石英-斜長石比を有しているといえる。

この個有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは前記のように各々の集団の有する個有の技術の一端である。

第83図のQ t-P l相関図に示すように、IとIIの2つのグループに分類された。

Iグループ…書上2-a, 2-b, 2-c, 3-a, 3-b, 3-c

このグループには書上-2と3の土器の上部から下部の分析した各々3

箇所がすべて含まれている。

IIグループ…書上1-a, 1-b, 1-c, 4-a, 4-b, 4-c

このグループには書上-1と4の土器の上部から下部の分析した各々3箇所すべてが含まれている。

Iグループの土器の上部はすべてFタイプであり、下部は2-cがDタイプ、3-cがCタイプと異なっているが、全体に胎土の使い方は似ている。

IIグループの書上-1はIグループと同じように上部はBタイプ、下部はAタイプと異なっている。書上-4は最上部がEタイプ、中部と下部がCタイプと異なっている。

この様みにてくると、同じ土器においては胎土の組成が異なっても砂の混合比は同じであるという特徴が認められる。

#### 4 まとめ1

- i) 土器胎土はA~Fの6タイプに分類された。各土器においては上部と下部とでは胎土の組成が異なり、明らかに2種類の胎土が使用されていることがタイプ分類で明らかとなった。
- ii) 電子顕微鏡によるガラスの分析では、ガラスは中粒で、焼成ランクはⅢとあまり高くない。焼成ランクとしてはどの土器のどの部分においても大差は認められなかった。
- iii) Q t-P l相関では、IグループとIIグループの2つのグループに分類された。Iグループには書上-2と3、IIグループには書上-1と4の土器が属し、各土器の上部から下部にいたる3箇所は同じグループに属し、1個の土器の中で異なる2種類の胎土を使用しているが、砂の混合比は同じであるということが判明した。

(井上)

## 5 まとめ2

以上のように、本報告で分析した古墳時代後期の土師器長胴甕は、一個体内に異なる2種類の胎土を使用していたことが判明した。その在り方は、長胴甕胴部上半と下半で胎土が違い、その胎土の差によって、一次焼成段階で色調差が顕著になったのである。この現象は、恐らく本遺跡のみの現象ではなく他遺跡にも同様な例は認められるものと思われる。しかしながら、製作者がなぜ使用胎土を異なるものとしたかその目的は不明である。しかし敢えて考えを巡らすと、例えば

- 1 底部欠損を目的とした二次利用の容易さ。具体的には、甑への再利用が考えられるが、4の甑の胎土も使用粘土の差が認められているため確証的ではない。
- 2 甕・甑の下半部過熱状態と温度差を意識し、熱効率を調整するため、効率的な煮沸を目指したのか、特殊な食物の煮沸のためか判然としないが、熱伝導の差が土器の上下で存在したと思われる。
- 3 製作上、胴部下半～底部は「型作り」で行われ、上半は輪積み、紐作りで行われるためとも捉え得る。その製作工程において、体部下半と上半の製作が分けられた可能性を指摘しておきたい。下半の製作を「型作り」で行うことによって、器形の安定化が図られ、かつ大量生産が容易になったとも考えられる。

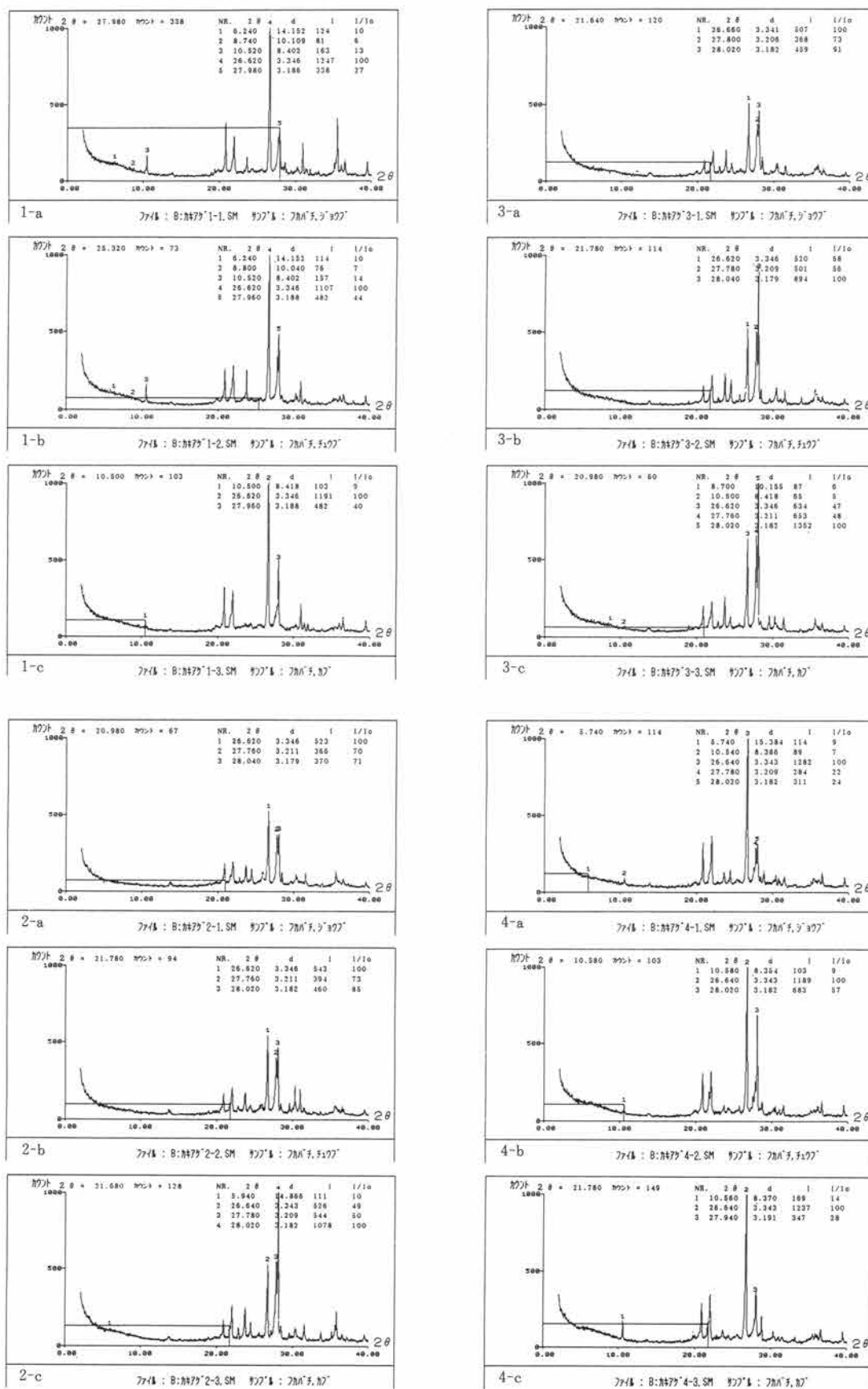
上記3点を想定したが、いずれも根拠は乏しい。大半の該期長胴甕がこの“異種粘土使用技法”によって製作されてはいないだろうし、本来の長胴甕や甑の製作方法を念頭に置くと、本例は特殊例なのかもしれない。さらにこの“異種粘土使用技法”を古墳時代後期の土師器製作方法と限定することも、この4個体の分析だけでは言及できない。他の時期、または他の器種の一個体内の異種粘土の存在を明らかにしなければならないだろう。

次に本分析によって、この“異種粘土使用技法”においてもその胎土内の混和材として砂の混合比が同一の傾向を示す数値が提示された。これは、異種粘土を使用しても、砂の混合比を同率にすることによって、焼成段階の破碎を防ぐ技法として考えておきたい。つまり、胎土が異なる場合でも、粘土に混ぜる砂の混合比を同じにすることによって、焼成時の失敗は無いものと理解できる。このことは、当時の焼成技術が、胎土の砂混合比にまで注意が払われるという高次の制作技術を持っていたと考えられる。土師器焼成遺構の存在は未だ不明確な様相だが、胎土混和材にこのような、統一性が認められることから、製作者・焼成遺構などに一定の方向が見いだせよう。

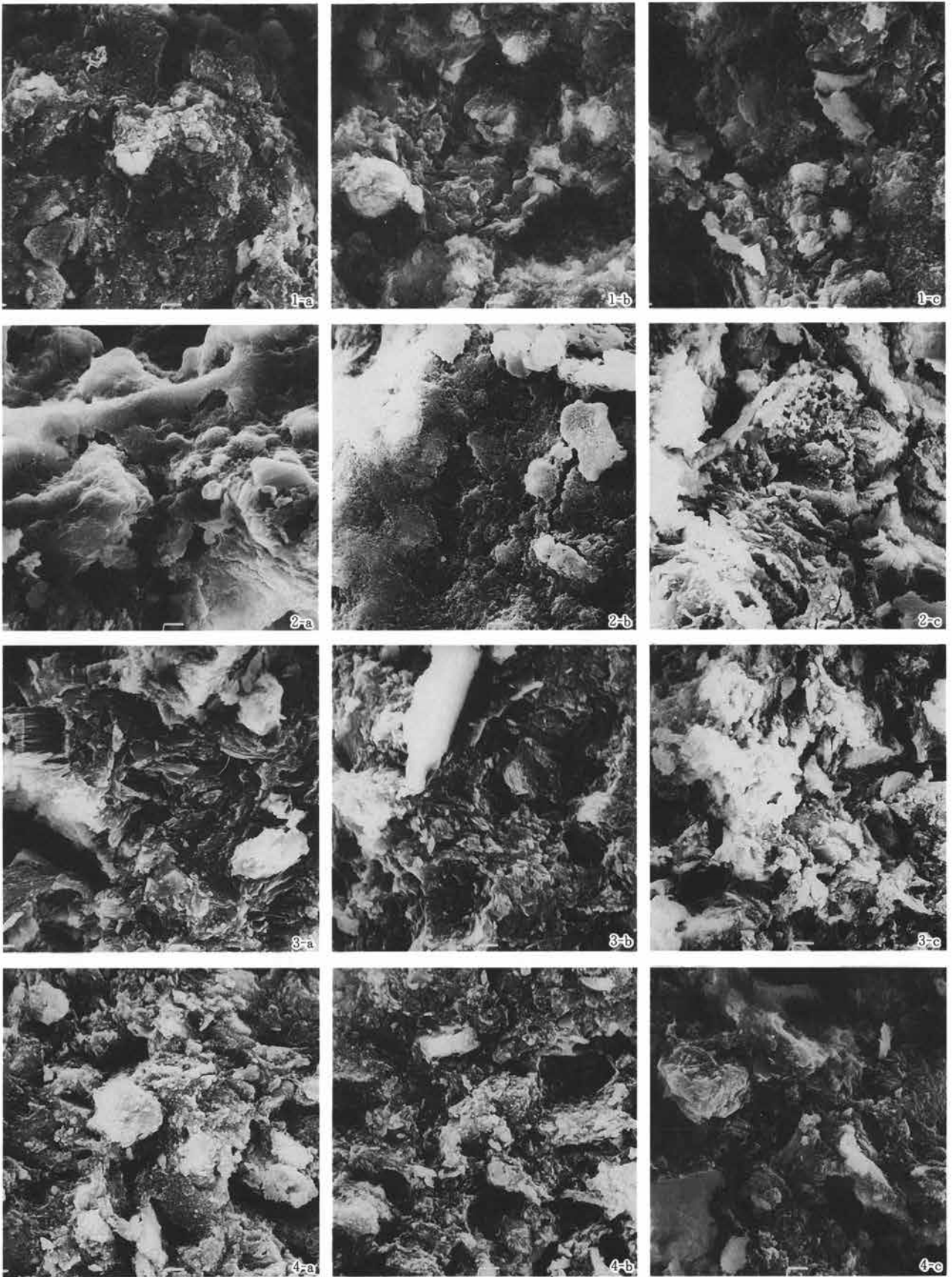
今回の分析では一住居、一個体という単位で胎土分析を行った。それによって、従来の一個体の土器には一種類の粘土が使用されるという前提を覆す結果を得たが、これはいままでの産地同定や時期的な使用粘土の傾向などを把握する目的ではなく、微視的な土師器製作の特殊例を呈示したに過ぎないのであって、普遍的な存在ではない。

しかし、今回の分析の目的の一つとして、土器の胎土分析をその方法・目的に様々な可能性が内在する有効な手段と位置付ける意味もあり、本分析のような製作技法の一手段を明らかにする視点も必要と考え、分析を試みた次第である。将来的には胎土分析を行う際には、従来の遺跡間・個体間の比較を一義的としながらも、一個体における各部位の比較も行い、その集落や集団の土器製作の技法も明らかにした分析を行わなければならないだろう。今回の分析結果がその一助となれば幸いである。

(山口)



第86図 X線回折チャート



第87図 電子顕微鏡写真

(×5000)





#### IV章 波志江六反田遺跡



第1図 遺跡の位置

## 第1節 遺跡の概要

### (遺跡内の地形)

赤城山南麓の平野部に市街地を展開する伊勢崎市は県中央部のやや東よりに位置することになり、古くは東山道など古道の沿線であり、近年はJR両毛線・東武伊勢崎線の鉄道交点として、将来は上武道路と北関東横断道が東西・南北に交わる自動車交通要所として、その交通を核とした発展が約束されている地域である。伊勢崎市を中心とした地形区分は概ね下記の5地形に分けられる。

1. 赤城火山斜面
2. 大間々扇状地 (a 桐原面、b 埋没地域)
3. 前橋台地
4. 伊勢崎台地
5. 広瀬川低地帯

波志江六反田遺跡及び波志江天神山遺跡は地形区分としては、1の赤城山斜面の洪積台地に占地し、東の西桂川・西の神沢川によって挟まれ、さらに中央に波志江沼を持つ沢が入り込むローム台地である。赤城山斜面には小河川による開析谷によって形成された樹枝状に延びる舌状台地が発達し、桑園などの生産域・集落・墓域などに利用されている。開析谷は沖積地として、水田・養魚場などに利用される。前述の波志江沼は養鯉池として著名である。

波志江六反田遺跡は、このローム台地のうち県道深津伊勢崎線から西桂川間を調査区とし、調査区域内の地形は、西の県道側から東にかけて傾斜する緩斜面である。東には、旧西桂川流路が検出されており、この旧流路を境にして東に沖積低地が展開する。沖積低地における調査区は新西桂川で止まるが、東に隣接する波志江中峰岸遺跡に連なる沖積低地であり、検出された水田跡も同一の性格を持つものと考えられる。

周辺地形は、巨視的に見ると南北に緩やかに傾斜する洪積台地と同様の傾斜を見せる沖積低地が連続する地形であり、本遺跡はこの洪積台地が周辺の沖積低地に侵食され、狭小になった部分の東斜面側に占地する。

### (検出された遺構と遺物の概要)

波志江六反田遺跡で検出された遺構は、その殆どが、近世～近代段階の溝、井戸などが主体である。調査は、これらの溝・井戸という比較的新しい時期の遺構と前述の水田跡の調査が先行し、その後平安時代の住居跡や旧石器時代の調査を行った。

#### 旧石器時代

試掘は、調査区内でローム層の遺存が良好な箇所、また、作業上表土などの崩落の危険性が無い箇所を選んで2×4mの試掘坑を基本にして行った。

その結果、調査区のほぼ中央の台地傾斜が幾分変換する箇所で、IV層(板鼻褐色軽石混土層)中より6点の黒曜石製の石器出土を見た。調査はこの石器出土地点と調査区高標高部分である西側を中心に暗色帯上下の石器検出を試みたが、下面より石器は出土しなかった。また、湧水も著しく台地低端部の暗色帯までの掘り下げは断念せざるを得なかった。

#### 縄文時代

遺構は検出されなかった。ただし、包含層として燃糸文の出土を見る。1箇所集中する傾向はあるものの、散漫であり同一個体ながらも完形に復元できる資料ではない。出土地点は調査区中央やや西寄りだが、周辺は近世～近代遺構が密集しており、攪乱を受けている為、出土状況も良好とはいえない。

#### 平安時代

3軒の住居跡を検出することができた。8世紀に比定される土器が出土しているが、3軒とも残存状態は良好ではなく、近世遺構の攪乱を受けている。

水田跡はAs-B下で検出された。同様の水田が隣接する波志江中峰岸遺跡でも検出されている。

#### 近世～近代

溝は4条・井戸3基・土坑32基を検出した。また、掘立柱建物跡も1棟確認しているが、これらの時期決定を確立する積極的な遺物の出土がなく、遺構の配置・規模・覆土の状態から本段階と捉えた。

#### 現代

県道側におびただしい攪乱坑を確認したが、いわ

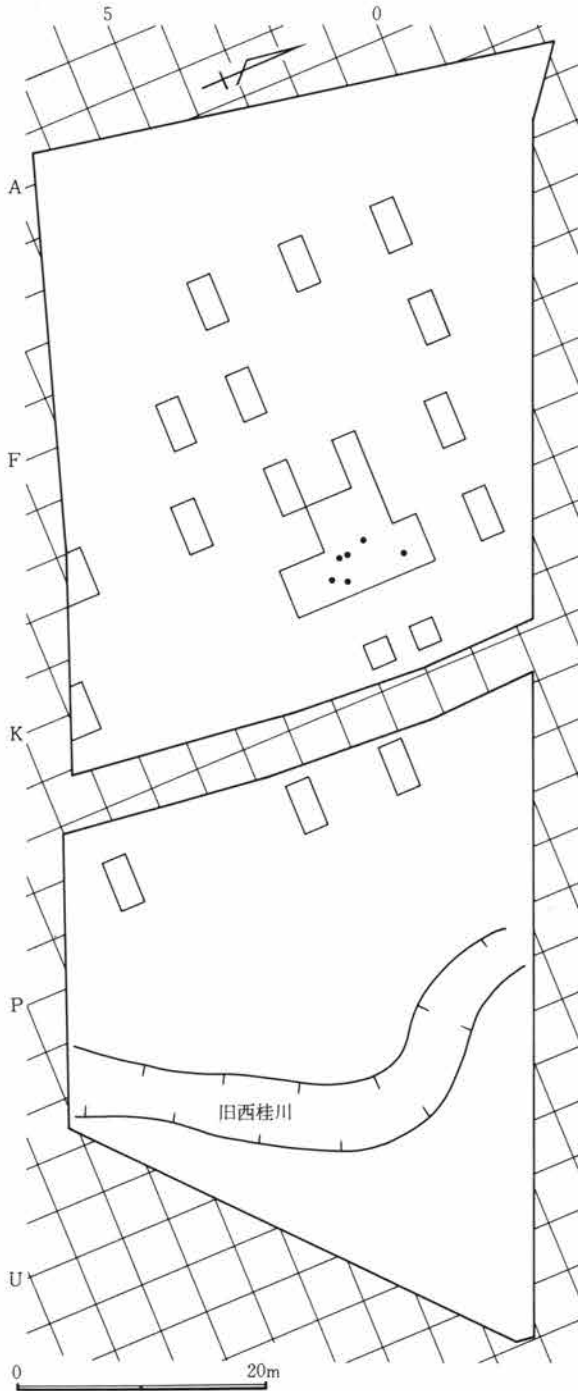


第2図 周辺の地形

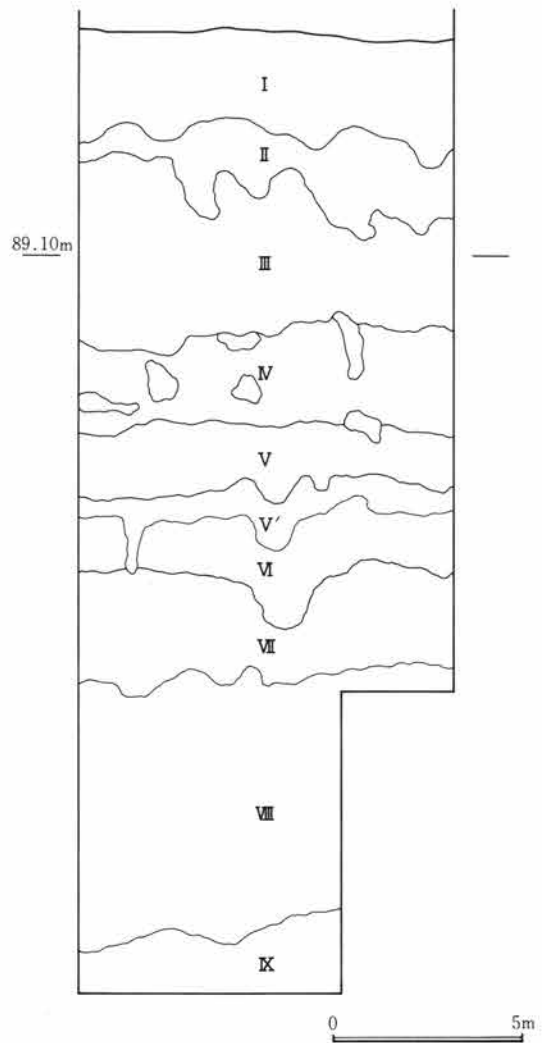
ゆるゴミ穴であり、調査対象から除外した。中には重機による掘削坑に産業廃棄物が充満しており、その深度は暗色帯下まで及んでいた。

### 第2節 基本土層

旧石器試掘坑北側壁を分層し、遺跡内のローム層序を資料化した。3図はC-1Grの土層図である。



- I 表土層 洪積台地部分では層厚は非常に薄く、そのことが遺構残存状況を悪くしている。
- II 黄褐色軟質ローム層 ソフトローム層。地点によっては、この上層に土壌化した同色の縄文時代の遺物包含層に相当する層が存在する。
- III 黄褐色硬質ローム層 ハードローム層。As-Spを含む。
- IV 褐色硬質ローム層 As-Bpを塊状に含むためやや砂質。本遺跡の石器出土層位である。
- V 黄褐色硬質ローム層 粘性が強く、橙色の粒子を含む。
- V' 黄褐色軟質ローム層 V層の軟質化した層。地点によっては認められない。ATはこの層の下位にあるといわれる。
- VI 暗褐色硬質ローム層 暗色帯。クラックが入りやや淡色。
- VII 暗褐色硬質ローム層 暗色帯。VI層より暗い色調を呈する。
- VIII 褐色硬質ローム層
- IX 八崎火山灰層  
尚、沖積低地部分は第22図を参照してほしい。



第3図 旧石器出土位置と基本土層図

第3節 旧石器時代

調査区中央台地東斜面で出土した本遺跡の旧石器時代の石器は、総計7点の出土である。試掘により2点の石器を見ることができ、拡張調査を行ったが、石器は5点を追加するのみであった。ブロックとしてはまとまりを持たず、希薄な出土状態といえよう。この石器出土箇所は傾斜変換地点のためか、V層より湧水し、調査は困難を極めた。このため出土石器7点の内、碎片1は調査時の誤認により出土位置の記録化が及ばなかった。本報告で、平面図示できたのは6点である。また、石器出土箇所西側には2号井戸が位置するように、近世～近代の遺構が集中する箇所でもある。石器出土層位の上層であるⅢ・Ⅳ層の遺存は良好ではなかった。

また、調査区西側の高標高部分も試掘を行い、特にⅣ層・Ⅴ層の精査を中心に、かつ暗色帯上下の石器群も考慮に入れ石器の検出に努めたが、前述の6点の石器以外は出土していない。さらに、西に隣接する波志江天神山遺跡でも旧石器時代の試掘を行ったが、ここでも石器は検出されていない。

本遺跡の石器はⅣ層の板鼻褐色軽石混土層下位から出土しており、スクレイパーの出土はⅤ層の黄褐色軟質ローム層上面である。3層にわたる出土であるが、板鼻褐色軽石層下でAT上に挟まれる層位であり、出土状況から安定的な出土層位はⅤ層の黄褐色硬質ローム層と捉えられよう。

出土石器の内訳は、スクレイパー2・使用痕を持つ

つ剥片石器2・剥片1・碎片2である。1点の黒色頁岩製の碎片を除くと全て黒曜石製であり、主要石材となっている。

石器の接合関係は認められなかったことから、いわゆる石器製作址としての場ではなかったようだ。

(出土石器)

7点の出土石器の内4点を図示した。

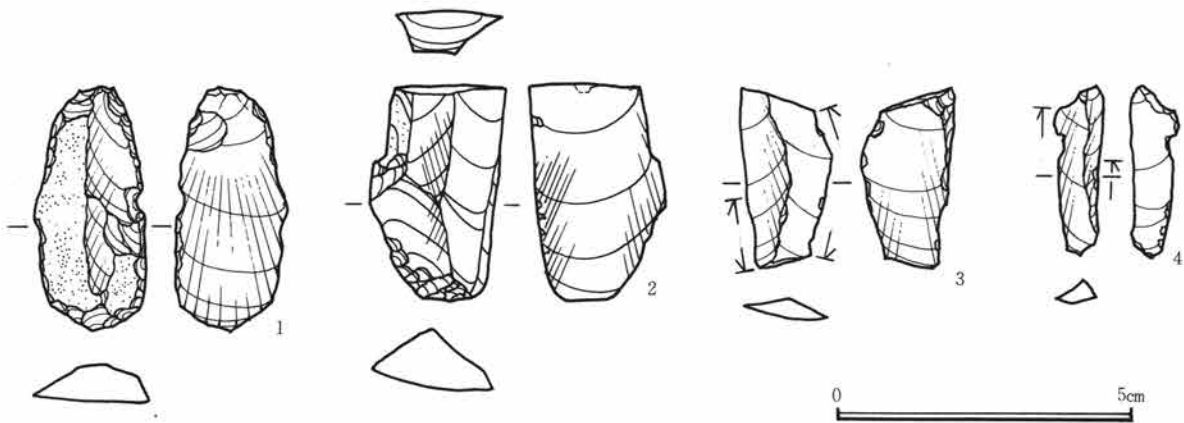
1はスクレイパー。黒曜石製の小型縦長剥片を素材とし、表面に礫面を残す。裏面も打痕を残し湾曲する。剥片端部に入念な調整を施すエンドスクレイパーである。また、両側縁打面周縁にも細かな調整が及ぶ。なお、右側縁中位の剝離は新しいものである。

2もスクレイパー。黒曜石製の縦長剥片を素材とし打面側を欠損する。比較的厚手の素材であり、緩やかな湾曲を持つ。剥片端部に入念な調整を集中するエンドスクレイパーである。両側縁特に右側縁に使用痕として歯こぼれが認められる。

3は使用痕を持つ剥片石器。薄手で黒曜石製の小形縦長剥片を素材とし、打面端部を欠損する。使用痕は両側縁に歯こぼれが認められる。

4も使用痕を持つ剥片石器。黒曜石製の細身の縦長剥片を素材としている。使用痕は両側縁に認められるが、左側縁の歯こぼれが顕著である。

その他は剥片1と碎片2が出土しているが、いず



第4図 旧石器時代の出土石器

れも図示するものではない。ただし、黒曜石の剥片・碎片とも判然としないが、おそらく縦長剥片であろう。黒色頁岩製の碎片の素材形状は不明であるが、横長剥片の可能性が高い。

以上のように図示した4点の石器は全て黒曜石製である。黒曜石の積極的な使用が本遺跡の旧石器時代の特徴と捉えられよう。しかし、黒色頁岩製の碎片があるため、本遺跡の石材組成が黒曜石のみの単純な組成ではなく、複数石材が混在する組成の可能性は高い。

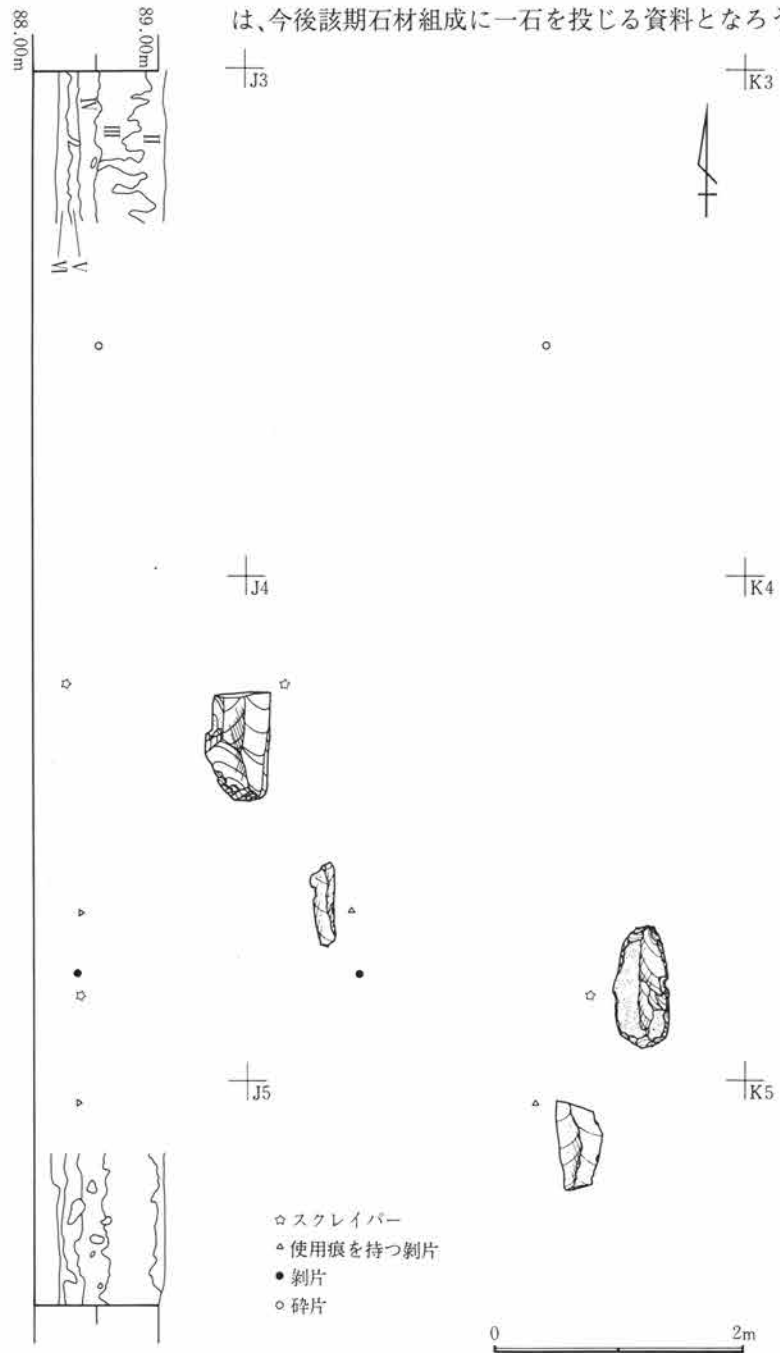
また、石器出土の集中傾向を見ると、黒色頁岩製の碎片はその他の黒曜石製の石器とはやや距離を保つ位置より出土している。製作址などの性格であれば同一のブロックへの帰属が考えられるが、本遺跡の場合は石器製作址としての判断はできないため、この黒色頁岩製の碎片の出土位置が意味するところは検討を要するだろう。

本遺跡の旧石器時代の出土石器は以上のように少なく、ブロックやユニットといったまとまりを持った石器群ではない。また、エンドスクレイパーなどの定形石器が出土を見るものの、器種組成などは偏りを見せ、文化層としてのその全容は把握できない資料である。ただし、比較資料として周辺の該期遺跡を概観しても、同一層位より出土した例を見ないことから、本遺跡の調査例が周辺の遺跡でも重要な位置を占めることは疑う余地もない。

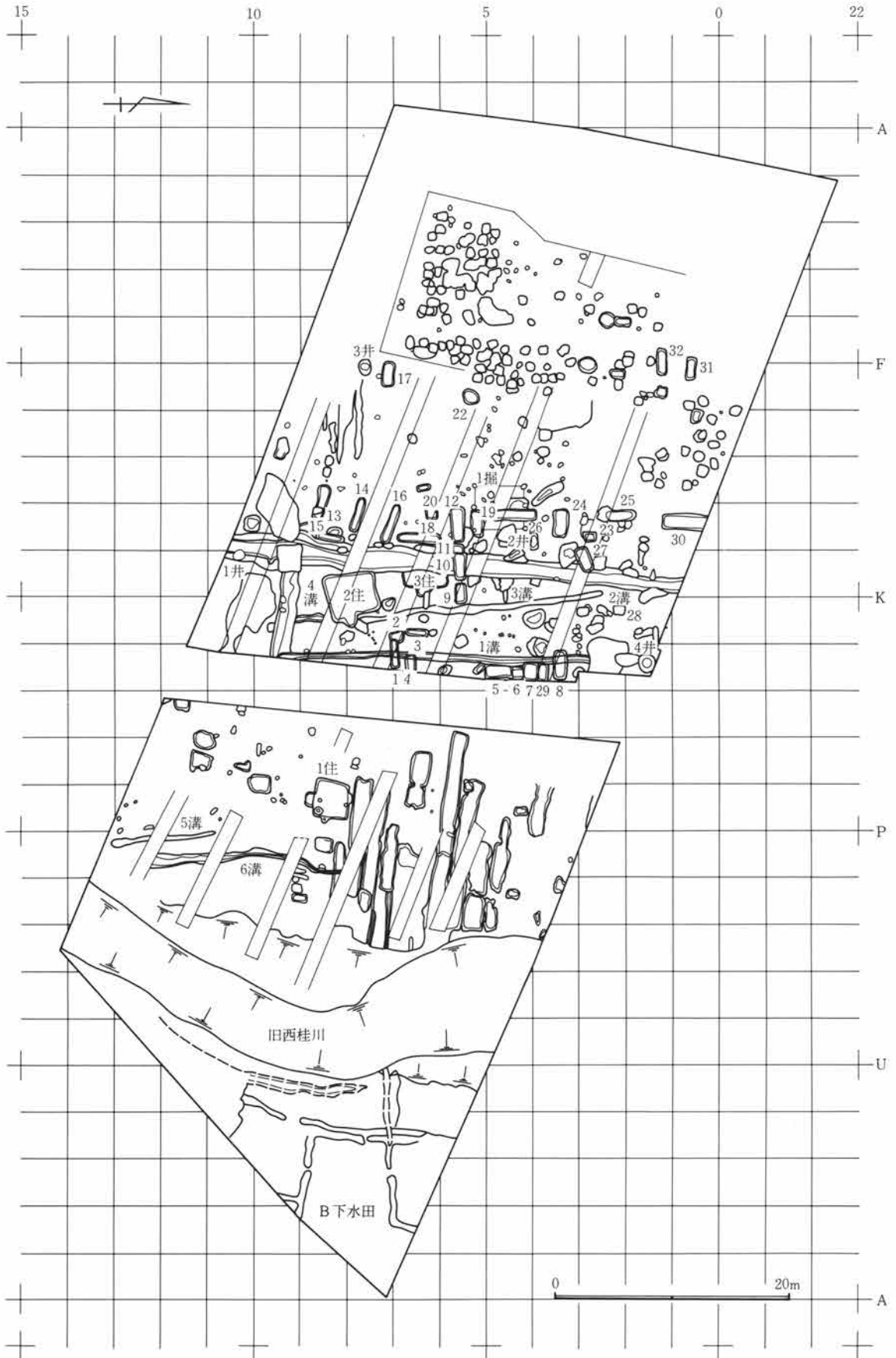
石器製作址としての在り方から、石器が次段階に使用される様相は現状の群馬県の調査例ではな

かなか把握できない。石器対象物の加工・解体といった作業の場も存在するはずであり、そのような場に残される石器の組成や比率を明らかにしなければならないだろう。本遺跡の石器出土状況からは断定はできないが、将来的には明らかになるべき要素である。

また、石材として黒曜石への依存度が高く、黒色安山岩などの群馬県域の主要石材が見られない特徴は、今後該期石材組成に一石を投じる資料となろう。



第5図 旧石器遺物分布



第6図 遺構全体図

第4節 縄文時代

(概要)

検出された縄文時代に比定される遺構はなく、出土遺物も少ない。周辺遺跡では、波志江天神山遺跡で、前期の遺物包含層と陥穴が調査され、下触牛伏遺跡では前期諸磯c式期に比定される深鉢が出土した住居跡を検出している。また、東の中峰岸遺跡を隔てた堀下八幡遺跡では、諸磯b式期の住居跡が報告されているように、各台地毎に集落跡などの遺構として存在している。また、各遺跡とも包含層出土として爪形文や燃糸文・押型文系土器群が報告されており、当地域の縄文時代の様相として、草創期～早期という比較的早い段階での活動が認められている。これは他地域には認められない当地域の特色として把握しておきたい。

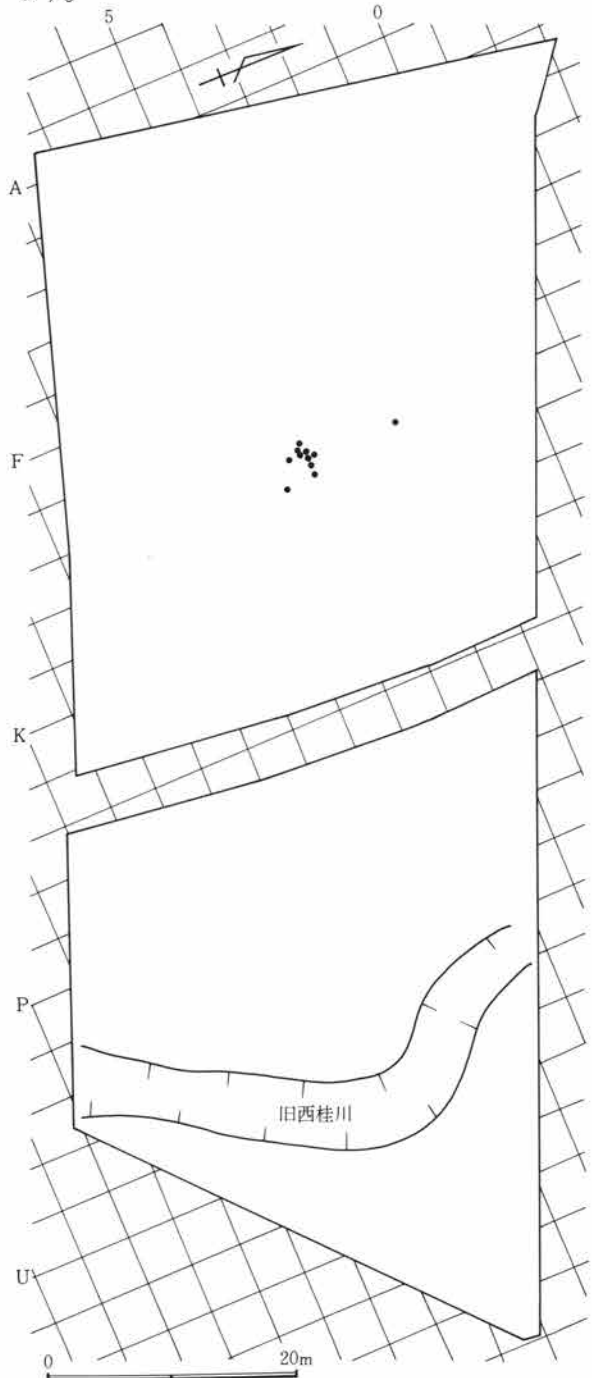
本遺跡の場合、近世～近代の遺構が密集しているが、それらの遺構によって縄文時代の遺構群が破壊されたとは捉え難い。遺物も少なく、周辺遺跡の様相からはやや性格を異にするようだ。東斜面という、縄文時代の居住条件としては比較的適した地でありながら、殆ど生活の痕跡が認められない状況を検討しなければならないだろう。尤も今後、南北に隣接する地点で遺構が検出される予想もでき、本遺跡の様相だけで例えば集落の空白地域を設定することは避けなければならない。

出土遺物は、縄文時代早期に属する燃糸文系土器群を主体とする。総計39点の出土であり、図示に堪え得るもの17点を第9図に挙げた。出土位置は、調査区中央西よりで散漫ながらも比較的集中した出土を見せ、集中分布として認知できよう。おそらく、口縁部の在り方から数個体分の破片と思われるが、器形復元できる資料ではない。スタンプ形石器などの伴出する石器群は認められず、生活跡としての集中分布ではなく、廃棄・流入としての土器片集中としたい。

出土層位は、II層上面であり黄褐色軟質ロームと同様な色調ながら、土壌化したような層である。この層位は他の遺跡でも縄文時代の遺物包含層として

周知されているが、黄褐色を呈しており、これを覆土とする遺構の確認に手間取る原因となっている。また、出土地点周辺は近世遺構が重複しており、燃糸文系土器群の出土範囲も限定されている。

燃糸文系土器以外に中期土器片が数片混入するが、これは近世遺構等からの出土であり、主体的ではない。後述する石器と同様、流入によるものであろう。



第7図 燃糸文系土器集中分布



出土石器は13点と客体的な存在であり、殆どが近世遺構などから出土したものである。内訳は剥片石器や磨石類であり、撚糸文系土器群に伴うものとは捉えられない。出土した遺構位置をグリッド化して対比したが(第8図)、撚糸文系土器群が出土した地点とは距離を置く。台地傾斜部分の端部に認められ、傾斜に沿った流入とも捉えられる。よって出土石器は、撚糸文系土器群とは伴わないものと判断して本章では取り扱わず、次章の波志江天神山遺跡の石器群と共に報告した。

(グリッド出土土器)

ここで扱う土器は前述の撚糸文集中分布地点より出土した土器片を中心に述べるが、2点の中期土器片も併せて説明する。

1は強く外反する口縁部破片。口唇部は肥厚するが、器厚は比較的薄い。口唇端部は丸みを帯び、内面にまで撚糸文 $\ell$ を施す。絡状体施文で、原体幅は短く口唇部下で止め、体部は縦位に回転施文する。明赤褐色を呈し、胎土の砂粒は多い。

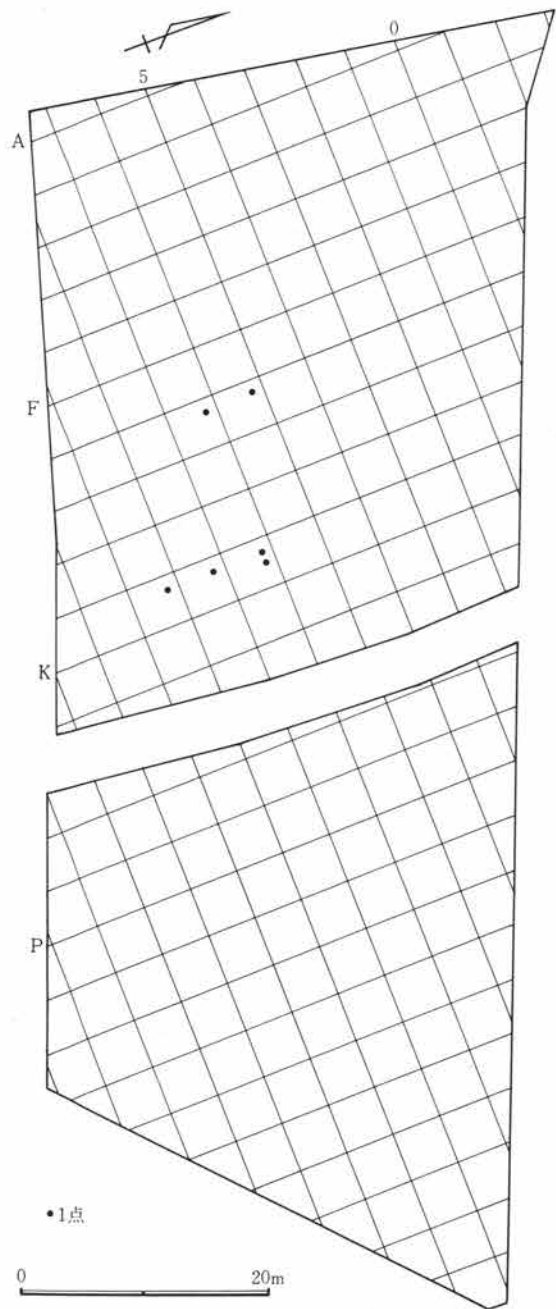
2、外反する口縁部破片。口唇部は肥厚し、器厚は薄い。口唇端部は平坦面を持ち、絡状体撚糸文 $\ell$ を横位に施す。口唇下及び体部は縦位、斜位の回転施文である。鈍い橙色を呈し胎土の砂粒は多い。

3、外反する口縁部破片。口唇部は肥厚し、器厚は薄い。口唇端部は比較的丸みを帯び、絡状体撚糸文 $r$ を横位に施文し、外面と内面で施文方向を変えるため羽状効果を見せる。口唇部下は縦位施文。色調は鈍い橙色を呈し、胎土の砂粒も多い。砂粒にガラス質の黒色粒が認められる。黒曜石か。

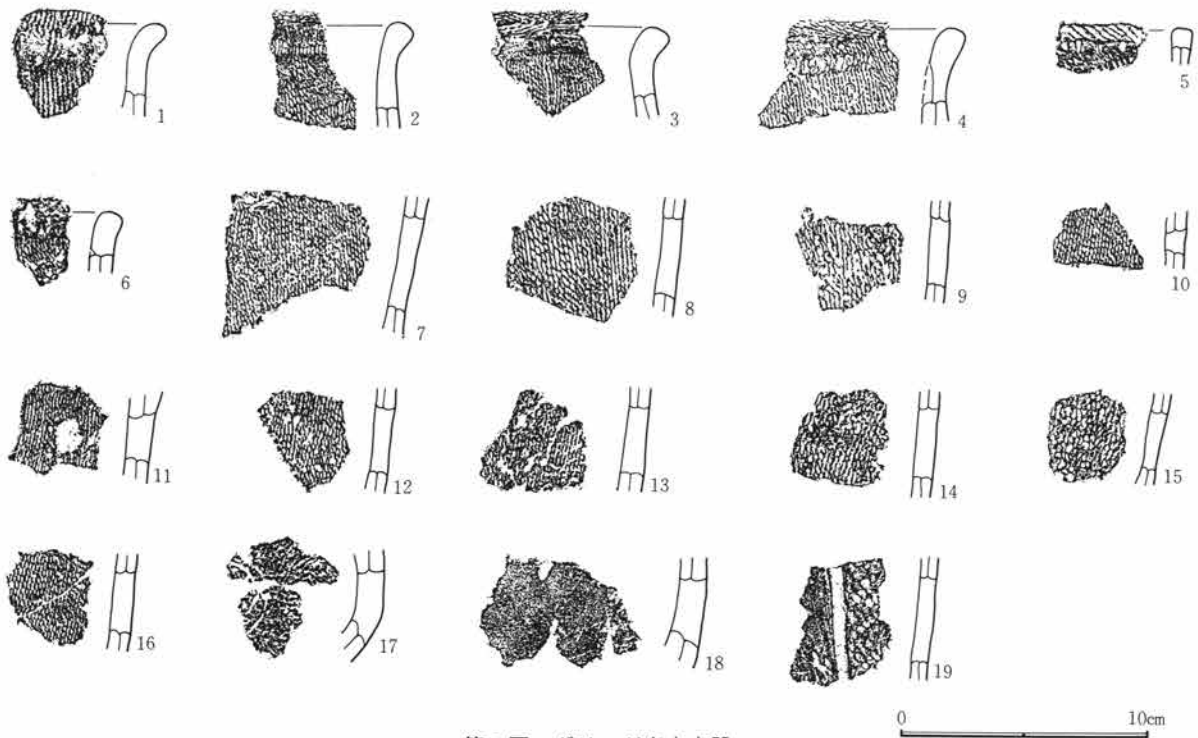
4、外反する口縁部破片。口唇部は肥厚し丸みを帯びる。比較的厚手の器厚。口唇部内面に顕著ではないが、撫でによる凹線が認められ口唇部の丸みを強調する。口唇部は3と同様に、絡状体撚糸文で羽状効果を見せ、口唇部下は縦位と斜位の回転施文だが、屈曲部は押圧するような施文である。原体幅は1.50cmと短い。\*橙色を呈し、砂粒は多い。内面は剥落が著しい。

5、直立気味に外反する口縁部細片。狭小な平坦面を口唇端部に持ち、撚糸文 $\ell$ を施す。口唇下は縦位回転施文。色調は橙色を呈し、胎土の砂粒は少なく細かい。

6、外反する口縁部細片。口唇部は肥厚し丸みを帯びる。器壁は荒れており判然としないが、口唇部端部は横位施文、口唇下は縦位の施文であろう。色調は橙色を呈し白色鉱物粒など胎土の砂粒は多い。



第8図 縄文時代の石器分布



第9図 グリッド出土土器

7、体部破片。おそらく上半の屈曲部下であろう。4と同一個体の可能性もある。撚糸文rを縦位・斜位に施す。色調は橙色を呈し、胎土の砂粒は多い。

8、体部破片。やや太めの撚糸文rを縦位を基調に施文する。原体幅は比較的長く2.5cm程である。色調は橙色を呈し、胎土の砂粒は大粒だが少ない。

9、体部破片。8と同一個体か。やや薄手の器肉である。原体幅は不明。色調は8よりやや明るい橙色を呈する。

10、体部破片。細めの撚糸文rを密接縦位施文する。明るい橙色を呈し、胎土の砂粒は多い。

11、体部破片。おそらく上半の屈曲部下であろう。比較的厚手の器厚で、撚糸文rを縦位に施す。内面は丁寧に撫で調整が施される。橙色を呈し、胎土の砂粒は少ない。

12、体部破片。細めの撚糸文rを密接に縦位施文する。鈍い橙色を呈し、大粒の砂粒を多く含む。

13、体部破片。細めの撚糸文rを密接に縦位施文する。鈍い橙色を呈し、胎土に大粒の砂粒を含む。攪乱層の出土のためか、器表面の風化が著しい。

14、体部破片。撚糸文rを密接に縦位施文する。鈍い橙色を呈し、胎土の砂粒は多い。

15、体部細片。やや太めの撚糸文lを施す。薄手の器厚で、内面調整は丁寧ではない。鈍い橙色を呈し、胎土の砂粒はやや少ない。

16、体部破片。細めの撚糸文rを縦位に施す。色調は鈍い橙色を呈し、胎土の砂粒は細かい。

17、丸底底部破片。判然としないがおそらく、撚糸文lを縦位に施す。底部の径に沿って平行沈線が巡るが、どのような要素かは不明である。色調は鈍い橙色を呈し、胎土の砂粒は細かく少ない。

18、体部破片。勝坂式に比定した。頸部との境の破片で、横位連続三叉文が沈刻される。色調は橙色を呈し、胎土に黒色鉍物粒を含む。

19、体部破片。加曾利E3式に比定した。凹線が懸垂し、LR縄文を縦位施文する。鈍い黄橙色を呈し、白色鉍物粒を多量に含む胎土である。

撚糸文系土器群は、口唇部への施文や密接な回転施文を特徴としており、井草式に比定されよう。

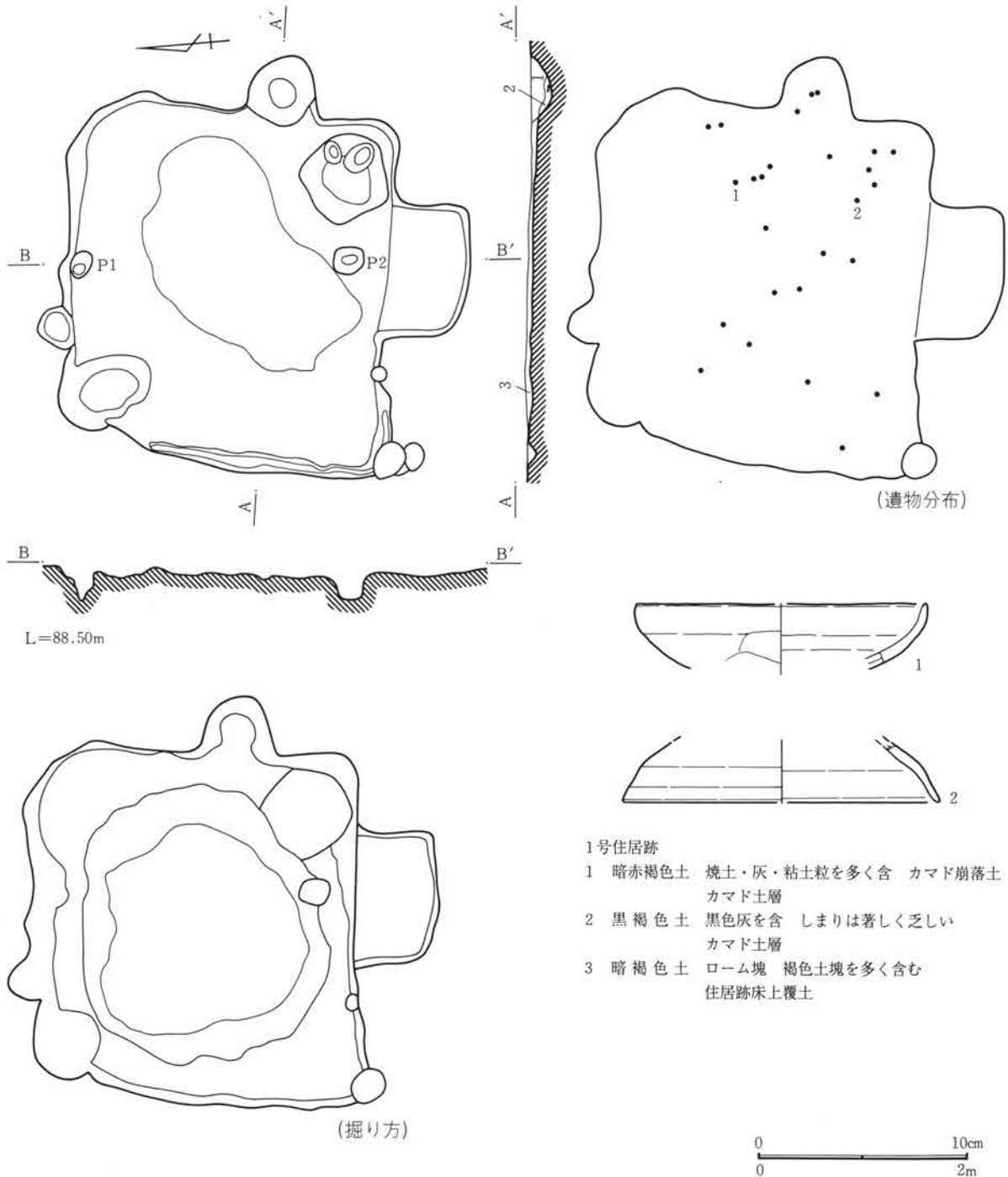
第5節 住居跡

本遺跡では、3軒の住居跡を検出した。いずれも8世紀代の所産と考えられ、調査区東斜面部から低地部に至る箇所検出されている。このうち1号住居跡のみが、他の2軒と距離を置いて低地部に近い傾斜地で確認されている。

3軒とも近世遺構などと重複するが、平面規模や

竈方位の在り方など統一性が認められ、当地域の該期集落の一端と捉えられよう。

住居跡は洪積台地上に立地していたため、表土の堆積が薄く、必ずしも良好な遺存状況とは言えない。出土遺物もやや貧弱であり、良好な器種組成を見せる住居跡はなく、明確な時期を特定することはできない。



第10図 1号住居跡及び出土遺物

### 1号住居跡

調査区東側の台地部分と低地部分の境界で検出された。上面を近代の耕作で削平されており、住居跡確認時には床面が露出している箇所もあった。

平面規模は、約3.4×3.1mで方形を呈する。東側壁に小型の竈を設ける。調査当初は、南側壁の張り出し部分を本住居跡の施設と捉えたが、重複の可能性も強く積極的な確証を持たない。

床面の残存状況は非常に悪く、凹凸が著しい。ただし、貼り床がなされており、また中央部から竈周辺にかけては硬化面が認められている。

柱穴はP1・P2の2本をその深さと配置から特定した。貯蔵穴は竈南側に径約90cmの不整形円形を呈し、深さ約10cmを測る落ち込みを充てたい。

壁周溝は南西隅から西側にかけて検出されたが浅く、残存状態は悪い。その他、壁に重なるピットを確認したが、覆土の様相から壁柱穴などの施設ではなく、近世段階の小ピットとの重複の可能性が強い。

床下遺構として、貼り床土を除去したのち、中央部分に径約2.4mの円形の土坑を検出したが、浅い掘り込みである。

遺物は少なく、土師器細片が主である。そのうち竈東側より出土した杯口縁部と杯蓋を図化した。遺物の時期は8世紀後半代と捉える。

### 2号住居跡

調査区中央やや南よりで検出した。試掘時に検出されていた住居跡である。北約2mに3号住居跡が近接する。また、2・3号溝などの近世遺構が接しており、特に3号溝は竈上面を重複していたが、浅いため大きな破壊はなされていない。

平面規模は、3.9×4.1mで比較的整った方形を呈する。壁高は約25cmを測り垂直の立ち上がりである。

床面は、比較的平坦な貼り床で、ローム塊を混入する黄褐色土を基調にしている。全体にやや軟弱だったが、硬化面は竈周辺が若干ながら堅く踏み固められていた。

柱穴は、床面の西よりに3ケの小ピットが検出されたが、比較的深さのしっかりしたP1が妥当性を

帯びる。また北東隅、西壁北よりに壁柱穴と考えられる小ピットがあくが、連続性がなく疑問は残る。

貯蔵穴は竈南側に約55×45cmの不整形円形を呈するピットを充てる。深さはやや浅く約13cmである。断面形は方形である。

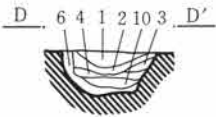
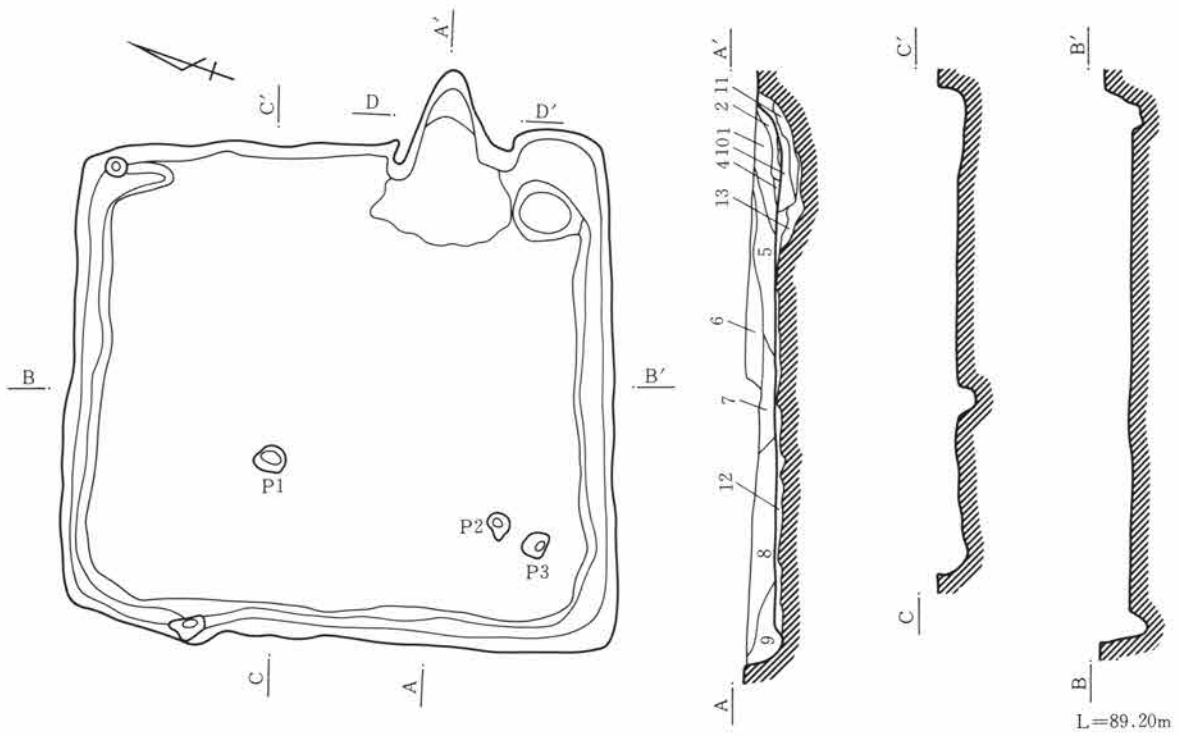
壁周溝は東壁を除く3壁を巡る。前述の壁柱穴2ケを伴い、幅約20～25cm、深さ約15cmと比較的しっかりした溝である。

竈は東壁南よりに設けられ、壁外に煙道が伸びる。平面規模も比較的大きく、長さ75cm・焚口幅65cmを測る。構築材は黄褐色粘質土を基調として、地山のロームを袖芯材とする。崩落はかなり進んでおり、焚口部には焼土化した粘土塊が灰・炭化物と共に認められた。竈掘り方は焚口部下に円形の掘り込みを持ち、灰・焼土を敷き込み火床を整えていた。

住居跡床下遺構は、掘り方調査において、十数個の円形・楕円形の土坑を検出した。ローム塊を多量に含む黄褐色土を埋土としているが、比較的浅く、貯蔵などの用途ではない。また、北壁に沿った4ケの土坑は連続性を持ち、住居跡構築時の平面規模を示唆しているようだ。

遺物は、本遺跡の住居跡の中では充実している。杯3・甕2・須恵器杯蓋1の6点を図示したが、他にも細片は多く出土した。このうち1の杯は竈西側の床直上から、2はほぼ同様の位置から覆土下層、3は破片ながら北東隅の床直から出土した。甕類は竈からの出土である。5は竈の奥壁と西壁よりの床直の破片が接合している。6は竈中央の火床面から出土したが、5・6は同一個体の可能性が強い。4は須恵器杯蓋だが、転用硯でもある。顎部を全周して欠損し、内面に研磨痕が認められる。墨痕も看取され、内面中位に小穴が穿たれるが、用途は不明である。出土位置も、南西隅の壁周溝内から、斜位に傾いて出土しており、意図的な配置を窺わせる。

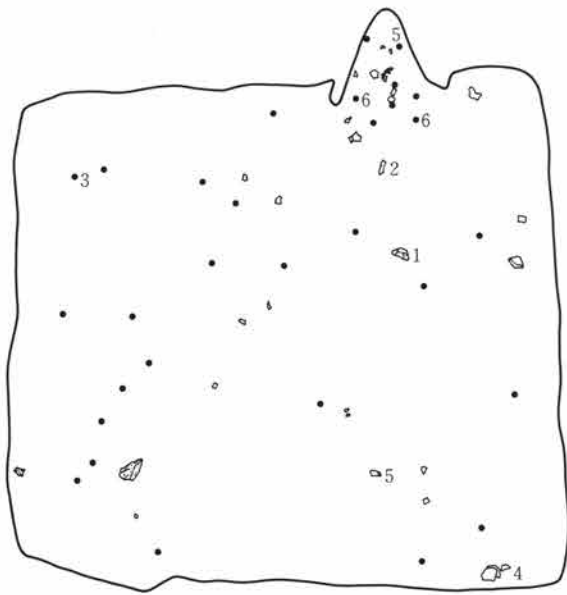
本住居跡は、3軒の住居跡の中で最も遺存状態が良好であり、出土遺物も住居跡に帰属するものが主体であろう。遺物から8世紀前半とした。



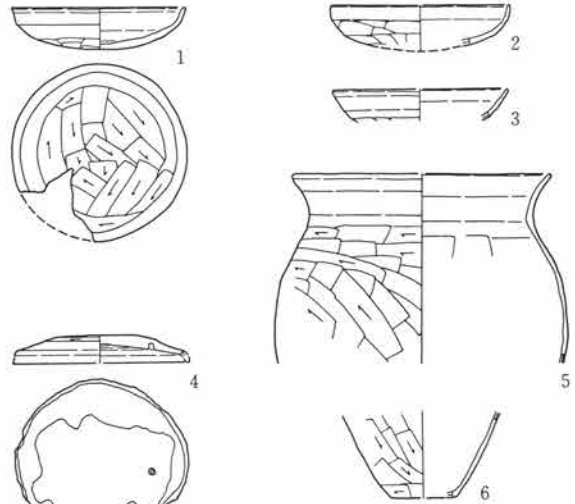
2号住居跡

- 1 褐色土 ローム塊と暗褐色土の混土層
- 2 赤褐色土 焼土塊・灰の混層
- 3 極暗赤褐色土 軟質 焼土混り 灰が多い
- 4 極暗赤褐色土 灰層 同層下は火床となる 焼土塊なし

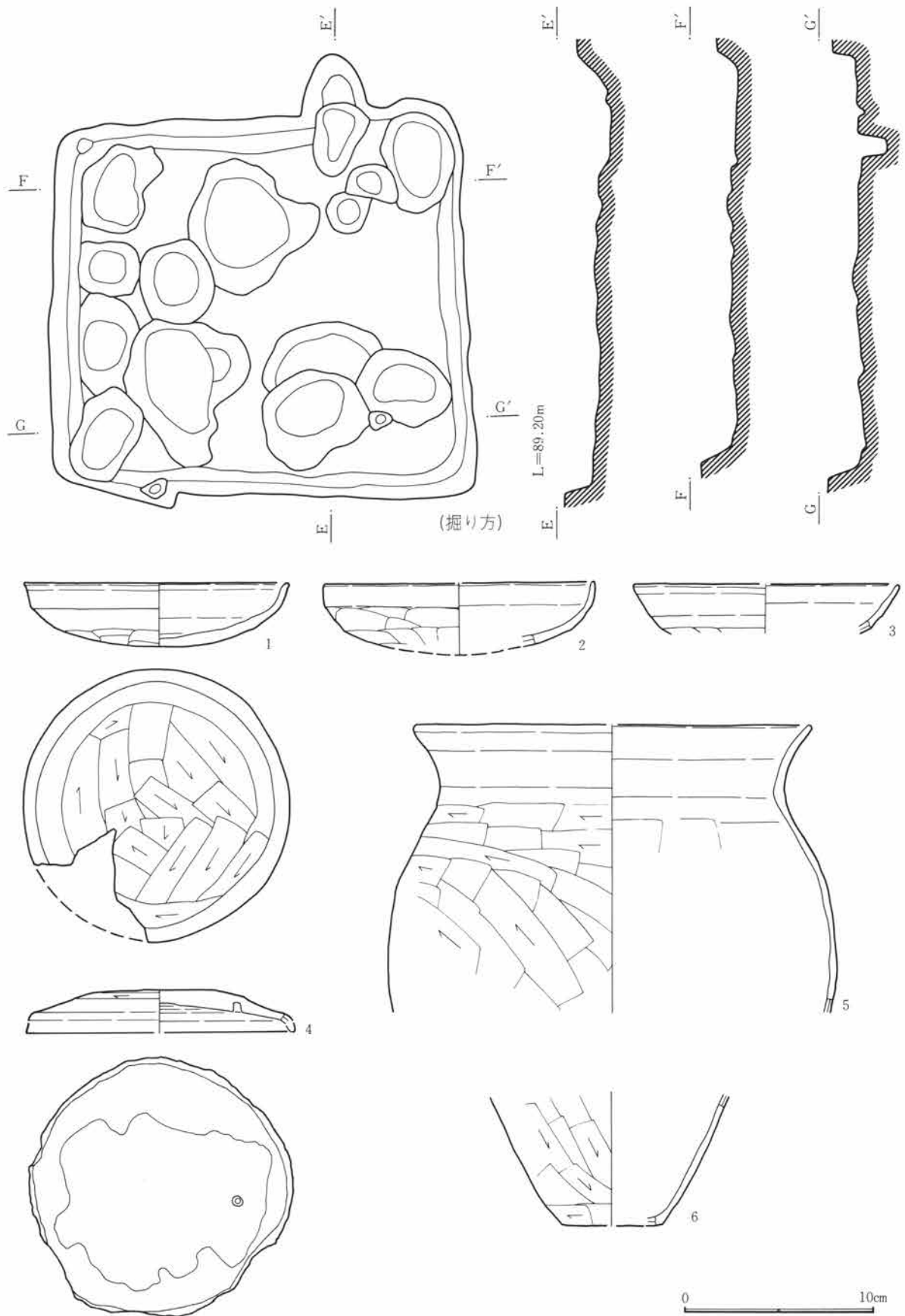
- 5 黄褐色土 ローム塊と褐色土塊の混層
- 6 褐色土 As-C含
- 7 暗褐色土 As-C・炭化物を含
- 8 暗褐色土 ローム粒多く含
- 9 褐色土 ローム塊 壁崩壊土
- 10 暗赤褐色土 焼土・灰・炭化物・褐色土含
- 11 明褐色土 ローム塊・焼土粒を含
- 12 黄褐色土 ローム塊・暗褐色土塊を含
- 13 暗赤褐色土 焼土・ローム小塊・灰の混層



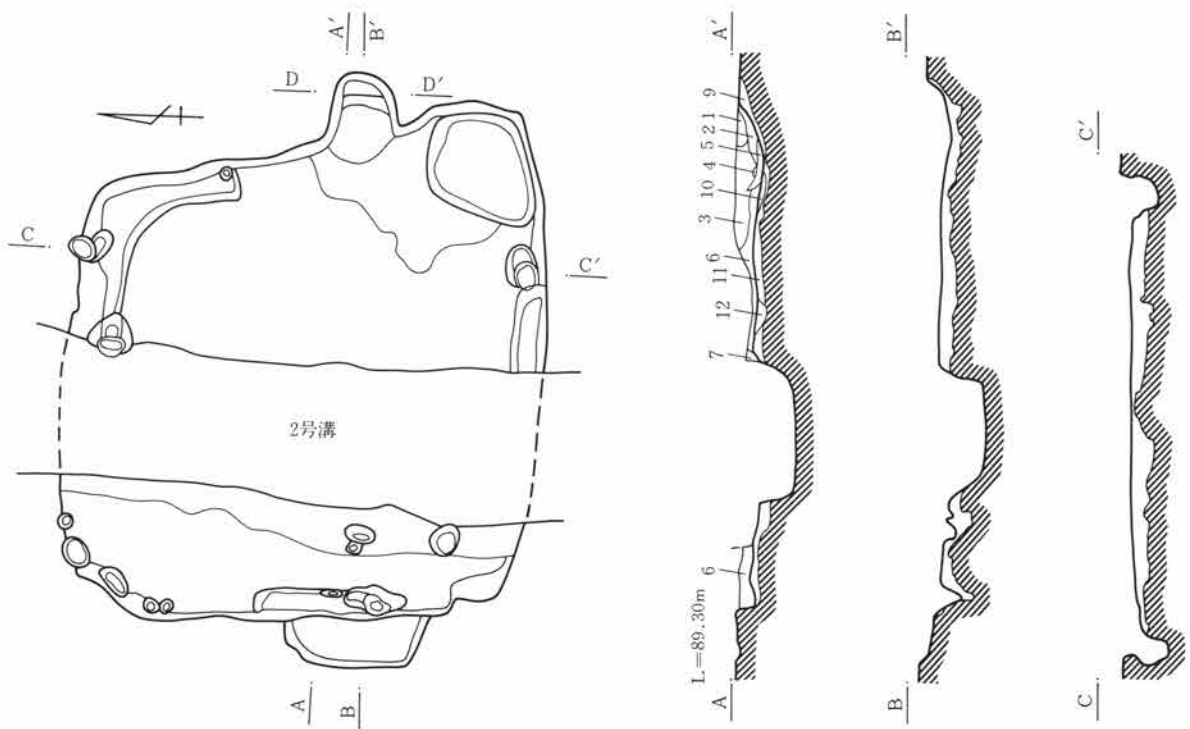
(遺物分布)



第11図 2号住居跡

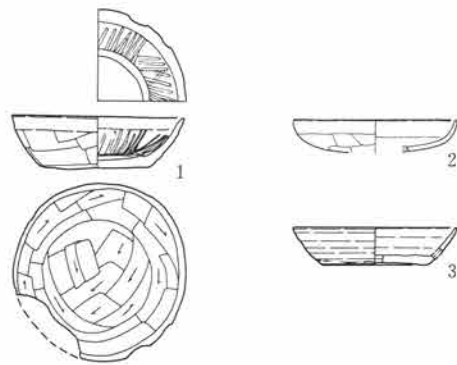
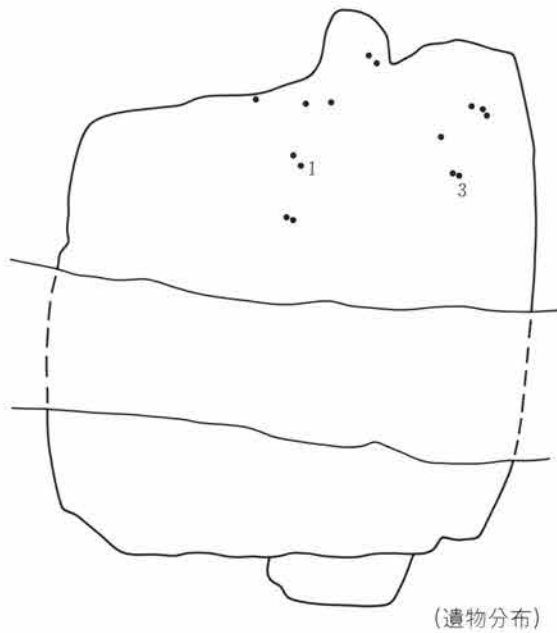


第12図 2号住居跡及び出土遺物

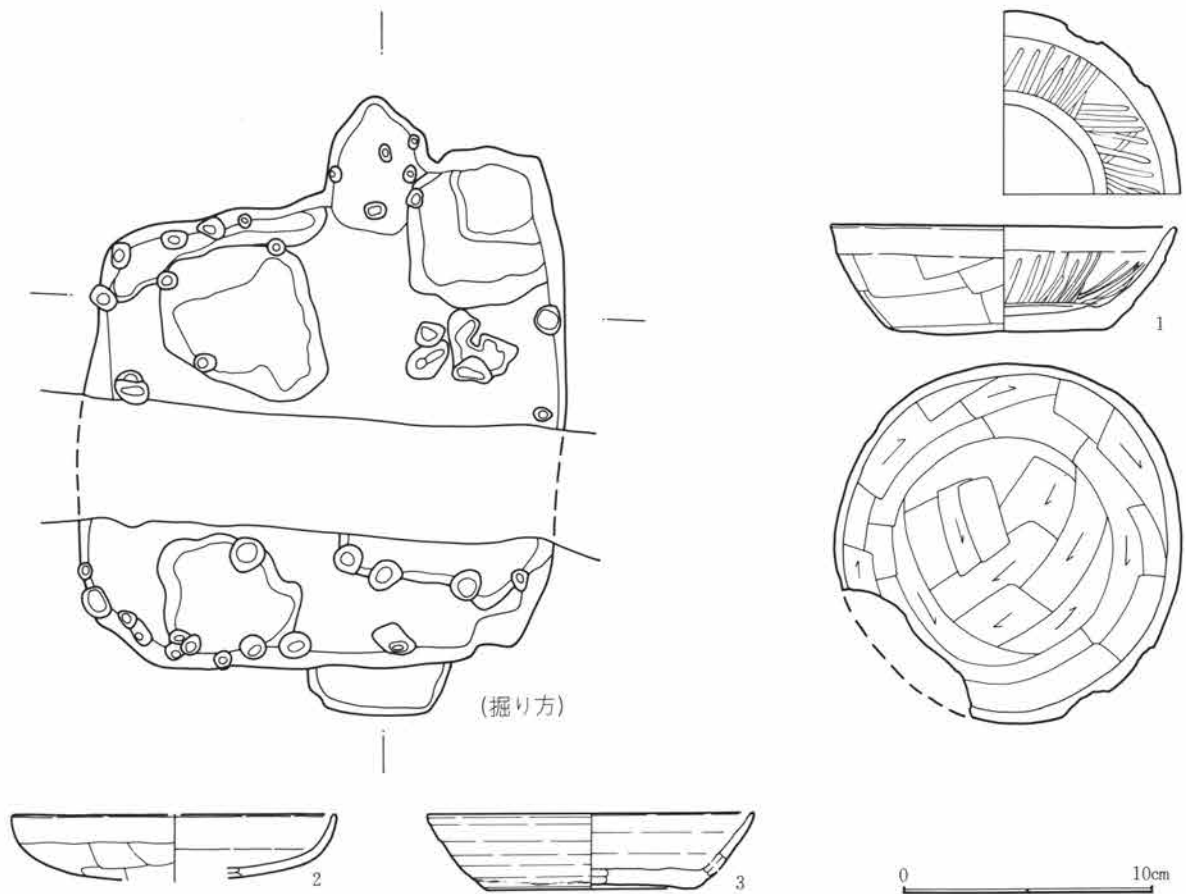


3号住居跡

- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 1 暗赤色土 焼土化した粘土塊      | 7 褐色土 2号溝覆土          |
| 2 鈍赤褐色土 焼土粒・ローム粒を若干含 | 8 暗褐色土 炭化粒・焼土粒含 灰多し  |
| 3 暗赤褐色土 焼土粒・炭化粒を多く含  | 9 褐色土 焼土・ローム粒・炭化物を含  |
| 4 黄褐色土 ローム塊          | 10 明黄褐色土 ローム粒・焼土を少量含 |
| 5 褐色土 炭化粒含 灰多し       | 11 灰黄褐色土 灰・焼土を主体とする  |
| 6 黒褐色土 焼土粒・炭化粒少量含    | 12 黒褐色土 砂質 表面は貼床     |



第13図 3号住居跡



第14図 3号住居跡及び出土遺物

### 3号住居跡

調査区中央やや南よりで検出した。本住居跡も試掘時に検出されていた遺構である。南約2mに2号住居跡が近接する。また、2号溝が南北に大きく切る。平面規模は約3.6×3.5mの方形を呈するが、南辺が3.9mとやや長く不整形の平面形である。深さは約15cmを測り、残存状態は良くない。

床面はほぼ平坦だが、南側に若干傾斜する。硬化面は竈西、南側で顕著である。柱穴は床面上では良好なものはなく、壁柱穴として壁下に10数個の小ピットが検出されている。貯蔵穴は竈南に浅い凹みが設けられている。壁周溝は断続して巡る様相を呈す。竈の縁辺は除かれており、また、北西隅も壁柱穴のみである。

竈は東壁やや南よりに設けられており、煙道は壁外に突出する。焚口幅60cm・長さ70cmの規模で、焼土が前面から貯蔵穴にわたって確認された。構築材

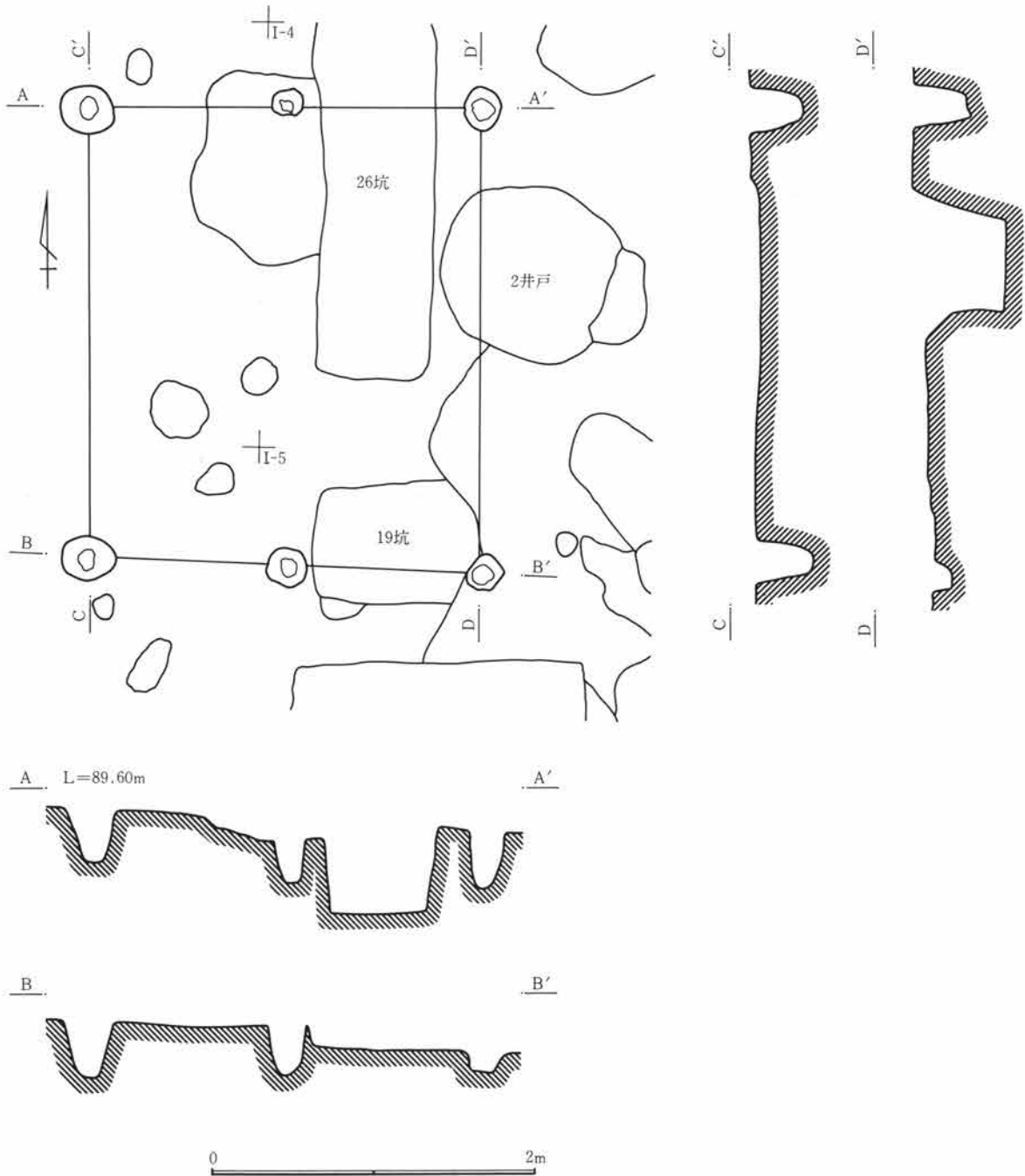
は黄褐色粘質土を使い、掘り方として浅い凹みを設ける。袖は認められなかった。

その他の施設としては、西壁南よりに1.1m×0.4mのテラス状の落ち込みが検出された。住居跡覆土と連続しており、あるいは入り口部として考えられる。1号住の張り出しと類似するが、ここでは問題提起としておきたい。

遺物は少ない。覆土中より細片が出土しているが、図示し得たのは杯3個体である。1は竈西の床直上より出土したほぼ完形の暗文土師器杯。2は覆土からの細片。3は貯蔵穴西の覆土から出土した須恵器杯である。その他にも竈周辺より細片が出土しているが土師器甕胴部破片であり、図示できなかった。

本住居跡は、残存状態も悪く中央を溝に攪乱されているが、西壁のテラス状遺構の存在や、床直出土の暗文土師器杯は、当地域の8世紀代の集落研究や土器様相を考える際に好資料となる。





第15図 1号掘立柱建物跡

第6節 掘立柱建物跡遺構

調査区中央西よりで検出された。近世から近代に比定される建物跡である。長方形土坑の26号土坑や2号井戸が建物内に位置している。また、柱穴1ヶは19号土坑に切られる。柱穴は6本の素掘りのピットを確認し、平行する3本のピットはほぼ等間隔に位置する。全体規模は1間(4.2m)×2間(3.6m)で

あり、建物長軸方向は南北を向く。

この建物軸は、周辺の連続する長方形土坑の長軸と一致し、相互に強い関連性を窺わせるものの、重複することから時間的な隔たりは存在する。ただし、東側を走る2号溝を意識した占地と思われ関係は深いものとしたい。

遺物は出土していない。

### 第7節 土 坑

本遺跡の土坑は出土遺物も無く時期判定に苦慮したが、覆土の様相や現代の攪乱との重複状況から、その殆どを近代の所産とした。平面形は長方形のものが圧倒的に多く、掘り込みがしっかりした断面形である。これは、近代農家に見られる貯蔵用や屋敷構えの区画土坑に類似する。本遺跡の場合、近代の民家などが検出されていないが、検出された長方形土坑群は、当時の民家に付随する貯蔵性や区画性を持った施設と捉えたい。

1号土坑 K・L-6・7Grで検出した。2号坑、1号溝と重複する長方形土坑である。深さ約15cmを測る浅い箱形の断面形を呈す。覆土はローム塊を含む軟質暗褐色土でこの層位から近代の所産とした。

2号土坑 K-6・7Grで検出した。1号坑を切る。不整形の平面形を呈するが、南側は方形を呈し、隣接する1・3・4号坑と関係は深い。

3号土坑 K-6Grで南の2号坑と近接する。長方形の平面形を呈し、同様な1号坑と直交する軸である。

4号土坑 L-6Grで1号溝の東に接して検出された。前述の1号坑と平行し、3号坑と直交する位置にある。

1・3・4号坑は方形の平面形を基本とし、平行・直交する位置関係にあるところから、同時期の構築と考えられる。

5号土坑 L-4Grで6・7・29号坑と軸を同一にし連続して検出された。長軸を南北に持つ。

6号土坑 L-4Grで南を5号坑、北を7号坑に接して検出された。両者の重複関係は不明である。

7号土坑 L-3・4Grで南に6号坑、北に29号坑が接する。長軸を東西に持つ。

29号土坑 L-3Grで南に7号坑と重複する。正方形の平面形を呈す。

5～7号土坑・29号土坑は浅いものが多いが、掘り込みは直立気味の壁であり、しっかりしている。覆土は1号坑と同様であり近代の所産としたい。

8号土坑 L-3Grに位置する。方形の土坑であり、深さも80cmとしっかりした掘り込みである。長軸を東西に持つ。29号坑の北に位置し、一群の土坑群と関連性は深い。

9号土坑 J・K-5Grに位置する。西に10号坑と近接する。平面形は長方形で、掘り込みはしっかりしている。

10号土坑 J-5Grで11号坑と重複して検出された。新旧は不明。平面形は長方形でしっかりした掘り込みである。

11号土坑 I・J-5Grで10号坑と東側を重複して検出された。おそらく長方形の土坑で、10号坑より浅い掘り込みだがしっかりしている。

12号土坑 I-5Grで11号坑と近接して検出された。両土坑の間には浅い落ち込みが検出されたがこれも同様の土坑であろう。平面形は長方形で、しっかりした掘り込みである。

9～12号土坑は長軸を同一にし、列をなして確認された。おそらく同時期に一群を構成していたものと考えられよう。時期は近代であろう。

13号土坑 H・I-8Grで長軸を東西に持って検出された長方形土坑である。掘り込みはやや浅いもののしっかりしている。不整形の土坑と重複するがこれは現代の犬墓だった。

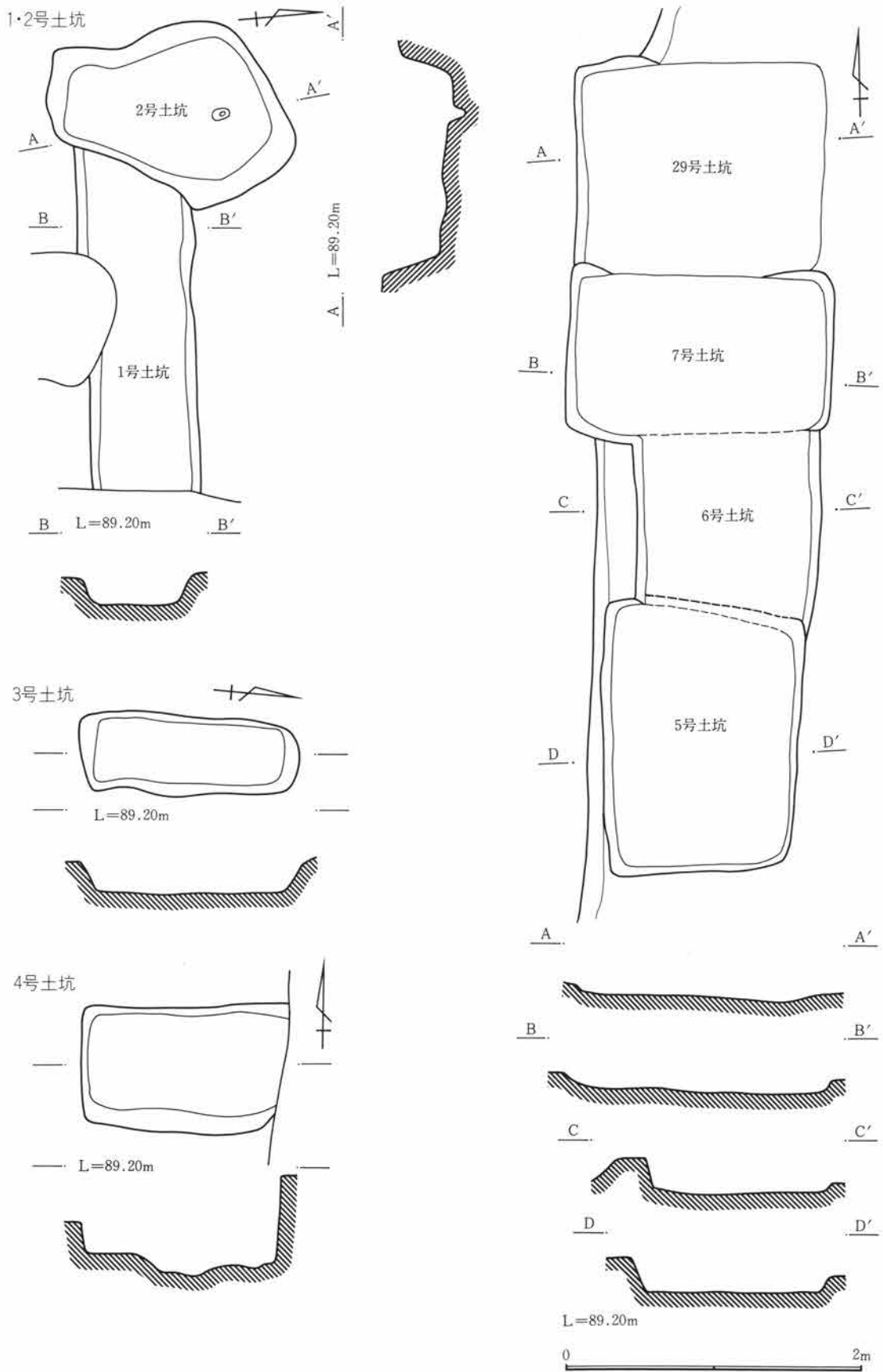
14号土坑 H・I-7Grで13号坑と平行するように検出された。東に直交するように15号坑が近接する。上端はやや不整形ながら、下端平面形は長方形である。立ち上がりは若干緩やかで浅い。

15号土坑 I-8Grで13・14号坑と直交する位置に検出された。浅く緩やかな立ち上がりである。

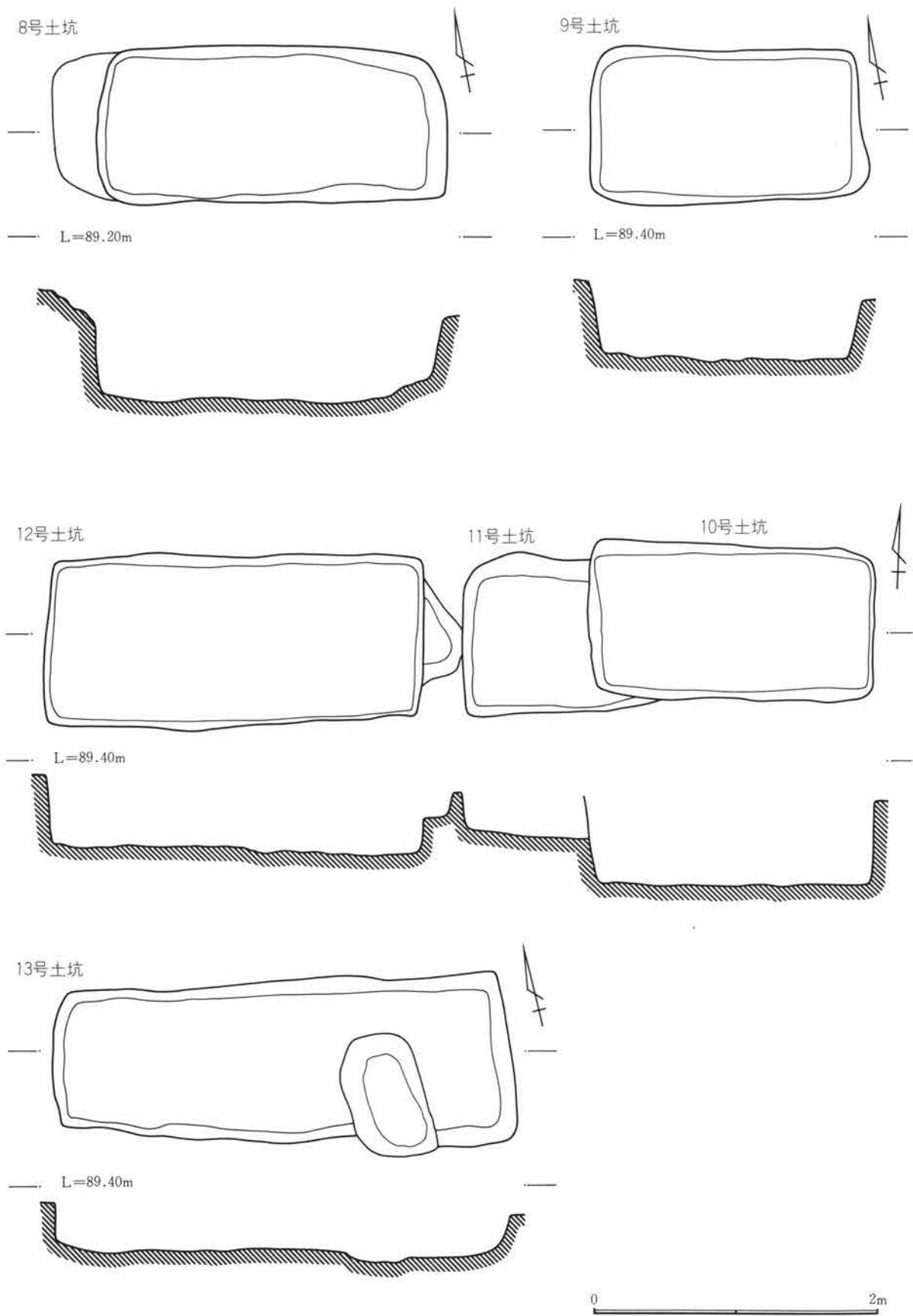
16号土坑 I-6・7Grで14号坑と長軸を平行するかたちで検出された。長方形を呈するが浅い。

13～16号土坑は軸を同一にし、特に13・14・16号土坑は等間隔に平行することからも同時期の関連性の強い一群としたい。

17号土坑 E・F-6・7Grで3号井戸と近接する。不整長方形の平面形で浅い。周辺に同様な土坑がなく単独の検出となった。



第16图 土坑(1)



第17图 土坑(2)

18号土坑 I-5・6Grで南に16号坑が近接するが、直交関係ではない。平面形は整った長方形で、しっかりした掘り込みである。

19号土坑 I-5Grで12号坑と平行して検出された。東半分を坑底面とほぼ同レベルの攪乱坑に壊され、平面形は判然としないが長方形であろう。

20号土坑 I-6Grで18号坑の西に近接する。小型の長方形で比較的しっかりした掘り込みである。

21号土坑 I-9・10Grで調査区南西端で検出された。東に2号溝が走るが、現代の攪乱坑が密集する箇所でもあり近接する土坑は無い。西・南辺の壁は整って直交するが他は不整形を呈する平面形である。掘り込みは約70cmと深い。

22号土坑 F-5Grで単独で検出された円形の土坑である。掘り込みは浅いが、立ち上がりなどはしっかりしている。覆土は黒褐色土を基調としたローム塊混土層で、他の土坑とは違う様相を呈する。断定的ではないが、中～近世に時期を求めたい。

23号土坑 I-2Grで試掘トレンチにかかり検出した。周辺には24・25号坑が近接する。小型の方形で南側壁はしっかりした立ち上がりを呈する。

24号土坑 I-3Grで25号坑と26号坑に挟まれた位置で検出した。長軸を東西に持ち、25・26号坑とは直交する関係を持つ。平面形は長方形で掘り込みもしっかりしている。坑底面はやや不連続である。

25号土坑 I-1・2Grで24・30号坑に挟まれた位置で検出された。平面形は不整形を呈すが、これは現代の小攪乱坑が重複するためで、おそらく方形を呈していたものと思われる。掘り込みは浅く、坑底面も凹凸が著しい。

26号土坑 I-3・4Grで1号掘立柱建物跡内で検出された。2号井戸と東壁を接する。長方形の平面形を呈し掘り込みも深くしっかりしている。

24～26・30号土坑はやや距離を置く位置にありながら、軸を同一にし一群の同時期の所産と考えられる。また、9～12号土坑との関係も、その配列が直交することから何等かの区画をも想起させる様相である。これらは近代の所産であろう。

27号土坑 I・J-2・3Grで23号坑の東に近接して検出された。幅広の長方形を呈し、坑底面は緩やかに凹む。掘り込みはやや軟弱といえよう。長軸など他の土坑とは差が認められる。

28号土坑 調査区中央の北側のK-1・2Grで検出された。単独の土坑。ほぼ正方形の平面形を呈し掘り込みも深くしっかりしている。近代の所産。

30号土坑 I-0・1Grに位置する。25号坑と長軸を同一にし、一群の土坑と捉えられる。北半が調査区域外に伸びる大型の長方形を呈する土坑である。掘り込みも深くしっかりしている。

31号土坑 調査区北西のE・F-0Grで32号坑と平行して検出された。小型の長方形を呈し、掘り込みは深くしっかりしている。近代の所産。

32号土坑 E・F-1Grで31号坑の南側を平行する。小型の長方形で、壁は緩やかに立ち上がる。

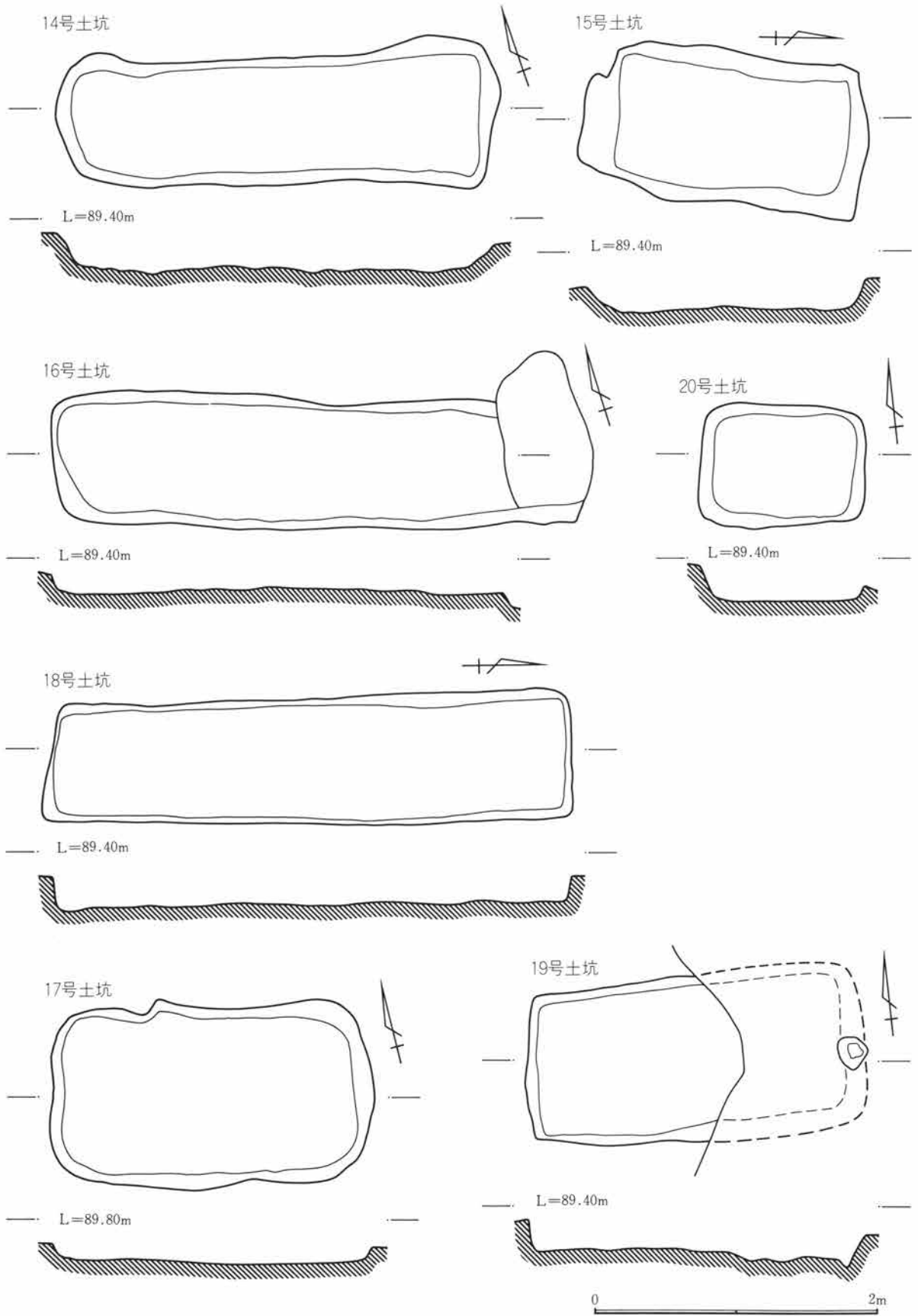
## 第8節 井戸

本遺跡では4基の井戸を検出したが、そのうち1号井戸は現代の所産と判明したため、本報告では割愛して欠番扱いとした。2～3号井戸は中世～近代の所産である。

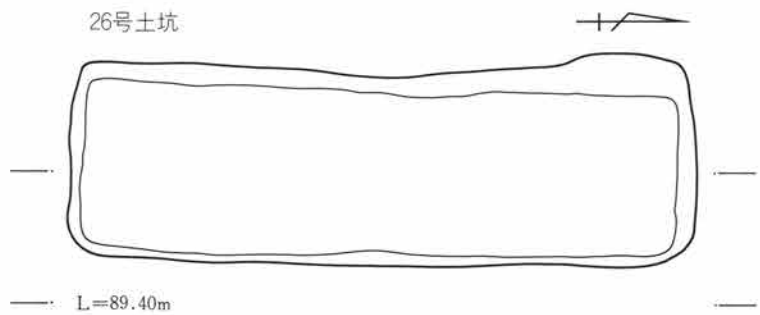
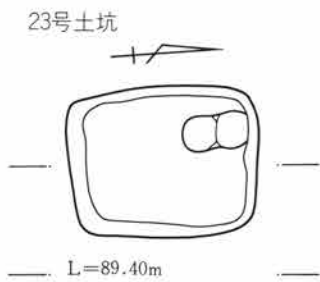
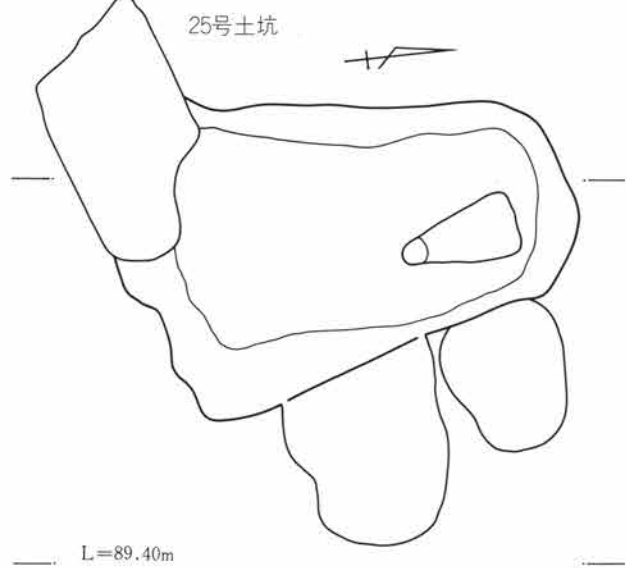
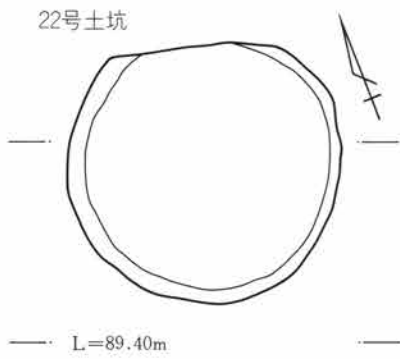
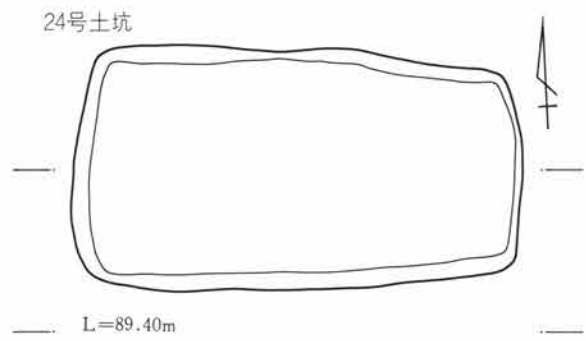
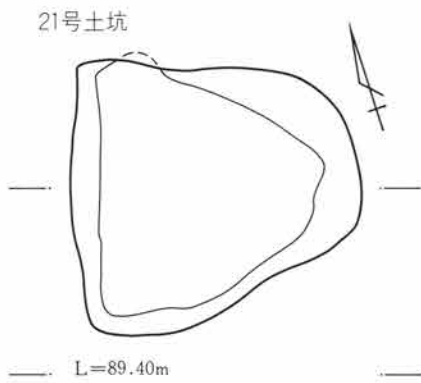
2号井戸 調査区中央のI-4Grで検出した。1号掘立柱建物跡と重なり新旧は不明。素掘りで径約160cmの円形を呈し、深さは170cmを測りやや浅い。壁は傾斜を持って立ち上がる。近代の所産であろう。

3号井戸 調査区南西のE・F-7Grで検出した。17号坑が北に近接する。現代の耕作溝と重複しているが平面形は径約130cmの円形を呈し、深さは約220cmを測る。底面は平坦で、壁は上位が開くものの、下位は直立する。出土遺物は中世段階の鉢口縁部と奈良時代の須恵器破片が認められるが、本井戸に帰属する時期は中世と捉えておきたい。

4号井戸 調査区北端のL-1Grで検出した。単独であり、近接する遺構は無い。径約150cmの円形を呈し、深さは約180cmを測る。底面は段を持ち、壁は上位が開くが、下位は直立気味である。出土遺物は無く、覆土の様相から近代の所産とした。

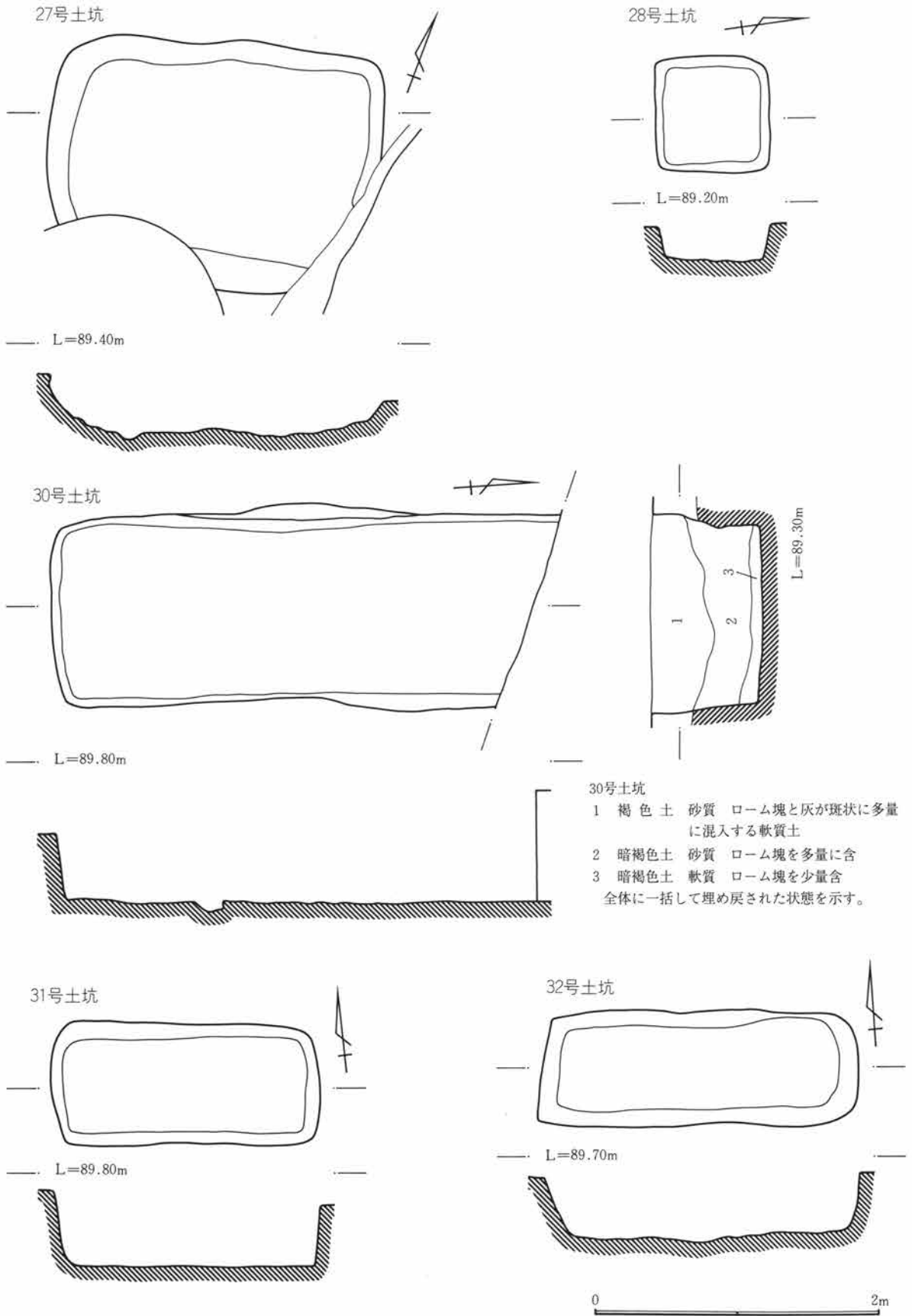


第18図 土坑(3)



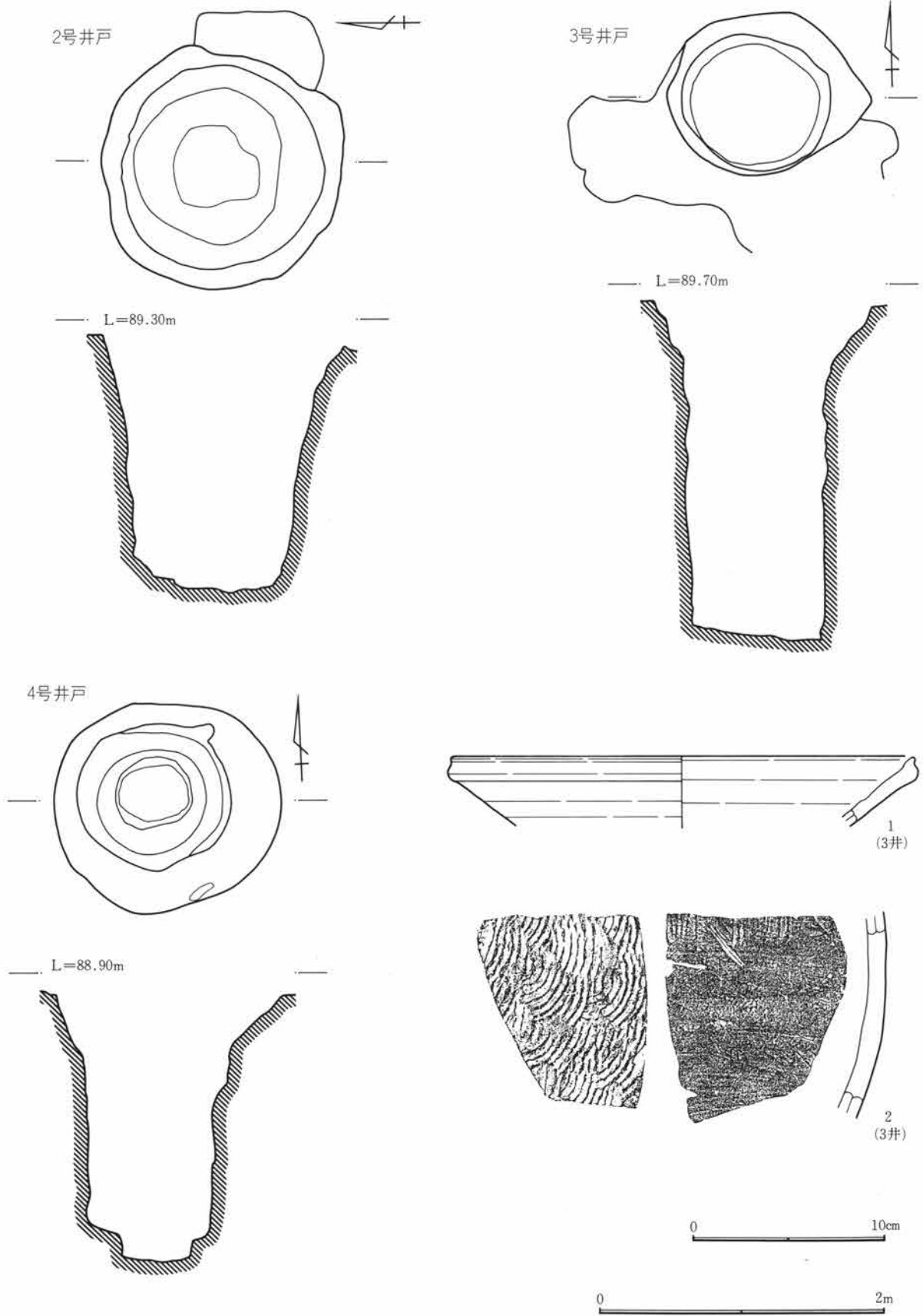
第19図 土坑(4)

IV章 波志江六反田遺跡

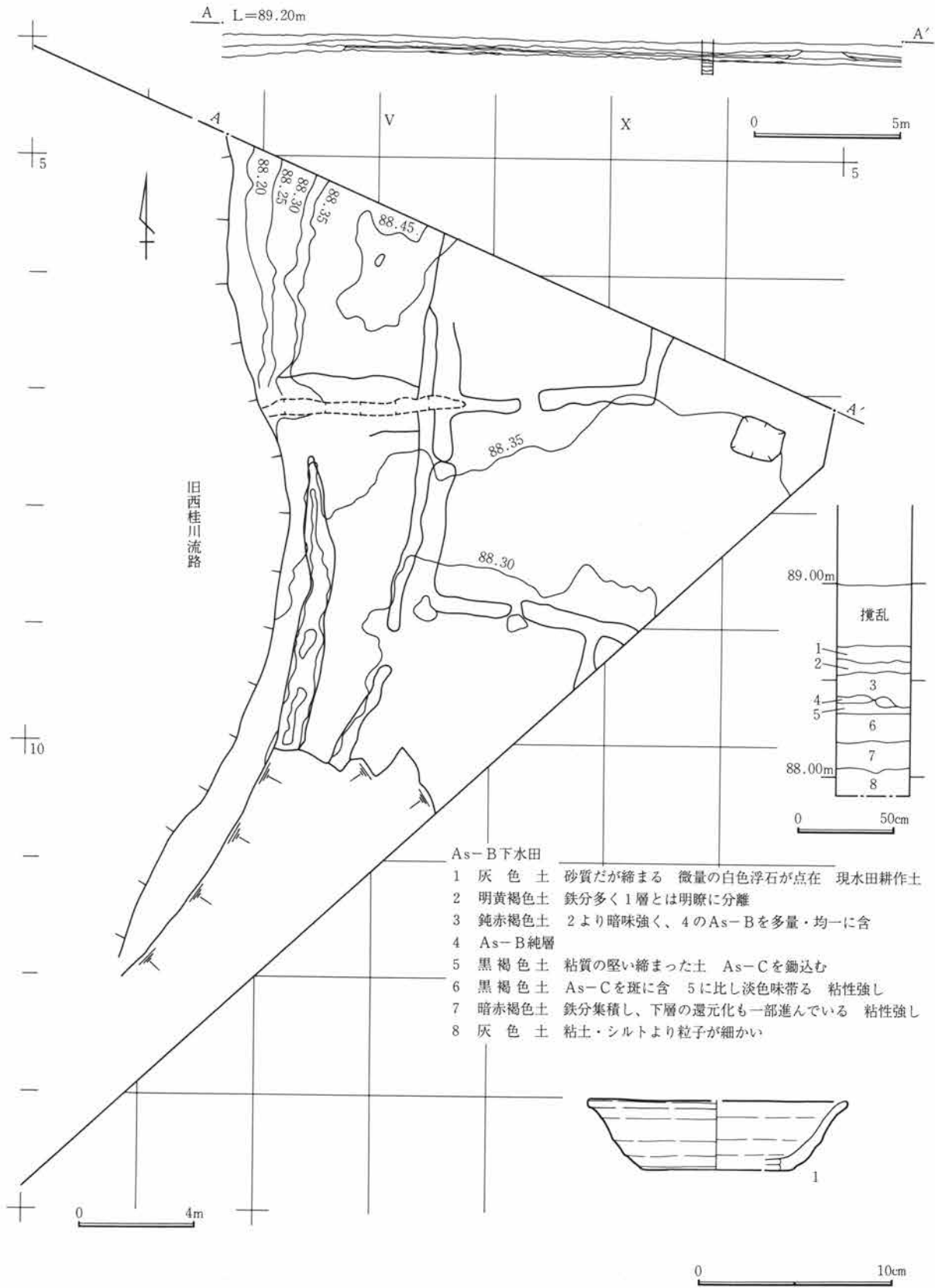


第20図 土坑(5)





第21図 井戸及び出土遺物



第22図 As-B下水田

## 第9節 水田跡 (As-B下)

調査区東側に西桂川の旧流路が確認された。調査区内の地形区分はこの旧流路を境にして、西側が洪積台地、東側が沖積低地に分けられる。

本遺跡で検出された水田跡はこの東側の沖積低地に展開するものである。この水田跡のさらに東側に現西桂川が流れ、As-B下水田を検出した波志江中峰岸遺跡が本遺跡と同様に上武道路関連で調査されている。すなわち本遺跡のAs-B下水田は旧西桂川左岸に占地し、東に位置する波志江中峰岸遺跡の水田跡と連続し、その西端にかかるものである。

調査はAs-B上面まで重機の掘削により、その後手作業による軽石除去作業を行った。その結果、数条の畦畔が確認され、水田跡として認知されることになった。

水田を形成する床土は黒褐色粘質土が充てられ、平坦面を築く。地形に沿って南北と西桂川に傾斜する傾向は認められるが、非常に緩やかである。この床土は微量のAs-Cが認められているが、おそらく下層のAs-Cを含む層を鋤き込むことによって混入したものであろう。

畦畔は概ね薄く、僅かな高まりを検出した。その様相は、南北に緩やかに傾斜する地形に沿うものと直交するものが認められた。畦畔による区画形状は方形が基調となっているが、整然とした規則性は認められない。水口は南北の地形に沿うものが2カ所、西桂川に落ち込む東西のもの1カ所が観察された。

また、旧西桂川に沿ってAs-Bを覆土とする細い溝を検出した。南北に伸びる溝であり、本水田跡に伴うものであろう。なお、畦畔に重複して1条の溝が確認されたが、覆土は褐色土であり、近～現代の所産と捉えた。

出土遺物は、水田面から須恵器杯が出土している。10世紀のもので本水田跡の上限段階としたい。

前述したように、本水田跡は波志江中峰岸遺跡の水田跡と同一の様相である。本遺跡では検出面が狭く、その全容を把握できないが、将来的には波志江中峰岸遺跡報告と併せて活用されるものである。

## 第10節 溝

6条の溝を検出した。このうちの5・6号溝は洪積台地部分の低標高部分を南北に走行するものであるが、覆土は均質土で自然営力によるものとし、報告には掲載していない。

## 1号溝

調査区中央を横断する農道に沿って検出された。1号・8号土坑を切る。小規模な溝である。近代の土坑群を切り、覆土の様相から現代の所産とする。

## 2号溝

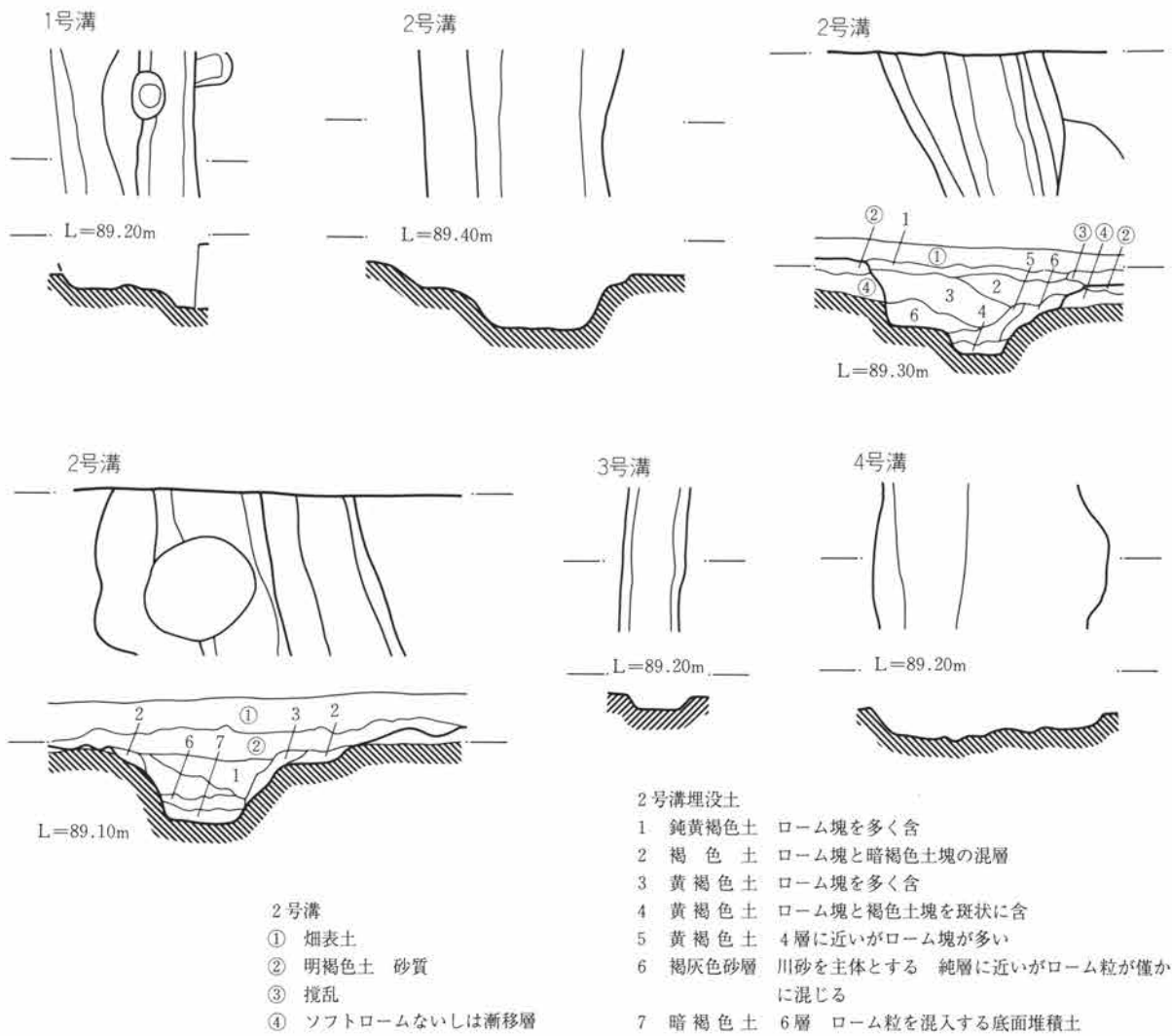
調査区中央を南北に走る。近代に比定した土坑群に切られ、奈良時代の住居跡を切ることから、中～近世に時期を求めたい。溝底面は徐々にではあるがそのレベル数値を南に高め、台地の巨視的な標高差に準拠するものである。溝幅も南に広がる傾向を見せ、当地域の開発に有機的な位置を持つと思われる。断面形は箱状で、西側に犬走り状の平坦面を築く。遺物は陶器片などが出土している。

## 3号溝

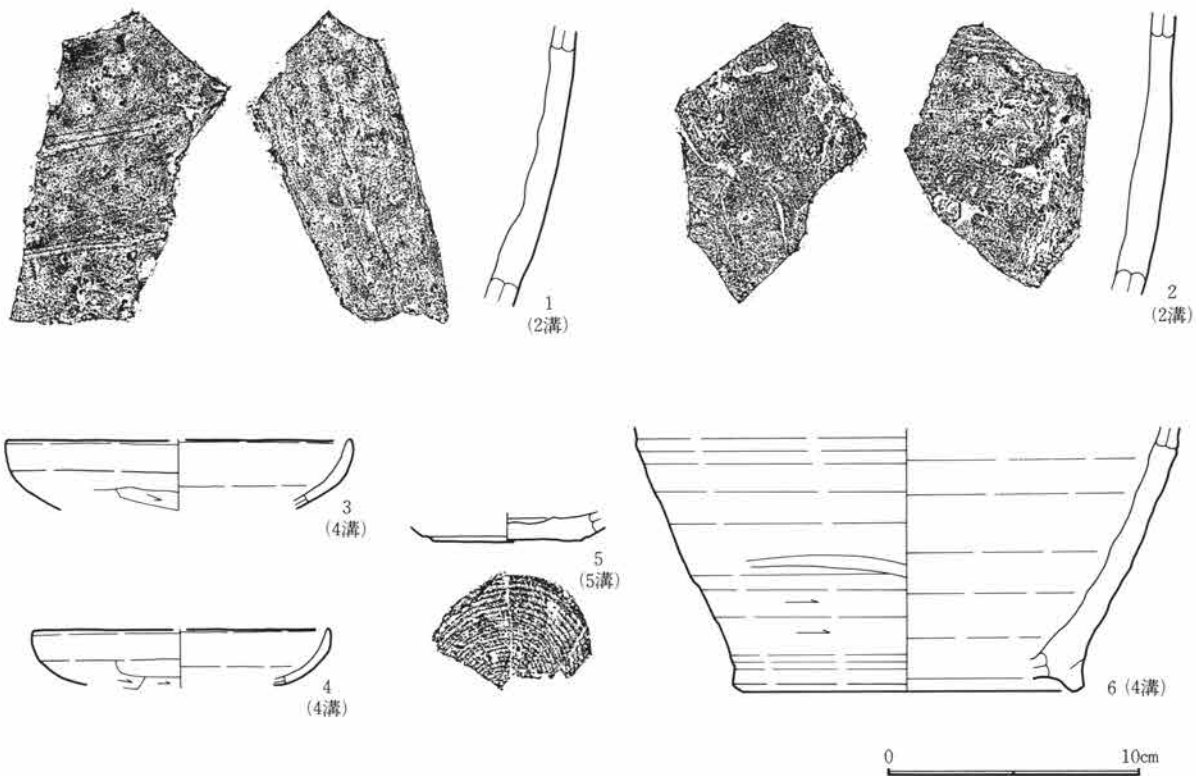
1号溝と2号溝の間を南北に走行する。小規模な蛇行は認められるもののほぼ直線的に4号溝と2号溝をつなぐ位置にある。幅は狭く、断面は浅いため覆土の様相も捉え難く、時期は不明である。

## 4号溝

調査区中央南側で検出した。東西に走行が認められるが、2号溝と現農道で消える。浅く皿状の断面形だが、幅約160cmを測り、1・3号溝に比して有機性に富む。溝底面は東に落ちる。時期は不明だが、土師器杯片や須恵器甕底部が出土している。



第23図 溝



第24図 溝出土遺物

井戸・水田・溝出土遺物

ここにあげる遺物は、水田出土遺物を除き必ずしも出土した遺構に伴うものではない。おそらく1～3号住や調査区域外からの流入と捉えられよう。

第21図1 3号井戸。推定口径24.2cmの小型の鉢である。軟質陶器。口唇部は僅かに突出し、口縁部は直立気味に内傾する。口縁部内面も僅かに凹む。灰色を呈し、胎土に白色鉍物粒・黑色鉍物粒を含む。

第21図2 3号井戸。須恵器破片。外面に自然釉。おそらく大甕か。あるいは横瓶の可能性もある。外面に平行叩き目、内面に波状の当て目。黄灰色を呈し、胎土に微小の白色粒を含む。

第22図1 As-B下水田。須恵器杯。1/3残存。復元推定値は口径13.4・底径7.6・器高4.1cm。口縁部は緩やかに外反。体部は丸みを帯びる。底部撫で調整。右回転。10世紀代。色調は黄灰色を呈し、胎土に白色・黑色鉍物粒を含む。

第24図1 2号溝。焼き締め陶器大甕破片。常滑系。12～13世紀。明赤褐色を呈し、大粒の砂礫や白

色透明粒・黑色鉍物粒を含む。

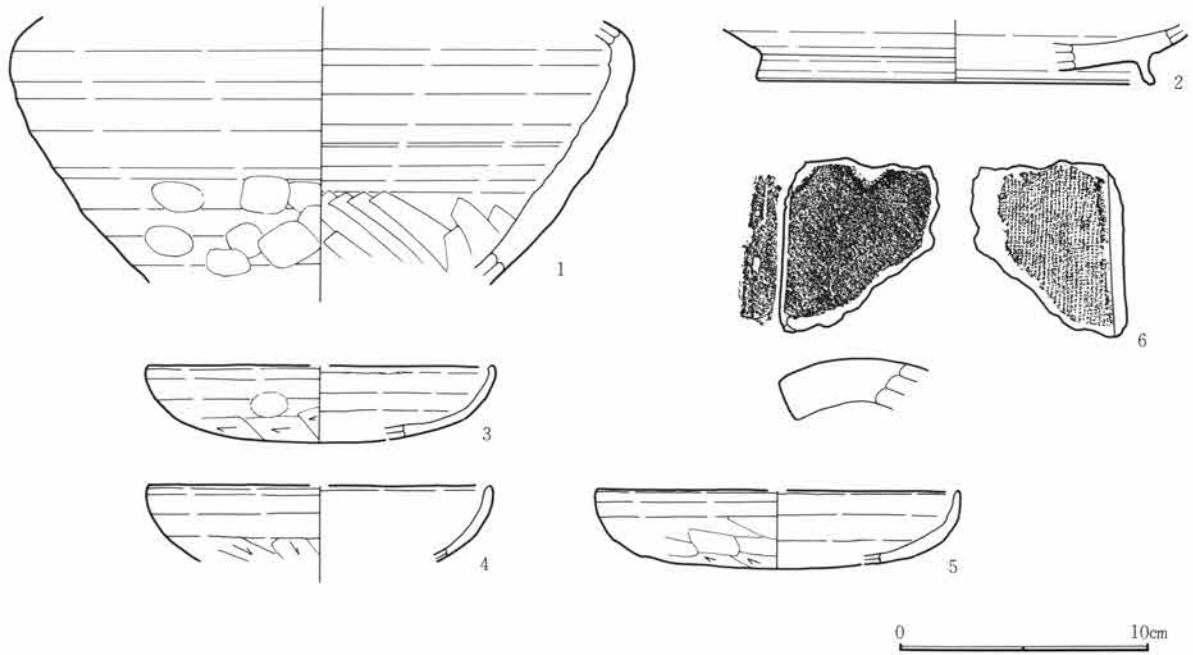
第24図2 2号溝。焼き締め陶器大甕破片。常滑系。12～13世紀。灰白色を呈し、白色鉍物粒を含む。

第24図3 4号溝。土師器杯細片。口縁部僅かに内湾。口縁部内外横撫で。体部は削り、内面は平滑。色調は鈍い褐色を呈し、胎土に微小の白色鉍物粒・黑色鉍物粒を含む。復元口径13.9cm。

第24図4 4号溝。土師器杯細片。口縁部僅かに内湾。口縁部内外横撫で。体部は削り。色調は鈍い橙色を呈し、胎土に微小の白色鉍物粒・黑色鉍物粒を含む。復元口径12.0cm。

第24図5 5号溝。酸化焰焼成須恵器杯底部。左回転糸切り無調整。橙色を呈し、白色鉍物粒と褐色粒を含む。復元底径6.0cm。

第24図6 4号溝。須恵器高台甕。付け高台。右回転調整後外面横位削り。灰白色を呈し大粒の白色鉍物粒を含む。復元底径14.0cm。



第25図 グリッド出土遺物

第11節 グリッド出土遺物 (第25図)

ここに挙げる遺物は、攪乱坑や遺構平面確認時に出土した縄文時代以外の遺物を集めた。攪乱からの出土遺物が多いが、殆どが細片であり、また摩滅が著しく図化に至らなかった。

1 Q-6 Gr周辺にある攪乱溝から出土した。須恵器台付き壺胴部破片である。肩部は屈曲し、外面に自然釉がかかる。右回転調整だが内面の調整痕は著しい。体部下半は指頭による撫で。内面下半は斜位の撫で。灰色を呈し、胎土に黑色鉍物粒・微小の白色鉍物粒・大粒の砂礫を含む。

2 P-5 Gr周辺の攪乱溝から出土した。須恵器盤であろう。細みの高台を付し、底面の器厚は厚い。右回転調整。黄灰色を呈し微小の白色鉍物粒を含む。

3 P-8 Gr。1号住が近接する。土師器杯破片。口縁部は僅かに内湾、口唇部は内面にやや丸みを持つ。口縁部内外面横撫で。体部は削り、内面は平滑。鈍い橙色を呈し、胎土に微小の白色・黒色・透明鉍物粒を含む。

4 P-8 Gr。1号住が近接する。土師器杯細片。口唇部僅かに内湾。口縁部内外面横撫で。体部は削り、内面は平滑。鈍い橙色を呈し、胎土に白色・透

明鉍物粒を含む。

5 K-6 Gr。2号住と3号住の間から出土。口唇部端部は比較的尖る。口縁部はやや直立気味。口縁部内外面横撫で。体部外面は削り。内面は平滑。色調はにぶい橙色を呈し、微小の白色鉍物粒・透明鉍物粒を含む。

6 R-3 Gr。旧西桂川上端部分より出土。男瓦破片。還元焰焼成の布目瓦。半截作り、凸面木目叩き。側部面取り3回か。

第1表 旧石器時代の単独石器一覧表 (波志江六反田)

挿図番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第4図-1	六Vプレ拡張区	スレイバー	4.0	1.8	4.70	黒曜石
2	六Vプレ拡張区	スレイバー	3.6	2.3	6.56	黒曜石
3	六Vプレ拡張区	使刺	3.0	1.6	1.93	黒曜石
4	六Vプレ拡張区	使刺	2.9	0.8	0.56	黒曜石

第2表 古墳時代以降遺物観察表

1号住居跡 (第10図)

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第10図1 土師器杯	口径:(13.8) 器高:( 3.1)	床直 破片	口縁部僅かに内湾。口縁部内外横撫で。 体部外面削り、内面平滑。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焰 良好 ③褐
第10図2 須恵器杯蓋	口径:(17.9) 器高:( 2.9)	貯蔵穴 破片	口縁部～体部緩やかに屈曲。左回転。	①白色鉱物粒子 ②還元焰 良好 ③灰

2号住居跡 (第12図)

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第12図1 土師器杯	口径:13.9 器高: 3.4	床直 ほぼ完形	口縁部僅かに外反。体部は浅く底部はや や尖り気味。口縁部内外横撫で。体部外 面削り。内面平滑で中央が凹む。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③明赤褐
第12図2 土師器杯	口径:(14.2) 器高:( 3.4)	覆土 口縁部1/3残存	口縁部直立気味に内傾。体部は浅く偏平。 口縁部内外横撫で。体部外面削り。内面 は平滑ながら凹凸もある。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 堅緻 ③明赤褐
第12図3 土師器杯	口径:(14.1) 器高:( 2.5)	床直 破片	口縁部外傾。体部は恐らく偏平か。口縁 部内外横撫で。体部外面削り。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焰 良好 ③橙
第12図4 須恵器蓋	器高:(1.8)	覆土 鏝部欠損	転用硯。天井部につまみを設けず、僅かに 内湾する体部。鏝部は全周欠損。天井部回 転削り。左回転。体部は撫で、内面は撫で で中央部はやや凹む。図中央が研磨範囲。 内面中位に焼成前の小孔が設けられる。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②還元焰 良好 ③灰白
第12図5 土師器甕	口径:(20.9) 器高:(15.0)	床直・竈・覆土 口～胴部破片	口縁部緩外反。頸部は直立気味。体部は 膨らみ、最大径は上半。口縁部内外横撫 で。体部外面上位横削り、下位斜位削り。 内面横撫で。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③橙
第12図6 土師器甕	底径:(5.3) 器高:(6.8)	竈 底部破片	底端部は鋭く立ち上がる。外面縦位削り 内面横撫で。	①白色・黒色鉱物粒子、白粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③橙

3号住居跡 (第14図)

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第14図1 土師器杯	口径:13.8 底径: 8.7 器高: 4.2	床直・竈・覆土 ほぼ完形	口縁部体部外傾。底部は平底。内面のみこ み部は明瞭。口縁部内外横撫で。体部横位 削り。底面も削り。体部内面放射状暗文。	①白色・黒色・透明鉱物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③橙
第14図2 土師器杯	口径:(14.0) 器高:( 2.6)	覆土 破片	口縁部僅かに内湾。体部浅く偏平。口縁部 内外横撫で。体部外面削り。内面凹凸有り。	①白色・黒色鉱物粒子 ②酸化焰 軟質 ③にぶい橙
第14図3 須恵器杯	口径:(13.0) 底径:( 8.1) 器高:( 3.0)	覆土 1/4残存	口縁部体部外傾。底面の器厚厚い。 底部回転糸切り後撫で調整。	①白色・黒色鉱物粒子 ②還元焰 堅緻 ③灰

3号井戸 (第21図)

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第21図1 軟質陶器鉢	口径:(24.2) 器高:( 3.5)	覆土 破片	口縁部に薄い段を持ち口唇部は丸みを帯 びる。口縁部の屈曲部も丸みを帯びる。	①白色・黒色鉱物粒子 ②軟質 ③灰

IV章 波志江六反田遺跡

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第21図2 須恵器大甕		覆土 破片	外面平行叩き目。内面波状の当て目。	①白色・黒色鉾物粒子 ②還元焰 堅緻 ③黄灰

A s—B 下水田 (第22図)

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第22図1 須恵器杯	口径：(13.4) 底径：(7.6) 器高：(4.1)	U-8 Gr B 下面 破片	口縁部は緩外反。体部丸みを帯びる。底部回転糸切り後撫で。全体に砂質である。	①白粒子、黒色・透明鉾物粒子 ②軟質 ③黄灰

溝 (第24図)

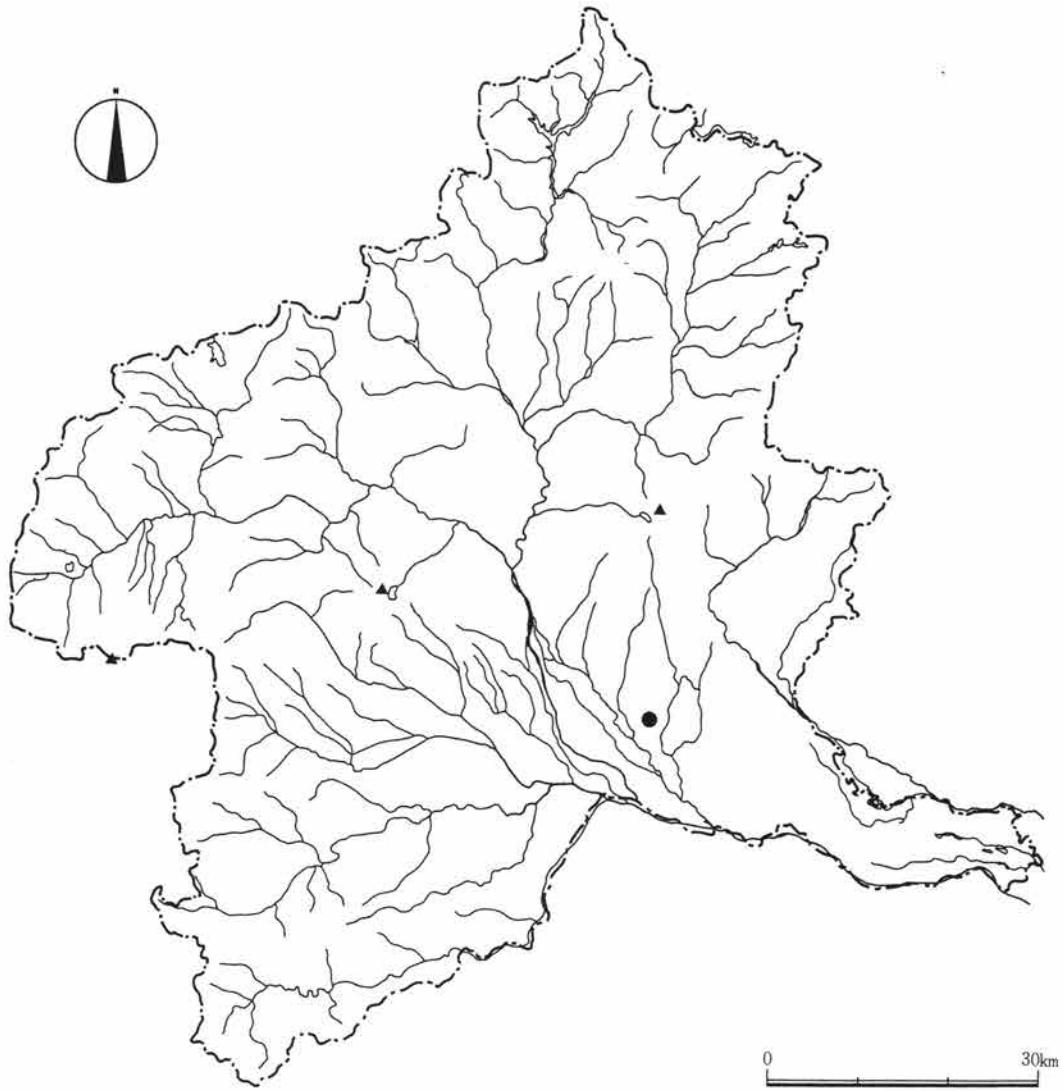
番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第24図1 焼締陶器 大甕		2溝 胴部破片	外面撫で。内面は指頭痕による凹凸残る。	①白色鉾物粒子 ②還元焰 良好 ③明赤褐
第24図2 焼締陶器 大甕		2溝 胴部破片	内外面撫で調整。	①白色・透明鉾物粒子 ②還元焰 良好 ③灰白
第24図3 土師器杯	口径：(13.9) 器高：(2.7)	4溝 破片	口縁部僅かに内湾。口縁部内外横撫で。体部削り。	①白色・黒色鉾物粒子、白粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③にぶい褐
第24図4 土師器杯	口径：(12.0) 器高：(2.2)	4溝 破片	口縁部僅かに内湾。口縁部内外横撫で。体部削り。外面剥落。	①白色・黒色鉾物粒子 ②酸化焰 やや軟質 ③にぶい橙
第24図5 須恵器杯	底径：(6.0) 器高：(1.1)	5溝 底部破片	底部回転糸切り無調整。左回転。	①白色・黒色鉾物粒子 ②酸化焰 軟質 ③橙
第24図6 須恵器甕	底径：(14.0) 器高：(10.4)	4溝 胴～底部破片	底部内面、使用による摩滅。体部下半に横位削り。右回転。	①白色・黒色・透明鉾物粒子 ②やや軟質 ③灰白

グリッド (第25図)

番号・器種	計測値(cm)	出土・残存状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第25図1 須恵器壺	器高：(10.4)	Q-6 Gr 胴部破片	外面自然釉。内面横撫で調整が著しく、下半は斜位撫で。外面下半に指頭痕。	①黒色・白色鉾物粒 ②還元焰 ③灰
第25図2 須恵器盤	底径：(16.0) 器高：(2.2)	P-5 Gr 底部破片	高台・体部薄い。右回転。	①白色鉾物粒子 ②還元焰 ③黄灰
第25図3 土師器杯	口径：(14.0) 器高：(3.0)	P-8 Gr 破片	口縁部内湾。口唇部内面に丸み。体部偏平。口縁部内外横撫で。体部削り。	①白色・黒色・透明鉾物粒子 ②酸化焰 ③にぶい橙
第25図4 土師器杯	口径：(13.8) 器高：(3.1)	P-8 Gr 破片	口縁部内湾。やや身深。口縁部内外横撫で。体部削り。	①白色・透明鉾物粒子 ②酸化焰 ③にぶい橙
第25図5 土師器杯	口径：(14.6) 器高：(3.0)	K-6 Gr 破片	口縁部内湾。体部偏平。口縁部内外横撫で。体部削り。	①白色・透明鉾物粒子 ②酸化焰 ③にぶい橙
第25図6 男瓦		Ⅲ区 R-3 Gr 破片	布目瓦。半截作りで、凸面木目叩き。	①白色・透明鉾物粒 ②還元焰 ③灰白



V 章 波志江天神山遺跡



第26図 遺跡の位置

## 第1節 遺跡の概要

### (遺跡内の地形)

波志江天神山遺跡は、前章で述べた波志江六反田遺跡と同一台地上にあり県道深津伊勢崎線を境に字名が変更するため、別名称となっている。また、検出遺構の内容も趣を異にし、遺跡総体の評価も波志江六反田遺跡とは別のものである。

波志江天神山遺跡は波志江六反田遺跡の西に隣接し、洪積台地上に占地する遺跡である。ローム層の遺存も非常に良好で、波志江六反田遺跡で見られたような旧石器試掘坑内の湧水は認められなかった。本遺跡調査区内に沖積低地や埋没谷は存在しないが、西には波志江沼に水を湛え、南側を沖積低地が広がる地形を形成する。

また、波志江沼の西も良好な洪積台地と狭小な沖積低地が連続し、伊勢崎市と前橋市の市境である神沢川にいたる。ここは波志江今宮遺跡として、8基の古墳とAs-B下水田が調査されている。

調査区内の地形は、県道よりが最も標高が低く、台地形状としてはその断面形ではやや平坦面ともいえる箇所である。標高は調査区西に行くに従い徐々に高くなり、北西隅で最高標高地点を測る。参考までにこの最高標高地点と波志江六反田遺跡の沖積低地との比高差は約2.8mである。調査区西には構造物があり、波志江沼に向かって崖状に落ちる。概観すれば、西側は急激な傾斜を形成するが、東側には緩やかな斜面を持つ洪積台地といえ、波志江天神山遺跡はほぼ平坦にも見える緩斜面に位置する。調査はこの緩斜面上に刻まれた各時期の遺構・遺物を検出したのである。

### (検出された遺構と遺物の概要)

発掘調査は調査事務所用地として県道側から着手した。しかし、県道寄りには波志江六反田遺跡と同様に現代の攪乱が著しく、調査対象からは除外せざるを得なかった。その後徐々に調査の手を西に伸ばし、調査区東半分は近代の溝・土坑といった波志江六反田遺跡に見られた同様の遺構群の調査、西半分は縄文時代の陥穴などの土坑と、包含層の調査が主で

あった。それらの遺構群の調査、記録化が終了した後、旧石器時代の試掘調査を行った。

### 旧石器時代

隣接する波志江六反田遺跡で石器の出土が見られ、また下触牛伏遺跡においても良好な石器群がブロックを形成していることから、本遺跡においても旧石器時代の遺物出土の期待が高まった。

試掘は調査区内を網羅するように、かつ当然ながら作業上表土などの崩落の危険性が無い箇所を選んで2×4mの試掘坑を基本にして行ったが、石器の出土は見なかった。

### 縄文時代

遺構は土坑を6基検出したが、内5基は陥穴である。調査区西半分に集中する傾向を見せる。近接する遺跡では、下触牛伏遺跡で27基の陥穴を検出しており、縄文時代における当地域の特徴ともいえよう。本遺跡の陥穴は調査区中央で検出された一群と北西の一群が認められ、ある程度のまとまりが認められた。またその長軸方向も一定の規則性が看取され、労働対象物に対する陥穴設置の方法などが存在するようだ。

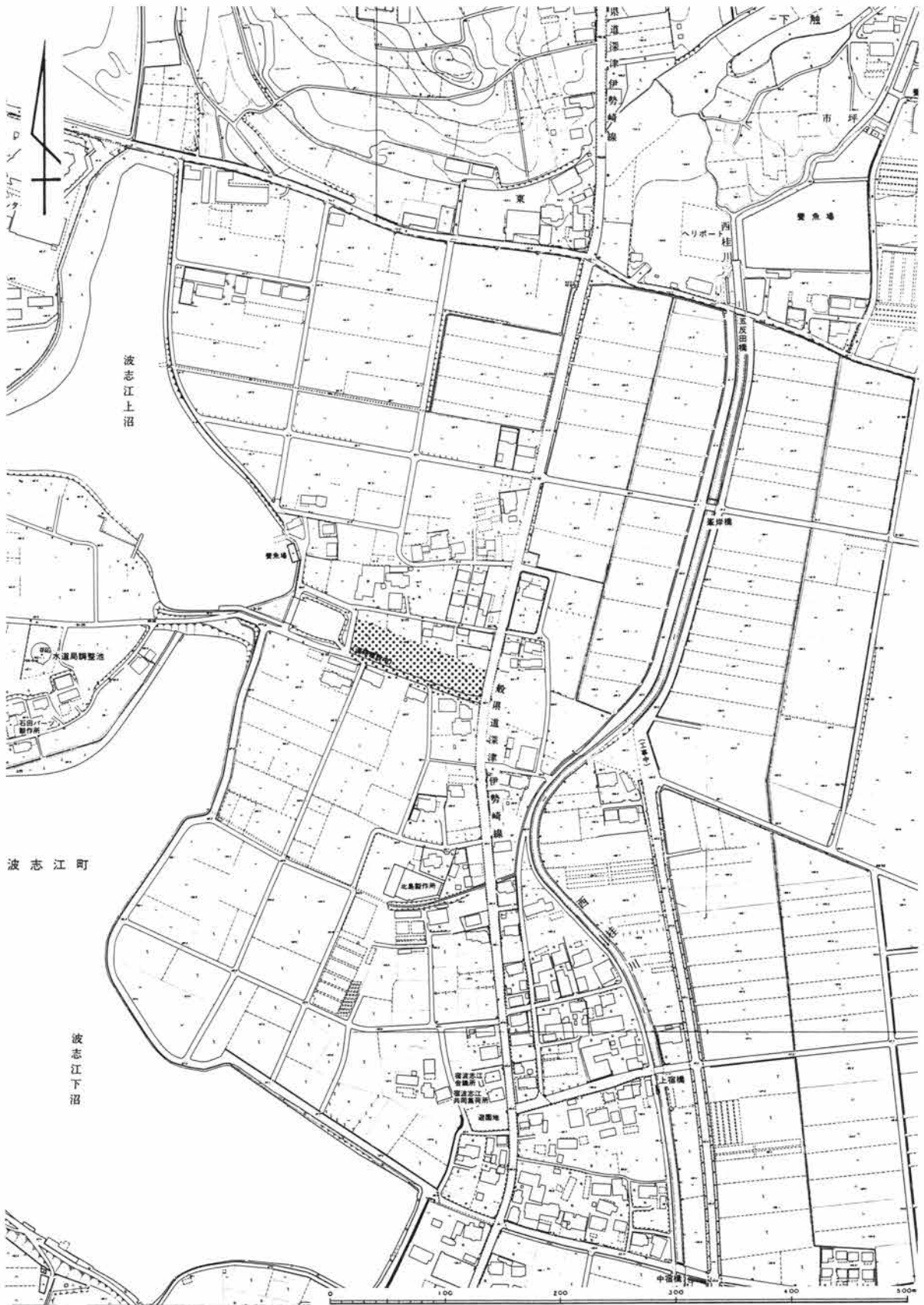
遺物も土坑と同様に西半分に集中する。しかし、遺構から出土するものではなく包含層出土である。石器は前期後半の諸磯b式期に集中する。おそらく石器もこの段階の所産のものが主体を占められる。

### 弥生時代～中世

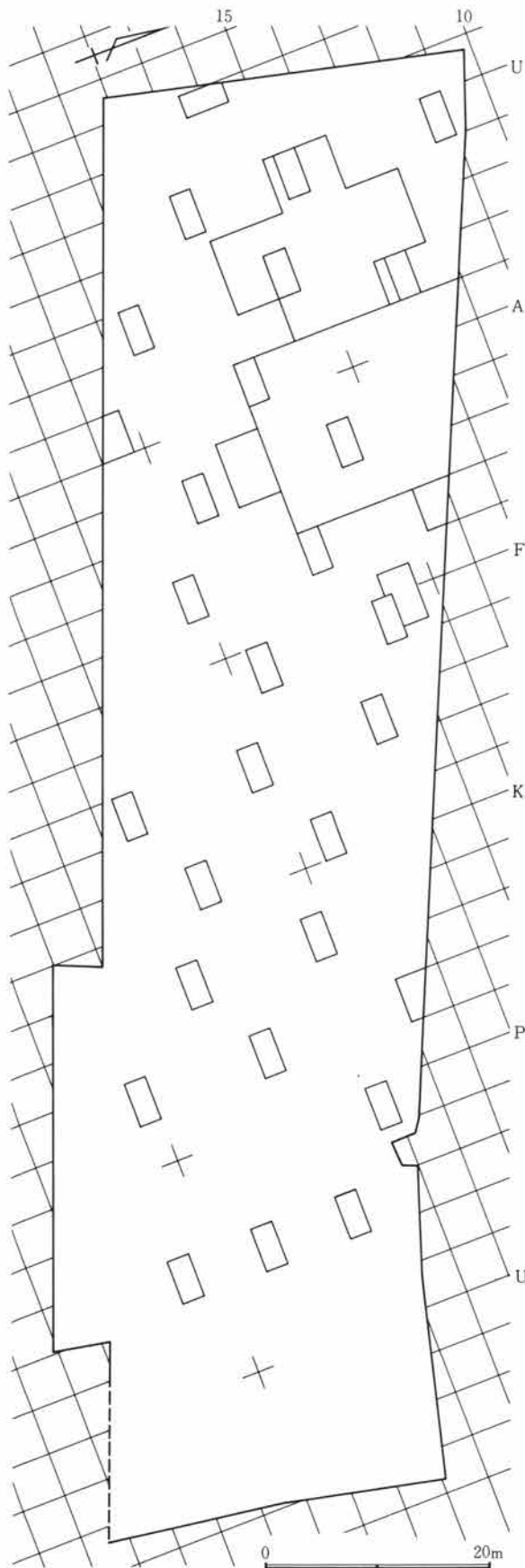
遺構は検出されなかった。ただし、現代のサク状遺構から8世紀代の須恵器盤脚部が出土しており、一概に皆無とはいえない。南北の調査区域外には当該期の遺構遺物は存在するものと考えられる。

### 近世～近代

調査区東半分を中心に、溝を8条・井戸1基・土坑17基などを検出した。波志江六反田遺跡とほぼ同様な様相と捉えられ、当地域の近～現代における居住域、開発行為の集中箇所として注目されるものである。屈曲する溝や方形土坑など検証の余地の多い遺構群である。



第27図 周辺の地形



第28図 旧石器調査範囲と基本土層

## 第2節 調査方法

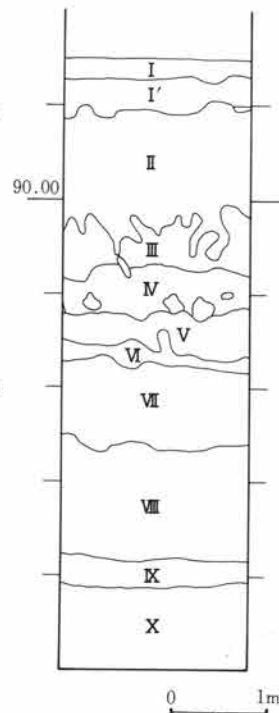
遺構確認面はⅡ層上面である。近世段階の遺構は、その覆土が砂質であったり、ローム塊を含む埋土のため確認は容易であった。しかし、縄文時代の土坑覆土は均質なものが多く、平面的には地山であるソフトロームとの識別は困難を極めた。

調査方法としては、グリッドを4×4mの正方形に組み、軸を国家座標軸に一致させた。グリッド名は波志江六反田遺跡から連続して数えるようにした。

原則的に出土遺物の地点、レベルの記録化を施したが、細片に至ってはグリッド名と出土層位を明記し取り上げた。遺構平面図は1/20を基本としたが、近世段階の溝などは1/40で作図した。また、遺構覆土はセクション図を充てるようにしたが、近世遺構はその覆土が類似し、かつ単層のものが多いため、エレベーション図を充て覆土の様相を記述した。

## 第3節 基本土層

旧石器試掘坑北側壁を分層し、遺跡内のローム層序を資料化した。第28図の土層図はO-18Grのものである。同一台地上の波志江六反田遺跡と層序の変更は特に認められないが、各層の遺存状態は本遺跡が良好であった。



跡が良好であった。

- I 表土層
  - I' 旧表土層
  - II 黄褐色軟質ローム層
  - III 黄褐色硬質ローム層
  - IV 褐色硬質ローム層
  - V 褐色硬質ローム層
  - VI 暗褐色硬質ローム層
  - VII 暗褐色硬質ローム層
  - VIII 褐色硬質ローム層
  - IX 八崎火山灰層
- 各層の詳細はIV章第2節を参照していただきたい。I'はAs-Bを含む暗褐色土である。

## 第4節 検出された遺構と遺物

波志江天神山遺跡では住居跡が検出されなかった。周辺の様々な遺跡が生産跡や住居跡が確認されている中で本遺跡に「住まい」としての居住痕跡が認められない現象は偶然的ではないだろう。当地域の集落占地を考える際に注意を要する遺跡として評価を与えたい。

本遺跡では、土坑・溝という直接的な居住施設ではない遺構が検出されている。これらの遺構は出土遺物も少なく、用途・時期などの特定が難しいが、確実に人間の歴史的所産物であり、その調査・報告はないがしろにはできない。本報告では、これらの遺構を積極的に扱うことによって、当地域のそれぞれの時代の側面を明らかにしたい。

## 1. 土坑

土坑は縄文時代と近世～近代のものが確認されている。その内訳は、

縄文時代：6・8～10・20・21号土坑の6基を検出した。このうち6号土坑を除く5基が陥穴であり、比較的まとまった資料といえよう。

近世～近代：1～5・7・11～19・22・23号土坑の17基である。この段階の時期判別は各遺構の重複状況や、波志江六反田遺跡で得た土層による判別を参考にした。

この他にも、小ピットや浅い皿状の断面形の土坑を確認し調査では図化した。整理作業によって木根や自然的営力による落ち込みのものと判断し、報告には掲載していない。

ここでは、各時代毎に調査時の番号順に説明を加えるが、近世～近代の土坑群は多少の時間差や性格差が生じる結果となっている。

## (縄文時代)

6号土坑 調査区西のW-14・15Grで検出された。北に8号坑が位置するが、関連性は薄い。平面規模は、径約1.4×1.6mの不整形円形を呈し、深さは約40cmを測る。坑底面は凹凸を持ち小ピットが重複するが、これは木根によるものである。壁は直立気味に立ち上がるが、東側は緩やかな傾斜を示す。

本土坑上面は多量の諸磯b式土器が出土し、住居跡などの遺構の存在を想定した調査が行われたが、検出された遺構は本土坑だけであった。また、遺物の集中的な出土は上面にとどまり、土坑覆土からの遺物は少量であり、下層に至ると無遺物になった。よって本土坑は遺物を有機的に出土する性格ではなく、上面の出土遺物は、グリッド扱いとして図示している(第41図1)。

覆土は炭化物を含む暗褐色～明黄褐色土を基調とした均質土で構成され、堆積状況は緩やかな自然堆積と捉えた。

時期は上面の諸磯b式土器を重視するべきであろう。土坑埋没が完了せず凹部となった箇所土器片が炭化物などと共に集中したのであろう。よって、本土坑の構築は前期後半以前と捉えた。

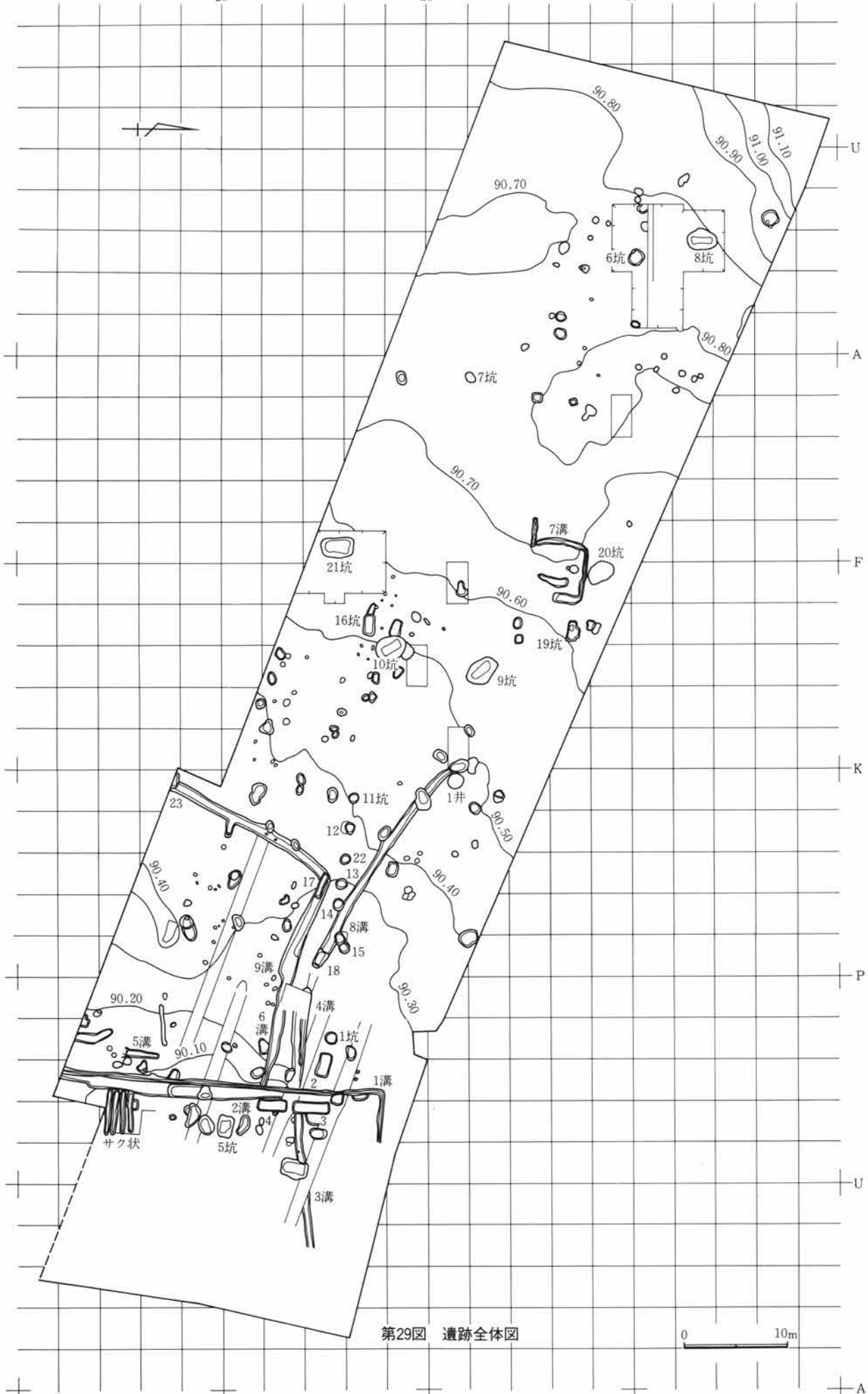
8号土坑 陥穴である。調査区北西のV・W-12・13Grで検出された。南約4mに6号坑が検出されている。本土坑北西はやや傾斜を強くしており、台地縁辺のやや内側に位置する。長軸をほぼ南北に持ち、西壁上端が崩れており不整形を呈するが約2.3×2.0mの長楕円形を平面形と捉えられる。長辺の中位が僅かに内湾する特徴を持つ。深さは約1.3mで、坑底面は幅約0.6mと狭小であるが平坦であり、暗色帯に達している。

壁は上位が崩落によって漏斗状を呈するが、下位は比較的直立気味に立ち上がり、しっかりした掘り込みを呈する。

坑底面の小ピットは3ヶが正位に開けられているが深くはない。中位の穴が小型で浅い。ただし、規則性を持っており意図的な配置と捉えられよう。

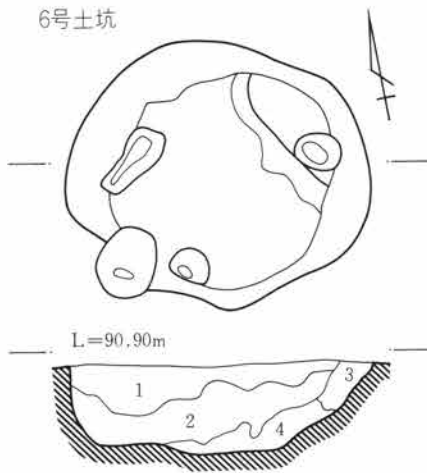
土層は自然堆積状態を呈し、3・4層は壁崩落によるものと考えられる。

遺物は周辺から諸磯b式土器片が出土しているが、本土坑覆土からは出土を見ない。おそらく、本土坑埋没後にある程度の時間が経過して、諸磯b式の土器片が上面に包含されたのであろう。ゆえに、本土坑の時期的な位置を前期後半以前に求めたい。



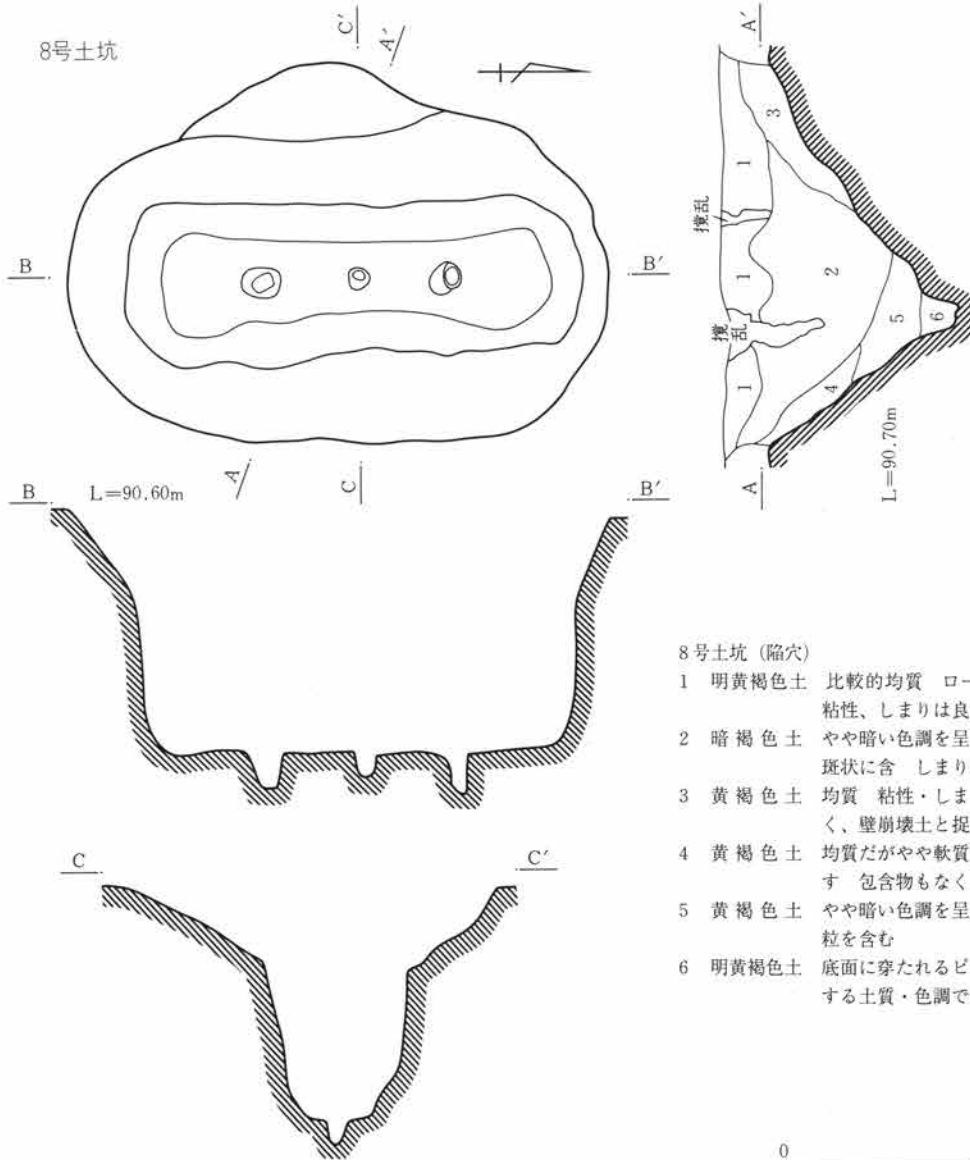
第29図 遺跡全体図

0 10m



6号土坑

- 1 暗褐色土 炭化物・ローム塊を多く含 しまりはよく粘性も強い
- 2 黄褐色土 やや軟質 小型のローム塊を多く含 しまりはやや乏しいが粘性は強い
- 3 明黄褐色土 若干硬質のローム塊を主体とする しまりは乏しいが粘性は強い
- 4 明黄褐色土 やや暗い色調を呈す ローム塊を少量含 しまりは良好、粘性も強い



8号土坑 (陥穴)

- 1 明黄褐色土 比較的均質 ローム粒・暗褐色土塊を含 粘性、しまりは良い
- 2 暗褐色土 やや暗い色調を呈する 均質 ローム粒を 斑状に含 しまりは良好
- 3 黄褐色土 均質 粘性・しまりに良好 包含物も無 く、壁崩壊土と捉えた
- 4 黄褐色土 均質だがやや軟質 3層より暗い色調を呈 す 包含物もなく、壁崩壊土と捉えた
- 5 黄褐色土 やや暗い色調を呈す 軟質で微量のローム 粒を含む
- 6 明黄褐色土 底面に穿たれるピットの埋土 地山と類似 する土質・色調であるが、軟質である

0 2m

第30図 縄文時代の土坑(1)

9号土坑 陥穴である。調査区ほぼ中央やや北よりのH-18・19Grで検出された。南約6.4mに陥穴である10号坑が位置する。また、20号坑も北西に約12mの距離を置いて設けられており、21号坑など共に一群を形成するものと捉えられよう。

本陥穴はほぼ平坦地に占地し、長軸を北西に持つ。台地でもほぼ中間に位置し、前述の8号坑とは群を別にしようだ。

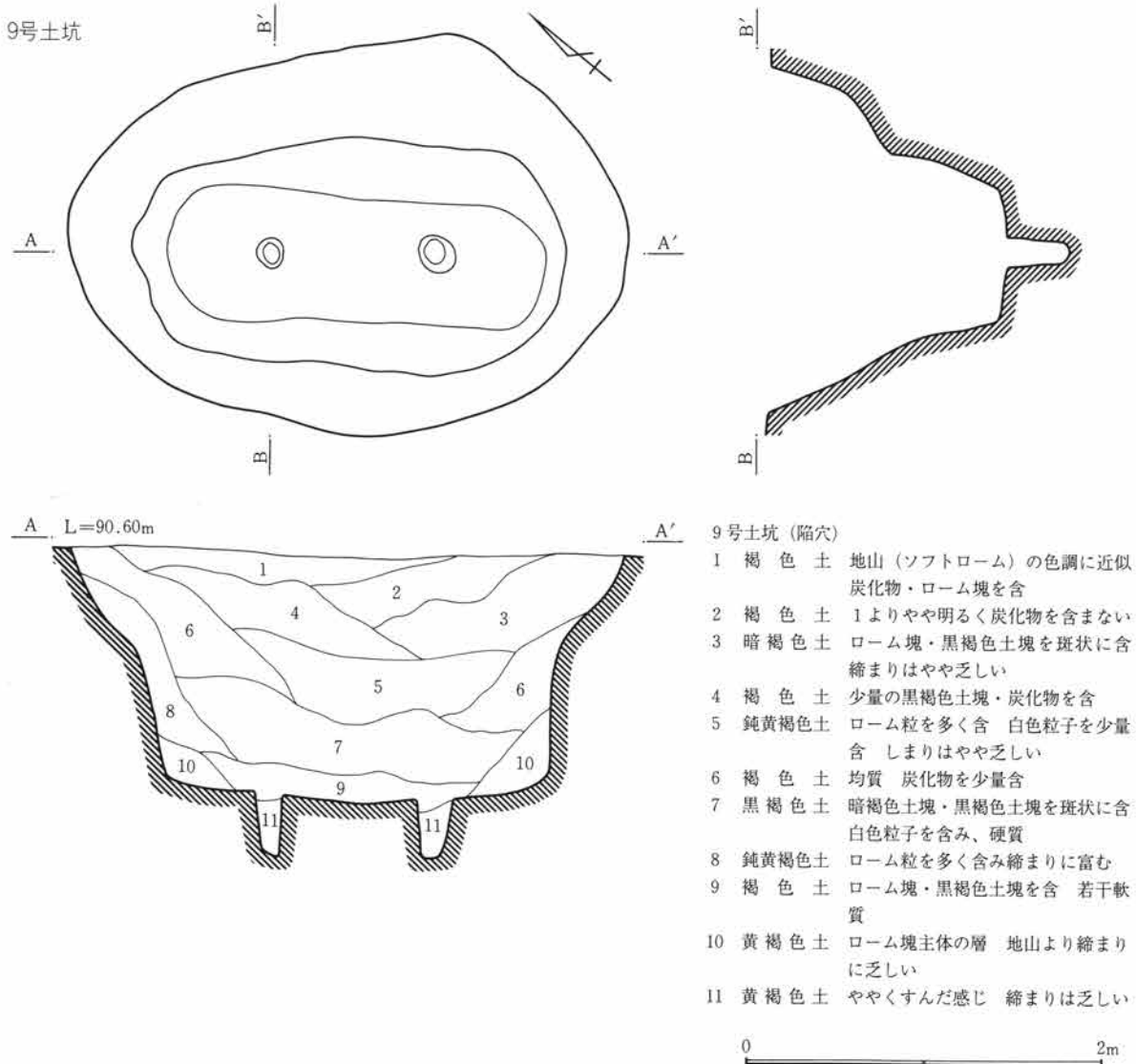
平面形は約3.1×2.1mの不整楕円形を呈し、深さは約0.9mを測る。坑底面平面形は整った隅丸長方形を呈し、上端との平面形との差は壁崩落を物語る。

壁は上位が開き、下位は直立気味に開く。特に北辺の上端は強く開き、屈曲を持つ。

坑底面はほぼ平坦だが、中央部分がやや凹む。掘り込みは暗色帯に達している。小ピットを相対するように2ヶ設ける。約75cmの距離を保ち、両者とも深さ約25cmと比較的深い。ピットは坑底面のみに検出され、壁には開けられていない。また、ピット覆土、及び土層下端に柱痕は認められなかった。

覆土は黄褐色～黒褐色を呈するが均質で自然堆積を物語る。壁際には黄褐色～褐色土が認められ、壁崩落によるものであろう。中層には黒褐色土が認められ、上位に黄褐色土が乗ることから、埋没過程に数段階の変遷が追えよう。

遺物は出土していない。



第31図 縄文時代の土坑(2)



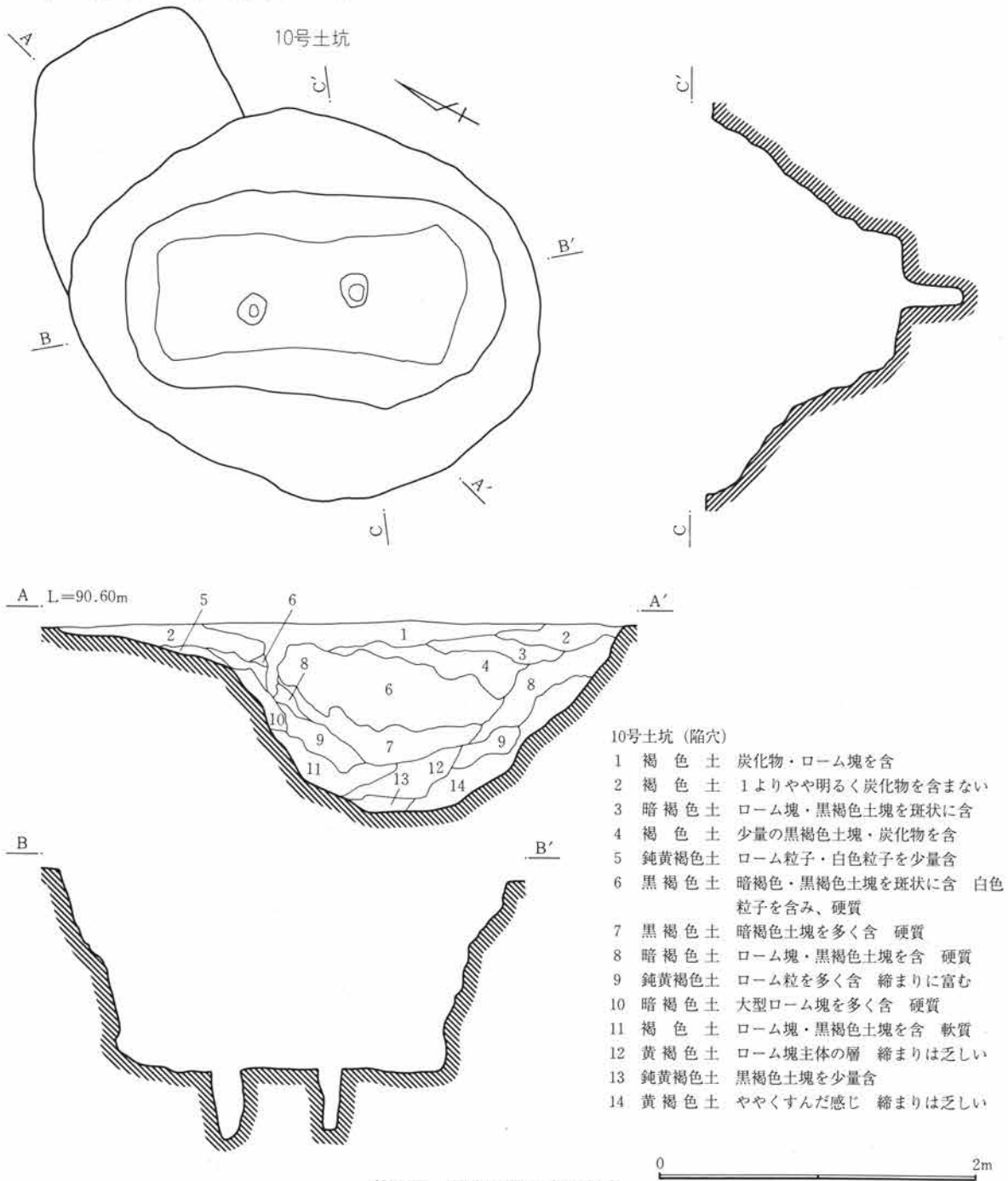
10号土坑 陥穴である。調査区ほぼ中央のG・H-20・21Grで検出された。南西約9mに陥穴である21号坑が位置する。ほぼ平坦地に占地し、長軸を北西に持つが、9号坑に比してやや北に傾く。

平面形は上端約2.9×2.4mの不整形を呈し、深さは約1.3mを測る。坑底面平面形は比較的整った長方形を呈し、上端との平面形との差は壁崩落によるものであろう。また、本土坑周辺には、浅い落ち込

みが群在し、本土坑北側にも不整形の落ち込みが重なる。新旧は不明である。

壁は短軸方向に大きく開く。坑底面はほぼ平坦だが僅かな凹凸はある。掘り込みは暗色帯に達している。小ピットを相対するように2ヶ設ける。接近するように設けられ、両者とも深さ約40cmとしっかりしている。

覆土は黄褐色～黒褐色を呈するが均質で自然堆積



第32図 縄文時代の土坑(3)

を物語る。このうち1～4層は下位の土層とは粘性などに違いが見られ、有る程度の時間を隔てた堆積と考えられる。遺物は出土していない。

20号土坑 陥穴である。調査区ほぼ中央北西よりでE・F-15・16Grで検出された。南東約12mに9号坑が位置する。ほぼ平坦地に占地し、長軸を北西に持つ。

本土坑は、旧石器試掘時に確認された土坑である。また、2ヶの土坑の重複であり、平面形・深さとも他の土坑とは比較材料にはならないが、深さは暗色帯に達しており、その深度を誇る遺構としては本遺跡では陥穴しかなく、覆土の様相も類似していたため本土坑を陥穴として報告する。

平面形は上端約2.6×1.5mの不整形を呈し、深さは約1.2mを測る。坑底面平面形も不整形で全体感は不明である。遺物は出土していない。

21号土坑 陥穴である。調査区中央の南端のE-21・22Grで検出された。北東約9mに10号坑が位置する。ほぼ平坦地に占地し長軸を北に持つ。

平面形は上端約3.0×1.9mの比較的整った隅丸方形を呈し、深さは約1.1mを測る。坑底面平面形は比較的整った長方形を呈し、東辺が僅かに湾曲する。上端との平面形との差は壁崩落によるものだがその差は少ない。

壁は上位が大きく開き、下位は直立気味である。掘り込みは暗色帯に達している。

坑底面はほぼ平坦で小ピットを3ヶ連続する。小ピットは直列し、両端のピットが規模・深さとも共通性を持ち、中間の小ピットが比較的小形で掘り込みも浅い。この形態は8号坑の坑底面ピットと類似し、距離を置く両土坑に同時性などの関連を考慮することができる。

覆土は黄褐色～黒褐色を呈するが均質で自然堆積状態を呈す。土層は下層に従い漸移的に色調が明るくなるが緩やかな時間をかけた堆積と考えられよう。

遺物は出土していない。

以上のように縄文時代の土坑を述べてきたが、5

基が陥穴であり、そのうちの4基は残存状態も良好であった。

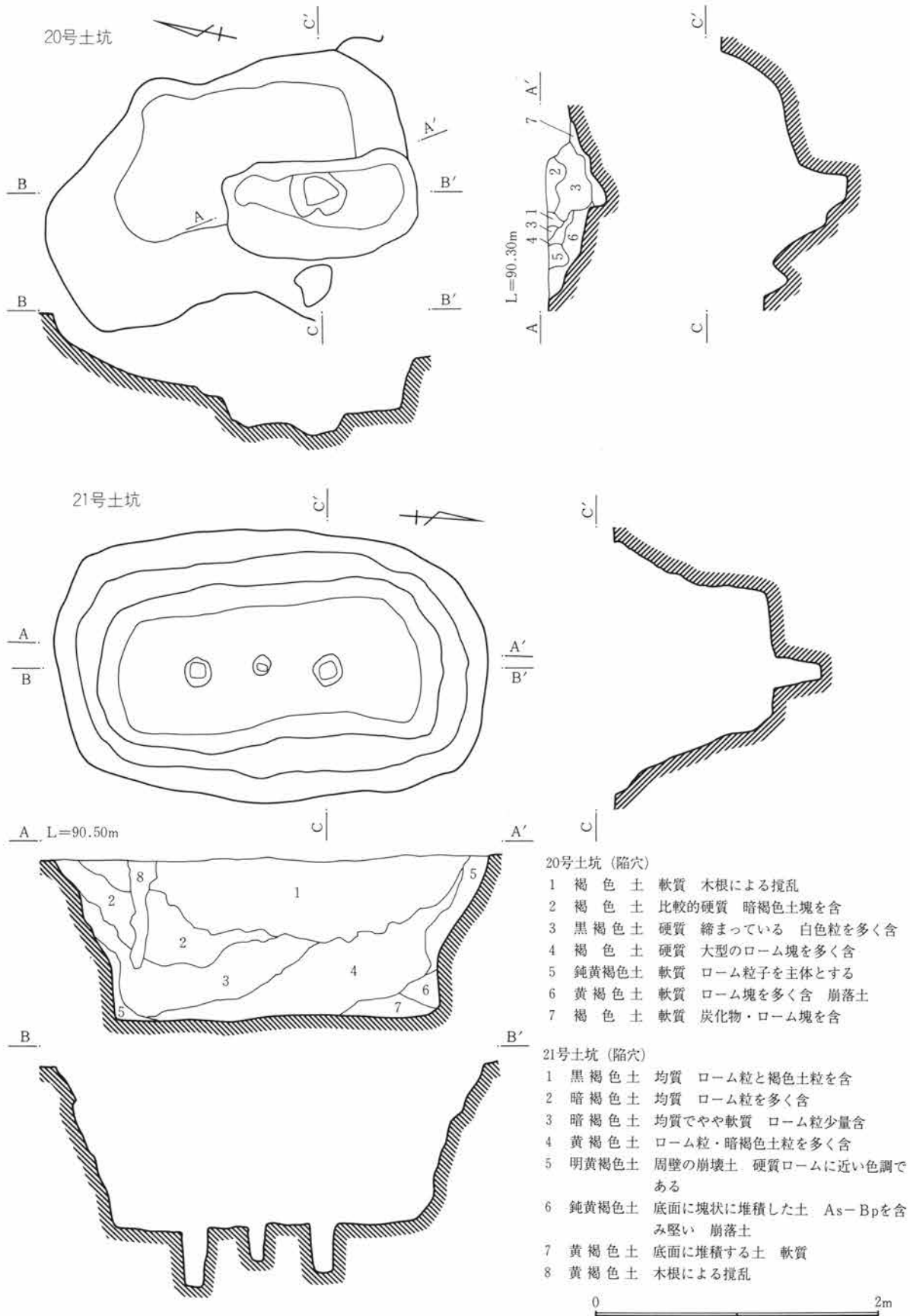
縄文時代の陥穴は、その労働対象物に鹿・猪という獣類が想定され、「けもの道」という、獣類が同じ箇所を活動範囲とする習性を利用して、陥穴を設営するものと考えられる。

本遺跡の場合、台地中央部分に一群の陥穴が検出されているが、上記の習性を意識した設営と捉えた。また、台地縁辺で検出された8号坑もおそらく調査区域外で一群をなすものと考えられ、一つの台地で複数の陥穴群を設ける方法が用いられたものであろう。

坑底面に開けられる小ピットは、杭が埋め込まれたものとされる。本遺跡の陥穴坑底面には2穴のもの3穴のものが認められた。近接する下触牛伏遺跡では多数の陥穴が検出されているが、2穴のものから多数穴を設けるもので多様性に富む。また、五日牛南組遺跡では単穴のものだけで構成されているようだ。このように、各遺跡・各台地で陥穴はその要素に数種類の傾向が認められる。これは、対象とする獣類の差か、あるいは時期的な差が現れたものか論は確定していない。検討を要する。

通常我々が陥穴を検出するケースは、集落調査の一環で偶然検出される例が多く、調査前からその存在を予測した例は少ない。これは、陥穴から出土する遺物が皆無といって良いほど見られないからで、遺跡周知の方法が、分布調査に頼る現状の方法では調査前には把握できない遺構である。本遺跡も、その例に漏れず、縄文時代の遺物包含層調査時や旧石器時代試掘調査時に確認された陥穴である。

この反省点に立って、陥穴などの無遺物遺構に対しても、その周知が予測できるように、当該遺構が占地される環境を吟味し、傾向を探らなければならない。本遺跡の陥穴が、その際の資料となれば幸いである。



第33図 縄文時代の土坑(4)

(近世～現代)

1号土坑 調査区北東のQ-22Grで検出された。1号溝屈曲部南西に位置し、東に2号坑が近接する。径約1.10m程の円形を平面形とし、深さは約40cmを呈し、比較的しっかりした掘り込みを持つ。坑底面は凹凸を持ち不連続である。覆土は砂質の軟質暗褐色土で、As-Aを含む。近代に比定される。

2号土坑 Q・R-22Grに位置し、西に1号坑が近接する。方形の土坑で、約2.3×1.1m、深さ45cmを測る。掘り込みはしっかりしている。坑底面は僅かに凹凸を持つ。覆土は1号坑と同様で、近代に比定される。

3号土坑 S-22・23Grで検出された。1号溝の屈曲部南東に位置し、4号坑と軸を同一にしている。約3.3×1.1m、深さ30cmを測る方形の土坑で、やや浅い。覆土は2号坑と近似し近代の所産とした。

4号土坑 S-23・24Grで検出された。3号坑と軸を同一にし、また1・2号溝とも平行する。方形の土坑で、2.7×1.1m、深さ約50cmを測る。覆土は3号坑と同様で、近世の所産とした。

5号土坑 S-24・0Grで4号坑の南東で検出された。不整形を呈し、坑底面も凹凸が多い。覆土の様相から近代に比定される。

7号土坑 調査区西側、A-18・19Grで検出された。近接する遺構は無く単独の土坑である。不整形円形を呈し、坑底面も凹凸を持つ。平面規模に比して、深さは80cmと深い。覆土は比較的均質だが遺物も出土せず、時期不明である。

11号土坑 K-21Grで検出した。12号坑の西約3mに近接する。径約0.9mの円形で、深さは約40cmで断面袋状を呈す。

12号土坑 L-21・22Grで検出した。11号坑と22号坑に挟まれた位置にある。不整形円形を呈すが深さは約70cmと深い。南側壁が不連続だが、木根による攪乱である。

13号土坑 M-21・22Grで検出した。22号坑の東に位置する。径約0.8mの円形を呈し、断面形を袋状にする。坑底面は平坦である。

14号土坑 N-22Grで検出した。13号坑の東に位置し8号溝を切る。径約1.0mの円形で深さは約60cmを測る。坑底面は僅かに凹凸を持つ。

15号土坑 O-21・22Grで検出した。8号溝を挟んで14号坑の東に位置する。径約0.95mの円形で深さは約70cmを測る。坑底面は中央部が僅かに盛り上がり、11号坑と同様である。

11～15号土坑は同規模の円形土坑である。特に11～14号坑は、22号坑を挟んで直列し、その配置に何等かの規則性が認められる。調査着手時は掘立柱建物跡を想起したが、貯蔵・廃棄に伴う土坑と考えた。時期は、暗褐色砂質土を覆土とし、近世に比定された8号溝を切ることから近代段階の所産とした。

16号土坑 G-21Grで検出された方形土坑である。北東に縄文時代の10号坑が近接するが、本土坑は近代の所産である。規模は約1.8×1.0mで深さは約50cmを測る。坑底面は凹み、鋤痕ともいえる不連続面が認められた。また、覆土にはヌカ状の白色灰が堆積しており、本土坑の用途を窺わせる。

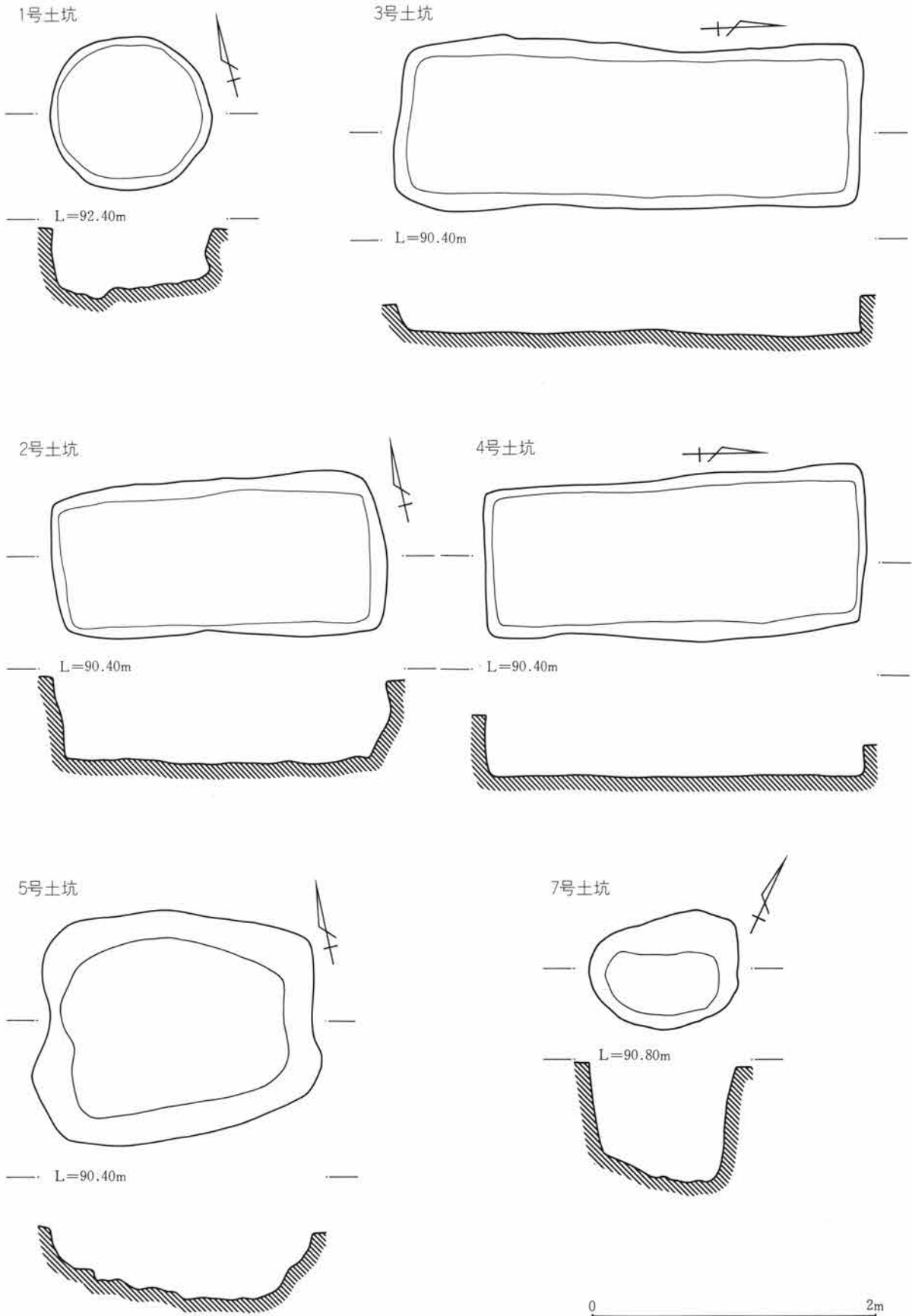
17号土坑 M・N-22Grで9号溝を切って検出された長方形土坑である。規模は2.5×0.5m、深さ25cmを測る。覆土から近代と捉えた。

18号土坑 O-22Grで8号溝に切られて検出された。規模は約1.7×1.0mで深さは約45cmを測る。坑底面は比較的平坦だが、16号坑と同様に覆土に白色灰が堆積し、坑底面にも鋤痕が確認された。

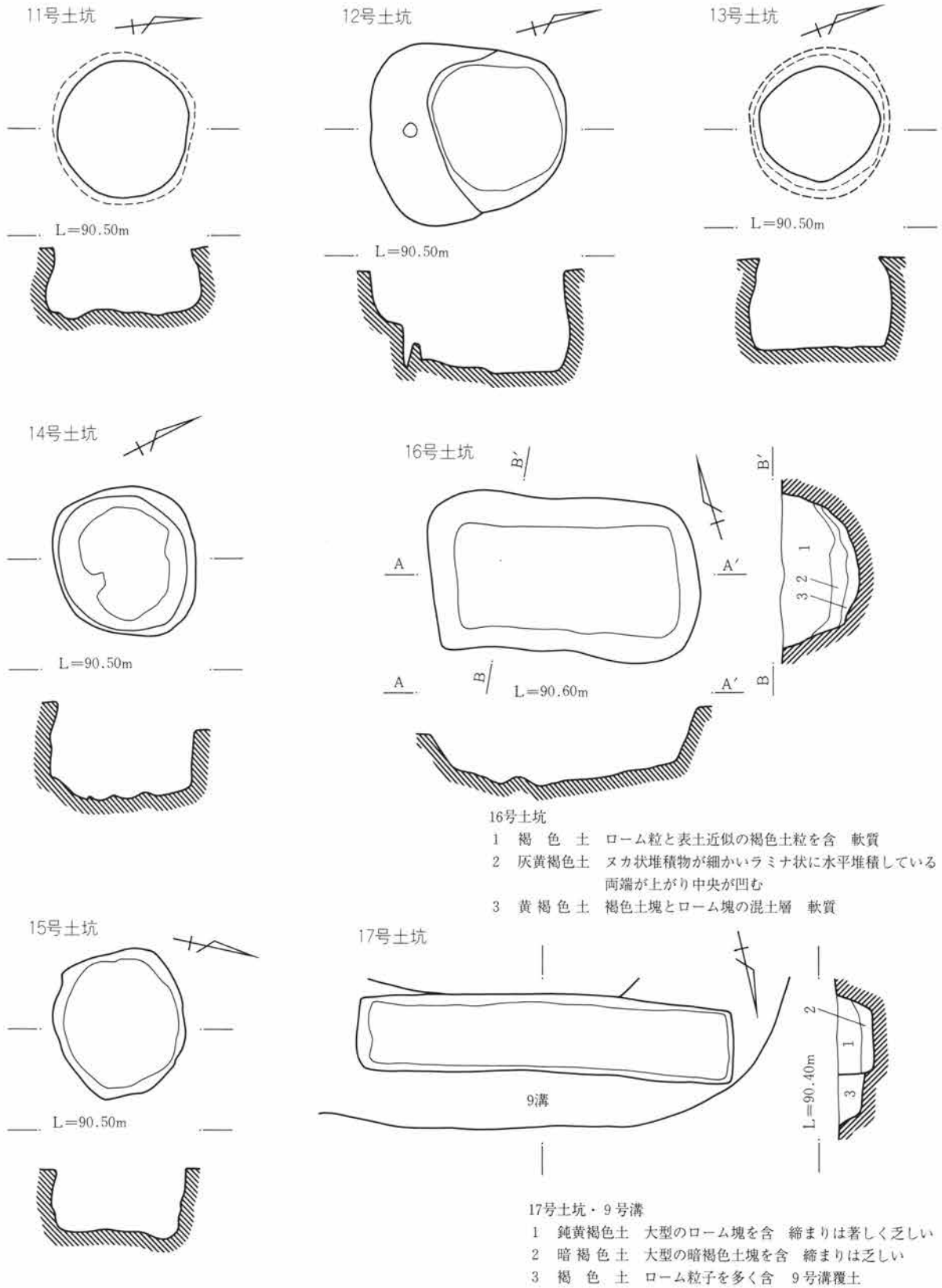
19号土坑 G-16Grで7号溝の東に検出された。張り出しを持つ長方形を平面形とするが、重複ではなく単独の土坑である。深さも約40cmと比較的しっかりした掘り込みである。覆土の様相から近代に比定される。

22号土坑 M-21・22Grで前述の11～14号坑と列をなす。径約95cmの円形で深さは約70cmを測る。

23号土坑 K-1Grの調査区南壁際で検出され、南半を調査区域外に伸ばす。おそらく方形の土坑であろう。深さは74cmを測る。覆土は軟質暗褐色土が主に埋められ、近代の所産とした。

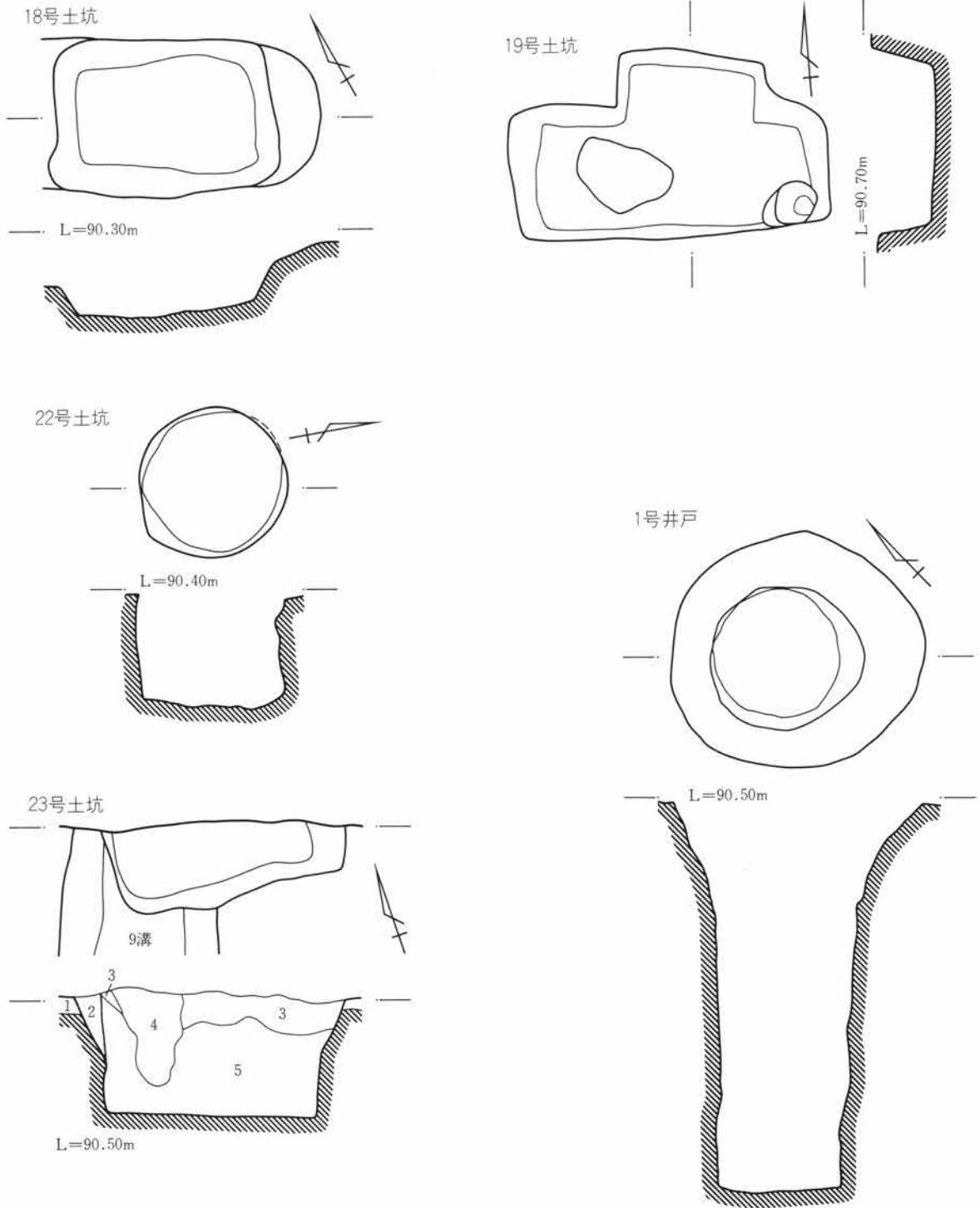


第34図 近世～近代の土坑(1)



0 2m

第35図 近世～近代の土坑(2)



23号土坑

- 1 黄褐色土 漸移層に類似 軟質
- 2 暗褐色土 砂質でやや軟質 ローム粒・褐色土塊を含  
9号溝埋土を形成する
- 3 褐色土 ローム粒・ローム塊を斑状に堆積する
- 4 鈍黄褐色土 3層中に木の根が入り込んだ攪乱層
- 5 暗褐色土 軟質 大型のローム塊と、小型の黒褐色土塊を斑状に含

0 2m

第36図 近現代の土坑及び井戸

## 2. 井戸

本遺跡では、1基の井戸が検出された。波志江六反田遺跡で確認されている3基の井戸数に比べると少ないといえるが、これは地形的な要因であろう。

1号井戸 K-19Grで検出した。南西に8号溝の北西端が接しており、両者の関連性は高いものとする。平面形は径約1.6mの円形で、深さは2.5mを測る。素掘りの井戸で、壁は上半が僅かに開くものの下半は直立し、しっかりした作りといえよう。調査時も下面から湧水した。覆土はローム塊を多量に含む暗褐色土を埋土とし、その様相から近世の所産と考えられる。

## 3. 溝

調査区東半分集中して検出された。近世～近代の土坑が伴出するといえよう。おそらく、当時の周辺民家の水利・区画がその用途と考えられる。

1号溝 調査区北東で屈曲部を持つ。走行は南北で調査区を横断する。幅狭ながら深くしっかりした掘り込みである。底面に鋤痕が認められ、覆土の様相から近～現代の所産とした。宅地界などの用途が充てられよう。

2号溝 1号溝に平行して検出された。やや幅広く溝底面も平坦である。北端は3号溝と交わり消える。重複関係は3号溝とは不明だが、1号溝に切られており、また覆土が3・4号坑と類似する事から、近世～近代の所産とした。

3号溝 調査区北東を東西に走る。東端は現代の攪乱によって消え、西端は18号土坑東で消える。延長線上に8号溝があるが関連性は断定できない。1・4号溝、3号坑に切られており近世～近代に比定されよう。

4号溝 3号溝の一部を平行して重複する走行の短い溝である。幅狭で深く、3号溝を切るが1号溝の手前で止まることから、1号溝と関連性を持ち、同時期のものであろう。

5号溝 調査区南東部で1号溝と平行して検出された。浅く、走行距離も短い。時期・用途は不明である。

6号溝 調査区北東を3号溝と平行して東西に走る。9号溝と同一のものである。東端を1号溝に接し消える。近世～近代の所産であろう。

7号溝 調査区中央北側で19号坑の西で検出された。方形に巡る溝である。ただし、南辺は切れている。区画中央北よりに円形の小土坑が位置し、覆土も同様なことから、本溝に伴うものと考えた。東辺の幅はやや幅広ながら全体に幅狭で、浅いことから、例えば家畜小屋などの平地建物の周溝の可能性もある。時期は近代であろう。

8号溝 1号井戸に端を発し、18号坑で止まる。延長上に3号溝が認められるが、水利を目的とすれば3号溝との間はやや高く水が流れる可能性はない。井戸との関連を考えると、水利をその用途に充てることができよう。重複関係・覆土から近世～近代の所産と考えられる。

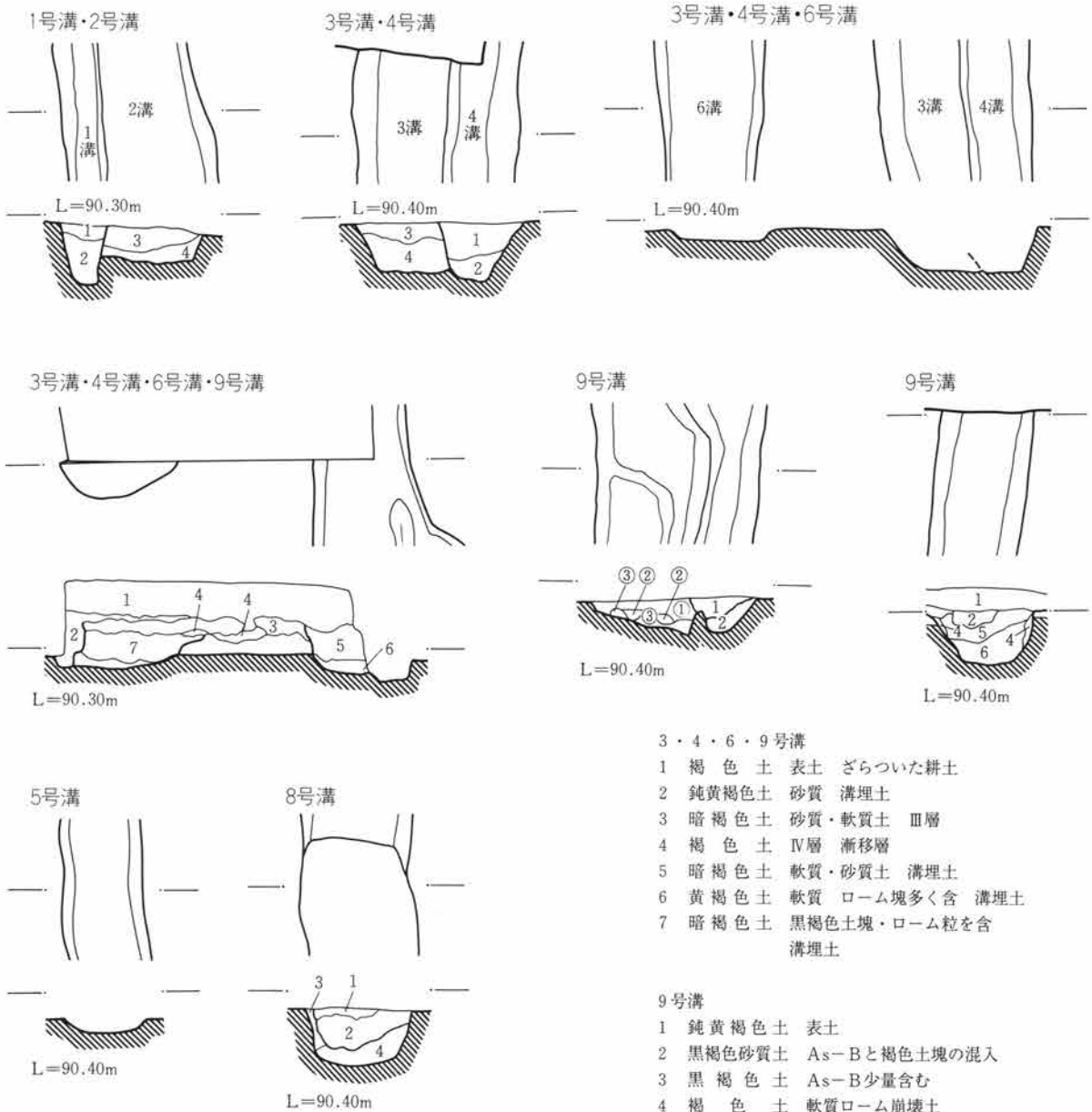
9号溝 調査区中央東寄り東に屈曲する溝である。屈曲部東が6号溝と重なるが同一のものである。ただしP-23Gr部分で狭小となる特徴を持つ。屈曲部分には17号土坑が重複し、西辺はほぼ直線的に南に伸び、調査区域外に消える。屈曲することから、地境溝としての用途が考えられる。時期は重複関係から近世～近代であろう。

## 4. サク状遺構

近代の耕作痕である。調査区南東で検出された。4条の溝で構成され、掘り込みも深く、また、断面観察から複数回にわたる耕作が行われていたことが判明した。ただし、大規模なものではなく、小規模な畝をその機能に充てたい。なお、底面には鋤痕が顕著に確認された。覆土はローム塊を含む暗褐色砂質土で埋められており、近代の所産としたい。

縄文時代のものを除く土坑・井戸・溝・サク状遺構は殆どが近世～近代・現代にいたる当地域の開発の痕跡である。いわば、当時の民家とその生業を想像させるような資料である。波志江六反田遺跡の同時期の遺構群との関連を考えると、当地域の近代景観が明らかになるものであろう。





1・2号溝

- 1 褐色土 ローム塊と褐色土を含 埋土
- 2 鈍黄褐色土 ローム粒を含 砂質
- 3 鈍黄褐色土 ローム粒を多く含 砂質
- 4 黄褐色土 ローム粒を多く含 砂質

3・4号溝

- 1 黄褐色土 ローム粒を多く含 砂質
- 2 明黄褐色土 ローム塊主体
- 3 鈍黄褐色土 ローム塊と褐色土塊を含
- 4 黄褐色土 ローム塊を多く含 2より明るい

3・4・6・9号溝

- 1 褐色土 表土 ざらついた耕土
- 2 鈍黄褐色土 砂質 溝埋土
- 3 暗褐色土 砂質・軟質土 III層
- 4 褐色土 IV層 漸移層
- 5 暗褐色土 軟質・砂質土 溝埋土
- 6 黄褐色土 軟質 ローム塊多く含 溝埋土
- 7 暗褐色土 黒褐色土塊・ローム粒を含 溝埋土

9号溝

- 1 鈍黄褐色土 表土
- 2 黒褐色砂質土 As-Bと褐色土塊の混入
- 3 黒褐色土 As-B少量含む
- 4 褐色土 軟質ローム崩壊土
- 5 褐色土 ローム粒・As-B・褐色土を含埋土
- 6 暗褐色土 軟質 ローム塊・As-B・褐色土塊を含

- ① 暗褐色土 ローム粒子を多く含 砂質
- ② 暗褐色土 ローム塊を含 塊状に堆積する
- ③ 褐色土 大型のローム塊を主体とする

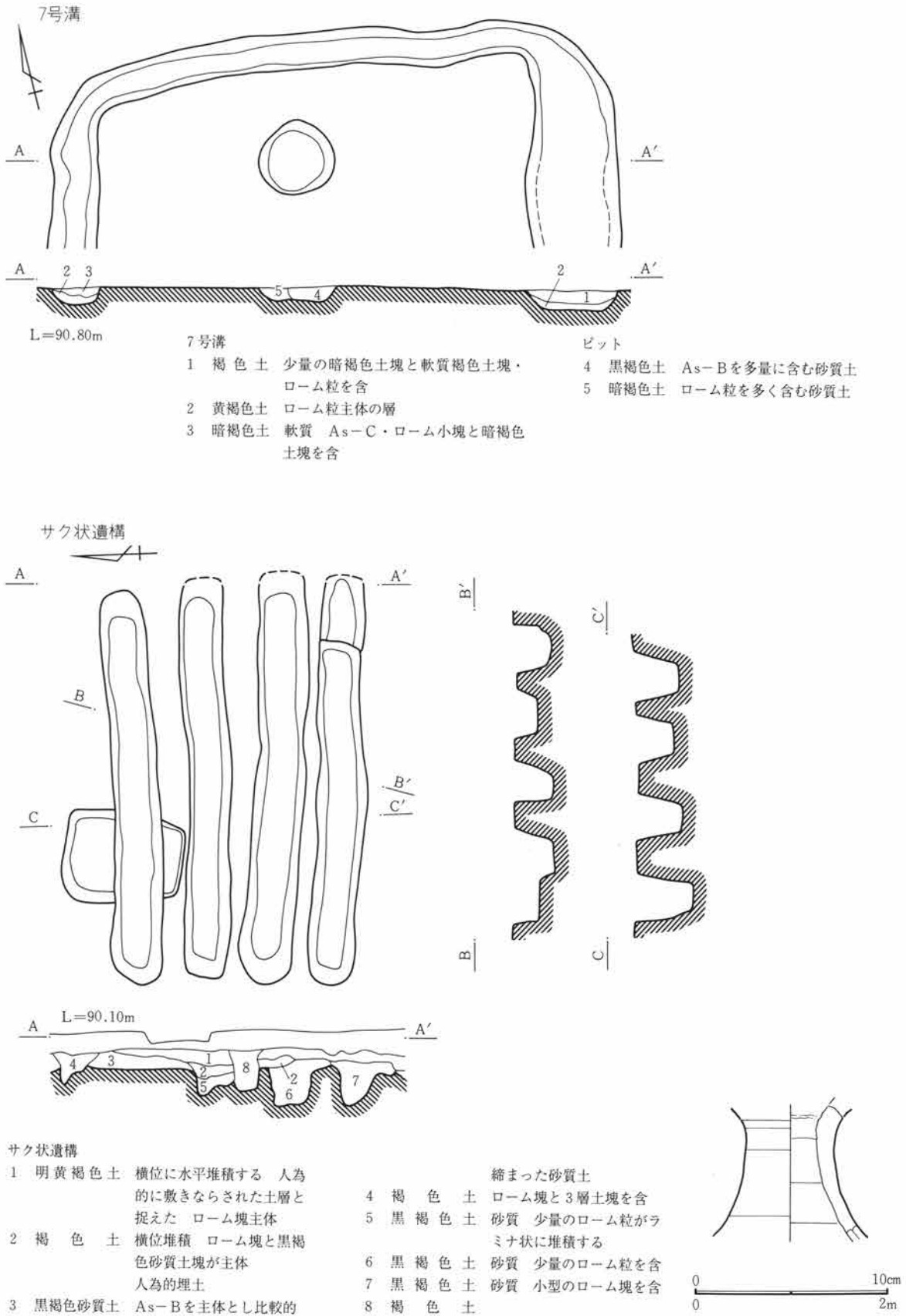
8号溝

- 1 暗褐色土 砂質 ローム塊を含 溝覆土
- 2 黒褐色土 砂質 1より粒子が若干粗い 少量のローム塊を含 溝覆土
- 3 鈍黄褐色土 大型のローム塊を含 土坑覆土
- 4 暗褐色土 大型のローム塊を含 土坑覆土

0 2m

第37図 溝

V章 波志江天神山遺跡



第38図 溝及びサク状遺構、出土遺物

5. グリッド出土遺物

ここでは調査区西半で集中して出土した縄文時代前期後半の遺物を主に取り扱い説明を加える。遺物の集中は第39・40図にあるようにW-14Grを中心に濃密な出土を見せる。当初は住居跡の存在を想定し、セクションベルトを設定しその検出に務めたが、検出された遺構は6号坑と8号坑だけであり、両土坑ともその覆土内に主体的に遺物を含まず、よってこの遺物集中分布を包含層出土と判断した。また、調査区南西隅にも遺物集中区を検出したが、構造物と現道の存在のため全容は把握できなかった。

(土器)

1、6号土坑上層で出土したが、土坑に伴うものではない。口縁部は緩やかに外反し、体部上半は丸みを帯び落ちる。口唇部に3条の平行沈線が巡り、同沈線を懸垂することによって、器面を数分割する。空白部は数条の弧状沈線を縦位に施し、区画内を横位沈線が充填される。内外面は横撫でによる整形痕が明瞭である。諸磯b式終末段階と捉えたが類例は少ない。

2、底部端が尖り、僅かに張り出す。内面は平滑。諸磯b式後半段階であろう。

3、無節縄文のRを施す。諸磯b式か。

4～6は同一個体である。単節縄文RLが横位に施される。6は底部。諸磯b式。

7、単節縄文RLを横位に施すが、まばらな施文。

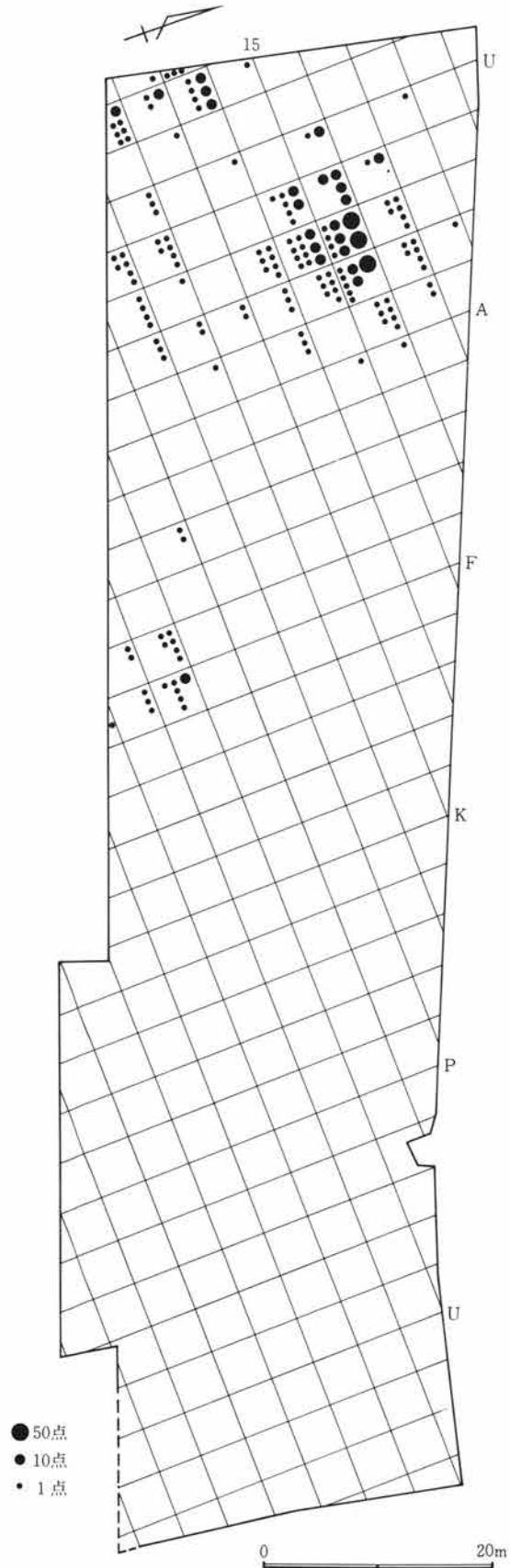
8、小型の爪形文を横位に施し、上下を波状文が平行する。また半截竹管の回転による、円形の刺突文を刻む。諸磯b式。

9、0段多条のLR・RLによる羽状菱形構成。繊維を多量に含む。花積下層式初頭期と捉えたい。試掘時の出土。

10、連続爪形文を施す。斜位短沈線も連続して沿う。諸磯b式。

11・12は単節縄文RLを斜位に施す。諸磯b式か。

13～23は平行沈線を主描線とする土器群。同一個体破片も混じる。主にW・V-14・15周辺からまと



第39図 縄文土器分布図

まって出土したが、口縁部の破片を欠く。14も復元実測である。頸部は屈曲し、体部は緩やかに外反する。頸部の屈曲部や体部中位、下半には平行沈線が巡り分帯する。文様帯内は沈線による懸垂文で区画され、縦位楕円状のモチーフが施される。モチーフ内は平行する横位沈線文によって結ばれるものもある。底部は18・22・23のように、端部は突出せず、横位平行沈線が施される。諸磯b式後半段階。

24は同一の地点から出土している。復元実測。緩やかな双波状口縁を呈し頸部は屈曲する。体部上半に膨らみを持たせ、全体感を甕型に見せる。体部上半は横位平行沈線により分帯しているが、下半は縄文施文である。単節縄文RL斜位施文であろう。体部上半の文様帯は平行沈線による連続三角を基本としながらも、半楕円状の区画文を構成する。区画内は縦位沈線が充填され、地文の縄文を残す。諸磯b式後半段階。

25は浅鉢片。湾曲部で、無文だが内外面とも丁寧に研磨する。諸磯b式。

26、横位平行沈線を巡らし、1条の沈線が弧を描き内縁を更に横位平行沈線を施す。地文は横位単節縄文LR。27も横位沈線と弧状沈線の組み合わせ。弧状沈線は横位である。諸磯b式。

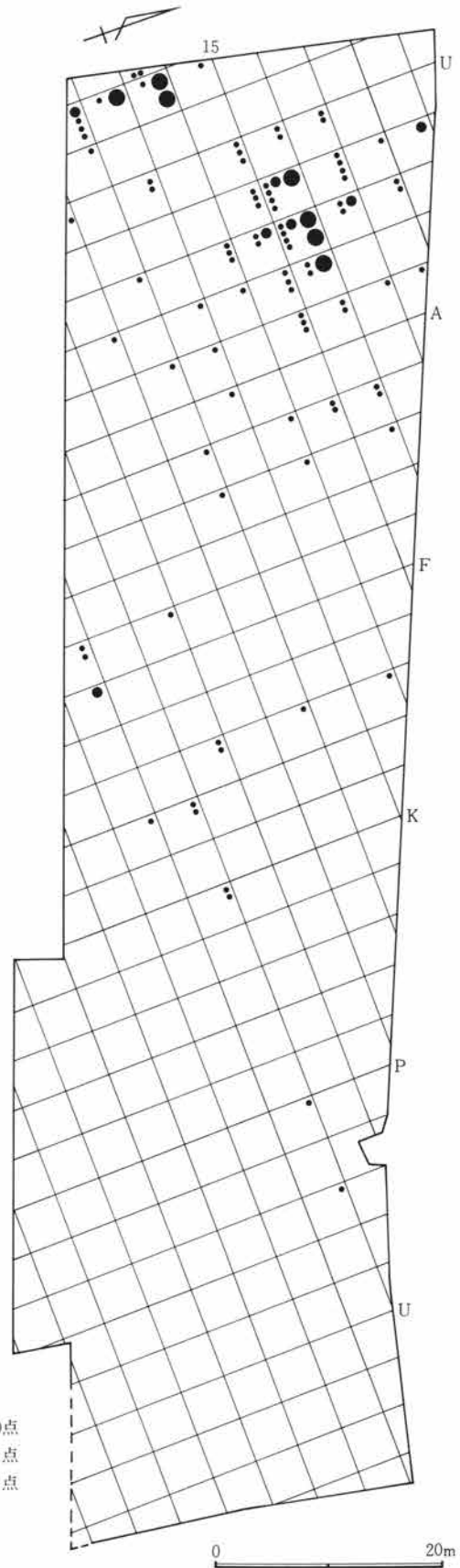
28・29は間隔を持った平行沈線が横位施文される。地文はLR。同一個体。諸磯b式後半段階。

30は平行沈線が集合化するが、地文縄文は僅かが残る。おそらくLRであろう。

31～33も平行沈線が集合するように密接施文される。31・32は同一個体。諸磯b式後半段階。

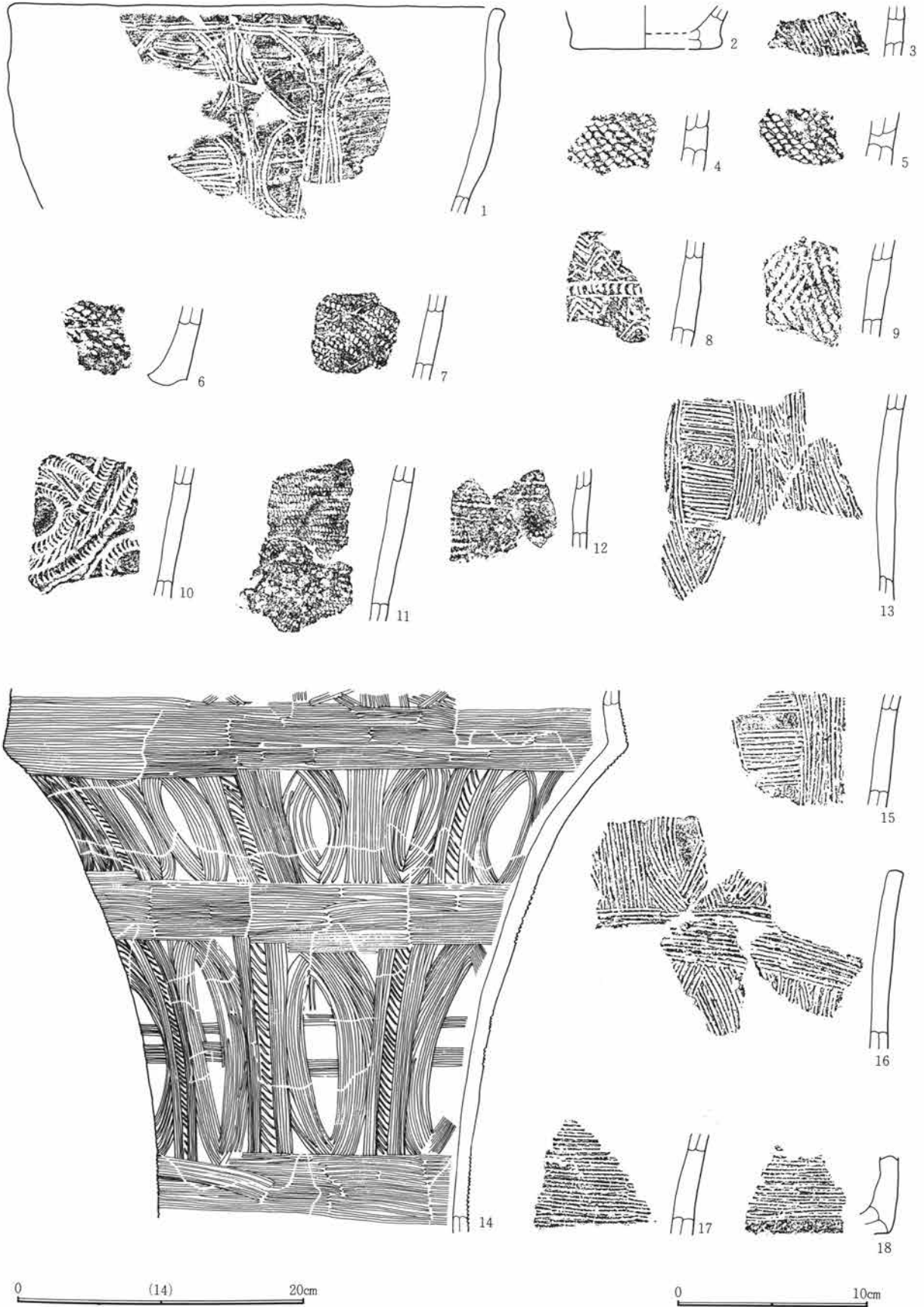
34～37は幅広の平行沈線を横位施文する。やや雑な施文で浅い沈線である。同一個体であろう。37は平縁を呈し薄い器厚である。諸磯b式後半段階。

38～43も浅く雑な施文である。39は口縁部。平行沈線の横位施文を基本とするが、斜位施文も認められる。40・41の施文は極端に浅く、40は横位、41は縦位の平行沈線が僅かに施される。42は底部。浅く集合した沈線が横位に施される。底端部僅かに突出。43の底端部の突出は顕著であり尖る。横位平行沈線

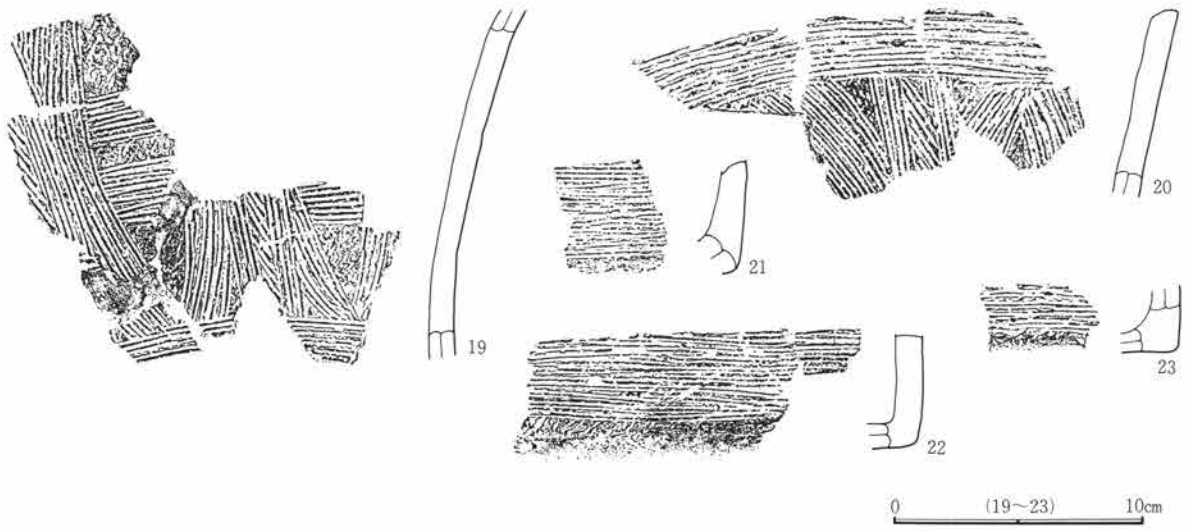


第40図 縄文時代の石器分布図

第4節 検出された遺構と遺物



第41図 グリッド出土土器



第42図 グリッド出土土器



第43図 グリッド出土土器



第44図 グリッド出土土器

は集合化している。諸磯b式終末段階。

44～46は小波状口縁部を持つ。薄手でRL縄文を施すが、原体繊維が硬く、まばらな施文となる。47も同一個体であろう。48は別個体だが、同様な原体施文である。諸磯b式。

49(44図)は平縁で、間隔を持った横位平行沈線が密接に施され、円形の貼付文を付す。地文の縄文は単節LR。諸磯b式後半段階。

50(44図)も貼付文を設ける例。縦位平行沈線で分割した空白部を平行沈線で斜位につなぎ、縦位連続山形文を充填する。諸磯b式後半段階。

51～53は貝殻腹縁文の一群。口唇部に凹凸状の刻みを持たせ、口縁部は斜位の短沈線を連続させる。以下は貝殻腹縁を横位に連続させる。同一個体。興津式であろう。

グリッド出土遺物は縄文時代前期後半の諸磯b式土器がその主体を占める。完形の出土は少なく、生活・生産領域としては確証に乏しく、また、土器の廃棄行為が伴ったとしても、特に積極的な所産とは考えられない。本報告では遺物包含層として位置付け、該期の土器廃棄例の類例の増加を待ちたい。

### (石器)

縄文時代の石器も土器と同様な分布を呈し、おそらく前期後半に比定されるものと思われる。しかし、石器はその遺存度が土器よりも高く、時期を限定する事はできない。よって器種分類による説明を行う。

#### 石鏃 (第45図1～6)

1～5は凹基鏃。丁寧な調整を全面に施している。1・2は等辺の側縁で尖鋭な先端部を持つ。1は基部に厚みを残す。黒色安山岩製。2は薄手である。チャート製。小型の3は薄手である。あるいは欠損品の再利用か。4の側縁は若干内湾する。玉髓製。5の側縁も内湾するが先端部を欠損する。

6は凸基鏃。裏面右側縁の調整は著しく平坦である。また舌部の作出も丁寧。

#### 尖頭器状石器 (第45図7・8)

7は未製品。小型横長剥片を素材とし、側縁先端部に調整が及ぶ。8は大型の黒曜石を素材として、周縁の調整を細かく施す。草創期の所産か。

#### スクレイパー (第45図9～11)

9も尖頭器状石器の未製品か。大型の縦長剥片を素材とし、側縁を丁寧に調整し、剥片端部を先鋭に作出する。礫面を大きく残す。黒色頁岩製。10は横長剥片を素材とし、剥片端部に調整を連続する。11、横長剥片を素材とし、剥片端部と右側縁を鋸歯状に調整する。

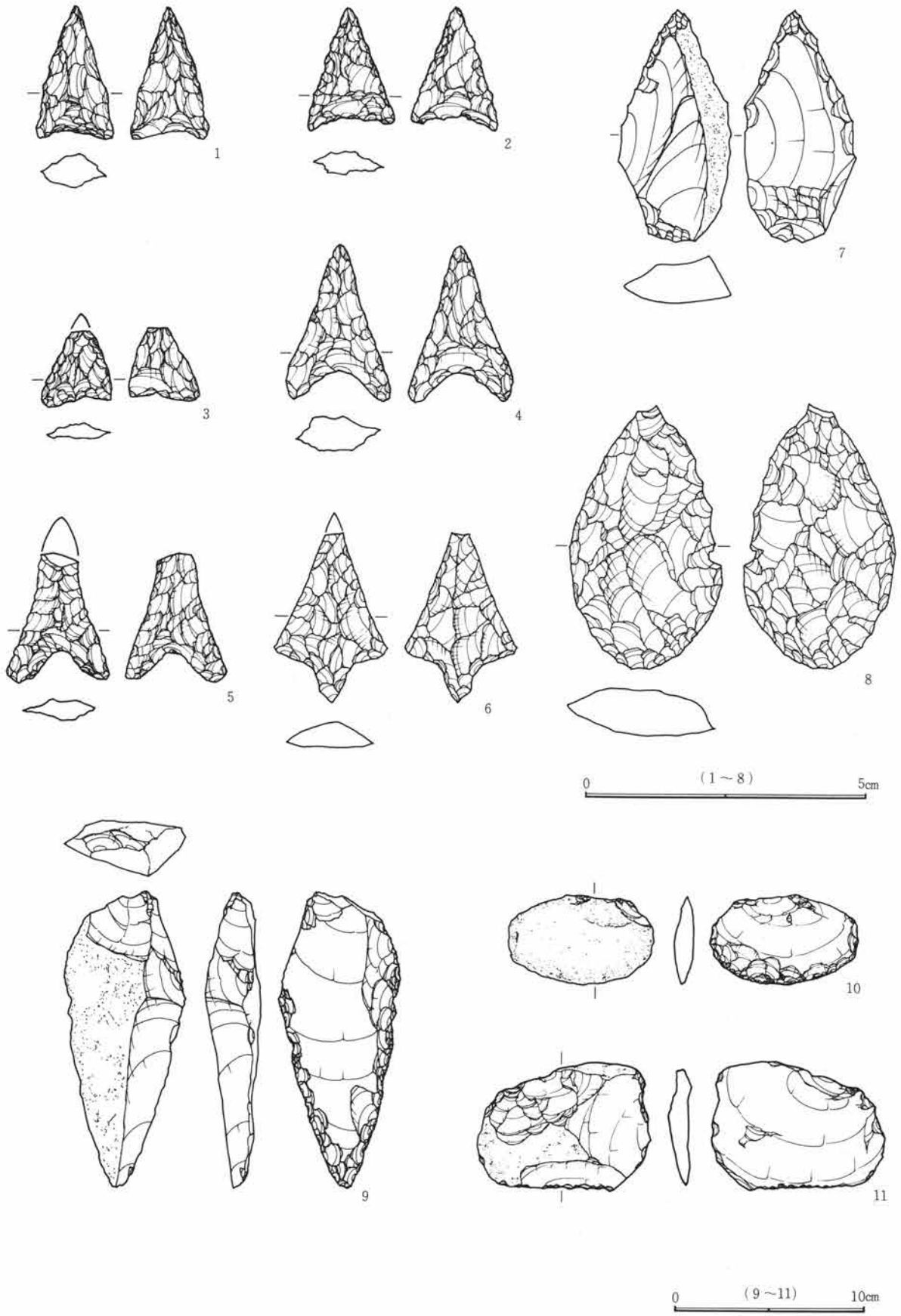
#### 打製石斧 (第46図1～3)

すべて短冊型である。1は剥片端部を両面から加工を施し凸状の刃部を作出する。頭部も剥片形状から比較的薄い。刃部には摩滅痕が認められる。2の側縁は緩やかに湾曲し、刃部左半を欠損する。裏面側縁に摩滅痕が認められる。3は板状の横長剥片を使用する。周縁に加工が及ぶが頭部の節理面は除外される。刃部は裏面の大きな調整により直刃状を呈す。

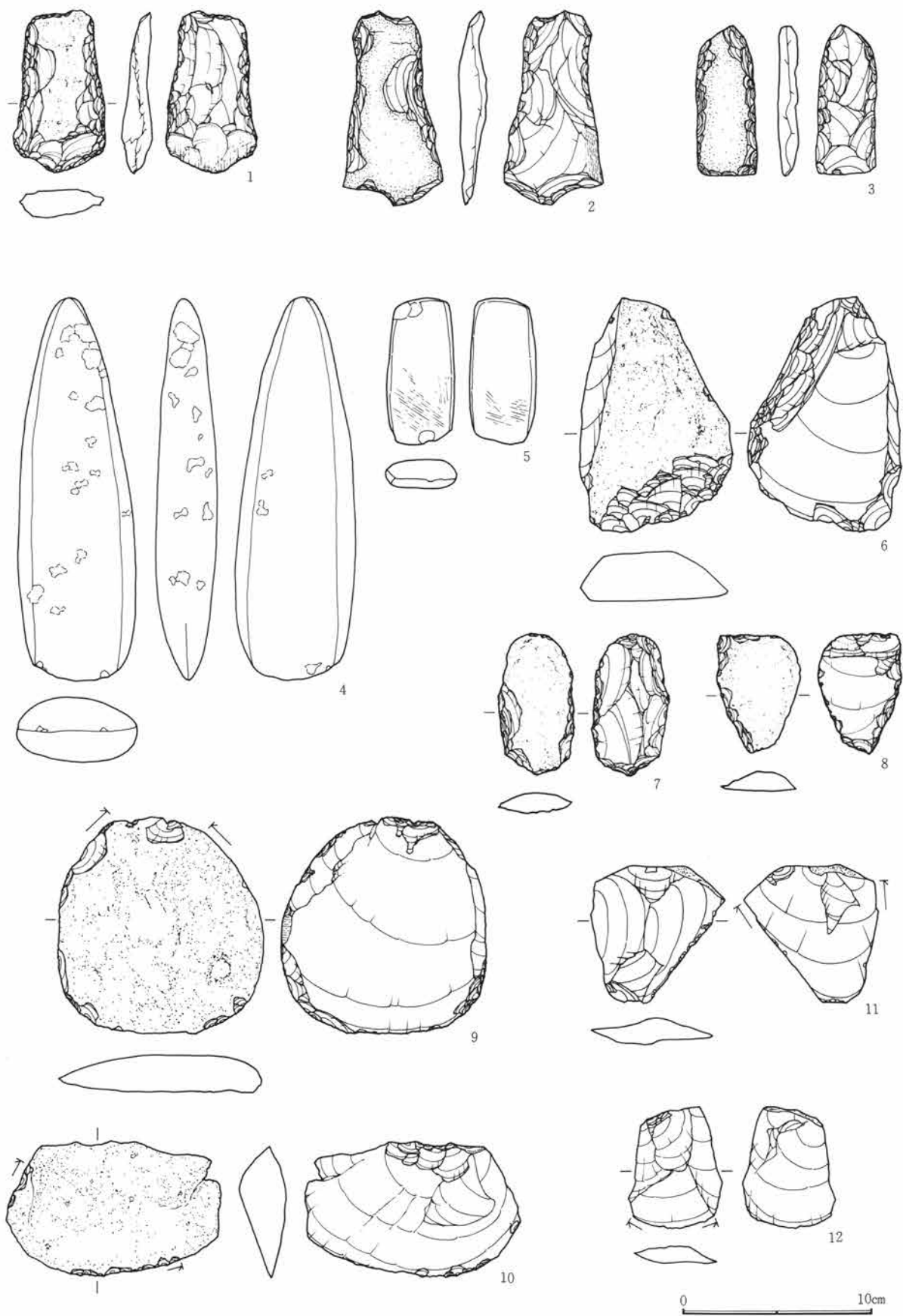
#### 磨製石斧 (第46図4・5)

4は棒状の安山岩質凝灰岩を素材とした完形品で、断面はやや偏平である。刃部に歯こぼれが認められる。5は定角式の磨製石斧。刃部が斜位に設け





第45図 グリッド出土石器



第46図 グリッド出土石器

られ、やや四辺形の形状である。刃部の斜位・横位の線状痕が認められる。

#### 加工痕を持つ剥片石器（第46図6～10）

剥片端部や側縁に加工が施されるが、スクレイパーのように規則性や目的性が認められない不定形石器を一括した。

6、縦長剥片端部に裏面、側縁は表面に比較的な加工が施される。波志江六反田遺跡出土。7は右側縁と剥片端部に加工が施され、楕円形状の形態を整えている。8は縦長剥片を素材とし、側縁の加工により突出する刃部を作出するが顕著ではない。

9、大型の円礫の平坦面を表面とし、周縁の一部に加工を施す。10、大型の横長剥片を素材として、剥片端部表面に僅かに加工が及ぶ。

#### 使用痕を持つ剥片石器（第46図11～第47図6）

素材剥片の側縁や端部に歯こぼれや線状痕が認められる不定形石器を一括した。

11、台形状の横長剥片を素材とする。側縁は薄く、歯こぼれが認められる。12、縦長剥片を素材とし、剥片端部に著しい歯こぼれが認められる。波志江六反田遺跡出土。第47図1は厚手の縦長剥片を素材として、右側縁に微小の歯こぼれが認められる。波志江六反田遺跡出土。2は厚手の横長剥片が素材。剥片端部は直刃状を呈し、右側縁・端部にかけて微小の歯こぼれがある。3、小型で薄手の横長剥片を素材とし、剥片端部に摩滅痕が付けられる。4は厚手の横長剥片。直刃状の剥片端部には歯こぼれが著しい。5は厚手の縦長剥片端部が欠損し、欠損部分と側縁に微小の歯こぼれが認められる。6は横長剥片が素材。歯こぼれは側縁から直刃状の端部に認められるが、側縁に顕著である。

#### 石核（第47図7）

黒色頁岩製で小型の縦長剥片作出後、不定方向から小剥片を剥ぎ取っている。波志江六反田遺跡出土。

#### 磨石類（第47図8～11）

4点を図示したが、すべて粗粒安山岩製で表裏面に微小の擦痕や摩滅痕が認められる。8・10・11は凹み石。8は波志江六反田遺跡出土。9は球形を呈

する。10の側縁も打撃が加わる。

#### 接合資料（第47図・第48図）

波志江天神山遺跡では、6点の接合資料を整理作業によって得た。出土位置は、出土土器と同様に調査区西の2箇所集中部分である。ただし、本地点の遺物取りあげは、全点の記録化を基本としていながらも、作図・レベル値に誤差が生じている。よって、本報告ではグリッド名を付すのみの記録であるが、今回の反省に立ち、縄文時代石器接合資料を蓄積していかなければならないだろう。反省点である。

#### 接合資料3（第47図）

2点の黒色安山岩製の剥片で構成され、大型で不定形な横長剥片を二分割したものである。狭小な礫面を打面としている。

#### 接合資料6（第47図）

小型の硬質砂岩製の小剥片2点からなる。

#### 接合資料1（第48図）

2点の石核と4点の剥片からなる。大型で厚手の縦長剥片二分割後、不定方向から小型の剥片を作出している。硬質砂岩製で、接合資料6と同一母岩であろう。

#### 接合資料2（第48図）

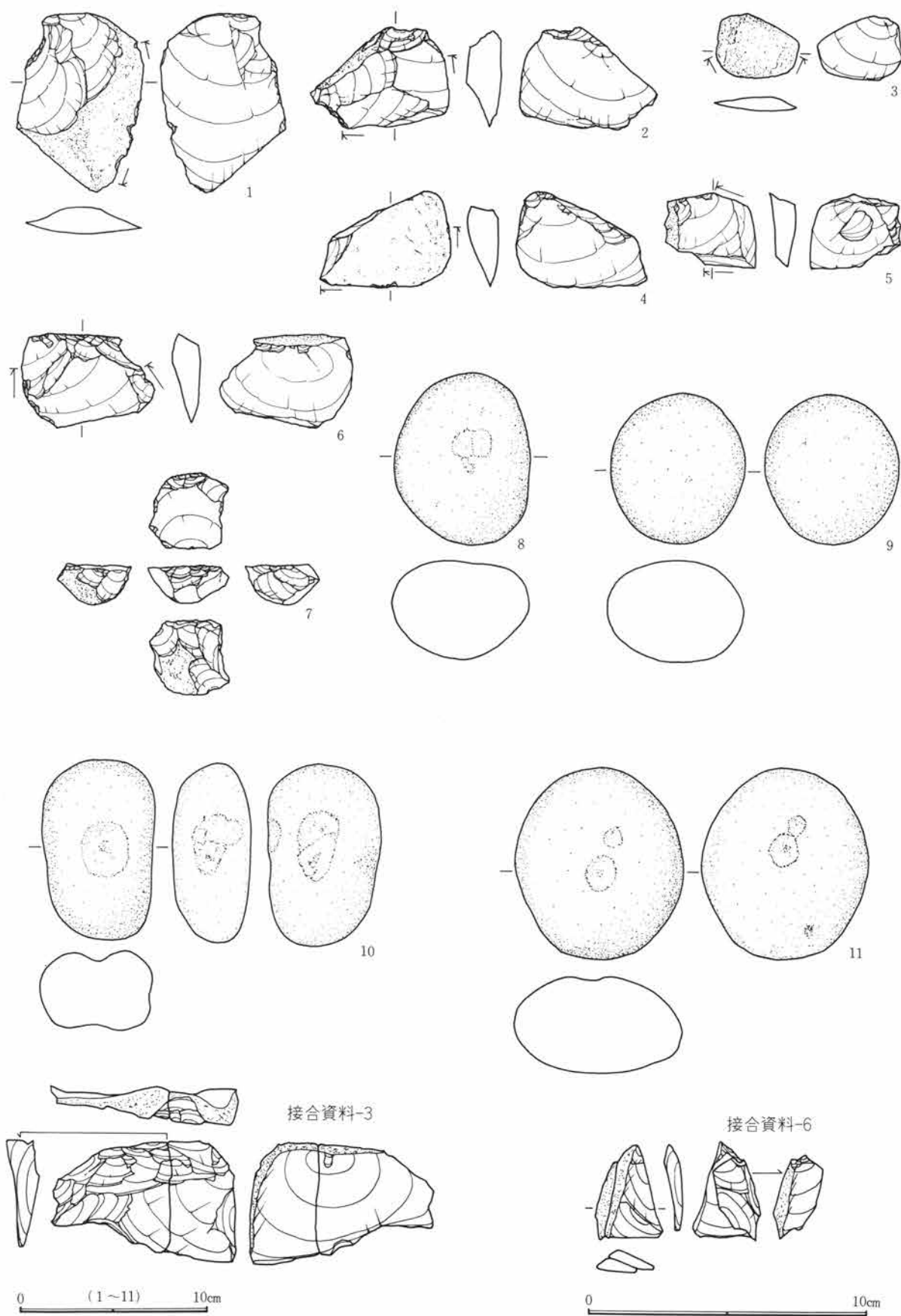
1点の石核と剥片からなる。小型の頁岩製の円礫を素材とし、横長剥片抽出後、剥片端部を作業面として、数回にわたる剥片剥離工程を重ねて刃部を作り出す。

#### 接合資料4（第48図）

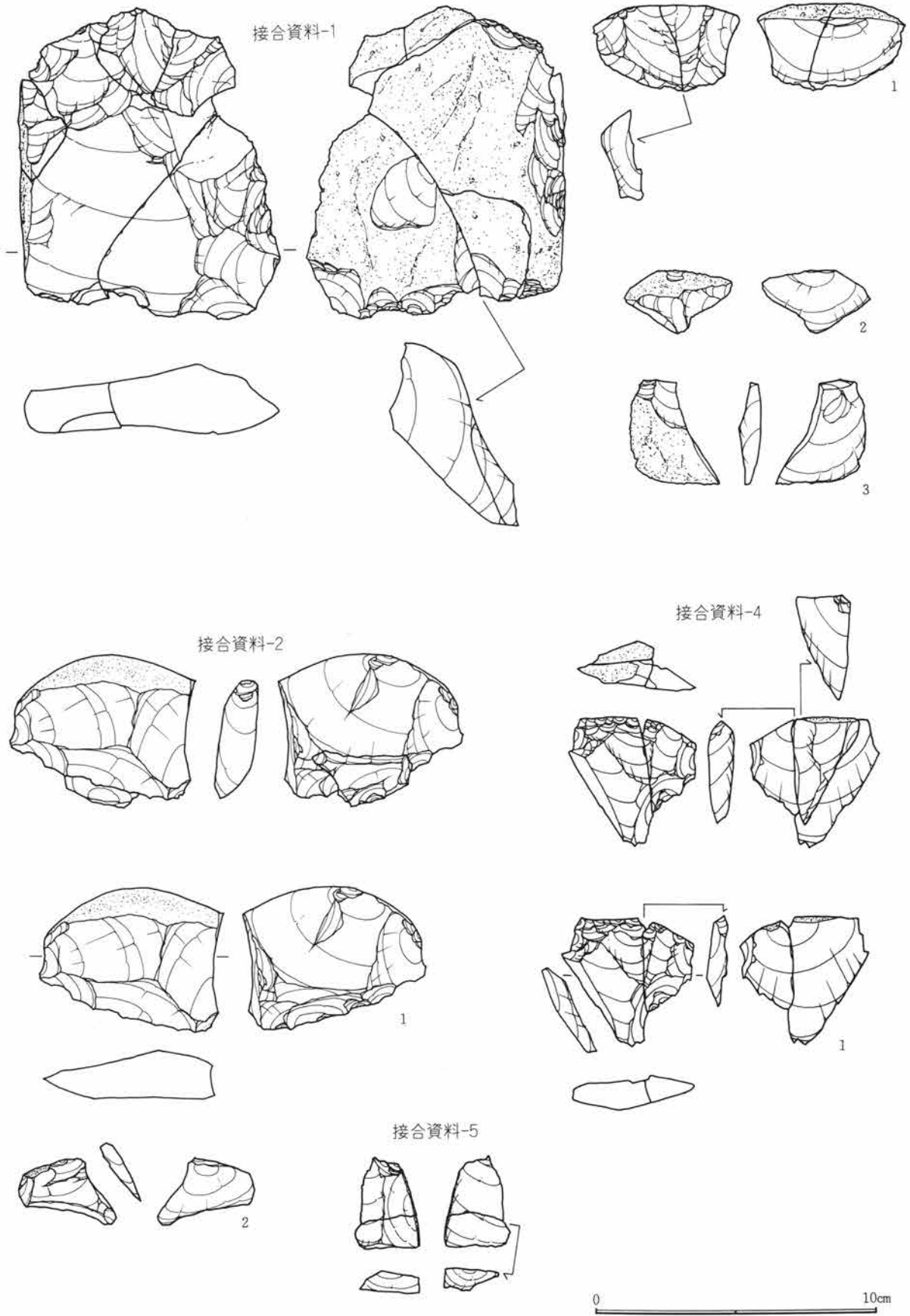
2点の横長剥片を石核とする例。礫面を作業面とし、打面の調整も行う。黒色安山岩製。

#### 接合資料5（第48図）

2点の剥片からなる。小型縦長剥片の横位折断である。黒色安山岩製。



第47図 グリッド出土石器. 接合資料-3・6



第48図 接合資料-1・2他

V章 波志江天神山遺跡

旧石器時代

波志江六反田 器種 (7点)

スクレイパー 2点(28.6%)	使用痕を持つ剥片 2点(28.6%)	剥片 1点(14.3%)	砕片 2点(28.6%)
------------------	--------------------	--------------	--------------

波志江六反田 石材 (7点)

黒曜石 6点(85.7%)	黒色頁岩 1点(14.3%)
---------------	----------------

縄文時代

波志江六反田 器種 (13点)

①	②	③	剥片 8点(61.5%)
---	---	---	--------------

- |            |           |      |          |
|------------|-----------|------|----------|
| ① 加工痕を持つ剥片 | 1点(7.7%)  | ② 磨石 | 1点(7.7%) |
| 使用痕を持つ剥片   | 2点(15.4%) | ③ 石核 | 1点(7.7%) |

波志江六反田 石材 (13点)

黒色頁岩 11点(84.6%)	黒色安山岩 2点(15.4%)
-----------------	-----------------

波志江天神山 器種 (198点)

①	②	③	④	剥片 93点(47%)	砕片 25点(12.6%)	⑤
---	---	---	---	-------------	---------------	---

- |          |           |        |            |
|----------|-----------|--------|------------|
| ① 石 鏃    | 6点(3.0%)  | ② 打製石斧 | 6点(3.0%)   |
| 石 匙      | 1点(0.5%)  | 磨製石斧   | 2点(1.0%)   |
| 尖頭器状石器   | 2点(1.0%)  | ③ 磨石   | 6点(3.0%)   |
| スクレイパー   | 3点(1.5%)  | ④ 石核   | 5点(2.5%)   |
| 加工痕を持つ剥片 | 10点(5.1%) | ⑤ 礫    | 20点(10.1%) |
| 使用痕を持つ剥片 | 19点(9.6%) |        |            |

波志江天神山 石材 (198点)

黒色頁岩 89点(44.9%)	黒色安山岩 38点(19.2%)	粗粒安山岩 27点(13.6%)	①	②
-----------------	------------------	------------------	---	---

- |             |            |                     |            |
|-------------|------------|---------------------|------------|
| ① 黒曜石       | 8点(4.0%)   | ② 緑色凝灰岩・凝灰岩質頁岩・蛇紋岩・ |            |
| チャート        | 6点(3.0%)   | 細粒安山岩・玉 髓           | 各1点(各0.5%) |
| 砂 岩         | 17点(8.6%)  | ③ 石材不明              | 2点(1.0%)   |
| ホルンフェルス・頁 岩 | 各3点(各1.5%) |                     |            |

第49図 器種と石材構成

第4節 検出された遺構と遺物

石 鏃 (6点)

①	②	チャート 3点(50.0%)	③
---	---	----------------	---

- ① 黒色頁岩 1点(16.7%)
- ② 黒色安山岩 1点(16.7%)
- ③ 玉 髓 1点(16.7%)

石 匙 (1点)

黒色頁岩 1点(100%)
---------------

尖頭器状石器 (2点)

黒曜石 1点(50%)	頁 岩 1点(50%)
-------------	-------------

スクレイパー (3点)

黒色頁岩 3点(100%)
---------------

加工痕を持つ剥片 (10点)

黒色頁岩 9点(90%)	①
--------------	---

- ① 黒色安山岩 1点(10%)

使用痕を持つ剥片 (19点)

黒色頁岩 19点(100%)
----------------

打製石斧 (6点)

黒色頁岩 4点(66.7%)	①	②
----------------	---	---

- ① 凝灰岩質頁岩 1点(16.7%)
- ② 細粒安山岩 1点(16.7%)

磨製石斧 (2点)

緑色凝灰岩 1点(50%)	蛇紋岩 1点(50%)
---------------	-------------

磨 石 (6点)

粗粒安山岩 6点(100%)
----------------

石 核 (5点)

黒色安山岩 2点(40%)	砂 岩 2点(40%)	①
---------------	-------------	---

- ① 頁 岩 1点(20%)

剥 片 (93点)

黒色頁岩 48点(51.6%)	黒色安山岩 27点(29%)	②	③	④	⑤
-----------------	----------------	---	---	---	---

- ① チャート 2点( 2.2%)
- ② 砂 岩 10点(10.8%)
- ③ ホルンフェルス 3点( 3.2%)
- ④ 頁 岩 1点( 1.1%)
- ⑤ 石材不明 2点( 2.2%)

碎 片 (25点)

①	黒色安山岩 7点(28%)	②	黒曜石 7点(28%)	③	④
---	---------------	---	-------------	---	---

- ① 黒色頁岩 4点(16%)
- ② 粗粒安山岩 1点( 4%)
- ③ チャート 1点( 4%)
- ④ 砂 岩 5点(20%)

礫 (20点)

粗粒安山岩 20点(100%)
-----------------

第50図 石器と石材構成

第3表 縄文土器観察一覧表(第41~44図)

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調	備考
1	I区6号土坑	①砂粒 ②堅緻 ③淡黄	前期後半
2	I区6坑・W-14Gr	①細砂 ②良好 ③鈍橙	〃
3	I区8号土坑	①粗砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃
4	II区10号土坑	①細砂 ②軟質 ③鈍橙	〃
5	II区G-21Gr	①細砂 ②軟質 ③鈍橙	〃
6	II区G-21Gr	①細砂 ②軟質 ③橙	〃
7	I区X-14Gr	①粗砂粒 ②良好 ③鈍赤褐	〃
8	III区C-2Gr	①粗砂粒 ②良好 ③鈍黄橙	〃
9	I区Y-17Gr	①纖維 ②良好 ③鈍黄橙	前期前半
10	I区U-18Gr	①細砂 ②堅緻 ③鈍黄橙	前期後半
11	I区V-13・W-15Gr	①粗砂 ②軟質 ③鈍橙	〃
12	I区W-14・15Gr	①粗砂 ②軟質 ③鈍橙	〃
13	I区6坑・X-14・W-14Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
14	I区6坑・S-16~18. V・W-14・15.X-14Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
15	I区S-16Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
16	I区S・V-14Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
17	I区S-17Gr	①細砂 ②堅緻 ③鈍黄橙	〃
18	I区S-18Gr	①細砂 ②堅緻 ③鈍橙	〃
19	I区6坑.S-16.W-14 ・19.X-15Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
20	I区X-14・15Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
21	I区S-17Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
22	I区S-18Gr	①細砂 ②堅緻 ③鈍黄橙	〃
23	I区S-18Gr	①細砂 ②堅緻 ③鈍黄橙	〃
24	I区V-13.W-14・15. X-14Gr	①粗砂 ②良好 ③橙	〃
25	I区W-14.X-13・14Gr	①細砂②やや軟質③鈍黄橙	〃
26	I区V-15Gr	①細砂②やや軟質③灰黄褐	〃
27	I区V-14Gr	①細砂 ②やや軟質 ③淡黄	〃
28	I区S-16・17.W-14Gr	①粗砂 ②軟質 ③灰黄	〃
29	I区R-17.S-16.W-14	①細砂 ②軟質 ③鈍黄橙	〃
30	I区V・W-14Gr	①細砂 ②軟質 ③灰黄	〃
31	I区V-18Gr	①細砂②やや軟質③鈍黄橙	〃
32	I区X-17Gr	①細砂②やや軟質③鈍黄橙	〃
33	I区V-18Gr	①細砂 ②良好 ③鈍黄橙	〃
34	I区V・W-14Gr	①細砂 ②軟質 ③鈍黄橙	〃
35	I区S-16.V-14Gr	①細砂②やや軟質③鈍黄橙	〃
36	I区W・X-14Gr	①細砂 ②軟質 ③鈍黄橙	〃
37	I区U-14Gr	①細砂 ②軟質 ③鈍黄橙	〃
38	I区X-14Gr	①細砂 ②軟質 ③鈍黄橙	〃
39	I区Y-14Gr	①細砂 ②堅緻 ③淡黄	〃
40	I区U-14Gr	①砂粒 ②良好 ③淡黄	〃
41	I区W-13.X-15Gr	①粗砂 ②やや軟質 ③淡黄	〃
42	I区S-18.W-14Gr	①砂粒 ②軟質 ③淡黄	〃
43	I区W-14Gr	①砂粒 ②良好 ③鈍黄橙	〃
44	II区E・F-21Gr	①砂粒 ②堅緻 ③灰黄褐	〃
45	II区E・F-21Gr	①砂粒 ②堅緻 ③浅黄橙	〃
46	II区E-21Gr	①砂粒 ②堅緻 ③鈍黄橙	〃
47	II区E・F-21.F-22Gr	①砂粒 ②堅緻 ③灰黄褐	〃
48	II区E・F-21.E-22Gr	①細砂 ②良好 ③鈍橙	〃
49	I区W-14・15Gr	①粗砂 ②堅緻 ③淡黄	〃
50	I区V-18・19.W-19 Y-20Gr	①粗砂 ②堅緻 ③明赤褐	〃
51	I区W-19Gr	①細砂 ②堅緻 ③鈍橙	〃
52	I区V-18Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃
53	I区V-18Gr	①細砂 ②堅緻 ③橙	〃

第4表 縄文時代の単独石器一覧表

挿図番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第45図-1	天II区C-14	石鏃	2.3	1.4	1.19	黒安
	天I区確認面	石鏃	2.2	1.5	0.90	チャート
	天I区W-15	石鏃	1.1	1.0	0.35	チャート
	天I区W-13	石鏃	2.3	1.8	1.45	玉髓
	天I区W-14	石鏃	2.2	1.8	0.85	黒頁
	天II区Q-23	石鏃	3.0	2.0	1.79	チャート
	天I区6土坑	尖頭器	4.0	2.0	6.20	頁岩
	天II区B-18	尖頭器	5.7	2.7	10.23	黒曜石
	天I区Y-15	スレバ-	15.5	6.4	227.30	黒頁
	天II区B-16	スレバ-	7.7	4.8	45.37	黒頁
	天I区W-15	スレバ-	6.7	9.3	82.31	黒頁
第46図-1	天I区Y-17	打斧	8.4	4.9	70.03	黒頁
	天I区S-18	打斧	10.1	5.3	83.82	黒頁
	天I区U-15	打斧	7.8	3.1	47.81	凝頁
	天I区U-5	磨斧	20.1	6.4	601.40	安凝
	天I区V-15	磨斧	7.7	3.8	78.76	蛇紋岩
	六V区E・F-7	加刺	12.2	8.2	314.20	黒頁
	天I区W-12	加刺	7.5	4.2	39.76	黒頁
	天I区6土坑	加刺	6.3	4.4	37.29	黒頁
	天I区W-16	加刺	11.3	10.9	311.20	黒頁
	天I区W-13	加刺	7.1	11.4	189.41	黒頁
	天II区E-20	使刺	7.2	7.2	53.25	黒頁
	六V区5溝埋土	使刺	6.4	5.0	31.50	黒頁
第47図-1	六V区2溝埋土	使刺	9.3	6.7	100.60	黒頁
	天II区10土坑	使刺	5.3	7.4	66.01	黒頁
	天I区W-13	使刺	3.4	4.4	11.69	黒頁
	天I区V-14	使刺	5.1	6.9	56.76	黒頁
	天I区6土坑	使刺	3.7	4.9	29.05	黒頁
	天II区B-14	使刺	4.9	7.1	48.13	黒頁
	六V区G-5	石核	2.0	4.2	35.16	黒頁
	六V区J-8	凹石	9.0	7.2	446.20	粗安
	天I区X-14	磨石	7.9	7.2	411.90	粗安
	天I区8土坑	凹石	9.5	6.0	298.00	粗安
	天I区M-12	凹石	10.0	8.9	556.50	粗安

第5表 縄文時代の接合資料一覧表

資料番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料-3(第47図)						
左	天I区S-16	剝片	4.3	6.5	27.70	黒安
右	天I区S-14					
接合資料-6(第47図)						
左	天I区S-17	剝片	2.8	1.7	1.10	砂岩
右	天I区S-17					
接合資料-1(第48図)						
左下	天I区X-14	石核	9.9	7.0	198.03	砂岩
右下	天I区S-16					
1-左	天I区S-17	剝片	3.0	5.2	21.86	砂岩
右	天I区X-14					
2	天I区S-18	剝片	2.2	3.7	3.54	砂岩
3	天I区Y-14					
接合資料-2(第48図)						
1	天I区W-14	石核	6.4	5.1	68.97	頁岩
2	天I区W-14					
接合資料-4(第48図)						
1-左	天I区S-16	石核	4.5	3.0	13.47	黒安
右	天I区S-16					
裏	天I区X-15	石核	3.7	1.9	6.98	黒安
接合資料-5(第48図)						
上	天I区W-15	剝片	3.1	2.3	7.15	黒安
下	天I区W-16					



## Ⅵ章 考 察

### 1 出土資料よりみた石器の製作構造

#### ——書上本山遺跡の事例——

石器群は広く平坦な台地の西側に出土した。概して分布は台地内部にも及んでおり、ここでも縁辺部分に限定されない石器分布の在り方を示していた。本文で指摘の通り、石器の分布は調査区の北へ広がる可能性も否定できないのであり石器分布の全容も不明で、資料的な制約も著しい。既に述べた通り、石器群はⅥ層～Ⅷ層の3層に互り（概ねⅦ層をピークに）出土しており、出土状況に大きな差は見られない。一方、各々の石器分布には濃淡の差が見られ、地点間に互る接合資料や同一母岩の存在が確認できないなど、整理作業からえたデータは石器群の同時性を直接証明しているわけではない。ここでは数量的にも充実している2ヶ所の石器集中地点（1号・2号ブロック）を主に取り上げ、石器組成や石材構成、剥片剥離の在り方を整理し、若干の所見を述べていきたい。

#### 母岩的認識と剥離の作業段階

既に述べた通り、石器群は地点間を跨ぐ接合資料も見られないのであり、また、母岩の分類も難しいため、石器群の同時性は<sup>註1</sup> 確実とはいえない状況を呈していた。石器の製作構造を知る上でも作業段階の相違は母岩単位に認識されねばならないのであり、ここでは同一母岩を意識して出土資料を一連の作業段階に位置づけ、石器製作構造の一端を記していきたい。

1号ブロック 黒色安山岩は剥片・碎片に限られ、剥離作業の痕跡を明瞭に示している。母岩は2個体以上が想定可能と思える。同様に、黒色頁岩・珪質頁岩も剥片・碎片に限られ、剥離作業の痕跡を明瞭に遺している。共に、2個体以上の母岩が想定され

よう。なお、珪質頁岩は全体に白味が強く、第15図3や第16図4の珪質頁岩（女川層に産する可能性が強い）とは大きく異なる。以上の石材は、一部二次加工に伴う碎片を含む可能性も否定できない反面、大部分は剥離作業に伴う不要剥片が主体を占める、と判断されよう。頁岩や粗粒安山岩を除き、その他の石材は破碎状態で出土しており、バルブも不明瞭であり、確実に人為的な所産か概して判断は難しい。2号ブロック 黒色安山岩は最も使用頻度が高く、接合資料の数も多い。接合資料には分割状態に戻る例（接合資料—1）や、分割以後の剥離の初期状態を示す例（接合資料—3）、また、剥離の痕跡が殆ど見られない資料（接合資料—2）も見られ、斑晶の大小や多少、縞状構造の在り方からみて接合資料—1・2・3は母岩を異に剥離が展開した可能性が強い。残る他の接合資料は折断資料や二次加工を示す例（接合資料—4・8・17）を除き剥離作業に伴い生じる剥片の接合資料が主体を占める。母岩分類は困難だが、出土資料には同様な特徴を持つ資料は見られないことから、より大形の剥片（接合資料—17）は搬入資料と判断されよう。なお、接合資料—4・8～10、接合資料—11～13は同一の母岩に分類可能と思える。黒色頁岩には部分的な剥離作業を示す剥片や碎片も出土しているわけだが、剥離実態は明瞭ではない。このほかには鉄石英に似た赤色珪質岩が出土している。碎片の単独出土でもあり、実態は明瞭ではない。その他の石材の一部には打痕の明瞭な資料も見られ、敲石の存在を暗示している。が、大部分は小円礫や破碎礫であり、人為的遺物とは思われない。

一方、側縁加工を施すナイフや石刃は黒色頁岩や珪質頁岩に限られ、母岩も大きく異なる。遺跡には剥離痕跡が全く見られないことから搬入石器と判断され、ここでも珪質頁岩は完成状態の石刃、及び、二次的に他器種に転用する状況を示していた。

## 剥片剥離

石器群を支えた剥片剥離技術は、約20の接合資料からある程度の様相が窺える。特に、接合資料—1～3は資料的にも充実しており、剥離構造を良く示している。剥離状況に関する記述は本文中に譲り、ここでは概括的に剥離の特徴を述べていきたい。

接合資料は各例とも作業段階が異なり、接合資料—1は原石の分割以後から剥離作業の最終段階まで、接合資料—2・3は剥離の初期段階、或は剥離途上の段階を示していた。各例とも原石を分割してから剥片剥離を行い、打面転移を伴い剥離が進む点で一致する。が、剥離状態からみて接合資料は「一般的剥離」に従う接合資料—1・3と「磯山技法」に従う接合資料—2に二分して理解されよう。「一般的剥離」に従う剥離にも同一打面から連続的剥離を行う状態も見られ、この中には石刃に近い例（第20図9・10）も見られないわけではない。が、剥片形状は一定せず、概して多様性に富む剥片が生じている。また、より大形の剥片を石核に用い小形剥片を剥離する点も特徴的で、このほかにも2例（接合資料—5・7、第27図）ほど類例を確認している。先に述べた通り、出土資料から想定可能な剥片剥離構造は「一般的剥離」に従う剥離と、「磯山技法」に従う剥離からなる。仮に、「磯山技法」と見る想定が正しいなら、遺跡の所在する赤城南麓にはこれまで同種石核の出土は見られないのであり、石器の製作構造理解とは別に集団の移動形態の解明（田村1990）に係わる重要な鍵を握る、と期待されよう。氏は原産地周辺部と消費地の分析を通じ、原産地に於ける石刃の限定的生産と河川移動を伴う周期的接近、即ち、石材採集を狩猟採集戦略に取り込む水系単位の集団移動形態を想定した。「後田段階」と同時期の石器群の分析よりえた仮説だが、同段階に近い本遺跡に「磯山技法」に従う剥離の存在を示す石核の検出意義は極めて大きい。先の仮説に従えば、遺跡が位置する赤城南麓は日常生活を営む消費遺跡が卓越する地域と言える。実際この地域には石刃を量産する遺跡は見られない。出土資料も決して良好

とはいえないものだが、接合資料—3は「磯山技法」に従う剥離を示す可能性が強く、想像を逞しくして言えば、地域単位で必要に応じ石刃を生産する状態も全く否定できないのである。この段階の石刃生産は極めて限定的である点は疑い得ない。が、その実態は極めて不明瞭であり、現状は未だ資料不足の感も否定できないのであり、今後とも同種石核の存在には注意すべきである。

これまで述べた通り、石器群に主体的な剥離は、「一般的剥離」に従う例である。この中には、より大形の剥片を石核に用い剥片剥離を行う例が何例か含まれ、多様な剥離実態を理解する上で良好な資料を提供している。既に、この種の小形剥片剥離に関する分析（佐藤1987、田村1989、新田1991）も二三ある。そこでは両極技法に従う小形剥片の剥離や、板状剥片・大形石刃よりえる小形剥片の存在が注意され、小形剥片と作出石器の関係を論じている。出土資料に関して言えば、一部の資料（第27図、接合資料—5・7）に小形・縦長剥片を取る傾向が指摘され、先の分析の指摘にもある組み合わせ石器と見る考え方も成り立つ可能性を否定できない。が、今回報告する資料の剥離状態は大形剥片の打面側に作業面を持つ例が4例と主体を占め、側縁側に作業面を持つ例は僅か1例（第22図、接合資料—1・30の剥片）と少ないこと、また、県内遺跡には表裏両面で交互剥離する例も多く、側縁部を作業面に連続剥離する例は見られないのであり、剥離作業は剥片形状に応じ展開するものであり、組織的な剥離にはほど遠い。出土資料も概して打面は鈍角で小形横長剥片を剥離する傾向が強い。概ね、剥片の断面形状は楔状を呈しており、両極技法より生じる剥片の形状とは大きく異なるのであり、同一視は難しい。現状ではこの種の小形剥片と作出石器の関係は明確ではなく、積極的に大形剥片より小形縦長剥片の剥離を行う状態は想定できない。

なお、指摘にもある通り、下総台地では搬入石材（珪質頁岩、女川層に産する可能性が強い）を用い小形の縦長剥片を剥離するようだが、県内資料の一

部（勝保沢中ノ山A地点の資料）にもより大形の剥片（珪質頁岩）から石器の製作を試みる状態が看取され、ある意味では技術的な類似点が窺える。勝保沢中ノ山の例を除けば、資料的に類例は乏しく、決して明瞭とはいえないわけだが、同一母岩と見た2点（報文の第13図8、第16図29）の資料は恐らく接合関係を有すること、うち1点には両極剥離が著しいことから多分に大形の剥片を両極剥離している状態が想定されよう。下総の例も本県の例も女川層に産する可能性の強い珪質頁岩が完成状態で遺跡に持ち込まれ、二次的に他の石器素材に用いる点では似た様相を呈する一方、現状で県内の出土資料を見た限り下総の小形剥片を取る例は見られない。これまで、小形縦長の剥片の検討は全く分析の視野から外

れ、更には両極打法に従い小形剥片を剥離する視点も欠いており、そのため既出の資料の中にも類例が存在する可能性も全く否定できない。今後は意識して類例の抽出に努め、改めて検討を加えるべき重要な資料と位置づけられよう。

以上、出土資料からみた石器製作構造の概要を述べた。出土資料が示す通り、剥片剥離は一般的剥離に従い、石刃など主要石器は搬入する、構造的特徴を呈す。石器群は概ね「二項的」概念の下に理解が可能だが、一部資料には石刃製作を示す例が含まれ、日常生活を営む消費遺跡に於ける石刃製作の在り方を示唆するものでもあり、集団の移動形態や石材の入手形態を問う意味でも重要な資料と思える。

（岩崎）

- 註1. 出土資料を見る限り、石器の集中部・2ヶ所は極めて対象的な在り方を示している。豊富な接合資料が示す通り、一方は剥離状態を留め、一方は接合資料も乏しく、部分的な剥離を示す可能性が高い。後者の集中地点には碎片の占める比率が高く、二次加工に比重を置く、場の機能の差とも思えるのであり、両者が補完的に機能していた可能性も全く否定できない。が、両地点には形態の異なるナイフや、女川層に産する可能性の強い珪質頁岩の偏在性が見られ、石刃は搬入状態で組成するなど、器種組成の面では各々の集中地点は独立的色彩が濃い。また、出土資料も形状からみて剥離作業に伴い生じる剥片と考えた方が妥当と思われ、石器群の同時性に関する所見には否定的な点も多い。
- 註2. 勝保沢中ノ山遺跡A地点には石刃作出を行う例と、横長剥片の作出を行う例の接合例（報告書の第45図、接合資料A—2）がある。遺跡は消費遺跡の性格を有するのであり、石刃の作出は原産地周辺部の遺跡に限らず、必要に応じ作出する可能性が高い。
- 註3. より大形の剥片を用いる小形剥片の作出は、両極打法に従う点で両極剥離を駆使する楔形石器の製作に結び付く（新田1991）。指摘の通り、両者は作出剥片の形状や剥離手法に類似性が著しい。大形剥片は搬入資料と見られ、楔形石器は在地石材を利用することから、石材事情に基づく技術的適応の差を示す可能性は否定できない。が、指摘にもある通り、搬入石材（珪質頁岩）は「究極まで消費」する在り方が事実なら、石材の贈与・交換など、見方を変えた場合は別の解釈も成り立つ可能性は残る。

佐藤良二 「備前瀬戸型石刃技法についての覚書」『花園史学』8号 1987

田村 隆 「野見塚遺跡の先土器時代」『北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』千葉県文化財センター 1990

新田浩三 「佐原市出口遺跡第1文化層出土の楔形石器について」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』千葉県文化財センター 1991

「勝保沢中ノ山遺跡Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989

「堀下八幡遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990

## 2 諸磯b式土器終末期の一側面

——波志江天神山遺跡出土土器から——

波志江天神山遺跡では前期後半の諸磯b式土器が包含層中より出土している。本遺跡の北側には、諸磯c式や興津式を出土した下触牛伏遺跡が位置し、また、同一事業で調査された堀下八幡遺跡でもb式後半段階の住居跡が検出されている。さらに、該期

の住居跡を7軒検出した荒砥二之堰遺跡も西約0.8kmに近接する。このように周辺には該期の土器群を出土した遺跡は多い。

本遺跡自体は、該期の所産とされる住居跡や土坑などの遺構を検出しておらず、いわゆる一括資料としての厳密性は薄れる。ゆえに本遺跡が提示する諸磯式土器は、あくまでも個々の土器本来の属性を抽出する資料にとどまり、編年作業や集落構造を解明するような資料ではない。つまり周辺地域における諸磯b式土器の充実を物語る資料なのである。

## ◁周辺遺跡の該期土器様相▷

ここで、周辺遺跡の諸磯b式やc式土器を概観し本遺跡出土土器との類似点や相違点を見いだしてみたい。

堀下八幡遺跡：1図1は5住出土の深鉢である。b式終末期に比定されよう。「く」字状に内折した口縁部や波頂部下の入組み渦巻文、頸部以下の横位平行沈線は多段に設けられb式の伝統を保持した文様といえよう。

荒砥二之堰遺跡：2は前述の1と同様に内折した口縁部で横位平行沈線が施されているが、1に見られた波頂下の渦巻文が消失している。体部の横位平行沈線は多段である。一方3は波状口縁が発達し、波頂下の文様はモチーフとして独立しており、b式には珍しい文様構成といえよう。また、体部上半の屈曲した器形も特徴として捉えたい。体部は同様に多段構成。4は小形の台付形土器で、脚部には透孔か脚台があったとされる。体部下半に強い屈曲部を持ち、上半の横位平行沈線で明瞭に分帯された体部文様帯内には横位矢羽根状文と入組状渦巻文が施される。幅広の文様帯であり、1～3の横位平行沈線多段構成とは文様構成の意味がちがうものであろう。なお体部下半の縄文は菱形状の構成をする。5は体部中位に緩やかな膨らみを持ち、平行沈線が多段に施され、下半に入組状渦巻文が施される。

下触牛伏遺跡：6は諸磯c式古段階に比定される。口唇部には凹凸を持たせ貼付文を付加する。L

R縄文を器面全面に施し、内面には貝殻条痕が見られる。7も諸磯c式とされているが、体部下半の横位平行沈線が特徴的である。沈線もまばらな施文であり、c式の施文方法とは若干異質な感が見受けられる。8は興津式。横位方向の波状貝殻文で構成され、体部上半から中位に沈線による区画文が設けられる。

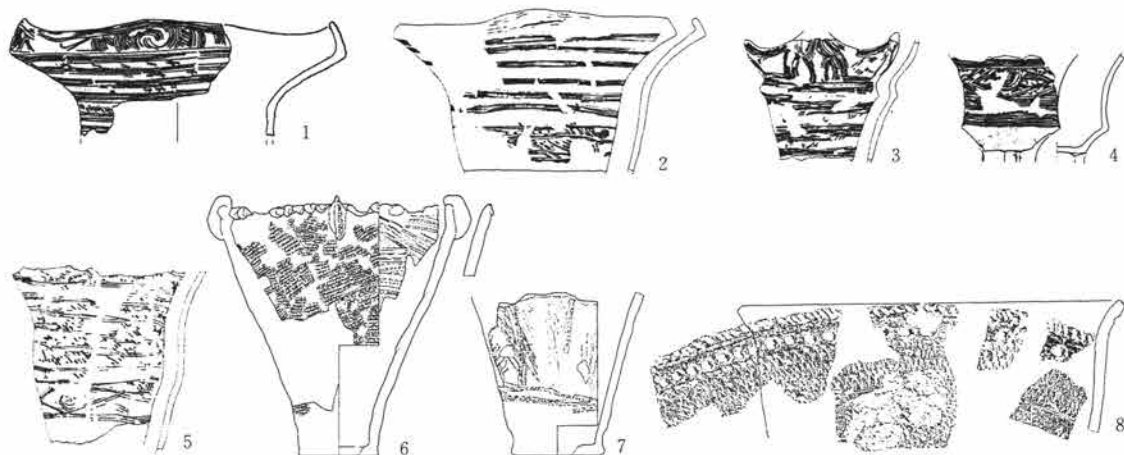
このように、周辺遺跡の諸磯b式～c式土器の中でも、堀下八幡遺跡や荒砥二之堰遺跡出土土器は体部文様の多段構成が目立ち、諸磯b式の伝統的文様構成方法が踏襲されているといえよう。さらに、下触牛伏遺跡のc式の文様構成や興津式は特異な存在であり、今後資料増加に伴い明確な土器様相を提示しなければならないだろう。

## ◁波志江天神山遺跡の諸磯b式の文様構成▷

波志江天神山遺跡出土の前期土器は包含層出土とはいえ時間的な位置は諸磯b式期におさまり、同時期とは捉え難いものの一定の時間幅が想起される。特に、諸磯b式終末段階の様相として、平行沈線を施した土器群の一側面を現しているといえよう。

ここで出土土器の内、良好な文様構成を呈する2個体に注目したい。V章第41図14・42図24(P181・182)に示した2個体とも平行沈線を主な文様要素とし、平行沈線の扱われ方は各々特徴的である。

14は幅広の文様帯を二段に設け、24に比して整然とした区画単位を連続する。区画単位は縦位楕円状



1図 周辺遺跡の該期土器群

の単位であり、空白部に平行沈線を充填する。

周辺遺跡ではこの14の類例は見られない。頸部にかけての屈曲や体部文様帯の多段構成など、b式には見られない手法である。ただ、対弧状のモチーフなどはc式に多く設けられるモチーフとして捉えられており、近年の研究ではc式直前段階には確実に体部に設けられるモチーフであることが知られている。さらにc式の体部文様構成は、この対弧状モチーフを大きく取り、懸垂構成に設ける手法を特徴としているが、14のモチーフは縦位に設けられていながら、横位集合平行沈線で明確に分帯されており、c式の文様構成とは根本的な差が認められる。先にも述べたように平行沈線による横位分帯手法はb式期に定着する構成方法である。例えば周辺遺跡では、1図5に見られるように、一定の間隔をもった平行沈線が施され、入組状渦巻文を空白部に充てる構成である。

もちろん、この手法はb式終末期に受け継がれるのだがc式化へ至り、平行沈線は集合沈線化する変遷が指摘されている。しかし、平行沈線→横位集合沈線という変化は、14に見られるような幅広の文様帯を多段に設ける横位分帯手法には直接的には関与しないものと考えられる。1図4で触れたように、幅広の文様帯を設ける手法は幅狭の文様帯との持つ意味が違うようである。

つまり、c式直前段階の横位平行集合沈線はb式の横位分帯手法とは一線を画すべき手法として、14の多段文様帯手法をとらえておくべきであろう。

24は緩やかな波状口縁を呈し、波頂部は内面に湾曲する双突起を付す（片側は復元）。体部中位で平行する集合沈線によって文様帯が区分され、屈曲部を経て口縁部に至るまで、横方向の集合沈線を基調とした文様帯で構成される。双突起下はおそらく変形菱形の小モチーフが描かれるのであろう。また、体部上半には幅広の文様帯が設けられ、山形の区画が連続するが、半楕円状の区画も認められ（展開図参照）整然とした規則性を持たない。

さて、24の文様構成と1図1～3の類例と比較す

ると、まず、波状口縁は積極的に設けられる要素として位置付けられよう。次に、波頂下の文様に各種のバリエーションが見受けられるが、b式においては、1図1に見られる入組状渦巻文が比較的多く用いられる文様要素である。この文様要素は1図2のように省略されて消失化する例や、3のように別種のモチーフを充てる例もあり、この波頂下の文様の変化も重要な観察項目である。

ここで、いわゆるI b文様帯の消失として1図2を解釈すると、24はI b文様帯の消失直前の様相として捉えられよう。これは横位平行沈線の集合化により、それまで伝統的に施文されていた波頂下の文様が狭小な施文域に施すことが不可能になり、徐々に省略が意図されていったものと思われる。

さらに24の体部上半の文様帯内を注目すると、明確な縦位分割線もなく、あくまでも横方向の文様構成を意図している。全体のバランスから、幅広に設けられており、文様構成上からも強調された横方向の意識がこの文様帯に集約されているのであろう。体部下半の地文縄文との区分が明確になされている点からも、体部上半から口縁部にかけての横位平行沈線文からも、この土器の横方向への強い傾斜が顕在化したものとされよう。

これは、諸磯b式における横位文様構成の伝統が変質した結果と考えられよう。すなわち、口縁部文様帯においては、それまでの波頂下の文様が省略・消失していく行程、言うなれば伝統性の却下とも言える現象が見られるのだが、体部文様においては横方向の施文伝統を保持しつつ、新たに幅広の文様帯を設け、文様帯内の組成変化への受容を可能なように処理しているのである。

以上のように、波志江天神山遺跡の諸磯b式終末期の土器文様構成方法を考えると、14は対弧状のモチーフをあてながらc式の懸垂構成ではなく、多段の横位文様構成を設ける手法をもって、b～c式の画期における様相として位置付けられよう。

24はb式の横方向への流れを重視する伝統性を保持しつつも、口縁部文様帯などにはモチーフの省

略といったc式への移行期の様相が見られる。

要約すると、14・24は共伴資料ではないのだが、b式～c式への変化の過程において、横位施文方向というb式の文様構成伝統にc式の変容要素を加える母胎を持った、非常に近接した段階の資料と言えよう。おそらく、このような変容過程の一端がc式への変化を生み出したものと考えられよう。

#### 〈まとめ〉

近年の前期資料の増加は著しく、特に県内では県北域の糸井宮前遺跡で該期土器群が豊富な出土を見せている。その内容は、b式～c式への変遷を捉える上で重要な資料を提示しており、近年の該期土器研究の中核をなしているともいえよう。また糸井宮前遺跡の他、勝保沢中ノ山遺跡などで報告が相次い

でおりc式への変遷過程が徐々に判明してきている。このような山麓地域との比較研究のためには、本遺跡をはじめとする平野部の該期土器群の分析を充実しなければならない。

これまでの諸磯式土器研究は、諸磯式土器内での文様の変化が大きな論点となり、系譜と変遷が主に語られて来たが、近年は、異系統土器群との受容要素により、その変容過程にそれぞれの特色が求められてきている。その意味で本地域は、群馬県内でも山麓部の糸井宮前遺跡よりも、浮島式や興津式などとの関連が深く考えられ、交差編年を試みる上で無視し得ない地域である。今後は、このような外縁地域の土器様相を加味して、この地域の諸磯式土器の本質と実層を明確にしなければならないだろう。

(山口)

#### 参考文献

- 1 堀下八幡遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 2 荒砥二之堰遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 3 下触牛伏遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 4 糸井宮前遺跡Ⅱ 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 5 勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 6 今村啓爾 1981 「施文順序からみた諸磯式土器の変遷」『考古学研究』第27巻第4号
- 7 今村啓爾 1982 「諸磯式土器」『縄文文化の研究』3
- 8 鈴木徳雄 1979 「4 縄文土器について」『白石城』埼玉県遺跡調査会報告第36集
- 9 鈴木徳雄 1987 「諸磯式土器研究の問題点」『縄文前期の諸問題』第1回縄文セミナー資料
- 10 鈴木敏明 1988 「諸磯b式からc式への土器変遷」『埼玉県博物館紀要』15
- 11 鈴木敏明 1992 「土器群の変容—例えば諸磯b式浮線文の場合」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 12 細田 勝 1992 「諸磯c式土器研究への一視点」『埼玉考古』第29号 埼玉考古学会
- 13 関根慎二・谷藤保彦 1985・1986 「群馬県における浮島式・興津式土器の研究(前・後)」『研究紀要』2・3 群馬県埋蔵文化財調査事業団

#### 〈謝 辞〉

本報告書に扱った三つの遺跡が提示する資料は、おそらく「個」に集約されてしまう規模であり、今、埋蔵文化財に求められている「群」としての歴史像の提示は到底無縁のものかもしれない。

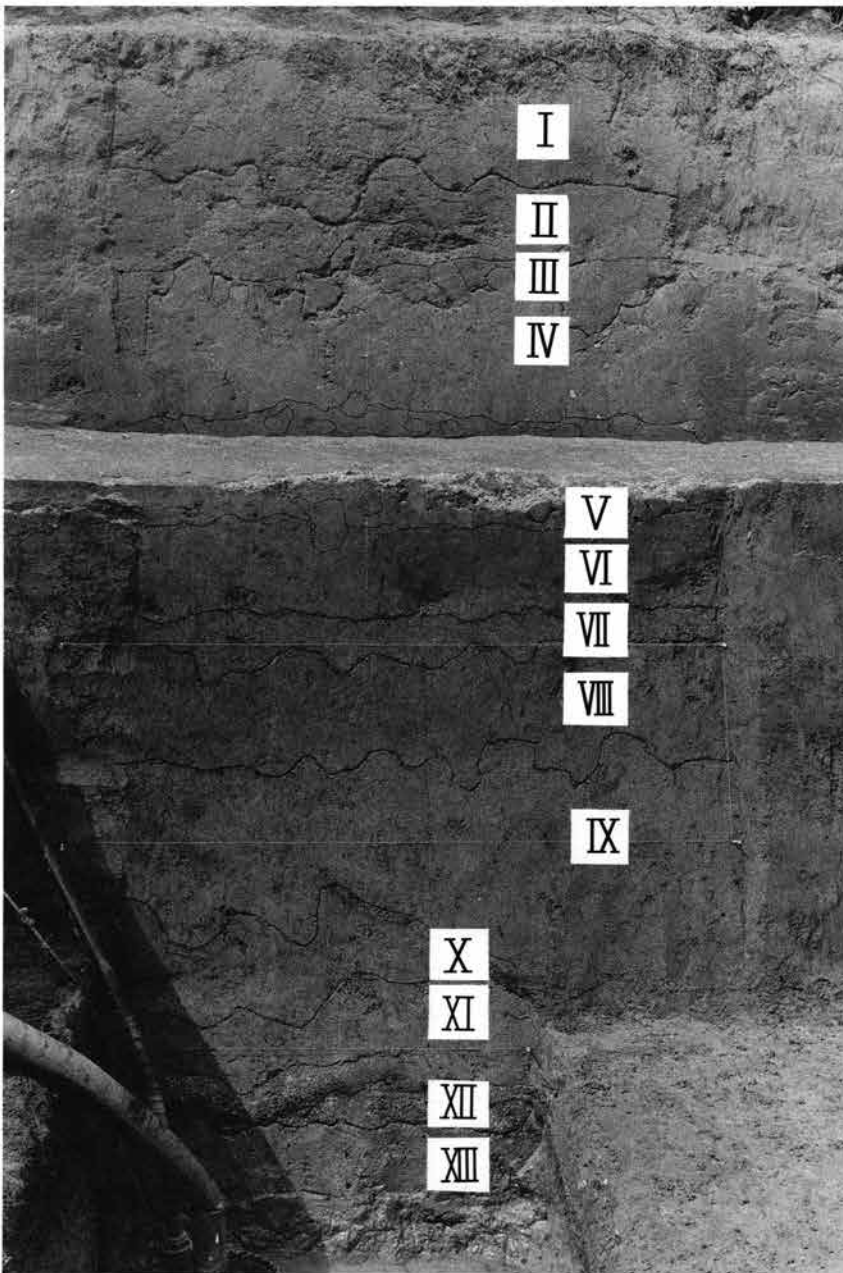
しかしながら、我々の責務はあらゆる出土遺物に公平な視点を当て、あらゆる可能性を示唆するデータを提供しなければならないのである。故に「個」に帰依した、資料提示をあくまでも継続するべきであり、いうなれば、「個」に光を当て「個」の暗影を集めることによって、「群」とし、歴史像を語る方法を模索しなければならない。

しかし力及ばず、VI章の考察では書上本山遺跡の旧石器資料と波志江天神山遺跡の縄文土器だけを取り上げる結果となった。反省を含めて、残された項目に関しては、今後、本報告書を読まれた方のご助言とご協力を得て取り組んでいきたい。

最後に、本報告書を作成するにあたり、整理嘱託員・整理補助員の皆様には遺物(個)を大事にする姿勢を再認識させられた。1片の土器片や石器剥片から多くのものを学ぶことが可能なのである。彼らの真摯な姿勢がある限り、報告書の中に歴史像(群)が反映されるものと確信し、謝辞としたい。

# 写真図版

## 書上本山遺跡



基本土層



遺跡の遠景





1. 1号ブロック石器出土状態(1)



2. 1号ブロック石器出土状態(2)



3. 1号ブロック石器出土状態(3)



4. 1号ブロック石器出土状態(4)



5. 1号ブロック石器出土状態(5)



1. 2号ブロック石器出土状態(1)



2. 2号ブロック石器出土状態(2)



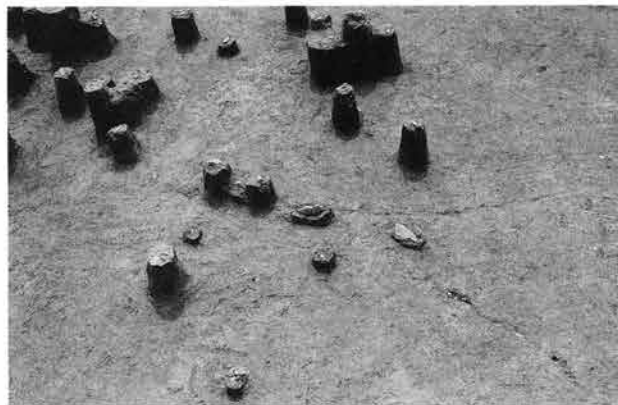
1. 2号ブロック石器出土状態(3)



2. 2号ブロック石器出土状態(4)



3. 2号ブロック石器出土状態(5)



4. 2号ブロック石器出土状態(6)



5. 2号ブロック石器出土状態(7)



1. V区遠景



2. 旧石器調査風景



1. 1号住居跡全景



2. 1号住居跡遺物出土状態



3. 1号住居跡カマド



4. 1号住居跡カマド・貯蔵穴



5. 1号住居跡柱穴



1. 2号住居跡全景



2. 2号住居跡掘り方



3. 2号住居跡カマド



4. 2号住居跡カマドセクション



5. 2号住居跡カマド掘り方



1. 3号住居跡全景



2. 3号住居跡遺物出土状態



3. 3号住居跡遺物出土状態



4. 3号住居跡カマド



5. 3号住居跡カマドセクション



1. 4号住居跡全景



2. 4号住居跡



3. 4号住居跡掘り方

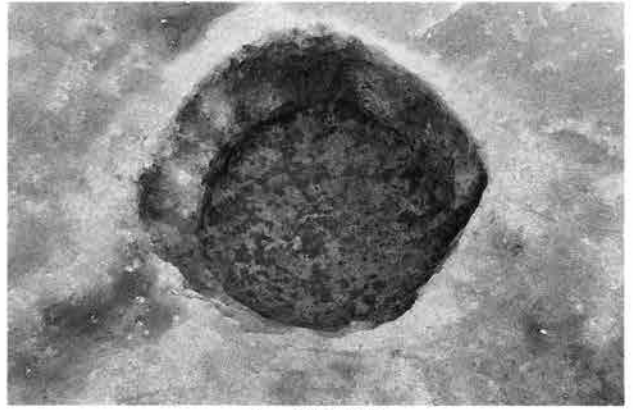


4. 4号住居跡カマドセクション

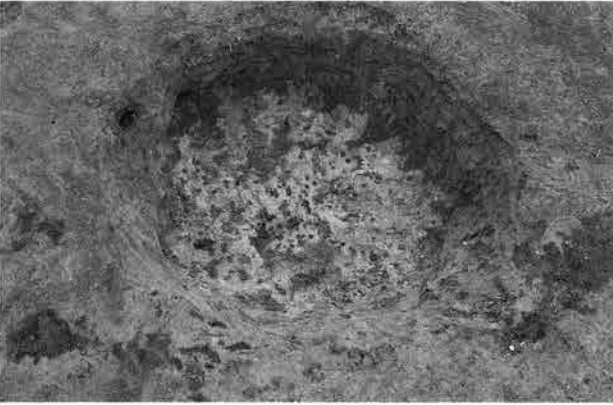




1. 1号土坑



2. 2号土坑



3. 3号土坑



4. 4号土坑



5. 5号土坑



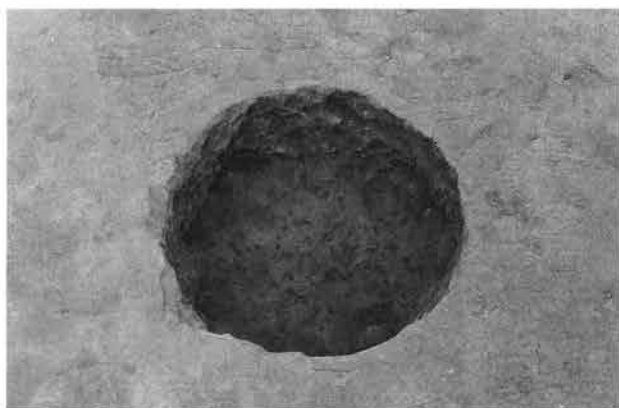
6. 6号土坑



7. 7号土坑



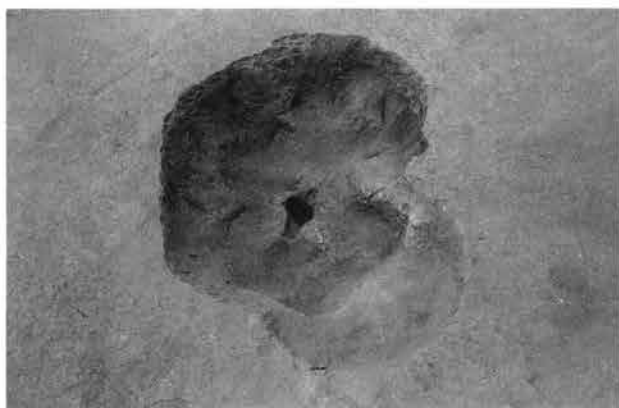
8. 8号土坑



1. 9号土坑



2. 10号土坑



3. 11号土坑



4. 15号土坑



5. 16号土坑



6. 17号土坑



7. 18号土坑



8. 19号土坑



1. 20号土坑



2. 21号土坑



3. 22号土坑



4. 23号土坑



5. 12号土坑



6. 2号井戸



7. 2・3号井戸



8. 4号井戸



1. 6号井戸



2. 6号井戸遺物出土状態



1. 4号溝全景



2. 4号溝



3. 5号溝全景



4. 8号溝



5. 9号溝



1. 9号溝全景



2. 9号溝



3. 9号溝



4. 9号溝



5. 9号溝礫流入状態



1. 1号集石



2. 1号集石



1. 1号集石



2. 1号集石



3. 2号集石

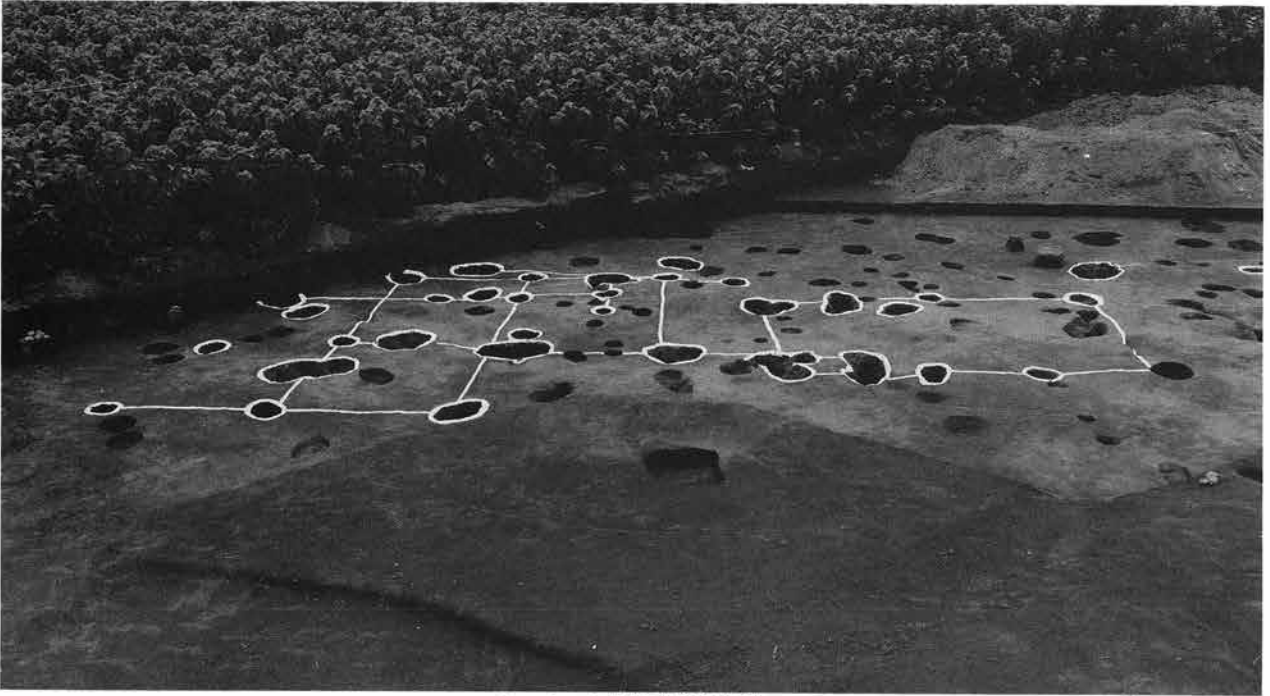


4. 2号集石

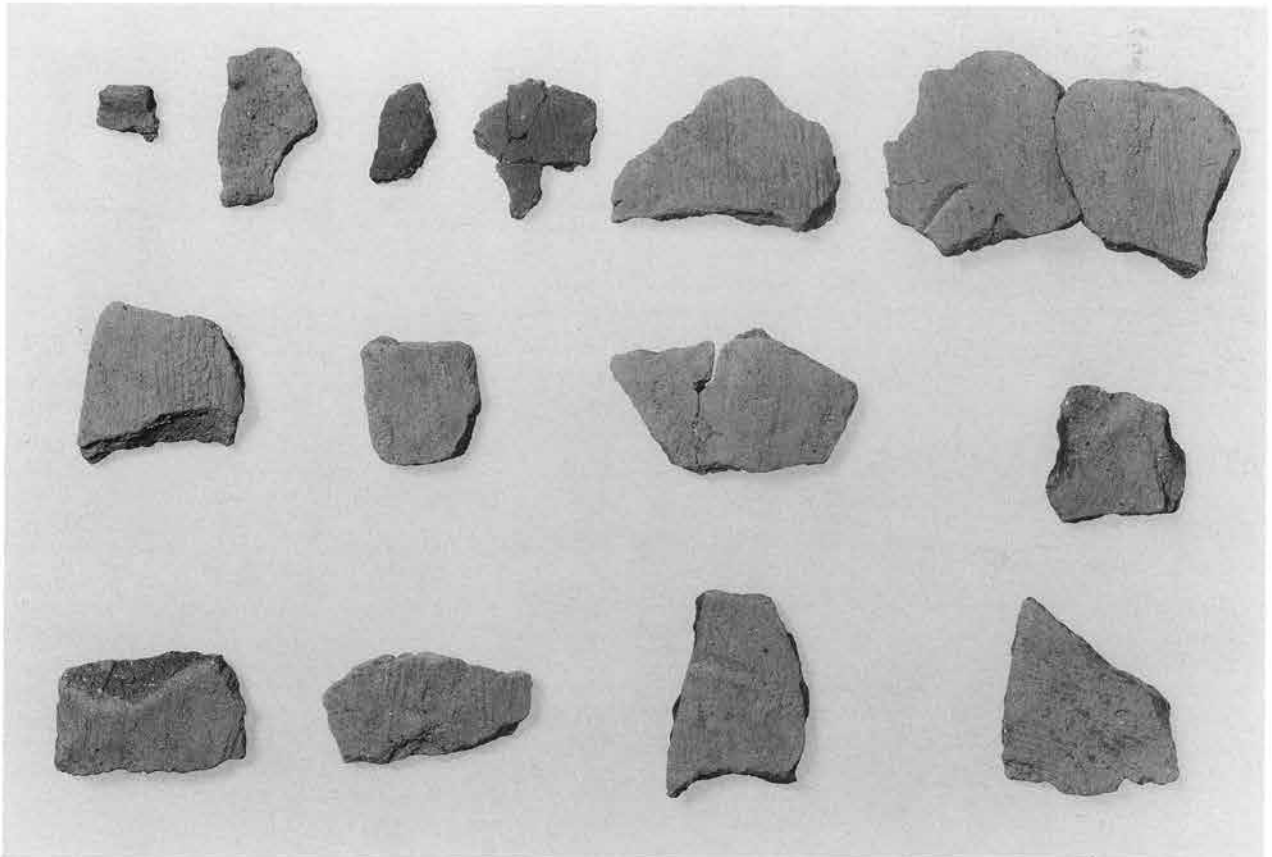


5. 調査風景

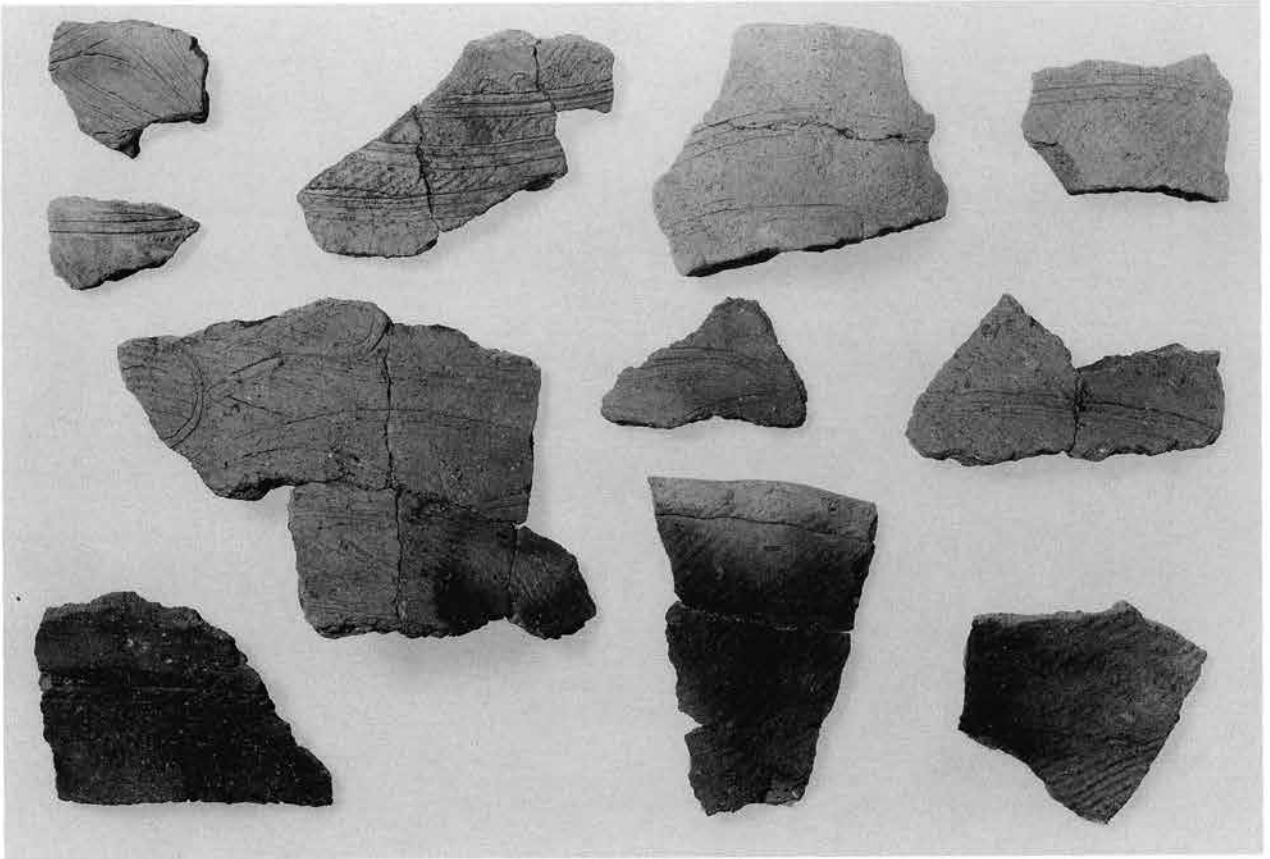




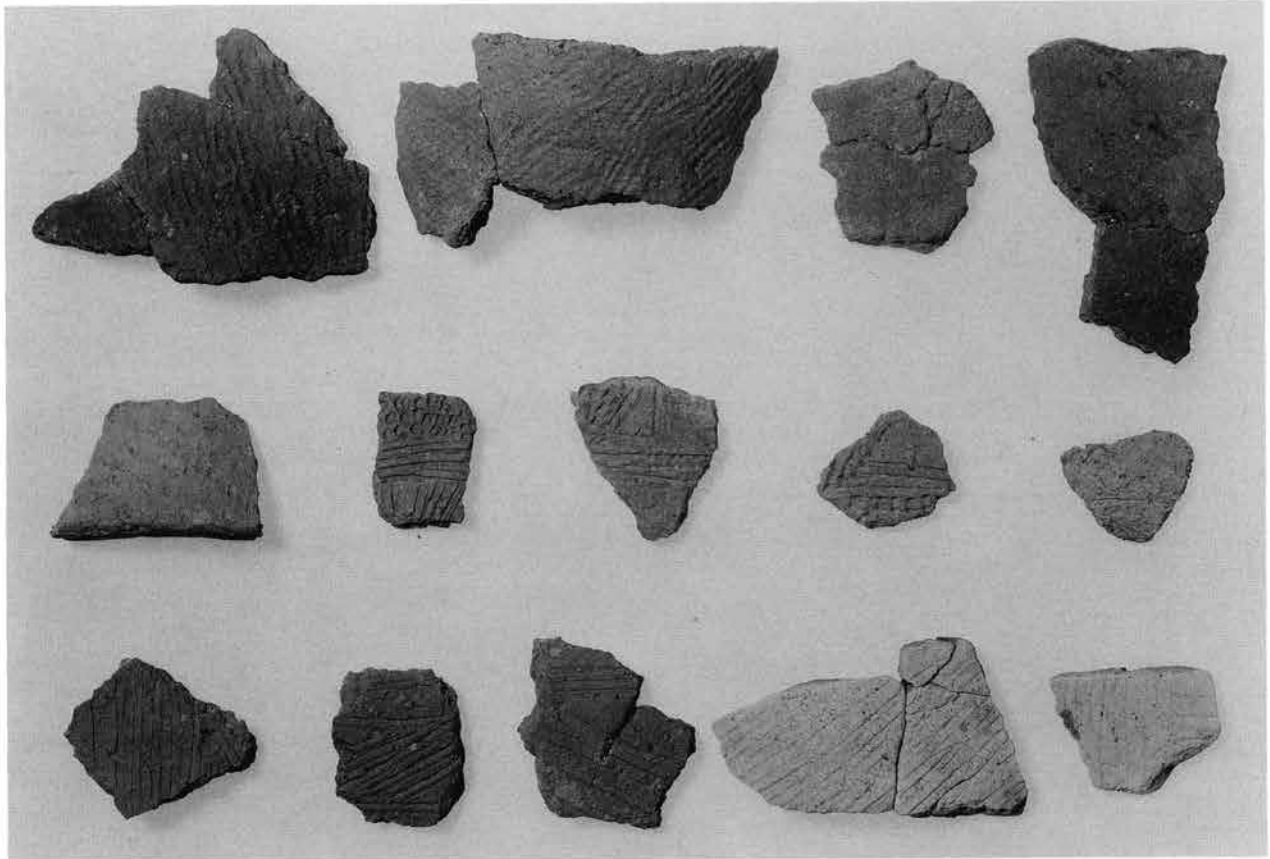
1. 1・2号掘立柱建物跡



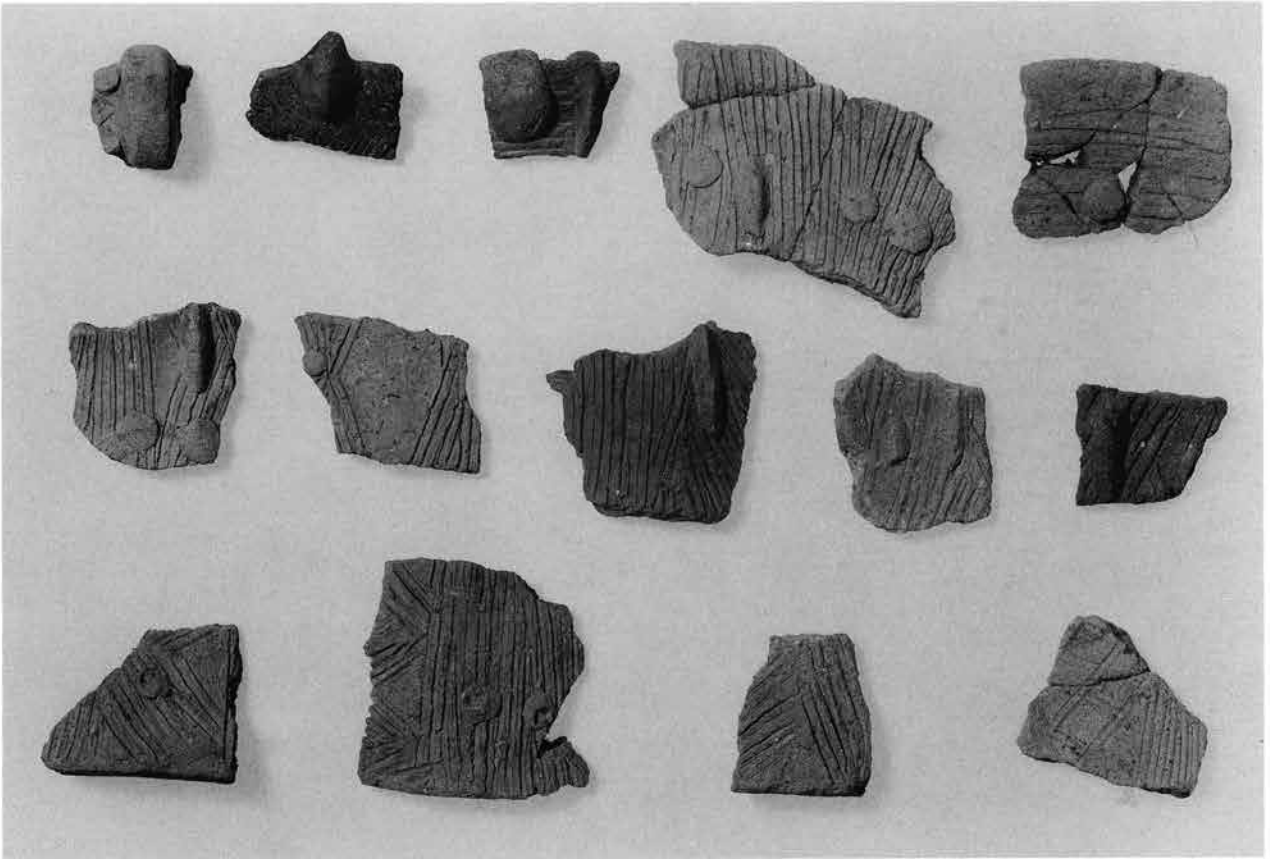
2. グリッド出土土器



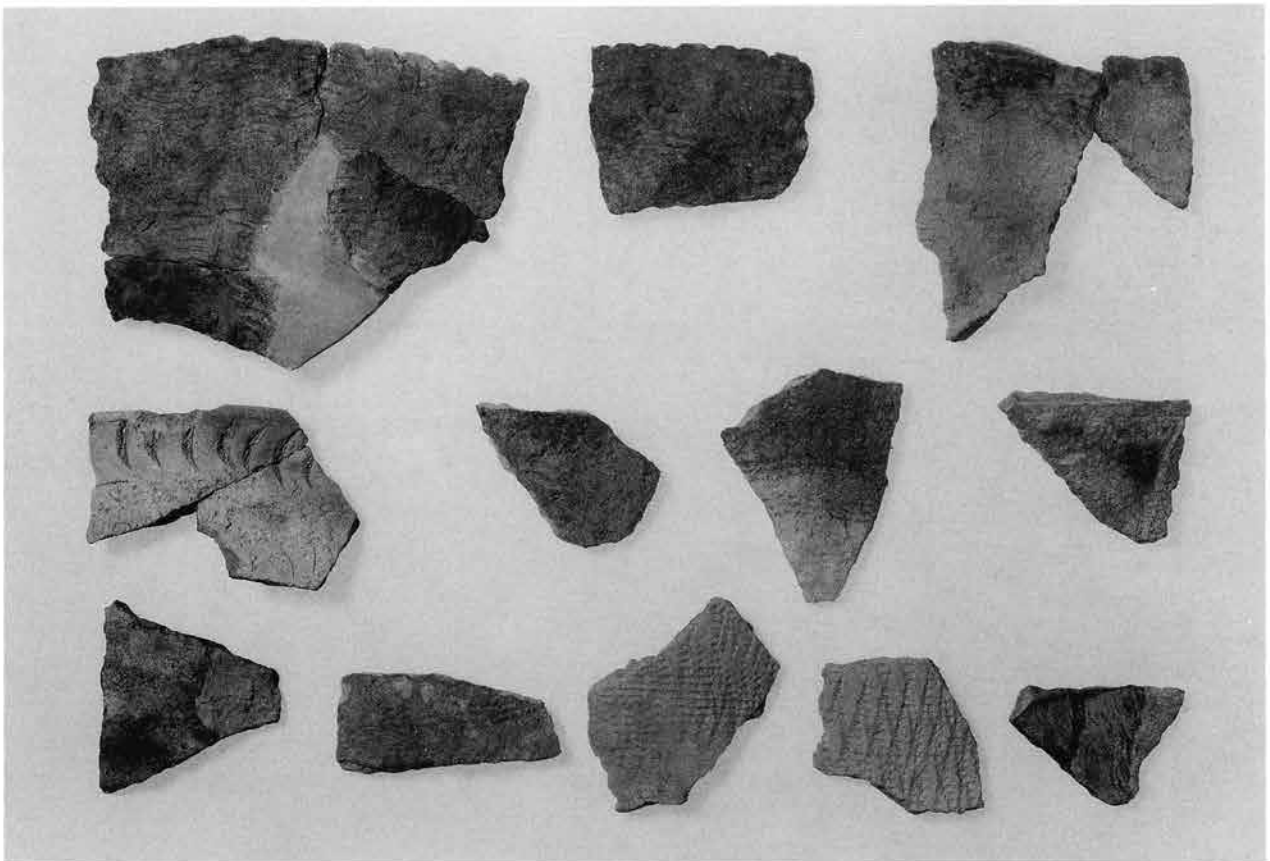
1. グリッド出土土器



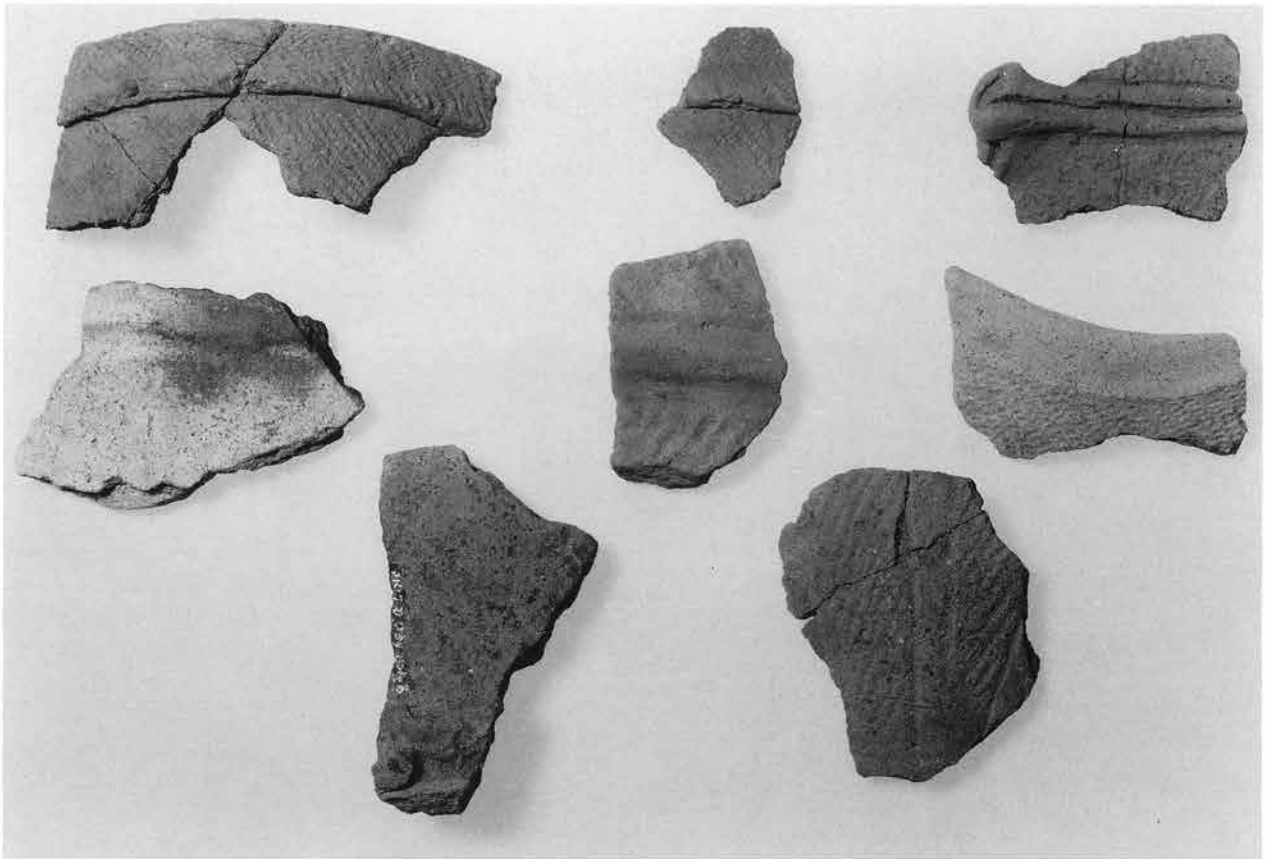
2. グリッド出土土器



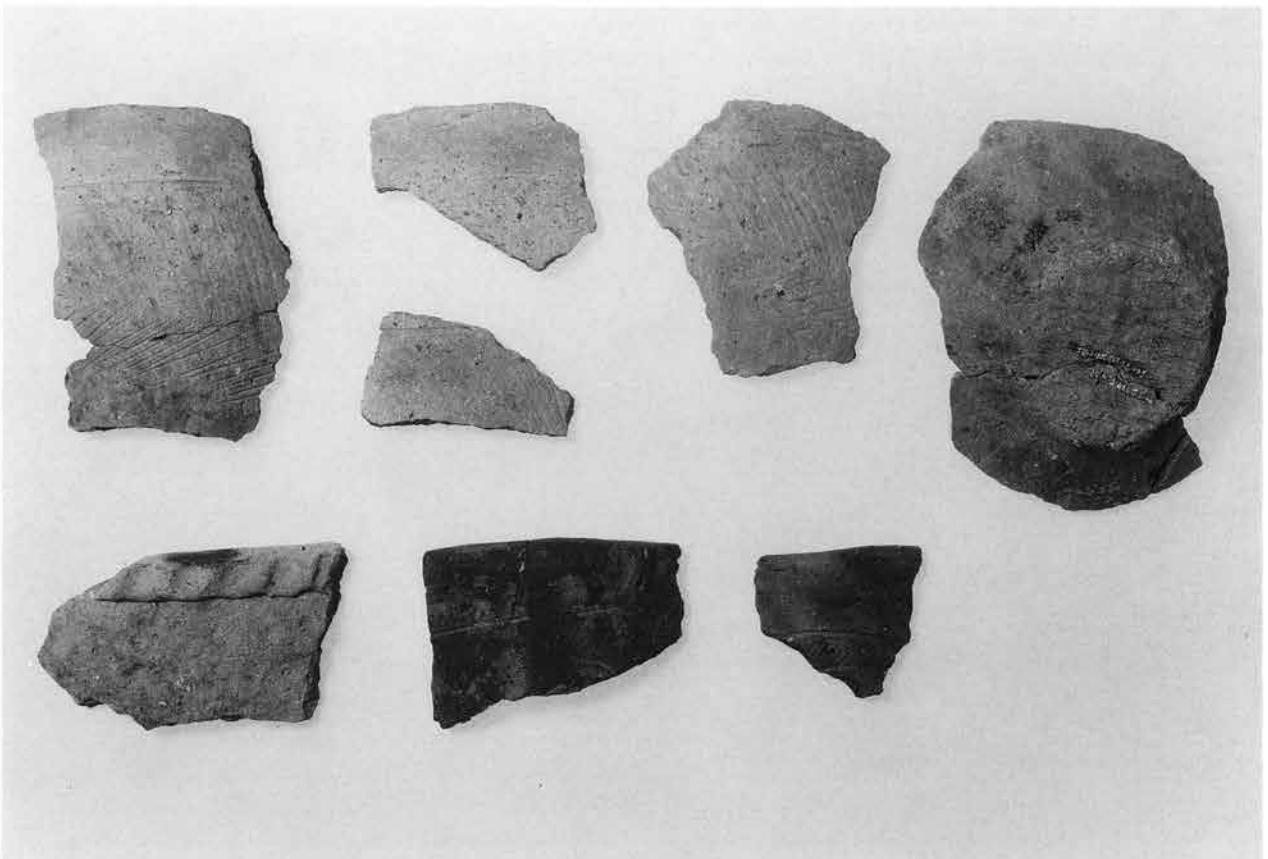
1. グリッド出土土器



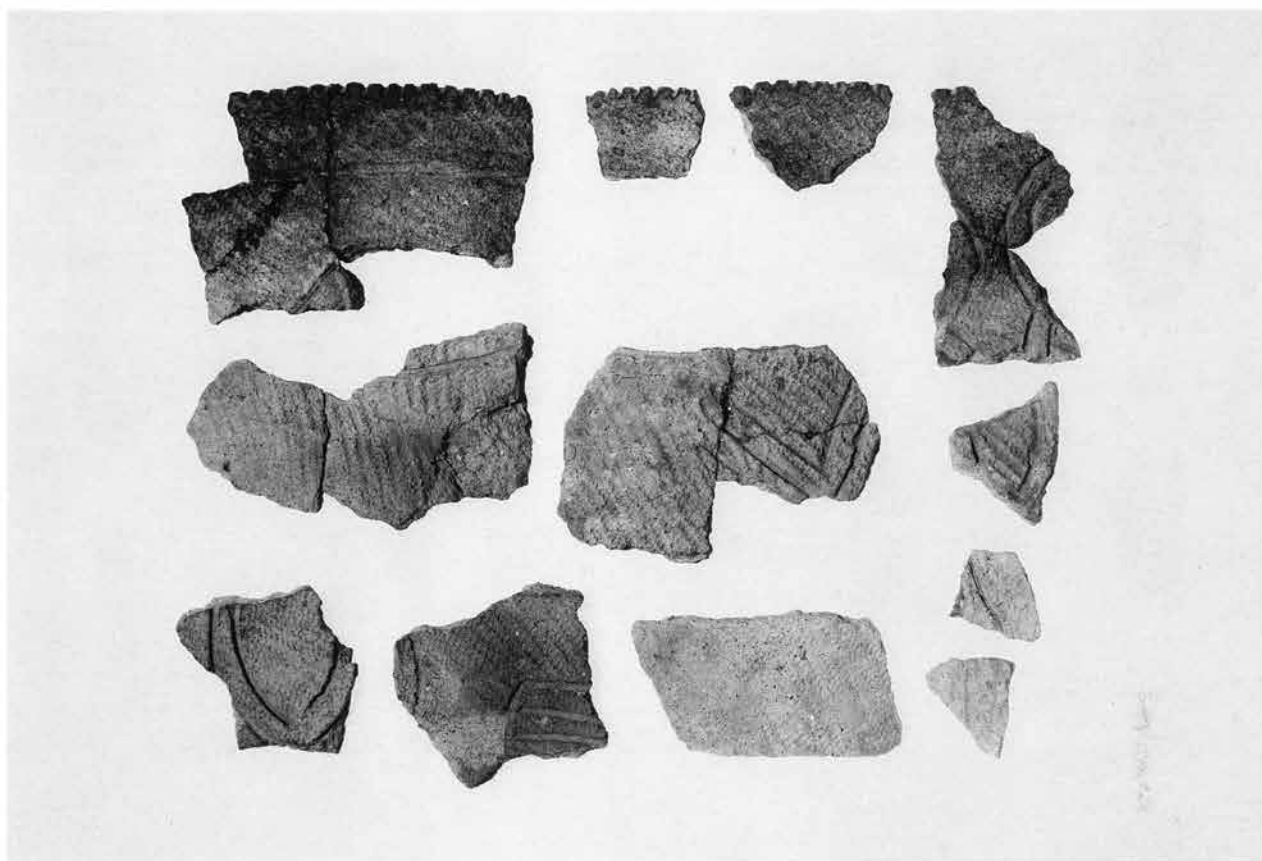
2. グリッド出土土器



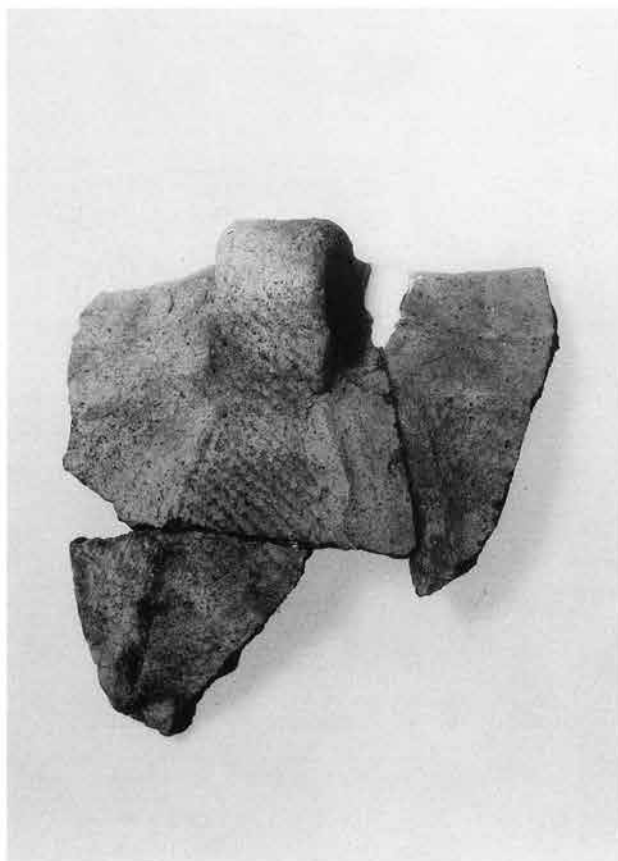
1. グリッド出土土器



2. グリッド出土土器



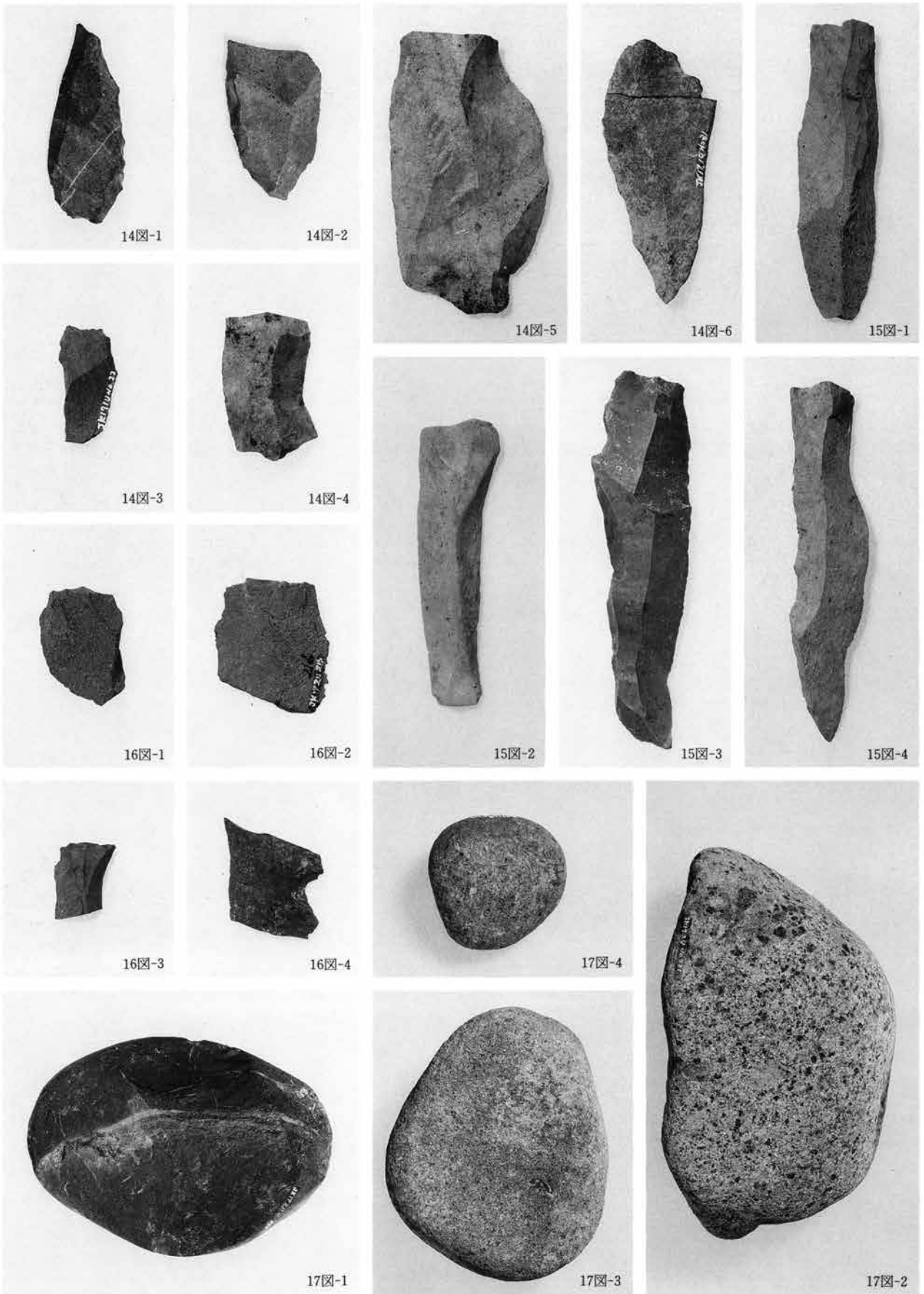
1. グリッド出土土器



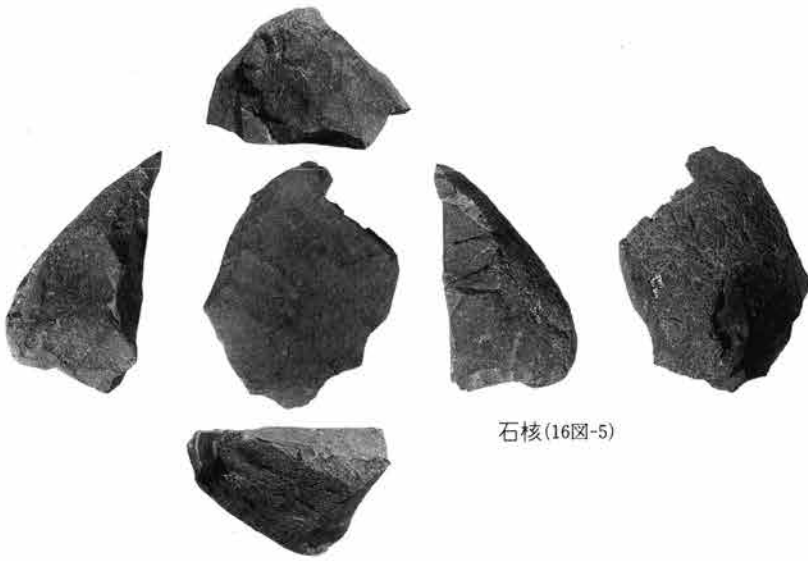
2. グリッド出土土器



3. グリッド出土土器



出土石器(旧石器時代)

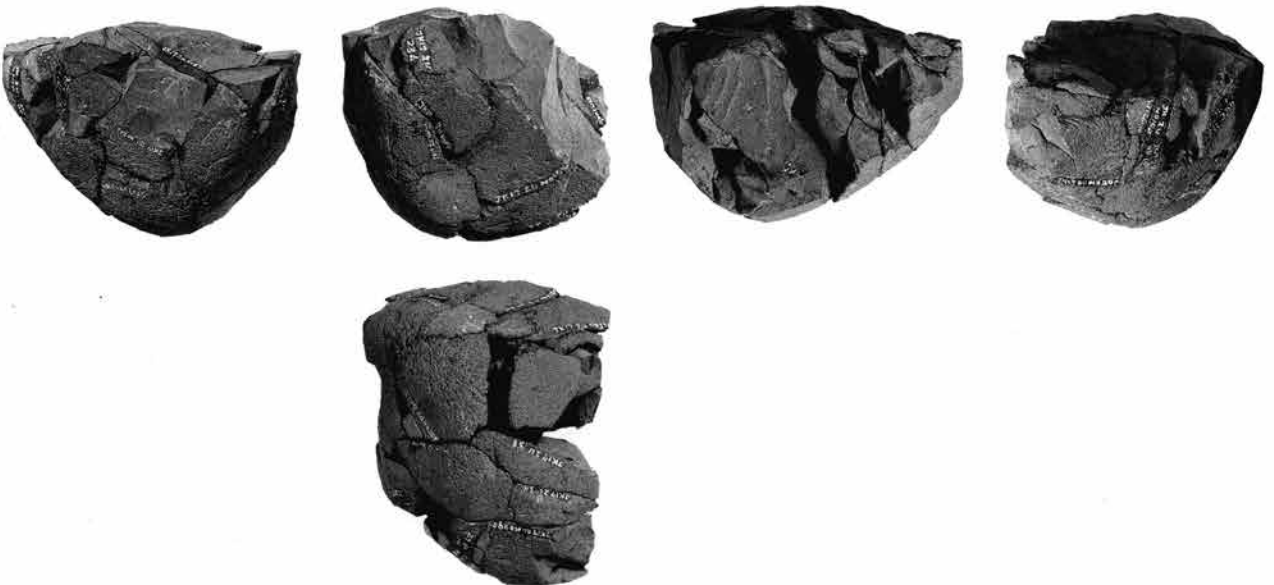


石核(16図-5)

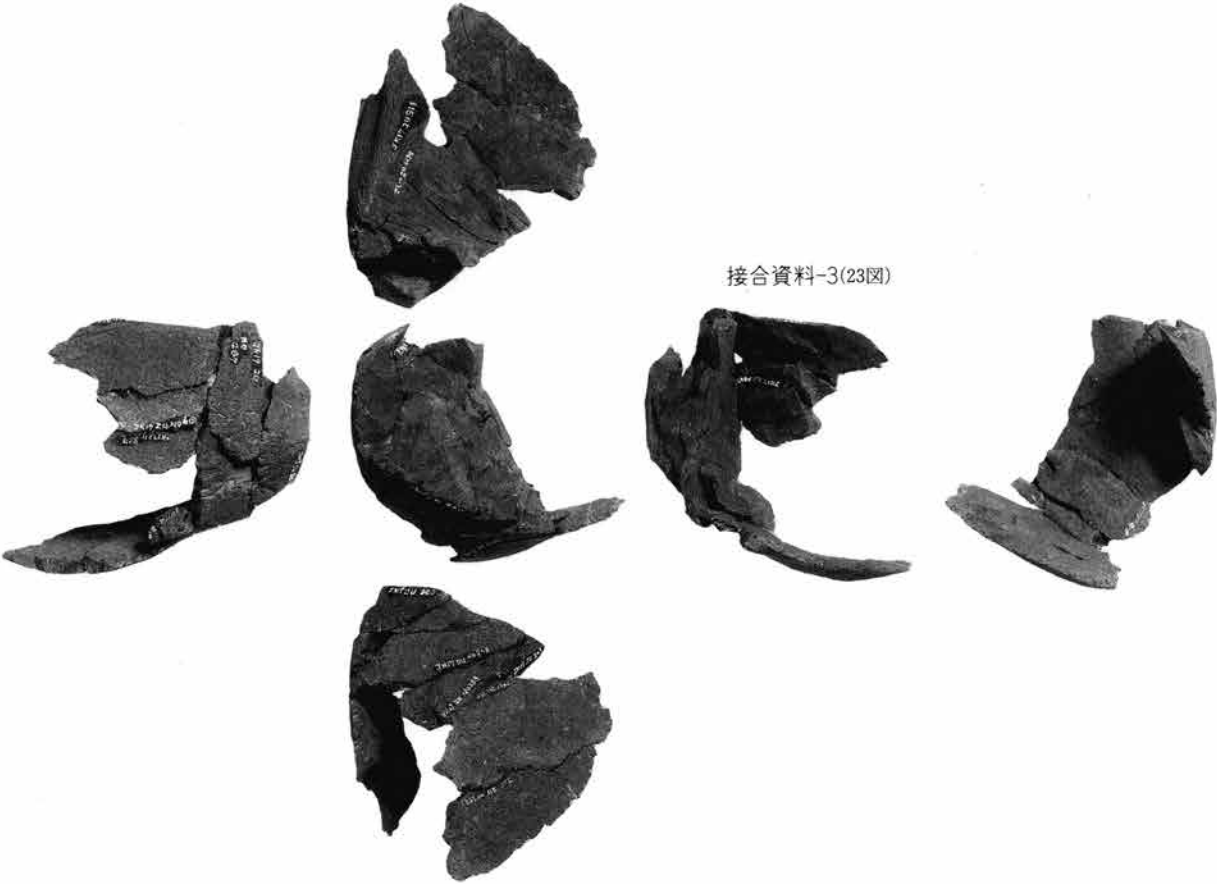
接合資料-5(27図)



接合資料-1(18図)



出土石器(旧石器時代)



接合資料-3(23図)



接合資料-2(25図)

出土石器(旧石器時代)





接合資料-10(26図)



接合資料-12(26図)



接合資料-19(26図)



接合資料-16(26図)



接合資料-13(26図)



接合資料-15(26図)



接合資料-14(26図)



接合資料-11(26図)



接合資料-8(27図)



接合資料-6(26図)



接合資料-9(27図)



接合資料-4(26図)



接合資料-18(28図)



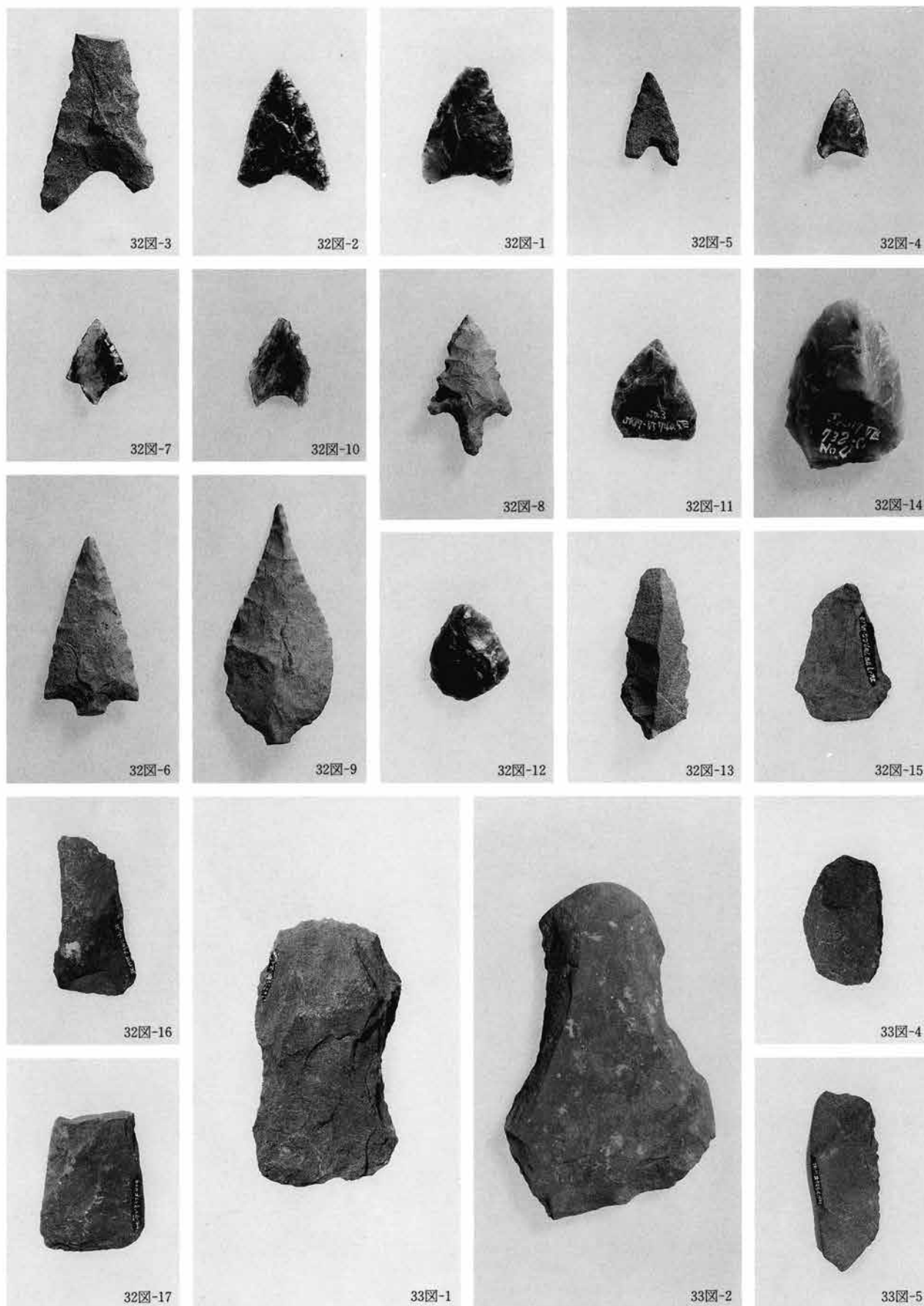
接合資料-7(27図)



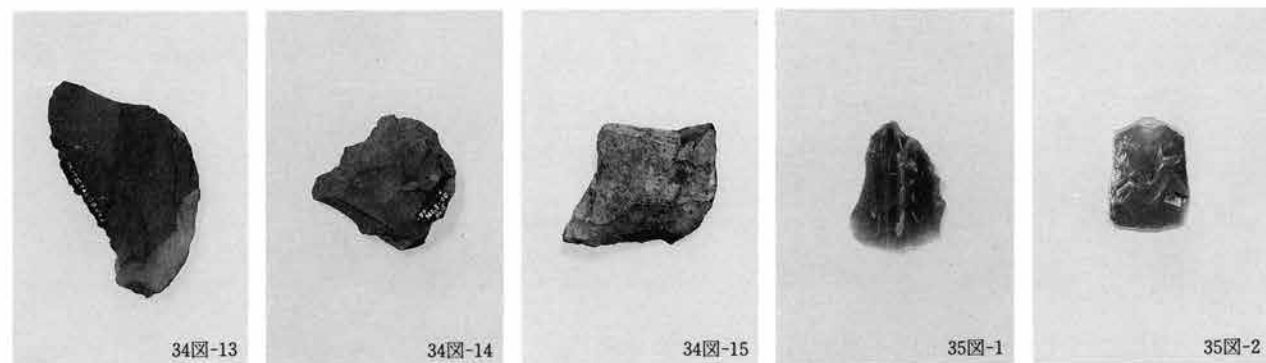
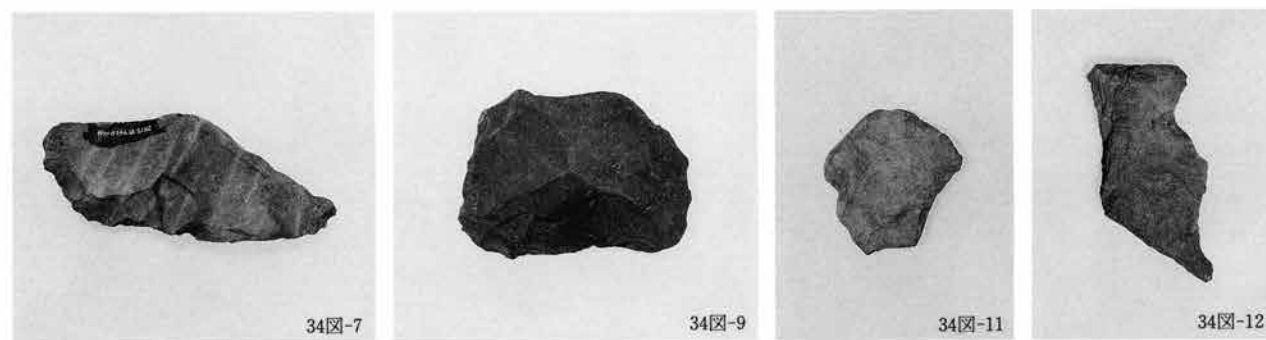
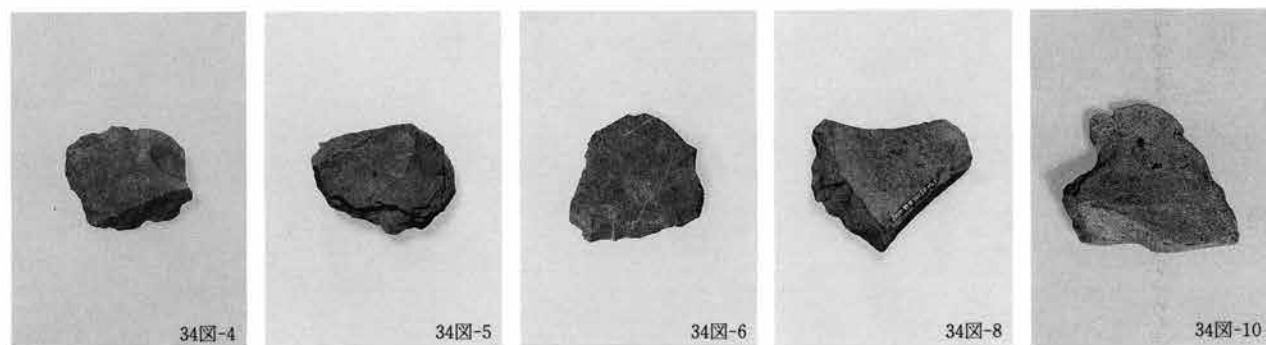
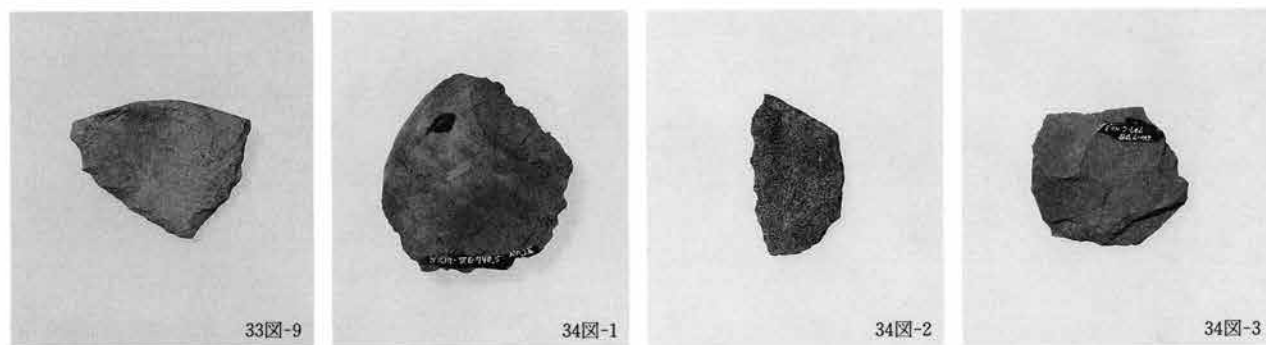
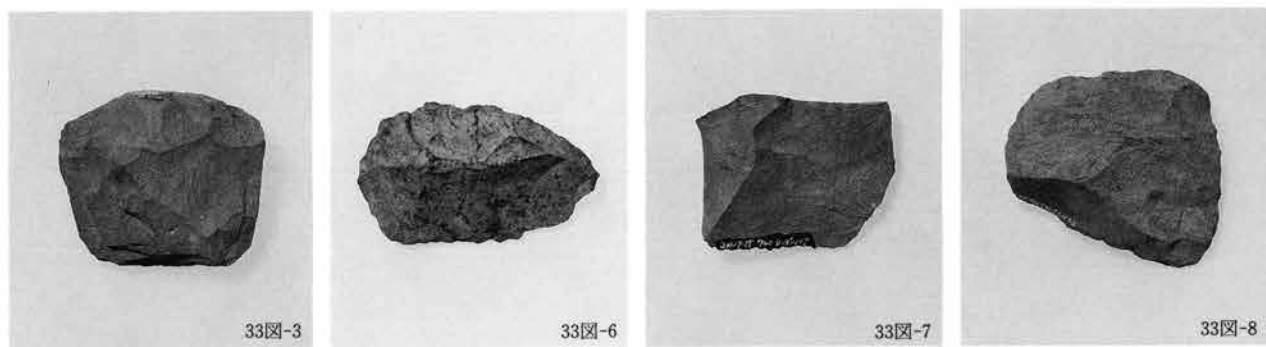
接合資料-17(27図)



出土石器(旧石器時代)



出土石器(縄文時代)



出土石器(縄文時代)



35图-3



35图-4



35图-5



35图-6



35图-7



31图-8



35图-9



35图-10



35图-11



35图-12



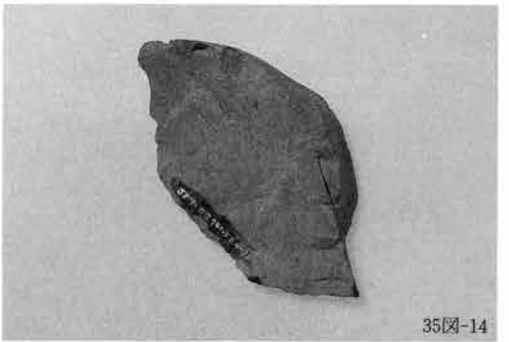
35图-13



35图-15



35图-16



35图-14



36图-6



37图-1



37图-3



37图-2



36图-6



37图-1



37图-3



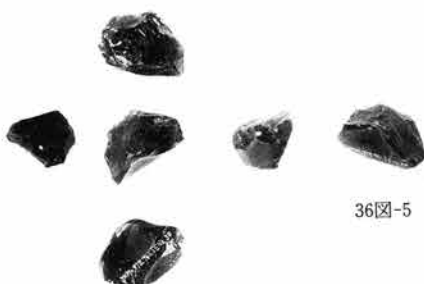
37图-2



36图-3



36图-2



36图-5



36图-4



36图-1

出土石器(縄文時代)



38图-6



37图-4



38图-1



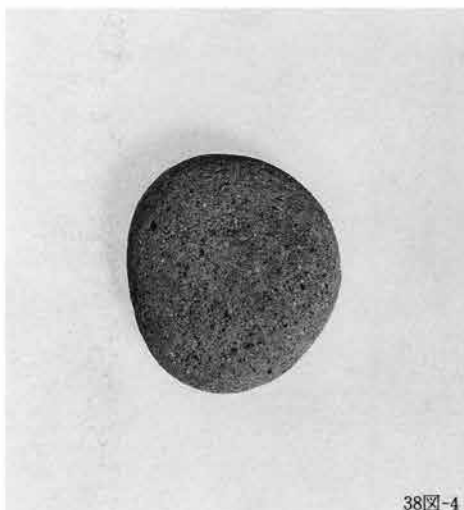
39图-3



38图-3



38图-7



38图-4



38图-5



39图-1



39图-2

出土石器(縄文時代)



48图-1



48图-3



48图-5



48图-10



49图-12



49图-13



48图-9



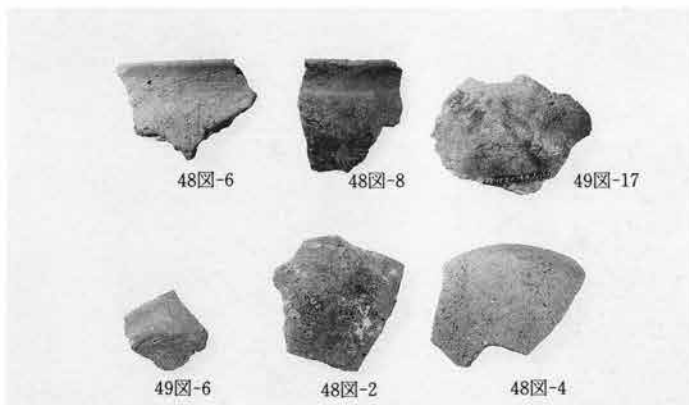
49图-14



49图-15



48图-11



48图-6

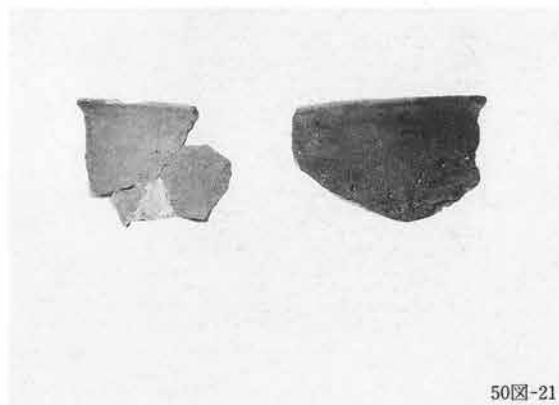
48图-8

49图-17

49图-6

48图-2

48图-4



50图-21

1号住居跡出土遺物



49图-18



49图-19



48图-7



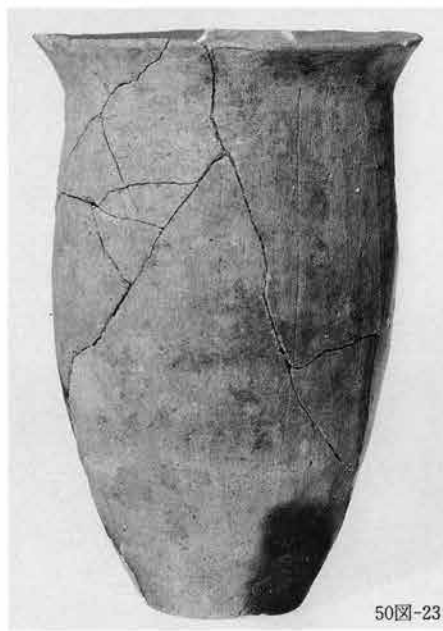
50图-22



51图-24



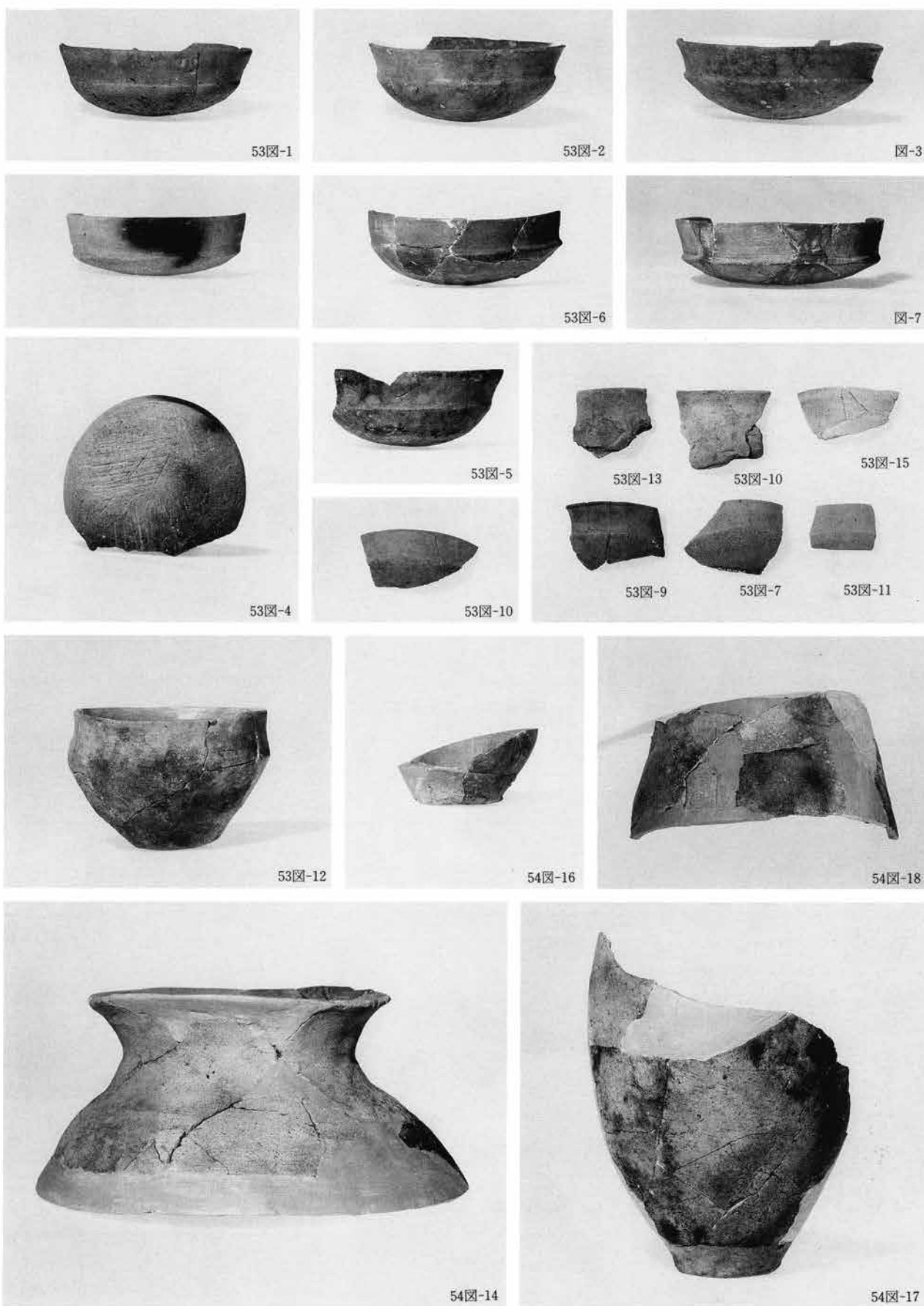
50图-20



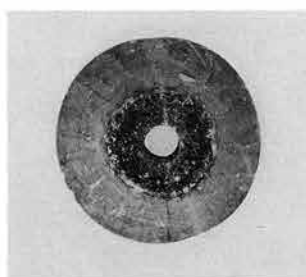
50图-23

1号住居跡出土遺物

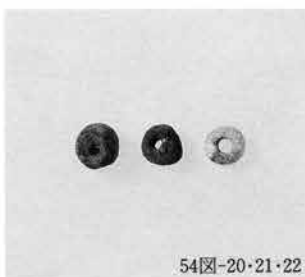




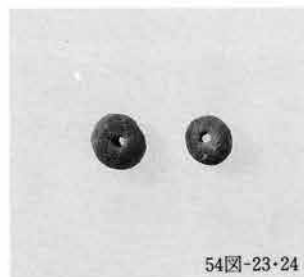
2号住居跡出土遺物



54图-19



54图-20·21·22



54图-23·24

2号住居跡出土遺物



57图-1



57图-2



57图-3



57图-5



57图-6



57图-4



58图-1 (4住)

3号住居跡出土遺物



68图-1



68图-2



68图-3



68图-5



68图-6



68图-4

出土土器



76図-4

74図-1



74図-3

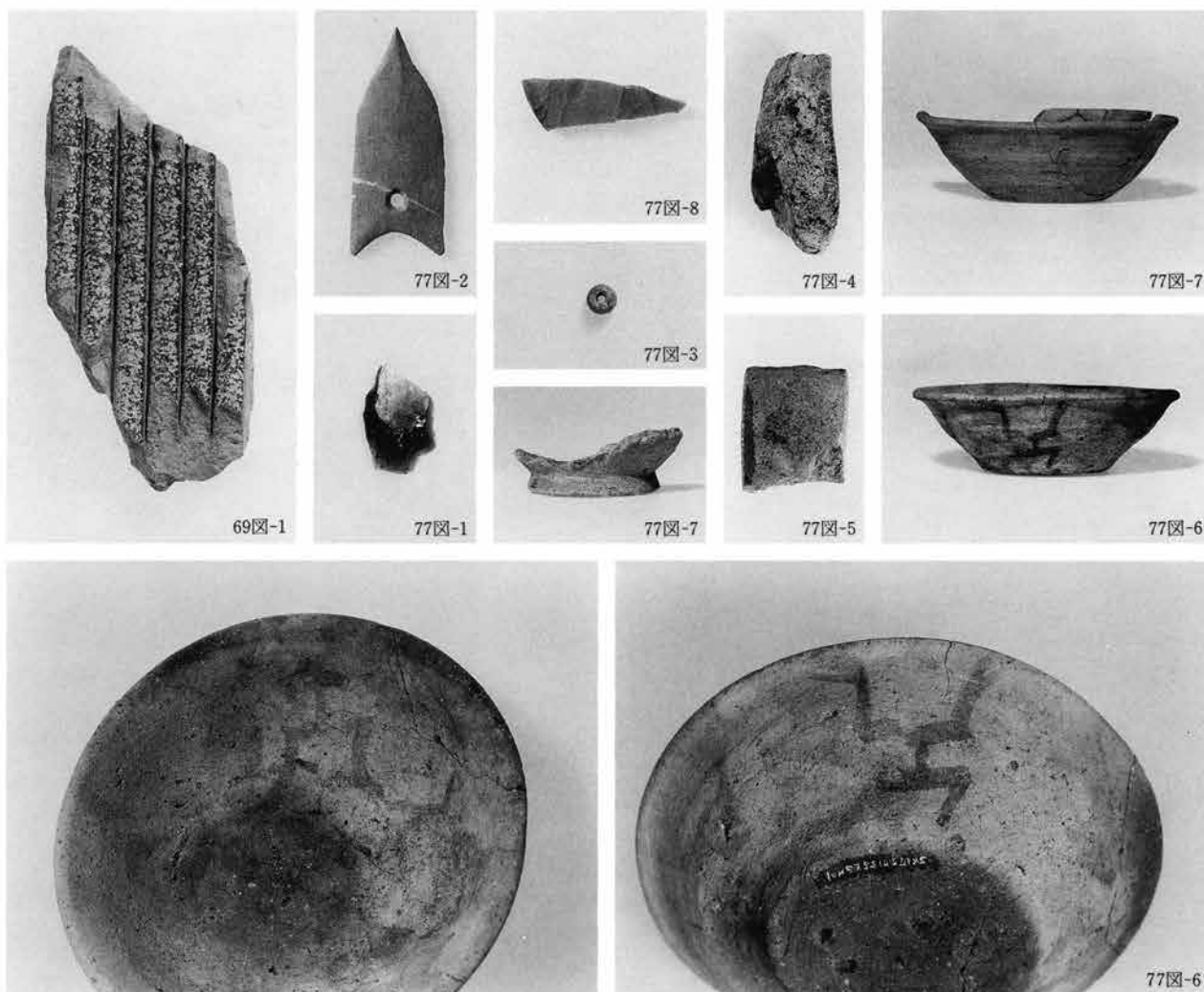


76図-5



74図-2

集石遺構出土遺物



出土遺物

## 波志江六反田遺跡



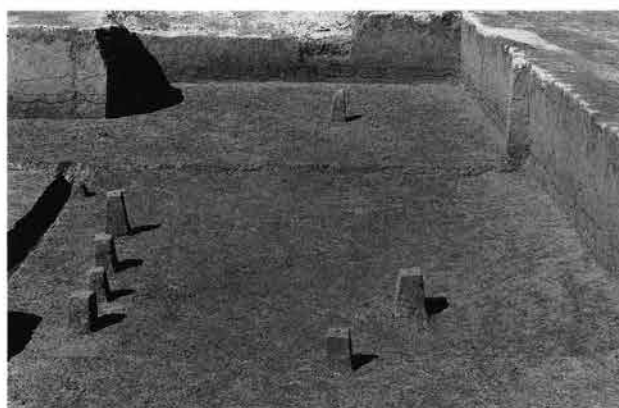
ローム層の堆積状態



波志江六反田・波志江天神山遺跡遠景



1. 旧石器試掘調査



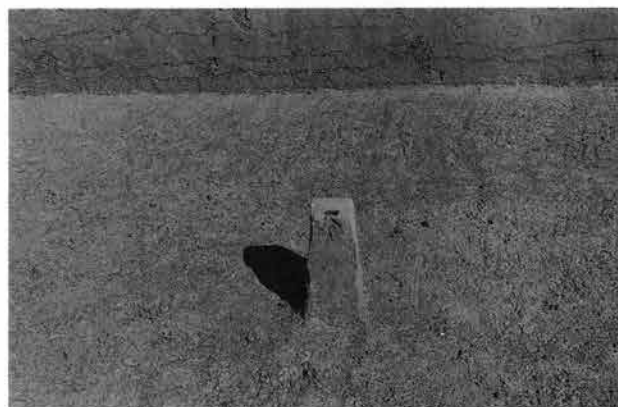
2. 石器出土状態



3. 石器出土状態



4. 石器出土状態



5. 石器出土状態

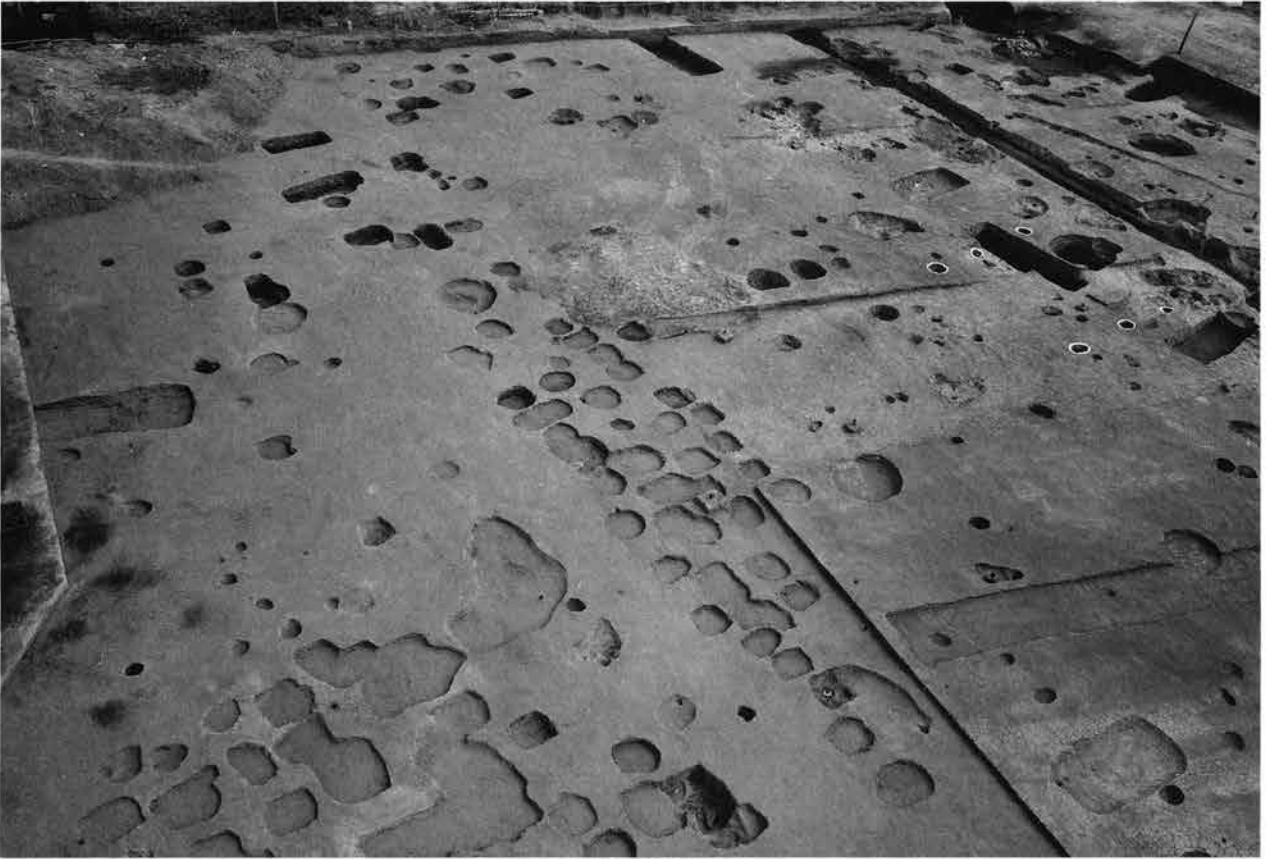


1. 波志江六反田遺跡遠景



2. 波志江六反田遺跡遠景





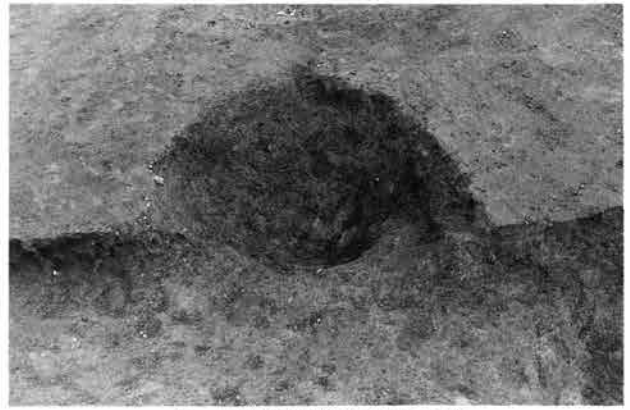
1. 遺跡全景



2. 遺跡全景



1. 1号住居跡全景



2. 1号住居跡掘り方カマド



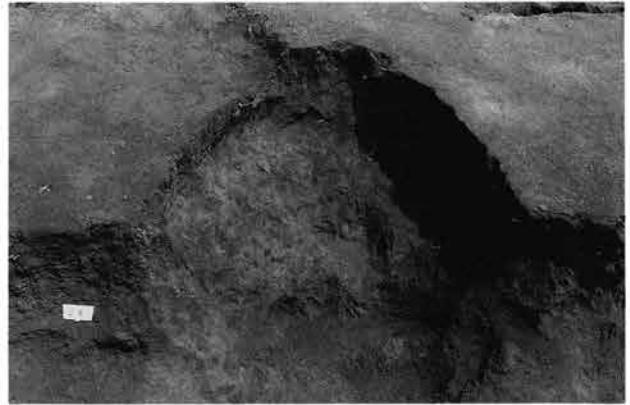
3. 2号住居跡



4. 2号住居跡掘り方全景



5. 2号住居跡遺物出土状態



6. 2号住居跡掘り方カマド



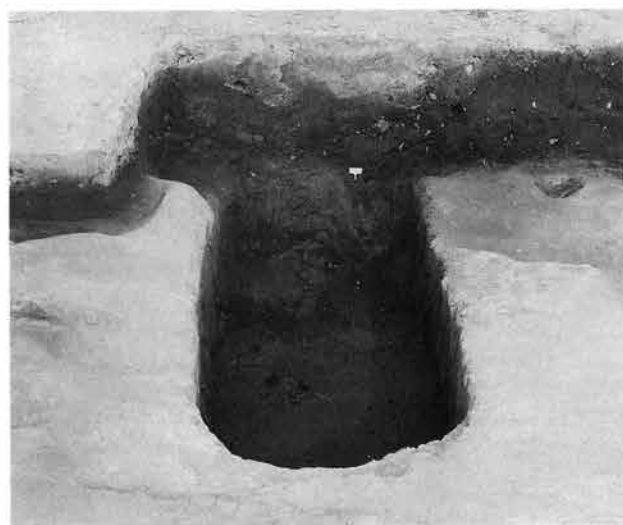
7. 3号住居跡全景



8. 3号住居跡カマド



1. 1·2·3号土坑



2. 8号土坑



3. 12号土坑



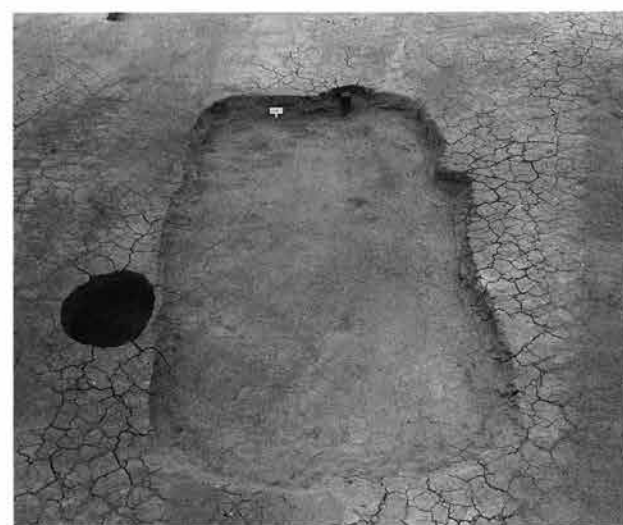
4. 13号土坑



5. 14号土坑



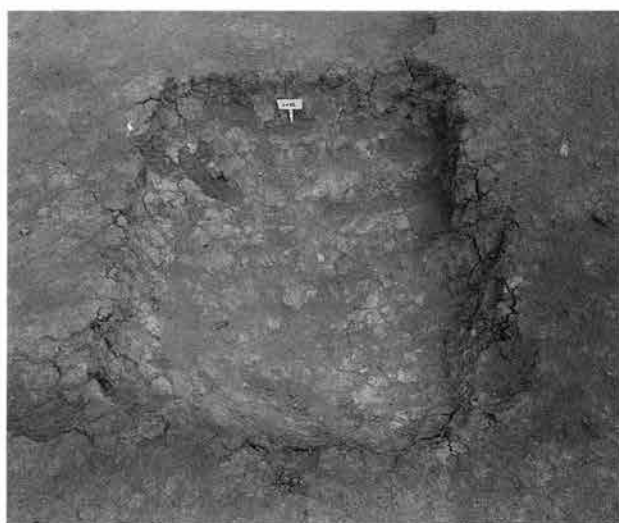
6. 15号土坑



7. 17号土坑



1. 19号土坑



2. 20号土坑



3. 16号土坑



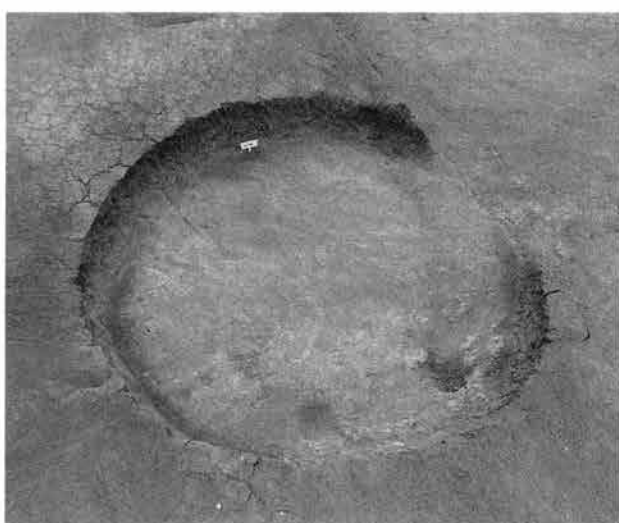
4. 18号土坑



5. 26号土坑



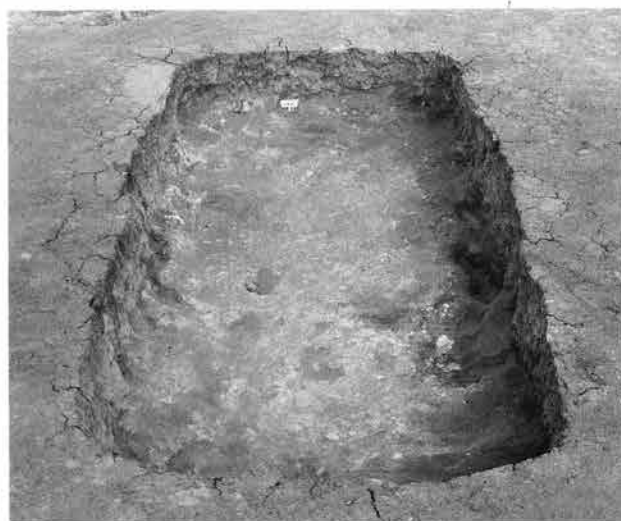
6. 21号土坑



7. 22号土坑



1. 23号土坑



2. 24号土坑



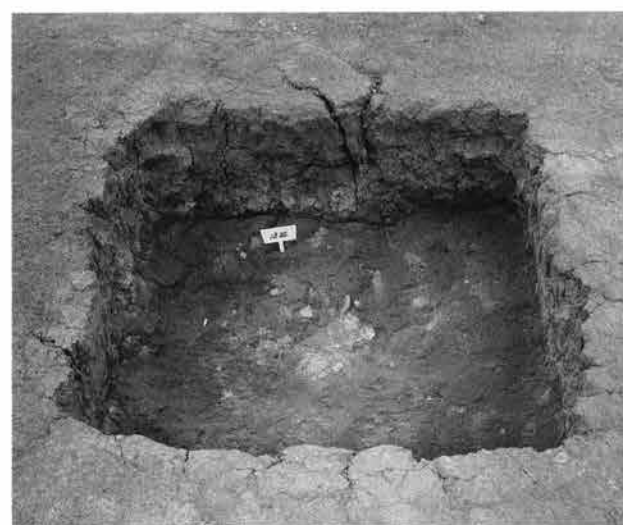
3. 5·6·7·29号土坑



4. 30号土坑



5. 31号土坑



6. 28号土坑



7. 27号土坑



1. 25号土坑



2. 32号土坑



3. 1号井戸



4. 2号井戸



5. 3号井戸



6. 4号井戸



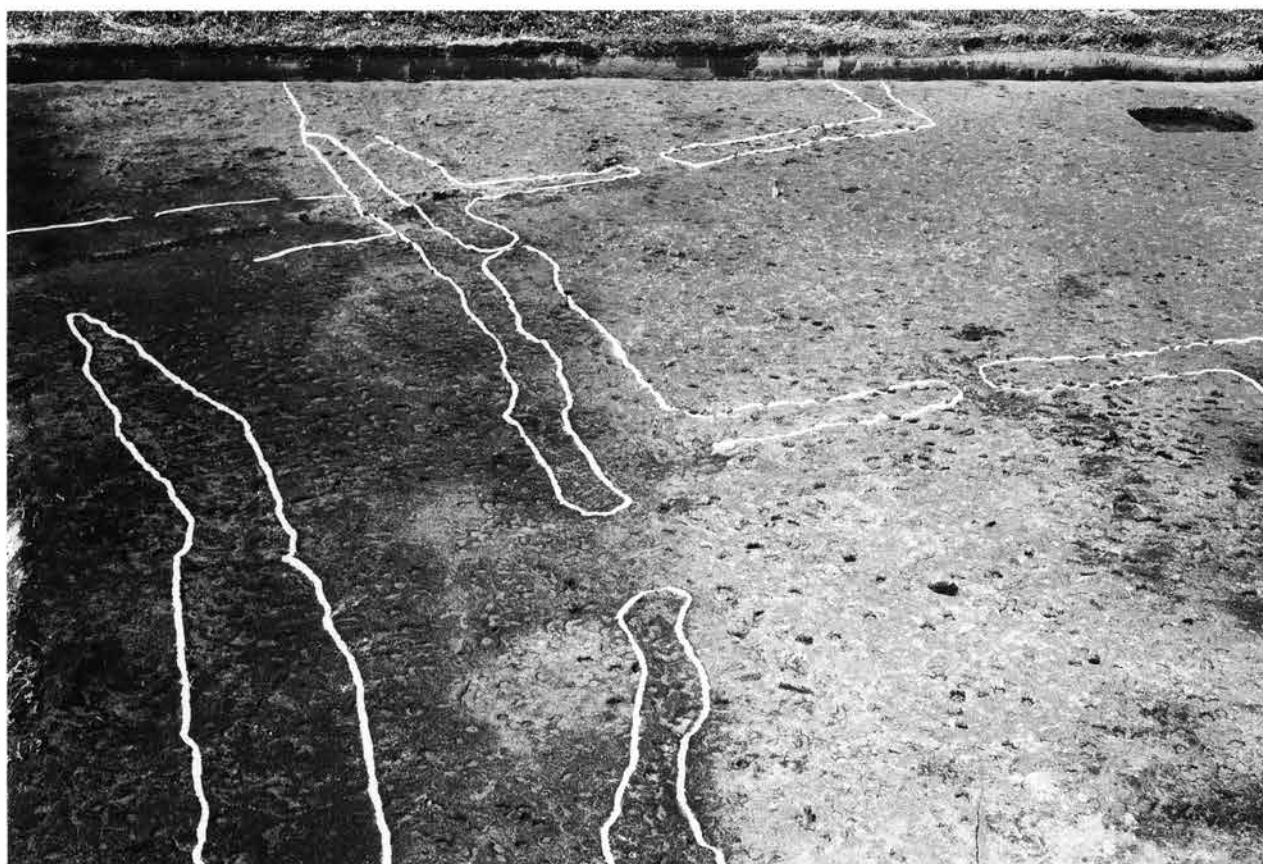
1. 水田跡及び旧河川跡



2. A<sub>s</sub>-B下水田跡土層



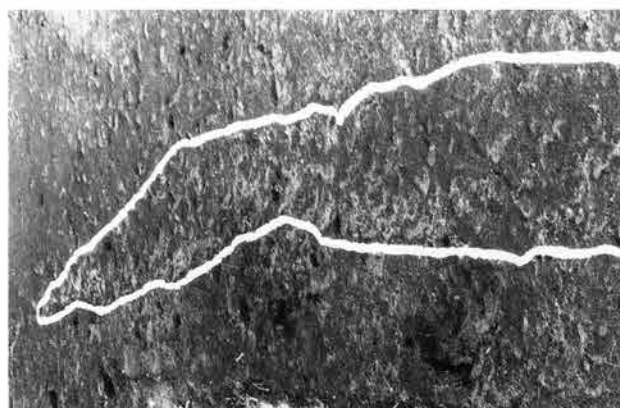
3. A<sub>s</sub>-B下水田跡土層



1. As-B下水田跡



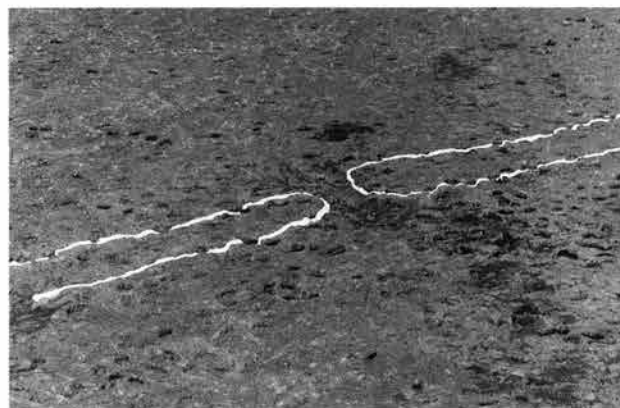
2. As-B下水田跡



3. As-B下水田跡



4. As-B下水田跡



5. As-B下水田跡





1. 1号溝



2. 2号溝



3. 3号溝



4. 4・5号溝



5. 掘立柱建物跡



1. 旧石器試掘調査



2. As-B下水田調査風景

## 波志江天神山遺跡



ローム層の堆積状態



波志江天神山遺跡遠景



1. 8号土坑



2. 10号土坑



1. 21号土坑



2. 9号土坑



3. 20号土坑



4. 6号土坑



5. 発掘風景



1. 1号土坑



2. 5号土坑



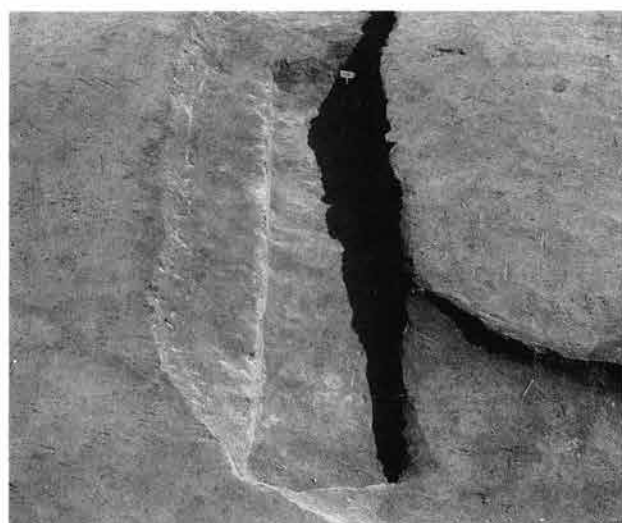
3. 2号土坑



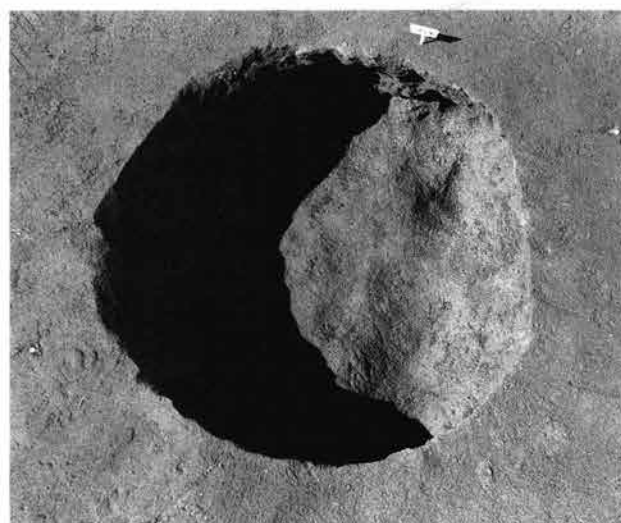
4. 3号土坑



5. 4号土坑



6. 17号土坑



7. 13号土坑



1. 12号土坑



2. 13号土坑



3. 14号土坑



4. 15号土坑



5. 16号土坑



6. 18号土坑



7. 19号土坑



8. 22号土坑





1. 9号溝



2. 9号溝



3. 1号井戸



4. サク状遺構



5. 天神山遺跡全景



1. 1号溝屈曲部



2. 2・6・9号溝



3. 1・2号溝



4. 3・4号溝



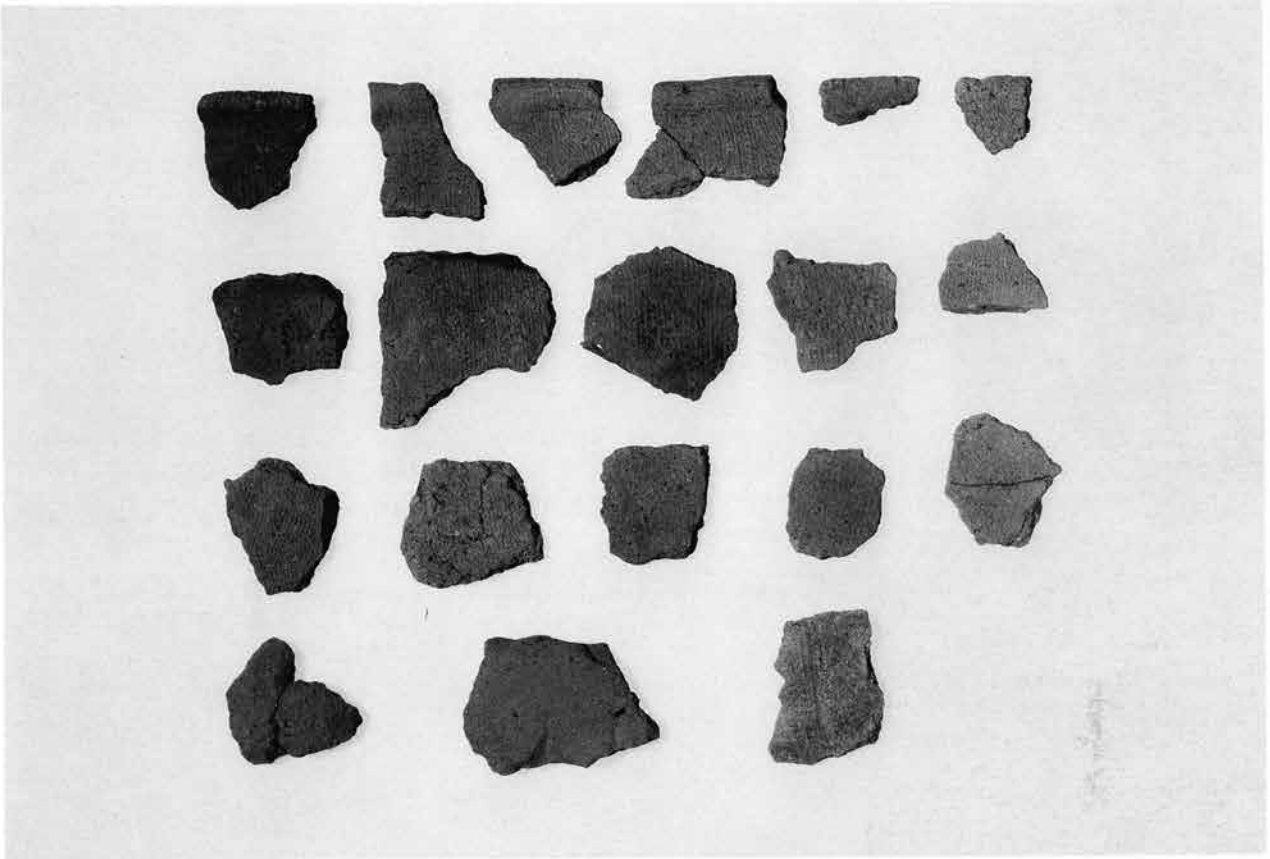
5. 6号溝



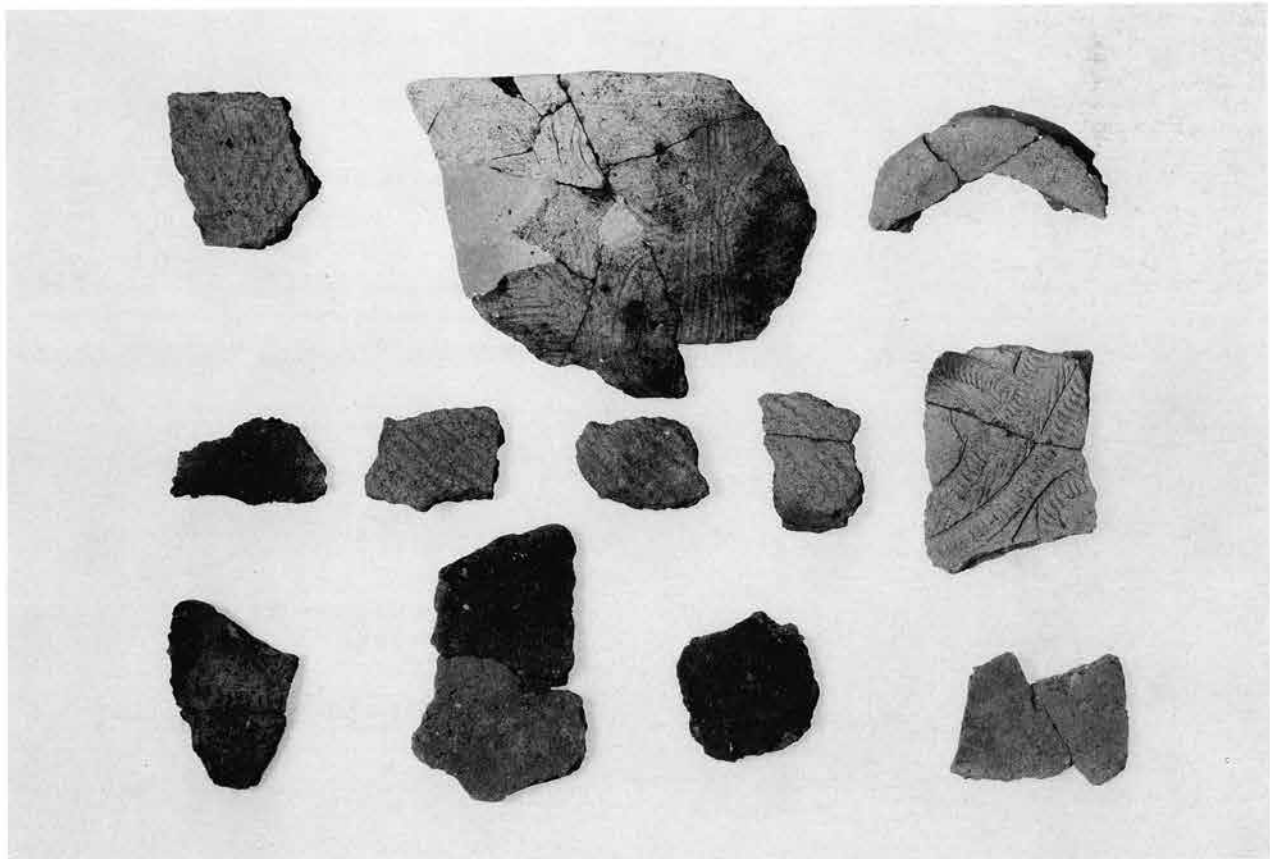
6. 7号溝



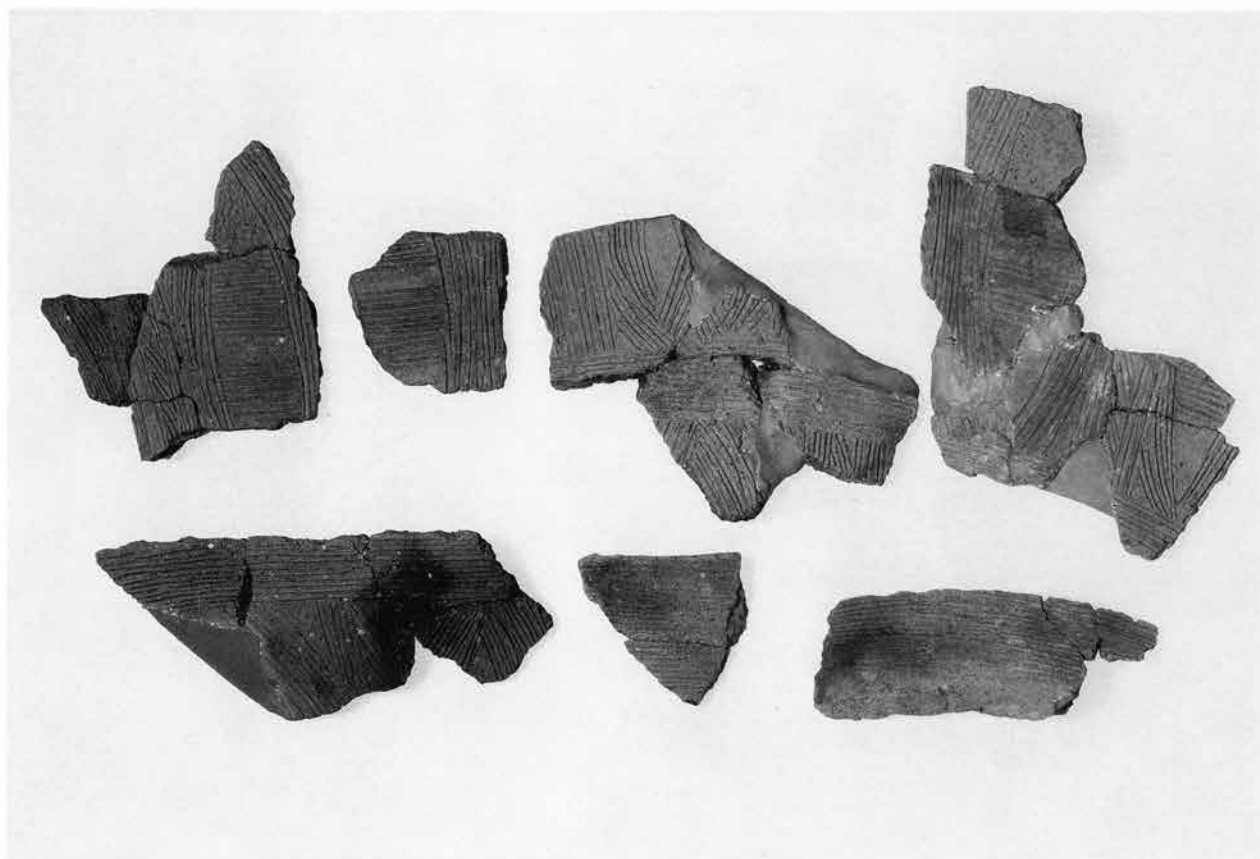
7. 8号溝



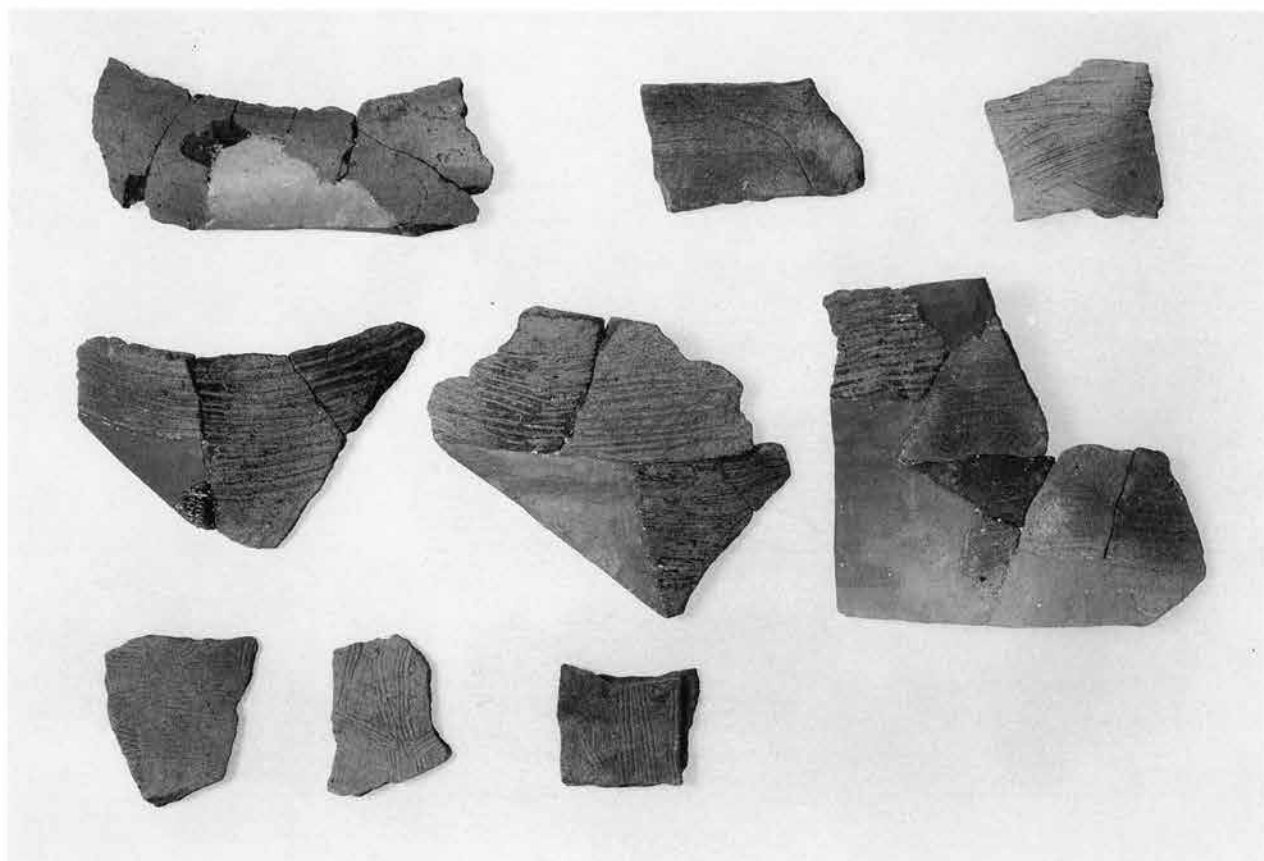
1. 出土土器 (9 図) 六反田遺跡



2. 出土土器 (41 図)



1. 出土土器 (41・42図)



2. 出土土器 (43図)



41图

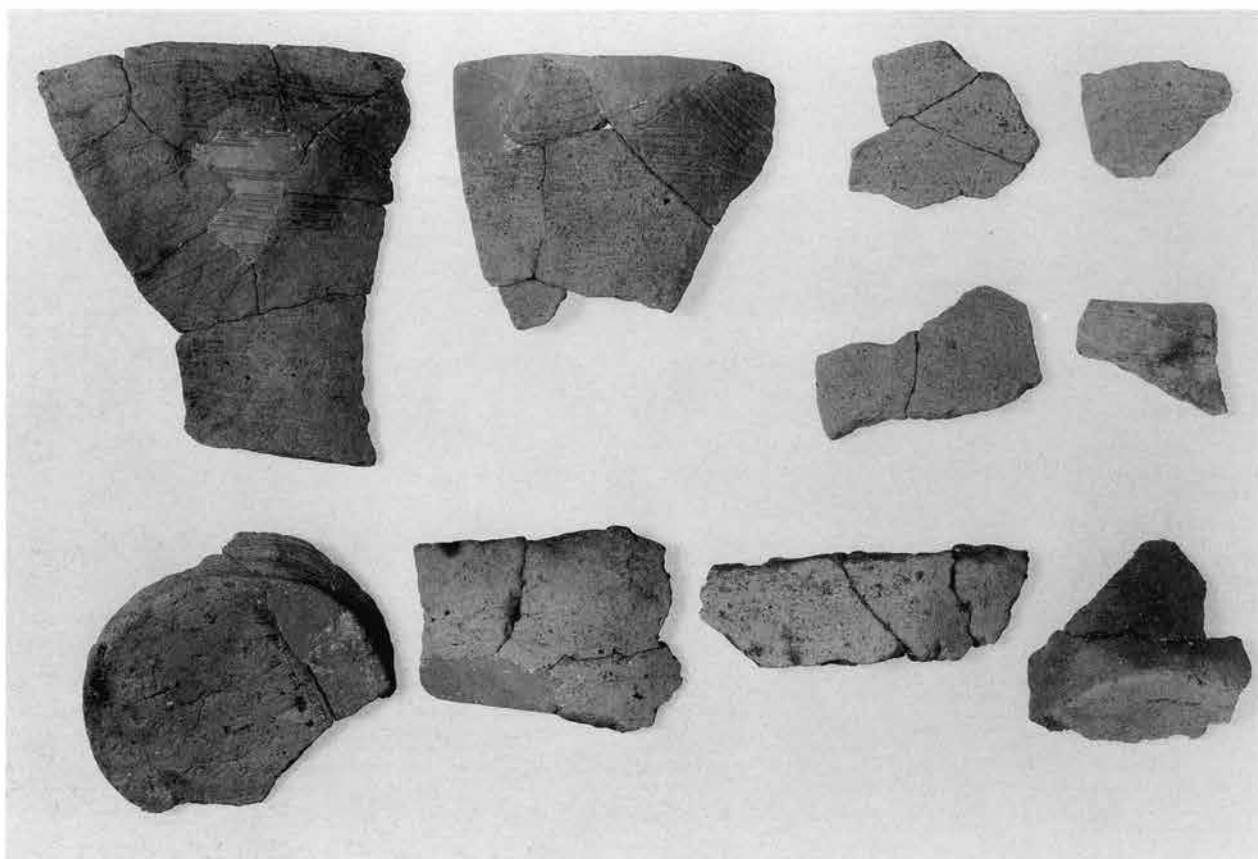


41图

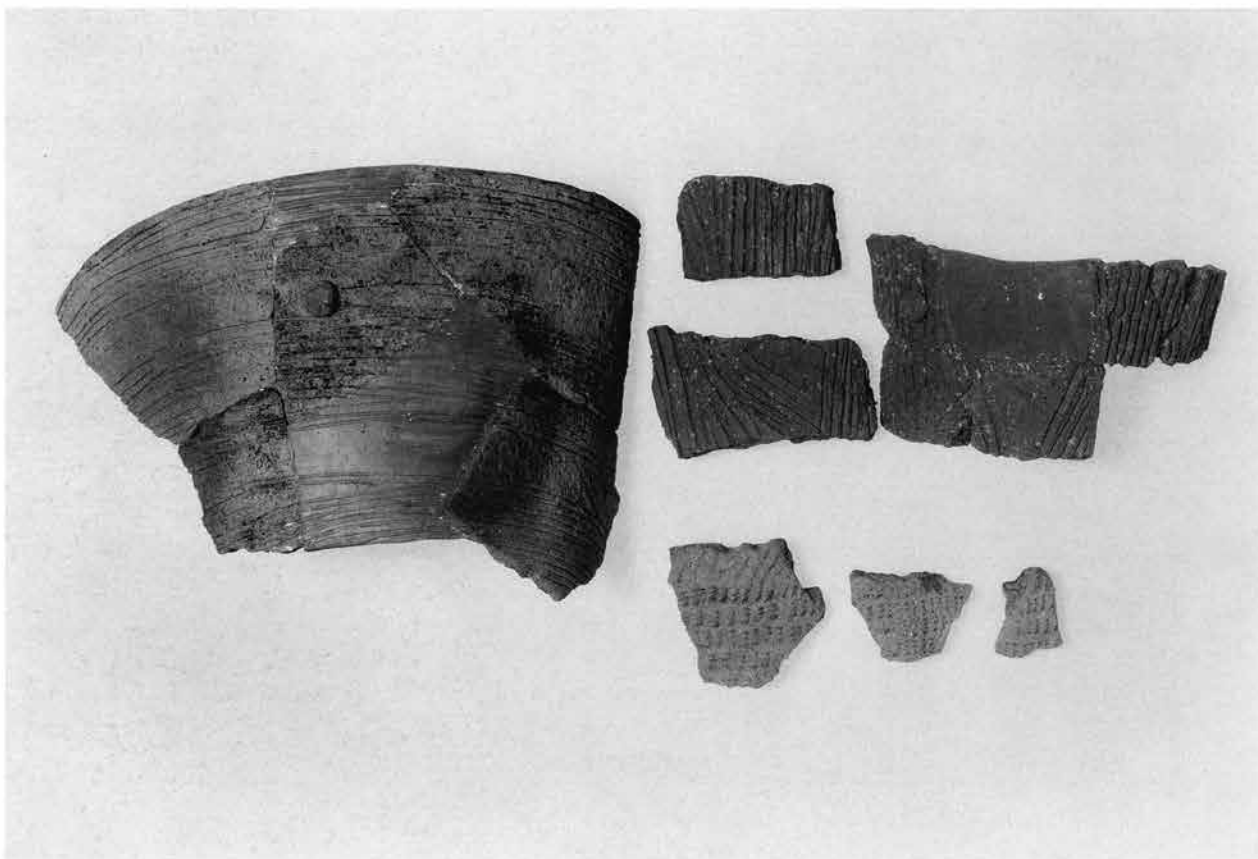


42图

出土土器



1. 出土土器 (43図)



2. 出土土器 (43・44図)



4图-1



4图-2



45图-4



45图-5



45图-1



4图-3



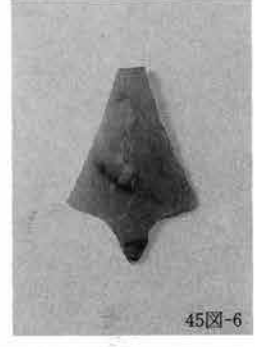
4图-4



45图-2



45图-3



45图-6



45图-8



45图-7



45图-10



45图-11



45图-9



46图-1



46图-2



46图-6



46图-5



46图-3



46图-7

出土石器



石核(47図)



接合資料-6(47図)



接合資料-3(47図)



接合資料-5(48図)



接合資料-2(48図)



接合資料-4(48図)



接合資料-1(48図)

出土石器(石核・接合資料)





46图-4



46图-9



46图-11



46图-8



47图-3



46图-10



47图-1



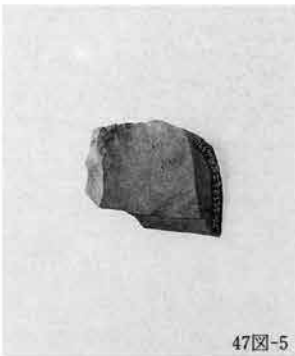
46图-12



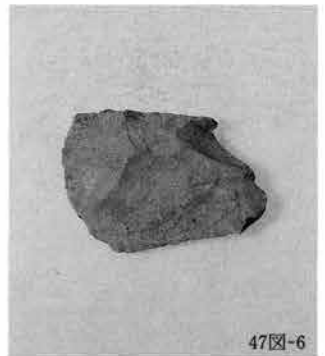
47图-2



47图-4



47图-5



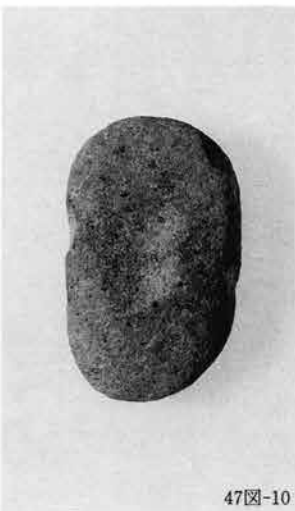
47图-6



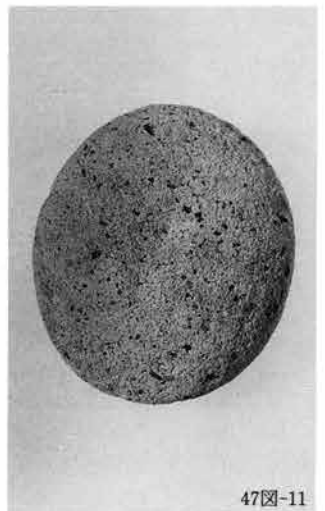
47图-8



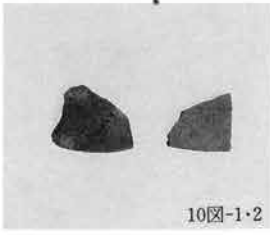
47图-9



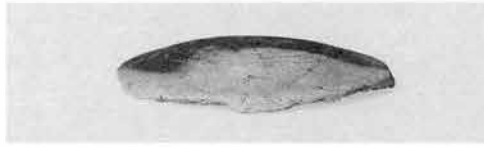
47图-10



47图-11



10图-1·2



12图-4



12图-2



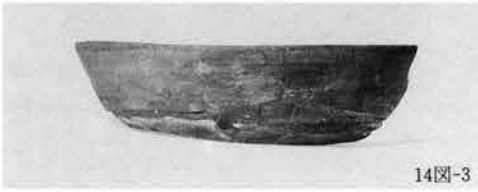
12图-5·6



12图-1



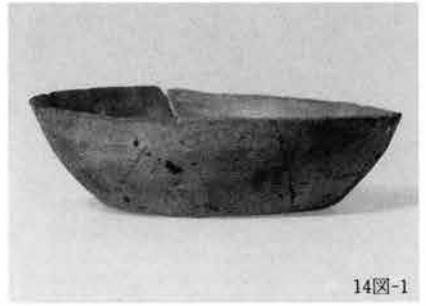
12图-3



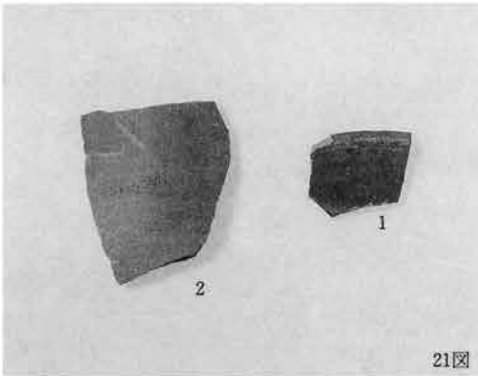
14图-3



14图-2



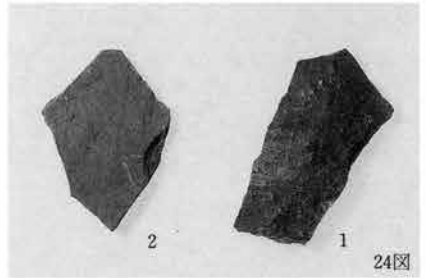
14图-1



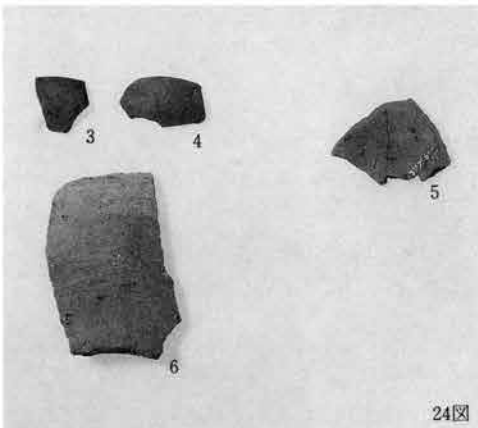
21图



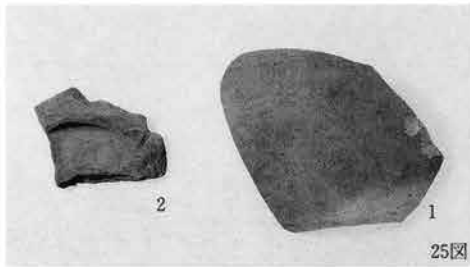
22图



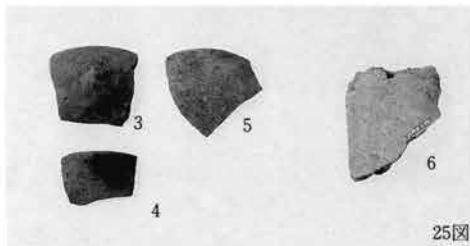
24图



24图



25图



25图



38图

**書 上 本 山 遺 跡**  
**波 志 江 六 反 田 遺 跡**  
**波 志 江 天 神 山 遺 跡**

一般国道17号(上武道路)改築工事に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成4年10月22日 印刷

平成4年10月30日 発行

発行・編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／株式会社 前橋印刷所